柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第103集

馬場・天神腰

― 新潟県柏崎市　馬場・天神腰遺跡発掘調査報告書 ―

2022

柏崎市教育委員会

馬 場・天 神 腰

― 新潟県柏崎市　馬場・天神腰遺跡発掘調査報告書 ―

２０２２

柏 崎 市 教 育 委 員 会

序

鎌倉幕府の初代征夷大将軍、源頼朝の右腕として活躍した人物に、政所別当職にあった大江広元という京都出身の貴族がいます。学校の教科書にも載ることもあるこの名を、記憶している人も多いと思います。

柏崎市の東部、鯖石川中流域から長鳥川流域には、かつて佐橋荘と呼ばれる荘園がありました。広元の孫、毛利経光は、故あって越後国に下向、地頭職を得ていた佐橋荘に在住しました。本書が報告する馬場・天神腰遺跡は、毛利経光が在地支配を始めた鎌倉時代中期の13世紀中頃から都市的な集落へと変貌していったことが、発掘調査の結果判明しました。

馬場・天神腰遺跡における発掘調査は、新規路線として着手された市道柏崎22-50号線の開発事業が発端でした。延長約３kmのルートとは、国道252号の加納字為戸を起点にＪＲ信越本線と並走し、北条駅の南東側からやや南に迂回しつつ東条字清八にて国道291号に接続します。途中通過した南条地区では、鉄路に最も近接しており、発掘調査区のすぐ脇を、幾本もの列車が毎日通り過ぎていました。

発掘された馬場・天神腰遺跡は、鎌倉時代から室町時代の集落跡でした。特記すべき成果とは、東西を縦断する幹線道路、市を開催する場、また道路側を間口とする町屋の形成、そして延長約380mに及ぶ調査区の東西両端からは在地領主の館を囲う堀跡が２か所発掘されました。幹線道路は13世紀後半に新設されるとともに、これを基準とした土地区画整理が進められていました。特に悲哀を感じさせるのは、道路法線下にあって移転を余儀なくされた住人がいたこと、それに対し道路が有力者の屋敷地を避け迂回している状況も掘り出されました。

発掘調査から報告書の刊行まで30年という年月を要しましたが、様々な物語を感じさせる発掘調査の成果が、地域の歴史を解明する一助になれば幸いに思います。

また、発掘調査の際は、粘性の強い粘土と湧水やぬかるむ泥とに悪戦苦闘しながら発掘作業に従事くださった皆様、事業担当であった当時の建設部道路河川課の職員、そして調査指導を担っていただいた新潟県教育委員会など関係各位に対し、深く感謝と御礼を申し上げます。

令和４(2022)年 12 月

柏崎市教育委員会

教育長　近　藤　喜　祐

例　　言

1．本報告書は、新潟県柏崎市大字南条地内に所在する馬場・天神腰遺跡の発掘調査記録である。遺跡の名称は、当初集落名から「下南条遺跡」とされていたが、小字名によることとし、字「馬場」と字「天神腰」に及ぶことから「馬場・天神腰遺跡」に変更した。

2．発掘調査は、市道柏崎22-50号線新設工事に伴い柏崎市教育委員会が主体となって実施したものである。調査区は、Ａ地区からＥ地区までの５区に区分した。

3．発掘調査事業のうち、現地調査は平成３（1991）年度から平成４（1992）年度までの２か年で実施した。平成３年度調査は、８月1日に着手、10月23日終了とし、馬場Ａ地区と天神腰Ｅ地区を調査した。平成４年度は、６月17日から開始し、9月14日まで実施、馬場Ｂ地区、馬場・天神腰Ｃ地区、天神腰Ｄ地区を調査した。

4．発掘調査現場作業は、遺跡の地元南条地区を主体に旧西山町の有志のほか（社）柏崎市シルバー人材センター派遣の会員等が参加し、柏崎市教育委員会の職員を調査担当・調査員として実施した。また、発掘作業にあたっては、事業担当部署である道路河川課（当時）職員の参加・協力があった。

5．発掘調査で出土した遺物は、注記に際し、遺跡名と地区、遺構・グリッド名および層序等を併記した。

6．本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業で作成した図面・記録類は、全て一括して柏崎市教育委員会（埋蔵文化財事務所）が保管・管理している。

7．本報告書の本文執筆及び編集は、調査担当の品田高志が行った。遺構及び遺物実測図の作成・トレース、遺物写真撮影および編集・レイアウトは、埋蔵文化財事務所スタッフ（含旧遺跡考古館等）が調査担当の指示の下に行った。また、図面図版および本文挿図の一部は、㈲不二出版によるデジタルトレースにより作成した。

8．天神腰ＤⅡ地区ＳＥ-2819井戸出土木製塔婆の墨書解読については、浅井勝利氏及び前島　敏氏（新潟県立歴史博物館）から御教示を賜った。また、石製品については平吹 靖氏から、また陶磁器類については伊藤啓雄氏から教示を得た。

9．本書掲載の図面類の方角は全て真北である。磁北は真北から西偏約７°である。

10.　発掘調査から報告書刊行に至るまで、様々な機関・多くの研究者から御指導・御助言や御教示をいただいた。個々に芳名は記さないが、感謝申し上げたい。

調　査　体　制

発掘調査現場作業　平成3（1991）年度～平成4（1992）年度

調査主体　柏崎市教育委員会　教育長　山田恒義（平成3年10月まで）
　　渡辺恒弘（平成3年10月から）
総　　括　霜田定利　社会教育課長
監　　理　石川　章　社会教育課長補佐
　　花井憲雄　社会教育課副参事兼社会教育係長事務取扱（平成4年6月30日まで）
　　川又昌延　社会教育課副参事兼社会教育係長事務取扱（平成4年7月1日から）
庶　　務　阿部せつ子　社会教育課副参事兼庶務係長事務取扱（平成4年3月31日まで）
　　佐藤正志　社会教育課社会教育係主査（平成4年4月1日から）
調査担当　品田髙志　社会教育課社会教育係主査・学芸員
調 査 員　竹井　一　社会教育課嘱託
　　帆刈敏子・大野博子・黒崎和子（遺跡調査室）

整理作業　令和2（2020）年度～令和4（2022）年度

調査主体　柏崎市教育委員会　教育長　近藤喜祐
所　　管　博物館
総　　括　小黒利明　博物館長（令和4年3月まで）
　　西巻隆博　博物館長（令和4年4月から）
監　　理　中村克昭　埋蔵文化財係長（令和3年3月まで）
　　平吹　靖　埋蔵文化財係長（学芸員）（令和3年4月から）
　　中島義人　埋蔵文化財係長（学芸員）（令和3年4月から）
庶　　務　髙野智佳　博物館埋蔵文化財係非常勤職員
整理担当　品田髙志　博物館埋蔵文化財係主査（学芸員）（再任用）（令和4年3月31日まで）
　　博物館埋蔵文化財係非常勤職員（業務専門員）（学芸員）
　　（令和4年4月1日から）
調 査 員　徳間香代子　博物館埋蔵文化財係非常勤職員（業務専門員）
　　白井かおり　博物館埋蔵文化財係非常勤職員（業務専門員）
　　山岸サチ子　博物館埋蔵文化財係非常勤職員（業務専門員）

目　次

Ⅰ　序　　説……1
1　遺跡の発見・周知化と研究小史……1
1）遺跡の発見と周知化／1　　2）調査・研究小史／1
2　調査に至る経緯……2
3　調査の経過……3
1）平成3(1991）年度の調査／3　　2）平成4(1992）年度の調査／4

Ⅱ　遺跡の位置と環境……5
1　地理的な環境と遺跡の位置……5
2　柏崎平野の古代・中世概観……8
3　南条遺跡群の立地と周辺の遺跡……14

Ⅲ　遺跡概観と遺構……17
1　遺跡概観と調査区の概要……17
1）遺跡概観／17　　2）調査区とグリッドの設定／18
3）調査区の概要／18
2　馬場Ａ地区の遺構……19
1）Ａ地区の遺構概要／19　　2）道路と側溝／20　　3）溝　類／23
4）建物跡と柵列と柱穴・ピット類／24　　5）井　戸／25
6）土　坑／26
3　馬場Ｂ地区の遺構……26
1）Ｂ地区の遺構概要／26　　2）幹線道路と側溝・堀／28
3）溝　類／31　　4）建物跡と柵列と柱穴・ピット類／32
5）井　戸／38　　6）土　坑／39　　7）遺構空白帯／39
4　馬場・天神腰Ｃ地区の遺構……40
1）Ｃ地区の遺構概要／40　　2）建物跡と柱穴・ピット／40
3）溝　類／41　　4）井　戸／41　　5）土 坑 類／41
5　天神腰Ｄ地区の遺構……42
1）Ｄ地区の遺構概要／42　　2）建物跡・柵列と柱穴・ピット／43
3）溝　類／46　　4）井　戸／48　　5）土 坑 類／49
6）ＤⅡ地区の建物跡と柵列の群別と変遷／50
6　天神腰Ｅ地区の遺構……51
1）Ｅ地区の遺構概要／51　　2）堀・溝類と通路・道路／51
3）建物跡・柵列と柱穴・ピット／53　　4）井戸・井戸状遺構／54
5）土 坑 類／54

Ⅳ　遺　　物……55
1　遺物の概要……55
2　土器・陶磁器類……55
1）土器・陶磁器類概観と分類・集成／55
2）土器・陶磁器類各説／77
3　金属製品および鉄生産関連遺物……86
1）金属製品および鉄生産関連遺物概観／86
2）金属製品および鉄生産関連遺物各説／86
4　石製品類……88
1）石製品類概観／88　　2）石製品類各説／88
5　木製品類……90
1）木製品資料の現状／90　　2）木製品類の概要／90
3）木製品類各説／97

Ⅴ　総　　括……102
1　柏崎市域における中世遺跡の調査事情……102
2　土器・陶磁器類と時期区分……103
1）土器・陶磁器類の様相／103　　2）時期区分と集落の盛衰／104
3　刈羽三島型土師器の様相と編年……107
1）刈羽三島型土師器の研究小史／107
2）刈羽三島型土師器の編年試案／111
3）馬場・天神腰遺跡の遺構出土土師器と編年的位置付け／115
4）刈羽三島型土師器の出自と終焉／118
4　集落と遺構群の構成……123
1）空中写真と更正図からみた馬場・天神腰遺跡の再評価／123
2）地区別の遺構配置と特徴／127
5　馬場・天神腰遺跡と地域史……130
1）佐橋荘の中の馬場・天神腰遺跡／130
2）都市空間としての馬場・天神腰遺跡／132
3）「刈羽三島型」土師器と周辺地域への拡散／134

《要　　約》……136
《引用・参考文献》……139
《附　　表》……143
附表１　遺構属性表／143
附表２　建物跡（ＳＢ）・柵列（ＳＡ）一覧表／173
附表３　井戸（ＳＥ）一覧表／179
附表４　土坑（ＳＫ）一覧表／182
附表５　土器・陶磁器類観察表／183
附表６　金属製品・鉄生産関連遺物観察表／197
附表７　石製品類観察表／198
附表８　木製品類観察表／199

挿 図 目 次

第１図　馬場・天神腰遺跡　発掘調査地区別工程図／3
第２図　馬場・天神腰遺跡の位置と柏崎平野の地形／7
第３図　古代三嶋郡の駅家と北陸道の道程／9
第４図　刈羽郡域の荘・保と主要城郭／13
第５図　南条遺跡群と河川と流路／14
第６図　馬場・天神腰遺跡と周辺の遺跡／15
第７図　馬場Ａ地区幹線道路１改修模式図／21
第８図　馬場Ｂ地区全体図／27
第９図　馬場Ｂ地区幹線道路１改修模式図／29
第10図　馬場ＢⅢ・Ⅳ街区建物跡の群別／37
第11図　馬場Ｂ地区の井戸分布図／38
第12図　Ｅ地区SD-301a堀改修図／52
第13図　北陸系Ｂ類中世土師器分類図／57
第14図　刈羽三島型中世土師器皿分類図（１）／58
第15図　刈羽三島型中世土師器皿分類図（２）／59
第16図　刈羽三島型中世土師器小皿分類図／59
第17図　京都系Ａ類第二波中世土師器分類図／60
第18図　関東系Ｂ類中世土師器分類図／61
第19図　珠洲陶時期別集成図（１）／63
第20図　珠洲陶時期別集成図（２）／64
第21図　珠洲陶時期別集成図（３）／65
第22図　瀬戸・美濃陶集成図／65
第23図　越前陶集成図／67
第24図　瓷器系陶器集成図／67
第25図　貿易陶磁器地区別集成図／68
第26図　刈羽三島型中世土師器出土分布図／69
第27図　関東系Ｂ類中世土師器出土分布図／70
第28図　京都系Ａ類中世土師器出土分布図／71
第29図　珠洲陶出土分布図／72
第30図　瀬戸・美濃陶出土分布図／73
第31図　越前陶出土分布図／74
第32図　瓷器系陶器出土分布図／75
第33図　貿易陶磁器出土分布図／76
第34図　木取りと打割想定模式図／91
第35図　荒型分類図／93
第36図　曲物類底板法量分布図／95
第37図　用途不明木製品・未成品集成図／96
第38図　東原町・下沖北遺跡の刈羽三島型土師器編年試案（暫定版）／112・113
第39図　遺構出土中世土師器集成図／117
第40図　「鎌倉型」土師器集成図 ／121
第41図　米軍撮影航空写真／124
第42図　馬場・天神腰遺跡の土地更正図／125
第43図　建物跡・柵列の方位集成図／129
第44図　上越市樋田遺跡全体図（一部）／133

表 目 次

第１表　天神腰ＤⅡ地区建物・柵列群別試案／50
第２表　荒型分類集計表／92
第３表　馬場・天神腰遺跡の時代区分試案／106
第４表　刈羽三島型土師器関連の主要遺跡一覧／109
第５表　刈羽三島型土師器と共伴遺物／115
第６表　遺構出土刈羽三島型土師器の分類対比表／116

図 版 目 次

図 面 図 版

図版１　馬場・天神腰遺跡１　遺跡の推定範囲と調査区
図版２　馬場・天神腰遺跡２　調査区全体図
図版３　馬場・天神腰遺跡３　分割区分図
図版４　分割図１　馬場Ａ地区１
図版５　分割図２　馬場Ａ地区２
図版６　分割図３　馬場Ａ地区３
図版７　分割図４　馬場Ａ地区４・Ｂ地区１
図版８　分割図５　馬場Ｂ地区２
図版９　分割図６　馬場Ｂ地区３
図版10　分割図７　馬場Ｂ地区４
図版11　分割図８　馬場Ｂ地区５
図版12　分割図９　馬場Ｂ地区６・ＣⅠ地区１
図版13　分割図10　馬場ＣⅠ地区２
・天神腰ＣⅡ地区１
図版14　分割図11　天神腰ＣⅡ地区２・ＤⅠ地区１
図版15　分割図12　天神腰ＤⅠ地区２
図版16　分割図13　天神腰ＤⅠ地区３・ＤⅡ地区１
図版17　分割図14　天神腰ＤⅡ地区２
図版18　分割図15　天神腰ＤⅡ地区３
図版19　分割図16　天神腰ＤⅡ地区４・Ｅ地区１
図版20　分割図17　天神腰Ｅ地区２
図版21　分割図18　天神腰Ｅ地区３
図版22　遺構個別図１　馬場Ａ地区１
図版23　遺構個別図２　馬場Ａ地区２
図版24　遺構個別図３　馬場Ａ地区３
図版25　遺構個別図４　馬場Ａ地区４・Ｂ地区１
図版26　遺構個別図５　馬場Ｂ地区２
図版27　遺構個別図６　馬場Ｂ地区３
図版28　遺構個別図７　馬場Ｂ地区４
図版29　遺構個別図８　馬場Ｂ地区５
図版30　遺構個別図９　馬場Ｂ地区６
図版31　遺構個別図10　馬場Ｂ地区７
図版32　遺構個別図11　馬場Ｂ地区８
図版33　遺構個別図12　馬場・天神腰Ｃ地区
図版34　遺構個別図13　天神腰ＤⅠ地区１
図版35　遺構個別図14　天神腰ＤⅠ地区２
図版36　遺構個別図15　天神腰ＤⅡ地区１
図版37　遺構個別図16　天神腰ＤⅡ地区２
図版38　遺構個別図17　天神腰ＤⅡ地区３
図版39　遺構個別図18　天神腰ＤⅡ地区４
図版40　遺構個別図19　天神腰ＤⅡ地区５
図版41　遺構個別図20　天神腰ＤⅡ地区６
図版42　遺構個別図21　天神腰ＤⅡ地区７
図版43　遺構個別図22　天神腰ＤⅡ地区８・Ｅ地区１
図版44　遺構個別図23　天神腰Ｅ地区２
図版45　馬場Ａ地区　土器類１
図版46　馬場Ａ地区　土器類２
図版47　馬場Ａ地区　土器類３
図版48　馬場Ａ地区　土器類４
図版49　馬場Ｂ地区　土器類１
図版50　馬場Ｂ地区　土器類２
図版51　馬場Ｂ地区　土器類３
図版52　馬場Ｂ地区　土器類４
図版53　馬場Ｂ地区　土器類５
図版54　馬場Ｂ地区　土器類６
図版55　馬場Ｂ地区　土器類７
図版56　馬場・天神腰Ｃ地区　土器類
・天神腰ＤⅠ地区　土器類１
図版57　天神腰ＤⅠ地区　土器類２
図版58　天神腰ＤⅠ地区　土器類３・ＤⅡ地区　土器類１
図版59　天神腰ＤⅡ地区　土器類２
図版60　天神腰ＤⅡ地区　土器類３
図版61　天神腰ＤⅡ地区　土器類４・Ｅ地区　土器類１
図版62　天神腰Ｅ地区　土器類２
図版63　天神腰Ｅ地区　土器類３
図版64　天神腰Ｅ地区　土器類４
図版65　天神腰Ｅ地区　土器類５
図版66　天神腰Ｅ地区　土器類６
・馬場・天神腰遺跡　金属製品１
図版67　馬場・天神腰遺跡　金属製品２
図版68　馬場・天神腰遺跡　石製品１
図版69　馬場・天神腰遺跡　石製品２
図版70　馬場・天神腰遺跡　木製品１
図版71　馬場・天神腰遺跡　木製品２
図版72　馬場・天神腰遺跡　木製品３
図版73　馬場・天神腰遺跡　木製品４
図版74　馬場・天神腰遺跡　木製品５
図版75　馬場・天神腰遺跡　木製品６

図版76　馬場・天神腰遺跡　木製品７
図版77　馬場・天神腰遺跡　木製品８
図版78　馬場・天神腰遺跡　木製品９
図版79　馬場・天神腰遺跡　木製品10
図版80　馬場・天神腰遺跡　木製品11
図版81　馬場・天神腰遺跡　木製品12
図版82　馬場・天神腰遺跡　木製品13
図版83　馬場・天神腰遺跡　木製品14
図版84　馬場・天神腰遺跡　木製品15
図版85　馬場・天神腰遺跡　木製品16
図版86　馬場・天神腰遺跡　木製品17
図版87　馬場・天神腰遺跡　木製品18
図版88　馬場・天神腰遺跡　木製品19
図版89　馬場・天神腰遺跡　木製品20
図版90　馬場・天神腰遺跡　木製品21
図版91　馬場・天神腰遺跡　木製品22

写真図版

図版92　馬場Ａ地区　１
ａ．Ａ地区全景と道路1
ｂ．Ａ地区全景と道路1
図版93　馬場Ａ地区　２
ａ．Ａ地区近景
ｂ．Ａ地区（東側）近景
図版94　馬場Ａ地区　３
ａ．Ａ地区全景　ｂ．Ａ地区全景
図版95　馬場Ａ地区　４
ａ．道路２（Ｄ-8）
ｂ～ｆ．Ａ地区東側遺構群
ｇ．道路1（SD-1・2溝）
ｈ．道路1（SD-1・2溝）とSD-3溝
図版96　馬場Ａ地区　５　幹線道路跡（SD-1・2側溝）1
ａ．SD-1溝　Ａ断面　ｂ．SD-1溝　Ｂ断面
ｃ．SD-1溝　Ｃ断面　ｄ．SD-1溝　Ｄ断面
ｅ．道路１側溝（SD-1・2溝）遺物出土状況
ｆ．SD-2溝　Ｂ断面　ｇ．SD-2溝　Ｃ断面
ｈ．SD-2溝　Ｄ断面
図版97　馬場Ａ地区　６　幹線道路跡（SD-1・2側溝）2
ａ．SD-1溝　Ｅ断面　ｂ．SD-1溝　Ｆ断面
ｃ．SD-1溝　Ｇ断面　ｄ．SD-2溝　Ｅ断面
ｅ．SD-2溝　Ｆ断面　ｆ．SD-2溝　Ｇ断面
ｇ．道路1側溝発掘　ｈ．道路1側溝実測
図版98　馬場Ａ地区　７　SD-3溝
ａ．SD-3溝　ｂ．SD-3溝と遺構群
ｃ．SD-3溝　Ａ断面　ｄ．SD-3溝　Ｂ断面
ｅ．SD-3溝　Ｃ断面　ｆ．SD-3溝　Ｄ断面
ｇ．SD-3溝　Ｅ断面　ｈ．SD-3溝　Ｆ断面
図版99　馬場Ａ地区　８
支線道路（SD-200・205側溝・SD-4区画溝・土坑）
ａ．SD-4溝と土層断面
ｂ．SD-205溝と土層断面
ｃ．SD-200溝と土層断面
ｄ．SD-200溝　Ｂ断面
ｅ．SD-200溝　Ｃ断面
ｆ．SD-200溝　Ｄ断面
ｇ．SK-50土坑　断面
ｈ．SK-50土坑
図版100　馬場Ａ地区　９　井 戸
ａ．Ａ地区井戸群　ｂ．Ａ地区井戸群
ｃ．Ａ地区井戸群　ｄ．SE-117井戸
ｅ．SE-145井戸　ｆ．SE-146井戸
ｇ．SE-206ａ・ｂ井戸　ｈ．SE-206ａ・ｂ井戸
図版101　馬場Ｂ地区　１
ａ．Ｂ地区全景　ｂ．Ｂ地区全景
図版102　馬場Ｂ地区　２
ａ．Ｂ地区　道路１
ｂ．12～13グリッド遺構群
図版103　馬場Ｂ地区　３
ａ．12～13グリッド遺構群
ｂ．12～14グリッド遺構群
図版104　馬場Ｂ地区　４
ａ．13～15グリッド遺構群
ｂ．15～17グリッド遺構群
図版105　馬場Ｂ地区　５
ａ．Ｂ地区全景
ｂ．14～17グリッド遺構群
図版106　馬場Ｂ地区　６　幹線道路（SD-1・2側溝）１
ａ．Ｂ地区　道路1　Ａ断面
ｂ．SD-2・1286溝　Ａ断面
ｃ．SD-1溝　Ａ断面
ｄ．SD-1・2・1286溝　Ｂ断面
ｅ．SD-2・1286溝　Ｂ断面
ｆ．SD-1溝　Ｂ断面

図版107　馬場Ｂ地区　７　幹線道路（SD-1・2側溝）２
ａ．SD-1・2・1286溝　Ｃ・Ｄ断面
ｂ．SD-1溝　Ｃ・Ｄ断面
ｃ．SD-1溝　Ｄ断面
ｄ．道路1（SR-1104・SD-1・2・1286溝）
ｅ．道路1（SR-1104・SD-1・2・1286溝）
ｆ．SD-1286堀
ｇ．道路1（SR-1104・SD-1・2・1286溝）
図版108　馬場Ｂ地区　８　区画溝　１
ａ．SD-1100区画溝　Ａ断面
ｂ．SD-1100区画溝
ｃ．SD-1103溝　Ｂ断面
ｄ．SD-1115・1116溝
ｅ．SD-1218区画溝
ｆ．SD-1218区画溝　Ａ断面
ｇ．SD-1218区画溝　Ｂ断面
ｈ．SD-1302区画溝
ｉ．SD-1302区画溝　Ａ断面
ｊ．SD-1302区画溝　Ｂ断面
図版109　馬場Ｂ地区　９　区画溝　２・井戸・土坑　１
ａ．SD-1316区画溝
ｂ．SD-1316区画溝　Ａ断面
ｃ．SD-1304井戸　ｄ．SE-1306井戸
ｅ．SE-1313井戸　ｆ．SE-1314井戸
ｇ．SE-1321井戸　ｈ．SE-1325井戸
図版110　馬場Ｂ地区　10　井戸・土坑　２
ａ．SK-1296土坑　ｂ．SK-1315土坑
ｃ．SK-1318土坑　ｄ．SK-1320土坑
ｅ．SK-1367土坑　ｆ．SK-1717土坑
ｇ．SK-1370竪穴　ｈ．SK-1369土坑
図版111　馬場ＣＩ地区　１
ａ．Ｃ地区全景　ｂ．ＣＩ地区全景
図版112　馬場ＣＩ地区　２
ａ．ＣＩ地区　ｂ．ＣＩ地区
ｃ．SE-1702・1703・1720井戸
ｄ．SE-1703井戸（柄杓）
ｅ．SE-1706・1708井戸
ｆ．SE-1709井戸　ｇ．SE-1711井戸
ｈ．SE-1716井戸
図版113　天神腰ＣⅡ地区
ａ．ＣⅡ地区　ｂ．ＣⅡ地区
ｃ．ＣⅡ地区西側
ｄ．SB-61・62建物跡
ｅ．SD-1726～1728溝
ｆ．SD-1726～1728溝　土層断面
ｇ．SE-1721井戸　ｈ．SK-1722土坑
図版114　天神腰ＤＩ地区　１
ａ．ＤＩ地区　ｂ．ＤＩ地区
図版115　天神腰ＤＩ地区　２
ａ．25グリッド遺構群
ｂ．24グリッド遺構群
図版116　天神腰ＤＩ地区　３　区画溝・井戸　１
ａ．SD-2401区画溝
ｂ．SD-2401区画溝
ｃ．SD-2401区画溝　Ａ断面
ｄ．SD-2401区画溝　Ｂ断面
ｅ．SD-2401区画溝　Ｃ断面
ｆ．SD-2469区画溝
ｇ．SD-2469区画溝　土層断面
ｈ．SE-2402井戸
ｉ．SE-2402井戸　土層断面
図版117　天神腰ＤＩ地区　４　井戸　２・土坑
ａ．SE-2412井戸
ｂ．SE-2412井戸　土層断面
ｃ．SE-2407井戸
ｄ．SK-2423土坑
ｅ．SE-2422井戸
ｆ．SE-2424井戸　土層断面（ヒョウタン）
ｇ．SE-2426井戸
ｈ．SE-2428井戸
図版118　天神腰ＤＩ地区　５　井戸　３
ａ．SE-2432・2433井戸　ｂ．SE-2435井戸
ｃ．SE-2461井戸　ｄ．SE-2462井戸
ｅ．SK-2463土坑
ｆ．SK-2463土坑　土層断面
ｇ．SE-2464井戸
ｈ．SE-2470井戸
図版119　天神腰ＤⅡ地区　１
ａ．ＤⅡ地区全景
ｂ．ＤⅡ地区主要部
図版120　天神腰ＤⅡ地区　２
ａ．29～31グリッド遺構群
ｂ．29～31グリッド遺構群
図版121　天神腰ＤⅡ地区　３
ａ．29グリッド遺構群
ｂ．30グリッド遺構群

図版122　天神腰ＤⅡ地区　4
ａ．30グリッド遺構群
ｂ．31グリッド遺構群
図版123　天神腰ＤⅡ地区　5
ａ．31グリッド遺構群
ｂ．30グリッド遺構群
図版124　天神腰ＤⅡ地区　6
ａ．30～31グリッド遺構群
ｂ．31グリッド遺構群
ｃ．31グリッド遺構群
ｄ．SB-91建物跡
ｅ．SB-92建物跡
図版125　天神腰ＤⅡ地区　7　区画溝
ａ．SD-3057区画溝　ｂ．SD-3057区画溝
ｃ．SD-3057区画溝　Ｃ断面
ｄ．SD-3057区画溝　Ｂ断面
ｅ．SD-2745区画溝と遺構群
ｆ．SD-2745区画溝　Ｂ断面
ｇ．SD-2745区画溝
ｈ．SD-2745区画溝　Ａ断面
図版126　天神腰ＤⅡ地区　8　土坑・竪穴
ａ．SX-3001竪穴　土層断面
ｂ．SX-3001竪穴　炭化物層
ｃ．SX-3001竪穴
ｄ．SK-2534土坑　土層断面
ｅ．SK-2534土坑
ｆ．SK-2586a土坑　土層断面
ｇ．SK-2586a土坑
ｈ．SK-2908a土坑　ｉ．SK-2916土坑
図版127　天神腰ＤⅡ地区　9　SE-2819井戸　1
ａ．SE-2819井戸中層
ｂ．SE-2819井戸中層
図版128　天神腰ＤⅡ地区　10　SE-2819井戸　2
ａ．SE-2819井戸　土層断面
ｂ．SE-2819井戸　土層断面
図版129　天神腰ＤⅡ地区　11　SE-2819井戸　3
ａ．SE-2819井戸　塔婆
ｂ．SE-2819井戸　塔婆
図版130　天神腰ＤⅡ地区　12　SE-2819井戸　4
ａ．SE-2819井戸　ｂ．SE-2819井戸
図版131　天神腰ＤⅡ地区　13　SE-2819井戸　5
ａ．SE-2819井戸　ｂ．SE-2819井戸
ｃ．SE-2819井戸　ｄ．SE-2819井戸
ｅ．SE-2819井戸　石敷
ｆ．SE-2819井戸　石敷
ｇ．SE-2819井戸　下層丸太
ｈ．SE-2819井戸　下層丸太
図版132　天神腰ＤⅡ地区　14　SE-2819井戸　塔婆　1
ａ．SE-2819井戸　塔婆
ｂ．SE-2819井戸　塔婆
図版133　天神腰ＤⅡ地区　15　SE-2819井戸　塔婆　2
ａ～ｈ．塔婆文字
図版134　天神腰ＤⅡ地区　16　井戸・土坑　1
ａ．SE-2501井戸　ｂ．SE-2509井戸
ｃ．SE-2502井戸
ｄ．SE-2502井戸　土層断面
ｅ．SE-2515井戸　土層断面　ｆ．SE-2515井戸
ｇ．SE-2522井戸　ｈ．SE-2535井戸
図版135　天神腰ＤⅡ地区　17　井戸・土坑　2
ａ．SE-2527井戸（礫出土）
ｂ．SE-2527井戸　ｃ．SE-2537井戸
ｄ．SE-2589井戸
ｅ．SE-2585井戸　土層断面
ｆ．SE-2585井戸
ｇ．SE-2562井戸（礫出土）
ｈ．SE-2562井戸
図版136　天神腰ＤⅡ地区　18　井戸・土坑　3
ａ．SE-2596井戸　土層断面
ｂ．SE-2596井戸
ｃ．SE-2599井戸（木材）
ｄ．SE-2599井戸
ｅ．SE-2631井戸　土層断面
ｆ．SE-2631井戸
ｇ．SE-2649井戸
ｈ．SE-2685井戸
図版137　天神腰ＤⅡ地区　19　井戸・土坑　4
ａ．SE-2792a井戸（礫）
ｂ．SE-2792a井戸（礫）
ｃ．SE-2792a井戸
ｄ．SE-2792a井戸
ｅ．SE-2811a井戸　土層断面
ｆ．SE-2811a井戸
ｇ．SE-2918井戸　土層断面
ｈ．SE-2918井戸
図版138　天神腰ＤⅡ地区　20　井戸・土坑　5
ａ．SE-2928井戸

ｂ．SE-2962井戸
ｃ．SE-2958井戸
ｄ．SE-3038井戸（宝篋印塔）
ｅ．SE-3038井戸
ｆ．SE-2915井戸　土層断面
ｇ．SE-2915井戸
ｈ．D-31㉓　焼土遺構
図版139　天神腰Ｅ地区　1
ａ．Ｅ地区全景
ｂ．Ｅ地区主要部
図版140　天神腰Ｅ地区　2
ａ．Ｅ地区全景
ｂ．Ｅ地区全景
図版141　天神腰Ｅ地区　3
ａ．37～38グリッド遺構群
ｂ．38～39グリッド遺構群
ｃ．38グリッド遺構群
ｄ．38～39グリッド遺構群
ｅ．38グリッド遺構群
図版142　天神腰Ｅ地区　4
ａ．Ｅ地区西半部
ｂ．34～35グリッド遺構群
ｃ．35～36グリッド遺構群
ｄ．34～36グリッド遺構群
ｅ．堀と道路
図版143　天神腰Ｅ地区　5　建物跡・柵列と通路
ａ．建物跡と井戸
ｂ．堀と通路（道）
ｃ．堀と通路（道）
ｄ．柵列と通路
ｅ．SA-125柵列
図版144　天神腰Ｅ地区　6　堀・溝・土坑
ａ．SD-301堀
ｂ．SD-303a溝
ｃ．SD-301堀　Ｄ断面
ｄ．SD-301堀　Ｅ断面
ｅ．SD-303溝　土層断面
ｆ．SK-308土坑
ｇ．SK-328土坑墓
図版145　天神腰Ｅ地区　7　井戸　1
ａ．SE-305井戸　ｂ．SE-309井戸
ｃ．SE-310井戸　ｄ．SE-311井戸
ｅ．SE-312井戸　ｆ．SE-313井戸
ｇ．SE-314井戸　ｈ．SE-331・335井戸
図版146　天神腰Ｅ地区　8　井戸　2
ａ．SE-325井戸　ｂ．SE-325井戸
ｃ．SE-325井戸　ｄ．SE-325井戸
ｅ．SE-339井戸　ｆ．SE-416井戸
ｇ．SE-416井戸　ｈ．SE-413井戸
図版147　馬場Ａ地区　1　土器・陶磁器類１
図版148　馬場Ａ地区　2　土器・陶磁器類２
図版149　馬場Ａ地区　3・Ｂ地区　1
土器・陶磁器類３
図版150　馬場Ｂ地区　2　土器・陶磁器類４
図版151　馬場Ｂ地区　3　土器・陶磁器類５
図版152　馬場Ｂ地区　4　土器・陶磁器類６
図版153　馬場Ｂ地区　5　土器・陶磁器類７
図版154　馬場Ｂ地区　6・ＣⅠ地区
天神腰ＣⅡ地区・ＤⅠ地区　1
土器・陶磁器類８
図版155　天神腰ＤⅠ地区　2　土器・陶磁器類９
図版156　天神腰ＤⅡ地区　1　土器・陶磁器類10
図版157　天神腰ＤⅡ地区　2・Ｅ地区　1
土器・陶磁器類11
図版158　天神腰Ｅ地区　2　土器・陶磁器類12
図版159　天神腰Ｅ地区　3　土器・陶磁器類13
図版160　天神腰Ｅ地区　4　土器・陶磁器類14
図版161　馬場・天神腰遺跡　金属製品及び関連遺物１
図版162　馬場・天神腰遺跡
金属製品及び関連遺物２・石製品類１
図版163　馬場・天神腰遺跡　石製品類２
図版164　馬場・天神腰遺跡　木製品１
図版165　馬場・天神腰遺跡　木製品２
図版166　馬場・天神腰遺跡　木製品３
図版167　馬場・天神腰遺跡　木製品４
図版168　馬場・天神腰遺跡　木製品５
図版169　馬場・天神腰遺跡　木製品６
図版170　馬場・天神腰遺跡　木製品７
図版171　馬場・天神腰遺跡　木製品８
図版172　馬場・天神腰遺跡　木製品９
図版173　馬場・天神腰遺跡　木製品10
図版174　馬場・天神腰遺跡　木製品11
図版175　馬場・天神腰遺跡　木製品12
図版176　馬場・天神腰遺跡　木製品13
図版177　馬場・天神腰遺跡　木製品14
図版178　馬場・天神腰遺跡　木製品15

Ⅰ　序　　説

1　遺跡の発見・周知化と研究小史

1）遺跡の発見と周知化

遺跡の発見　「馬場・天神腰遺跡」は、周知化当初は「下南条遺跡」という名称であった。遺跡の発見は、故宇佐美篤実氏が採集した土器類等の資料に基づき、『柏崎市史資料集　考古篇２』〔柏崎市史編さん委1982〕に写真図版として、所在地の近景と採集遺物が報告されたことが、文献上最初となる。次いで刊行された『柏崎市史資料集　考古篇１』〔柏崎市史編さん委1987ｂ〕において、僅かな文章ながら若干の解説と遺跡範囲が図示された。遺跡の立地環境としては、鯖石川が形成した河岸段丘の西縁を遺跡範囲とし、畑地では土師器・須恵器を、また正雲寺境内において土塁と空堀の存在とともに、中世陶器片が採集されていることにより〔宇佐美・山本1987〕、平安時代から中世の遺跡という認識であった。

遺跡の周知化　当該遺跡の周知化は、平成２（1990）年度に柏崎市遺跡番号631の新遺跡として登録されたことにより完了する。その後、本書で報告する発掘調査成果を基に、平成５（1993）年に下南条集落域の大半に及ぶ広大な範囲として拡大・変更されている。また、平成15（2003）年には、中世の集落跡であることが歴然としていたこと、また遺跡が所在する小字名称が遺跡の性格に大きく関わるという観点から、「馬場・天神腰遺跡」に名称変更し、現在に至る。

2）調査・研究小史

馬場・天神腰遺跡の発掘調査は、平成３（1991）年から平成４（1992）年と２か年にわたって実施された。発掘調査報告書は、当初平成４年度刊行を予定していたが、大規模な発掘調査事業の重複受託が相次ぎ、整理作業等は頓挫・中断したまま年月は大きく流れることとなった。

また、発掘調査初年度の平成３年９月26日、新潟県教育委員会の坂井秀弥氏（当時）が天神腰Ｅ地区調査中に来跡した。その際、馬場Ａ地区の遺構を実見し、中世のメインストリートが明確であること、当該期の町割りも特異なことから、一般公開が必要との指摘があった。急遽10月３日、報道関係者へ馬場Ａ地区を公開、10月６日（日）に現地説明会を開催し、大学関係者等の専門家を含む150名余が現地を訪れ、遺跡の町場的な性格など重要性等が注目された。その結果、正式な発掘調査報告書が未刊でありながら、学会や研究会等から資料集掲載のため遺跡紹介等の原稿執筆や研究発表等の依頼が続いた。主なものとして、年代順に羅列すると以下の通りとなる。

1993「馬場・天神腰遺跡の中世集落について」『新潟県考古学会第５回発表会発表要旨』新潟県考古学会

1993「馬場・天神腰遺跡」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』（第６回北陸中世土器研究会資料集）北陸中世土器研究会

1997「馬場・天神腰遺跡」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史―』北陸中世土器研究会

2003「馬場・天神腰遺跡」『中世城館から城下町へ』（第16回北陸中世考古学研究会資料集）北陸中世考古学研究会

2004「越後国佐橋荘の中世古道と町並み―新潟県柏崎市馬場・天神腰遺跡の中世集落―」『中世のみちを探る』高志書院

2008「馬場・天神腰遺跡」『北陸中世のみち』（第21回北陸中世考古学研究会資料集）北陸中世考古学研究会

また、馬場・天神腰遺跡およびその周辺では、宅地開発や県道改良工事、ほ場整備事業に伴った試掘や確認調査といった発掘調査事業も展開し、本遺跡に係る案件の調査報告書も市教委から刊行されている。以下、本発掘調査の端緒となった調査報告書〔柏崎市教委1992ａ〕を含め、主なものを年代順に羅列する。

1992「下南条遺跡」『柏崎市の遺跡Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第16）

1999「馬場・天神腰遺跡」『柏崎市の遺跡Ⅷ』（柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集）

2006「南条遺跡群（第１次）」『柏崎市の遺跡ＸＶ』（柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集）

2007「南条遺跡群（第２次）」『柏崎市の遺跡ＸⅥ』（柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集）

2008「南条遺跡群（第３次）・（第４次）・（第５次）」『柏崎市の遺跡ＸⅦ』（柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第54集）

2011『南条遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第64集）

2018「馬場・天神腰遺跡（第３次）」『柏崎市の遺跡28』（柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第93集）

2019「馬場・天神腰遺跡（第４次）」『柏崎市の遺跡29』（柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書第96集）

２　調査に至る経緯

馬場・天神腰遺跡の発掘調査は、市道22-50号線道路改良工事を原因とする。当該市道は、新規新設として計画され、平成２年度には用地買収もほぼ終えていた。事業着手を控えた平成３年６月、周知化されていた「下南条遺跡」の一部に工事が及ぶことが判明、６月17日付にて柏崎市長から文化財保護法第57条の３（当時）の規定に基づく通知が提出され、６月20日付で県教委へ進達された。工事着工が７月とされていたことから、市教委としては確認調査の実施を急ぐこととして、文化財保護法第98条の２（当時）による発掘調査の通知を県教委へ提出するとともに、その同日から確認調査に着手、６月29日までの３日間にわたって実施した。その結果、鯖石川右岸から県道田代小国線に至る延長約686ｍの対象に対し、鯖石川河岸段丘崖から下南条集落を通過する延長約380ｍに渡り、遺構が分布していることが確認された。

県教委は、時間的な猶予がないことから、確認調査内容を聴取の上、平成３年７月２日付にて、柏崎市長に対し、工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知がなされた。正式な確認調査結果の概要は、７月９日付にて県教委へ報告されている。

以上の経緯を経て、本発掘調査の実施に向け、準備が進められた。発掘調査対象となる調査区は、幅約13ｍ、延長約380ｍ、調査対象面積は約5,000㎡で、法線を横切る市道と農道等の道路により、Ａ～Ｅまでの５地区に区分した。まず、調査経費を含む発掘調査計画書案が、道路担当部署の合議を経て７月30日に教育委員会で決裁された。市教委は、法98条の２に基づく発掘調査の通知を改めて７月31日付で県教委へ提出、８月１日から本発掘調査に着手することとし、11月の実施が予定されていた民間開発関連の本発掘調査期間の中断を経て、年末となる平成３年12月25日（予定）の調査終了を目指したのである。

ところが、本発掘調査に着手すると、次項で述べるとおり遺構密度が高く、また遺跡の重要性が高いことが判明し、次年度となる平成４（1992）年まで延長されることとなった。

3　調査の経過

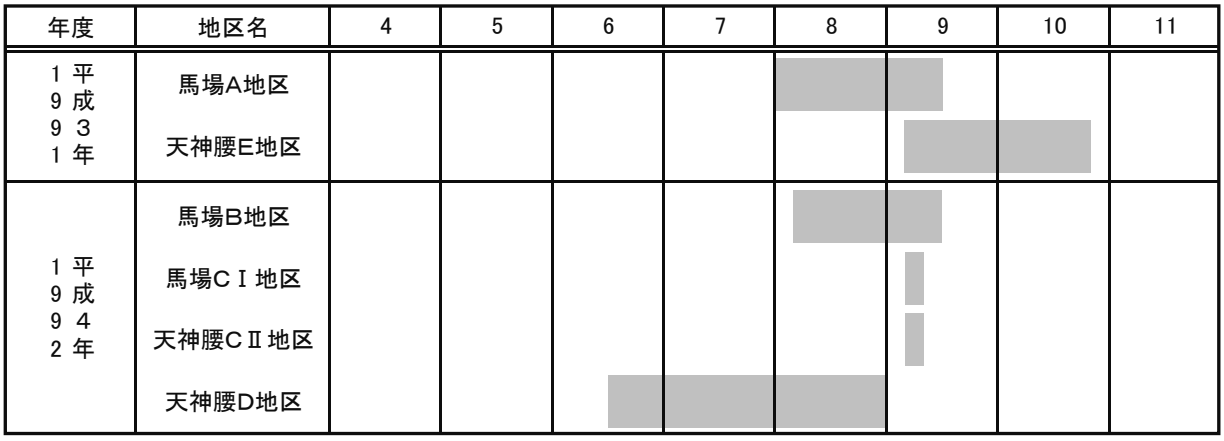
馬場・天神腰遺跡における本発掘調査は、緊急的な対応として実施することとなったが、平成３年度の調査計画では、秋に本発掘調査１件（10月末～ 11月前半）〔柏崎市教委1992ｂ〕と確認調査１件（11月中旬～ 12月下旬）〔柏崎市教委1992ａ〕が既に予定されており、８月１日に発掘調査に着手、年内終了という目標に対し、時間的な制約は極めて厳しい状況であった。結果として、平成３年度は、馬場Ａ地区と天神腰Ｅ地区の２地区の調査を終えた段階で中断せざるを得ず、平成４年度も継続することとなった。

また、平成４年度についても、すでに民間開発に係る本発掘調査が予定されており、馬場・天神腰遺跡の調査日程の調整は困難を極めていた。結果として、別件本発掘調査期間である４月下旬から６月半ば、および９月末から11月初めという日程を避けた６月中旬から９月半ばの期間において、発掘調査を実施する日程で調整することとなった〔柏崎市教委2000〕。

１）平成３（1991）年度の調査

馬場・天神腰遺跡の調査区は、延長が380mに及ぶことから、市道や農道等により調査区を区分、西側からＡ～Ｅの５地区とした。平成３年度は、道路工事施工との関係から、西端の馬場Ａ地区と東端の天神腰Ｅ地区を先行するよう要望されたことから、両地区の調査を実施したものである。

Ａ地区の調査　８月１日（木）、重機による表土剥ぎに着手、本日は機材の搬入も併せて行う。表土剥ぎは、調査区南側の過半まで達することができ、並行する大型の溝２条を検出、その間には礫が敷かれている状況を確認した。両溝の配置は、現況でも農道として機能していた範囲と一致しており、当該両溝とは、道路側溝の可能性が高いと、調査初日から大きな成果が確認されることになる。表土剥ぎは８月３日（土）に終了し、翌週５日（月）から作業員初日として遺構確認を開始。９日（金）、遺構確認を終了し、見取り図を作成するとともに、ＳＤ－２溝の遺構発掘に着手した。14日から18日までの盆休み後は、道路側溝（ＳＤ－１・２）を主体に進める。その後、柱穴や井戸、建物等居住域の遺構の発掘へと順次展開し、９月12日（木）、道路側溝（ＳＤ－１・２）のセクションベルト及び遺物土柱の発掘を終了し、遺構全てを完掘。翌13日、降雨の中調査区の清掃、写真撮影を行い、発掘調査現場作業の終了とした。なお、９月17日～ 18日は、柱穴の配置から建物跡の復元等遺構構成の検討を行った。また、前述したとおり、10月３



第１図　馬場・天神腰遺跡　発掘調査地区別工程図

日報道関係者へ馬場Ａ地区を公開、10月６日（日）に現地説明会を開催した。

Ｅ地区の調査　Ａ地区の進捗状況を見ながら、９月５日（木）から表土剥ぎに着手。調査区全体の90％近くまで進む。遺構としては、調査区中央にて堀状の大型溝が、幅３～４ｍ幅の規模で「Ｌ」の字状に検出されるとともに、井戸と考えられる大型土坑が10基ほど確認できた。６日、表土剥ぎが終了し、10日にグリッド杭の打設、13日までに調査区壁の整形等を行い、17日（火）から遺構確認作業に着手した。18日から堀跡（ＳＤ-301）の発掘に着手し、以降遺構発掘を継続した。10月18日（金）、遺構の発掘作業を継続しつつ、全体清掃に着手する。19日、ＳＥ-331とＳＥ-335のほか、ピットの一部が未発掘ではあったが、本日が土曜日であること、また天候の崩れが心配されることから、昼前に全体写真を撮影した。午後、遺構すべてを完掘した。21日（月）、全体測量・実測に着手。ただし、22日継続も日没で未了となり、翌23日（水）、昨夕の豪雨で水没した調査区の排水と平行しながら、全体測量・実測を継続、ようやく終える。最後、ピンポールや釘などを回収し、平成３年度調査の現場作業を終了とした。

２）　平成４（1992）年度の調査

平成４年度の調査は、別件の本発掘調査中の６月10日（水）から休憩施設の設置を行うなどの準備を開始し、終了した15日に器材を馬場・天神腰遺跡へ移動、６月17日（水）に調査区の設定等の作業を開始した。ただし、ＤⅡ地区の表土剥ぎについては、調査終了を急ぐあまり、一部に対し先行的に実施していた。調査区別の着手順位は、昨年度からの継続としてＤ地区から着手、続いてＢ地区へ、それと並行してＣ地区の調査を行った。発掘調査現場作業全体の終了は、Ｂ地区最終日となる９月14日（月）となった。

Ｄ地区の調査　６月17日、ＤＩ地区の調査区設定等を行い、翌18日から調査区壁の整形及び泥土の除去作業。19日（金）になってようやく遺構確認に着手、25日まで継続するとともに、ＳＤ-401溝の発掘を開始、その後は各遺構発掘を継続した。ＤＩ地区については、７月７日（火）に完掘写真撮影を終了し、平面図作成と測量関係を23日まで断続的に継続、終了した。ＤⅡ地区は７日からの調査区壁整形に着手、遺構確認は翌８日から開始し、15日（水）から遺構見取り図を作成、17日から遺構発掘に着手した。なお、この日以降ＳＸ-2819井戸の発掘を行っている。27日（月）、ＳＸ-2819井戸から敷き詰められた自然木に多数の墨書がなされていることを確認している。８月８日（土）、遺構発掘と平行し全体清掃に着手、12日には、ＳＸ-2819井戸を除きＤⅡ地区を完掘、写真撮影を終了した。ただし、ＳＸ-2819井戸については、27日まで調査を継続、26日には路盤掘削のための重機が作業を着手する中、調査を継続、翌27日にすべてを完了、その直後重機によりすべて掘削された。

Ｂ地区の調査　８月10日（月）、表土剥ぎと遺構確認に着手。遺構数はかなり多く、17日（月）も、遺構発掘を継続する。９月７日（月）、遺構全ての完掘を終え、全体清掃と遺構のマーキングを実施、翌８日に調査区全景と各遺構の写真撮影を行い、遺構測量を継続。遺構平面図実測は、市内の測量会社３社が参加、調査員と合わせ、４パーティで突貫的に測量し、11日（金）までには、レベリングを含めほぼ終了する。12日（土）には図面の補正を行い、14日（月）機材の撤収を含め、調査現場作業の全行程を終了した。

Ｃ地区の調査　９月４日（金）、Ｂ地区調査の進捗をみつつ、表土剥ぎに着手。ＣＩ地区は、深く削平された後、盛土がなされており、遺構は井戸底のみ、ＣⅡ地区も遺構は少ない。５日（土）、表土剥ぎを終了し、Ｂ地区調査に係る作業員の余力をもって、直ちに遺構発掘に着手。翌６日（日）も継続、７日（月）に完掘、翌８日（火）には全体写真も撮影終了。９日（水）には平面図・レベリング等、延べ６日間連続にて全ての現場作業を完了した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的な環境と遺跡の位置

柏崎市は、新潟県のほぼ中央に位置し、柏崎平野一帯を市域とする地方都市である。また、新潟県の地域区分では、上越・下越・佐渡地方と対比される中越地方に属している。一般的に中越地方と呼ばれる地域は、信濃川上流域と魚野川流域一帯を占める内陸南部の魚沼郡域と、東部は長岡市を中心とする信濃川中流域の古志郡域、そして北西の日本海に面した柏崎平野の刈羽郡域に大別される。

一般的な天気予報では、中越地方として長岡市と湯沢町が例示されることが多いが、両者はいずれも内陸にあって、沿岸部となる柏崎平野の気象状況を必ずしも反映していないことが多い。信濃川水系とは分水嶺で隔される刈羽郡域には、平成の大合併以前までの地方自治体として、柏崎市以外に刈羽郡３町村（西山町・刈羽村・高柳町）があり、４市町村にて構成されていた。平成17（2005）年５月、西山町と高柳町が柏崎市と合併したことにより、別山川中流域の刈羽村域の一画を除き、平野域の大半が柏崎市に編入されたこととなった。

柏崎市の人口は、合併当初となる平成17（2005）年では94,648人とされるが、それから17年を経た令和４（2022）年８月末現在に至ると79,270人と、17年間に15,378人も減少するといった深刻な過疎化に見舞われている。特に旧市街地とされる市中心部での人口は微減ではあるが、周辺地域となる中山間部での減少傾向が顕著で、空き家も多く少子高齢化が著しい。このため、山間部各地区おいて伝承されてきた芸能や慣習などの継承は危機的であり、かつ指定文化財の保全も危ういというのが現状となっている。

柏崎平野概観　柏崎平野は、信濃川水系の越後平野や関川水系による頚城平野とは、丘陵や山塊による分水嶺によって隔され、一つの独立した平野を形成するものであり、個々に独立した水系を持つ鵜川と鯖石川を主要河川として形成された臨海沖積平野となっている。

柏崎平野を取り巻く丘陵・山塊とは、東頸城丘陵の一部とされる。平野内部の丘陵域等は、北流する鵜川と鯖石川により西部・中央部・東部に三分され、それぞれ米山（993m）・黒姫山（890m）・八石山（518m）の刈羽三山を頂点とする。西部は、頚城平野との間に横たわる米山を頂点とした傾斜の強い山塊をなし、現在も隆起しているとされる。これら山塊・丘陵地形は海岸まで達し、米山海岸と称される国定公園の景勝地を形成している。その景観は、低位・中位・高位の海岸段丘となって断崖が顕著で、沖積地は少なく、海辺は標石海岸となって砂浜もほとんど形成されることのない特徴を有している。中央部とは、黒姫山を頂点とした丘陵が北へ向けて緩やかに高度を下げ、沖積地に接する一帯に広い中位段丘を形成、日本海側に横たわる砂丘との中間には湿地性の強い沖積地が広がっている。

越後平野との分水嶺に沿う東部とは、北東方向の背斜軸に沿って西山丘陵・曽地丘陵・八石丘陵が北西となる日本海側から規則的に配列し、向斜軸に沿って別山川・長鳥川といった鯖石川の支流が南西に向け流れている。別山川流域の地形的特徴とは、上流域が狭い谷筋を形成、中流域では開析されずに残された中位段丘が多く点在し、下流域では低平な沖積地が広がっている。柏崎平野における沖積地は、鵜川流域では狭く、別山川が形成した沖積地が過半を占める広大さを有しているのである。

また、柏崎平野の特徴の一つが、沿岸部に形成された砂丘である。現在の市街地が覆う柏崎砂丘は、柏崎層とされる沖積層の上位に堆積するが、鯖石川を越えて連続する荒浜砂丘は、西山丘陵南西部を覆うもので、高度100m越えまで新期砂が堆積、また内陸となる別山川右岸域へ飛砂となって拡大している。

鯖石川は、中流域から下流へ移行する安田付近にて狭い谷筋から解放され、大規模な扇状地を形成し、別山川と鵜川との間を厚く覆うとともに、鵜川流域より標高を高くする。鵜川は、西側の米山山塊に遮られ、北流せざるを得ないが、主要な支流でもある軽井川や横山川は、鯖石川水系の支流と同様に東から西へと流れ下り、広い低丘陵域を開析している。この「（柏崎平野）南部丘陵」と仮称され低丘陵域は、新潟県域では特異な地理的な環境にあり、平安時代では県下最大規模となる鉄生産が行われていた。

南条遺跡群と馬場・天神腰遺跡　馬場・天神腰遺跡は、柏崎市大字南条一帯に分布する南条遺跡群の中核をなす遺跡で、小字「馬場」「天神腰乙」に広がっていたことが、遺跡名称の由来である。遺跡群の位置は、長鳥川と鯖石川との合流点から南側で、鯖石川右岸の沖積段丘とその東側沖積地に広がっている。

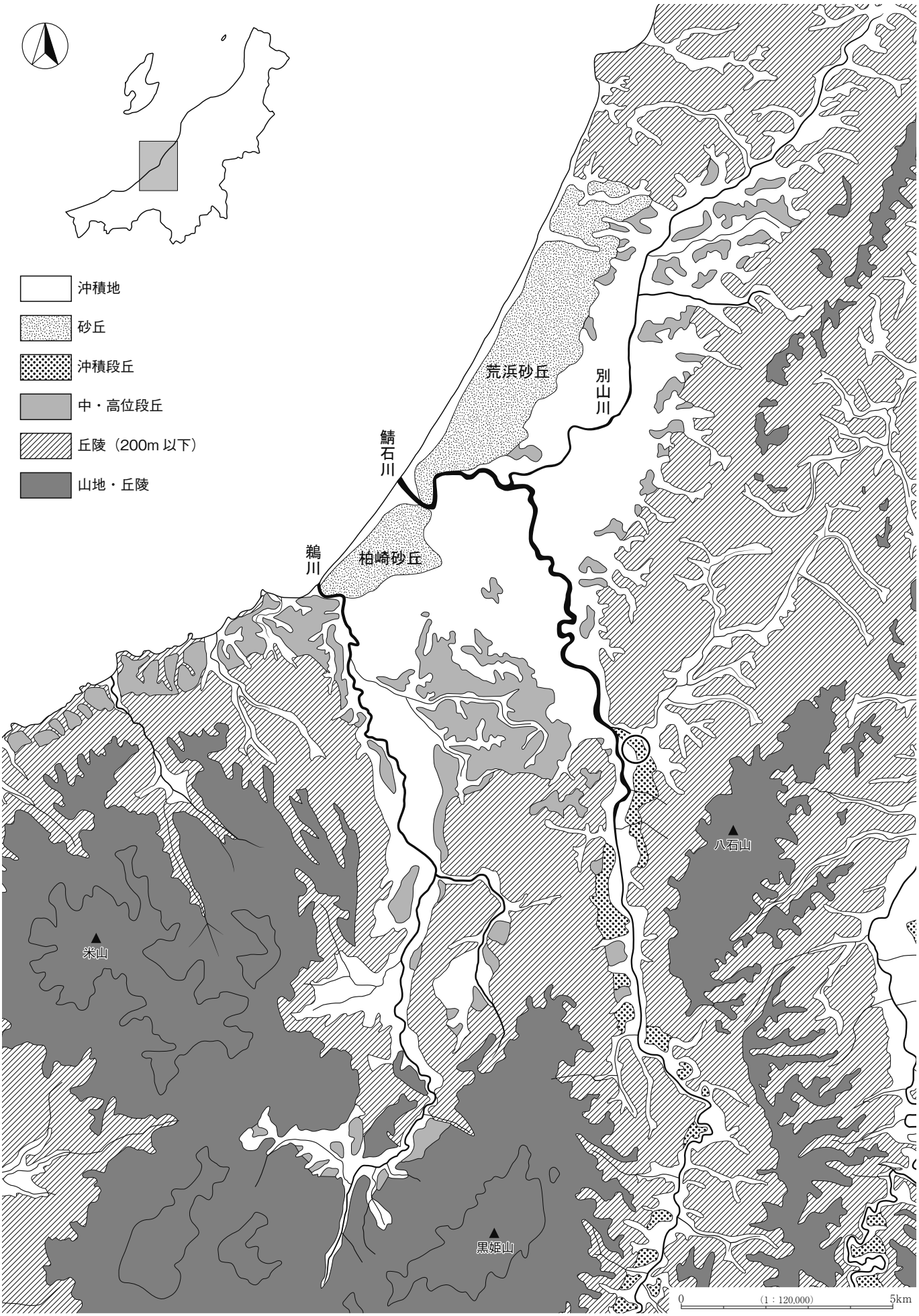
当該地区の地形を流れる河川としては、南条東部を北流する追田川が、長鳥川と合流する支流となる。また南条西部の笠島川は、現河道が直線的に西流して鯖石川に直接合流しているが、かつては北西に流路をとって鯖石川に合流していたと推測されているが〔品田2008ａ〕、長鳥川水系と鯖石川水系の分水嶺という位置付けとなる。馬場･天神腰遺跡が所在する広い沖積段丘は、南条南東部の尾根筋に接続しており、両者を区分する分水嶺の一画となっている。そこで、遺跡群周辺環境理解のため、長鳥川流域と鯖石川中流域北部の地形等について概観したい。

長鳥川流域・鯖石川中流域北部の地形　柏崎平野東部は、面積で比較した場合、地域全体の過半近くを占めている。その大きな要因が鯖石川とその支流にあり、特に鯖石川の延長とも関わっている。鯖石川の源流は、東頸城丘陵の山中、十日町市（旧東頸城郡松代町大字儀明字二瀬川）に発し、総延長およそ48.1kmは鵜川の二倍以上にあたり、文字通り柏崎平野随一の河川である。

鯖石川上流域は、その範囲を源流から南鯖石地区の山根橋付近までとしたいが、地形的な特徴としては山間部を小さく蛇行しつつ数多くの小流が流れ込む。中流域は、長鳥川が合流する安田･鳥越付近までで、本流はほぼ北へ直進し、左岸域では河岸段丘の形成が顕著で、右岸域では谷筋開口部に形成された小規模な扇状地が点在する。沖積地は相対的に狭く、その大半が鯖石川の氾濫原域に含まれている。また、北半右岸域となる南条地区は、鯖石川が形成した沖積段丘と考えられ、氾濫原より一段高い平坦地が広がっている。下流域は以下河口までとしたい。安田・鳥越付近において、狭い谷筋から広い沖積地に開放され、蛇行を繰り返すことによって、自然堤防の形成が顕著である。また、結果として安田付近を扇央とする大規模な扇状地を形成しており、柏崎平野の地形形成にとって重要な意味を持つこととなる

長鳥川は、柏崎市大字東長鳥の大角間地内にて、屋敷川と濁入川が合流した付近を源流とし、鯖石川合流点までの延長10.7kmは、別山川に次ぐ鯖石川第二の支流である。地形的には曽地丘陵と八石丘陵の向斜軸に沿って南西に流れ、東長鳥の夏渡－鷹ノ巣間には、同じ向斜軸を北東に流れる黒川との分水嶺がある。周囲の丘陵は、南東に標高518mの八石山が構えているが、その他の丘陵地は標高200mにようやく達する程度とやや低平である。

長鳥川の流域区分については、明確な基準がないことから、便宜的に三区分して概観したい。まず上流域は源流から北西に流路をとり、夏渡方面からの小流日之入川と合流し、南西に方向を変える約1.5～2.0kmの区間とする。つまり、大角間地内から杉平地内に至る間である。中流域は、杉平付近から高津川が長鳥川に合流する山澗入り口付近までのおおよそ４kmである。中流域は、幅200mほどの沖積地が北東



第２図　馬場・天神腰遺跡の位置と柏崎平野の地形

―南西に直線的に延び、南部において若干北へ流路を変え、高津川と合流する。この間、大広田地内にて広田川が合流する。下流域は、山澗入り口付近から鯖石川との合流までの約3.5～4kmである。この下流域には、佐野入川・深沢川・赤尾川といった多くの小流が合流しており、これらが形成した沖積地と、長鳥川本流が形成した沖積地の広がりがある。長鳥川本流の水量は、現代においてそれほど多くなく、河川の規模そのものは小さいが、本流を含めたそれぞれの小流は、治水するには比較的容易であり、下流域においては特に新田開発に際して有利な地理的な環境にあったとすることができる。

中鯖石地区とされる鯖石川中流域北部は、鯖石川の氾濫原が広く形成され、左岸には狭小ながら河岸段丘が、また右岸では久之木川が扇状地を形成している。中流域北端の鳥越付近で丘陵が迫り、沖積地が狭められている。この地点以北の下流域では、鯖石川本流の蛇行が著しく、扇状地状の地形を呈し、随所に自然堤防を形成する。

2　柏崎平野の古代・中世概観

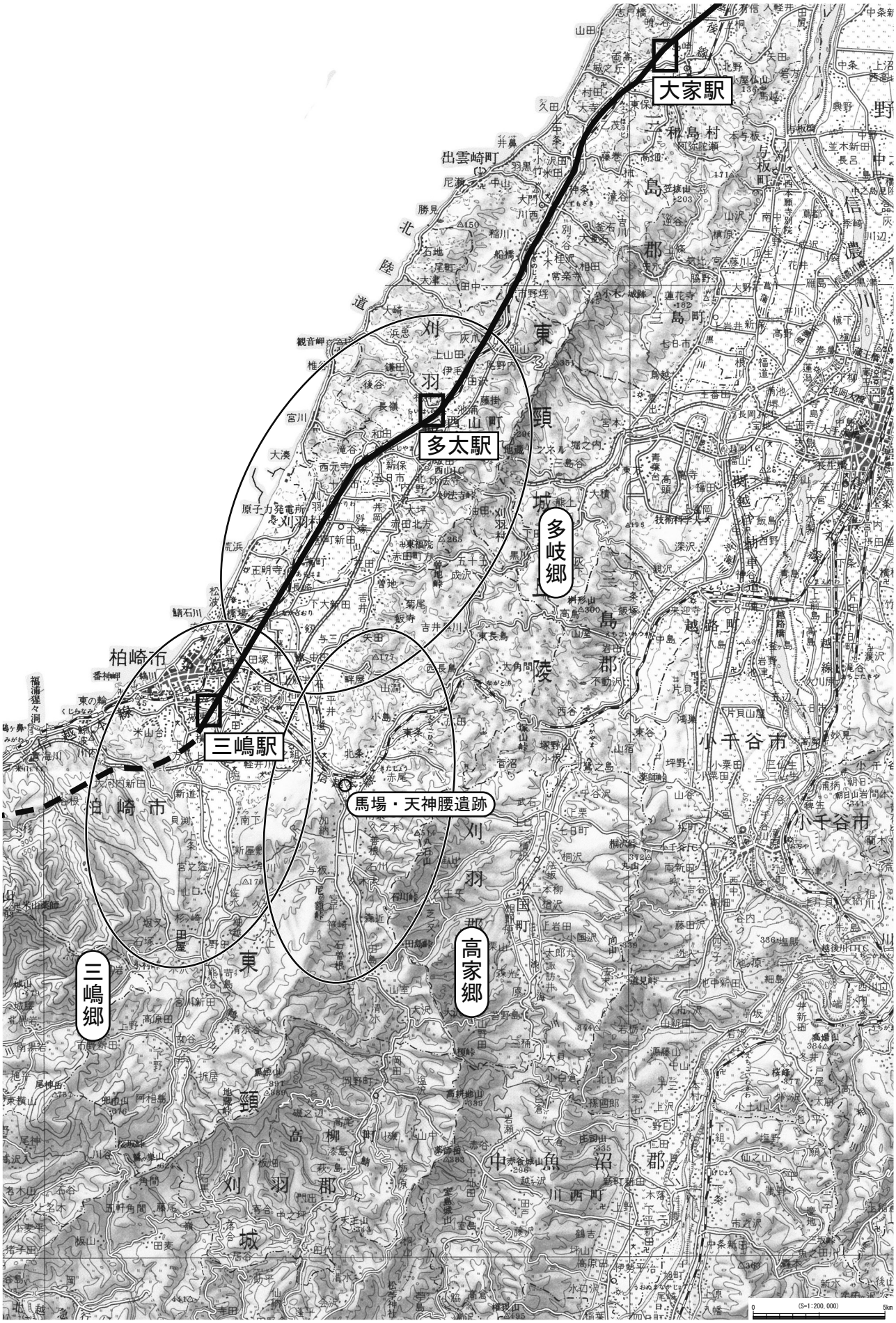
南条遺跡群は、弥生時代後期から遺跡が営まれ、亀ノ倉遺跡の調査成果等〔坂井他1987・柏崎市教委2011〕が示す通り、古墳時代以降に発展的に展開し、古代・中世へと引き継がれている。馬場・天神腰遺跡は、鎌倉～室町時代の中世を主体に、平安時代末から近世に営まれていたことから、本節では主に古代・中世について概観しておきたい。

古　代　越後国など古代北陸道の諸国は、それまでの越国を分割することにより成立したが、それは持統４年（690）の庚寅年籍作成段階であった可能性が高いとされている〔坂井1983〕。成立当初の越後国とは、現在の阿賀野川以北の地であり、現柏崎市域等は、越中国に属していたことになる。現在のような越後国の国域が確定したのは、大宝２（702）年における越中国四郡（蒲原郡・古志郡・魚沼郡・頚城郡）の越後国への分割と〔米沢1980〕、和銅５（712年）に出羽国が分置・独立して以後のことである。

奈良時代の柏崎市・刈羽郡域は、柏崎市西部の旧頚城郡域や魚沼郡域であった旧小国町域（現長岡市）などを除く大半が、長岡市域などと同じ古志郡域に属していた。当時の古志郡は、旧三島郡和島村（現長岡市）の八幡林遺跡や下ノ西遺跡の調査成果から、島崎川流域でも八幡林遺跡付近に国の機関を含む郡衙等の中枢部が想定できる〔和島村教委1994・2003・2005〕。柏崎平野一帯との関係は、地理的に低いながら分水嶺を挟むなど、やや隔たりを感じさせる関係にあり、このような地理的な側面のみとは言い難いが、平安時代を迎えた９世紀前葉頃に、三嶋郡として分置・独立することになった〔米沢1976〕。

この９世紀前葉という時期は、他地域においても国や郡の分割が行われており、北陸道で見ると、弘仁14（823）年に越前国から加賀国が独立し、郡では越前国大野郡からの今立郡、加賀国では江沼郡から能美郡が、また加賀郡から石川郡も同じ年に分置され、さらに天長２（825）年には若狭国遠敷郡を分割して大飯郡も独立を果たしている〔金子1990〕。三嶋郡の独立も、このような地方行政の体制再編の一環としてなされたと考えられるが、詳細な事由は明らかでない。

しかし、近年における古代三嶋郡域の発掘調査成果を窺うと、軽井川南遺跡群〔柏崎市教委2010ａ他〕や藤橋東遺跡群〔柏崎市教委1995〕などの発見が示すように、当該地域では８世紀末頃から12世紀前半前後の時期において大規模な鉄生産が行われていたことが明らかとなっている。特に、三嶋郡が分置・独立したとされる９世紀以降は、製錬遺跡数が確実に増加しており、これらを考慮すれば、郡における鉄生産体制の強化が背景にあった可能性が大きくなる〔品田2019〕。この三嶋郡分置の歴史的背景を解き明かす



第３図　古代三嶋郡の駅家と北陸道の道程

には、鉄生産だけから解決できる問題ではなく、その他の要因も含めた検討が必要なことは言うまでもない。しかし、後述するようにわずか三郷という小さな郡の独立には、大きな意味が隠れているように思えてならない。

三嶋郡には、10世紀に成立したとされる『倭名類聚鈔』に「三嶋」「高家」「多岐」の三郷が記され、また『延喜式』には北陸道の駅として「三嶋駅」と「多太駅」があったとされている。これら二史料に記された記載順や、地名、あるいは式内社などの分布からすれば、三嶋駅は三嶋郷に、多太駅は多々神社や多岐などの地名を残す別山川流域が推定される。三嶋郡の各郷域は、後の荘園分布などを参考とすれば、鵜川流域：三嶋郷、鯖石川中流域・長鳥川流域：高家郷、別山川流域：多岐郷といった範囲をおおまかに想定できる。高家郷は、駅が設けられていないことから、北陸道本線から外れていたことが窺われ、長鳥川と鯖石川が合流する付近が郷域の中枢であったと考えられる。

柏崎平野において特に重要な古代遺跡とは、三嶋郷域に所在する箕輪遺跡が、「駅家村」〔相沢他2000〕と記された木簡が出土しているとおり、代表的な遺跡としてまず掲げられる。発掘調査の結果としては、奈良・平安時代の掘立柱建物跡群や流水路などが発見されている。特に奈良時代では、南北方位に整合した複数の建物跡が確認されており、官衙的な意味合いを持つ遺跡とすることができ、遺跡範囲内には、北陸道の三嶋駅が所在していたことがほぼ確実視されている〔新潟県教委他2015〕。

また、箕輪遺跡の北東約1.5kmに所在する小峯遺跡では、平安時代の屋敷跡が確認され、施釉陶器の出土も多い。また、箕輪遺跡東部では、流路内から多量の土師器とともにかなり多くの施釉陶器等が出土して、儀式に伴う饗応などを髣髴とさせる。また、この付近一帯では古代遺跡の密度が濃く、政治的な意味合いが高い区域であったとすることができる。この他としては、耕地などに付随する集落として、鵜川中流域の前掛り遺跡が調査されており、平安時代の建物跡数棟などが確認されている〔柏崎市教委1997〕。

多岐郷域と考えられる別山川流域では、吉井遺跡群の諸遺跡のほか〔柏崎市教委1985・柏崎市教委1990〕、刈羽村域の枯木Ａ遺跡〔刈羽村教委1995〕や払川遺跡〔刈羽村教委1999〕など、また西山町域の井ノ町遺跡〔西山町教委2001〕と宮ノ前遺跡〔西山町教委2003〕などで、平安時代の遺跡が多く調査されている。特に、古代北陸道との関連として、前述した八幡林遺跡が「大家駅」に、また箕輪遺跡が「三嶋駅」に比定されたことにより、両駅の中間に位置する「多太駅」の所在地が、現在のＪＲ越後線の礼拝駅付近とする見解も示されている〔品田2020〕。

また、吉井遺跡群の萱場遺跡は、竪穴住居と考えられる方形状の遺構が検出され、遺構内から８世紀中葉の土師器・須恵器などが出土し、萱場遺跡よりも若干丘陵に近い戸口遺跡でも、８世紀後半頃を主体とする土師器・須恵器が比較的多く出土している。しかし、両遺跡の調査は、用水路工事に伴うもので、調査範囲が狭いことなどから、遺跡の性格等は、余り明らかでない。

高家郷域に所在する古代遺跡としては、鯖石川中流域南部となる南鯖石地区の宮ノ下遺跡群〔柏崎市教委2001ａ〕において、深町遺跡や宮田遺跡で平安時代の集落が調査されている。長鳥川流域では、８世紀末・９世紀初頭の音無瀬遺跡〔柏崎市教委2012〕から水路跡が検出され、近年では亀ノ倉遺跡〔坂井他1987〕など南条遺跡群の調査によって古代の様相も少しずつ解明できるようになってきているが〔柏崎市教委2011〕、大半は未調査遺跡であり、古代の実態は不明な点が多く、今後の課題となっている。

これら柏崎平野における古代遺跡は、その多くが平安時代の遺跡であり、別山川流域の諸遺跡で古墳時代中・後期の遺跡が複合したとしても、奈良時代の発見例は少なく、特に７世紀代は空白に近い。遺構・遺物が確認されているのは、吉井遺跡群の萱場遺跡・戸口遺跡のほか箕輪遺跡が知られているが、その他

では海浜部における井ノ町遺跡を掲げる程度である。奈良時代の主な４遺跡の分布は、三嶋郡３郷の各比定地に分散し、かつ中枢域と思われるところに位置している点は示唆的であり、また井ノ町遺跡の再評価を含め周辺諸遺跡とともに今後さらに注視していきたい〔品田2020〕。

中　世　『吾妻鏡』文治２（1186）年３月12日条の「三箇国庄々未進注文」には、柏崎平野に比定される荘園として、「宇河（鵜河）荘」「佐橋（鯖石）荘」「比角荘」の３荘園が記されている。これら三荘園は、寄進地系荘園として11世紀末から12世紀中葉に成立したと考えられ〔荻野1986〕、これ以後倭名類聚鈔の郡郷名は廃れて、荘園名で呼ばれることになる。

上記三荘園の四至は明確にされていないが、鵜河荘の場合、鵜川という河川名と一致すること、史料に記された地名等から安田付近まで確実に及ぶこと、そして鏡ケ沖という湖沼により比角荘域と推定されている現柏崎市街地とは地形的に隔たりそうなことなどから、鵜川河口付近を除く鵜川流域一帯とその水系内に属する南部（安田）丘陵一帯等が、その荘域として推定できよう。鵜河荘の内部については、『満済准后日記』の永享４（1432）年３月29日条と同じく翌永享５年３月11日条において、「鵜河荘三分一事」と記載された八条上杉氏の所領をめぐる訴訟関連記事がある〔村山1990〕。この八条上杉氏の所領とは、後に上条上杉氏が本拠地とする上条があり、「鵜河荘三分一事」のひとつとみられることから、琵琶島城が所在する下流部には「下条」などという別の条が存在した可能性が高いであろう〔品田1996ａ〕。また、安田や田尻地区となる東半部は、鵜川荘安田条と記された史料が多くあり、「鵜河荘三分一事」と記載されたように荘内は大きく３条に分かれていたと考えられるのである。

比角荘は、現在の地名からすれば、現市街地西部に比角地区があること、また観応元（1350）年の「室町将軍家足利義詮御教書」〔柏崎市史編さん委1987ａ（№33文書）〕に記された「越後国比角庄袋条」が、市街地南西部の元城町字袋田付近に比定されるとのことから〔村山1990〕、現市街地が形成された柏崎砂丘一帯とおおむね重なってくるものと考えられる。この比角荘は、『吾妻鏡』によれば文治２（1186）年当時穀倉院領であり〔柏崎市史編さん委1987ａ（№15文書）〕、中原家と清原家が別当を家職化していた。別当の一人、中原師元は、保元元（1156）年に越後介であったことを勘案すれば、その立荘期は鳥羽院政期に想定されるとのことである〔荻野1983〕。比角荘は、『師守記』貞治３（1364）年６月18日条にも穀倉院領と記されていることから〔柏崎市史編さん委1987ａ（№40文書）〕、14世紀中葉までは穀倉院領であったことが確かめられ、中原家によって知行されていたことがわかる。また、観応元（1350）年の「室町将軍家足利義詮御教書」に、「越後国比角庄袋条地頭職者可為女子東御方分」との裁許が見られるように〔柏崎市史編さん委1987ａ（№33文書）〕、14世紀中葉段階における比角荘の地頭職は、荘内にて分割されていた〔村山1990〕。比角荘は、前記『師守記』の貞治３（1364）年を最後に、史料の上では確認されなくなる。このことは、南北朝の動乱の最中、荘園領主側の支配が衰滅し、地頭等の在地勢力の台頭が背景にあったことは間違いなさそうである。

佐橋荘については、その荘名から鯖石川との関りが強いことが明らかであり、また永鳥条という地名が史料に残されており、鯖石川中流域と長鳥川流域が荘域の基本と考えられる。したがって、荘園の中枢は、柏崎市北条と南条、それに加納や善根などであろうが、長鳥地区や北鯖石地区、および石曾根などを含む南鯖石地区までの範囲を、大まかに想定することができそうである。

佐橋荘の内部については、現在の地名等から類推すると、南北両条に大きく分かれていたと考えられる。「毛利元春自筆事書案」に「（前略）越後国佐橋庄南条七ヶ条土貢二千余貫、内五ヶ条、了弾譲庶子等畢、残庄屋カンナウ二ヶ条親父宝乗分也、土貢八百余貫（後略）」と記載されているとおり、南条はさらに七ヶ

条に分かれていたことが知られる。北条については、南条と同様、小さな条に分かれていたと考えられるが史料がなく不明であり、また永鳥条の位置付けも明確にできない。

さて、柏崎平野に所在した鵜川・比角・佐橋の各荘園は、これら三荘によって、鵜川筋と鯖石川筋、そして長鳥川流域といった地域の大半を網羅することができた。しかし、鯖石川最大の支流であり、古代の官道北陸道が通っていた別山川流域についてはカバーするに至っていない。この別山川流域については、弥生時代中期以降開発が進められた先進地として経済的優位に立ち、政治的中枢を担ってきたこと、そして北陸道を通じて島崎川流域との住還が示すように交通や流通の要地としての重要性が伴っていたことなどから、鵜川や鯖石川流域とは異なる歴史的展開があったものと考えられる。中世後期において、原田保や赤田保など７件の保名が、わずかながら史料に残されている事実は、国衙領としての伝統が強く残存していた結果であると言える。その場合、『明月記』正治元（1199）年正月廿二日条〔柏崎市史編さん委1987ａ（№18文書）〕、および正和２（1313）年の「源光広和与状写」〔柏崎市史編さん委1987ａ（№29文章）〕に記載されているとおり、中世前期では荘園が成立せず、「苅羽郷」と称されるに至ったと考えられる。

次に、中世後期、特に室町期から戦国期における在地の支配関係について、大まかな勢力地図を述べておきたい。まず、佐橋荘と鵜川荘安田条を本貫地とする毛利氏は、時期によっては別俣郷までを領域としていた可能性があるなど、柏崎・刈羽地域では最大の勢力を誇っていた。毛利氏は、南北朝の動乱期において、安芸の領地へ移った西国毛利氏に対し、越後に在国した主勢力を越後毛利氏と呼ぶ。毛利氏の領域は、数多くの要害（山城）で守られていた。毛利氏に対する在地勢力としては、刈羽の赤田城を根拠地とし、別山川流域の大半を領する赤田斎藤氏、鵜川荘上条には、上条城を館とし黒滝城を要害とした上条上杉氏、また鵜川荘下条と推定される琵琶島城には、上杉氏の被官がこれを守ったとされ、北や西から毛利氏を牽制していた。越後毛利氏は、いくつかの庶子を分出するが、その主勢力である北条毛利氏と安田毛利氏は、戦国末期の御館の乱（1578年）に際し、安田毛利氏は景勝方に与し、北条毛利氏は景虎方の主勢力として活躍した。しかし、北条毛利氏は、天正７（1579）年、景虎方の主力であった北条景広が死去すると、本拠地北条城を開城して景勝方に降り、佐橋荘を主とする領地のすべてが上杉景勝方の武将に細分して分け与えられ、在地の勢力図は一変した。

柏崎平野の主な中世遺跡については、佐橋荘の中枢に所在する馬場・天神腰遺跡が主要遺跡の一つに数えられるが、近年では国道８号バイパス事業に伴い中世集落に対する大規模調査が実施され、柏崎市の中世史に係る重要な成果が上げられている。まず、鯖石川左岸の東原町遺跡は、13世紀後半から14世紀前半の集落で、珠洲壺に納められた埋納銭10,674枚が特記され〔新潟県教委他2005〕、鵜川左岸の下沖北遺跡では、方形に巡る堀に囲まれた13世紀代の館跡が確認され〔新潟県教委他2003〕、両遺跡からは土器編年の基準となる中世土師器の一括資料も得られている。また、市街地南東側の藤井・茨目一帯では、調査区が東西80m×南北230mとなる山崎遺跡〔新潟県教委他2018ａ他〕と東西100m×南北350mの丘江遺跡〔新潟県教委他2018ｂ～ｄ・2019他〕が大規模に調査され、何れも遺構密度の濃厚な集落が確認されている。多数検出された建物跡の中には、溝による方形区画内に配置されるエリアが設けられていることなどの特徴が成果として得られている。また、丘江遺跡の中世集落は、５期にわたって変遷し、14世紀末頃に画期が存在することが指摘されている。何れも内容が豊富であり、柏崎地域における中世集落の理解にとって重要な成果であり、今後さらなる検討等が期待される。

この他、鯖石川と別山川の合流点には、13世紀後半を最盛期とする角田遺跡〔柏崎市教委1999ｂ・2006ａ〕があり、対岸となる鯖石川左岸の東原町遺跡や上原遺跡〔柏崎市教委2015ａ〕との関連性や、琵琶島

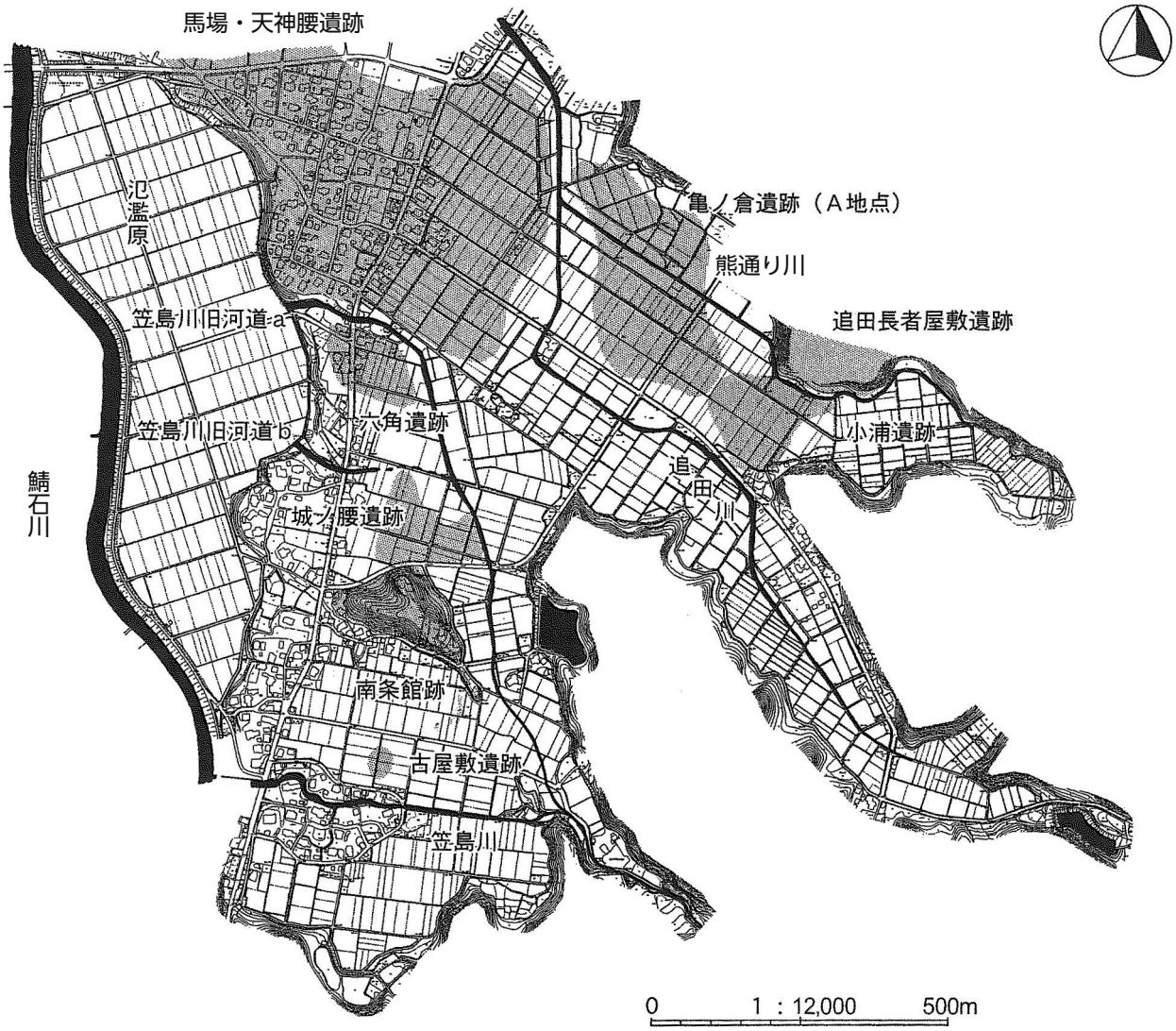
第４図　刈羽郡域の荘・保と主要城郭

城跡北辺でも15～16世紀を主体とする館跡と考えられる遺構・遺物が調査されている。

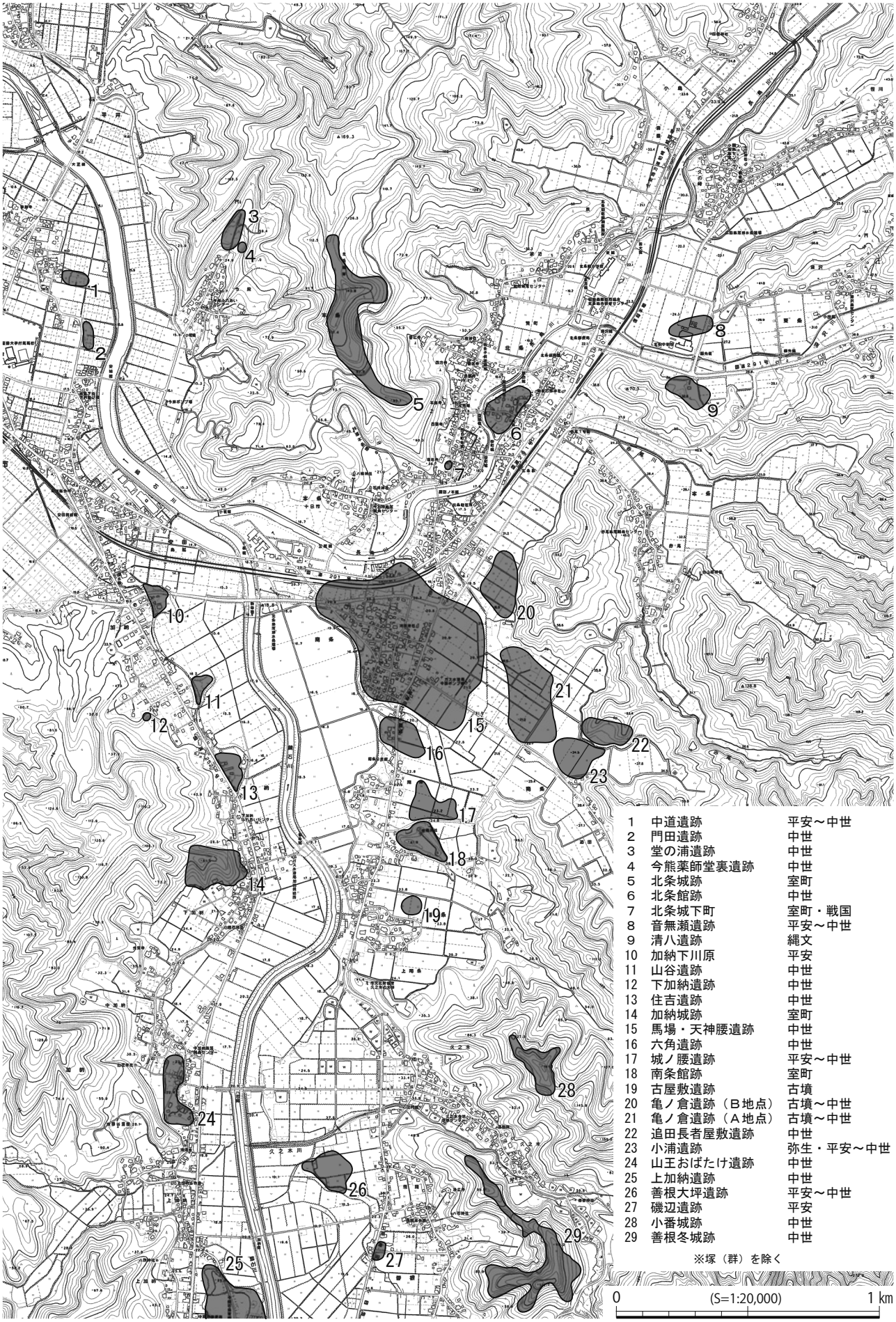
しかし、柏崎地域全体の中世史については、荘園や国衙領などの存在から、支配関係等の地域的な展開の一部を垣間見ることはできても、ほとんどは名称の羅列に過ぎず、具体的な実情や中世人の生活は不明とせざるを得ない。当該地における中世史も、県内各地と同様に残された古文書や記録類などの史料が乏しいという現実があり、中世全般を叙述することはいまだ不十分である。今後は、新資料が期待される考古学的な遺跡調査が重要であり、資料の蓄積を元とする新たな展開に期待したい。

3　南条遺跡群の立地と周辺の遺跡

南条遺跡群概観　南条遺跡群に属する各遺跡の把握は、基盤整備事業用地の約80haを対象として実施された試掘・確認調査によって、南条地区の主要部全域における遺跡の状況を把握し得たことになるもので〔品田2008ａ〕、馬場・天神腰遺跡の調査成果などと合わせれば、およそ100haに及んでいる。それ以前の周知の遺跡とは、都市的性格を帯びるとされている馬場・天神腰遺跡のほか、古墳時代以降古代・中世の遺物が採取された亀ノ倉遺跡〔坂井他1987〕が知られ、このほかに実態は必ずしも明らかでないが、追田



第５図　南条遺跡群と河川と流路



第６図　馬場・天神腰遺跡と周辺の遺跡

長者屋敷遺跡や南条館跡を含め、４遺跡が知られていた。新たな遺跡・新知見とは、小浦遺跡、古屋敷遺跡・城ノ腰遺跡、そして六角遺跡が新発見遺跡となり、さらに馬場・天神腰遺跡ではこれまでの想定をはるかに上まわる大きな遺跡であることなどが新たな知見となり、遺跡数は倍増、地区内における遺跡面積も広大となった。

遺跡群の形成は、弥生時代後期の小浦遺跡から始まり、古墳時代前期には亀ノ倉遺跡で大きく展開し、後期に引き継がれる。その後、中世を主要時期とする馬場・天神腰遺跡へ至るが、現在のところ平安時代については希薄であり、現状では断続的に展開しているように見受けられる。

遺跡群の立地　南条遺跡群が位置する鯖石川上流域や長鳥川流域では、河川流域の沖積地が狭小という制約もあって、現集落は主に丘陵裾部に立地することが多い。これに対し、南条地区の地形は、もともと鯖石川右岸の沖積段丘上の広い平坦地であり、他とは異なった地形的属性を有し、その当該地に南条遺跡群が立地することは注目できる。また、鯖石川との標高差は、その間に氾濫原を挟み一段高くなって段差があり、この点は水利において鯖石川の恩恵を受けにくい反面、鯖石川の氾濫の影響が少ないことと表裏一体である。したがって、南条の集落域は、概して安定していたことがわかる。また、集落や耕地に必要な水利において、八石山側となる後背地に小流を従える小規模な沢が形成されており、これらから供給していたものと考えられ、特に小浦遺跡が位置する沢を中心に、笠島川やその旧河道、そして追田川を有力視することができる。

周辺の遺跡　馬場・天神腰遺跡を有する下南条は、長鳥川との合流点にも近い交通の要衝という条件も備え、地区の大半が遺跡といっても過言ではないような状況となった。これに対し、周辺隣接地区の状況を見ると、鯖石川左岸域の加納地区では、幅の狭い沖積段丘に沿って下川原遺跡、山谷遺跡、住吉遺跡、山王おばたけ遺跡、上加納遺跡など、中世を主とする遺跡が点在する。しかし、北条城下とされる長鳥川下流域右岸の北条地区には、専称寺門前（北条四日町地点）において、土坑・ピット数基とともに珠洲が出土しており、北条城下に関連する集落が存在する可能性が指摘されているが〔柏崎市教委2018ｂ〕、１地点のみという現状から詳細は不明とせざるを得ない。また、左岸域では北条館跡や音無瀬遺跡、亀ノ倉遺跡（Ｂ地点）など数箇所が点在するのみで、遺跡数は少ない。南条に南接する善根地区においては、塚や石塔、そして山城以外、集落跡はこれまで確認されていなかったが、平成24 ～ 25（2012 ～ 2013）年に実施されたほ場整備事業に伴う試掘調査により、善根大坪遺跡と磯部遺跡の２遺跡が発見され、善根遺跡群と総称された〔柏崎市教委2015ｂ・ｃ〕。両遺跡の性格は集落ではあるが､主体的時期が平安時代にあり、中世に関する土器類の出土は少なく〔柏崎市教委2017ａ・2017ｂ〕、詳細については今後の課題が多い。

このような現在の状況は、佐橋荘の中枢である南条地区に遺跡が濃厚に存在することを際立たせるが、しかし反面では、隣接地域における遺跡の把握が不十分である現状を示唆するものである。特に、善根地区については、水利の活用に有効と考えられる二つの沢が形成され、かつその地形は扇状地で、鯖石川右岸の氾濫原とは一段高い点は南条地区に近似している。また、永和２（1376）年に書かれたとされる「毛利元春自筆事書案」〔柏崎市史編さん委1987ａ（№44文書）〕に記された佐橋荘南条の七条のうち､「庄屋条」「カンナウ条」と同等の（仮）「善根条」であった可能性が強く推測されることから〔品田1996ｂ〕、集落や耕地の形成は必然的であり、中世の集落跡の存在、特に館に関連する遺構群等については今後に期待したい。

Ⅲ　遺跡概観と遺構

1　遺跡概観と調査区の概要

1）遺跡概観

馬場・天神腰遺跡は、大小９か所の遺跡で構成される南条遺跡群のなかでも、中世において最大規模に展開した集落跡である。特に、当該地一帯は、平安時代末に成立した佐橋荘の中枢域と推測されるとおり、地域内における政治・経済の中枢を担っていたであろうことが、今回の発掘調査の成果によって裏付けられることになった。遺跡が立地する地形は、平坦でかつ広い沖積段丘であり、鯖石川中流域から長鳥川流域とされる佐橋荘域においても、唯一でかつ特異な立地条件を有していたことも、当該集落が発展する属性として評価できる。また、柏崎平野最大の鯖石川とその支流長鳥川の合流点であったことは、交通の要衝として重要な地勢を兼ね備えていたとすることができよう。

遺跡推定範囲と現況　馬場･天神腰遺跡は、新潟県柏崎市大字南条地内に所在する。遺跡の推定範囲は、現集落である下南条の宅地を中心に、東西約500m、南北450mと、南条遺跡群最大規模を誇る。北辺は長鳥川に、西側は鯖石川の氾濫原と段丘崖に沿って流れる河原川を限りとし、東は長鳥川の支流となる追田川に、また南は笠島川の旧河道と考えられる南条川を境とする。追田川と南条川は、互いに並走し、別個の沢を水源とするが、突出する尾根筋上に馬場・天神腰遺跡が立地しており、景観的には独立した丘のような地形をなしていた。

遺跡所在地の小字地名に当てはめると、遺跡名称の基となった「馬場（ばんば）」「天神腰乙（てんじんごし）」「天神腰甲（てんじんごし）」の３地区にまたがっている。西側から北西一帯を占める「馬場」地区は、鯖石川と長鳥川合流点内角の沖積段丘で、現状は主に畑地であることが示唆する通り、水捌けが良い条件を備えてはいるが、逆に水脈が乏しく居住域には適していなかったことが窺われる。現在、ＪＲ信越線を超えた「馬場」北半は、工場用地となっている。中央を占める「天神腰乙」地区は、下南条集落の住宅地となっており、宅地内には畑が分散し、東辺の一部を水田とする。集落内の生活道路は、区画整理が施行されたような碁盤目状を呈しており、都市計画的なニュアンスを彷彿とさせる。そして県道田代小国線の東側となる「天神腰甲」は、その大半が水田域となっている。

調査区の位置　柏崎市道22-50号線の道路改良工事を調査原因として発掘調査された位置と範囲は、遺跡推定範囲からすれば、北辺に該当する。したがって、広大な遺跡範囲の中にあって、遺跡の性格を特定するためには片寄り過ぎており、今回の調査区及び調査成果から、遺跡の全体像を復元するには、制約が強くデータ不足は否めない。特に、生活道路が碁盤目状を呈する遺跡中枢部の実態が不明とせざるを得ないこと、また道路跡そのものが現道と重なって未調査となっている可能性が高いことも、遺跡の全体像を不分明にする。そして、館の堀と考えられる大型溝が東西両端で検出され、さらに調査区の南200m地点には土塁と堀跡を残す館跡が存在するが､結果としてこれら館跡３か所すべてがほぼ未調査となっている。このような遺跡中枢部が未調査となった実態は、当然のごとく、出土する遺物の種別や多寡にも影響を与えることとなり、本遺跡評価に係る重要な課題と言えるであろう。

２）調査区とグリッドの設定

市道22-50号線道路改良に伴う道路法線は、遺跡範囲の東西両端でややカーブを描くが、中央となるＢ地区からＤ地区に至る間は直線となるように計画されていた。現地にはすでにセンター杭も打設されており、基準とするグリッドの設定については、これら直線で打設されていたセンター杭を利活用することにより10m方眼の大グリッドを設定した。大グリッドの呼称は、南北については、北からＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ…のアルファベット大文字とした。調査区が該当する実際の範囲は、Ｃ～Ｅまでの３グリッドである。また、東西については、西側を起点とし１・２・３・４…の算用数字とし、遺跡全体をカバーした結果、概ね３～39グリッドまでが調査区の実範囲に該当することとなった。

小グリッドについては、10m四方の大グリッドを２m四方に区切り、25コマとした。呼称は、図版２に示した通り、北西の大グリッド杭を起点とし、東側に①②③④⑤までの５小グリッド、起点から南へ①⑥⑪⑯㉑までの５小グリッドの並びとし、南東端は㉕となる。遺構や遺物出土位置については、「Ｄ-20㉑グリッド」などと表記した。

３）調査区の概要

発掘調査対象面積は、幅約13m、延長約380m、概算で4,940㎡となる。しかし、調査区内には、生活道路や農作業に欠かせない市道や農道などが横断しており、これらを掘り残す形で発掘せざるを得なかった。このため、実際の発掘面積は、Ａ地区：671.1㎡、Ｂ地区1,013.7㎡、Ｃ地区：568.2㎡、Ｄ地区：1278.4㎡、Ｅ地区：589.6㎡となり、総発掘実面積は4,121.0㎡（対象面積比83.42％）となった。

発掘調査の結果、確認された主要遺構とは、側溝を備えた道路跡と館の堀跡、そして建物を構成する柱穴群と食水等を賄う井戸跡、これら居住域を区画する溝跡や柵列である。遺構検出密度についても、各地区において粗密があり、土地利用の在り方を確認することができる。

なお、小字名としては、「馬場」がＡ地区～ＣⅠ地区まで、「天神腰」はＣⅡ地区～Ｅ地区までとなる。

調査区内における各種遺構分布を概観すると、Ａ地区からＢ地区にかけては、両側に側溝を備えた道路が、４～13グリッドまでの約100mにわたって縦断し、南側へと反れていく。側溝の規模も大きく、幹線道路と認識した。また、Ａ地区東端のＤ-８グリッドでは、幹線道路と直交し、北へと続く道路も存在する。特徴的な点は、幹線道路北辺に沿って幅約5.5m（≒３間幅）の遺構空白帯が存在していたという結果である。その延長とは、西端の段丘崖に検出された南北方向の溝からＢ地区のＤ-12グリッドに検出されている小規模な南北溝までの間、およそ85mに及んでいた。Ｂ地区では、遺構空白帯の境界を示す南北溝を境に建物跡が密集する区域へと大きく変化しており、両者は対照的となる。当該空白帯の解釈は、本遺跡の地理的環境として川に隣接するという立地や、道と関連する「場」として境界観念が伴うことなど、市町的な性格が想定されている。

Ｂ地区13グリッドから17グリッドまでは、建物跡密集区域となっており、幹線道路に直交する３条の区画溝により居住区が区画されていた。また、ＣⅠ地区とした18グリッドから20グリッドまでについては、深く削平されていたことにより、建物跡は一切検出されなかった。しかし、底面が残存した井戸15基が狭い範囲に密集しており、建物群の存在が肯定されることから、少なくとも19グリッドまでの延長70m区間は、建物密集域であったことが明白である。

なお、Ｂ地区の幹線道路は、やや北側に膨らんだのち、南側に反れているとしたが、南側溝は堀に改修

されているとおり、権力者の居宅等の存在が想定できる。ちなみに、Ａ地区Ｅ－８グリッドには、井戸跡が検出されているが、当該幹線道路が新設されるに際し、移転を強要された住居があったことを物語る。そしてＢ地区の館跡となる屋敷地は、幹線道路の法線そのものが回避していたことが明白であり、相当な有力者の存在が肯定できるであろう。

字「天神腰」となるＣⅡ地区東端の22グリッドから、ＤＩ地区全体とＤⅡ地区の28グリッドまでは、建物と井戸がやや閑散としたエリアとなる。ただし、幹線道路と概ね並行する溝と27グリッドにおいてこれと直交する溝の存在から、方形状の区画内に位置するものと考えられ、調査区外北側に建物群の本体があった可能性は否定できない。

ＤⅡ地区では、29～31グリッドにおいて建物跡が特に集中・密集して検出されるが、その周りは遺構が少なくなっている。当該屋敷地とは、27グリッドと34グリッドに検出される南北溝によって区画されていた可能性が高い。

Ｅ地区は、遺構数そのものは少なくなるが、中央に方形区画の堀跡が鎮座した結果であり、居住域というよりも溝と柵列などで仕切られた道が、堀沿いに通っていたことなどがその理由と考えられる。ただし、38グリッドでは、堀跡に切られた井戸や柱穴が密集しており、部分的な居住域の存在は明らかである。

なお、Ｅ地区の調査区以東については、平成３（1991）年度に実施した確認調査において、第12トレンチ及び第13トレンチの２か所では、「遺構確認面が軟弱で、遺構自体全く検出されなかった」〔柏崎市教委1992ａ〕ことから、遺跡範囲内にあるとして、本発掘調査対象から除外することとしたものである。また、Ａ地区西端以西については、鯖石川の沖積段丘崖及び高低差約４ｍと低い氾濫原となっており、遺跡外と判断し、本調査対象から除外した。

以上、調査区全体の遺構を概観したが、幹線道路等の道路や街区を区画する溝、館の堀及び各建物跡が指向する方位は、大きくずれることはなく、一定している様相が明らかである。また、現下南条集落内の生活道が碁盤目状を志向していることと合わせれば、馬場・天神腰遺跡一帯は、都市計画的な区画整理がなされた可能性が高く、一般的な集落というよりも、「都市」としての性格が強い市町であったとすることが妥当なのではないだろうか。当該見解の妥当性等は、本遺跡理解への大きな課題の一つなのである。

２　馬場Ａ地区の遺構

１）Ａ地区の遺構概要

Ａ地区は、西側が鯖石川沖積段丘の段丘崖を限りとし、東側は市道柏崎20-35号線までとして、Ｂ地区との境界とした。グリッド表示では、３グリッドから９グリッド西端までとなる。

遺構数　Ａ地区の主要遺構は、道路１（Ｂ地区：ＳＲ-1104）と側溝（ＳＤ－１・２）、道路２と側溝（ＳＤ-200・205）、その他の溝２条、そして建物跡５棟と柵列４件、および建物跡等に復元できなかった柱穴を含むピット類74基、そして井戸６基、土坑13基となる。

道路１のＳＤ－１側溝北側となる４～６グリッドでは、多数の落ち込みが検出されているが、その大半は、畑など耕作等による攪乱によるもので、中世期においては遺構空白帯となる。

遺構の配置　各遺構の配置は、調査区南辺に沿って道路１となるＳＤ－１・２の側溝が並走し、東端の８グリッドにて道路２が道路１と直交して北側に延びている。ＳＤ－１側溝は、上面幅が２ｍと規模が大きいが、最多５回以上の改修を経た結果であり、基本的な幅は70㎝程度が想定されるとともに、道路幅も

現状1.7m程度と狭いが、本来的には2.7m幅程で計画されたと推測できる。道路１：ＳＤ－１側溝の北側を幅約5.5m（≒３間幅）の遺構空白帯とし、調査区西端にやや不整形な溝を配し、７グリッドではＳＡ-７と８の柵列が間仕切りをする。その北側においてＳＡ-10柵列が、道路１と道路２に沿うように方形区画状に巡らされ、その柵列の範囲内外に建物跡や井戸が分布する。東西方向のＳＡ-10柵列は、遺構空白帯との境界を画するとともに、南北方向についても道路２との間隔（約3.7m≒２間幅）を意識して設定されていたことが想定される。なお、道路１の路面には、原則遺構が存在しないが、８グリッドにおいて新旧２基が重複する井戸が検出されており、居住域の一画にあって、道路新設に際し、移転させられたものとみられる。また、この他に、調査区を東西に縦断し、道路１に切られる溝１条（ＳＤ－３）が検出されている。

２）道路と側溝

馬場･天神腰遺跡における発掘調査は、工事着工より遅れて着手したことから、表土剥ぎ等についても、遺構確認面まで重機により一気に実施したこと、また道路跡という認識が当初持ち得ていなかったことなどにより、路面の検出という視点を欠いて調査が進められた。特に、表土剥ぎの最中、二本の溝間に礫が敷かれている状況が確認されていたが、かつて水道管布設に伴う水道橋建設に際し、道路の切り替えが行われたとする地元の証言もあり、廃絶された既存道路の砂利という判断であった。

ところが、表土剥ぎ３日目、道路跡の砕石中に珠洲等の遺物がかなり多く含まれていたこと、ＳＤ－１などの側溝発掘に際し、中世の遺物が出土するという事実が判明することに伴い、中世に造成され、近年まで農道として機能していた道跡という認識に至ったものである。道路跡は、東西を指向する道路１と、調査区東端で道路１と直交する道路２があり、規模の大きい側溝を備えた前者を「幹線道路」とし、格上の道路と認定するに至っている。以下、各説する。

ａ　幹線道路１（ＳＤ－１・ＳＤ－２・ＳＲ-1104）［図版４～７・22］

道路側溝は、北側をＳＤ－１、南側をＳＤ－２として調査し、路面については特に遺構名を付していないが、Ｂ地区で用いたＳＲ-1104を代用したい。

検出状況　道路の平面形態とは、左右両側に側溝を設け、側溝に挟まれた中央部分が路面となる。ルートとしては、４～７グリッドまではほぼ直線で、Ｎ－77.5°－Ｗを指向するが、８グリッド内ではＮ－90.0°－Ｗ､つまり真の東西方位をとる。ただし､この方位の転換は､Ｂ地区の屋敷地を避けるためのもので、計画されている道路法線はあくまでも前者の方位というのがこれまでの解釈である。

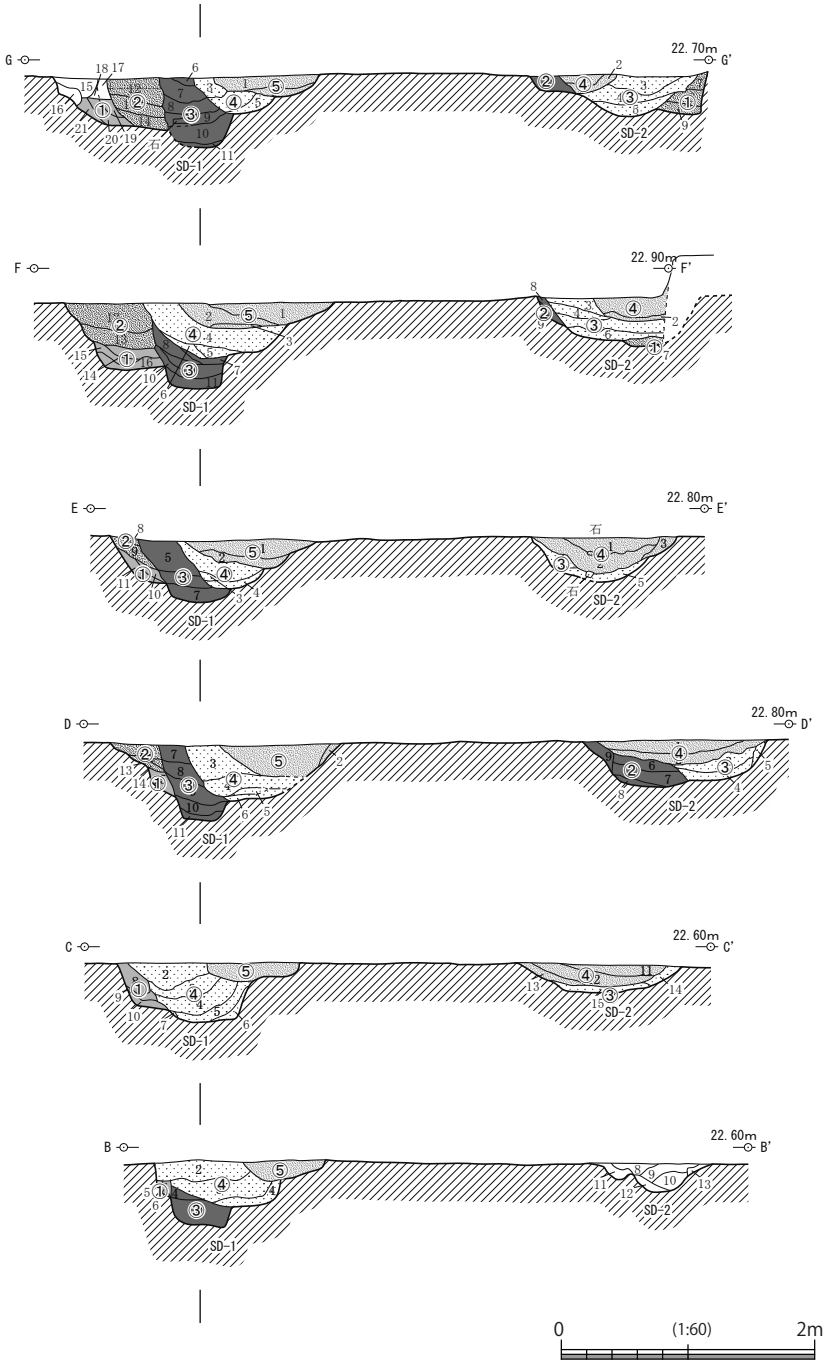
平面図に記録されている幹線道路：道路１の形状は、側溝の改修等により変遷を経た最終段階の結果であり、中世において機能していた姿とは異なっている。特に、側溝は幾度かの改修が施されるが、その都度路面を侵食していたことが明らかであり、路面幅が狭くなる。また、道路遺構の検出面が、表土を除去しており、本来的には路面はやや狭く、側溝はやや広くなっていたことになる。このような制約を考慮した上で、路面幅等の計測値を示すこととしたい。

まず、側溝を含む全体の幅は、Ａ地区中央付近（Ｄ断面）において、検出面の標高が10㎝程度高いこともあって、最大幅となる5.0mを測りやや膨らむが、平均的には幅約4.5mとなる。路面幅は、前述したとおり側溝改修の都度狭められているということからすれば、側溝を含む幅が当初設計の道路幅に最も近いものと考えられる。

路面幅の現状としては、西側がやや広く最大1.95m、東側で狭くなり最小幅1.05mを測るが、概ね1.6 ～ 1.8mとなる。この数値が、道路１の最終形態としての路面幅である。また、ＳＤ－１の幅は西側で狭く1.57m、東側でやや広く2.1mを測る。ＳＤ－２は、ＳＤ－１と同様西側で狭く1.08m、調査区東端では1.8mほどと広くなるとともに、路面を侵食するように歪みを生じさせている。この東側は、未調査区となった幅約8.5mの市道部分を隔てたＢ地区では館の堀に改修されるとともに、北側へ膨らむように道路そのものが迂回しており、Ａ地区東端の歪みの要因であった可能性が高い。

改修状況　土層断面については、西側からＡ～Ｇまでの７断面を観察・記録した。Ａ断面については、撹乱に覆われ状況が判然としないが、他の６断面では改修回数などを確認することができた。まず、両側溝の改修状況については、特にＳＤ－１の回数が多く、ＳＤ－２ではやや少なくなっていることが確認できる。両者の相違とは、側溝に隣接する土地の意味、「場」の重要性との関わりと正比例し、北側が特に重視されさていたことの表れと考えられる。また、ＳＤ－１の改修回数が多く、ＳＤ－２が少ないという実態には、改修の必要性や、改修する意図の相違、特にＳＤ－１は、改修するに従い道路面を侵食しているとおり、敷地拡大という意図が働いた結果と言えるであろうか。したがって、遺構空白帯を伴う北側とは、道路南側と異なる「場」が設定されていた可能性が高い。

ＳＤ－１側溝の各断面を観察すると、Ｄ～Ｇ断面では、前後５回の改修があったことが判明する。１～２段階は、造成当初の設計が反映されたもので、道路幅などを知る手掛かりとなる。断面形は半円状を呈し、２段階目はやや浅くなる点は、手抜きの様子が窺える。３段階目は、断面形が規格的に整った台形状を呈し、深度が深くなることから、最も丁寧な計画的改修であったことが窺える。ただし、



第７図　馬場Ａ地区幹線道路１改修模式図

道路面内へ食い込んでおり、道路面への浸食がなされたことが明白である。４～５段階では、さらに内側へと道路面の浸食が進む。断面の形状は半円形となること、５段階目は浅い窪み状で形骸化する。

各段階における推定可能な規模は、１段階：幅約90㎝、深度約40～50㎝、２段階：幅約90～100㎝、深度約40㎝、３段階：幅約65㎝、深度約65㎝、４段階：幅約70～115㎝、深度約40㎝、第５段階：幅約80～120㎝、深度約20㎝となる。

同様に、ＳＤ－２においても複数回の改修を確認できるが、Ｇ・Ｆ断面で４回、Ｄ断面で３回、Ｅ・Ｃ断面では２回分と少なくなる。このような差異とは、７グリッド中央付近を境に、東側では道路内に食い込むことにより数が多く残されることになり、西側では同じ位置で改修がなされていた結果と言える。また、同様に、７グリッド中央より東側の方が丁寧に改修されていることが窺われるが、東側と西側では「場」の在り方に差異があったことを示唆するものと考えられる。

ＳＤ－２における各段階の推定可能な規模は、１段階：幅約80㎝、深さ約30～40㎝、２段階：幅約100㎝、深度約35㎝、３段階：幅約90～115㎝、４段階：幅約115～130㎝、深度約20㎝である。

ところで、各側溝の底面標高について、最も規格的な側溝となる３段階目を参考にみると、ＳＤ－１では、Ｅ断面の22.07ｍを頂点に、Ｂ断面では10㎝低く標高21.97ｍを測り、西側へ緩やかに傾斜する。しかし、東側をみると22.0ｍ前後で、Ｂ地区でもＡ断面で22.14ｍとやや標高が高くなり、さらに東側では22.0ｍ前後となることなどから、底面の標高は22.00ｍ前後とほぼ水平に計画、掘削されていたことが窺える。

道路面（幅）の復元　道路面幅の復元については、ＳＤ－１とＳＤ－２では改修回数が異なること、また断面に残されなかった改修痕跡も想定されるため、両者の同時性について正確に確定することは難しい。ただし、ＳＤ－１に顕著なとおり新しくなるにつれ道路内へ食い込むことなどを参考に推測したい。

まず、最終段階となるＳＤ－１の５段階と４段階は、ＳＤ－２の４段階と３段階とそれぞれ対応することはほぼ妥当と考える。また、ＳＤ－１の３段階とＳＤ－２の２段階が対応する可能性もあるが、ＳＤ－２の改修痕跡が少ないこともあって、それ以上の対比は難しいと考えている。

最終段階の道幅をみると、遺構確認面標高がやや高いＤ断面で約2.0ｍ、西端のＢ断面では2.25ｍを測るが、概ね1.7ｍ、削平を考慮すれば、1.5ｍほどの道幅が想定される。これに対し、当初段階の道幅については、路肩が検出されていないことからやや限界があるが、ＳＤ－２の移動がほとんどないと仮定した場合で、2.7ｍほどと想定される。したがって、路面北側が側溝改修に伴って幅１ｍほど狭くなったものと考えられる。なお、路面2.7ｍは、１間＝1.8ｍ換算と仮定した場合、1.5間となるが、幹線道路という認識からすれば、幅広であったとは言い難い。

遺物と年代観　幹線道路１に係る出土遺物は、主にＳＤ－１とＳＤ－２とした側溝から出土したものである。年代観をある程度推定可能な土器・陶磁器類は、比較的多く出土しているが、全て散発的な出土状況を呈し、一括性が高い事例はない。そもそも側溝とは、開口して機能するものであり、流れ込みなど混入の機会が多く、かつ前後５回ほどの改修という事実もあり、各改修段階の時期比定は確定しにくい。

土器類等の種別は、中世土師器皿類と珠洲を主体に、青磁や瀬戸・美濃などが若干認められ、その他に須恵器や土師器有台椀などがあり［図版45～47］、時期幅が存在する。これらの中で、須恵器・土師器については保留するとして、主体を占める珠洲と刈羽三島型中世土師器では14世紀代が大半を占めており、幹線道路１の主要時期とすることができよう。また、珠洲にはⅡ期やⅢ期に同定される個体の存在から、13世紀代前半および後半代に開通していた可能性は今のところ否定できない。なお、瀬戸・美濃が若干量伴うことから、15世紀代にも引き継がれていたことは明らかである。

b　道路２（ＳＤ-200・ＳＤ-205）［図版６～７・23］

道路２は、Ａ地区東端となるＤ－８グリッドにおいて、幹線道路１と直交する形で北へ延びるように検出されたが、南側は調査区外となるため、十字路となっていたかについては不明である。当該道路も両側に側溝を備え、遺構名としては西側がＳＤ-200、東側をＳＤ-205とした。

側溝を含めた全幅は4.45m、路面幅2.7mを測る。西側溝のＳＤ-200は、幅1.5mで、深度は25cmほどと浅く、ＳＤ－１と接続する。ただし、土坑やピットとの重複が著しく、本来的な断面が図化されておらず、改修等の詳細は不詳とせざるを得ないが、Ａ断面をみる限り２回程度の改修が想定される。ＳＤ-205は、北端の幅が40cm、南端では20cmと細く、深度15cmで、遺構確認面での検出状況ではＳＤ－１とは接続していないが、本来的には接続していたと考えられる。

なお、前述したごとく、道路２の路面幅は2.7mで復元され、幹線道路１の復元された路面幅と同じ1.5間幅であり、両者は同じ規格で造成された可能性が高い。両者の相違は、側溝の改修回数であり、その差異が重要度と正比例していたと考えられる。

出土遺物については、13世紀後半代と目される中世土師器小片が出土しており、時期不詳としつつも幹線道路１と同時期に機能していた可能性が高い。特に、道路２が指向する方位は、Ｎ－5.5°－Ｅで、幹線道路１と直交する場合の角度差では、約１°の誤差しかなく、両道路の計画性と同時性が窺われる。

３）溝　類

側溝以外の溝としては、Ａ地区西端に検出された南北溝ＳＤ－４のほか、調査区を東西に斜交し幹線道路１の側溝に切られるＳＤ－３の２条がある。ＳＤ－４については、幹線道路１の北辺に沿う遺構空白帯の西端を区切る境界的な意図を想定する。ＳＤ－３については、幹線道路１敷設以前の遺構である。

a　ＳＤ－３溝［図版４～５・23］

ＳＤ－３は、４グリッド中程の調査区南壁から８グリッド北東壁まで、調査区を斜位に縦断する。８グリッドにおいて指向する方位がＮ－80.0°－Ｅと緩やかに南へカーブするが、大半はＮ－77.5°－Ｅを指向する直線となる。Ｂ地区への延長は、調査区外へと延びるためか、検出されていない。

調査区内にて検出された延長は約35m、４～６グリッドまでは幅約75cmで平均するが、７グリッドに入り緩やかにカーブする付近から幅約100cmと広くなり、調査区東端では140cmまで拡幅されていた。

底面の形状は、やや扁平な半円状を呈する。深度は、遺構確認面から約60cmで推移するが、西端から５グリッド中央付近では50cmとやや浅くなる。また、底面の絶対標高をみると、鯖石川とは反対となる東側がやや深くなる。当該溝の機能や用途は不詳とせざるを得ないが、東側が深くなるということから排水だけが目的ではないことを示唆している。

b　ＳＤ－４溝［図版４・23］

位置は、３グリッドと４グリッドの境で検出された南北溝で、その西側は河岸段丘崖となる。延長は、6.2mで、南端は段丘崖の段切りで途切れ、北端は調査区外へと延びる。全体的な幅は、北側で1.55m、南端ではやや広くなって2.1mを測る。しかし、底面の形状および土層断面を観察すると、幅約70cmほどの細い溝に対し、その西側に接するように掘り返しがなされている。底面と溝幅が安定せず、指向する方位も

Ｎ－27.0°－Ｅと、幹線道路１とは正確に直交せず、東に傾いていたことから、機能や用途の特定については、やや不明確さは否めない。

４）建物跡と柵列と柱穴・ピット類

Ａ地区で検出された遺構数は、撹乱や凹み、欠番を除くと139件、その内訳として柱穴・ピット類が110基である。これらの内、建物跡や柵列として認定されたピット類36基を柱穴として表記した。

Ａ地区で認定することができた建物跡は５棟、柵列は４列となった。建物跡の配置は、幹線道路１と道路２の区画に沿うＳＡ-10柵列の範囲内にほぼ収まる。また、他の柵列については、遺構空白帯の間仕切りと考えられる位置に２列、建物に隣接しつつ方位が一致しない１列が把握されている。

ａ　建 物 跡［図版５～６・23・24］

建物跡５棟については、全て調査区北辺に偏って分布し、調査区外へ広がることから、規模などの全体像が明らかな事例はなく、柱間による規模はすべて想定として把握している。また、建物の規模（長軸：桁行×短軸：梁間）と長軸（桁行）の指向する方位については、各柱穴の属性とともに附表２に記載しており、参照されたい。なお、Ａ地区の建物跡が指向する方位は、他の地区に比べて一定せず、ばらつきが多いという特徴が看取される（第43図）。以下、各建物跡の各説については、附表の補足等を記述したい。

ＳＢ－１建物跡　柱穴４基まで確認できるが、北側が調査区外となり、規模は不明。梁間の１間幅が3.7ｍと広い。桁行は２間を想定している。柱穴の直径は概ね30㎝前後、深度は32～40㎝と比較的安定している。重複関係は、建物２棟と柵列１件があり、ＳＢ－２については主軸方位も近接することから、両者の新旧が不明としつつも、継続的な建替えの関係が想定できる。また、ＳＢ－３とは、主軸方位が大きく異なるとともに、幹線道路１および支線となる道路２に沿うＳＡ-10柵列との重複も、柵外からはみ出すこと、および主軸方位も一致していない。このことから、都市計画的な規制から逸脱しているとして、土地利用の規制が弛緩した状況、あるいは時期・段階を想定することも可能である。しかし、井戸２基との重複、さらにＳＤ－３の方位と整合性が窺われることから、道路造成以前の可能性も否定できない。

ＳＢ－２建物跡　柱穴３基がくの字状に確認されたもので、大半が北側の調査区外となる。梁間１間幅が3.1ｍ、桁行は２間程度と見積もっている。柱穴の直径は、30㎝前後から長径が39㎝となるものなど、やや不揃いとなる。深度は､23～31㎝とやや浅い。前述のごとくＳＢ－１建物跡より一回り小さいながら、主軸方位が一致することから、両者は建替えの関係と推測される。

ＳＢ－３建物跡　柱穴３基が直線に並ぶ桁行２間で把握された。片側の桁行は調査区外にあって不明となる。柱穴の直径は30㎝前後となるがやや不揃い。深度も16～48㎝と一定しない。建物跡３棟と重複し、東側のＳＢ－１・２の２棟に、西側はＳＢ－４とわずかに重なっている。なお、西1.5ｍには、主軸方位がほぼ一致するＳＢ－５があり、同時併存の可能性が高い。ＳＡ-10柵列と指向する方位が近似しており、土地区画の規制を受けていたものと考えられる。

ＳＢ－４建物跡　柱穴５基がコの字状に配置し、南側の梁行２間を確認するも桁行は１間までで、大半は北側調査区外となっている。柱穴の直径では、40㎝大が３基とやや大型となるが、30㎝以下が２基とやや不揃いとなる。また深度もすべて30㎝以下とやや浅い。主軸方位は、道路１とＳＡ-10に近いが、やや西に傾いているとともに、ＳＡ-10柵列とほぼ接する状況から、同時併存の可能性は低い。遺物としては、ＳＫｐ-111から珠洲甕破片（80）が出土している。

ＳＢ－５建物跡　建物跡など遺構密集域の西端部に位置する。柱穴４基がＬ字状に配置し、北辺が未確認となっている。柱穴の直径は30cm前後が３基、残る１基は20cmと小型であるが、深度は50cm前後と深い。

ｂ　柵　列［図版５～６・24］

柵列は、都合４基を抽出した。ＳＡ-10は道路１・２により仕切られる土地区画とほぼ一致し、道路沿いの遺構空白帯を隔てた屋敷地を区画する。また、空白域には、間仕切りと考えられる柵列２基がある。

ＳＡ－６柵列　遺構空白域の北辺に配置する柱穴３基の柵列である。柱穴の規模は、直径が20cm前後、深度も15cm以下と浅い。指向する方位は、５棟の建物跡や柵列の何れとも一致せず、また道路１などとも不整合であり、性格等は不明である。

ＳＡ－７柵列・ＳＡ－８柵列　両柵列は、道路２と並行し、かつ道路１と直交することから、道路１北辺の遺構空白帯を間仕切る性格のものと判断した。ＳＡ－７は柱穴２基で、現状では道路１側溝まで届いていない。しかし、ＳＡ－８は３基の柱穴で、側溝の縁にある柱穴（ＳＫｐ-190）を含めるとすれば、道路に直接面することになる。柱穴の直径は、深度も共に20cm前後が大半で、その規模からすれば強固な構造物とはなり得ず、仮設的な意味合いを強く感じさせる。両者の間隔は、3.5m（≒２間）である。

なお、遺構空白帯を間仕切る柵列は、東に偏る当該２列だけで、西側一帯とＢ地区でも確認されていないことから、特別な意味合いがあったのかもしれない。

ＳＡ-10柵列　幹線道路１と道路２により方形に区画される空間を、方形に巡るように配置するもので、Ｌ字状に確認されているが、街区の基本となる道路との関係はかなり強いことが窺われる。特に、道路１との間隔が5.5m（≒３間）、道路２では約3.7m（≒２間）となり、計画的な意図を強く感じさせる。柱穴の規模は、直径が25cm前後、深度については７cmと浅いものも含まれるが、多くは20cm前後となる。その中でも、東側に位置し道路２に面して隣接するＳＫｐ-161（深度55cm）とＳＫｐ-234（深度65cm）の２基は極端に深く、門柱など強固な構造物を意図していた可能性が指摘できる。

５）井　戸［図版５～７・24・25・附表３］

Ａ地区で確認された井戸は、合計６基であり、平面形や深度等の規模、また出土遺物や所属時期については、附表３にまとめた。本項では、主な概要を述べておきたい。

まず、検出された６基は、①ＳＥ-117とＳＥ-123、②ＳＥ-145とＳＥ-146、③ＳＥ-208とＳＥ-243というように、３組が２基一対となって検出されている。これらの内、①と②については、一方を廃絶したのち、新たに掘削される連続的な新旧関係にあるものと推測できる。これに対し、③については、重複・切合い関係にあり、埋め戻したのち連続して掘り直すことは困難であったと考えられる。特に、井戸の下層部分は軟弱なヘドロであり、発掘作業中において半裁しても、上層の重さに耐え兼ね、崩落するのが常であることからも想像がつく。したがって、両者の間には、それなりの時間差を想定せざるを得ないところではあるが、本件の場合はＳＥ-243廃絶後、ＳＥ-206がより深く掘り直された可能性の方が高いと判断したい。

平面形は、円形に近い楕円形が主体で、直径は１ｍ前後、深度はＳＥ-145の273cmを最深とし、ＳＥ-243を除き、全て２ｍを超える。遺物としては、珠洲破片が若干出土しているが、ＳＥ-146では刈羽三島型中世土師器が２点ともなっていた。

なお、井戸の検出位置としては、①と②が道路１北辺の遺構空白帯を避けた居住域にあって、建物跡に

付随する位置関係にあることが歴然であり、本来的な意味と言える。ところが、③としたＳＥ-206とＳＥ-243は、幹線道路１の路面から検出されている。道路１は、前述したとおり、道路造成以降道路のまま現代においても農道として機能しており、屋敷など居住域には成り得ず、井戸が掘削されることはまず考えられない。結論としては、幹線道路新設に際し、法線内の屋敷地は取り壊され、道路に造成されたとする解釈が妥当であろう。

６）土　坑［図版５～７・25・附表４］

Ａ地区の遺構のうち、井戸や柱穴などのピット類から、土坑として認定した遺構は、合計13基であり、平面形や規模などについては、附表４に記載した。平面形は楕円形が多く、長径が１ｍ前後、短径でも60㎝前後程度の類例が多くなっている。深度については、50㎝前後と深いものが２例あるが、大半は20㎝前後と浅い事例が占めている。土器類等の遺物が出土する事例は少なく、時期の特定も困難としており、性格も不詳なもので占められている。唯一墓壙と判断できた事例は１例だけであった。

ＳＫ-50土坑墓［図版５～６・25・48］　平面形は隅丸長方形で、長辺86㎝、短辺58㎝、深度33㎝という法量から、規模的には小型となる。焼骨は粉状でも確認されておらず、土葬とした場合、大人は無理であり、小児の可能性が高い。覆土下層となる５層は、地山土主体の暗黄褐色土であり、掘削土を埋葬後に埋め戻していたことが窺われる。ロクロ成形底部糸切の中世土師器皿（84）と小皿（85）が完形品として出土している。皿は、５層直上にて、裏返しの状態で出土していた（図版99-ｈ）。時期は、第Ⅴ期15世紀前半である。

７）遺構空白帯［図版４～７］

Ａ地区の幹線道路１の北辺沿いには、幅5.5ｍ（≒３間幅）で遺構が分布しない空間が存在する。その延長は、４グリッドのＳＤ-４溝を西の限りとし、東側はＢ地区12グリッドのＳＤ-1115・1116溝を東の限りに設定すれば、およそ85ｍ（≒47間）に及ぶ。その間、道路２とＢ地区ＳＤ-1100溝が横断する。延長の47間という距離、およびその数値に関わる意味については不明とせざるを得ないが、３間幅で一定する遺構空白帯の存在は確実で、かつ計画的な意図を強く感じさせる。そして、東の限りとしたＳＤ-1115・1116溝以東は、居住域となって建物跡が密集しており、極めて対照的である。

当該遺構空白帯は、明らかに計画的な設定であり、意図的である。その用途・機能については、考古学的に検討可能な遺構がなく、明らかにし得ない。しかし、Ａ地区からＢ地区西側は、鯖石川に面すること、また幹線道路との強い関わりという意味の「道」からすれば、無縁・公界的な「場」として、市が立てられた経済的な「場」を想定できるのではないかと考えている。今後、類例などの検索、抽出などを行うなど、改めて再検証を継続することとしたい。

３　馬場Ｂ地区の遺構

１）Ｂ地区の遺構概要

Ｂ地区の範囲は、Ａ地区東端の県道を境界とし、９グリッドから18グリッド西縁まで、延長はおよそ87ｍである。Ｃ地区との境界は、東端の農道とした。また、11グリッドでは、調査区北側の畑へ至る作業道確保のため、一部未調査区を設定した。

遺構数と配置　確認された遺構は、Ａ地区から連続する遺構として幹線道路１とその側溝２条とともに、遺構空白帯が掲げられる。また、ＳＤ－２側溝を改修した館の堀も重要とすることができるが、主要遺構としては、建物跡23棟、柵列７件が復元されている。街区を区画する溝５条と性格不詳が８条、そして井戸36基、土坑35基を数えるとともに、建物跡に復元できなかった柱穴を含むピット類は505基と多数に上る。

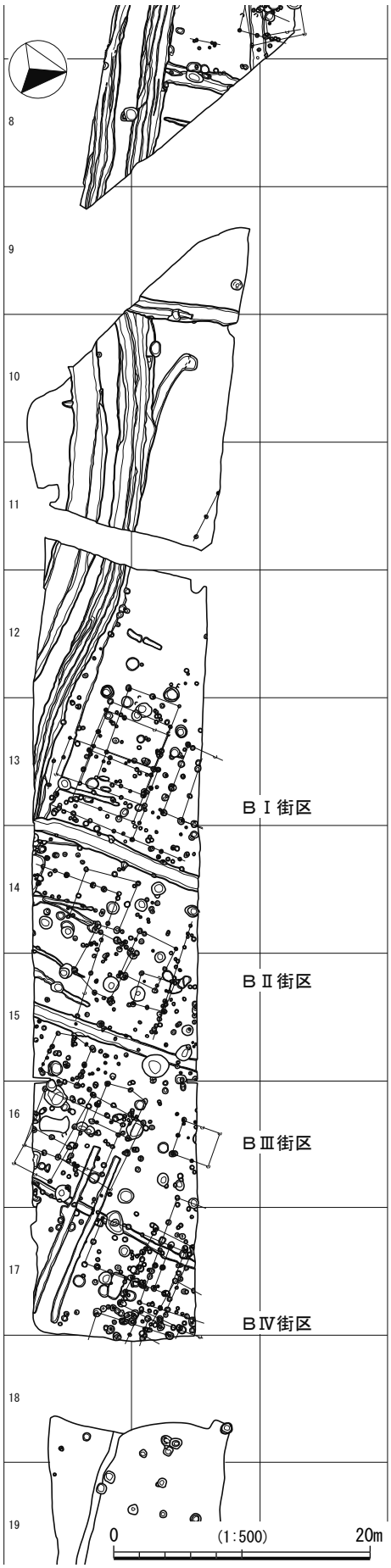
遺構配置の特徴は、12グリッドを境に、西側が幹線道路１を主体に、その北側を遺構空白帯とし、南側はＳＤ-1286堀と館の敷地の一部となる。東側については、幹線道路１が13グリッドにて南側の調査区外へと消えると、Ｂ地区東端まで建物跡や柵列、井戸・土坑が密集する街区となる。18グリッドについては、約７ｍ幅の農道を未調査区とするが、遺構面の標高はほぼ平坦であり、Ｃ地区の井戸検出状況からしても、これら街区が連続していたと考えている。

Ｂ地区西半部の遺構　幹線道路１は、Ａ地区東端からすでに兆候が窺えるとおり、直線ではなく北側へ膨らむように２条の側溝がカーブを描く。カーブの理由とは、ＳＤ－２側溝のカーブに沿って館の堀となるＳＤ-1286堀が掘り返され改修されていることから、有力者の屋敷地内を通過することを避けるため法線が変更された結果であったと理解される。そして、13グリッドに至ると元の法線に戻し、直線となるよう修正がなされているが、その間約30ｍにわたって、屋敷地北東隅の一部が存在したものと考えられる。

幹線道路１の北側は、５～７ｍの幅で遺構が全く築かれていない遺構空白帯となる。しかし、その北辺には、ＳＥ-1101井戸やＳＡ-50柵列があり、Ａ地区同様に居住域が広がっていたことは確実である。また、ＳＡ-50柵列の指向する方位は、12～13グリッドにおいてＳＤ－１側溝際に配置されていたＳＡ-27柵列と方位が一致しており、全体的な計画性の存在を示唆するものと考えている。

なお、幹線道路１とした路面について、Ａ地区の井戸２基を除くと、基本的に遺構は分布しない。この事実の解釈については、調査区が馬場地区北部であり、居住域など集落域が展開する発端が、幹線道路の開通にあり、新たに発展した区域であったことを示唆している可能性が高い。

Ｂ地区東半部の遺構　12グリッド以東、特にＳＤ-1115・1116溝を境に、建物などが密集する街区となって、遺構の在り方が



第８図　馬場Ｂ地区全体図

大きく変化する。街区は、Ｂ地区東端までおよそ50m区間にわたるが、その間に３条の溝が街区を分割し４区画とする。これら街区の便宜的な呼称については、第８図のとおりＢⅠ街区からＢⅣ街区としたい。

まず、各街区の間口幅について、区画溝幅のセンターから計測すると、ＢⅠ街区：15.7m、ＢⅡ街区：13.6m、ＢⅢ街区：12.0m～14.4m、ＢⅣ街区：（13.0m）という結果が得られる。ＢⅣ街区については、Ｃ地区との境界を意識した参考値、またＢⅢ街区については、ＳＤ-1316区画溝が他と平行していないことによる。これらを対比した場合、ＢⅠ街区の幅がやや広くなるが、遺構空白帯との境界を示すＳＤ-1115・1116溝の付近がやや遺構が少なくなっており、居住域としてはやや狭くなっていたと考えられる。

そこで、区画溝３条の検出状況を比較すると、ＢⅡ街区の両端をなすＳＤ-1218区画溝とＳＤ-1302区画溝は、やや幅広で丁寧な掘方を呈し、互いに平行していることがわかる。これに対し、ＢⅣ街区を区画するＳＤ-1316区画溝は細くやや雑な掘方で、かつ他とは平行していない。この差異は、前２者は当初土地区画に係る計画的な区割りであったことに対し、後者は後世において街区を分割したことに起因するものと推測される。その理由としては、ＢⅠ街区とＢⅡ街区、ＢⅡ街区とＢⅢ街区では、建物跡や柵列が区画溝を超えていないことに対し、ＢⅢ街区とＢⅣ街区では両街区にまたがる事例が確認できる点にある。したがって、街区の間口幅としては、ＢⅡ街区の13.6m幅が基準であり、ＢⅢ街区とＢⅣ街区は当初一つの区画として２区画分を有していたと推測されるのである。

なお、11グリッドにおいて、北側畑への作業ルートとして未調査区を設定したが、街区を区画する溝と指向する方位がほぼ一致する。この事実は、13～14世紀における土地区画が、そのまま現代においても強く規制してきたことを意味する。つまり、下南条集落における道路や宅地の区画などは、13～14世紀において施行された土地区画整理の姿そのままが、歴史的な経緯と共に名残として強く留めてきていると評価できるであろう。

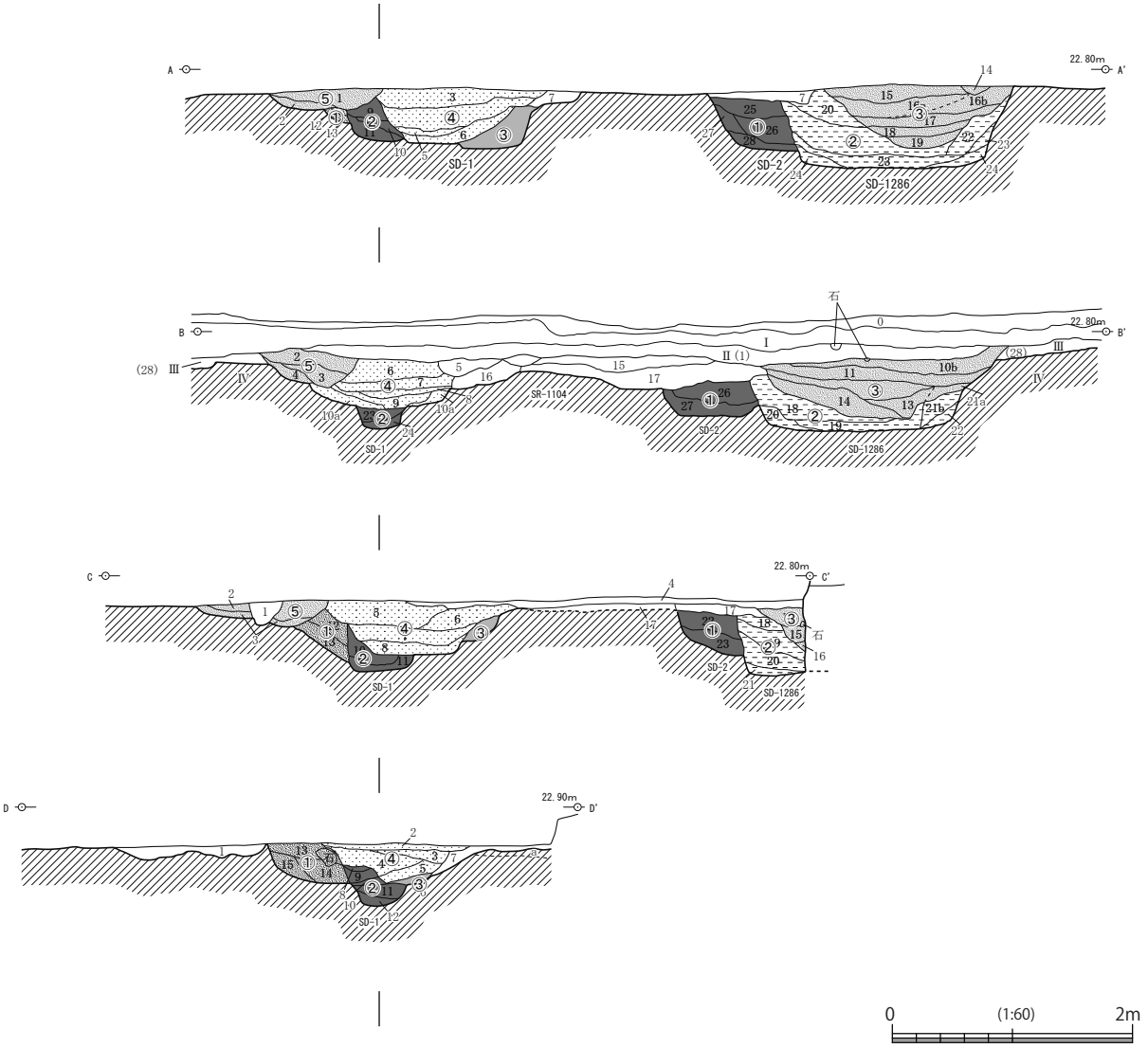
２）幹線道路と側溝・堀

道路と側溝は、Ａ地区の幹線道路１の延長であるが、北側へ膨らむような法線をとる。また両者は一体であり、側溝は路面の雨水等の処理だけではなく、道路と他を区別する境界の意味を有している。また、Ｂ地区で確認された堀とは、幹線道路法線の南側側溝（ＳＤ-２）の規模を拡張することにより、堀に改修したもので、原則として「道」の範囲・区画を尊重している。なお、道路遺構については、東西方向の幹線道路だけであり、南北に直交する道路跡は、調査区内から検出されていない。

本項での対象とは、幹線道路１（ＳＤ-１・ＳＤ-２・ＳＲ-1104）と堀（ＳＤ-1286）［図版７～９・25］となるが、互いに密接な関係にあり、一括して概観したい。

検出状況　幹線道路１の各遺構名については、Ａ地区と共通する。Ｂ地区における検出範囲としては、西端の10グリッドから13グリッドまで、延長は約40mである。検出状況の重要な特徴とは、Ａ地区での直線という在り方ではなく、緩やかにカーブし北へ約４m膨らんでいた点にある。このカーブは、13グリッドの調査区南壁に至ると、Ａ地区と同じＮ－77.5°－Ｗを指向する直線に戻り、解消されている。このことから、南の調査区外には、少なくとも10グリッドから12グリッド区間において、特別なエリアが存在していたことを示している。

道路面と側溝それぞれの完掘状況は、側溝の改修が幾度か実施されたことにより、側溝の幅は広くなり、路面幅は狭くなった。このため、完掘状況から見たＳＲ-1104路面は、中央となる11グリッドでは幅80cmほどが残存するのみとかなり狭くなるが、東西端ではやや広く、幅1.7mとなっていた。



第９図　馬場Ｂ地区幹線道路１改修模式図

ＳＤ－１側溝の幅は、10グリッドで2.8mの最大幅を測るが、11グリッド中央付近で約2.1mに、12グリッド中央で1.7mと東へ行くほど徐々に狭くなり、居住空間に接する13グリッドで直線に戻ると1.3m幅と半減以下となる。改修痕については、Ｃ断面をみる限り最大５回程度はなされている。また、ＳＤ－２側溝についても、ＳＤ-1286堀が南側を並走する形で重複し、10グリッド西半部ではすべて堀に改修されているが、側溝そのものの改修痕は確認できない。代わりに、ＳＤ-1286堀は、その役目を終えた段階で改修がなされた模様で、やや大型の掘り込みを確認することができるが、ＳＤ－１側溝にも相対する掘り込みが存在しそうである。これらの解釈等については後述する。

改修状況　ＳＤ－１側溝とＳＤ－２側溝及びＳＤ-1286堀の改修状況については､総合的に検討したい(第９図)。まず、ＳＤ－１側溝では、Ｃ断面の状況から、少なくとも５段階の改修がなされていたことがわかるが、最も深く逆台形断面の②側溝を基準として改修状況を見ていきたい。この②側溝とは、Ａ地区ＳＤ－１側溝の③段階に相当するものと考えられ、Ａ・Ｃ・Ｄの３断面にて①側溝を切っていること、Ｄ断面では②側溝が③側溝に切られ、かつ③側溝は④側溝に切られていること、⑤側溝は、Ａ断面にて①②④の各側溝を切っていることから、①から⑤までの変遷を経た５段階の改修がなされたと理解できよう。た

だし、④段階は、土層断面に切り合いの状況が看取されることから、前後２段階となる可能性を含む。また⑤側溝が、路面から最も離れた位置にあることは、Ａ地区における状況と大きく異なっている。

ＳＤ－２側溝関連をみると、①側溝が側溝として掘削された唯一の痕跡であり、②はＳＤ-1286堀の掘り方を示している。堀の断面形は、整った逆台形であり、上面幅2.0m、底面幅1.55m、深さは概ね65cmを測る。当該堀は、埋没後改めて半円状に掘り返され、これが③側溝となるが、やや規模が大きく、幅1.55～1.9m、深度50cmは、単なる側溝というより、堀という意識の下、再掘削された可能性が高く、屋敷地の存続を意味するものと考えられる。このＳＤ－２側溝関連の③については、ＳＤ－１側溝の⑤側溝と最終的に対比されるものと考えている。

道路面（幅）の復元　Ｂ地区における幹線道路１の改修状況は、堀の存在とも関わりＡ地区とは様相を異にする。まずＡ地区の検討結果では、当初計画の路面幅を2.7mと推定している。Ｂ地区ＳＤ－１側溝最古の①側溝断面を想定復元し、2.7mの路面幅を確保した場合、ＳＤ－２側溝断面内にその痕跡は残されていないことになる。ＳＤ－１の②側溝は、Ａ地区と同様に①より路面に食い込むように設定され、ＳＤ－２側溝の①と対比されると想定した場合の路面幅は約２mである。また、同様にＳＤ－１の③側溝も、ＳＤ－２側溝の①に対比せざるを得ないが、幅も1.45mとなり、Ａ地区における最終段階の路面幅に近い数値が得られることになる。また、ＳＤ－１の④側溝は、Ａ地区ＳＤ－１側溝の④段階に対比できるものと考えている。

ところで、ＳＤ-1286堀の改修である③の大型溝については、ＳＤ－１側溝の⑤と対比されると考えられるが、その場合の路面幅は3.5m（≒２間）ほどが想定される。このように広い規格の道路は、Ａ地区では確認できていない。また、Ａ地区では、現代まで農道として機能していたことは確実であるが、Ｂ地区ではすべて畑地とされ、堀跡や道路跡といった痕跡はすべて留めていなかった。このことから、Ａ地区とは異なる土地利用の変遷がＢ地区において生じていたことになるが、その詳細は不明とせざるを得ない。

堀掘削と道路側溝改修　堀の掘削と道路側溝の改修段階との前後関係については、畑への作業道として掘り残すに至ったＢ断面から把握したい。

まず、ＳＤ－１⑤側溝：ＳＤ－２③側溝は、ＳＤ-1286堀の埋没後に掘削された最終段階の道路跡とすることができ、その場合の道路幅は3.5mと広くなる。しかし、ＳＤ－１⑤側溝は、その直前となる④側溝の再掘削として改修された可能性が高い。

ＳＤ－１④側溝は、ＳＤ-1286堀の埋没後、道路の補修として再掘削したことが、15層～17層の存在から確認できる。この３層とは、ＳＤ-1286堀上層を覆う存在であり、極めて固くしまった状態からＳＲ-1104路面の路盤層と認識される。その範囲は、ＳＤ－１④側溝とＳＤ－２③側溝間に収まることから、路面を固くする道路改良工事が実施された段階の道路側溝の組合せは、ＳＤ－１④側溝とＳＤ－２③側溝であったことになる。その幅はおよそ2.2mとなるが、ＳＤ-1286堀が一旦機能を喪失した段階において、道路として再整備されたことを意味している。

この解釈を前提とすれば、ＳＤ-1286堀と対をなす側溝とは、ＳＤ－１③側溝の可能性が高く、その場合の路面幅をＡ断面とＣ断面から計測すると、約２mという値が得られることになる。そして、ＳＤ－１②・①側溝とＳＤ－２①側溝が、堀掘削以前の幹線道路１の側溝であったことになる。

遺物と年代観　Ｂ地区における幹線道路１関連の遺物としては、ＳＤ－１側溝（111～152）、ＳＤ－２側溝（153～163）、ＳＤ-1286堀（245～279）、ＳＲ-1104路面（164～213）といったように、比較的多く出土している。しかし、側溝や堀はそもそも開口して機能する遺構であり、また路盤を形成する土砂も

盛土であることから、遺物は混在することになる。提示した実測図等をみても、13世紀代から14世紀代の土器類が混在しており、改修段階個々の時期比定は、困難とせざるを得ない。

3）溝　類

幹線道路関係で記述以外の溝類は、街区を区画する５条のほか、性格不詳な溝として８条を数えることができる。ただし、後者のうち、16～17グリッドで平行するＳＤ-1332・1333の２条については、撹乱と判断したものであり、割愛する。本項では、区画溝と性格不詳な溝に区分して概要を述べたい。

a　区画溝類［図版 26］

街区の区画溝とした５条とは、ＳＤ-1100（９～10グリッド）、ＳＤ-1115・1116（12グリッド）、ＳＤ-1218（14グリッド）、ＳＤ-1302（15グリッド）、ＳＤ-1316（16～17グリッド）である。これら５条の間隔など全体的な概要については、すでにＢ地区東半部の遺構を概観に際し既に述べたところであり、本項では個別に各説したい。

ＳＤ-1100区画溝　Ｂ地区西端の三角地で検出され、南端ではＳＤ-１側溝と重複する。ただし、両者の前後関係等については不明であるが、雨水処理を考慮した場合、そして区画溝という性格からすれば、同時併存していたものと考えられる。検出状況としては、延長8.7m、幅約1.4m、深度は45cmである。方位的にはＮ－2.3°－Ｅを指向し、Ｂ地区内では、東への傾きが小さい。しかし、Ａ地区幹線道路１直線部とはほぼ直交するとともに、道路２とほぼ平行することなどから、Ａ地区との関連が強く、土地区画整理においては当初計画に副っていたものと考えられる。

底面をみると南側が２段となっており、掘り返された痕跡と推測される。土層Ａ断面では、重複するＳＫｐ-1374ピットを切り、上面幅75cmの溝となるが、改修等の状況は不詳である。遺構確認面は、調査区北壁が高く、ＳＤ-１側溝との重複箇所では26cmほど低くなるが、底面標高は22.17mでほぼ平坦であった。遺物としては、珠洲２点（214・215）が出土している。

ＳＤ-1115・1116区画溝　浅く不整形な溝状の落ち込みが対となって区画する意図を有するものと解釈した。両者合わせた延長は３m、Ｎ－20.05°－Ｅを指向する。ＳＤ-1115は幅が50cm、深度14cm、ＳＤ-1116は幅がやや狭く40cm、深度17cmを測る。

ＳＤ-1218区画溝　検出された延長は14.0m、幅は概ね1.3m、深度45cmを測る。断面形は逆台形で掘削された後、半円状に改修された痕跡（１～６層）を残している。Ｎ－16.0°－Ｅを指向する。底面標高は、北壁側が22.26m、南側で22.01mと、ＳＤ-１側溝側が25cmほど低くなり、側溝への排水という意図が感じられる。遺物としては、刈羽三島型中世土師器（220・221）と珠洲擂鉢（222～226）など、青磁碗小破片１点（227）も出土している。

ＳＤ-1302区画溝　検出された延長は13.6m、幅は概ね１m、深度は20～37cmで、北側が浅くなる。断面形は、逆台形を原則とするも、底面はやや丸みを帯びる。土層断面の観察では、やや半円状の改修痕（１～３層）が確認される。遺物としては、珠洲の鉢と甕破片が出土している（280～286）。

ＳＤ-1316区画溝　検出された延長は14.6m、幅は50～65cmの範囲で不規則さが否めない。断面形は浅い半円形で深度も20cmと浅い。底面標高は概ね22.35mで平坦となっている。当該区画溝については、すでに指摘したとおり、溝内に建物の柱穴が穿たれていたり、溝を超えた建物が存在するなど他遺構との重複が著しく、当初計画の広い街区を、改めて分割するため設定された新たな区画溝であることが理解され

る。指向する方位は、Ｎ－23.5°－Ｅであり、ＳＤ-1218やＳＤ-1302とした区画溝より、東に大きく傾いていた。

ｂ　性格不詳溝類

側溝や堀、区画溝以外の溝類とは、大きく２種に区分される。一つは、Ｂ地区の街区に絡む５条の不整形な溝類と、ＳＤ－１側溝から派生したように伸びるもので、前者をａ種、後者をｂ種と便宜的に呼称し概観したい。

まず、ａ種は、ＢＩ街区の①ＳＤ-1263（13グリッド）と、ＢⅡ街区の②ＳＤ-1359ａ・ｂの２条（14グリッド）、同じく③ＳＤ-1619・1620の２条（15グリッド）、併せて５条である。何れも不整形で直線とはならず、幅も一定しないなど規格性に乏しく、深度も浅い。共通点としては、街区を区画する溝に概ね平行するものであることは認識できる。また、①は１条であるが、②と③は２条で、おそらく性格も同じでかつ改修的な意味をもって対をなす可能性が高い。③については、井戸と絡むが、①と②はそのような傾向はない。①のＳＤ-1263は雨落ち溝の可能性を否定できないが、②と③は、並行する位置に建物跡がなく、構築意図としては異なるものと考えられる。このような溝類については、実はＢ地区特有な存在で、Ｅ地区において類似する可能性のある溝１条以外は、確認できていない。

ｂ種については、ＳＤ-1103溝（10グリッド）１条で、ＳＤ－１側溝から北側へ反れるように検出される。指向する方位をみると、11グリッド北辺に検出されているＳＡ-50柵列と略平行関係とみることも可能であり、遺構空白帯との関連性は指摘できるが、性格などについては明確でない。

４）建物跡と柵列と柱穴・ピット類

Ｂ地区で検出された遺構数は、撹乱や凹みなどを除くと809基に及び、調査全地区において最大数となっている。これらの内、柱穴・ピット類は720基に上るが、建物跡や柱穴として復元できた215基を除けば、505基がピットということになる。柱穴215基で復元された建物跡は22棟、柵列は７列となった。

建物跡の配置は、遺構空白帯の東端となる12グリッド中程以東からＢ地区東端まで密集して検出されている。柵列は、これら建物跡や街区の区分として建物と混在するが、11グリッド北辺にも柵列１列が検出されており、Ａ地区同様に遺構空白帯の北側に建物を主とする居住域が存在することを示している。

遺構各説にあたっては、Ｂ地区の街区が区画溝によって区分されていることから、各街区における建物跡と柵列を一括して述べていくこととしたい。なお、遺構空白帯北辺については、Ｂ０街区とする。

ａ　Ｂ０街区の柵列［図版８・32］

Ｂ０街区は、Ｂ地区西端の９グリッドからＳＤ-1115・1116によって区画される12グリッドまでの間とする。確認された柵列はＳＡ-50の１列だけであるが、その北側には、D-12⑬グリッド検出のＳＫｐ-1117ピット（柱穴）の存在が示すように、柵列を境として建物域が広がっていたと想定する。

ＳＡ-50柵列　３基の柱穴で構成されるが、東西左右とも未調査区となり、全体像は不明である。東側には１間程度延長の可能性があり、西側についてはもう少し延びていたことを否定できない。ＢＩ街区のＳＡ-27と指向する方位が近似しており、関連性があるものと推測する。このことは、ＳＤ-1100区画溝までは、Ａ地区から連続する区画とするが、以東については、幹線道路のカーブによって街区の区画が歪められた結果と考えられ、その場合は近似した方位をとるＳＤ-1103溝も関わる可能性が生じる。

b　ＢＩ街区の建物跡と柵列［図版９・26・27・30・31］

ＢＩ街区では、建物跡６棟と柵列３列が復元されている。これらの配置構成をみると、ＳＤ－１道路側溝の北縁から９ｍ（≒５間）のところで、建物の配置が跨ることなく南北で分かれ、北側２棟（ＳＢ-25・26)、南側４棟（ＳＢ-21 ～ 24）は、それぞれすべてが重複して建てられていた。このことから、北側と南側は、各棟それぞれ単独で建てられていたこと、また両者で建物が併存していたこと、そして個々の組合せは特定できないが、南側で４回の建て替えがなされていたことなどがわかる。柵列は、建物跡と重複することはなく、ＢⅡ街区との境界と幹線道路側に配置される。ＳＡ-29柵列は、ＳＤ-1218区画溝に沿い、かつ建物跡群を南北に分割する位置にて枝分かれする。指向する方位は、建物跡と同じである。これらに対し、幹線道路際に位置するＳＡ-27・28柵列は、道路のカーブに沿う方位を指向していた。

なお、各建物跡及び柵列の柱穴について、重複関係が明らかにできた事例がなく、前後関係など変遷は明らかにし得なかった。各建物跡等の規模や方位、各柱穴の規模等については、附表２を参照願うとし、各説については、補足的事項を記述したい。

ＳＢ-21建物跡　東西方向に長軸をとる桁行４間（7.4m）×梁間２間（4.1m）の規模で、東側は１間幅の間仕切りを設ける。面積は、30.34㎡とやや大型となる。柱穴の規模は、直径が20㎝前後から50㎝までとややばらつきが大きい。深度についても、40㎝（1128）や51㎝（1182ａ）と深いものもあるが、大半が11 ～ 27㎝と浅くなっている。柱穴の配置をみると、北辺については、ＳＢ-22・23建物跡と直線で重なるが、道路側については４ｍとやや距離を置く。

ＳＢ-22建物跡　東西に長軸をとり、桁行３間（8.2m）×梁間２間（5.1m）であるが、柱間の間隔が大きく、面積41.82㎡はＢＩ街区最大の建物跡である。柱穴の直径は、20 ～ 45㎝とばらつくが、40㎝台が多く、やや大型。深度は、概ね30㎝前後となっている。道路とは、約３ｍの距離を置く。

ＳＢ-23建物跡　長軸を南北とし、桁行３間（5.2m）×梁間２間（3.3m）の規模で、北辺と南辺がＳＢ-22建物跡と重なる。面積17.16㎡は当街区では最小の規模である。柱穴は直径が30㎝前後、深度も30㎝前後と一定する。

ＳＢ-24建物跡　長軸を南北にとり、３間×２間の建物跡。長辺は7.3mと細長い。北辺はやや北にはみ出し、道路側も側溝端から１ｍと近い。他の３棟より規制が緩んだ結果とも考えられ、時期的に新しくなる可能性がある。柱穴の直径は30㎝前後、深度も40㎝前後のものが多くなっている。

ＳＢ-25建物跡　北側が調査区外へ広がるため、全貌は明らかにし得ない。南辺の桁行３間（7.3m)、梁間２間（3.0m）を想定すれば、面積は21.90㎡となる。柱穴の直径は、１ｍを超える1174については、２基重複の結果であるが、他も50㎝前後と大型となっている。深度も、30㎝越から57㎝と深い。南側建物跡群とは、約1.5m前後（≒１間）の間隔があり、規則性が窺われる。

ＳＢ-26建物跡　南辺の柱穴３基が検出されているが、北側はすべて調査区外となり、全貌は窺えない。ＳＢ-25建物跡と同規模と想定される。柱穴の規模も、40 ～ 50㎝前後と大型となるが、深度は20㎝前後と浅くなる。

ＳＡ-27柵列・ＳＡ-28柵列　ＳＡ-27柵列は柱穴４基の３間、ＳＡ-28柵列は２基１間で幹線道路に沿って設置されている。両者の間は、約３ｍの間隔をあけているが、道路側への出入口と想定され、両柵列は一連のものと判断した。柱穴の規模は、直径及び深度も30㎝前後が多くなっている。

ＳＡ-29柵列　街区を分割するＳＤ-1218区画溝に沿う形で南北に７基６間以上と、中央の1217から西

へ２基２間の張出を設け、Ｔ字型を呈する柵列である。柱穴の規模は、直径が概ね30㎝前後、深度は20㎝前後から30㎝前後となるが、深い事例として西への張出起点となる1217が39㎝とやや深くなる。建物跡６棟とは、長軸乃至短軸すべてが土地区画に沿うことと同様に、整合する。ただし、ＳＢ-24建物跡とは、張出部分の柱穴が接しており、重複関係にあって同時併存しない可能性が高い。

ｃ　ＢⅡ街区の建物跡と柵列［図版 10・27・28・31・32］

ＢⅡ街区では、建物跡４棟（ＳＢ-30・33 ～ 35）と柵列３件（ＳＡ-31・32・36）を復元した。指向する方位をみると、柵列については土地区画と整合するが、建物跡はほぼ一致することがなく、また柵列と重複するなど、両者の整合性は乏しい。また、復元された建物は小型のもので占められ、主屋と認められる建物跡の復元に至っていない。このような実態から、土地区画に整合する建物跡の存在が複数想定されそうであるが、結果として復元するに至らなかった。したがって、当街区の様相については、明確になり得ていないものと考えている。

また、建物配置の南北区分について、ＢＩ街区と同様であったであろうことは、ＳＡ-36柵列の存在から十分想定できるが、これらと併存しそうな建物の復元に至っていない。また、井戸分布との兼ね合いについて、ＢＩ街区では偏りが看取できたが、ＢⅡ街区ではそのような特徴は見出せず、満遍なく全体に広がっている様子を窺えることも、両街区の相違とすることができるかも知れない。

なお、各建物跡等の規模や方位、各柱穴の規模等については、附表２を参照願うとし、各説については、補足的事項を記述したい。

ＳＢ-30建物跡　桁行２間（4.0ｍ）×梁間２間（4.0ｍ）の正方形の建物跡であるが、平面形は主軸が西へ傾き平行四辺形となる。面積は16.0㎡とやや小型となる。また、土地区画と整合するＳＡ-31柵列との重複は、南北分割といった規制にも囚われていないことが明らかであり、時期的に下る可能性を有している。柱穴の規模は、直径が40㎝前後とやや大型となるが、深度そのものは10㎝以下とともに20㎝前後が多く、堅固さに乏しい。

ＳＢ-33建物跡　位置的には北区画の配置となる１間四方の建物跡。面積は6.48㎡と小さい。方位的には土地区画に整合するが、ＳＡ-32柵列との重複から意図的ではない可能性の方が強い。柱穴は、直径が30 ～ 40㎝前後、深度は30㎝前後を主とする。方位的にみれば、ＳＢ-30建物跡と併存した可能性は否定できない。

ＳＢ-34建物跡　北区画に位置するが、指向する方位が一致しない。桁行２間（3.6ｍ）×梁間１間（3.1ｍ）の規模で、面積11.16㎡はやや小型ではあるが、平面形は整っている。柱穴は、直径が30 ～ 40㎝前後、深度24 ～ 53㎝と幅があり、特に1412は８㎝と極めて浅い事例が含まれていた。ＳＢ-33・35建物跡２棟と重複する。

ＳＢ-35建物跡　建物の規模としては２間×２間であるが、梁間の中柱がやや外側に配置され、平面形としては六角形を呈する。ＳＢ-34建物跡１棟と重複するだけであるが、他３棟とは方位が異なることから、単独と考えられる。柱穴は、直径が30㎝前後と50㎝前後に二分され、深度40㎝前後から69㎝（1543）と深い事例、また９㎝（1582）と極端に浅いものなどばらつきが大きい。

ＳＡ-31柵列　南北方位を指向する６基５間以上と東へ直角に張り出す角部分１間の柵列と認定した。南北列は、幅2.5ｍほどの間隔を開けてＳＤ-1218区画溝と平行することから、ＢＩ街区のＳＡ-29柵列と対になるものと考えられる。東への張出については、ＳＡ-36柵列と連携するものであり、ＢⅡ街区南区

画の範囲を示している。ただし、当該区画内には柱穴の検出数が少なく、建物は復元できていない。

ＳＡ-32柵列　ＢⅡ街区北側において土地区画を分割する柵列で、柱穴７基６間の規模となる。当該柵列ラインは、ＢＩ街区では調査区外であり、両者の整合性は確認できない。ＢⅢ街区については、延長上での区分は見出せないが、やや北側で遺構が連続しないところがあり、無関係とは言い切れない状況がある。柱穴は、直径が30cm前後、深度も概ね30cm前後となるが、51cm（1523）と突出して深いものが含まれている。

なお、当該柵列と概ね平行するものとして、ＳＥ-1287ａ井戸から東側へピットが列状をなしており、未認定となる柵列などが存在する可能性を残している。

ＳＡ-36柵列　ＳＡ-31柵列の東側張出とは、若干角度に相違があるものの対になるものと考えている。５基４間で、東端はＢⅢ街区との境となるＳＤ-1302区画溝の縁に接する。柱穴は、直径が30cm前後、深度は18cm～ 37cmと幅を持つ。当該柵列は、ＢＩ街区と同様に、街区の南北を区分する意図を持つものと理解するが、ＢⅡ街区の南側、つまり幹線道路側では柱穴の検出数が少なく、井戸が２基一対という状況にあり、やや雰囲気が異なっている。詳細は不明とせざるを得ないが、やや特殊な空間、土地利用の可能性を指摘しておきたい。

ｄ　ＢⅢ街区の建物跡［図版 11・28・29］

ＢⅢ街区の建物等については、区画溝の項でも述べたとおり、当初的にはＢⅣ街区と一体であり、中途にてＳＤ-1316区画溝により分割されたと理解している。本項では、ＢⅢ街区で完結する建物跡について述べることとし、両街区にまたがる建物跡については、ＢⅣ街区でまとめたい。なお、ＢⅢ街区およびＢⅣ街区では、柵列については復元されておらず、全て建物跡となっている。

遺構分布を俯瞰した時、南側2/3に密集し、遺構がやや閑散とした一帯を隔て、北辺に建物跡が復元されるといった状況が看取される。このことから、ＢＩ街区でも認められたように、同一街区の中にあっても、小区分が存在していることを示唆する。このことは、後述するＢⅣ街区でも同様である。

ＳＢ-37建物跡　桁行２間（3.1m）×梁間２間（3.1m）とするが、梁間の中柱がやや外側にはみ出し、平面形では六角形になる。東側梁間の中柱については、1606を柱穴としているが、深度からすれば1760ｂの可能性が高いかもしれない。面積は、9.61㎡と小型である。重複する建物跡は未確認であるが、周囲の柱穴（ピット）数からすれば、１～２棟程度は想定される。柱穴は、直径が30 ～ 40cm前後、深度では15cm（1606）と浅いものが含まれるが、概ね30cm前後以上となっている。柱穴1326からは、珠洲甕胴部片（238）が出土している。

ＳＢ-38建物跡　桁行２間（3.2m）×梁間２間（3.1m）の建物として復元したが、東側梁間の中柱が欠失しているが、そもそも存在しないのか、或いは未検出であるのかは定かでなく、結果として五角形を呈する。面積は9.92㎡と小型。建物跡SB-39・40の２棟と重複するが、同規模のSB-37・41の２棟とは、適度な距離を保ちつつ、主軸方位がほぼ同じであることなどから、同時併存の可能性がある。柱穴の規模は、直径が40cm前後とやや大きく、深度も60cm前後と深いものが多くなっている。

ＳＢ-39建物跡　桁行３間（4.6m）×梁間２間（5.6m）の建物として復元したもので、面積が25.76㎡とやや大きくなるが中規模クラスである。ＳＢ-38・40・41との重複から１棟単独であった可能性がある。柱穴の規模は、直径が40cm前後、深度20cm台が３基、36 ～ 54cmとやや深いもの５基となる。1353ａ柱穴からは青磁破片が出土している。

ＳＢ-40建物跡　桁行４間（6.7m）×梁間２間（4.1m）で、桁行２間で間仕切りがなされる。面積は27.47㎡で、中規模クラスとなる。ＳＢ-38・39・41の３棟と重複するが、重複していないＳＢ-37とは指向する方位が近似することから、同時併存の可能性は否定できない。柱穴の規模は、直径が40㎝前後、深度40㎝台が主体である。柱穴1350からは、やや厚手の刈羽三島型中世土師器小片が出土している。

ＳＢ-41建物跡　桁行２間（3.2m）×梁間１間（3.1m）の正方形となる建物として想定しているが、南東側３基の柱穴は未検出乃至調査区外となる。面積は、9.92㎡と小型である。柱穴の規模は、直径が30～40㎝前後、深度は柱穴1778の19㎝を除けば、40㎝台以上と深い。遺物としては、柱穴1348から青磁破片、1352からは陶器の破片が出土しているが、何れも小破片であった。

ＳＢ-42建物跡　ＢⅢ街区北辺に位置し、北半部が調査区外のため、正確な規模等は不明である。想定される規模は、２間四方、2.8m×（3.0m）と仮定した場合、面積は8.4㎡と小型となる。柱穴の直径は大小の差が著しいが、パターンとしては四隅が大きく、深度を深くしている。

ｅ　ＢⅣ街区の建物跡［図版11・28・29・30・31］

ＢⅣ街区の建物跡は、７棟を復元した。これらの内、ＢⅢ街区に跨るもの３棟（ＳＢ-43・44・47）、ＢⅣ街区内で収まるもの４棟（ＳＢ-45・46・48・49）となる。前者３棟は当然のことながら、街区分割以前の建物で、後者は街区分割後の建物が含まれていると考えられる。

なお、各建物跡の併存関係等については、それぞれが指向する方位等から検討することとし、ＢⅢ街区とＢⅣ街区をまとめて後述する。

ＳＢ-43建物跡　街区北辺に検出され、北側が調査区外となる。規模は、桁行４間（8.7m）で梁間は２間（3.0m）と想定した。面積39.15㎡は本遺跡第３位の規模となる。街区を跨ぐことから、相対的に古く位置付けられる。柱穴1357ｂからは、厚手の刈羽三島型中世土師器小片が出土しているが、ある程度参考となる可能性を含む。柱穴の規模は、直径が40㎝前後、深度については、柱穴1356・1357ｂ・1807の３基が40㎝を超えるものの、その他については30㎝未満と浅い。

ＳＢ-44建物跡　規模としては、桁行３間（6.5m）×梁間１間（3.6m）、面積23.40㎡でやや中規模の建物跡である。柱穴の規模は、直径が40㎝前後、深度では30㎝前後主体となる。柱穴1331からは、刈羽三島型中世土師器では新段階となる皿第Ⅲ群（324）が出土している。

ＳＢ-45建物跡　Ｂ地区東端に位置し、東側が調査区外となるため、正確な規模は不明である。現状から推測すれば、２間四方程度となる。柱穴の規模は、直径が西辺の３基については40㎝前後とやや大きくなっている。柱穴1339ｂからは、やや厚手となる中世土師器小片が出土している。街区分割後の建物と考えられる。

ＳＢ-46建物跡　ＢⅣ街区北東部に位置し、北半が調査区外となる。梁間２間は幅が広く、4.9mを測る。柱穴の規模は、直径が30㎝台後半とやや大きく、深度は20㎝台が３基と多い。

ＳＢ-47建物跡　長軸を南北とする建物跡で、規模は梁間２間（3.8m）に桁行５間（5.8m）と北側に１間（1.2m）の庇を設ける。面積は、庇部分を含めると26.36㎡と、規模的には中位となる。柱穴の規模は、直径にややばらつきがあるが、40㎝前後が最も多く、深度は30㎝以上が大半で、20㎝台は４基のみである。桁行の柱間隔は、中央の２間が1.3m、南北両側が約１mと狭い間隔となっており、比較的堅固な建物であったと考えられる。

ＳＢ-48建物跡　ＢⅣ街区北東隅に位置し、大半が調査区外となる。柱穴の規模は、直径が40㎝前後、

深度は66cm（1342c）と深いものがある。

ＳＢ-49建物跡　ＢⅣ街区東端に位置し、建物西辺の一部が柱穴４基、３間分が検出された。柱穴の規模は，直径50cm以上が３基と大きく、また深度も50cm以上と深い。遺物としては、柱穴1340と1341ａから中世土師器が出土している。

ｆ　ＢⅢ・Ⅳ街区建物跡の群別と変遷試案

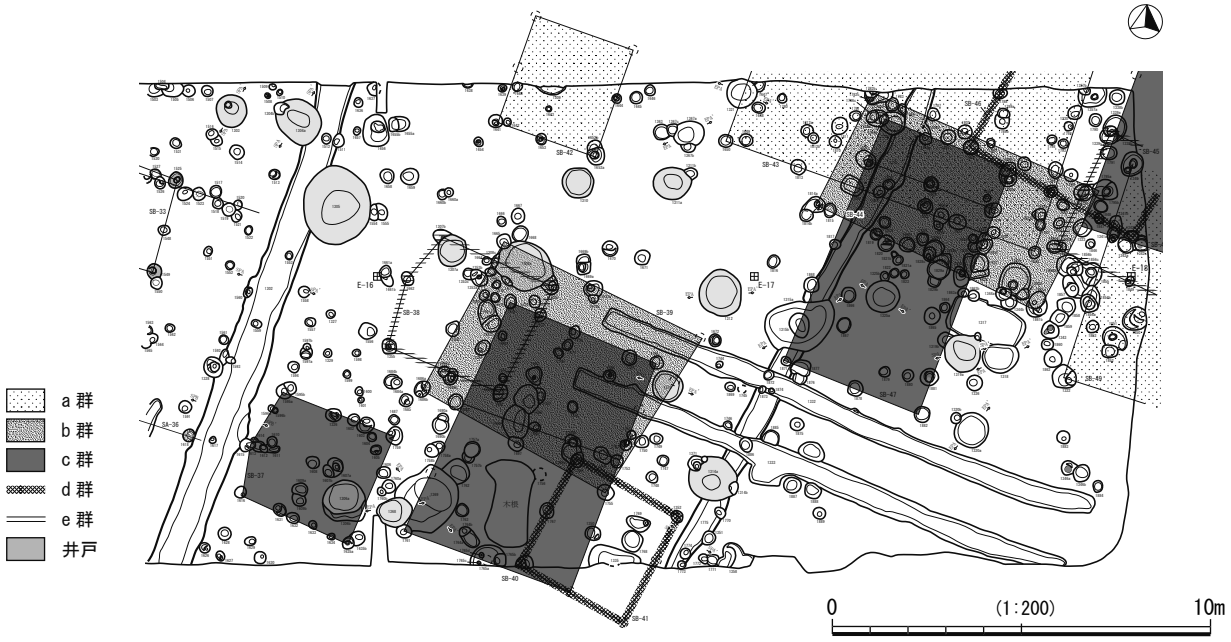
ＢⅢ・ＢⅣ街区については、当初計画の大区画を分割とするなど、街区そのものに変化が認められる。この点は、ＢＩ街区やＢⅡ街区との相違点であるが、建物配置においても様相が異なっている。ＢＩ街区は、南北に区分される建物配置が街区内で継承されているという特徴が明らかで、規則性が強い。これに対し、ＢⅡ街区は、小規模な建物を復元できただけで、主屋的存在は見出せていない。これら２街区に対し、ＢⅢ・Ⅳ街区は、建物の併存関係を推測できるような変化が認められる。

本項では、各建物個々が指向する主軸方位を基に、大きく５つのグループにまとめ、変遷等について検討を加えたい。ただし、各建物の柱穴に重複関係がないことから確定することは困難であるが、街区分割の前後で大きく区分するなどにより、試案を述べることとする。

建物跡の同時併存や組み合わせ等について、主軸方位が一致することだけで律することはできないだろう。しかし、他に手立てがない中では一つの考え方として有効と捉え、指向する主軸を主眼として各建物跡のグルーピングを試みることとした。すると、以下のａ～ｅまでの５群にまとめることができる。

ａ群：Ｎ－76°－Ｗ・Ｎ－11°－Ｅ　⇒　ＳＢ-42・43・49建物跡の３棟
ｂ群：Ｎ－70°－Ｗ　⇒　ＳＢ-39・44建物跡の２棟
ｃ群：Ｎ－73°－Ｗ・Ｎ－15°－Ｅ　⇒　ＳＢ-37・40・47・48建物跡の４棟
ｄ群：Ｎ－67°－Ｗ・Ｎ－22°－Ｅ　⇒　ＳＢ-41・46建物跡の２棟
ｅ群：Ｎ－73°－Ｗ・Ｎ－20°－Ｅ　⇒　ＳＢ-38・45建物跡の２棟

これらの内、ａ～ｃの３群は、ＳＤ-1316区画溝を跨ぐ建物跡が含まれることから、街区分割以前の建



第10図　馬場ＢⅢ・Ⅳ街区建物跡の群別

物跡群であり、ｄ群とｅ群は分割以後の可能性が高い。

ａ群の建物跡は、北側に偏り、南側の空閑地については井戸など生活に密着した施設が設えられていたと考えられる。また、主屋と考えられるＳＢ-43建物跡は、ＳＤ-1316区画溝を大きく跨り、分割に対し全く意識されていない様子から、最も古く位置付けられる。

ｂ群とｃ群については、東西に分割される傾向が看取できることから、ａ群より新しいと考えている。両者の前後関係は明らかにし得ないが、ｂ群よりｃ群が間隔を広くすることから東西分割への意識の高さが看取でき、またｃ群が東西それぞれ２棟で対等化が顕著なことから、ｂ群⇒ｃ群の可能性が高い。

街区分割以後については、ｄ群のＳＢ-41建物跡が区画溝に近接していることに対し、ｅ群については、分割後の街区中央にあって、建物の規模も小型化していることなどから、相対的には新しくなるものと考え、ｄ群⇒ｅ群の可能性を指摘したい。

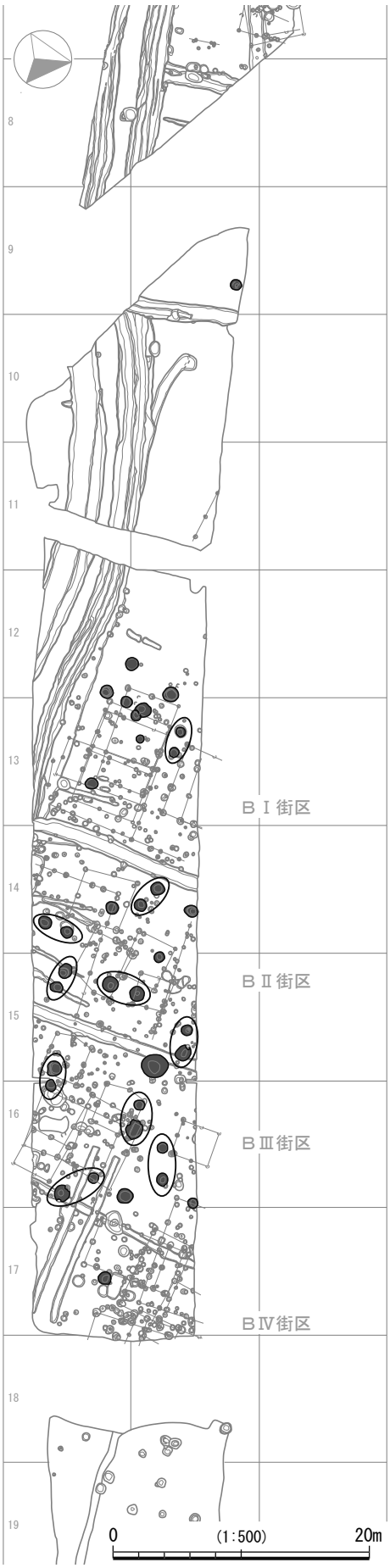
以上、試案として提示する建物跡群の変遷とは、ａ群から順次ｅ群に至るという試案となる。大きな画期は、街区の分割になるが、ＳＤ-1316区画溝から土器類の出土がなく、時期については特定できない。ただし、ＳＤ-1316区画溝が切るＳＥ-1314ａ井戸出土土器類（303 ～ 315）の中世土師器が、13世紀後葉頃と推定されることから、14世紀前葉の範囲内と目される。

５）井　戸　［図版 32］

馬場Ｂ地区から検出された井戸は、合計36基と多数に上る。各井戸個別の規模や深度など法量等の属性、また出土遺物や所属時期については、附表３にまとめたので参照されたい。本項では、分布やグルーピングといった概要を述べることとしたい。

各街区の内訳としては、Ｂ０街区：１基、ＢⅠ街区：10基、ＢⅡ街区：13基、ＢⅢ・Ⅳ街区12基となり、Ｂ０街区以外では、一街区当たり、10基から十数基が築かれていたことになる。ちなみに馬場Ｃ地区（18グリッド東側～ 20グリッド西側）では、14基の井戸が検出されており、Ｂ地区と同様な街区であったことを示唆している。

ところで、馬場Ａ地区の井戸は、２基一対という特徴的なあり方で構成されていたが、Ｂ地区では特に顕著となっていない。その理由としては、井戸の基数の多さがあり、２基一対だけではなく、３基以上のまとまりや単独といった複数のパターンが想定される。第11図は、Ａ地区を参考として、２基一対の可能



第11図　馬場Ｂ地区の井戸分布図

性が高い井戸についてグルーピングした試案である。

ＢＩ街区西側など、井戸密集エリアでは、２基一対の組合せを把握することが困難であるが、ＢⅡ～Ⅳ街区では、２基一対のまとまりが10件と比較的多く確認できる。ただ、単独とした井戸が、隣接するグループに包含される可能性も否定できないが、その判断は難しい。

また、井戸が付随する建物跡との関係についても、重複関係がないことが前提となる。例えば、ＢＩ街区において、時期的に新しいと目されるＳＥ-1219・1256の２基と重複乃至隣接しない建物跡は、ＳＢ-23建物跡だけであり、当該建物との組み合わせ、あるいは時期比定の根拠になり得る。また、ＳＢ-24建物跡は、唯一ＳＥ-1161井戸と重複しないことから、両者の組合せが想定される。しかし、その他にも多くの井戸が存在しており、限定することはできない。建物跡そのものの重複も著しいこともあり、今回は組合せ個々を特定することは、留保しておきたい。

なお、井戸から出土した土器類を一瞥すると、瓷器系の甕破片が伴う２基（ＢＩ街区：ＳＥ-1219・1256）が第Ⅳ期に下る可能性を除けば、大半の井戸が第Ⅲ期とした刈羽三島型中世土師器と珠洲にほぼ限定される。このことから、建物の多くは13世紀後半～ 14世紀代であり、一部15世紀代まで引き継がれ継続していたと予測することがきよう。

６）土　坑［図版 32］

土坑とは、比較的規模が大きく、覆土断面においても柱穴（ピット）ではない類とし、大意としては墓壙等も含まれるものと認識している。Ｂ地区において、土坑とした遺構は、35基であり、規模などの法量等については、附表４に一括したので参照願いたい。本項では、概要を述べることとする。

平面形は、楕円形を主とし円形が多い。規模は、長径が50cm台から150cm超まで大小さまざまであり、概ね80cm台が多い傾向がある。深度は、10cm未満から最深で80cm越（ＳＫ-1309）もあるが、大半は10cm～ 30cm台で収まり、概して浅いものが多くなっている。深度が深いＳＫ-1309については、調査区北壁で、大半が調査区外となって検出されているが、井戸の可能性を持つ。

土坑のうち、ＳＫ-1370は、調査区南壁から大半を調査区外として検出されているが、平面形は長方形と推定され、深度は18cmと浅い。遺物もなく、性格などは不詳であるが、一辺が3.17ｍと大型であることから、方形の竪穴状遺構の可能性がある。

なお、遺物が伴った土坑は、ＳＫ-1102・1315ａ（316）・1345ａ（318）の３基だけである。ＳＫ-1102土坑からは、白磁小破片が出土している。また、ＳＤ-1316区画溝と重複するＳＫ-1315ａ土坑は、近世の所産である。

７）遺構空白帯

遺構空白帯については、Ａ地区で概要を述べたとおり、Ｂ地区12グリッド中央付近のＳＤ-1115・1116までの約85ｍ区間で、以東から建物などが密集する居住域となる。しかし、Ｂ地区では幹線道路が北へ膨らみカーブすることから、Ａ地区から連続する空白帯はＳＤ-1100溝までとなり、Ａ地区ＳＤ- ４溝から距離は約60ｍである。空白帯の幅5.5ｍ（≒３間）は、９グリッドのＳＥ-1101井戸、12グリッドのＳＫｐ-1117ピットの存在から、一定の幅は維持されていたと考えられるが、幹線道路の膨らみと連動していたことが明らかである。なお、ＳＡ-50柵列は、空白帯にはみ出すことになるが、指向するＮ－68°－Ｗは、ＢＩ街区のＳＡ-27柵列とほぼ同じ方位であり、何らかの関連性が認められる。

４　馬場・天神腰Ｃ地区の遺構

１）Ｃ地区の遺構概要

Ｃ地区の呼称と範囲　馬場・天神腰Ｃ地区とは、20グリッド中央付近を境に、西側が字「馬場」、東側が字「天神腰（乙）」と小字名が異なることから、前者を馬場ＣⅠ地区、後者を天神腰ＣⅡ地区と呼称することとした。馬場・天神腰Ｃ地区とする所以である。ＣⅠ地区とＣⅡ地区との境界には、長鳥川へと合流する幅１ｍほどの排水路があり、遺構確認面より高い位置にあったことから、決壊防止のため左右の土手を確保したことから、６～７ｍの幅が未調査となっている。

Ｃ地区の範囲は、西側となる馬場Ｂ地区とは18グリッドを南北に横断する農道（未調査）と、また東側となる天神腰ＤⅠ地区についても、23グリッドにおいて南北を横断する市道（未調査）を境とする。調査区の延長はおよそ50ｍである。現況としては、Ｂ地区やＣⅡ地区東端より１ｍ以上低い湿地となっており、かつては水田として耕作されていた場所である。しかし、遺構検出状況から窺うと、当初はＢ地区やＣⅡ地区東端（22～23グリッド）と同じように平坦地が連続していたと考えられ、その後何らかの理由により掘削され、低地化したものと推察される。遺構確認面は、調査区南辺が一段高くなっていたが、当該地点とは集落内の旧道が通っていた場所であり、削平を免れていたものと想定していた。

遺構の概要　発掘された遺構総数は41基である。その内訳は、建物として復元された柱穴６基、その他のピット12基、土坑類３基、井戸16基、溝４条となり、遺構総数に占める井戸の割合が高い。復元できた建物跡は２棟である。

ＣⅠ地区の遺構は、井戸14基で、その他はピット４基と少なく、建物跡の復元には至っていない。その理由は、遺構確認面が１ｍ以上削平されたことにより、井戸の底面のみが浅く検出された結果である。南側の一段高い箇所では、ピット３基を検出しているが、深い柱穴の底面だけが残存したものである。したがって、井戸検出総数からすれば、建物などの遺構密度は相当高かったことが推測可能であり、Ｂ地区居住域と同じエリアが続いていたことは明らかである。

これに対しＣⅡ地区の西半部は、ＣⅠ地区と同様に削平が及んでいたこともあり、遺構の種別が井戸と土坑など３基だけ、また東半部も北側で建物跡が復元され、井戸などが分布するが、遺構数は少ない。この状況は、天神腰ＤⅠ地区と同じである。また、建物跡の南側にあるＳＤ-1730溝以南については、柱穴などピット類はほとんど分布せず、東西方位の溝については、天神腰ＤⅠ地区からの延長と考えられる。

以上、馬場ＣⅠ地区とは馬場Ｂ地区の延長であり、天神腰ＣⅡ地区は天神腰ＤⅠ地区へ連続する性格を持つエリアであった。以下、各遺構の各説を述べるが、Ｃ地区を区分せず全体を一括し概観する。

２）建物跡と柱穴・ピット［図版 12～14・33］

建物跡は、23グリッド北辺において、大半を調査区外とする形で復元されている。建物跡や各ピット等の属性については、附表２を参照願いたい。

ＳＢ-61建物跡　１間×１間程度と推測される小型の建物である。柱穴は３基検出され、北側は調査区外となる。柱穴の規模は、直径30㎝程度、深度は19～38㎝とばらついている。

ＳＢ-62建物跡　建物の南辺となる柱穴３基は桁行と考えられ、２間分が検出されている。柱穴の規模は、30㎝未満と小型、深度は14～31㎝とばらついている。重複するＳＢ-61建物跡とは、指向する方位が大きく異なるとともに、同じエリアと目されるＤⅠ地区の柵列とも相違している。

３）溝　類

溝類は、ＣⅡ地区東半部から検出されただけとなる。検出された溝は４条であるが、何れも指向する方位が微妙に異なる。また、ＣⅡ地区は、ＤＩ地区と同じ街区を構成すると考えられることから、両者を関連付けながら各説したい。

ＳＤ-1726溝　平面形状がやや不整で幅約1.1ｍと広い溝。深度は５㎝と浅い。指向する方位は、センターでＮ－83°－Ｗとなるが、北縁ではＮ－85°－Ｗとなるなど、不整形であるがためにブレがある。ＤＩ地区のＳＤ-2401溝との関連をみると、幅広であることと合わせ、方位的に重なる中段階の溝の延長と推測する。遺物として、刈羽三島型中世土師器小皿（345）の小破片が出土している。

ＳＤ-1727溝　幅34㎝と狭く、深度６㎝と浅い。方位は、Ｎ－80°－Ｗである。ＤＩ地区の溝との関連性については、ＳＤ-2401溝古段階の延長であった可能性が高い。

ＳＤ-1728溝　幅84㎝、深度12㎝で、ＣⅡ地区東端までで途切れる。しかし、方位を見るとＤＩ地区ＳＤ-2401溝の北側で重複する新段階（６～９層）と直線上で重なることから、一連の溝であった可能性が高い。指向する方位は、Ｎ－84.5°－Ｗである。

ＳＤ-1730溝　前述３条の溝とは３ｍほどのやや距離を隔てる。指向する方位も異なり、Ｎ－74.5°－Ｗとなり、ＤＩ地区溝との関連性はほぼ認められない。しかし、ＤＩ地区ＳＡ-73柵列の方位Ｎ－73.5°－Ｗに近似することから、柵列と連動した屋敷地の区画溝であったと考えられる。ただし、ＳＡ-73柵列との関係を厳密に指摘するとすれば、柱間の間隔が一致しないことから、ピット1741・1736の２基、もしくは建物の柱穴とした1735・1740などが、柵列の延長となる可能性は否定できない。

４）井　戸

井戸は、ＣＩ地区の14基と、ＣⅡ地区の２基、合計16基が検出されている。法量等の属性、また出土遺物や所属時期については、附表３を参照されたい。本項では、概要を概観する。

ＣＩ地区については、１ｍほどが削平されていることを考慮した場合、かなりの密集度となる。平面形はほぼ円形で、素掘りの井戸となる。深度は、検出面からの１ｍ前後を計測するものとしてＳＥ-1703・1705の２基が掲げられ、本来的な深度は２ｍ越えが推測される。また、50㎝級では、ＳＥ-1706・1708・1709・1711・1713の５基がある。ＣⅡ地区では、削平が及んでいないが、ＳＥ-1733井戸が１ｍ越え、ＳＥ-1721が50㎝級であった。

出土遺物としては、ＳＥ-1701・1720井戸からそれぞれ、第Ⅲ期（後半）の刈羽三島型中世土師器皿（343・346）が、またＳＥ-1706井戸からは第Ⅴ期の珠洲擂鉢（349・350）が伴っていた。したがって、ＣＩ地区に建てられていた建物の多くは、14世紀代から15世紀前半代の所産であったと考えられる。なお、ＳＥ-1733井戸からは、時期不詳な鉄釉（？）でコーティングされた平瓦破片が出土しており、現代の所産である可能性がある。

５）土 坑 類

土坑類については、調査区南辺となる削平を幾分避けられたテラスにおいて、ＣＩ地区ではＳＫ-1717土坑１基、またＣⅡ地区ではＳＫ-1722・1725土坑の２基が検出されている。遺物が伴ったのはＳＫ-1725であるが、ガラス製品等が廃棄された現代の所産であって、その他２基についても時期不詳である。

5　天神腰Ｄ地区の遺構

１）Ｄ地区の遺構概要

調査区の区分と呼称　天神腰Ｄ地区は、西側の天神腰ＣⅡ地区及び東側の天神腰Ｅ地区とは、前者が市道22-40号線、後者が市道22-39号線という南北線の市道（未調査）を境界とし、24グリッドから34グリッドまで、およそ105ｍの区間となった。調査区の延長が他地区と比較しても長いこと、また遺構密度の相違もあったことから、発掘作業においては、畑作業道確保のため掘り残した幅１ｍほどの土手を境に、西側を天神腰ＤⅠ地区（24 ～ 27グリッド）、東側を天神腰ＤⅡ地区（28 ～ 34グリッド）の２地区に区分し調査を行ったものである。

以上は、発掘調査実施に際しての便宜的な区分であったが、検出された遺構の配置や様相からみた実態とは、22グリッドで検出されているＳＤ-2469区画溝が街区を区分していることが明らかで、西側はＣⅡ地区東半部までが一区画、また東側は34グリッドで検出されているＳＤ-3056区画溝までが一つの街区であったことは明瞭である。ＳＤ-3056区画溝とは、実態としてＥ地区との境界を意味することとなるが、その場所も市道が横断している。同様にＤ地区のⅠ区とⅡ区の境は、市道や農作業道で区分した便宜的な境界ともある程度整合している点は、本遺跡が現在の下南条集落域の道路などが、調査区で現れた街区区分との強い関連性を示唆するものとして注目しておきたい。

ＤⅠ地区の遺構概要　ＤⅠ地区に該当する街区は、ＣⅡ地区東半部を含むが、ここでは24グリッドから27グリッドの遺構について概要をまとめたい。

遺構密度としては希薄であり、復元された建物跡は２棟だけ、その他に柵列が７列となる。柱穴・ピット類は59基、この内38基が建物跡・柵列の柱穴として活用され、未活用のピットは21基となる。これらに対し、井戸は15基と意外に多い。溝は２条、土坑は４基、遺構総数は87基となる。

遺構の配置は、２条の溝によって区画された街区内に分布する。南側は３段階ほどの改修を受けたＳＤ-2401区画溝が横たわり、東側のＳＤ-2469区画溝が南北に横断する。建物跡は、中央となる25グリッドにおいて２棟が重複し、かつ柱穴を一部共有することから建替えであったことが窺える。建物跡の東西と北側にはそれぞれ１～２列の柵列によって敷地が仕切られているが、東側と西側の南北柵列は、ＤⅠ地区を３区に小区分するものである。これを便宜的に西小区（24グリッド）・中央小区（25グリッド）・東小区（26グリッド）と呼称して概観する。

まず、西小区については、方形区画状に巡る柵列が検出されているが、ＣⅡ地区東半部と一体となるエリアである。主屋などの建物は、調査区外に配置していたものと推測する。中央小区は、建物跡北側に２列の柵列があり、南北に細細分するとともに、調査区北辺にも同様な敷地が存在したものと理解している。東小区については、井戸と土坑のみで、柱穴・ピットが検出されていないエリアとなるが、調査区北側に主屋などの建物を想定したい。

なお、ＳＤ-2401区画溝の南側については、井戸が僅かに重複する状況で検出されているものの調査区外となることから、状況を把握できない。

ＤⅡ地区の遺構概要　ＤⅡ地区の範囲は、実態として南北に横断するＳＤ-2469区画溝からＳＤ-3057区画溝までが一区画となる。ＤⅡ地区から検出された遺構は、総数607基となる。その内訳は、柱穴・ピット類が564基と圧倒的な数量を誇る。これらの内、建物跡は17棟、柵列は５列が復元され、これらに使用された柱穴は143基に過ぎず、活用率25.4％という数字からは、さらに多くの建物・柵列の存在が明らか

である。この他、井戸類29基、土坑類11基、そして区画溝２条となる。

遺構検出状況を窺うと、中央部のやや小高い範囲（29 ～ 31グリッド）に濃厚に密集し、建物跡の重複が著しいが、東西両側（29グリッド・32 ～ 33グリッド）は遺構が少なく、濃淡の差異が大きい。このことから、ＤⅡ地区の街区は、特に区画溝や柵列などによって特に区分はなされてはいないが、中央部とその東西の大きく３区に区分され､それぞれの土地利用がなされていたことが理解されるであろう。しかし、30グリッド中央で検出されている南北横断のＳＤ-2745区画溝の存在は、広大な一区画であった屋敷地・街区を東西に分割したもので、屋敷地の相続などとの関連性を考慮する必要があるかもしれない。このような変更は、馬場Ｂ地区におけるＢⅢ・Ⅳ街区と同じ事象と考えられる。

なお、29グリッドについて、南側が一段低くなっているが、後世において畑地を水田化するため削平された結果であるが、井戸の分布などが希薄なことから、土地利用の在り方が異なっていた結果と考えられ、建物密集区域の広がっていた可能性は低い。

また、特異な遺構としては、31グリッド西端で検出されているＳＥ-2819井戸が掲げられる。詳細は各説等において述べるが、墨書した木製の塔婆多数が出土している。

２）建物跡・柵列と柱穴・ピット

天神腰Ｄ地区は、幹線道路に沿う馬場Ｂ地区とは異なり、整然とした街区は設定されていない。しかし、南北に横断するＳＤ-2469区画溝は、Ｄ地区の街区を大きく東西に分割するものである。西街区は、一部ＣⅡ地区を含み、延長は48mほどとなる。また、東街区は、ＳＤ-3057区画溝までの範囲であり、延長はおよそ65mと広大である。それ故か、東街区は30グリッドとなる中央において、ＳＤ-2745区画溝によって東西に分割されることとなる。その際の延長は、西側が約32m、東側もほぼ32mで折半された状況が窺われる。

本項では、西街区となるＤＩ地区と東街区となるＤⅡ地区に区分して概観することとする。なお、各建物跡及び柵列、及び柱穴の規模など法量や属性等のデータは、附表２にまとめた。また、建物跡や柵列に復元されていない柱穴については、ピットとして一括、附表１に掲載したので、参照願いたい。

ａ　ＤＩ地区の建物跡と柵列［図版 14・15・34］

ＤＩ地区の建物跡は２棟と少なく、柵列は合計７列で、内訳としては東西方向が２列、南北方向３列、そして方形区画状となるＬ字形２列が復元されている。

ＳＡ-73柵列　ＤＩ地区西端となる24グリッドに位置し、柱穴８基によってＬ字形で検出された柵列である。屈曲点となる柱穴2414から西側への延長は、調査区内では１間だけであるが、ＣⅡ地区への延長が想定される。ＣⅡ地区との境界となる市道を跨ぐこととなることから、道路そのものは後世において増設されたものと考えざるを得ない。また、南北方向の柱穴は、２個一対となっており、修復・建て替えがなされたものと判断した。性格としては、ＣⅡ地区ＳＤ-1730溝と指向する方位が同じであり、馬場Ａ地区ＳＡ-10柵列との類似性が指摘されよう。遺物は出土していない。

なお、建物跡の東側を区切るＳＡ-83・84の２柵列と南北方向で平行することから、両者とは関連した関係にあったと推測される。

ＳＡ-74柵列　ＳＡ-73柵列の内側において、ほぼ同じ方位を指向する状況で検出されている。柵列を構成する柱穴は５基で、屈曲点2413を含めれば、柱穴数は東西３基、南北３基となる。ＳＡ-73柵列と同

じ性格、機能を有するものと推測され、建替えされたものと考えられるが、遺物の出土はなく、前後関係等は不詳である。

ＳＡ-76柵列　柱穴２基だけであるが、ＳＡ-73柵列などと指向する方位がほぼ一致することから、ＤⅠ地区の街区を区切る役割があったものとして認定した。北へは、さらに延長されるものと推測する。遺物は出土していない。

ＳＡ-77柵列　柱穴５基による東西方向の柵列である。指向する方位としては、地区内の建物跡や柵列とはすべて一致していないため、やや不安定である。遺物は出土していない。

ＳＡ-78柵列　柱穴３基で構成され、ＳＥ-2433ａ井戸と重複するが、柱穴2433ｂの深度が102㎝と異常に深い。井戸跡と重複することから、軟弱な覆土によって沈降した可能性がある。南側の建物跡２棟と東西方向が一致することから、一体的な関係が窺われる。遺物の出土はない。

ＳＢ-81建物跡　規模は、桁行２間×梁間１間、面積13.65㎡となる小型建物で、柱穴2448が外側にはみ出す。柱穴2443・2444・2445の３基は、ＳＢ-82建物跡と共有する。伴う井戸とは、ＳＥ-2428・2432・2433ａ井戸の可能性が高い。遺物は伴っていない。

ＳＢ-82建物跡　桁行３間×梁間１間、面積は18.0㎡となる。ＳＥ-2428・2432・2433の井戸３基と重複しており、ＳＡ-78柵列と一体であった可能性が高く、ＳＥ-2426井戸が伴っていたと推測される。遺物は伴っていなかった。

ＳＡ-83柵列　柱穴２基の構成であり、その距離約６ｍと離れているが、対となるピットは他になく、中間に２基ほどを想定したい。主軸方位は、2.9ｍの間隔を開け、ＳＡ-84柵列と同じ方位を指向すること、他に遺構がないことなどから、通路的な意図を感じさせる。遺物は出土していない。

ＳＡ-84柵列　柱穴４基、３間分が検出されている。南北方位の指向角度は、ＳＡ-73・74・76・83の各柵列と共通することから、これら柵列が一連の計画の下、配置された可能性が高い。また、東西方位の柵列であるＳＡ-77柵列が、直角方向で3.5°の僅差であることから、関連する可能性が高い。遺物の出土はない。

ｂ　ＤⅡ地区の建物跡と柵列［図版 16 ～ 18・36 ～ 40］

ＤⅡ地区の建物跡・柵列は、建物跡17棟、柵列５列が復元されている。これらの内、建物跡15棟と柵列４列が29グリッドから31グリッドまでの30ｍ区間に集中しており、重複が著しい。また、建物跡等に活用できなかった柱穴･ピットの数も膨大であり、実際には建物等の棟数は倍以上、重複関係はさらに激しかったことは容易に想像できる。したがって、当該エリアは、居住に適していた条件を備えており、また長期間居住域として存続したことが窺われる。

ＳＢ-91建物跡　桁行２間×梁間１間、面積14.43㎡で、単独の小型建物跡である。柱穴の規模は、直径が50㎝前後とやや大型で、深度も最深63㎝と深く、比較的堅固な建物という印象がある。南側のＳＢ-92建物跡とは、指向する方位が近似するが、遺構密集域では、ＳＢ-100・106・107の建物跡３棟とも方位的にはほぼ一致しており、関連する可能性は高い。遺物は出土していない。

ＳＢ-92建物跡　１間四方の建物跡としたが、桁行についてはさらに１間程度拡張される可能性を残している。したがって、現状で計測される面積は、7.36㎡と狭小であるが、その倍の面積程度が想定できる。他遺構とは重複せず、ＳＢ-91建物跡と同様に単独の建物となる。指向する主軸の方位としては、ＳＢ-91建物跡との関連について指摘したが、密集域のＳＢ-103・108建物跡やＳＡ-110柵列との関連性も否定で

きない。井戸との関連としては、西側の２基（ＳＥ-2501・2502）が隣接しており、伴う可能性が高い。遺物の出土はない。

ＳＢ-93建物跡　主屋は、桁行３間×梁間２間で、東側桁行１間に間仕切りがあり、西側には桁行３間×梁間１間の張り出しがつくなど、やや構造が複雑な建物となる。総面積は、45.08㎡は復元された建物ランキングでは第１位の規模となる。重複する建物は５棟に及び、特にＳＢ-94建物跡は、内部にほぼ取り込まれている。柱穴の規模も50㎝台が多く､深度も深いものが多くなっている。指向する方位としては、ＳＢ-98建物跡と近似しており、付属屋の可能性がある。遺物としては、柱穴2618から、刈羽三島型中世土師器小破片が出土している。

ＳＢ-94建物跡　桁行２間×梁間２間の総柱建物で、西側に１間四方の張り出しがつくものとして復元し、面積19.08㎡となる。ただし、桁行３間の総柱建物の可能性を残している。総柱建物としては、本遺跡唯一の事例となる。遺物としては、柱穴2633から土器細片が出土しているが、器種や時期など詳細は不詳である。

ＳＢ-95建物跡　桁行３間×梁間２間の建物であるが、梁間の幅が4.5ｍと柱間が広い。面積は27.0㎡で、やや中型の建物となる。柱穴の規模は、40㎝前後から50㎝台でやや大きい。主軸方位と重複関係から推測すると、ＳＢ-104建物跡と関連する可能性があり、東西に分割された時期が想定される。遺物としては、柱穴2623（424）と柱穴2670（426）の２例があり、両者とも関東系ロクロ成形底部糸切の中世土師器であり、15世紀前半代の所産となる。

ＳＡ-96柵列　柱穴３基による柵列で、ＳＢ-93建物の南辺に接する位置にあり、水田化による削平をわずかに免れていた。付随する建物の特定は難しいが、ＳＢ-97建物とは指向する方位が近似する。遺物の出土はない。

ＳＢ-97建物跡　桁行３間×梁間１間、面積13.23㎡、やや小型の建物である。柱間は概ね均等で、平面形の歪みは小さい。ＳＢ-94建物跡との距離は50㎝と狭いが､東西方向の方位はおおむね一致する。ただし、柱穴の配置に整合性はなく、一体化する可能性はない。遺物はなく、時期不詳となる。

ＳＢ-98建物跡　桁行２間×梁間１間、面積10.53㎡の小型建物である。指向する方位としては、ＳＢ-93建物跡及びＳＡ-102柵列とほぼ同じ方位であり、関連する可能性が高い。柱穴2743ａ・2752ｂの２基からは、刈羽三島型中世土師器の小片が出土している。

ＳＢ-99建物跡　桁行２間×梁間１間、面積14.85㎡となるが、梁間の幅がやや広い。指向する方位からすれば、隣接するＳＢ-105建物跡と対になる可能性が高い。遺物は伴っていなかった。

ＳＢ-100建物跡　密集域中央において、桁行２間×梁間１間、面積23.50㎡の建物である。ただ、梁間の幅が、4.7ｍと広くやや不安定で、平面形は正方形に近い。関連する建物としては、ＳＢ-106・107の２棟が想定される。柱穴2587から刈羽三島型中世土師器小片が出土している。

ＳＢ-101建物跡　桁行３間×梁間１間、面積14.0㎡の小型建物である。指向する方位から見た関連遺構は、ＳＢ-103・108の２棟を挙げることができる。遺物はなく時期不詳である。

ＳＡ-102柵列　柱穴４基、３間幅の柵列である。切土されたラインに概ね平行し、方位的にはＳＢ-93建物跡などに近似するが、位置的に妥当とすることができるのか躊躇する。遺物は伴っていない。

ＳＢ-103建物跡　桁行２間×梁間２間となるが、梁間の中間柱が外側へずれる。面積は8.91㎡と小型となる。柱穴2780からは、京都系の中世土師器皿小片が出土しており、15世紀後半以降の所産となる可能性を含む。

ＳＢ-104建物跡　桁行１間×梁間２間の建物で、梁間中間柱がやや外側へずれる。面積は、10.14㎡と小型となる。柱穴2790ａからは、やや厚手となる刈羽三島型中世土師器小片が出土している。

ＳＢ-105建物跡　桁行２間×梁間１間、面積14.40㎡の建物である。長軸が南北を指向しており、ＤⅡ地区では数少ない事例となる。指向する方位では、ＳＢ-99建物跡との関連が指摘できる。遺物はなく、時期不詳。

ＳＢ-106建物跡　桁行３間×梁間２間の建物と想定しているが、西側１間が庇もしくは間仕切りされる。桁行中央の柱間が広くなる。柱穴2804から時期不詳の土器片が出土している。主軸方位から見た関連遺構は、ＳＢ-100・107建物跡が掲げられる。

ＳＢ-107建物跡　桁行３間×梁間１間、南側桁行に沿って庇がつく。総面積は、20.68㎡の中型となる。主軸方位から見ると、ＳＢ-106建物跡と組み合わさる可能性がある。また、北側のＳＡ-111柵列が伴う可能性が高い。遺物としては、柱穴2840から刈羽三島型中世土師器小皿破片（477）が、また柱穴2866ａ・2925から中世土師器や珠洲破片が出土している。

ＳＢ-108建物跡　桁行２間×梁間１間、ほぼ正方形となる主屋の南北両側の桁行に沿って、庇がつく両面庇の建物となる。総面積は20.80㎡の中型建物。指向する方位からすれば、北側のＳＡ-110柵列が伴うものとみられる。遺物としては、柱穴2921から越中瀬戸（495）と考えられる小皿が、また柱穴2917・2943から時期不詳の土器片が出土している。

ＳＢ-109建物跡　桁行２間×梁間１間、面積7.92㎡の小型建物である。ＳＢ-107･108建物２棟と重複し、ＳＢ-104建物跡とも柱穴が近接することから、併存関係にはないものと判断される。また、指向する主軸方位においても、Ｎ－83°－ＷとＤⅡ地区の建物・柵列では最も西側に傾き、一致する建物や柵列はない。柱穴2836からは、やや古手となる刈羽三島型中世土師器破片が出土している。

ＳＡ-110柵列　柱穴３基、２間の柵列である。隣接するＳＢ-108建物関連と考えられる。柱穴2839から時期不詳の土器片が出土している。

ＳＡ-111柵列　ＳＡ-110柵列と半ば重複する柵列で、柱穴３基、２間分が検出されている。主軸方位から、ＳＢ-107建物関連と考えられる。遺物としては、柱穴2955・3011から刈羽三島型中世土師器の小破片が出土している。

ＳＡ-113柵列　遺構密集域の東側において、遺構が希薄となる33グリッドに位置する。柱穴は３基、２間となるが、北側は調査区外となる。主軸方位は、ＤⅡ地区の中では、Ｎ－35°－Ｅと最も東側に傾き、同一方位を指向する遺構は認められない。遺物の出土はない。

３）溝　類

Ｄ地区の溝類とは、東西方向１条と南北方向３条と、それぞれを指向することによって、大きく２群に大別が可能である。本項では、それぞれに分け各説したい。

東西方向溝［図版14・15・36］

該当する溝とは、ＤＩ地区のＳＤ-2401溝の１条である。当該溝は１条として一括されているが、ＣⅡ地区の東西溝と関連する通り、土層断面の観察から３段階にわたって改修がなされている。このような数段階にわたって改修する溝とは、Ａ地区からＢ地区で検出されている道路の側溝と同じ意図が想定可能である。実際、現下南条集落の地割や集落道と対比した場合、ルートとして完全な一致を見ないが、ＳＤ-2401溝の南側に東西道が通っており、当該道路と関連している可能性が高い。

ＳＤ-2401溝　検出範囲は、24グリッドから26グリッドまでの約28ｍで、東側は調査区外となる。方位的には、概ねＮ－87.5°－Ｗを指向し、南北溝となるＳＤ-2469区画溝と接続すると考えられるが、角度的には直交していない。幅は、西端で2.8ｍを測るが、東側では1.6ｍと狭くなる。西側で広くなることにより、ＣⅡ地区の溝へと連なることで理解される。土層断面の観察では、３段階の改修が確認できる。古段階は、16層（明灰褐色粘土）を覆土とし、幅は60～80㎝とやや細くなるが、深度は約50㎝と最も深い。ＣⅡ地区ＳＤ-1727溝に対比される。中段階は、10～14層（褐色～黒褐色粘土）を覆土とし、幅はおよそ1.7ｍ、深度約40㎝を測る。ＣⅡ地区ＳＤ-1726溝に対比される。新段階は、６～８層（暗褐色～黒色粘土）を主とするが、最下層となる９層は白灰色粘土が底面で検出されている。幅は、Ａ断面の計測では約1.4ｍ、深度は30㎝と浅くなる。ＣⅡ地区ＳＤ-1728溝に対比される。当該溝は、街区を区切る区画溝ではなく、道路の側溝の可能性が高いとした。しかし、側溝は両側がそろって道路側溝の証となるが、片側となる南側の側溝は調査区外にあり、道路幅についても特定するに至っていない。

出土した遺物、特に土器・陶磁器類は、中世土師器のほか珠洲を主としながら、白磁や青磁、瀬戸・美濃など種別と時期が多岐にわたっている。出土位置をみると、古段階の溝内から、柱状高台の土師器皿(365)や玉縁の白磁碗(380)が出土しており、時期的に古くなる要素を持っていることになる。また、青磁碗(383)は中段階に、刈羽三島型中世土師器皿（366・367）は新段階に伴う可能性が高い。土器・陶磁器以外では、鎌状鉄製品（20）や椀形滓を含む鉄滓（35～37）が出土している。特に、36・37については、古段階の溝に伴っていた。

南北方向溝群［図版16・17・19・36］

南北溝は、合計３条検出されているが、性格としては街区を区画する目的の溝である。ＤⅠ地区とＤⅡ地区の主とする街区を区分するＳＤ-2469区画溝とＥ地区との境界を意味するＳＤ-3057区画溝の２条が基本的な区画溝である。もう一条となるＳＤ-2745溝は、ＤⅡ地区の遺構密集域を東西に分割する意図の下、掘削された溝で、前二者とは指向する方位も異なっている。

ＳＤ-2469区画溝　延長約13ｍ、幅については遺構確認面の標高が高くなる北側では底面が２段となって3.1ｍと広くなり、南側は１段で1.6ｍとなる。指向する方位はＮ－13°－Ｅで、東側の畑作業のための作業道とほぼ一致する。道路側溝としたＳＤ-2401溝と接続するが、正確な直交とはなっていない。覆土の観察から、底面西側テラスは新段階の溝の痕跡である。底面は丸みを帯び、やや半円状を呈し、北壁断面（Ａ断面）の観察では、古段階の深度は約80㎝、新段階は約45㎝でやや浅くなる。出土遺物は珠洲（386～393）を主体に意外に多く、この他では関東系中世土師器皿底部（385）や青磁碗底部（394）が出土している。所属時期としては、15世紀前半代を挟む前後の年代が想定される。

ＳＤ-3057区画溝　ＤⅡ地区東端に位置し、Ｅ地区との境界に相当する区画溝である。検出した延長は約12ｍで、北側は徐々に浅くなり途切れている。幅は、北側が70㎝ほど、南端部で1.6ｍほどとなる。底面はほぼ平坦で、深度30㎝ほどと浅いが、土層Ｂ断面の観察からすれば、一度改修がなされたものとみられる。遺物としては、時期不詳の中世土師器や越前の破片が出土しており、16世紀代にも存続していた可能性がある。主軸方位は、Ｎ－15.5°－Ｅを指向、隣接する市道のＮ－14°－Ｅに近似していることから、現集落の区割りと強い関連性が窺われる。

ＳＤ-2745区画溝　遺構密集域において、東西に分割する目的の区画溝と想定している。南北両端が途切れ、延長は8.7ｍが確認されている。幅は1ｍほどで南北が若干狭くなる。主軸方位はＮ－6.5°－Ｅを指向するが、北半がやや西側へカーブするようなプランを呈している。遺物は出土していない。

4）井　戸

天神腰Ｄ地区における井戸の総数は43基、地区別内訳としては、ＤⅠ地区:15基、ＤⅡ地区28基である。また、この他に井戸より小型となる井戸状遺構１基がＤⅡ地区に検出されており、本項に一括したい。法量等の属性や、出土遺物及び所属時期等については、附表３にまとめたので参照願いたい。

なお、本項では、Ｄ地区で検出された井戸について、全体的な概略を述べるが、井戸状遺構と木製塔婆や石敷きなどが出土したＳＥ-2819井戸については、若干詳述することとしたい。

ａ　全体的概観と井戸状遺構

全体的概観　分布状況をみると、遺構密集域となる29 ～ 31グリッドでは、井戸24基が建物と混在し、棲み分けといった状況は認められない。また、出土遺物から見た大別時期においても、地区全体を網羅するように分布しており、時期的なまとまりは看取されない。

井戸の法量、直径から見た規模では、特大級となるＳＥ-2819井戸は特殊な事例であるが、一般的な井戸としては、直径80 ～ 140cmの範囲に大半が集中し、150 ～ 250cmのやや大型のものが若干確認されている。地区別の内訳では、ＤⅠ地区の15基全てが80cm以上150cm未満に集中する。ＤⅡ地区では、ＳＥ-2819井戸を除くと、80cm以上140cm未満が18基、150cm以上220cm未満が６基である。これらの状況は、Ａ・Ｂ・Ｃの各地区と同じ傾向が窺えるが、規模による時期的な変化は認められなかった。

なお、東西を区切るＳＤ-2745区画溝と重複する事例はなく、当該密集域の東西区分が意識されていた可能性がある。また、遺構が希薄となる24 ～ 28グリッド間では、２基一対となる事例が６例ほど認められることから、井戸掘削にあたっての流儀は、Ａ地区やＢ地区と同様に存在したものと推測される。

出土遺物から見た特徴としては、まず遺物が伴う井戸が比較的多いという実態が掲げられる。具体的には附表３を参照願いたいが、土器・陶磁器類をはじめ木製品が多く出土している。また、土器類から見た年代観としても、他地区が第Ⅲ期とした13世紀後半から14世紀代を主としていることに対し、特にＤⅡ地区では第Ⅳ期や第Ⅴ期といった14世紀末から16世紀代までの事例が相当多くなっている。この事実は、具体的時期を特定できていない建物の時期と相関し、他地区よりも長期にわたって居住が継続していた証とすることができ、当該地区の特異性とすることができよう。

井戸状遺構　井戸状遺構とは、覆土下層が軟弱な粘土などで、上層を埋土が覆うなど井戸と類似していることに対し、直径及び深度といった規模が小型で浅いといった特徴を有するものとした。江ノ下遺跡Ａ地区において同様な遺構が調査され、トイレや貯蔵穴など井戸とは異なる用途・機能を想定し、土壌分析を試みたことがある〔柏崎市教委2008ａ〕。しかし、陸生珪藻Ａ群が優占するといった特徴は見受けられたが、寄生虫卵などは検出されず、性格は特定できていない。

天神腰ＤⅡ地区では、ＳＫ-2918井戸状遺構［図版42］が該当する。平面形はほぼ円形で、直径約60cm、深度55cmで、断面形は円筒形となり、井戸と相似的な形態を呈する。覆土は、上下２層に大別され、上層第１層は暗黄白色土の埋土、下層第２層は暗褐色粘土であった。遺物の出土はなく、時期及び性格などは特定できていない。

ｂ　ＳＥ-2819井戸［図版41］

平面形は不定形な楕円形を呈し、長径4.55m、短径3.16mと、規模は特段に大きい。深度は、最深部で2.13

mを測る。断面形は、円筒状というより、ロート状を呈しており、一般的な井戸という形態とはなっていない。特に、北東側は傾斜を緩やかにして張り出すとともに、石敷きにより出入ルートを確保する。この石敷きは、自然石だけではなく、茶臼や石塔の残欠が再利用されていた。

覆土は、井戸廃絶に伴い埋め戻す地山土を主とする一般的な埋土がなく、緩やかなレンズ状堆積となる。１～３層は褐色土系の土質で粘性に乏しく、これに対し下位となる４層の黒色土は粘性を帯びることから、滞水に伴うものと考えられる。さらにその下層となる５層の明褐色粘質土は、窪みに流入した土砂と考えられ、４層との関連性が窺える。同様に８層の明褐色粘質土も流入土で、６・７層の褐灰色粘土層も８層流入後の滞水に関わるものと推測される。９・10層は、粘性が強い暗灰褐色・暗灰色粘土で、窪地に滞水した状況下の粘土層と考えられ、層厚からしても一定期間開口状態にあったと考えられる。

11層は木製塔婆を覆う黒灰色粘土層で、その上面が石敷き面に連続する。地山粒（１～２㎜・１～２cm）を多く含むことから、埋土の可能性が高い。11層の下となる最下層については、土色などの記録がなく不明確であるが、軟弱な灰色系粘土層という記憶がある。層内からは、直径35㎝、長さ約１ｍの大きさで、内部を内径15㎝で刳り貫かれた円筒状の丸太が出土した。当該丸太は、上位にやや大きな自然木が、また真下に大きな自然石を伴っており、これらに挟まれた出土状態であった。丸太内部には、泥が詰まってはいたが、固形物等の遺物は一切確認できなかった。大石は丸太を沈める錘の可能性がある。

出土遺物としては、土器類や木製品、および石製品などが多い。木製塔婆については、石敷き末端の高さとほぼ水平となり、方位としてＮ－55.5°－Ｗ（１号～３号塔婆）、Ｎ－67.5°－Ｗ（４号～５号塔婆）、Ｎ－82.0°－Ｗ（６号・８号塔婆）を指向し並べられて出土したものである。一見して、最下層から出土した丸太などの上位を封印するかのような出土状態であった（図版127 ～ 133）。塔婆の出土、及び出土状況からすれば、当該井戸については、単なる井戸として機能し廃絶したものではなく、異なった意図により再利用乃至再活用がなされた可能性が高い。なお、詳細については、遺物の項にて述べることとしたい。

５）土 坑 類

土坑類については、井戸や柱穴・ピットを除外した人為的穴であり、墓壙や貯蔵穴などを含むが機能・性格等は限定しない。したがって、性格などが不詳なものが多く含まれることとなる。Ｄ地区においては、ＤⅠ地区：４基、ＤⅡ地区：11基を抽出した（附表４参照）。

平面形は、円形や楕円形が多いが、不整円形も３基ほど認められる。規模は、小型となる70㎝台が３基、100㎝前後が６基、大型となる150 ～ 185㎝が４基である。深度は14 ～ 28㎝と浅いものが10基と多く、42 ～ 54㎝とやや深い土坑が３基（ＳＫ-2463・2484・2586ａ）となっている。

ＳＫ-2534ａ土坑　平面形が整った円形を呈し、直径も185㎝と大型となる。壁はやや直立して深度80㎝と深い。覆土は特徴的で、最下層の５層：淡緑灰色粘土が水平堆積すると、４層：暗黄褐色粘土は地山ブロックが80％と大半を占め、３層：明褐色土の地山ブロック40％と多いことから、埋土されたものと理解される。その上位１・２層は、暗褐色土･黒褐色土となる。遺物は、細片となった土器片で、時期不詳、おそらく埋め土に際し混入した類と考えられる。したがって、時期及び性格は不詳である。

ＳＸ-3001竪穴状遺構［図版43・126］　土坑ではないが、性格不詳となる大型の浅い落ち込みとして検出された。平面形は、方形状を呈した不整形で、南側が調査区外となるため、全形は窺えない。北側は浅いＳＫ-3000土坑に切られていた。規模は、東西約4.3m、南北が現状で1.2mほどを測り、概して大型となるが、深度はおよそ30㎝と浅い。覆土の１～４層は、若干の木炭粒と地山粒を多く含む灰褐色粘土で、上

層位を覆う。底面に堆積する５層は、炭化物と灰で構成された黒灰色粘土となる。焼土は、特に確認できておらず、性格は不詳とせざるを得ない。遺物としては、関東系の中世土師器皿底部片（483・484）ともに刈羽三島型皿小片（485）、珠洲鉢破片（486）のほか、瀬戸・美濃（487）や瓦器鉢破片（488）など、小片ながら種別が多い。時期的には第Ⅴ期15世紀前半代が想定される。

６）ＤⅡ地区の建物跡と柵列の群別と変遷

本項では、主に建物跡密集域である29～31グリッドにおける建物跡と柵列の群別と変遷等について、検討を試みることとする。ただし、結果として、ＳＤ-2745区画溝を境に、東側はある程度推測可能であるが、西側については密集度が非常に高く、変遷を追うことが困難と判断した。このため、東西両地区の全体を通した変遷も十分明らかにし得なかったことを、予めお断りしておきたい。

まず、第１表については、各建物跡・柵列の主軸方位別に並べ、かつ柱穴内から出土した土器類等により大別時期区分を示したものである。時期区分の根拠とした出土土器とは、柱穴という遺構の特性から混入等の可能性が極めて高く、柱穴や建物跡等の時期を特定するためには限界を有している。また、建物跡等22例のうち､時期を推測可能な事例が10例と少なく､また第Ⅲ期の事例が７例と大半を占めることとなっている。しかし、出土遺物からみた井戸の年代観は、第Ⅳ期と第Ⅴ期を主体としていた事実とは大きく相違していることから、必ずしも事実を示していないことが明らかである。

群別案は、近接した主軸方位と各時期を合わせ区分したもので、単独３例を含む10群に便宜的に区分した。群別試案の結果と主軸方位と建物跡等の年代観を合わせ見ると、１～６群までは、第Ⅲ期を主体として変移する中に、第Ⅳ期とした３群のＳＢ-95建物跡が、また第Ⅲ期となる６群と10群の間に、第Ⅴｃ期の７群と第Ⅴｂ期の８群が収まるというように、一連の流れで順番に変移する状況となっていない。この結果は、第Ⅲ期の土器類が出土している４群から６群、あるいは７群の一部は、混入の疑いが高く、井戸の時期などを参考とすれば、第Ⅳ期や第Ⅴ期に区分され得る可能性を示している。

また、密集域を東西に区分するＳＤ-2745区画溝と重複する事例は、２群（ＳＢ-98・ＳＡ-102)、５群（ＳＢ-99・105)、６群（ＳＢ-100)、そして９群（ＳＢ-101）の６例を確認できる。これに対し、第Ⅴ期とされる７群と８群には、重複事例がないことから、時期不詳の区画溝は、当該期に掘削された可能性は指摘できそうである。

なお、塔婆などが出土したＳＥ-2819井戸については、ＳＢ-108建物跡とＳＡ-111柵列が組み合わさる可能性が高い。

主軸方位	建物･柵列	土器による時期区分	群別案
N-35.0°-E	SA-113		1 群
N-68.0°-W	SB-93	Ⅲb期	2 群
N-68.5°-W	SB-98	Ⅲa期	
N-69.0°-W	SA-102		
N-70.5°-W	SB-95	Ⅳ 期	3 群
N-71.5°-W	SB-94		4 群
	SB-104	Ⅲb期	
N-72.0°-W	SB-97		
N-72.5°-W	SA-96		
N-74.0°-W	SB-99		5 群
N-16.0°-E	SB-105		
N-75.0°-W	SB-106		6 群
	SB-107	Ⅲa期･Ⅲb期	
N-15.0°-E	SB-91		
	SB-100	Ⅲ 期	
N-76.0°-W	SA-111	Ⅲ 期	7 群
N-14.0°-E	SB-108	Ⅴc期	
N-77.0°-W	SB-92		8 群
	SB-103	Ⅴb期	
	SA-110		
N-78.5°-W	SB-101		9 群
N-83.0°-W	SB-109	Ⅲa期	10 群

第１表　天神腰ＤⅡ地区建物・柵列群別試案

6　天神腰Ｅ地区の遺構

１）Ｅ地区の遺構概要

Ｅ地区は、Ｄ地区との境界を西側の市道とし、東側については、平成３（1991）年の確認調査において発掘した第12トレンチと第13トレンチにて遺構・遺物が検出されなかったことから、本発掘調査対象外と判断した〔柏崎市教委1992ａ〕。その結果、調査区東端を第11トレンチと第12トレンチとの中間とし、延長約42m区間として設定した。グリッドの表示としては、34 ～ 39グリッドまでとなる。

主要遺構としては、調査区の西端から東側で直角に屈折する堀跡が第一に掲げられる。この他に、道路や区画に関連する溝類や井戸・土坑、及び柱穴類等が検出されているが、西側においては溝類が主体で、建物跡や井戸等は、東側の37 ～ 39グリッドの約15m区間に集中していた。また、調査区東端では、畑地の水田化に伴う掘り込みがあり、遺構・遺物の分布は途切れていた。

検出した遺構総数は149件、その内訳は、堀・溝類７条、井戸18基（含井戸状遺構４基）、土坑類12基、そして柱穴・ピット類が112基となった。

遺構配置について、改めて述べると、34グリッドから37グリッド中程までは、井戸３基のほか土坑類数基が南壁側に散見される程度で、柱穴やピットが検出されておらず、建物が存在しないエリアであったことを窺わせる。調査区の大半を占めるのは堀や溝類であり、並行する溝の存在は、道路など通路としての役割が宛がわれていたものと考えられる。同様な状況は、ＤⅡ地区東側から既に窺われ、南北の区画溝であるＳＤ-3057溝と関わりがあることが明らかである。

これに対し、37グリッド中程から東側、特にその北半には、柱穴・ピットが集中し、そのエリアは堀によって東西に分断されていた。また、堀と重複する井戸も多く、堀掘削以前は建物が建てられた居住域であったことがわかる。したがって、屋敷地が堀によって分断され、両側に跨る建物跡の存在が想定されるが、今回その復元に至っていない。また、堀の内側には、堀の区画方位と整合する建物跡の存在は見当たらない。37グリッド以東の調査区南半部は、井戸が比較的多く分布するも、柱穴・ピット類は少ない。また、散発的な溝や柵列の存在は、西側の堀沿いから連続する通路乃至道路跡が想定される。

２）堀・溝類と通路・道路

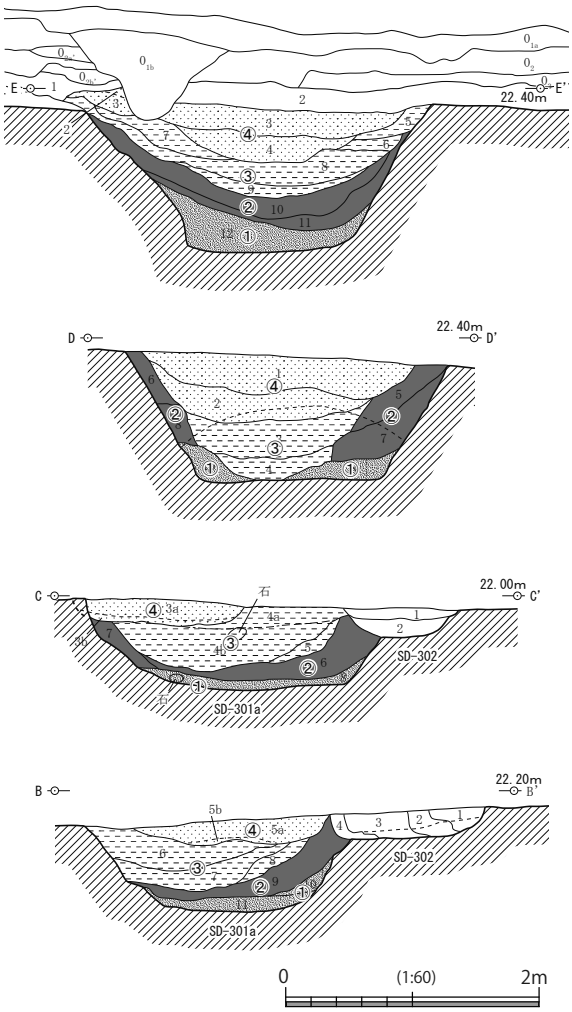
Ｅ地区で検出された堀や溝類の特徴は、１例を除くと東西方向乃至南北方向を統一的に指向しており、方形など直交するように計画されていた点にある。このような方位の指向は、Ｄ地区ＳＤ-3057区画溝とも連携しており、Ｄ地区との境界とした市道と平行するなど、現在の下南条集落域における区画とも整合するものとなっている。

ＳＤ-301ａ堀［図版43］　当該堀跡は、方形館の一部であり、検出状況としては、Ｅ地区の調査区北西端から38グリッド中程で北へ屈曲するまで約40m、コーナーから北壁までが約10mの規模となる。方形館の規模については、対となるコーナーが調査区外であるため、正確な数値は導き出せないが、ＤⅡ地区ＳＤ-3057区画溝の存在とこれと並行する市道、またＳＤ-303ａ・ｂ溝のコーナーなどを考慮すれば、幅約3.5m間の未調査市道を超えるような規模は想定することはできなさそうである。したがって、東西方向に関しては、方形館南堀の延長を40m程度と見積もることとなる。南北辺の規模については、更正図の地割をみても、顕著な状況は看取することができず、不明とせざるを得ない。

堀断面形は、南東コーナー付近となるＥ断面とＤ断面では、底面が水平で、直線的に外傾する壁から逆台形を呈する。しかし、西側となるＢ断面とＣ断面ではやや半円状に近くなっている。この差異については、何度か繰り返された改修の結果と考えられる。

上面幅は、Ｅ断面が2.75m、Ｄ断面で2.55mとなるが、Ｃ断面では2.40m、Ｂ断面で2.15mと順次狭くなる。深度についても、Ｅ断面：1.15m、Ｄ断面：1.05m、Ｃ断面・Ｂ断面：0.75mと順次浅くなるが、調査区の遺構確認面が西側ほどやや低くなることと関わっている。ちなみに底面幅は、Ｃ・Ｄ断面で1.45mとやや幅広になるが、Ｅ断面が1.3m、Ｂ断面では1.25mとやや狭い。指向する方位をみると、東西方向Ｎ－77.0°－Ｗ、南北方向Ｎ－13.0°－Ｅを指向しており、コーナーはかなり正確な直角となる。

土層断面から見た堀の改修については、４回程度を確認することができた。第12図は、覆土堆積状況から推定した改修の状況である。最終となる４段階の底面標高は21.8mで、Ｂ～Ｅ断面でもほぼ同じとなる。３段階では、Ｄ断面が21.3mと第２段階よりも深く掘り込まれているが、Ｅ断面の21.5m、Ｃ・Ｂ断面が21.4mであり、若干の高低差はあるが、その差はわずかである。そして２段階については、Ｅ断面が21.2mとやや深くなるが、そのほか３断面は21.3～21.4mとその差異は僅差となっている。そして、堀最下面については、Ｅ断面が21.1mと最も低くなるが、その他も21.25mと一定しており、計画性が看取される。以上のとおり、当該堀については、改修の精度や維持について、形状が緩くなり、また浅くなるなど段階的に簡略化されているが、長期にわたって維持管理されていたことは明らかである。



第12図　Ｅ地区　SD-301a堀改修図

なお、覆土については、概ねレンズ状堆積となっており、上層位に地山土を主体とする盛土層がないことから、埋め戻しがなされることはなく、自然堆積により埋没したことが窺われる。このことは、館としての機能を失い廃絶したのち、長期にわたって放棄されていたものと推測できよう。

遺物は、堀の規模に比例して多くが出土し、種別も土器・陶磁器類をはじめとして石製品や金属製品、木製品などが確認できている。土器・陶磁器類［図版61～64］のうち、中世土師器をみると、厚手化した刈羽三島型を主体としつつも、関東系Ｂ類としたロクロ成形のもの、また京都系を模倣したものなどがまとまって出土している。しかし、京都系手づくね土師器については、確認できておらず、時期的な下限を示すものである。また陶磁器としては、珠洲が破片ながら多く出土するとともに、瓷器系のものが若干伴っている。また時期的には遡ると考えられるが、輸入陶磁器としての玉縁の白磁碗や梅瓶の小片、青磁碗のほか、国産となる瀬戸・美濃の天目茶碗などが確認される。石製品としては、五輪塔（地輪）や砥石など、金属製品では炉壁や椀形滓など鍛冶関連遺物がある。木製品は曲げ物側板など若干が確認された。

ＳＤ-301ｂ・303ａ・ｂ溝　当該３条の溝は、全て東西方向を企図した溝であるが、ＳＤ-303a・b溝やＳＤ-302溝のように、調査区西端で南へカーブするコーナーとなっていることが窺える。各溝の並行関係からＳＤ-301ｂ溝とＳＤ-303ａ・ｂ溝が対となる可能性が高く、両者の性格が道路側溝であることを示唆している。道路とした場合の路面幅は、およそ2.7mとなり、１間＝1.8m換算で1.5間幅となる。ＳＤ-301ｂ溝は、ＳＤ-301ａ堀に切られており、馬場Ｂ地区の道路側溝と堀との関係と同様に、道路側溝に沿って堀が掘削されていたこと､また道路の北側には館を構える有力者の屋敷地であったことを示すことになる。なお、ＳＤ-303溝は、新旧２条が重複しており、ＳＤ-303ｂ溝と対となるのはＳＤ-301ｂ溝で、ＳＤ-303ａ溝については、ＳＤ-301ａ堀掘削に際し、改修された可能性が考えられる。覆土についても、ＳＤ-303ａ溝が黒灰色～黒褐色粘土であることに対し、ＳＤ-303ｂ溝について黄褐色粘土であり、全く異なっていた。また、ＳＤ-303ａ溝は、Ｅ-36⑦グリッドで途切れているが、その延長としてＥ-37⑰⑱グリッド、Ｅ-38㉕グリッドの浅い溝状遺構が想定され、さらにＳＡ-125柵列が側溝の代替として道路の幅を維持していたものと考えられる。出土遺物としては、ＳＤ-303ａ溝から、珠洲擂鉢破片（634）のほか土師器小片が出土している。

ＳＤ-302溝　前述の道路側溝としたＳＤ-301ｂ溝とＳＤ-303ａ・ｂ溝に挟まれた道路面を縦断する溝跡であり、西端で幅広となるが、南へカーブするコーナーとみられる。ＳＤ-301ａ堀の埋没後に掘削された新しい溝となる。延長は約32m、調査区西端からＥ-38⑪⑯グリッドまでで途切れ、ＳＤ-301ａ堀のＤ断面までは伸びていない。特徴としては、35グリッドの⑯～⑱・㉑～㉒内の６ｍ間、及びＥ-36③グリッドの４か所、そしてＥ-37⑪グリッドでは１か所、溝底面に小坑が穿たれていた。機能や性格などは不詳とせざるを得ないが、他では見られない特徴であった。覆土についても、上下２層に分層されるが、全体的に白濁した特徴ある灰色粘土で覆われていた。遺物としては、珠洲鉢底部（633）のほか土師器小片が出土しているが、混入と考えられる。

なお、当該溝と対になる溝は未確認であるが、堀埋没後の溝であること、また旧更正図上の赤道のルートとほぼ一致することから、道路の片側側溝として機能し、道路部分だけが現代に至ったと考えられる。

ＳＤ-304ａ溝　南北方向の溝で、深度は９㎝と浅い。ＳＥ-305井戸直上を切って構築されていた。区画溝の一種と考えられるが、組合せなどは不詳である。ただし、北端が途切れていることから、ＳＤ-302溝との関連で、赤道となる道路部分に達しない地点で収めている可能性が高い。遺物としては曲げ物の側板（190・192～193）と底板（191）が出土しているが、同一個体と考えられる。土器類としては、瓦器鉢底部破片（635）が出土した。

ＳＤ-366溝　38グリッド内の柱穴・ピット類密集域で検出された幅が不定形の溝で、風倒木の攪乱を受けていた。指向する方位が堀や建物跡と整合しない。須恵器甕口縁部の破片（678）が出土していることから、平安時代など古い時期の可能性もあるが、性格などは不明である

３）建物跡・柵列と柱穴・ピット［図版 44］

復元された建物跡は２棟、柵列も２列であり、柱穴・ピット数からすれば、僅少と言わざるを得ない。特に、堀によって密集域が分断されたことにより、柱穴列の確証が得られない事例が多くなったと考えられる。なお、主軸方位から見ると、ＳＢ-123建物跡とＳＡ-121柵列、ＳＢ-122建物跡とＳＡ-125柵列の組合せが想定されるが、後者についてはやや距離があることは否めない。規模などの基本的属性は、附表２にまとめたので、本項では概要を述べておきたい。

ＳＢ-122建物跡　桁行４間×梁間２間の建物で、東側に１間の間仕切りがある。ＳＸ-392不定形落込みと絡み、不明な柱穴３基を推定復元したものである。面積は23.52㎡でやや中型。柱穴の規模は直径が30cm前後、深度は10cm台から30cm前後、52cmとややばらつきがある。柱穴から遺物は出土していない。

ＳＢ-125建物跡　桁行３間×梁間２間として復元したが、北側の柱穴はほとんど未検出であり、規模などは不明確である。柱穴からは土器類等の遺物は出土していない。

ＳＡ-121柵列　柱穴４基による柵列として復元した。ＳＢ-123建物跡と関連する可能性が高い。遺物の出土はない。

ＳＡ-125柵列　柱穴５基による柵列。東西道路の境界を示す意図が感じられるとともに、やや距離を隔てるが、ＳＢ-122建物跡との関連性が想定される。遺物の出土はない。

４）井戸・井戸状遺構

井戸状遺構４基を含む18基が検出されている（附表３参照）。ＳＤ-301ａ堀と重複乃至接する事例が６基と多く、堀掘削以前の遺構分布の在り方を示唆する。

井戸の規模は、後述するＳＥ-325井戸を除くと、直径が１ｍ以上～122cmに10基が集中し、134～163cmの幅では３基となる。深度については、ＳＥ-417井戸の101cmが最も浅くなっているが、130～205cmの深度に集中する。井戸状遺構は、直径が60cm前後から80cm程度と小型で、深度も１ｍ前後から最深でも118cmに過ぎない。

井戸出土遺物、特に土器類から見た時期は、第Ⅲ期に属する事例が14基中６基（42.9％：ＳＥ-311・312・313・314・331・339ａ）と多く、その他では第Ⅱ期の２基（SE-310ａ・413）、また第Ⅰ期でも１例（ＳＥ-325）が確認でき、後者は本遺跡では最古の事例となる。これら９基は、堀掘削以前の所産であり、堀と関連する可能性が高い事例はＳＥ-305井戸１基だけであるが、堀の外側に位置していたことから、直接的な関連は認めがたい。なお、井戸状遺構４基からは遺物の出土がなく、井戸とは異なる性格を示す相違点として指摘できるが、時期の特定を困難とする。

ＳＥ-325井戸［図版44・65・84～91］　Ｅ地区で例外的な規模となるＳＥ-325井戸は、直径が2.5ｍ前後、かつ深度も265cmと深い。特異な特徴は規模だけではなく、大量に出土した遺物群にも窺える。まず、漆器椀荒型は38個体が井戸底からまとまって出土、その他円盤状木製品の未製品など、さらに下駄や縄など様々なものが出土している。土器類では、玉縁の白磁や須恵器甕片が伴っていた。

５）土 坑 類

土坑類については、大型で不整形な落ち込みとなるＳＸ-392を含むなど、柱穴・ピット類や井戸・溝などを除いた性格不詳な穴を一括したものである。総数としては合計12基となるが、墓壙と想定されるものは認められなかったほか、性格が特定できる事例はない。平面形や規模などについては、附表４にまとめたので参照されたい。ＳＫ-308土坑は、直径が224cmと大型の円形土坑であるが、深度は32cmと浅い。また、ＳＫ-386土坑も円形で、直径が120cmとやや大型であるが、深度が38cmと浅い事例である。

Ⅳ　遺　　物

1　遺物の概要

馬場・天神腰遺跡から出土した遺物とは、素材の種別で分類とすると、①土器・陶磁器類、②鉄製品及び金属関連遺物、③石製品類、④木製品類の４種に大別される。出土量からすれば、土器・陶磁器類を主体とする。しかし、木製品類についても、数多く検出された井戸が象徴するように、様々な器種や用途、形態の資料が多く出土した点は、中世を主体とする本遺跡の特徴の一つと言える。

本章では、上記４大別した種別に従い、全体を総括的に分類、あるいは集成等により概観し、一括性の高い遺構別、また特徴的な資料について、各説乃至個別に述べていくこととする。

2　土器・陶磁器類

1）土器・陶磁器類概観と分類・集成

馬場・天神腰遺跡から出土した土器・陶磁器類とは、大きく土器類、陶器類、磁器類に大別される。また、時代としては鎌倉～戦国時代を主体とするが、その前後となる平安時代や江戸時代も僅かながら出土しており、稀に縄文時代の土器・石器も確認されている。本項では、出土土器・陶磁器類の大半を占める鎌倉～戦国時代を中心とした記述を行うこととしたい。

各種別の中で、土器類としては土師器が主体であり、平安時代土器の土師器や稀に縄文土器が確認できる。また、中世陶器としては、大型品が多い珠洲が全体の大多数を占めるが、その他に越前や生産地不詳の瓷器系陶器、および瀬戸・美濃があり、若干ながら須恵器や瓦器および肥前系といった類が出土している。磁器は、貿易陶磁器として、白磁、青磁を主体としつつ、若干の青白磁および青花が認められる。

これら土器･陶磁器類の出土位置は、遺物包含層を表土･耕作土とともに重機で掘削していることから、大半は遺構内出土となるが、一部小型品を除いて破片資料となっており、器形全体を窺える完形品は極めて少なかった。また、土器・陶磁器類の大半が井戸や溝・堀跡など開口して機能する遺構からの出土が多くなっている。結果として、土坑墓など意図的に埋め戻される遺構が少ないことなどを起因として、遺構一括として同時廃棄性が高い資料は少なく、出土状況としては断片的な資料が多くなっていた。

本項では、主要な種別として、平安時代土師器を含む土師器については、柏崎地域を主とするこれまでの研究成果〔品田1991・1999ｂ・ｃ〕に基づきつつ本遺跡出土資料を中心にした分類試案を提示する。この他、珠洲〔吉岡1994・2003〕、越前〔福井県埋文センター 2016〕、瀬戸・美濃〔藤澤2008〕、貿易陶磁器〔山本2000・2010　上田1982　森田1982　小野1982〕の分類等を参考として記述し、出土量が少ない縄文土器・須恵器・瓦器、瓷器系陶器、その他については略述して概観したい。

以下、各種別ごとに土器・陶磁器類について述べたあと、地区別に従い、主要遺構出土例について各説するが、各個体の出土位置や器種等については、土器･陶磁器観察表（附表５）に一括してまとめたので、参照願いたい。

a　土師器の区分と分類

土師器の基本的区分　本項では、平安時代土器である土師器と、鎌倉時代以降戦国期に至る土器について、土師器と呼称し、分類等を試みるものである。分類にあたっては、成形技法と形態、および出自等系統を考慮することによって大別としたい〔品田1991・1999ａ・ｂ〕。

成形技法とは、手づくね成形Ａ類とロクロ成形Ｂ類に大別される。また、出自等の系統としては、在地にあって古代からの伝統的なロクロ成形Ｂ類でなされる一群を北陸系と称するが、関東方面から伝播した一群については関東系とした。また、手づくね成形Ａ類は、京都周辺の成形技法であるが、直接的影響を受けたものと、鎌倉を経由しつつ在地化したものに区分される。後者については、柏崎・刈羽地域では普遍的存在であり、地域的に限定される傾向が強いことから、「刈羽三島型土師器」とした一つの型式としてまとめることとする。これらの視点から、馬場・天神腰遺跡から出土した土師器を分類すると、以下の４群に区分される。

北陸系Ｂ類土師器
刈羽三島型土師器（Ａ類）
関東系Ｂ類土師器
京都系Ａ類土師器

分類各説については、出土量が多く、主体をなす刈羽三島型土師器について記述したのち、その他３類型について概観したい。

刈羽三島型土師器皿の分類　馬場・天神腰遺跡から出土した刈羽三島型手づくね土師器の分類については、器形や調整等により第Ⅰ～Ⅳ群に大別し、さらに調整や器形のバラエティにより適宜ａ～ｃ類及び１～３類に細別する。また、出土数が多い第Ⅱ群と第Ⅲ群については、口径に対し器高の浅深によりｉ～ii類に区分する。概要は第14図・第15図に示した通りである。

まず、大別については、刈羽三島型の出自と目される京都系土師器の地方型として成立する「鎌倉型」に近似した器形や調整がなされるものを基本形として、これを第Ⅰ群とする。また第Ⅰ群が厚手化し、調整が甘くなる一群を第Ⅱ群とし、底部をくぼませ内面をヘソ状に盛り上げる類を第Ⅲ群、また底部が略平底化したものを第Ⅳ群とした。

第Ⅰ群　口縁部外面の２段ナデが顕著な一群

ａ類：口縁部外面２段横ナデが顕著
　１類：内面上段横ナデ顕著
　２類：内面横ナデなし
ｂ類：口縁部外面２段横ナデ
　１類：内面上段強い横ナデ
　２類：内面横ナデなし
　３類：外面が直線的

第Ⅱ群　口縁部外面の２段ナデが不明瞭となり、下段が強調される一群

ａ類：外面２段横ナデ下段強調
　１類：顕著
　２類：やや不明瞭

b類：２段目横ナデの幅が広くなるもの

ⅰ類：やや浅みのもの

ⅱ類：やや深みのもの

c類：２段目横ナデが不明瞭で全体的に丸みを持ち内湾傾向のもの

ⅰ類：やや浅みのもの

ⅱ類：やや深みのもの

第Ⅲ群　全体的に厚手で、口縁部下段の横ナデが強調され、焼成良好な一群

a類：全体的にやや薄手、くぼみがやや浅い。焼成不良

ⅰ類：やや浅みのもの

ⅱ類：やや深みのもの

b類：やや厚手で、くぼみがやや浅いものが多い。焼成やや不良

a類とc類の中間邸な存在

ⅰ類：やや浅みのもの

ⅱ類：やや深みのもの

c類：厚手で、くぼみが顕著、焼成良好

ⅰ類：やや浅みのもの

ⅱ類：やや深みのもの

第Ⅳ群　底面が平底化し全体的に薄手でメリハリを持つ一群

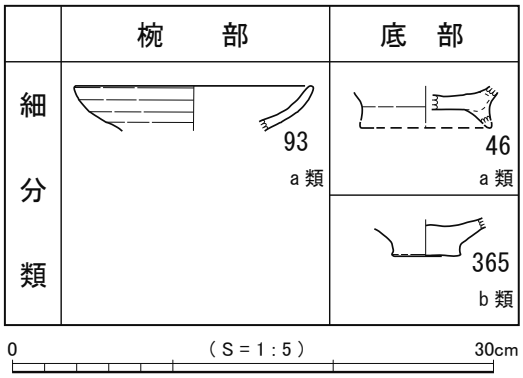
a類：口縁部内面に強い横ナデ顕著

b類：顕著でない

第Ⅰ群が刈羽三島型前期の土師器。a類を基本とするが、b類も調整が繊細的であり、時期的に近接するものと考えられる。身の浅深という法量分化は認められない。出土量・破片とも少ない。

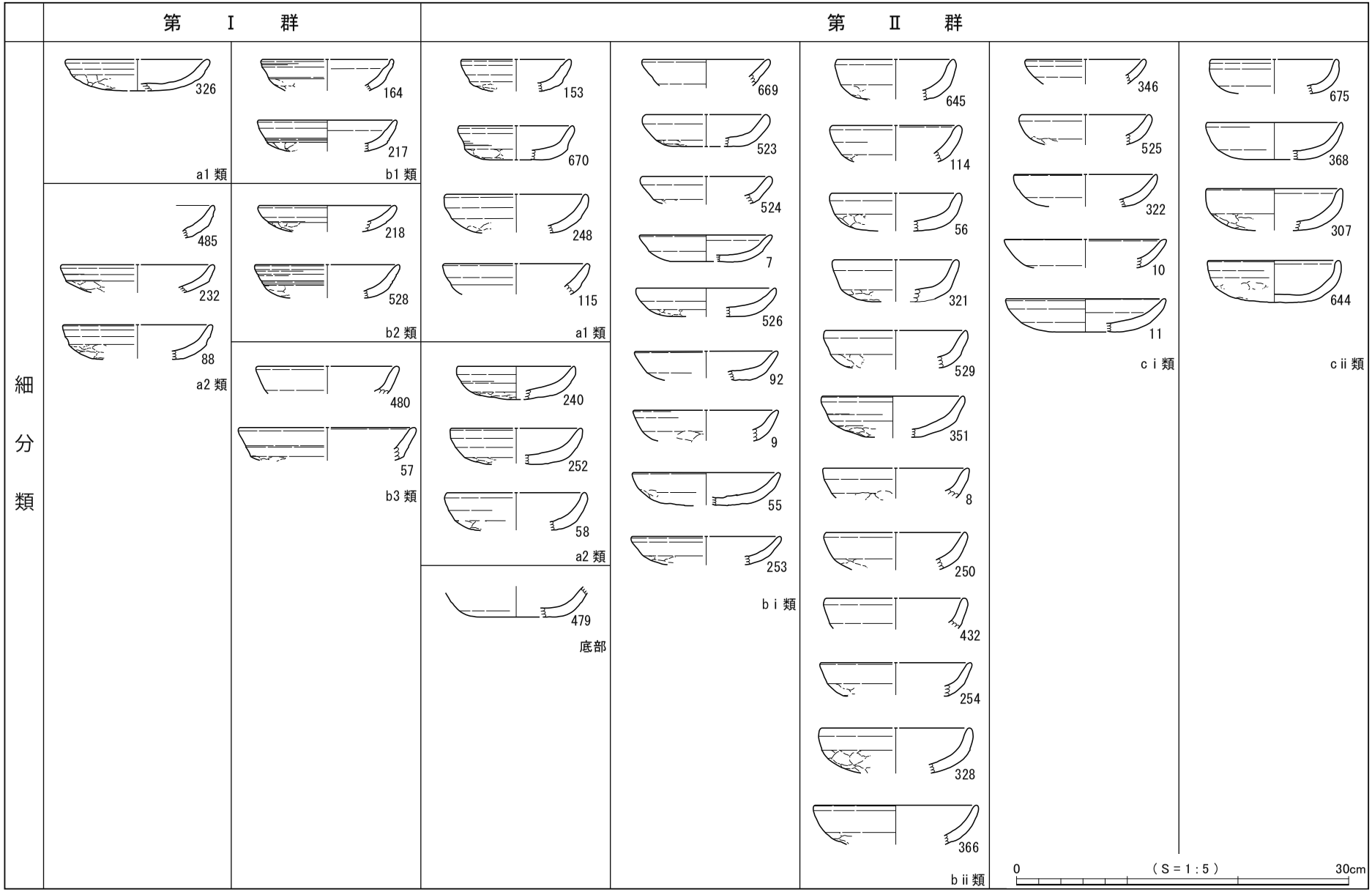
第Ⅱ群は、第Ⅰ群の形骸化と捉えられ、刈羽三島型後期の土師器。第Ⅲ群とともに身の浅深という法量分化が顕著であり、親縁性が強く時期的に並行関係にあると考えられる。特に形態的に類似する第Ⅱ群a類を出自としている可能性が高い。出土量が多く、本遺跡における刈羽三島型の主体を占める。

刈羽三島型土師器小皿の分類　小皿類については、皿類の分類と基本的に同一視点で行うこととした。概要は第16図に示したとおりであるが、全体としては小皿第Ⅰ群と第Ⅱ群は、皿第Ⅰ群と第Ⅱ群にそれぞれ対比される。ただし、小皿第Ⅰ群の細分は資料数の僅少もあり、特徴も微細なことから保留とした。小皿第Ⅱ群の細分は、a～c類までは原則皿第Ⅱ群と同一視点とするが、小皿第Ⅱ群d類については、皿第Ⅱ群では顕著でなかった底部が丸底気味なものを一括した。また、小皿第Ⅲ群については、やや上底気味となるものを含むとおり、概ね皿第Ⅲ群と第Ⅳ群に対比されるものが含まれていると想定しているが、完形品など全形が明らかな事例がなく、細分を保留としたものである。

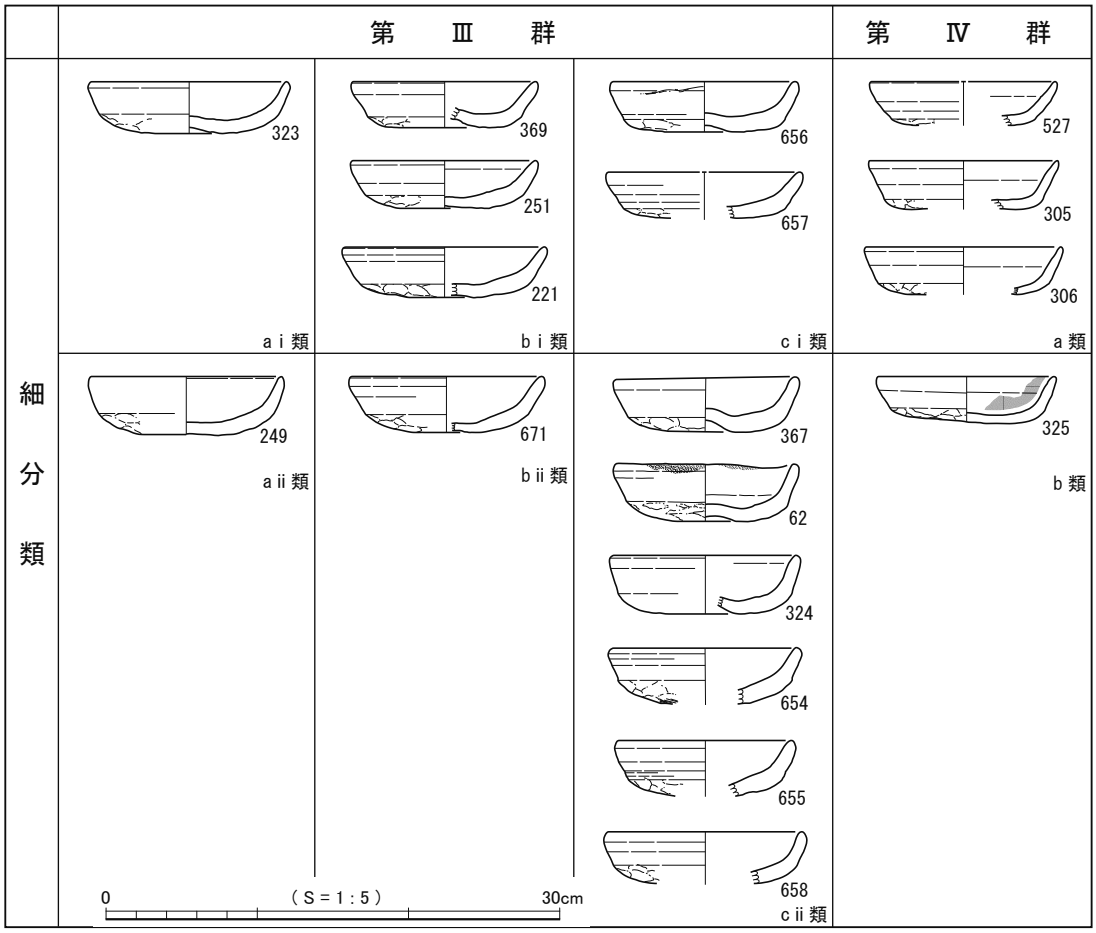


第13図　北陸系Ｂ類中世土師器分類図

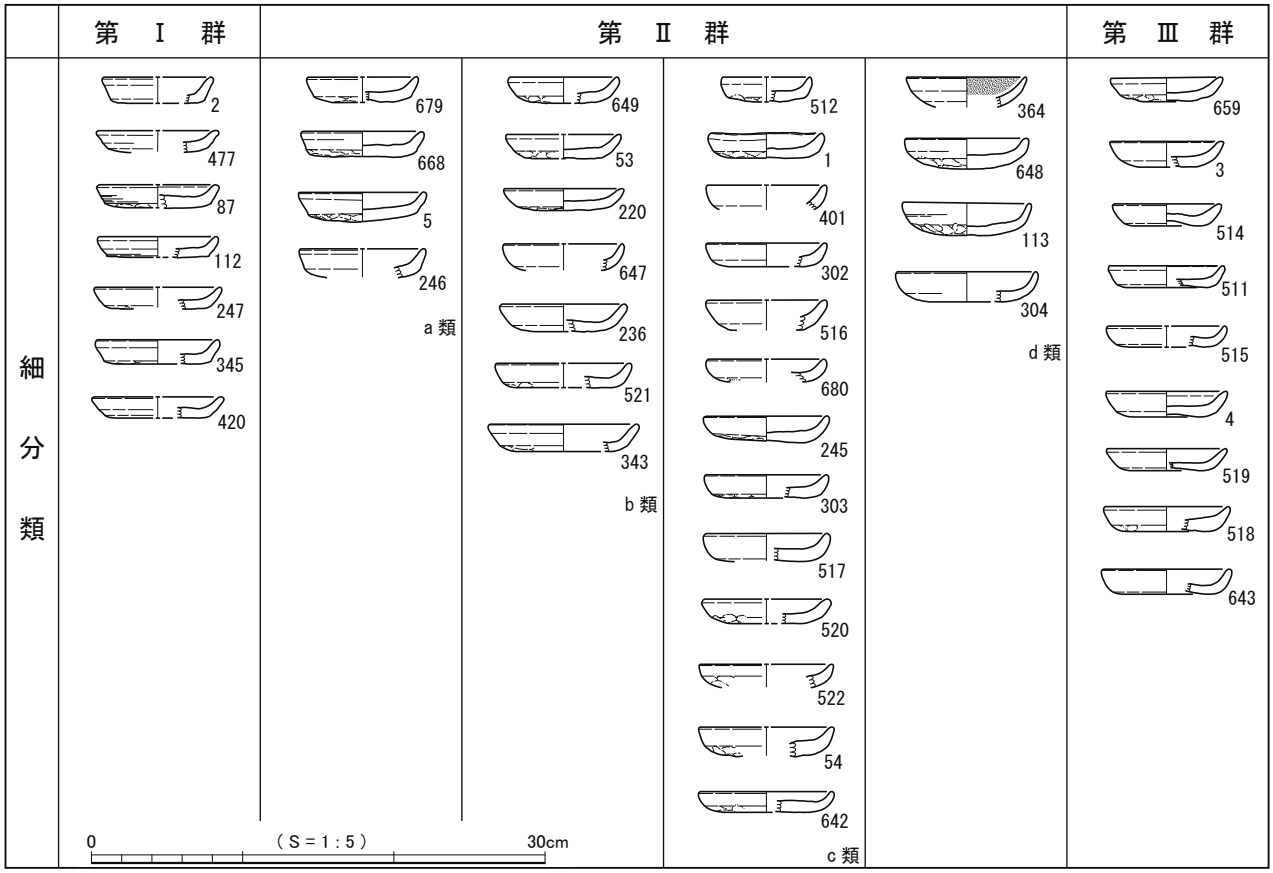
北陸系Ｂ類土師器　北陸系としたロクロ成形の土師器は、平安時代における通有な土師器成形技法であり、その伝統の下製作された土器といった意味を持つ。馬場・天神腰遺跡の主体的時期が鎌倉時代以降であることから、出土点数



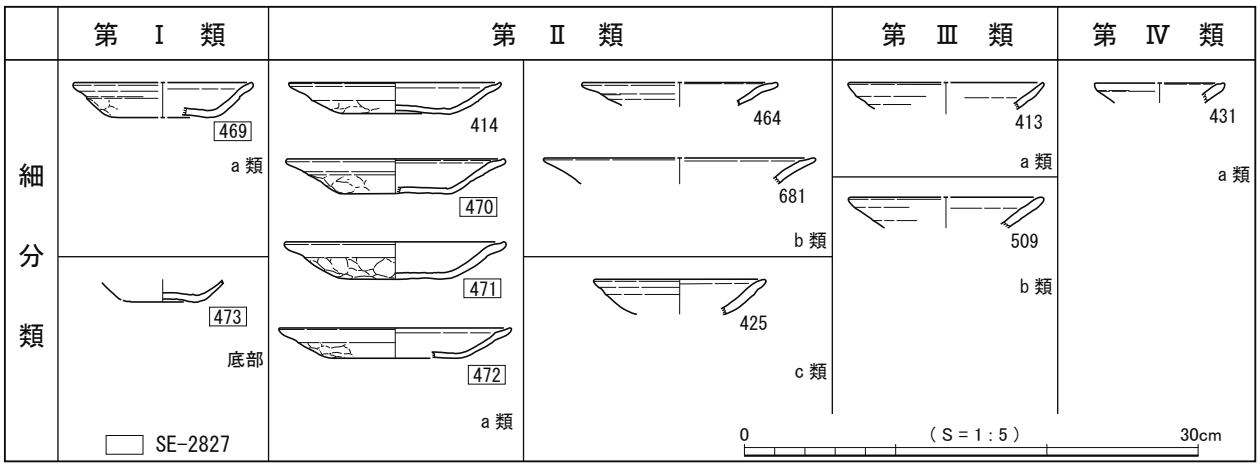
第14図　刈羽三島型中世土師器皿分類図（1）



第15図　刈羽三島型中世土師器皿分類図（2）



第16図　刈羽三島型中世土師器小皿分類図



第17図　京都系Ａ類第二波中世土師器分類図

は少なく、かつ破片資料であることによって、器種のバラエティも限定的であった（第13図）。

結果として器種は、ほぼ椀類に限定され、椀部分と底部に区分される。椀は、やや身が浅く、底部は高台部と柱状高台部分のみであった。

京都系Ａ類土師器　京都系とされる手づくね土師器は、全て第二波とされる戦国期の所産であり、第一波に係る資料は出土していない。図化資料は第17図に示した12点であるが、この他細片が数点確認できるだけで、出土量は僅少であった。また、図化12点中11点がＤⅡ地区に集中し、内５点がＳＥ-2827井戸出土となっており、今回発掘調査された調査区内においては、出土位置をみる限り限定的であった。

分類としては、大きく４類に区分したが、第Ⅰ類から第Ⅲ類までが皿、第Ⅳ類は小皿である。第Ⅰ類は、口縁部外面の横ナデが強く施され、手づくね成形との境界が明確で有段状を呈し、口径に対し身が深いものとした（ａ類）。口縁部内面の横ナデはやや弱く、平坦面や端部のつまみ上げも丸みを帯びている。第Ⅱ類は、口縁部内面の平坦面が明確で、かつ端部のつまみ上げが明瞭、横ナデと手づくね成形との境界は明確であるが有段状には至らず、緩く外反するものとした。細分は、ａ類を典型的な類とし、ｂ類では内面平坦面やつまみ上げがともに緩いものとした。ｃ類については、口縁部の横ナデがやや不良で、つまみ上げがほとんど顕著でない類とした。第Ⅲ類は、口縁部内面の平坦面が不明瞭で、外面も反ることはなく直線的に外傾する類とした。細分では、ａ類がやや繊細でシャープ、ｂ類は端部がやや厚く丸みを持つものとした。第Ⅳ類の小皿については、出土点数そのものが少なく、細分についても限界がある。確実な小皿については、口縁部内面が短く摘まみ上げられており、基本的には第Ⅱ類に対比されるものと考えられる。

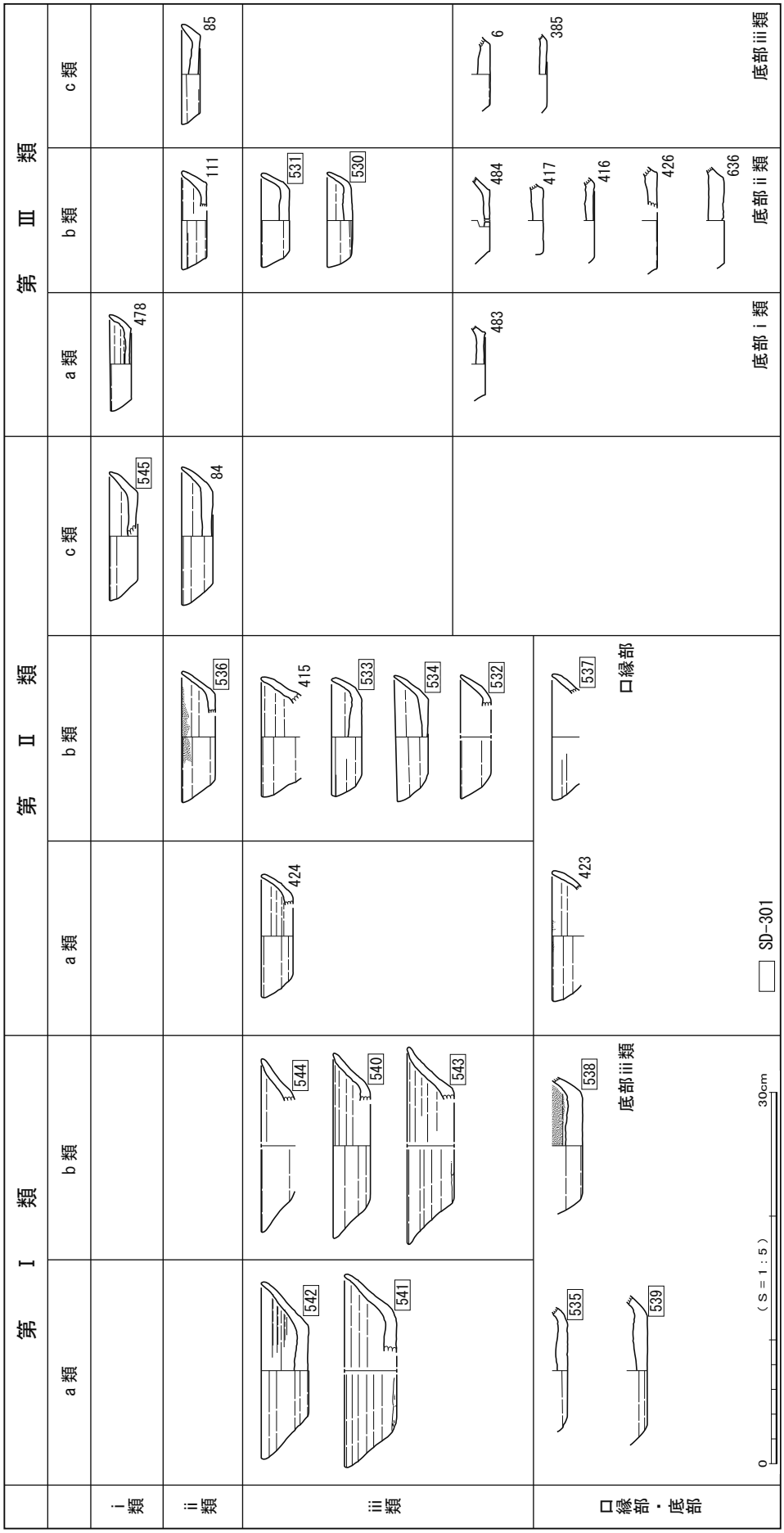
なお、第Ⅰａ類と、第Ⅱａ類については、ＳＥ-2827井戸から一括して出土しており、時期差はないものと推測されるが、第Ⅲ類については、本遺跡内では不詳とせざるを得ない。

関東系Ｂ類土師器　ロクロ成形底部糸切り技法で製作される土師器は、北陸系とした在地の伝統が途絶したのち、関東方面から新たに流入した土師器であり、当時の政治情勢等に関わるものと認識される。形態等については、関東的な形態のものと、京都系第二波の影響を受けたものとに、時期差を含めて大きく二分される。しかし、前者については、県内で良好な資料群が得られておらず、編年的な研究等、不分明なところが多くなっている。

馬場・天神腰遺跡から出土した当該土師器については、第18図のとおり分類を試みた。視点としては、口径の法量により区分し、第Ⅰ類と第Ⅱ類の皿類と、第Ⅲ類の小皿類に大別した。細分の視点としては、

まず器形による分類とした。第Ⅰ類では、口縁部上部が内湾するａ類と外反するｂ類に二分したが、後者は明らかに京都系第二波の影響を受けている。第Ⅱ類Ⅲと第Ⅲ類小Ⅲについては、口縁部が内湾するａ類、外傾角度が30度前後のｂ類と、40度前後のｃ類に区分した。そして、もう一つの分類視点として、底部の作りとして胴部の立ち上がりに注目し、シャープに屈曲するｉ類から、丸みを帯びるⅲ類、その中間となるものをⅱ類とした。

関東系Ｂ類とした土師器は、天神腰Ｅ地区のＳＤ-301ａ堀跡からの出土量が多くなっている。分類区分をみると、第Ⅰ類から第Ⅲ類まで、またｉ類からⅲ類まで、ほぼ網羅していることが窺えるが、量的にはⅲ類に分類される事例が10個体と多数に上る点には注意が必要で、時期的なまとまりをある程度示唆するものと評価したい。その場合、Ａ地区ＳＫ-50土坑の２個体も一つの指標となりそうである。



第18図　関東系Ｂ類中世土師器分類図

土師器の出土分布　土師器の出土分布について、４群に大別した各群別に、分布図により状況を確認しておきたい。まず、北陸系Ｂ類については、個体数が３点と少ないことから分布図は割愛したが、Ａ地区２個体、うち１点はＳＤ－１側溝からの出土、そしてＤＩ地区ＳＤ-2401ａ溝からの１点と、出土地点も距離を隔てるなど、極めて散発的であった。

これに対し、刈羽三島型とした土師器は、出土量も多く、各地区満遍なく出土している（第26図）。このことから、当該型式が本遺跡において極めて普遍的な存在であったことが窺われるが、そもそも柏崎平野一帯で出土する13世紀後半から14世紀代の土師器とは、刈羽三島型がほとんどを占めている。

ただし、調査区個々を比較すれば、濃淡は確かに認められ、削平されたＣ地区、西端を除くＤＩ地区、そして遺構が希薄なＤⅡ地区東半で空白的な様子が確認される。しかし、堀や溝内など遺構に留まらず、一括廃棄された集中出土地点は一切なく、まとまりに欠ける出土状況であったことも示すものとなっている。この点は、遺跡全体の中で当該調査区の性格的位置付けや、検出された遺構群の性格、そして土師器の用途や機能といった問題との関わりが想定され、町屋の一画が調査されてはいても、館内がほぼ未調査となっていることにも、要因がありそうである。

関東系Ｂ類については、ＤⅡ地区遺構密集域とＥ地区ＳＤ-301堀からの出土が多く、その他ではＡ地区やＢ地区西端から散発的な出土という状況を示している（第27図）。濃淡といった傾向としては、かなり明瞭と言える。そして京都系Ａ類第二波の土師器については、ＤⅡ地区遺構密集域にほぼ限定される（第28図）。馬場・天神腰遺跡北辺では、居住域として継続していた区域が縮小していたことを示しているが、本遺跡の終焉を直接的に表しているのかと言えば、調査区が広大な遺跡範囲の北辺に偏っていることからすれば、慎重な判断が求められるであろう。

また、関東系Ｂ類と京都系Ａ類第二波との関係をみると、ＤⅡ地区遺構密集域に多く出土する点で一致する。しかし、関東系Ｂ類が多く出土したＥ地区ＳＤ-301堀では京都系Ａ類の出土はなく、ＤⅡ地区ＳＥ-827井戸では、京都系Ａ類だけが出土しているなど、その他の遺構をみても、両者に共伴関係が認められない。この関係について、年代差を意味する可能性も高く、参考とすべき事例と考えたいが、事例も少なく普遍化できるかについては、本例も慎重な判断が必要である。

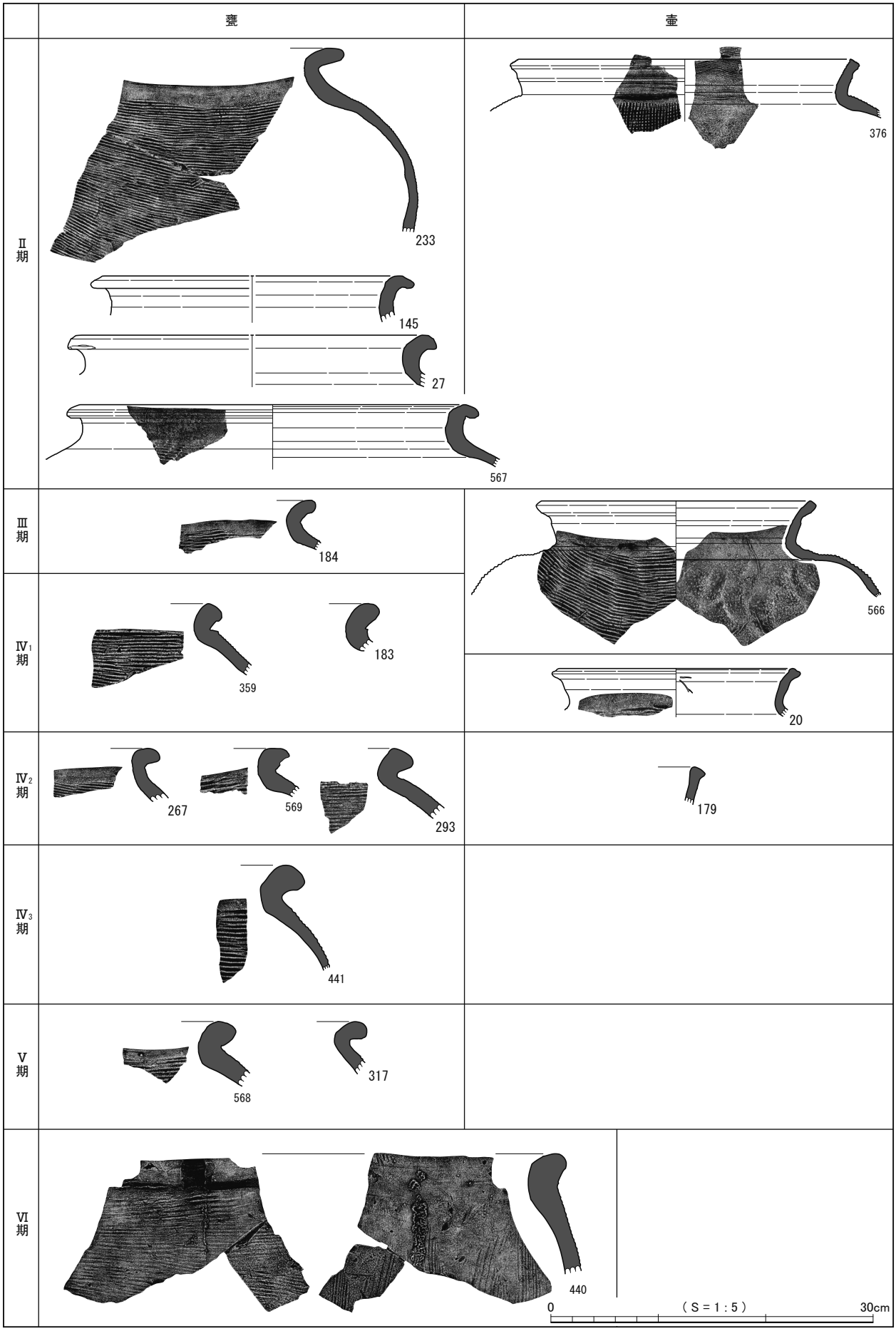
ｂ　陶磁器類の区分と分類・集成

土師器を除くその他の陶磁器類の分類等については、これまでの研究成果を参考とすることとして、本遺跡の出土状況という観点から集成、個々の様相等について概観したい。

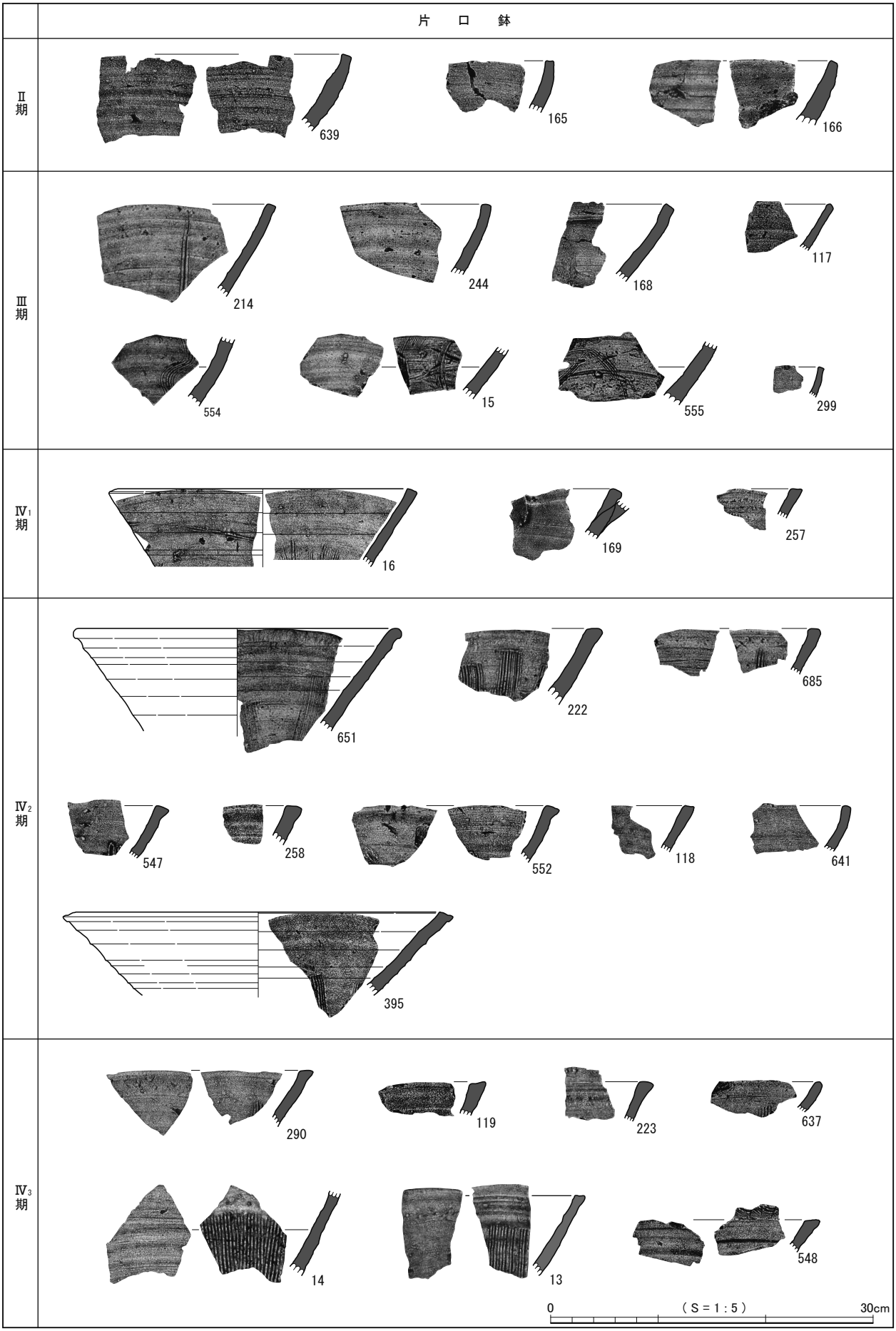
珠　洲　珠洲の分類については、主要器種として、甕、壺、片口鉢の三種が確認でき、その他の器種については明確でない。時期区分については吉岡編年〔吉岡1994・2003〕に拠った。

前述３器種について、出土量をみると、甕や壺の胴部片を考慮すれば、これら大型品の出土量が多くなるが、口縁部を抽出していくと、個体数は少なくなり、特に壺類はかなり僅少という状況が窺える。特に、壺類については、Ｔ種が確認できることに対し、Ｒ種は極めて限定的で、胴部破片が散見される程度となっている。

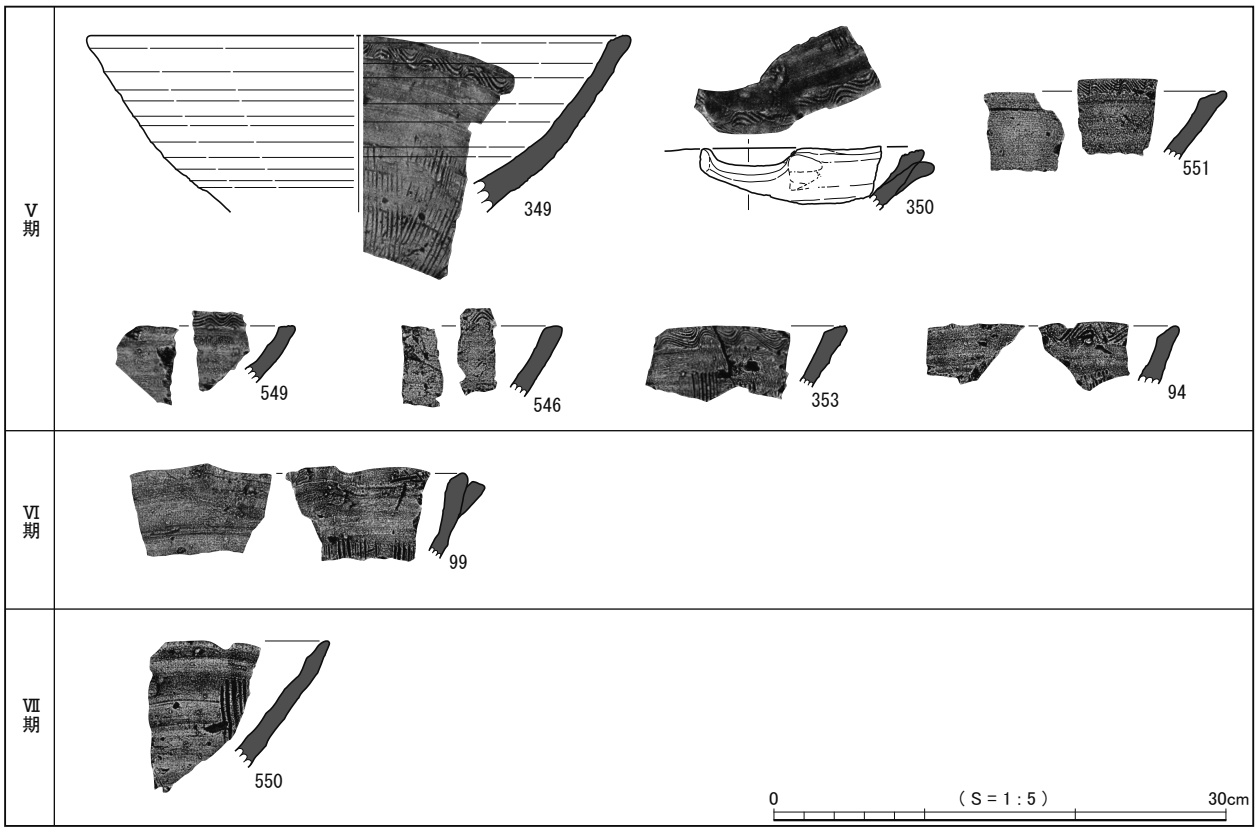
各器種の時期区分について、第19～21図にまとめた。小破片が多く、時期比定に躊躇する個体も含まれるが、概ね第Ⅱ期から出土し始め、片口鉢は第Ⅶ期まで、甕類は第Ⅵ期、個体数の少ない壺は第Ⅳ期の資料が確認できる。片口鉢を参考とすれば、第Ⅱ期以降第Ⅴ期までは一定程度の出土量が確保されているが、第Ⅵ期以降は生産地や流通の動向と関わり極めて稀となっている。



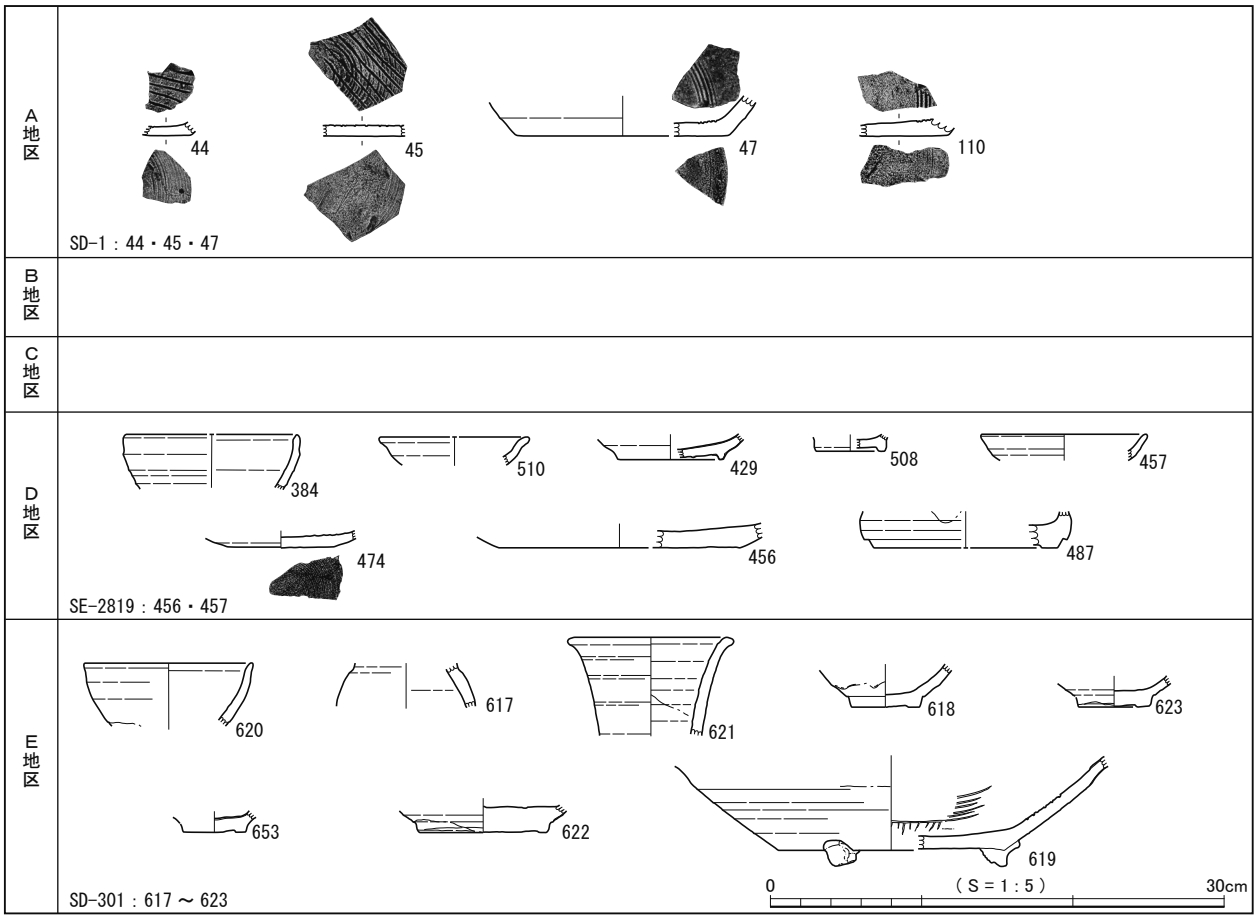
第19図　珠洲陶時期別集成図（1）



第20図　珠洲陶時期別集成図（2）



第21図　珠洲陶時期別集成図（3）



第22図　瀬戸・美濃陶集成図

珠洲の出土分布は、大型品となる甕や壺の胴部破片が多く出土していることもあって出土点数は多くなり、Ｃ地区を除けば各地区全体に満遍なく分布する状況が窺える。しかし、第19～21図の集成図を一瞥して明らかなように、完形品などある程度器形が窺える個体は少なく、小破片が大半を占めている。また、一括性が顕著で資料数が多いという状況が一切ないことは、その他の種別、土器・陶磁器類全般の様相と同じであり、使用から廃棄の共通点としては一致する。珠洲破片の出土状況において、強いて特徴的な点を掲げれば、堀や道路側溝といった溝類からの出土が多いという傾向が窺えるが、その意味もあまり高く評価できるとは言えない。

瀬戸・美濃　瀬戸・美濃については、小破片が多く、器種をある程度認定できたとしても、器形の細部や口縁部と底部の一体性等を追うことができる個体は皆無であった。器種から窺える全体的な様相としては、甕などの大型品がなく、食膳具や嗜好関係の小物が多くなっている。

第22図に示した集成図から地区別の様相を窺うと、Ａ地区では卸皿と大皿の破片それぞれ２点が、ＳＤ－１側溝から出土している。町屋の主要部と目されるＢ地区での出土はない。Ａ～Ｂ地区は庶民的な性格が強く、瀬戸・美濃の出土が少ないものとみられる。対してＤ～Ｅ地区はやや異なる。Ｄ地区では、８点の内、皿類が５点と多く、その他に筒形容器と考えられる底部片が出土するが、天目茶碗２点については注目したい。隣のＥ地区では、８点中７点がＳＤ-301堀出土となるが、天目茶碗が合計３点にのぼり、その他では尊式花瓶２点などやや特殊な個体が確認でき、館という遺構の性格が窺われる。なお、卸目付大皿（619）は、本遺跡では最大の製品であり、破片も大形な代物であった。

時期判定については、古瀬戸編年〔藤澤2008〕を参考とした。大半は古瀬戸後期様式に属するが、大窯製品が僅かに見られるものの特定できる事例は少なく、幅を持たせざるを得なかった。

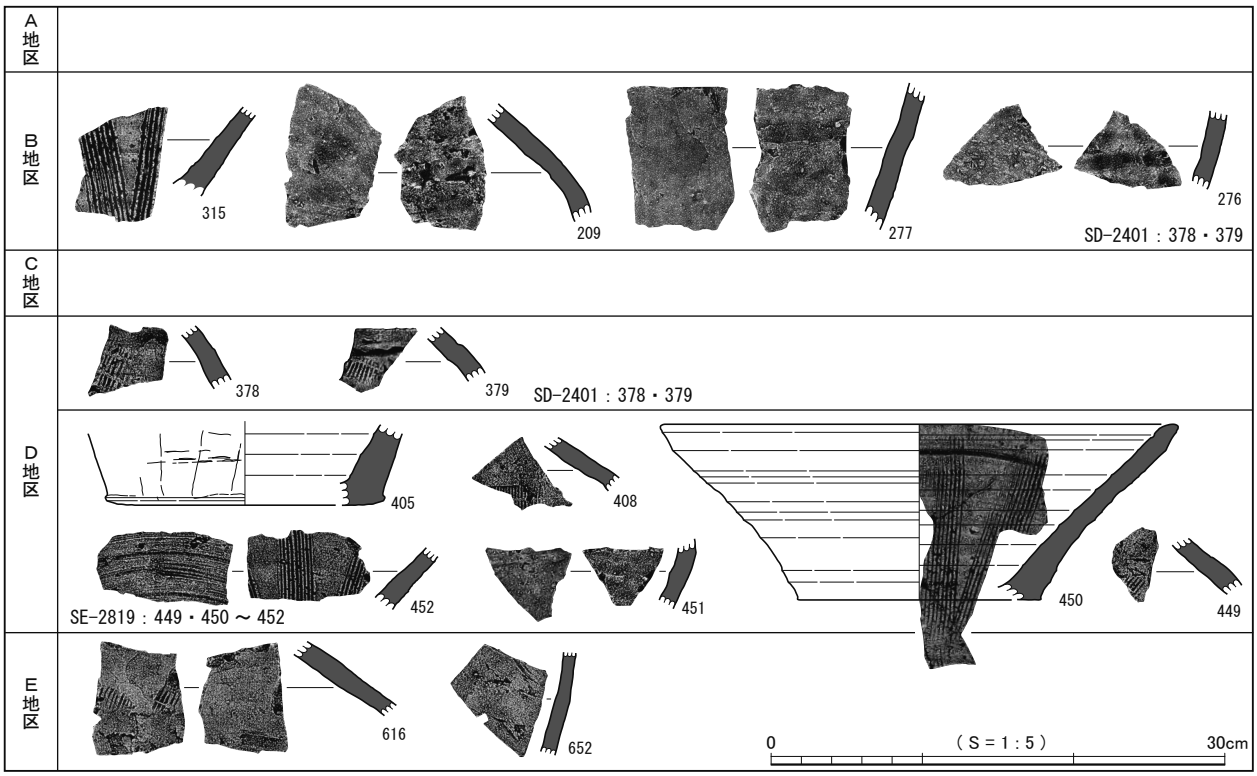
出土状況としては、Ｅ地区ＳＤ-301堀跡からやや多く出土したほか、Ａ地区ＳＤ－１側溝の一画などがあるが、その他は散発的に出土したのみである（第31図）。

越前と瓷器系陶器　瓷器系の陶器としては、産地がある程度明らかな越前以外に、産地不詳のものが若干量出土している。両者の区分としては、胎土が赤色を帯び、鉄釉が施されるものを一応「越前」として一括した。越前及び瓷器系陶器の出土位置をみると、概して散発的でまとまりに欠けるが、遺構としては、Ｅ地区ＳＥ-2819井戸からの出土が比較的多く、その他では道路側溝や路面、区画溝内から出土している。

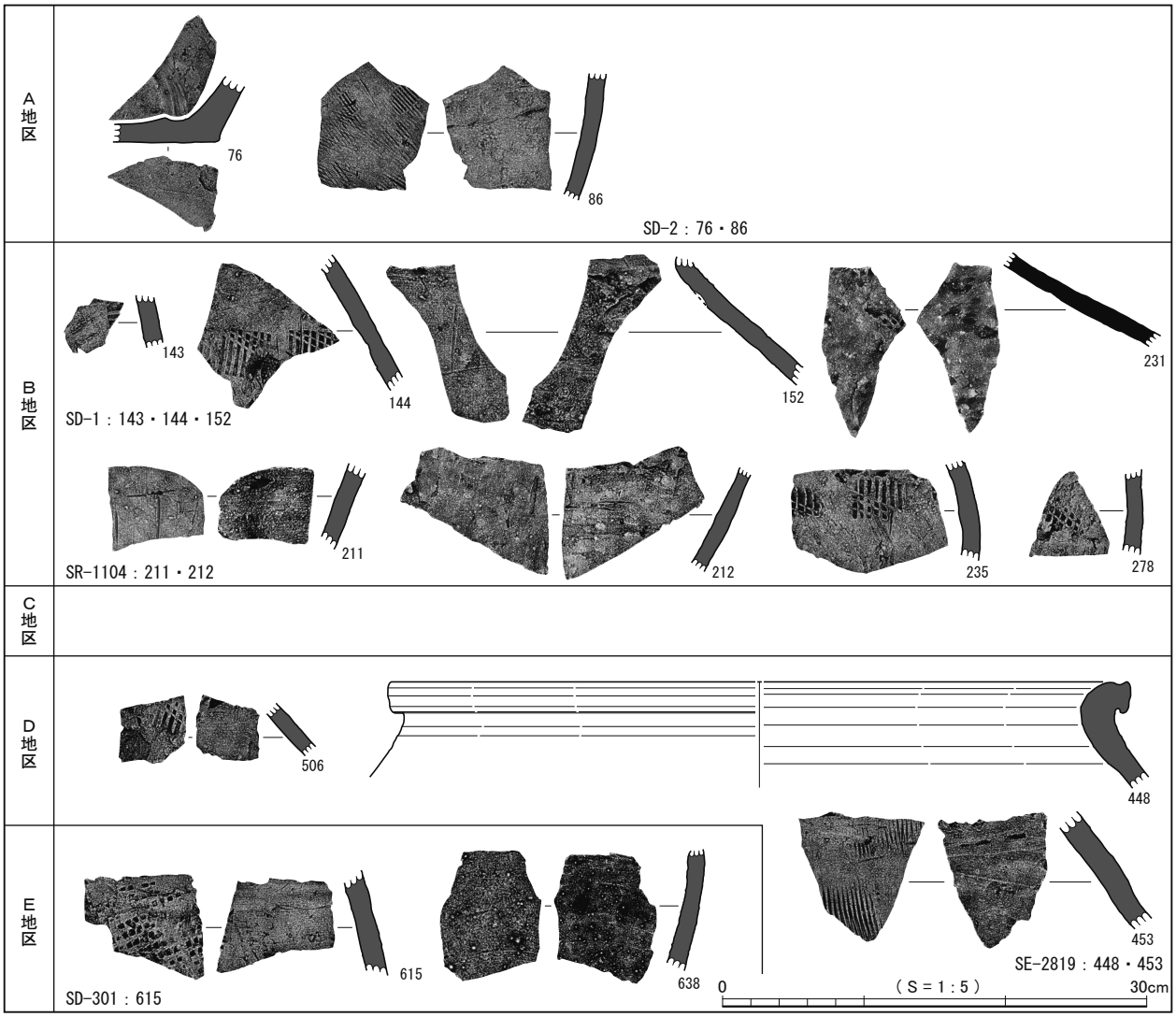
越前の器種としては、甕と擂鉢が確認できるが、壺底部と考えられる破片以外（405）、その他の器種は明らかでない（第23図）。また、大半が胴部の破片資料であり、口縁部から底部付近まで窺える個体は擂鉢１点（450）だけとなっている。出土量は概して少ない。越前の時期については、大きな時期幅はないものと推測されるが、大半が胴部片のため不詳とせざるを得ない。ただし、口縁部を残す擂鉢１点（450）については、越前Ｖ３（新）期（16世紀第４四半期）の所産と考えられる〔福井県埋文センター 2016〕。

越前以外と目される瓷器系陶器とは、色調が灰色を呈し、施釉については、１点(638)を除き、無釉の焼き締めによるものが大半を占めていた(第24図)。また、器種はほとんどが甕と考えられる。資料の大半が胴部破片であり、口縁部は甕の１点（448）だけとなっている。出土量は概して少ない。時期幅はある程度長くなるものと推測される。時期をある程度推測できる個体は甕１点（448）だけであり、越前の編年を参考とすれば、Ⅲ１期頃（14世紀第２四半期頃）に並行する可能性が高い〔福井県埋文センター 2016〕。

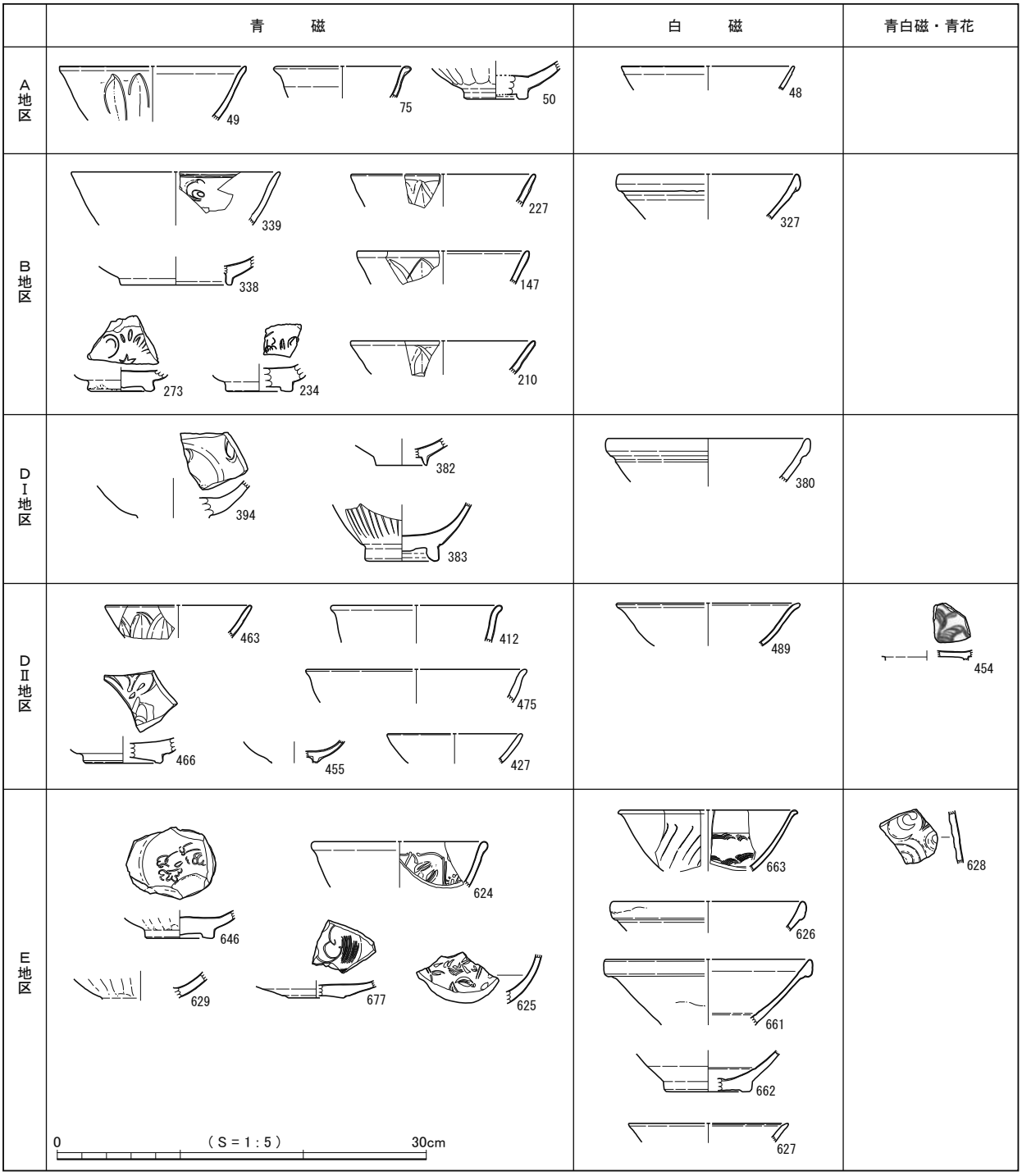
越前及び瓷器系陶器の出土分布図については、第29図と第30図に掲載した。両者の出土量はそもそも少ないことから、散漫な状況が窺える。また、両者共伴的な出土は、溝などを除けばＤⅡ地区ＳＥ-2819井戸だけであり、接点は少ない。



第23図　越前陶集成図



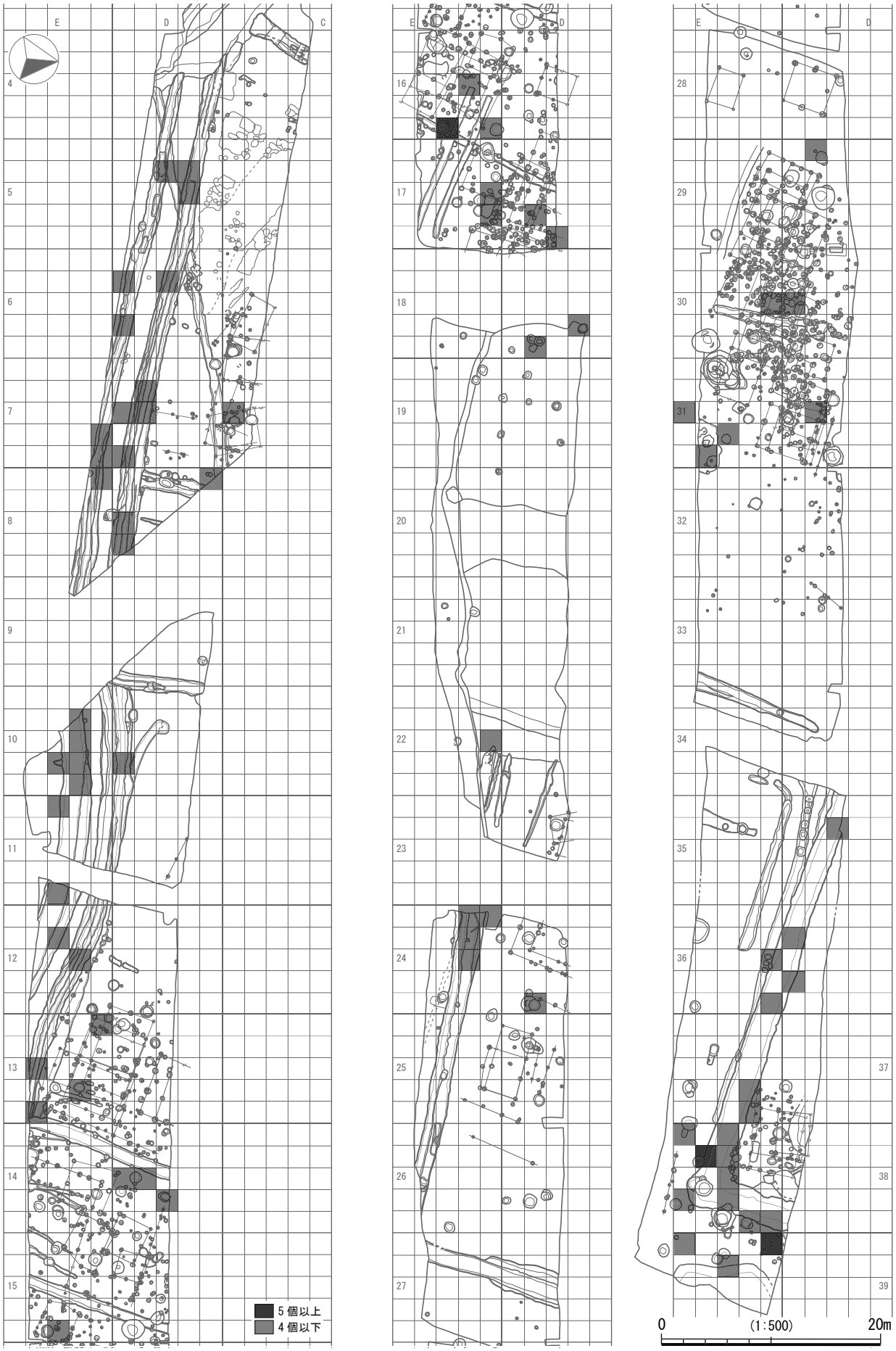
第24図　瓷器系陶器集成図



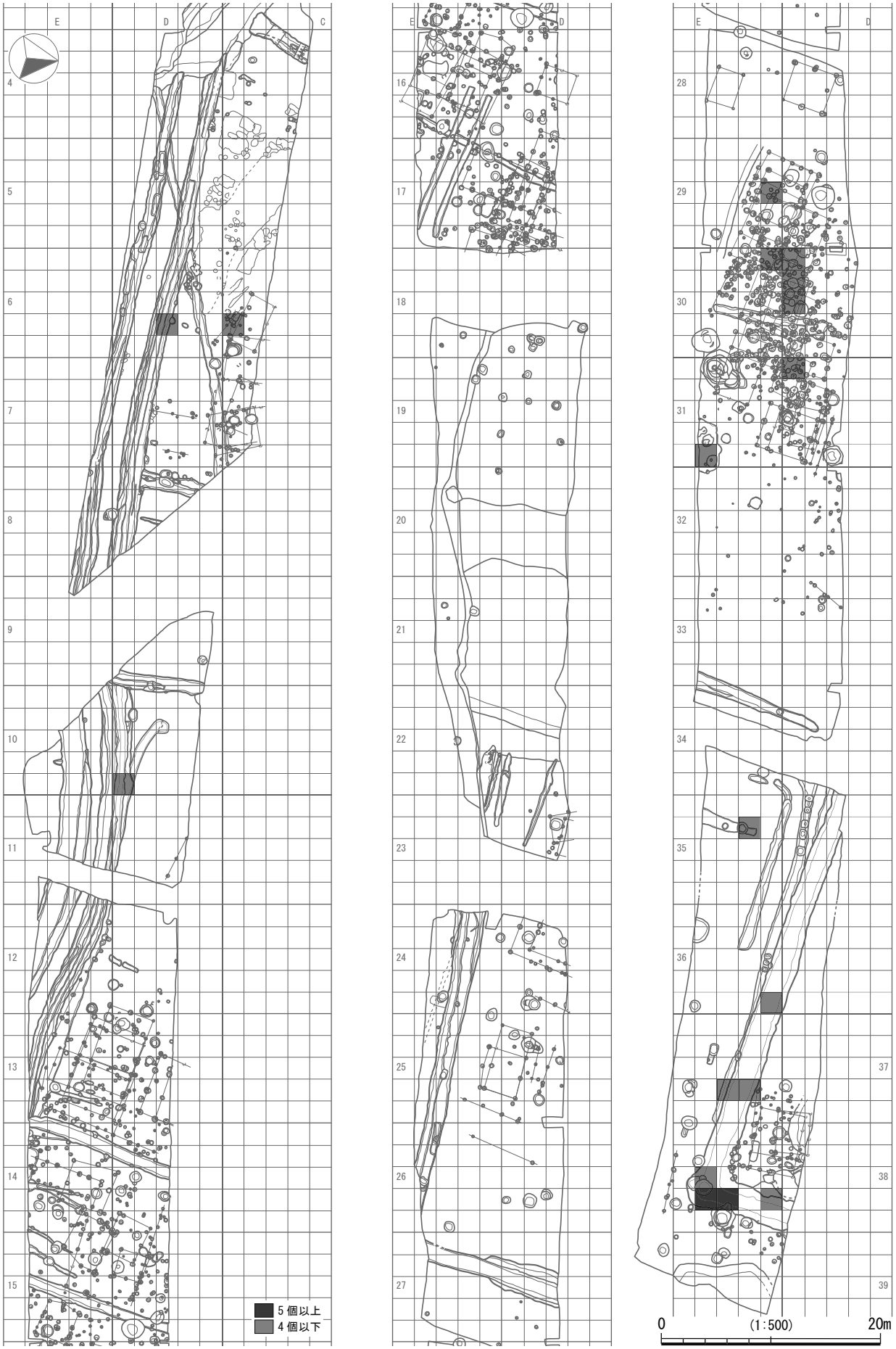
第25図　貿易陶磁器地区別集成図

貿易陶磁器　貿易陶磁器の主体は、過半数を占める青磁で、次いで白磁が続き、青白磁と青花は各１点となるが、全て小破片で点数も総じて少ない。出土状況は各地区から散発的に出土し、傾向的な状況は特に窺えないが、白磁そのものはＥ地区から多く出土している（第25図・第33図）。器種としては、大半が椀類で、皿は青磁１点（677）と青花１点（454）のみ、また食膳具以外ではＥ地区から青白磁の梅瓶（628）の小破片１点が確認されており、特筆される。

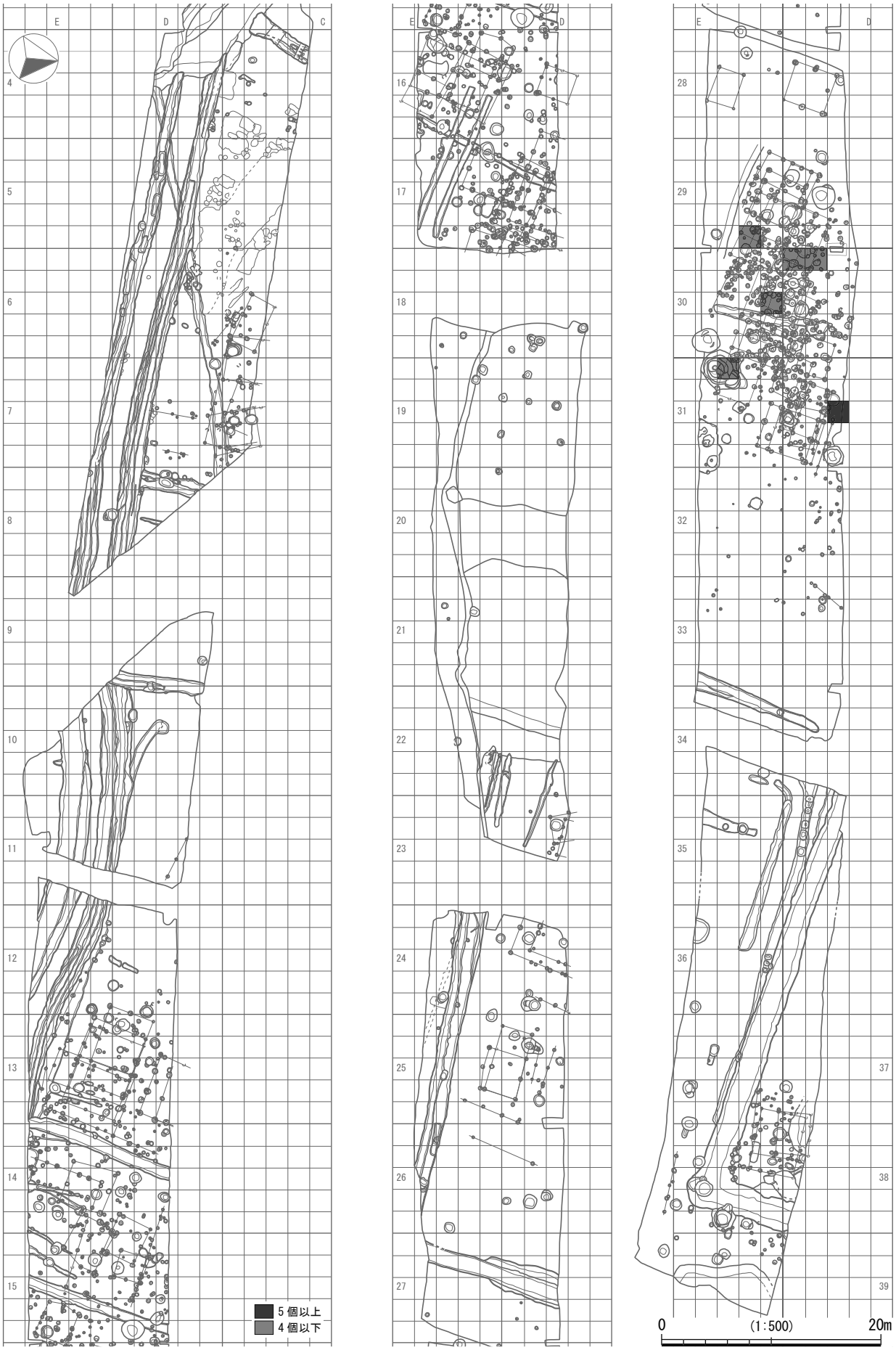
白磁は、口縁部に大きな玉縁を巡らせる碗Ⅳ類が多く、また碗Ｖ４ｃ類（663）の存在など〔山本2000〕、11世紀後半から12世紀後半など、相対的に古い時期のものが主となっていた。青磁碗は、鎬連弁



第26図　刈羽三島型中世土師器出土分布図

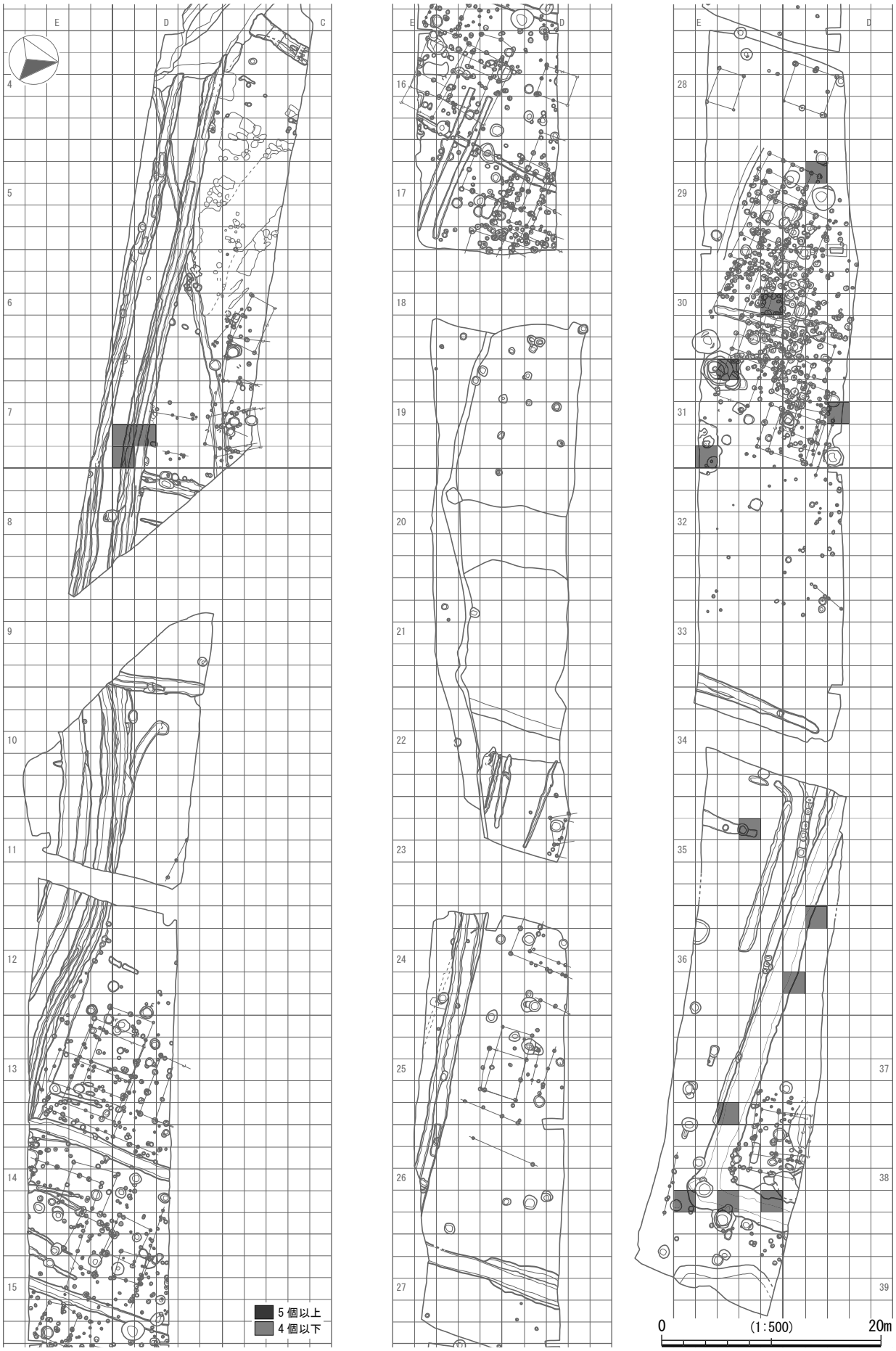


第27図　関東系Ｂ類中世土師器出土分布図

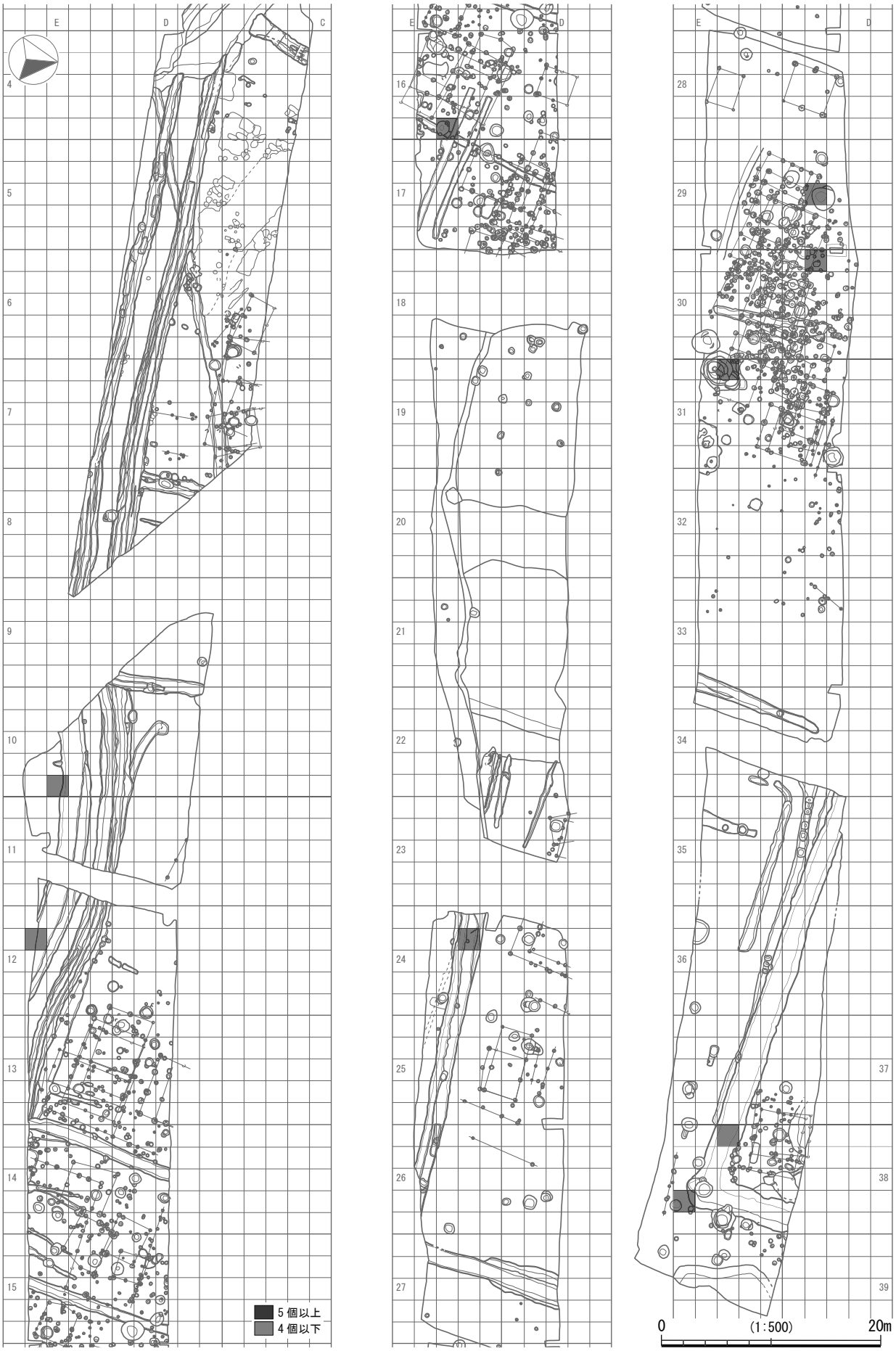


第28図　京都系Ａ類中世土師器出土分布図

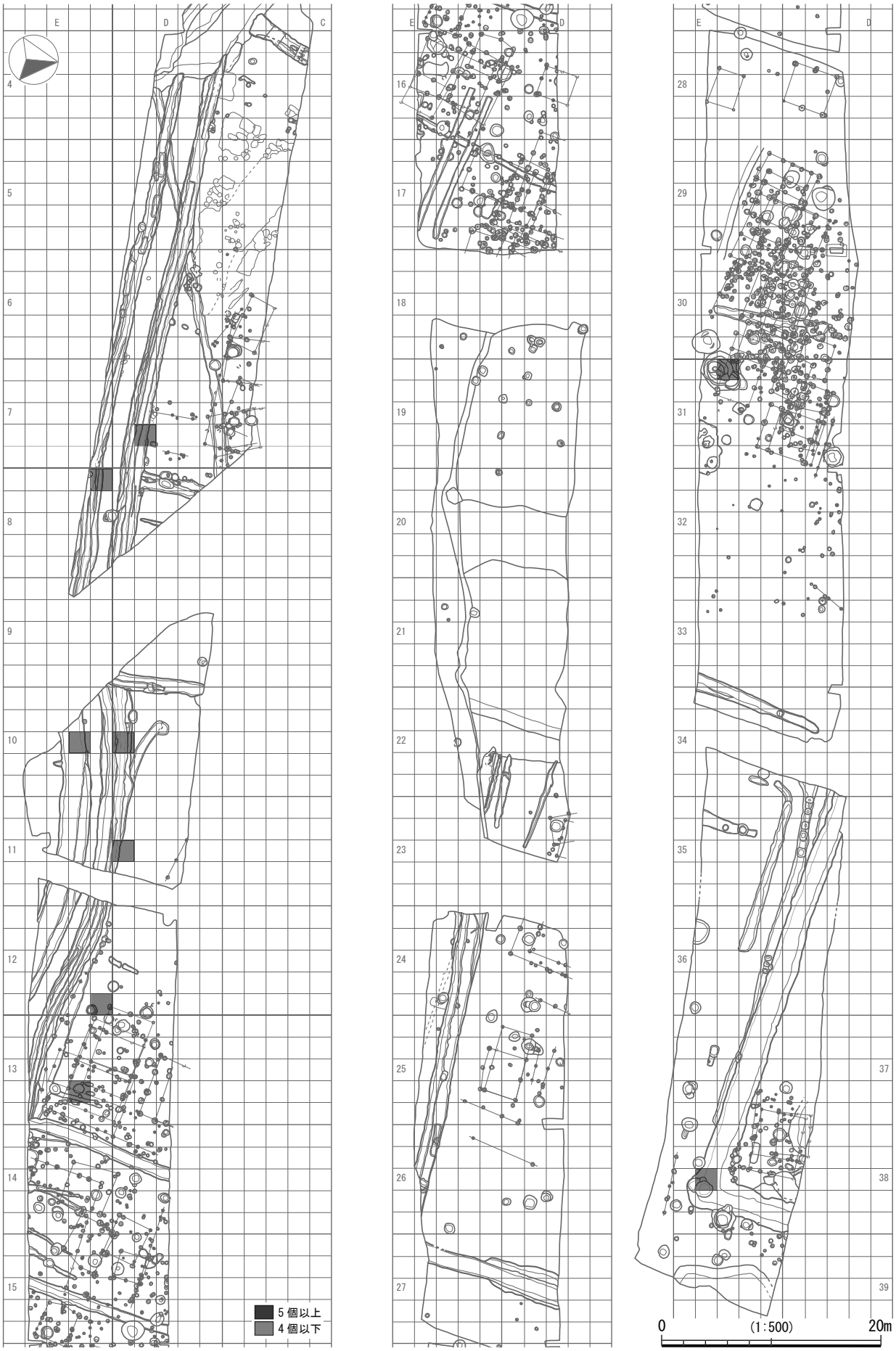
第29図　珠洲陶出土分布図



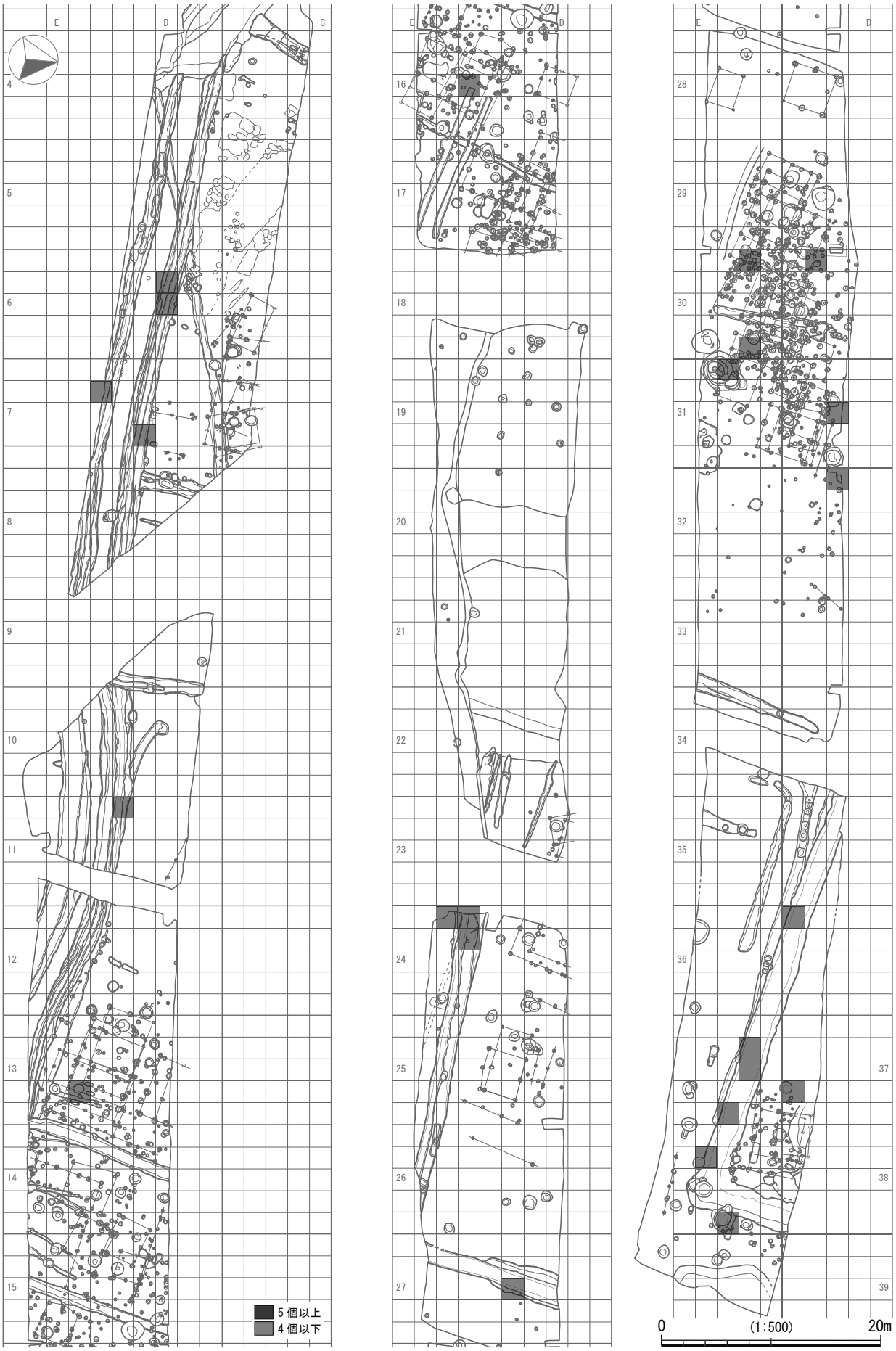
第30図　瀬戸・美濃陶出土分布図



第31図　越前陶出土分布図



第32図　瓷器系陶器出土分布図



第33図　貿易陶磁器出土分布図

紋を施す上田Ｂ-Ⅰ類とＢ-Ⅱ類を主とするが､沈線表現となるＢ-Ⅳ類がＤⅠ地区で１点出土しており〔上田1982〕、13世紀後半頃から15世紀代までの資料が主となっている。

土師器では、北陸系Ｂ類が僅かに出土するが、13世紀前半以前の資料が少なく、特に京都系Ａ類第一波の痕跡がほとんど認められない。白磁碗の出土とは、整合しないように見受けられることから、土師器導入に係る地域的な課題が含まれているのかもしれない。

ｃ　その他の土器・陶磁器類（縄文土器・須恵器・瓦器等）

馬場･天神腰遺跡では、前項では述べなかったその他の種別としては、縄文土器、須恵器、瓦器、唐津、越中瀬戸、そして出所不明な近世陶器といった資料が出土している。

縄文土器　縄文土器については、細片のため図示はしていないが、遺構内に混入した時期不詳の小片が数点ほど出土しており、磨製石斧の出土に見られるように、縄文人の痕跡が僅かに確認される。

須 恵 器　上述の種別で最も多く出土しているのは須恵器であり､図示では26点に上る。器種としては、甕が口縁部４点、胴部破片21点と大半を占め、食膳具となる有台椀は底部の１点（430）に過ぎない。出土状況としては、Ｃ地区を除き各地区において散発的に出土している。時期的には春日編年Ⅵ期（９世紀後半）が主体であり、佐橋荘立荘以前において古代集落が形成されていたものと推測できる。しかし、当該須恵器に伴う土師器については、ほとんど確認できておらず、集落遺構を含め中世において撹乱されたものと考えられる。ただし、Ｅ：ＳＥ-325出土の須恵器甕片の時期は、要注意である。

瓦　　器　３点（77・488・635）を図示した。器種は、鉢と想定され、口縁部１点、底部２点となる。

唐　　津　３点（458・459・468）を図示しているが、全てＤⅡ地区出土となる。特に、塔婆が出土したＳＥ-2819井戸に２点が伴っていた。器種としては、鉢・皿類である。

越中瀬戸　確認できたのは、柱穴から出土した小皿１点（495）だけである。

近世陶器　産地不詳の陶器２点が出土、図示した。器種としては、甕底部（316）と小皿（381）となる。

２）土器・陶磁器類各説

土器・陶磁器類の個々については、附表５の観察表に記載したことから、本項では各地区別、また遺構別等により、概観しつつ述べていきたい。

ａ　馬場Ａ地区［図版 45 ～ 48・147 ～ 149］

Ａ地区から出土した土器・陶磁器類は、調査区を縦断する道路側溝であるＳＤ- １・２が大半を占め、井戸・墓壙など遺構に伴うものは、それぞれ数点程度となっている。側溝出土については、それぞれ複数回の改修がなされ、かつ開口して機能する性格上一括性は乏しい。一括性をある程度有効とする事例は、ＳＫ-50土坑とＳＥ-146井戸の２例程度である。

ＳＤ -1 側溝（1～52）

種別としては､珠洲（13 ～ 43）を主体に中世土師器（１～ 12)､須恵器（51 ～ 52)､土師器（46)､瀬戸･美濃（44 ～ 45・47)、青磁（49 ～ 50)、白磁（48）と多岐にわたるとともに、年代幅も大きい。出土状況としては一括性に乏しく、散発的な出土状況であった。

土師器は、刈羽三島型が大半を占める中で、関東系Ｂ類の底部破片１点（６）が含まれていた。刈羽三島型の皿については、５点すべてが第Ⅱ群に集中し、中でもｂ類やｃ類などやや厚手で形骸化したものが

多い。小皿は、第Ⅰ～Ⅲ群すべてにわたる。５は唯一の完形品である。珠洲は、甕、壺、片口鉢の三種が確認できるが、大半が甕と壺の胴部片で占められ、時期判定に有効な口縁部は少ない。甕は、Ⅱ期と考えられる１点（27）、壺はⅣ１期の１点（20）と少ない。片口鉢は、Ⅲ期（15）、Ⅳ1期（16）、Ⅴ期（13・14）と時期幅を持つ。瀬戸・美濃については、卸皿底部片２点（44・45）のほか、大皿底部片（47）が出土した。貿易陶磁器としては、青磁碗のＢ-Ⅱ類（49・50）と白磁碗細片（48）が１点出土している。この他に、須恵器甕類（28・51・52）と断面の摩滅が著しい土師器有台椀底部片（46）が混入していた。

ＳＤ－２側溝（53～77）

珠洲破片（59～61・63～74）を主体に、土師器（53～58・62）が伴うが、その他として瓷器系陶器（76）や青磁（75）、瓦器（77）の破片が出土している。出土状況としては、ＳＤ－１側溝と同様に散発的で、一括性が認められる状況はない。

土師器は全て刈羽三島型で、摩滅した破片が多いが、第Ⅲ群ｃ２類とした62は唯一完形品であった。特に、内外面が黒くすすけた状態で、口唇部の一部にタールが付着していることから、燈明皿に転用されていたことがわかる。また、内底面の調整は、突出部を手づくねのままとして、窪み部分から時計回りで口縁部へ横ナデを施している。珠洲は、片口鉢底部（63）と壺Ｔ種（64）以外は、ほぼ甕胴部片である。なお、甕の大破片となる74については、ＳＤ－１側溝出土破片と接合している。瓷器系とした底部破片（76）は、灰色を呈しており珠洲の可能性を否定できないが、立ち上がりの胴部内面に煤が付着する。青磁は、碗Ｄ-Ⅰ類で時期的にやや下る。

ＳＫ-50土坑（83～85）

土壙墓とした土坑で、土師器と珠洲片口鉢底部（83）が出土している。珠洲は覆土内への混入と考えられるが、土師器は共に関東系Ｂ類としたロクロ成形の皿（84）と小皿（85）であることから、セットとして意図的に埋納された可能性が高い。皿は伏せられた状態で出土した（図版99-ｈ）。皿は第Ⅱｃⅱ類、小皿は第Ⅲｃⅱ類で、形態の類似性（ｃ類）と、底部の形状（ⅱ類）から、同時期の所産と考えられ、本遺跡では数少ない共伴例である。

ＳＥ-146井戸（87～88）

土師器の皿（88）と小皿（87）各１点が出土した。皿は、第Ⅰ群ａ２類、小皿は第Ⅰ群に分類され、両者とも白色で類似した胎土であり、共伴関係の事例としたい。ただし、２点とも小破片であることから、必ずしも妥当ではない。

その他の遺構（78～82・86・89）

この他、Ａ地区の遺構出土土器類等は、ＳＸ-45（撹乱坑）（78･79）、ＳＫ-111土坑（80）、ＳＥ-123井戸（81･82）、ＳＥ-146井戸（89）、ＳＤ-16溝（86）から、それぞれ珠洲が出土しているが、何れも小破片であり、混入の類である。

表　土（90～110）

表土除去については、重機によって実施したが、その際に出土した土器類等である。珠洲破片を主に、土師器椀（93）、中世土師器では刈羽三島型（92）と関東系Ｂ類（91）の出土があり、その他では瀬戸・美濃の大皿（110）が認められる。

ｂ　馬場Ｂ地区［図版49～55・149～154］

Ｂ地区では、Ａ地区からの延長として、道路側溝のＳＤ－１・２から比較的多く出土しているが、一括

性はやはり乏しく、時期幅を持つものとなっている。その他、調査区が町屋本体に掛かり、区画溝３条や数多くの柱穴や井戸が検出されたことにより、遺構出土の土器類も概して多い。しかし、大半は破片が散発的に出土していることに変化はない。

ＳＤ－１側溝（111～152）

珠洲を主体に、土師器（111～115）、青磁（147）、瓷器系陶器（143～144・152）、須恵器（149～151）の出土が確認される。土師器は、関東系Ｂ類の小皿（111）が確認される。第Ⅲｂⅱ類で、底部立上りの角は図示よりも緩い。その他４点は、刈羽三島型の皿（114・115）と小皿（112・113）である。完形品となる小皿113を除く３点は、全て小破片となっている。珠洲は、甕壺類の胴部破片が大半で、時期判定が可能な口縁部は少ない。甕145はⅡ期、片口鉢の117はⅢ期、片口部分となる118はⅣ２期と時期幅を持つ。なお、壺Ｒ種（116・124）が僅かに確認される。瓷器系陶器とした３点は、全て灰色を呈し、無釉の甕類である。143・144はたたき痕を巡らせる。152は口縁部直下で、肩上部の破片で、直線的に膨らむ。青磁碗147は、Ｂ-Ⅱ類に分類される。この他の須恵器は、３点全て甕破片で、内面に青海波の当痕を残す。

ＳＤ－２側溝（153～163）

珠洲を主体に、土師器（153）と須恵器（162）が出土した。土師器は刈羽三島型皿第Ⅱ群ａ１類の小破片。須恵器は、甕頚部の破片である。珠洲は、唯一の口縁部（155）で、小鉢の類か。

ＳＲ-1104 道路跡（164～213）

当該道路跡出土土器類等は、道路面において出土した遺物群の一部で、路面に砕石代わりに敷かれたものが含まれており、ある意味路面に廃棄されたものと解釈され、当然一括性はない。土器類等のほとんどは、固く焼き締められた珠洲等の陶器が主体となっていた。

珠洲以外では、越前（209）、瓷器系陶器（211～212）、青磁（210）があり、図化できた土師器（164）は１点に過ぎない。土師器（164）は刈羽三島型皿第Ⅰ群ｂ１類の小破片で、口縁部内面上段と外面２段を強く横ナデし、体部との境界が鋭い沈線状を呈する。珠洲は、片口鉢165・166がⅡ期、168はⅢ期、169をⅣ1期とした。179は数少ない壺Ｒ種の口縁部で、小破片で判断が難しいが取り敢えずⅣ２期とした。甕類の口縁部２点はともに小破片であるが、184をⅢ期に、また183はⅣ1期とした。瓷器系陶器では、209に鉄釉が確認でき赤みを帯びることから越前と判断したが、211・212の２点は無釉で灰色、また212の胎土には直径１cmほどにもなる大粒の礫が多く含まれており、産地不詳とした。青磁碗は鎬連弁紋を有するＢ-Ⅱ類１点が出土している。

ＳＤ-1218 区画溝（220～227）

開口して機能する区画溝という性格上、一括性は望めない資料であるが、土師器（220～221）、珠洲（222～226）、青磁（227）が出土している。土師器は、刈羽三島型で、皿（221）は第Ⅲ群ｂｉ類、小皿（220）は第Ⅱ群ｂ類に分類される。珠洲は、口縁部破片となる片口鉢の222がⅣ２期、223がⅣ３期と考える。青磁碗はＢ-Ⅱ類である。

ＳＤ-1286 堀（245～279）

調査区南側の館に関連する堀跡であり、ＳＤ-２側溝を掘り返すことによって構築される。開口しつつ規模が大きいことから、遺物量は比較的多い。種別としては、珠洲（255～272・274～275）を主体に、土師器（245～254）、越前（276～277）と瓷器系陶器（278）、青磁（273）とともに須恵器（279）も出土している。

土師器は、全て刈羽三島型であった。皿第Ⅱ群では、ａ１類（248）、ａ２類（252）、ｂｉ類（253）、ｂ

ⅱ類（250･254）、皿第Ⅲ群は、ａⅱ類（249）、ｂｉ類（251）、小皿は、第Ⅰ群（247）、第Ⅱ群ａ類（246）、第Ⅱ群ｃ類（245）に分類されることとなり、まとまりに欠ける。珠洲の出土量は多いが、口縁部は少なく、甕（267）はⅣ２期、片口鉢はⅣ１期（257）、Ⅳ２期（258）となるが、何れも小破片である。越前甕（276･277）は赤みを帯びるが、瓷器系とした１点（278）は、無釉で灰色を呈している。

ＳＥ-1129井戸（228～231）

珠洲（228～230）と瓷器系陶器（231）が出土している。時期が特定できる資料はない。231は、無釉で灰色を呈している。

ＳＥ-1256井戸（232～235）

刈羽三島型土師器（232）は、口縁部外面の２段ナデが顕著で、皿第Ⅰ群ａ２類に分類される。珠洲甕（233）は、Ⅱ期と考えられ時期的にやや古い。この甕（233）は、口縁部25㎝×胴部18㎝サイズの大破片を含む大小７点の破片として出土している。総重量2.3㎏になるが、残念ながら接合しないことから、後世の廃棄資料と判断した。また、破片の１点については、内外面及び断面に煤が付着していたが、廃棄された井戸内の覆土環境によるものと推測される。青磁碗（234）はⅡ-Ｂ類、その他では瓷器系陶器の甕（235）が出土している。

ＳＥ-1308井戸（290～296）

図示した７点は全て珠洲となる。片口鉢口縁（290）は、内面に煤状の黒色付着物があり、時期はⅣ３期、甕（293）はⅣ２期で時期的に近接するが、小破片であり参考に過ぎない。なお、甕大破片となる295についても、内面に黒褐色の付着物が認められる。

ＳＥ-1314井戸（302～315）

土師器（302～307）と珠洲（308～315）で構成される。珠洲には、時期を特定できる口縁部資料はない。土師器は全て刈羽三島型の範疇にある。皿については、第Ⅳ群ａ類３点のうち、２点（305・306）が出土している。307は第Ⅱ群ｃⅱ類で、第Ⅱ群でも新しい段階と目されるので、第Ⅳ群との関連性を示唆する可能性がある。小皿は全て第Ⅱ群で、ｃ類（302・303）とｄ類（304）に分類される。

その他の遺構（214～219・236～244・280～289・297～301・316～327）

Ｂ地区では建物を構成する柱穴・ピット、および井戸が多数検出され、個々の遺構から遺物が出土しているが、そのほとんどが破片資料でかつ単品乃至数点という状況にある。このことから、覆土内への混入というパターンが大半であり、遺構の所属時期の特定にも難が多い。種別としては、珠洲が大半を占め、次いで土師器が多く出土しているが、Ｂ地区出土土師器のすべてが刈羽三島型であることは、Ｂ地区における遺構群の主要時期を示唆するものと理解される。

ＳＤ-1100溝の珠洲片口鉢（214）は、ロクロ成形痕を明瞭に残すとともに、全体に薄手の個体である。ＳＥ-1219井戸の刈羽三島型皿（217）は、第Ⅰ群ｂ１類に分類され、胎土良性で体部との境界は鋭い沈線が２条巡る。ＳＥ-1306井戸の刈羽三島型皿も第Ⅰ群ｂ２類、体部が有段を呈する。

その他、特異なものとしては、白磁Ⅳ類（327）がＳＫｐ-1337ピットから、また不整楕円形を呈するＳＫ-1315土坑からは、外面に鉄釉を施した近世陶器（316）と考えられる鉢乃至甕の胴部下半破片が出土している。ＳＥ-1305井戸出土の片口鉢（287）は、内面使用痕が顕著で、滑らかにすり減っている。ＳＥ-1300井戸出土の珠洲甕（243）は、二次焼成を受けて白灰色を呈し、外面は火熱による剥離が顕著である。

この他刈羽三島型土師器皿については、一括的に述べると、第Ⅰ群はａ１類（326）が１点、第Ⅱ群ではｂⅱ類（321）・ｃｉ類（322）、第Ⅲ群はａｉ類（323）・ｃⅱ類（324）、第Ⅳ群ｂ類（325）となる。

包含層（328～340）

珠洲破片を主体に図示したが、青磁碗２点が出土している。339については、龍泉窯Ｉ－４a類と考えられる。珠洲の337は、礫を巻き込んだ錆が付着している。また、須恵器甕破片（340）は、外面のタタキ痕と内面アテ痕がともに格子目文である。

c　馬場・天神腰Ｃ地区［図版 56・154］

Ｃ地区は、字「馬場」のＣＩ地区と、字「天神腰」のＣⅡ地区に区分される。ＣＩ地区は、深く土取りされた後、盛土されたことにより、遺構確認面が深くなり、結果として井戸の底部が多数検出される状況となっていた。土器類等は、主に井戸底面からの出土となった。対して、ＣⅡ地区東部は、削平を受けていなかったが、少ない遺構数と比例して、土器類等の出土も少なかった。結果として、図化して掲載した土器類等は、ＣＩ地区に限定された。

ＣＩ地区井戸出土の土器類等は、珠洲と土師器（刈羽三島型）に限定される。出土点数が少なく、破片で占められることから、覆土に混入したものと判断される。ＳＥ-1706井戸出土の珠洲片口鉢（349・350）の２点は同一個体で、Ｖ期の所産となる。ＳＥ-1720井戸出土の土師器皿底部（348）は、内面のナデ調整がやや特異で、内底面を縦の平行ナデを行った後、外周を横ナデしており、京都系Ａ類的な調整が施されている。刈羽三島型としては、ＳＥ-1720井戸の346が皿第Ⅱ群ｃｉ類、ＳＥ-1726井戸の345が小皿第Ｉ群に、またＳＥ-1701井戸の343が小皿第Ⅱ群ｂ類に分類される。

d　天神腰ＤＩ地区［図版 56～58・154～155］

ＤＩ地区は、遺構密度としてはやや閑散としているが、区画溝２条から比較的多くの土器類等が出土するとともに、井戸や柱穴・ピットからは少量ずつながら出土をみている。本項では、比較的出土量が多い溝について個別に述べるが、その他の遺構出土土器類等については、一括的にまとめたい。

ＳＤ-2401 溝（364～384）

東西方向を指向する溝で、性格としては道路側溝の可能性を有している。溝はそもそも開口して機能することから、土器類等も時期幅を持つことが一般的であるが、前後３回程度の改修が土層断面から確認されている。

種別としては、土師器等（364～369）、珠洲（370～377）、越前（378・379）、瀬戸・美濃（384）、貿易陶磁として白磁（380）と青磁（382・383）、その他に産地不詳の陶器皿（381）と、バラエティが多い。相対的に古く位置付けられる資料は、北陸系Ｂ類とした柱状高台の土師器（365）と白磁椀Ⅳ類（380）となる。出土位置は、溝内の小グリッドで隣接しており、密接な関係にある可能性が高い。また、Ⅱ期に比定した珠洲の甕口縁部（376）も隣接して出土していることから、12世紀代前後と時期幅は存在するが、溝掘削の古段階を示唆する可能性は否定できない。珠洲376は、口唇部面取り部分と、口縁内面上位に櫛描波状文が施され、頚部下の平行タタキ痕は、まず横位に、その後縦位に２度ほど調整がなされている。

刈羽三島型土師器は、全て後半期の所産となる。まず皿は、第Ⅱ群のｂⅱ類（366）とｃⅱ類（368）、第Ⅲ群ではｂｉ類（369）とｃⅱ類（367）に、小皿（364）第Ⅱ群ｄ類に分類される。何れも14世紀代の所産である。瀬戸・美濃の天目茶碗（384）は、古瀬戸後期Ⅳ期古段階頃と想定され、また青磁碗（383）は、口縁部が現存しないが連弁紋が沈線化しており、これらは15世紀中頃から後半の所産となる。これらが溝改修時期と連携する可能性がある。なお、381の皿については、胎土が灰色の須恵器質となる。

ＳＤ-2469溝（385～394）

珠洲を主体に、関東系Ｂ類皿底部（385）と青磁碗底部（394）が出土している。珠洲は、壺Ｔ種（386）と、壺Ｒ種（387）、甕底部片（391）の他は、片口鉢（388～390･392･393）が多くなるが、口縁部はない。

その他の遺構（351～360・395～399）

その他の遺構とは、大半が井戸に該当し、かつそれぞれ数個体ずつの出土であり、一括性などまとまりに欠ける。種別としては､刈羽三島型土師器皿第Ⅱ群ｂⅱ類がＳＥ-2424井戸（351）から出土したほかは、そのほとんどが珠洲破片で占められていた。口縁部破片を抽出すると、ＳＥ-2426井戸の片口鉢（353）がⅤ期に、ＳＥ-2433井戸の甕（359）がⅣ1期、またＳＥ-2464井戸（395）の片口鉢Ⅳ２期に比定でき、14世紀から15世紀前半の時期のものとなっている。

包含層（361～363）

包含層等から出土した資料も珠洲甕片２点（361・362）、須恵器甕片（363）１点となる。

ｅ　天神腰ＤⅡ地区［図版58～61・156～157］

ＤⅡ地区は、調査区の中央エリア（29～31グリッド）において、井戸や柱穴・ピットが密集し、遺構数が多く、したがって遺構出土土器類の事例も多くなる。しかし、特殊な遺構となるＳＥ-2819井戸で比較的多く出土したが、ある程度まとまりが見い出せる遺構はＳＥ-2827井戸程度であり、大半は数点程度の出土となっていた。本項では、上記２遺構について個別的に概要を述べるが、その他については、一括的にまとめたい。

なお、本地区の特徴としては、ＳＥ-2819井戸でも後述する通り、他地区で優位を占めていた珠洲の出土量や破片の大きさを対比した時、全体的に破片が小さくなり、点数的にも減少している状況が看取される。同じく、刈羽三島型土師器も少なく、京都系Ａ類第二波の土師器が意外に多いことと対照的であり、唐津の出土が認められるなど、時期的に新しく位置付けられることと関連することかもしれない。

ＳＥ-2819井戸（434～462）

土器類等の出土量は、他遺構に比して多いとすることができるが、基本的に全て破片資料であり、意図的に埋納した状況は一切ない。種別としてもかなり多種多様で、珠洲（434～447）を主体に、越前（449～452）、瓷器系陶器（448・453）、瀬戸・美濃（456・457）、唐津（458・459）、貿易陶磁では青磁（455）と青花（454）、そして須恵器（460～462）が出土している。これらに伴う土師器は確認できていない。

珠洲は、確かに出土点数は多くなっているが、破片そのものは小さく雑多なニュアンスが強い。ただし、唯一大破片となる甕（440・444）は、粗雑感が強くⅥ期と新しくなるとともに、漆継の痕跡が複数個所確認できる点は、何度か修復しつつ大事に使用されていたことが明らかである。珠洲大型甕の入手が困難となっていた状況が推測される。越前は４点、擂鉢（450）は他に同一個体の破片１点があるが、やはり漆継の痕跡を残している。編年的にはⅤ３期（16世紀第4四半期）〔福井県埋文センター 2016〕の所産である。産地不詳の瓷器系陶器としては、448の甕が特筆されるが、越前の比定時期よりは古くなるものと考えられる。瀬戸・美濃は小破片で、456は大皿類、457は小皿となる。貿易陶磁では、454の青花は小破片ながら本遺跡唯一の出土､455は龍泉窯杯となる。また､他遺構ではあまり確認できない唐津小破片２点が出土、器種としては鉢（458）と皿（459）となる。

ＳＥ-2827井戸（469～476）

京都系Ａ類第二波の皿５点（469～473）がまとまって出土した唯一の遺構となる。他に瀬戸・美濃の

皿（474）、青磁碗Ｄ-Ⅱ類（475）、そして須恵器甕破片（476）が出土している。京都系の皿としては、体部手づくね部と口縁部横ナデとの境界が、爪を充てて強く撫でたように有段状を呈する第Ⅰａ類が１点（469）、その他３点（470 ～ 472）は、同上境界が指の腹で撫でたように緩やかで不明瞭な第Ⅱａ類である。471は、底面に油煤の癒着が顕著で、燈明皿に転用されていたことがわかるが、他４点に痕跡はない。

その他の遺構（400 ～ 433・463 ～ 468・477 ～ 495）

遺構密集域の存在から、遺構数が多く、結果として遺構から土器類が出土した事例が多くなる。ただし、前述２遺構以外は数片程度で、散漫的な状況を呈している。また、珠洲と刈羽三島型土師器は相対的に少ないという印象が強い。

土師器は、刈羽三島型（401・420・432・477・479 ～ 481・485）８点、関東系Ｂ類（415・423・424・416・417・426・478・484）８点、京都系Ａ類第二波（413・414・425・431・464）５点の出土が確認できる。ただし、大半が遺構内から単品等で出土しており、共伴関係を追える事例はない。関東系Ｂ類のうち、ＳＥ-2589井戸から出土した底部破片２点は、黒色系土器としての特徴がある。416は内外面全面黒色、417は内底面黒色、外底面白色の２色構成となっている。京都系Ａ類としたＳＥ-2585井戸の皿（414）は、1/2あまりの破片で、内外面に褐色の付着物が確認できる。また胎土内に直径２㎜程度の砂粒を比較的多く含むとともに、微細な金雲母がそれなりに多く含まれているという特徴がある。遺跡周辺において生産されたとは考えにくい個体である。

珠洲は、片口鉢を主体に甕破片が若干出土する。口縁部の事例がなく、編年に対比することを困難とする。ただ、ＳＫ-2818土坑出土甕破片（465）については、焼成がやや甘く生焼け状で、タタキ痕も粗いことからⅥ期となる可能性を持つ。また、片口鉢の使用痕も顕著で摩滅が著しく、粗さが目立つことから、多くは時期的に下る可能性が高い。

この他、越前（405・408）、瀬戸・美濃（429・474・487）、越中瀬戸小皿（495）、唐津（406・468）、瓦器（488）、青磁（412・427・463・466）、白磁（489）などの出土がある。瀬戸美濃については、小皿とした429は、Ｄ地区内出土とされる折縁皿口縁とした510と同一個体の可能性がある。

包含層（496 ～ 511）

種別としては、珠洲（496 ～ 500・502 ～ 505・507）を主体に、土師器では刈羽三島型小皿（511）、京都系Ａ類小皿（509）、その他として瀬戸･美濃（508･510）、瓷器系陶器（506）、須恵器長頸瓶口縁部（501）がある。508は、天目茶碗底部破片である。

ｆ　天神腰Ｅ地区［図版 61 ～ 66・158 ～ 160］

Ｅ地区における遺構検出状況は、38グリッド付近に柱穴・ピットと井戸等が集中する以外、館の堀が縦断することから、概して遺構は少ない。出土した土器類等は、その大半が堀跡に帰属するが、井戸出土土器類にもある程度のまとまりが見られた。本項では、ある程度土器類がまとまって出土した遺構について個別に概観し、出土量が少ない遺構については、一括的にまとめたい。

ＳＤ-301 堀（512 ～ 632）

出土点数としては珠洲（546 ～ 614）が最も多く、次いで土師器（512 ～ 545）も多い。その他としては、瀬戸・美濃（617 ～ 623）が比較的多く、越前（616）と瓷器系陶器（615）、瓦器（631）、須恵器（632）、貿易陶磁としては青磁（624 ～ 625・629）、白磁（626 ～ 627）、青白磁（628）があり、産地不詳の磁器（630）が含まれていた。

土師器は、刈羽三島型（512・514 ～ 526）と関東系Ｂ類（513・530 ～ 545）に大別され、京都系Ａ類は出土していない。刈羽三島型小皿は、第Ⅰ群がなく、第Ⅱ群と第Ⅲ群に分類される。第Ⅱ群はｂ類が521の１点に対し、ｃ類が５点（512・516・517・520・522）と多い。また第Ⅲ群は４点（514・515・518・519）となる。皿については、第Ⅰ群がｂ２類に分類される１点（528）だけで、また第Ⅳ群もａ類の１点（527）と少ない。大半を占める第Ⅱ群は、ｂ類が主体で４点（523・524・526・528）、ｃ類は１点（525）となっている。関東系Ｂ類は、第18図に提示した31点の内、ＳＤ-301堀出土が16点に及び、過半数が出土していたことになる。大別分類としては､京都系Ａ類模倣の第Ⅰ類（皿）と関東系Ｂ類系統の第Ⅱ類（皿）と第Ⅲ類（小皿）に分類される。第Ⅰ類では、ａ類（541・542）とｂ類（540・543・544）に細別されるが、底部の立ち上がりが丸みを帯びるⅲ類に底部３点（535・538・539）を含むすべてが該当している点に注目したい。第Ⅱ類については、ｂ類（532・533・534・536）とｃ類（545）に細別されるが、底部の分類ではｉ類（545）とⅱ類（536）各１点に対し、ⅲ類が３点（532 ～ 534）と、第Ⅰ類と同様に多くなっていた。さらに、第Ⅲ類も出土した２点（530・531）はｂⅲ類に分類されており、底部立上りが丸みを持つものが主体である事実は、時期幅が少ないことを示唆している可能性がある。

珠洲は69点を図示したが、その大半が甕と壺Ｔ種の胴部破片であり、口縁部など時期判定に有効な個体は少ない。第19 ～ 21図を参考に時期的な状況を把握すると、甕はⅡ期（567）、壺Ｔ種（566）がⅢ期の各１例、壺Ｒ種は胴下半～底部の２点（575・576）と胴部片４点（565・570・572・573）を除けば確認できていない。片口鉢の口縁部は７点、編年に対比した場合、Ⅳ２期（552）、Ⅳ３期（548）、Ⅴ期（546・549･551）で、Ⅵ期（550）も１点の出土があり、僅かな事例からではあるが、Ⅴ期が相対的に多い。なお、Ⅲ期については、胴部片となる２点（554・555）を参考に挙げた。

越前（616）及び瓷器系陶器（615）については、併せて２点と僅少であった。615は、灰色で無釉なことから珠洲や須恵器とほぼ同じであるが、瓷器系との判断は粗い格子目のタタキ痕を根拠としたものである。瀬戸・美濃は、Ｅ地区出土８点の内、７点が堀跡出土となる。器種としては、天目茶碗（618・620）と尊式花瓶（617・621）、そして鉢（622）、小鉢（623）、卸目付大皿（619）がある。編年的には、古瀬戸後期様式の所産で、天目茶碗（620）と尊式花瓶（621）はⅣ期新に、卸目付大皿（619）はやや古く、時期幅を持つがⅡ～Ⅳ期古頃の時期と推測される。

貿易陶磁関係では、青磁碗が３点（624・625・629）、白磁碗（626）、青白磁の梅瓶（628）と、少量出土している。注目されるのは、小破片ながら威信材とされる梅瓶の存在が確認できた点にある。

その他としては、器種が不明な瓦器（631）と須恵器甕（632）の小破片が出土している。

ＳＥ-312 井戸（642 ～ 646）

刈羽三島型土師器４点（642 ～ 645）と青磁碗（646）が出土している。完形品で出土した土師器皿１点（644）は、口縁部を軽くやや粗雑に横ナデするが、横ナデ部下端は気持ち強めにナデており、刈羽三島型の特徴をよく残している。また、口縁部～体部となる立上り部分には、粘土紐を斜めに貼り合わせるように接合し、手指で押さえた傷状の痕跡を残している（図版159）。外底面には乾燥に際して置かれた時の痕跡として、板状の擦痕も確認できる。内面の横ナデは、底面中央の直径４㎝ほどを残して口縁部まで施している。内面には、煤状の油痕が付着しており、燈明皿に転用されていたことがわかる。その他３点は小破片である。分類としては、皿が第Ⅱ群のｂⅱ類（645）とｃⅱ類（644）、小皿は第Ⅱ群ｃ類（642）と第Ⅲ群（643）となる。青磁碗底部はＢ-Ⅱ類と考えられ、覆土内混入であるが、土師器については年代的に近いものと推測される。

ＳＥ-313井戸（647～653）

刈羽三島型の土師器小皿（647～649）と珠洲片口鉢（650･651）、越前甕胴部破片（652）、そして瀬戸･美濃の天目茶碗底部（653）が出土している。珠洲片口鉢651はやや大きな破片であるが、その他は小破片であり､総体としては覆土内混入とせざるを得ない。刈羽三島型小皿の分類としては､第Ⅱ群のｂ類（649）とｄ類（647・648）に区分される。珠洲片口鉢651はⅣ２期とした。

ＳＥ-314井戸（654～658）

刈羽三島型土師器皿５点が出土した。底部がヘソ状に内面に突出する事例は、底部を残す656だけとなるが、すべて焼成は良好、厚手で、皿第Ⅲ群ｃ類に分類した。同類が一括的に出土した好例である。

ＳＥ-325井戸（下層）（661～666）

当該井戸は、西側の一部がＳＤ-301堀と重複して削平されていたが、大半は現状を留めていた。遺物は主に下層部分から集中的に出土し、特に漆器椀荒型は総数38点に及び、その他縄など様々な木製品が出土したことなど、極めて重要な遺構となった。出土した土器類等についても、出土点数としては少ないが、年代的には古く位置付けられるものであり、この点も注目されることになる。

土器類等の種別としては、土師器等の出土はなく、白磁と須恵器に限定されていた。須恵器３点（664～666）は同一個体で、664・665は接合する。また、ＳＥ-310井戸（640）とＳＥ-339井戸（660）の須恵器とも同一個体と考えられる。外面は格子目のタタキ痕、内面は中央の小同心円から放射状に延びる特徴的なアテ痕が残されていた。佐渡小泊窯系と考えられる。器種は甕と推測されるが、640の頚部破片をみると壺の可能性も否定できない。白磁碗は、所謂玉縁を巡らせるⅣ-1a類（661･662）と、Ⅴ-４c類（663）に分類されるものであり、前者はＣ期（11世紀後半～12世紀前半）の標準磁器で、12世紀後半まで定量を占めるとされ、後者はＤ期（12世紀中頃～13世紀前葉）に概ね該当することから、年代観としては12世紀後半から13世紀前葉でもその後半頃を想定したい。なお､本井戸中層からは､珠洲甕胴部の大破片（667）が出土しているが、タタキ目が繊細なことから、やや古相を呈するものと考えられる。

ＳＥ-331井戸（668～672）

刈羽三島型土師器と珠洲甕胴部片（672）が出土している。土師器の内、小皿668はほぼ完形品、皿671は半完形の大破片である。その他２点（669･670）は小破片となる。分類では、皿第Ⅱ群がａ１類（670）、ｂ類（669）、そして第Ⅲ群ｂ類（671）となる。671は、第Ⅲ群特有の厚手で焼成良好であるが、底面のヘソが薄く緩やかに小さく盛り上がることから、この点は典型的なｃ類とはやや相違する。小皿668については、焼成良好で、底面がほぼ平坦という特徴を有する。

その他の遺構（633～641・659～660・667・673～679）

以上前項まで、土器類等が比較的まとまって出土した遺構を取り上げたが、その他の遺構では数点レベルの破片が出土した遺構が複数存在する。まず、土師器では、刈羽三島型の小皿がＳＥ-339井戸（659）とＳＫ-322土坑（679）から単独出土。関東系Ｂ類については、ＳＥ-305井戸（636）で確認され、珠洲Ⅳ３期の片口鉢（637）と瓷器系陶器甕（638）も出土している。また、ＳＫ-304土坑からは瓦器の鉢底部破片（635）が単品で出土している。

包含層（680～687）

包含層等から出土した種別としては､珠洲（682～686）を主体に土師器（681）と須恵器（687）がある。土師器は、Ｅ地区で唯一確認できた京都系Ａ類で皿第Ⅱｂ類に分類される。また、須恵器甕破片は、内面のアテ痕がやや特異で、同心円の中央が「米」字状となっているが、本遺跡では唯一であった。

３　金属製品および鉄生産関連遺物

１）金属製品および鉄生産関連遺物概観

本節における金属関連遺物の対象とは、製品としては銭貨の他、鉄と銅の製品がある。鉄生産関連遺物としては、羽口と炉壁を含む鉄滓類を一括した。

銭貨の出土例は少なく、Ｂ地区のＳＫ-1320a土坑とＤⅡ地区のＳＥ-2819井戸から出土した２件だけである。特に、前者の銭貨は６枚１セットで癒着した六道銭であり、墓壙であった証左と言える。

金属製品のうち鉄製品は、鉄釘の出土点数が多く、鉄生産関連遺物とした羽口や椀形滓など小鍛冶関連と関係する可能性が高い。鉄釘以外の鉄製品としては刀子や鎌状のものが掲げられるが、その他用途等不明なものがいくつか出土している。なお、鉄釘の出土分布をみると、一か所に集中するという状況ではなく、各地区から分散的に出土している。この事実は、実際に使用されたものが、その場で廃棄されていたことを示すものと理解することができる。銅製品としては、残欠と思われる１点が出土している。

鉄生産関連遺物では、小鍛冶に伴う椀形滓の出土量が特に多い。小鍛冶の工房や鍛冶炉については、特定できていないが、それなりの頻度で鍛造品を作る作業がなされていたことが窺われ、主に建築資材となる鉄釘とともに、鎌など農具や土木具などの生産も担っていた可能性が高い。また、椀形滓の出土分布を窺うと、Ｃ地区とＤＩ地区を除く各地区から確認できることから、一か所で集中的に鍛冶を行っていたという状況ではないことが理解される。ただし、個々の時期が特定できない実情もあるが、必要に応じて各地区それぞれで行われていたものと推測される。なお、炉内滓や炉壁と想定されるものが少量ながら出土しており、鉄そのものの生産もしくは精錬を行っていた可能性は否定できない。特に、Ｅ地区のＳＤ-301堀から炉壁が出土している事実は、館の存在が大きいと言える。

金属関連遺物の出土遺構は、道路側溝や区画溝、そして堀跡が多いことから、単純に廃棄されたことが窺える。また、井戸出土例が多い点も、同義とすることができるだろう。

２）金属製品および鉄生産関連遺物各説（図版 66 ～ 67・161 ～ 162）

項目としては、銭貨、鉄と銅の製品、および鉄生産関連遺物として羽口と炉壁を含む鉄滓類を一括する。なお、各個体の出土位置や法量等の属性については、附表６にまとめたので参照されたい。

銭　貨（２・３）

２は、Ｂ地区ＳＫ-1320ａ土坑出土の六道銭で土坑墓と考えられる。円形プランで直径が約90㎝、遺構確認面からの深度は21㎝と浅い。周囲における遺構密度は低く、墓壙としての意識が想定される。六道銭６枚の内、４枚が密着して分離できず、また１枚は銭貨名が判読不能であった。熙寧元寳は北宋1068年初鋳、また永楽通寳は明1408年初鋳となるが、後者は依存状態が悪く、銭貨名の判読に厳しいものがあった。なお、ＳＫ-1320ａ土坑からは、椀形滓の小塊が出土しており、被葬者が鍛冶に関連する可能性がある。３は、ＤⅡ地区ＳＥ-2819井戸の覆土から出土した至和元寳で、北宋1054年初鋳、遺存状態は不良である。

金属製品（４～ 25）

金属製品としては、大多数の鉄製品と銅製品１点が出土した。鉄製品の多くは、錆のため原形が不分明となっており、器種や用途が不明なものが多くなっている。器種等が判明したものとしては、刀子（13 ～ 15）、鉄釘（６～ 12・18・22 ～ 23・25）11点、その他では鎌と考えられるもの（20）が掲げられる。その他は性格や用途、物品名が不詳なものとなる。

ＣＩ地区ＳＥ-1706井戸から出土した刀子（13）は、刀身の先端側が欠落しているが、木質の柄（14）が良好な状態で現存・装着されており、刀子の身を２枚の板で挟むとともに、固定のため一か所穿孔されていた。鎌と考えられる残欠（20）は、ＤＩ地区ＳＤ-2401区画溝の出土である。

鉄釘は、断面が主に方形で、鍛造にて製造されていた和釘である。長さは、最短で2.9㎝、最長が8.6㎝、断面の法量としては、一辺が0.6 ～ 0.8㎝のものが大半であるが、長方形断面のものが１点（25）だけ出土している。地区別出土量としては、Ａ地区：２点、Ｂ地区：５点、ＤⅡ地区：１点、Ｅ地区：３点であり、何れの地区も出土点数は僅少であるが、町屋の建物が多く検出されたＢ地区が最も多くなっていた。

銅製品としては、ＣＩ地区ＳＥ-1712井戸から出土した短冊状の残欠１点（16）がある。断面形は、上端の峰部分が平坦で、下方がやや丸みを帯びる。厚さ0.5㎜ほどの銅板を平たい筒状に丸め、峰側にて接合して、中位は空洞となるが、欠損部側は押し潰されている。何らかの製品の残欠と推測されるが、物品などの名称は不詳である。

羽口と炉壁・鉄滓類（１・26 ～ 45）

鉄生産関連遺物として掲げる種別は、羽口と炉壁と鉄滓類である。小口径の羽口が存在すること、そして鉄滓類としても、そのほとんどが椀形滓であった事実は、集落内で鍛冶が営まれていた証となる。ただし、椀形滓の出土点数からすれば、集中的・継続的な操業というより、小規模な小鍛冶を断続的かつある程度普遍的に行っていたものと推測される。また、出土点数は少ないが、炉内滓の可能性が高い鉄滓の存在や、少ないながら炉壁も出土している事実は、鉄生産に係る製錬もしくは精錬が行われていた可能性も極めて高いことを示唆するものである。

羽　口（１）　Ａ地区ＳＤ-１側溝出土で、側溝内の出土位置と深度からすれば、側溝としては深度が最も深く、断面形も規格的となる第３段階の覆土に該当する。小残欠１点だけであったが、先端部の溶融は顕著なガラス質となっている。復元される直径は約８㎝、肉厚約2.5㎝、内径は３㎝ほどとなる。

椀形滓（26 ～ 30・32 ～ 34・37 ～ 40・42）　図化資料としては13点を掲載した。出土地区としては、Ａ地区：４点、Ｂ地区：４点、ＤＩ地区：２点、ＤⅡ地区：１点、Ｅ地区については炉内滓の可能性のある45の１点を加算すると３点になる。各地区の傾向としては、Ａ地区は遺構数に比してやや多く、ＤⅡ地区は少ないという印象が強い。出土遺構としては、溝類の８点、次いで井戸の４点であり、開口して機能する遺構覆土内への混入や廃棄がなされたものと理解される。ただし、ＳＫ-1320ａ墓壙出土は、土坑例唯一となっており、被葬者との関連性を疑えるが、大きさとしては最少の60ｇであった。なお、大きさとしては、最大がＢ地区ＳＥ-1305井戸（32）の600ｇであった。

炉 内 滓（31・36・44・45）　炉内滓として確実な個体は、Ｂ地区ＳＤ-２側溝出土の31で、重量は3,200ｇに達する。炉底の側面形状は、規格的な方形の角そのままの写しとなっている。想定される製錬炉は、やや小型の箱竪炉的なタイプと考えられる。ＤＩ地区ＳＤ-2401ａ溝出土の36については、色調が緑灰色を呈した砂鉄非溶解の固結塊であり、Ｅ地区ＳＥ-325井戸下層出土の44も同種と考えられる。また、45については、Ｅ地区ＳＫ-392とした不整形な大型落ち込みから出土したもので、底面が椀形滓状、上面が気泡による凹凸が著しく、判断に躊躇したものである。

炉　壁（35・41・43）　ＳＥ-301堀出土の２点（41・43）は、内面が溶解し、特に41はガラス状を呈する。厚さは2.5㎝、外面は焼土化し、幅６㎝ほどの粘土帯の痕跡が観察できる。重量のあるＤＩ地区ＳＤ-2401溝出土の35については、立方体状で全面が溶解して茶褐色を呈するが、炉内に崩落して溶融した炉壁と想定した。

4　石製品類

1）石製品類概観

石製品類として図示したものは、合計36点である。種別としては、石鉢や石臼類、砥石類、硯、五輪塔類のほか、縄文時代の磨製石斧、そして未加工の自然石として圭化木が出土している。出土点数としては、砥石類が11点で最も多く、次いで茶臼を含む石臼類が８点となる。硯は３点、五輪塔類も３点で、この他に圭化木が８点と意外に多く出土している。刳物系としては、石鉢１点、刳物状の残欠１点などとなる。

地区別の出土点数は、Ａ地区：３点、Ｂ地区：９点、Ｃ地区：１点、ＤⅡ地区：16点、Ｅ地区：７点となる。点数的にはＤⅡ地区が圧倒的に多くなっているが、16点の内、半数となる臼類８点がＳＥ-2819井戸出土という事情がある。また、Ｅ地区については、７点の内６点がＳＤ-301堀出土である。このように、石製品類の全てが開口して機能した溝･堀類及び井戸内から出土しており､特定の土坑から出土するといった事例は皆無であった。したがって、使用後破損したり不用となったりした段階において、適宜廃棄されたもので、遺構との関連性は廃棄以外意図的な事情はなかったものと推測される。

2）石製品類各説（図版 68 ～ 69・162 ～ 163）

石製品類の出土状況は、上述したとおり意図的に埋設等がなされたわけではなく、そのほとんどが廃棄行為により井戸や溝・堀の覆土に包含されていたと考えられる。したがって、実測図版については地区別に掲載したが、本項の各説では種別によることとして、刳物系、石臼類、砥石類、硯、石塔類（五輪塔）に区分し、その他として圭化木と磨製石斧についてまとめたい。なお、出土遺構や法量等の属性については、附表７にまとめたので、参照願いたい。

刳 物 系（8・13）

輝石安山岩製の石鉢（13）は、Ｃ地区ＳＥ-1720井戸出土。口縁部から底部立上りまでの破片で約1/4現存、底部欠損。口唇部は平坦で幅2.5㎝を測る。口唇部は比較的平滑、内面やや平滑となるが、外面は粗雑感がある。石刳容器（８）は、自然石の安山岩残欠で、上面を楕円形状に刳り込んでいることから容器の一種とした。Ｂ地区ＳＤ-1286堀出土。底面はやや不安定で、煤が薄く付着する。

石 臼 類（18 ～ 22・24 ～ 25・27）

石臼類８点全ては、ＤⅡ地区ＳＥ-2819井戸から集中的に出土しており、他地区や他遺構からは確認できていない。類別としては、茶葉を挽いて抹茶にする茶臼１点（18）を除き、その他７点は穀物等を製粉する一般的な挽き石臼とに大別される。

茶臼（18）は、下臼の残欠で、臼の面はほぼ円形に遺存するが、受け皿部分はほぼ欠失する。臼の面の直径は17.5㎝を測る。溝は、主溝と副溝の差異がなく、副溝の間隔が不定で浅く、粗雑感が著しい。石材は、流紋岩質凝灰岩で概ね白色を呈していた。

挽き石臼は、上臼となる回転臼（20・22・24・27）と下臼の固定臼（19・21・25）に区分される。花崗岩製の上臼（20・22）と下臼（19）はセットの可能性がある。各個体の臼面は、ざらつきが顕著で平滑さはほとんどない。また、溝も主溝と副溝の差異がなく、また幅広で浅くなっている。

砥 石 類（1～2・7・14・16・23・29・30～31・34・36）

図示した砥石類は合計11点であるが､２点は須恵器（23）と珠洲（36）の転用砥石である。石製砥石は、手持ちと置き砥石に大別される。

手持ち砥石（１～２・14・16・23・29～30・34・36）は、原則として折損や剥離した残欠である。しかし、欠損段階で廃棄されたもの（１～２・31・34）と、その後しばらく使用されたもの（16・29・30）があり、後者では破断面がやや磨滅する。14は、上面と底面の２面が砥面となるが、上面が平滑に研がれていることに対し、下面はざらつきが残っており、重量も551ｇと重いことから、置き砥石としても使用された兼用砥石であったことが窺える。また本品側面には、形状を整えた整形痕が残されていた。置き砥石と考えられる７については、形状が立方体状を呈し、３面が研ぎ面とされている。一部擦痕が残る。重量が2,200ｇと重く、置き砥石と考えた。１・31・34は、粒子が細かく仕上げ砥石に近い。７は、安山岩質であることから、荒砥石として使用されたと推測される。

陶器転用砥石とは、主に割れ口の断面が平滑となる特徴があり、併せて内外面の器面も摩滅している状況が確認できる。用途・目的等は不詳とせざるを得ない。本遺跡では、須恵器甕底部片（23・図版156-461）と珠洲破片（36）の各事例が出土した。23は、ＤⅡ地区ＳＥ-2819井戸出土で、須恵器甕の丸底部分の破片が使用され、内面には弧状のアテ痕、外面には格子状のタタキ痕を残す。断面の使用面は、長辺となる上部の一辺のみで、外面の一部が摩耗しているが、底面であることから、接地面としての磨滅の可能性は否定できない。36については、Ｅ地区ＳＤ-301堀から出土し、内外面ともアテやタタキ痕がないことから珠洲としているが、須恵器の可能性も否定できない。断面の使用が顕著なのは上位の１面だけで、左側と下側の２辺については、やや磨滅している状況にある。

硯（10～11・33）

硯は３点の出土が確認されている。10は、Ｂ地区ＳＥ-1129井戸から出土し、海側約半分ほどが遺存する。縁は全損しており、全体の厚みは不詳となる。硯側には縦位の擦痕が比較的明瞭に残る。また、硯陰（硯背）には、縦位の削痕が11.3㎜幅の工具痕と、横位の研磨としての擦痕を残しており、製品としては廉価品といえる。この硯陰には、「永徳元年十月十一日」の刻書が施されていた。「永徳元年」は西暦1381年、北朝方の年号である。

11は、Ｂ地区ＳＤ-1316区画溝出土。陸側左下角の残欠である。硯側には縦位の擦痕、硯陰には横位や斜位の擦痕が顕著に残る。縁はなく、厚みは陸側末端が最大厚の9.0㎜、海側端部で6.8㎜とやや薄くなることから、海の形状としては陸からややくぼむ程度であったと考えられる。廉価品の類と推測される。33は、陸から海に至る左側の残欠で、Ｅ地区ＳＤ-301堀からの出土。縁の欠損により厚さは不詳であるが、遺存高23.0㎜と厚い。硯側は、縦位⇒横位に整形した擦痕を残し、硯陰は粘板岩の節理面で剥離した後、若干の凹凸を補正した削痕が観察できる。

石 塔 類（五輪塔）（26・28・32）

石塔類としては３点全て五輪塔の地輪となる。出土遺構は、井戸と堀跡であり、意図的に破砕、廃棄された可能性が高い。26の残欠は、上面がやや平滑に調整され、下面には整形痕を残す。厚さ10㎝。28の残欠は、格子状に斜交する整形痕を明瞭にとどめ、やや粗雑感があることから、下面の可能性が高い。32は、下半の多くが欠損する。現存する面には、やや小刻みな整形痕を明瞭に留めるが、梵字（カーン）を施す正面は若干の調整が施されている。また、上面は火輪を安定させるためやや窪む。

圭化木と磨製石斧（３・５～６・９・12・15・17・35）

磨製石斧の他、圭化木８点は、全て井戸・溝出土で混入と考えられる。圭化木供給地は不明で、集落内に持ち込まれた経緯や目的も不詳とせざるを得ない。ただし、出土した点数が意外に多いことから、特に意識されていた可能性が高い。

4　木製品類

1）木製品資料の現状

木製品の資料整理作業については、発掘調査が一段落した平成４（1992）年から平成６（1994）年度まで、塔婆関連や荒型を中心に図化作業等を実施していた。しかし、当該地域にもバブルを迎えた時期的な事情もあり、民間開発に係る大規模事業に伴う発掘調査が頻発し、馬場・天神腰遺跡の整理作業は一時中断せざるを得なくなっていた。その後、平成16（2004）年に再開したが、再び大規模な開発事業に見舞われることとなり再度の中断を余儀なくされた。そして、平成23（2011）年度、報告書作成に向けた整理作業に着手し、土器・陶磁器類の図版レイアウト等と並行しつつ木製品類の図化作業なども改めて再開したところであった。

しかし、翌平成24（2012）年度、調査・整理担当が人事異動となり、整理作業等は一切頓挫するに至ったのである。その後、７年ほどの年月を経て、令和元（2019）年度に至り部分的な再開が可能となったが、木製品類については令和３（2021）年度以降となり、個別の写真撮影も主に同年９月の実施となった。

馬場・天神腰遺跡から出土した木製品類に対し、その重要性については十分認識されていたが、発掘調査終了以降水漬け状態のまま27年の時が過ぎ、状態の劣化は否めない状況となっていた。また、未整理期間が長期に渡っていたが、個々の樹種鑑定についても断念するに至った。遺跡や遺構・遺物の保護・保存に携わる機関として、このような事態は極めて遺憾であり、貴重な資料を損なった責任は重大である。

以上の経緯もあって、有機物である木製品類については、細部の観察等に不十分な点を多く生じさせる事態となったが、現状の範囲の中で可能な限りの記述を試みていくこととしたい（附表８参照）。

2）木製品類の概要

出土木製品類として、ある程度種別や用途が判別できた類には、漆器類、挽物や荒型、箸類があり、容器類としては曲物関連を主体に枡や桶が確認できている。また、信仰関連では、塔婆をはじめ串類が出土している。その他、木針や下駄類、そして縄などが少量出土している。しかし、用途不明な木製品や加工材、板類など、種別や用途を特定できない資料が極めて多いことも事実である。

また、木製品類の出土状況を一瞥すると、同種のものが特定の遺構に集中的に出土する傾向が窺われる。特に、38点の荒型がまとまって出土したＥ地区ＳＥ-325井戸や、塔婆が集中したＤⅡ地区ＳＥ-2819井戸など、また木端が大量廃棄されていたＤⅠ地区Ｓ-2402井戸も特異な存在となっている。

本項では、まず種別にしたがって概観することとし、その後に項を改め、主要遺構により各説したい。

漆 器 類

漆器の出土数は、全地区合計で７点であり、発掘調査面積や遺構総数を考慮しても、かなり少ないという印象が強い。また、全て井戸から単品での出土であった。漆は全て内外面黒色漆となり、菊様の文様が施されたもの（37）は１点に過ぎない。器種は、椀（37・162・167・195）と皿（269）、小皿（22）、小椀（250）となる。底部の形状を窺うと、高台部が作出されたもの（37・167・26）と、ベタ高台状を呈するもの（162・195・250）があり、その中間的なもの（22）もある。

挽　物

挽物として確認できた事例は１点だけ、鉢（17）と想定されるが、遺存状態は劣悪であった。底部の高台については、その存在の有無も不明である。

荒　型

荒型の概要　荒型は、Ｅ地区ＳＥ-325井戸下層にて、その他の木製品類多数とともに38点がまとまって集中的に出土したもので、他地区や他遺構からは一切出土していない。このことから、木地屋もしくは木地師が集落内に常駐していたというより、職人として一時的に招聘され、集中的に生産された可能性が高いものと推測される。

各個体を観察すると、底部側に樹皮が剥がれた丸太の表面そのままの状態で、未成形部分として残されている事例が多い。このことから、木取としては横木取りの板目が主流であったと考えられる。また、形状としては、丼状に上下面とも円形に整形されているが、木取に際してはまず方形で角錐状の荒型祖型を削出し、次の工程として四隅をカット、円形に造作することとなるが、上下左右に劣化した成形面の残存する事例が多いことから、この間に一定期間寝かすなど、間隔が開けられていたことが明らかである。

つまり、荒型の製作工程を想定すると、主に横木取り板目に木取後、角錐状に粗成形し、一定の寝かし期間を置いた後、全個体を一気に円錐形に成形、一部に抉りを施し始めたところで、井戸内に投入されたものと推測できる。ただし、未製品状態のまま水漬けする必要があって井戸内に投入されたものか、製作を断念して廃棄されたものかについては不詳である。

荒型製作工程案　以上の観察結果を基に得られた馬場・天神腰遺跡出土荒型の製作工程とは、

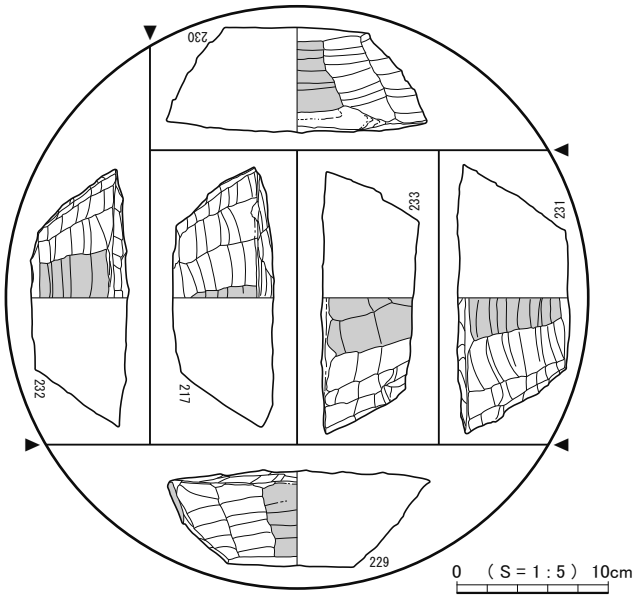
①丸太材切出し　⇒　②木取り　⇒　③一次成形　⇒　④寝かし　⇒　⑤二次成形　⇒　⑥一部抉り

の６段階程度の段階区分が想定可能となる。

①「丸太材切出し」段階とは、樹皮を剥いだ一本の丸太材から、横引き鋸により素材を輪切りにして切出す工程である。法量としては、荒型の上面直径を参考とすれば厚さ約20㎝の円盤となる。

②「木取り」については、前述のとおり底面側に丸太の表面を残す個体が多数存在することから、横木取りの板目が主流であったことが明らかである。しかし、個体数が少ないものの底部全面が成形され、丸太の表面を一切残さない事例が確認されることから、効率的な木取りとは、原則として第34図のような配置が想定され、荒型の素材が打割によって分割されたことが理解できるであろう。ただし、丸太の表面を留めない個体は、38個体中６個体（15.8％）と圧倒的に少なく、丸太の表面に接しない木芯部分の個数や配置等については検討の余地を残す。ただし、現状においては、外周側で４個体、木芯部では１～２個体が打割されたものと推測される。ちなみに輪切りにされた分割前の丸太の直径は、おおよそ32～35㎝を想定することになる（第34図参照）。

③「一次成形」とは、輪切りされた丸太材を打割された素材に対し、底面側を上位にし、形状としては角錐状を呈するように粗成形する段階である。作業手順としては、粗角錐状を呈した素材に対し、側面の成形と上下面の内、粗い割板面を削除すること



第34図　木取りと打割想定模式図

を意図し、平坦となるよう釿により成形する。その場合、外周側となって丸太の表面となった底面側はそのまま残すことになるが、木芯側にて木取りされた素材は、底面も割板面であるが故に、釿にて成形されることになる。

④段階とした「寝かし」とは、⑤「二次成形」段階にて、上下面及び側面が再成形された際、上面や底面の一部、および側面では主に上下、左右の４か所に劣化面が残されていたことから、③一次成形後の素材が、一定期間保管されたままであったことと想定して設定した段階である。生木では、椀に挽いた後、歪が生じることを想定し、素材を寝かしたものであろう。また、側面において、上下、左右に劣化面が多く残されることから、③段階の「一次成形」において、角錐状の粗成形を想定したものである。

⑤「二次成形」とは、一次成形にて角錐状であった荒型の四隅部分をカットすることにより多角形に削出し、円錐形状の荒型に成形する段階とした。しかし、成形そのものは上下面全体に及んでおり、特に上面おける再成形は全面に近く、一次成形段階の削出痕跡をとどめる割合はかなり小さくなっている。また、底面側についても、樹皮を剥いだ丸太の表面に対し、僅かな凹凸を調整するための整形痕が確認できる。

ところで、「二次成形」における上面側の成形は、板目に直交した痕跡を多く留めている。この事実とは、あくまで成形過程の後半を意味するものであり、割板面成形の初段階とは、板目に沿っていたであろうことは、容易に予測が可能である。そして最終段階は、周縁を弧状に削出していたことが窺われる。つまり、これら工程を大雑把にまとめるとすれば、**「①板目平行　⇒　②板目直交　⇒　③外周削出」**という順番に作業が進められたことが理解される。

馬場・天神腰遺跡Ｅ地区ＳＥ-325井戸出土荒型は、そのほとんどが製作工程⑤「二次成形」までの資料であるが、⑥「一部抉り」に至った事例が２例（246・248）確認されている。⑥段階が一部であっても確認されている事実とは、本来的には全点⑥段階まで行うはずであった公算が高く、製作工程が途中にて中断された結果として、井戸内に放棄されたという考えも否定できない。

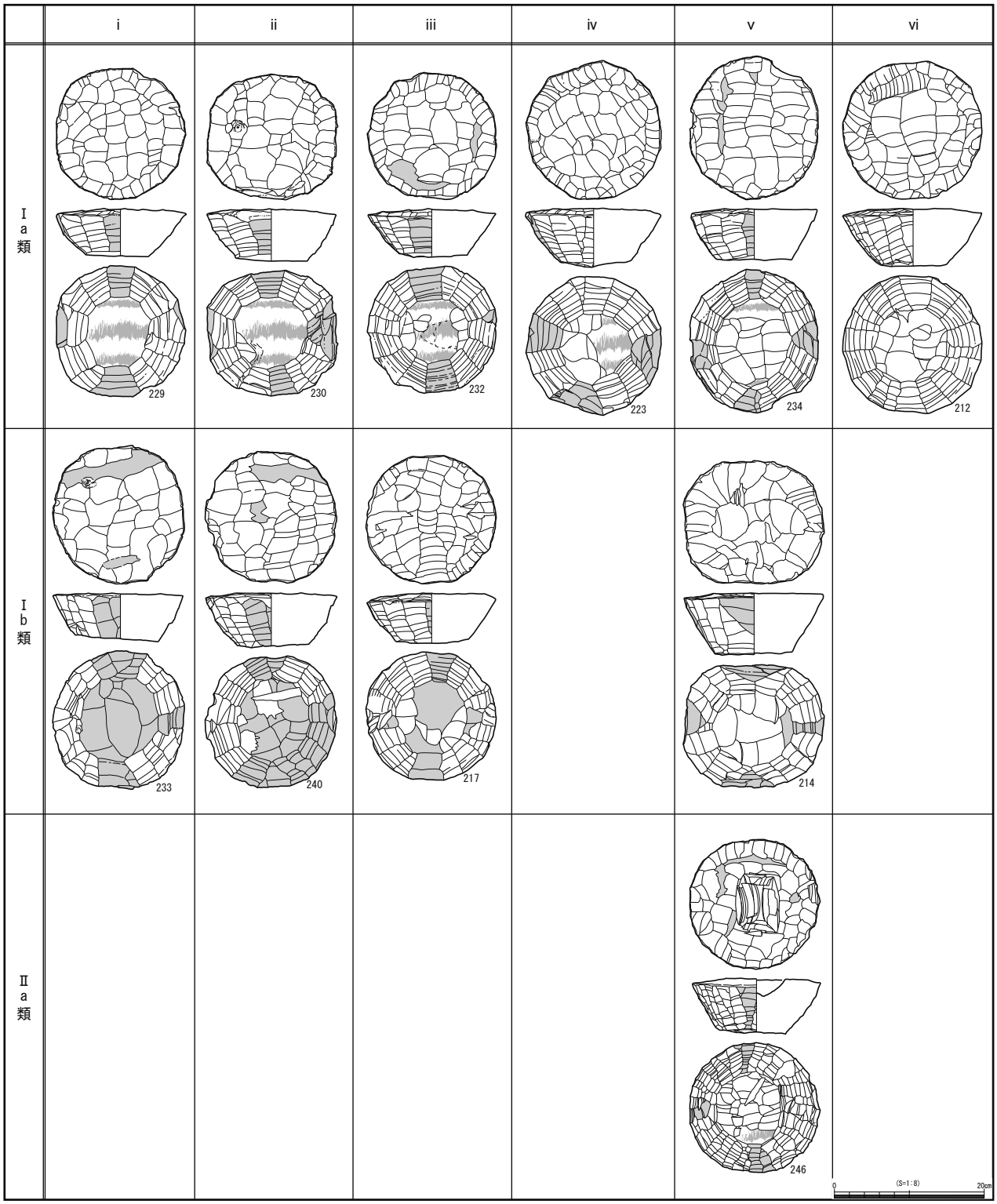
荒型の分類　荒型の分類案については、製作工程の進捗状況から区分すれば、⑤「二次成形」段階のⅠ類と、⑥「一部抉り」に至ったⅡ類に大別が可能である。また、木取りの位置から、外周側にあって底面に樹皮を剥いだ丸太の表面を残すａ類と、木芯部で底面が全面成形されるｂ類に細分される。細細分としては、⑤「二次成形」後の状態に注目するとすれば、上面側はその大半が再成形されていることから、分類の観点から一先ず除外する。残る底面側の成形状況を視点に分類を試みるとすれば、③一次成形段階のまま（ⅰ類）、極一部成形（ⅱ類）、両側成形（ⅲ類）、過半成形（ⅳ類）、大半成形（ⅴ類）、全面成形（vi

		i	ii	iii	iv	v	vi	集　計
Ⅰ類	a類	11 213・219・220・225・227・**229**・231・239・243・244・247	6 222・226・228・**230**・237・245	6 215・216・224・**232**・235・238	2 **223**・236	5 218・221・**234**・241・242	1 **212**	31
	b類	2 **233**・249	1 **240**	1 **217**	0	1 **214**	0	5
Ⅱ類	a類	0	0	0	0	2 **246**・248	0	2
総　数		13	7	7	2	8	1	38

第２表　荒型分類集計表

類）の６類に便宜的な区分が可能であり、各個体の分類集計としては第２表のとおりとなる。結果としては、③一次成形段階の状態をほぼ完全に保持している個体が大多数を占め、若干の成形に留めるものが多くなっていた。この集計結果から窺える実態とは、丸太の表面を残すという横木取り板目という木取りが作業効率的に有効であったことを意味するものと言える。

ただし、底面の成形状況については、素材の凹凸等による適宜的な判断に基づくものであり、必ずしも有効な細細分とは言えないかもしれない。参考分類としておきたい。



第35図　荒型分類図

箸

箸と認定した木製品は総数14点と、発掘調査面積や井戸検出数との対比からすれば、極めて僅少というニュアンスが強い。地区別にみても、Ａ・Ｂ地区では明確な事例がない。出土遺構としては、全て井戸内となるが、その基数も７基に過ぎない。しかも、ＤⅠ地区ＳＥ-2402井戸：５点、ＤⅡ地区ＳＥ-2599井戸４点と、２基の井戸に集中し、他５点は各井戸各１点となっており、散漫な出土状況であった。

また、欠損品が半数を占め、完存品として長さが確認できる事例も７例と少ない。法量分布により区分を行うとしても、絶対数が少なく的確な傾向が捉えられるとは言い難いが、一先ず便宜的に４区分としておきたい。最短のⅰ類（19cm前後）:126、ⅱ類（20.3cm前後）:160、ⅲ類（22.4cm前後）:197、最長ⅳ類（23.9cm前後）：128・129となる。ⅳ類とした２例は、ＳＥ-2402井戸出土であることから、２本で一膳となる可能性が高い唯一の事例である。

折　敷

確実な折敷事例は、Ｂ地区ＳＥ-1288井戸の残欠１例（20）だけである。出土数が少ないのは、遺跡内における調査区の性格的な位置付けと関連する可能性が推測される。

鍋　蓋

鍋蓋と確実視される事例も、ＤⅠ地区ＳＥ-2464井戸の１点（138）だけとなっている。

桶・枡 類

木組みによる容器として、円筒形を桶、方形を枡として区分した。

桶　桶については、側板材５点となるが、全て井戸内から単片で散発的に出土していたものであり、全形を窺える個体はない。また、円形となる底板については、曲物との区別が曖昧で特定できていないが、比較的厚みがあり、特大サイズとなる64と199の２点は、桶底の可能性が高い。

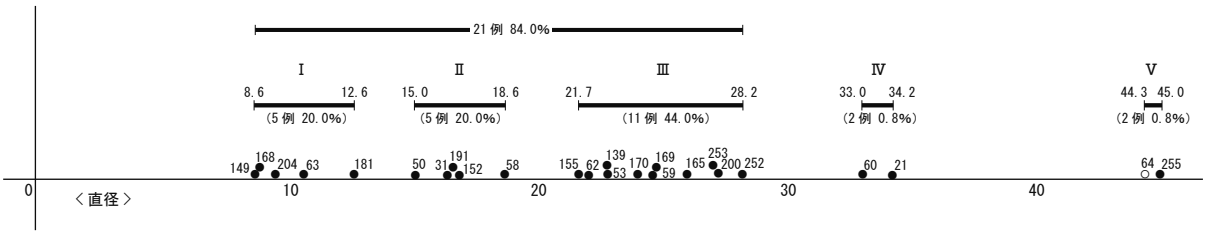
枡　枡については、Ｂ地区のＳＥ-1101井戸（14・16・18）とＳＥ-1292井戸（38ａ～ｅ）の２点となる。前者は、摩滅・劣化が著しく部品全てが揃わないが、後者については比較的保存状態が良好で、側板４辺と底板が揃っていた。底板は方形で、側板は組合式で４枚とも上辺中央に抉りが施されていた。内容量としては、内径が14.0cm四方、深さが13.8cmを測ることから、2.7048 ℓ（≒1.5升）と算出された。

曲 物 類

曲物類の出土量は多く、図化点数としては54点となる。しかし、側板及び底板が一体となった所謂完形品は１点の小型品（50）が唯一の事例で、側板（171）と底板（169）が分離して出土した事例を含めても極めて少ない。大半は、側板や帯板の残欠であり、底板についても26点の内、円形保持例は13例に留まっている。

底板の法量については、計測不能の１例（２）を除く25点について、分布図を作成すると、第36図という結果となった。法量分布から区分を試みると、Ⅰ類（8.6 ～ 12.6cm）、Ⅱ類（15.0 ～ 18.6cm）、Ⅲ類（21.7 ～ 28.2cm）、Ⅳ類（33.0 ～ 34.2cm）、そして特大となるⅤ類（44.3 ～ 45.0cm）の５区分に細分できる。直径が大きなⅣ類とⅤ類については、各２点と少なく、結果としてサイズ幅が小さくなっている。出土点数が僅少となる背景には、製作側の技術的な限界や、使用者側の機能・用途や使用頻度による需要がないことなどが理由として掲げられるのかもしれないが、ある程度詳細に把握するには他遺跡の事例などとの比較が必要となる。

もっとも個体数が集中するのが、Ⅰ類～Ⅲ類（8.6 ～ 28.2cm）であり、25個体中21例と全体の84％の大多数を占めている。特に、Ⅲ類には11例と全体に対して44.0％と半数近い比率となっており、最も一般的



第36図　曲物類底板法量分布図

で使用頻度が高く、使い勝手が良いサイズであったことが理解される。また、器種として柄杓と特定される事例としては、50と31の２例が掲げられるが、両者はⅡ類の最小クラスに該当する。検証事例が少ないが、Ⅰ類とⅡ類の多くが柄杓として製作されていた可能性が高い。

なお、曲物底板が出土した井戸等の年代観など、時期的な区分を行っていないため、変遷や時期的な推移などは明らかにし得ない。

下　駄

下駄、あるいは関連品として、３点が出土している。出土量としては僅少で、普遍的な存在とはなり得ていなかった可能性が高い。ＤＩ地区ＳＥ-2424井戸出土の完成品となる差歯下駄（161）は、露卯で長さ20.1cmと短いことから、幼児乃至女人用の可能性が高い。差歯は台底まで摩滅し、歯面には小砂利が多数食い込んでいる。井戸内から片方のみ出土していることから、意図的に廃棄されたものと推測される。同じＤＩ地区のＳＥ-2422井戸出土の差歯残欠（69）は、台形上方に着く２個一対の柄が片方欠損する。露卯下駄の差歯である。ＤⅡ地区ＳＥ-2819井戸出土の下駄（180）は、連歯下駄の残欠と考えられる。Ｅ地区ＳＥ-325井戸出土は、連歯下駄未製品（251）と考えられる。なお、Ｅ地区ＳＤ-301堀から出土した用途不明部材については、厚みが足りないことから一先ず下駄類から除外したが、台形状の形状等から差歯の可能性は否定できない。

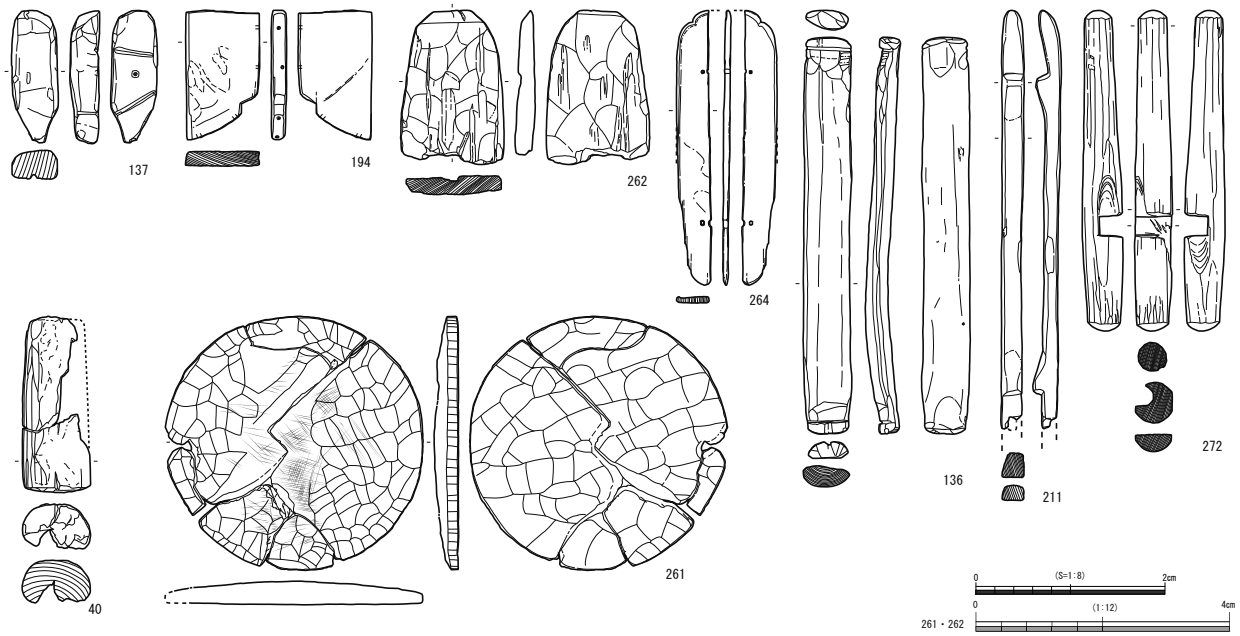
塔　婆

塔婆及び関連資料とした９点（図版80 ～ 81 － 172 ～ 179）は、ＤⅡ地区ＳＥ-2819井戸中層において下層部を封印するように敷き並べたような状態で、一括的に検出された（図版41・127 ～ 133）。形状としては、自然木を丸太のまま利用するもの（175・179）と、一部造作するものとに区分されるが、下端を杭状に尖らせていることから、地上に打ち込み建立する意図が明らかである。また、上部先端を削出して造作するもの（172・173）と腐食したものか折れたままの状態を呈するもの（174・176・177）にも区分される。

文字墨書面は、丸太の表面をカットして平らに作出するもので、172・173・174・176・177の５点が該当し、目視で文字の存在を確認できなかった174を除く４点には多数の墨書された文字を確認している（図版133）。文字の判読及び解読については、赤外線による透視調査等を行ったが、既に文字面が腐食により溶解しており、墨書の存在は一切残されておらず、判読することが全くできなかった。また、かつて、墨書の一部に「天正」という年号と想定される墨書を確認した旨、報告したところであるが〔品田1993ｂ〕、現段階で現物を確認することができなかった。

縄

縄（260）とした木製品は、Ｅ地区ＳＥ-325井戸下層から、多量の荒型や未製品など多くの木製品資料とともに１点だけ出土した。材質としては、藁ではなく木質の繊維を撚ったものであり、遺存状態は良好で固く締まっている。



第37図　用途不明木製品・未成品集成図

木　針

木針とした事例は、ＤＩ地区ＳＥ-2422井戸から出土した１点（74）が唯一である。両端が細く尖り、中央を穿孔する。全長が14.0㎝、幅も1.7㎝と短くて細く小型の木針と言える。中央の穿孔も直径が２㎜ほどと小さい。何を対象として使用されたのかは、不詳とせざるを得ない。

用途不明木製品類

用途不明の木製品あるいは未製品類として、ある程度形状が窺われる資料について、主な事例を第37図に集成した。これらについては、力量不足と時間的制約などから、用途等を特定できなかった。未製品としては、鍬と想定されるもの（262）のほかに、直径が42㎝と大型の円盤（261）が、Ｅ地区ＳＥ-325井戸下層から出土している。当該井戸からは、荒型が大量に出土しており、製作途中において井戸に投棄されたものと考えられる。特に、大型円盤については、表裏面の成形痕が荒型と近似しており、盤などの挽物荒型の可能性も否定できないが、完成品の事例がなく、不詳とせざるを得ない。262については、類似した事例が吉井水上Ⅱ遺跡からも残欠として出土しているが〔柏崎市教委1985〕、製品としては特定できていない。ＤＩ地区ＳＥ-2464井戸からは多くの木製品類が出土しているが、その内の136は、両端に三角状の切込みがあり、天秤棒の可能性もあるが、長さが42㎝と短く躊躇する。また同じく同井戸から出土した137も何らかの製品と推測されるが、特定できていない。

この他、調度品の部品とも推測される194、両端を突起状の造作した211、角状の切込みに対し、斜交する丸い抉りを施す272などについても、用途等を特定できなかった。

串

先端を尖らせた棒状の木製品を一括したものである。串の範疇とした個体は８点となった。何れも６基の井戸から１乃至２点が散発的に出土しており、祭祀関連と特定するには躊躇する。

杭　類

杭の先端と考えられる丸太を尖らせた残欠が３点出土している。ＤＩ地区ＳＥ-2462井戸の２点（145・146）と、Ｅ地区ＳＤＥ-325井戸の１点（258）で、３点とも先端部分の残欠である。あくまでも、杭状に

先端を尖らせたものとして、杭と認定したものであり、機能や用途などについては不詳とせざるを得ない。

加工材・板材類・木端類

加工材や板材などについては、出土量そのものは多く出土しているが、性格付けが困難であり、用途など特定できていない。これらの中で、特に注目されるのが木端とした釿による削り屑である。

木　端　木端類はＤＩ地区ＳＥ-2402井戸から大量に出土した。井戸発掘作業において、泥土の中に切屑が塊となっている状態で確認され、正体不明なまま取り上げを行ったものである。他の地区や他遺構からはほとんど検出されておらず、井戸内廃棄という行為は一般的ではなかったと考えられる。サイズとしては、30cm大（130）が最大で、15cm前後、10cm前後といった長さが多く、最少となる５cm前後についても少なくなかった。成形痕が表裏両面のものと、割板面を残すものがある。また、端部が直線となる事例も多いことから、丸太材を横引き鋸にて適当な長さに切断した後、割板にカット、さらに表裏面を釿にて平滑に成形し、一枚の板材を製作する過程に生じた木屑と判断したものである。

３）木製品類各説

馬場・天神腰遺跡出土の木製品類について、種別別の概要は前項で述べ、また各個体個々については、附表８にまとめた。本項では、地区別及び遺構別等により、木製品類について各説していきたい。

ａ　馬場Ａ地区［図版 70・164］

Ａ地区では、２基の井戸から点数的には多く出土しているが、全て残欠であり、まとまりに欠ける。

ＳＥ-117井戸［１～７］　曲物類として側板と廻しの帯板、底板の残欠が出土したほか、串２点や板材、そして樹枝の一部が出土している。特徴的な点としては、串と小枝樹枝合計４点の一部が炭化しており、井戸廃棄に係る祭祀的な行為がなされた可能性がある。土器類としては、刈羽三島型土師器細片が出土している。

ＳＥ-123井戸［８～13］　曲物側板の残欠５点と、枝状の棒状部材が覆土下層から出土している。前者は、１個体分の破片、後者は一部炭化していた。土器類としては、珠洲破片２点（81・82）がある。

ｂ　馬場Ｂ地区［図版 70～72・164～165］

Ｂ地区では８基の井戸から木製品が出土している。出土点数からすれば、ＳＥ-1101井戸、ＳＥ-1146井戸、ＳＥ-1292井戸が多くなっている。特徴的な事項としては、ＳＥ-1101井戸とＳＥ-1292井戸から枡と推測されるものが出土していること、後者では１個体完形品で出土している点にある。

ＳＥ-1101井戸［14～19］　枡状の方形容器の部品３点については、腐食が著しい。その他に挽物の鉢残欠、全面炭化した柱材様の丸太材が出土している。珠洲甕破片のほか、青磁小片が出土している。

ＳＥ-1126井戸［29～30］　角柱状で下端が有段にカットされた板材と串の他、珠洲片口鉢底部破片（216）が出土している。

ＳＥ-1146井戸［22～28］　点数的には７点と多いが、漆器小皿（22）の他は、加工材など板材の残欠である。23の上部は切込みが看取され、意図的に切り折られたもの。24については、端部の一部が炭化するもので、弧状を描くことから曲物底板の可能性がある。25は、左側が三角状に尖る。共伴遺物としては、置き砥石と考えられる大型砥石が出土している。

ＳＥ-1288井戸［20～21］　折敷と曲物底板の残欠が、各１点出土した。後者については、腐食が進ん

でいる。土器類としては、刈羽三島型土師器の小片（240）と珠洲壺頚部破片（241）が出土している。

ＳＥ-1292井戸［38～41］ 38ａ～ｅは枡型容器の部材５点である。側板は上下を段差状にして組合せるタイプで、それぞれ３か所を竹釘等で留める。前述したとおり、底板は方形で、側板の上辺中央に抉りが施される。内容量としては、内径が14.0㎝四方、深さが13.8㎝を測ることから、2.7048 ℓ（≒1.5升）と算出された。40の丸太状の木製品は、素材が丸太を芯去に分割し、分割面を丸く成形、一部樹皮側を残す。用途・性格不詳。39は、断面が弧状を呈する板材、41は板材残欠である。珠洲片口鉢底部破片（239）が出土している。

ＳＥ-1293井戸［31～34］ 曲物底板（31）と廻しの帯（33）、および側板（32・34）が出土しており、同一個体と推測される。底板の直径は16.2～16.5㎝、側板の高さは23.5㎝で強度が高くなる重なり部分に柄の一部が斜位に残る。

ＳＥ-1299井戸［42～43］ 短冊状板材２点。42は上下面とも平坦に整形される。43は上下端欠損、表面の黒褐色付着物は漆の可能性がある。

ＳＥ-1306ａ井戸［35～37］ 漆器椀（37）と加工板材（35）およびやや大型の木端（36）である。漆器椀は、内外面黒色漆、内面に赤色漆による菊花文が施される。刈羽三島型土師器小片（218）が出土しているが、伴うかは不明である。

ｃ　馬場・天神腰Ｃ地区［図版72～74・165］

Ｃ地区は、20グリッドラインを境に小字名が異なることから、西側を馬場ＣⅠ地区に、東側が天神腰ＣⅡ地区に区分した。ＣⅠ地区からＣⅡ地区中程までは、時期不詳ながら幅約40m、深さ1.5～２mで掘削され､その後埋め戻されていた。このため､当該範囲で検出された遺構のほとんどが井戸などの底部となっていたが、木製品類はこれらの多くから出土している。

ＳＥ-1701井戸［47～49］ 板材残欠などが出土しているが、種別が明らかなのは、ＳＥ-1701井戸の箸（48）だけとなっている。なお、ＳＥ-1701井戸からは刈羽三島型土師器小皿（343）と珠洲甕片（342）が伴っていた。

ＳＥ-1703井戸［50～57］ 曲物は柄杓（50）と底板（53）が出土した。柄杓は完形となるが柄を欠失するも挿入孔が確認できる。底板下面には釿による成形痕が残っていた。55の板は、上下端部に横引き鋸の痕跡を残し、上面は釿による成形で、下面は割板の状態を残す。56・57は同一個体で上面には釿成形痕を留めていた。この他に、串（54）や板材小片が出土している。51は薄い板材の残欠で、１か所穿孔が確認できる。52はやや厚手となるが、上下幅が4.1㎝と細い。土器類としては、刈羽三島型土師器小片と珠洲甕破片（341）が伴っていた。

ＳＫｐ-1704ピット［62］ ＣⅠ地区は、深く掘り込まれており、残存する遺構は全て井戸底面であることから、当該遺構もピットというより井戸残欠の可能性が高い。木製品としては、曲物底板１点である。

ＳＥ-1711井戸［58～61］ 曲物底板３点と側板１点が出土している。58は摩滅・劣化が著しく、断面などが丸くなる。59は全周が欠損、60は上面の炭化が著しい。61の側板は、内面の腐食が著しいが、外面は黒色を呈し、黒色漆が塗布されていたものと考えられる。共伴遺物としては、焼土塊（炉壁）が１点出土しているが、底板の炭化との関連は不明である。

ＳＥ-1720井戸［45・46］・ＳＤ-1726溝［44］ 板材の残欠が出土しているが、詳細は不明である。ＳＥ-1720井戸では、刈羽三島型土師器皿（346・348）と珠洲甕破片（347）が出土している。

ｄ　天神腰Ｄ地区［図版 74 ～ 82・165 ～ 169］

Ｄ地区出土の木製品は、他地区に比べてやや多く出土している。本項では、ＤⅠ地区とＤⅡ地区に区分して各説していく。出土遺構は、全て井戸に関連する。特異な出土事例としては、鉞の削りカスとなる木端が大量に出土したＳＥ-2402井戸、そして塔婆が埋設されていたＳＥ-2819井戸が掲げられる。

天神腰ＤⅠ地区

ＳＥ-2402井戸［75 ～ 132］　鉞の削り屑である大量の木端と、串や箸、割板材が出土している。木端は多量に出土したことから、図化をサンプル的に行っている。概要については前述したとおりであるが、大きさおよび木目との関連を改めて述べておく。まず、大きさについて、大きく４区分したが、大型類は荒削りの段階で､サイズが小さくなる過程で順次調整のための成形へという工程があったことが窺われる。また、木目の状況をみると、板目のほか柾目や追柾目など多種にわたる。このことは、丸太材から分割された板材の部位によることが推測され、樹皮を剥いだ丸太表面を残すもの（102）も確認できる。124については、両端に斜位の鉞痕を残すことから、荒削りに伴う可能性もあるが、長さが46.5㎝と長いことから板材として再加工される余地を残す。117については、表面が丁寧に成形されたのち、薄く剥ぎ取られていることから、厚さなど微調整によって削出された可能性がある。箸５本（125 ～ 129）は、125を除き完存品である。128・129は一膳となる可能性が高い。土器類等は伴っていなかった。

ＳＥ-2422井戸［67 ～ 74］　ある程度用途等が判明する個体は、差歯下駄残欠（69)、木針（74）である。このほか、板材や部材が出土している。68の板材は、上面に円形の痕跡があり、柱の礎板の可能性がある。70については、端部に穿孔があり、扇部材の可能性を否定できないが、素材としては粗悪である。71 ～ 73については、補強材の可能性もあるが詳細は不明である。刈羽三島型土師器小片が伴っていた。

ＳＥ-2424井戸［158 ～ 161・198］　差歯下駄の片方（左足）１点が出土している（161)。台部分の平面形が丸みを持つこと､サイズが20㎝と小さなことから小児乃至女性物と推測される｡その他では､箸(160)の完存品､串と思われる残欠（158)､一部炭化した樹枝残欠（159)､および板材残欠（198）が伴っていた。刈羽三島型土師器皿（351）が出土している。

ＳＥ-2426井戸［168 ～ 171］　曲物類４点の出土。側板（171）は底板（169）と一体。168は小型であることから柄杓と考えられる。土器類の共伴はない。

ＳＥ-2432井戸［133］　133は、上端と左側の縁は原形と考えられ、右側が欠損する。土器類等の共伴としては、珠洲片口底部破片が３点（356 ～ 358）と土師器片が出土している。

ＳＥ-2435井戸［144］　板材１点の出土。刈羽三島型土師器小片が出土している。

ＳＥ-2462井戸［145 ～ 155］　曲物類を主体に11点を図化した。底板については､大中小の３種があり、中とした152は厚さが1.2㎝と、大と小と比して倍の厚みがある。折れた部分の補強として、中央に２個一対の穿孔があり、破断面にも補修孔が確認できるが、ずれのため未使用である。その他の曲物類は廻しの側板（帯）（150 ～ 154）で、２帯分と考えられる。145・146は杭の先端部分、147は両端が炭化した部材、148は桶側板で、152と組み合わさるかも知れない。土器類の共伴はない。

ＳＥ-2464井戸［136 ～ 143］　比較的多くの種類が出土している。136については、やや湾曲して反り、両端に切込みが入る｡特に摩耗痕はなく､未製品としての天秤棒的な製品の可能性を否定できない｡ただし、長さ42.0cmは短い。138は鍋蓋と考えられ、中央に孔、両側に紐通し用と考えられる孔も穿孔されている。139は曲物の底板、140は曲物の廻しの帯となる。137は何らかの部品完存品と考えられるが不明。141は桶

側板の未製品か。142は丸太材で、両端が釿により成形される。143は、角材状の木製品で用途等不明。珠洲片口鉢口縁部が出土している（395：珠洲Ⅳ３期）。

ＳＥ-2470井戸下層［134・135］ 134は製品の一部となる部材と考えられるが、詳細は不明。上端側の左側、中段やや下方の左側、下端側の両側にＶ字状の切込みが入り、下方側に小孔が穿たれ、下端に差し込み用の突起が作出されている。135は、両端が炭化しており、不明ながら火付け棒かもしれない。なお、土器類等の共伴としては、珠洲甕胴部片（396）が出土している。

天神腰ＤⅡ地区

ＳＥ-2501井戸［63・64］ 曲物底板大小２点。小型の63は、底面にドーナツ形に墨痕があり、その部分の腐食が抑えられている。大型の64については、厚みもあることから曲物というより桶底の可能性が高い。上面には、刃傷痕を残しており、欠損後転用されたものと考えられる。

ＳＥ-2515井戸［163］ 曲物側板残欠、内面に切り込みは認められない。刈羽三島型土師器小皿小片（401）と珠洲片口鉢片（402）のほか、土師器として、糸切痕を残す皿底部破片と口縁部が大きく外反する摩滅した皿口縁部の細片が混入しているが、京都系模倣の関東系Ｂ類皿と考えられる

ＳＥ-2537井戸［162］ 内外面黒色漆の漆器椀１点が出土。口径13.9㎝。高台部はベタ状で脚部分を圏線で表現している。土器類は出土していない。

ＳＥ-2585井戸［164］ 板材で、全周が欠損する。京都系Ａ類第二波の皿（414）の大破片が伴っている。

ＳＥ-2599井戸［183～186］ 箸４点が出土。186を除く他３点は残欠。土器類としては、関東系Ｂ類の皿（423）が出土している。

ＳＥ-2811ａ井戸［65・66］ 板材の残欠。青磁碗が共伴している。

ＳＥ-2819井戸［172～181］ 土器･陶磁器類多数（434～462）とともに、鉄製品（３）や石製品（18～25）など多様な遺物が出土している。特に重要な木製品類とは、自然樹木製の塔婆が多数出土した点にある。塔婆については、前項の概要にて述べたので割愛する。その他の木製品としては、連歯下駄片方の残欠（180）、および曲物底板（181）となる。下駄のサイズについては、左側と下端が欠損しているため計測できない。左右については、先端鼻緒の位置から右足側と推測される。

ＳＥ-2827井戸［165～167］ 166は桶側板と考えられることから、厚さが1.3㎝と厚い曲物類底板とした165は、桶底板の可能性が高い。167は、内外面黒色漆の漆器皿で、全体的に薄く仕上げられており、上物の可能性が高い。共伴した土器類等では、京都系Ａ類第二波皿（469～473）５点のほか、瀬戸・美濃の皿（474）、青磁碗（475：上田Ｄ-Ⅱ類）が伴い、さらに須恵器甕破片（476）が混入していた。

ＳＥ-2962井戸［156・157］ 板材残欠と串ないし箸が出土している。珠洲片口鉢底部片（482）などが出土している。

ＳＥ-3013井戸［182］ 用途不明の板材。全形は不明。下方に楕円形の孔が２個一対穿たれる。横位に切り込み多数が入り、曲物側板的な特徴を有するが、厚さが0.9㎝と厚い。土器類等としては、白磁口禿碗（489）と珠洲甕破片（490）が出土している。

ｅ　天神腰Ｅ地区［図版83～91・169～178］

Ｅ地区出土の木製品類は、大半が井戸出土であるが、調査区内を縦断する館の大型堀なども湧水など水に浸かる環境にあったことから、幾つかの木製品が出土している。当該地区において特筆される事項としては、ＳＥ-325井戸であり、合計38個体が出土した椀荒型を含む未製品類等が掲げられる。

ＳＤ-301堀［187・188］ 台形を呈した板材と曲物側板が出土している。187は、下駄の差歯にも近似するが、高さがありながら厚さが0.9cmと薄いことから、用途不明の板材としたものである。上下不詳。188は、深さが14.8cm以上となるが、直径などは不明である。

ＳＤ-304溝［190 ～ 193］ 曲物の底板（191）と側板４点が出土しているが、本来は一体となるものと考えられる。

ＳＥ-309井戸［189・199 ～ 201］ 箸１点が出土。上端が欠損しており、長さは不明ながら現存長が20.5cm以上とやや長い事例となる。199は、桶側板と考えられる201の存在から、桶底板の可能性が高い。鉞による成形痕を留めるが、凹凸は小さく概して丁寧である。底部側には箍に締め付けられたような痕跡と、刃傷が多数刻まれていた。200の曲物底板は腐食が著しい。破断面側に補修孔が１か所確認できる。

ＳＥ-310ａ井戸［194 ～ 197］ 195の漆器椀は、外底面以外の内外面が黒色漆で塗布される。整形痕としては、内外面にロクロ成形の痕跡が明瞭で、一部に荒型成形の痕跡も留める。底部は厚みを持ち、高台部が低く作出されている。外底面には中心点からコンパスで描いたような３点の円形線刻文が施されていた。毛利家の家紋か。194は調度品などの部材と推測されるが、器種などは不詳。切込みを挟み上下に釘孔が２個一対で残されている。196は板材残欠、197は箸で完存品である。土器類等については、珠洲片口鉢（639：Ⅱ期）と須恵器甕破片（640）が出土している。

ＳＥ-311井戸［211］ 用途不明であるが、形状は特異であり、類例を探索する必要があるが、今回は十分果たせなかった。珠洲片口鉢（641）破片出土。

ＳＥ-312井戸［202・203］ 202は平板な板材で、形状は短冊形。上下端部に加工痕を留め、欠損する。203の箸は、中折れしつつ上下端欠損。土器類としては、刈羽三島型土師器の皿（644・645）と小皿（642・643）、そして青磁碗底部（646）が出土している。

ＳＥ-313井戸［204 ～ 207］ 204は小型の曲物底板であり、柄杓と考えられるとともに、205の曲物側板と一体となる可能性が高い。207の廻しの側板（帯）は、45cmと長く、別個体である。土器類としては、刈羽三島型土師器小皿（647 ～ 649）、珠洲の甕破片（650）と片口鉢（651：Ⅳ２期）のほか、越前（652）や瀬戸・美濃の天目茶碗（653）が出土している。

ＳＥ-314井戸［208・209］ 小さな板材３点が出土。伴った土器類は、刈羽三島型土師器皿（654 ～ 658）５点と多い。

ＳＥ-325井戸［212 ～ 263］ 荒型38個体については、概要で述べたので割愛したい。250は白木の小椀で、底部がベタ状を呈する。未製品類として、連歯下駄（251）や鍬状（262）、盤状（261）がある。曲物の底板破片（252 ～ 255）や縄（260）などが出土している。255の曲物底板の直径42.9cmは本遺跡最大である。土器類には、白磁玉縁など（661 ～ 663）や須恵器（664 ～ 666）などが伴っており、本遺跡では最古級となる事例である。

ＳＥ-331井戸［270 ～ 272］ 曲物側板の残欠２点のほか、272で丸棒状の製品が出土している。形状が特異なことから、用途等を特定したいところであるが、不明とせざるを得ない。刈羽三島型土師器（668 ～ 671）が伴っていた。

ＳＥ-335井戸［264 ～ 266］ 用途不明な製品の残欠（264）、板材や曲物側板の残欠がある。

ＳＫ-392土坑［210］ 桶側板と考えられるもの１点で、表面側が炭化している。

ＳＥ-416井戸［267 ～ 269］ 漆器皿（269）のほか、用途不明の板材がある。267は、短冊状の板材で、下方が欠損するが、上端を緩く削出して端部を縁状に隆起させ、中央に１か所の穿孔がなされている。

Ⅴ　総　　括

1　柏崎市域における中世遺跡の調査事情

中世集落を主体とする馬場・天神腰遺跡は、平成時代が幕を開けたその初期、平成３年から４年の２か年にわたって調査された。市内における中世集落の調査は、馬場・天神腰以前では、吉井遺跡群において数か所にて実施されていた。しかし、ほ場整備事業に係るパイプライン敷設に伴う調査が主とあって、調査区幅が２ｍ前後と狭小で、集落の全体像を見極めるまでに至っていない。したがって、調査対象面積約5,000㎡、調査区幅13ｍという規模は、市内初めての本格的な中世集落の発掘調査であった。

しかし、本書となる報告書の刊行は、30年という年月を経ており、その間に調査された中世遺跡は、現在進捗中の国道８号バイパス事業に係る大規模調査だけではなく、市教委直営の調査遺跡の件数も含めれば相当数に上っている。山崎遺跡や丘江遺跡に係る調査成果などは、本遺跡を理解し報告する上で大いに参考となったことは、ある意味皮肉でもある。だが、この30年という年月において重要な視点とすべきは、馬場・天神腰遺跡が佐橋荘域でかつその中枢とされるとおり、中世荘園との関連で、各遺跡を見ていくことが可能になりつつあるということであろう。以下、各荘保の状況を概観したい。

佐橋荘南条　中世集落の調査事例は、小規模な事例が数ヵ所に過ぎず、全体の状況は不詳であり、現状では馬場・天神腰遺跡で様相を窺う以外に手立てはない。それらの中で、鯖石川中流域南端右岸の久保田遺跡は700㎡が調査された中世集落であり、建物跡20棟と柵列５列とともに、堀が検出されていることから、ある程度の有力者が住まうことは間違いない。越後毛利氏の一族、石曾根氏関連とされているが、詳細は明らかでない〔柏崎市教委2017ｃ〕。佐橋荘域の課題としては、馬場・天神腰遺跡中枢部と、北条毛利氏の本拠地である北条城の城下について実態を解明していくことが重要課題と言えよう。

鵜川荘安田条　現在国道８号バイパス関連で調査されている山崎遺跡や丘江遺跡は、鵜川荘安田条の下方にあたる地域である。安田条上方には、越後毛利氏の一族が地頭職を得ており、後に安田毛利氏として戦国時代を生き抜いていく。しかし、その勢力拡大に際し安田条下方にあった不退寺との相論が文書に残されている。不退寺は、かつて七堂伽藍の大寺と称せられていたとされ、周辺には田塚山の仏堂や小児石の中世墓地が立地し、かつ現在の小字名でも、大字下田尻には「無浄土」「火塚」「法恩寺」、大字両田尻では「石抱」「頭無」といった宗教・信仰を彷彿とさせる地名が多い。また、丘江遺跡からは、12世紀中頃から13世紀中頃とされる金箔押し木製塔婆が出土したとおり、宗教色が強い地域である。安田毛利氏との相論は、文明10（1478）年12月晦日付の文書から15世紀第４四半期の頃となるが、寺の縁起には文明年間の戦乱により焼失されたとも記されており、安田毛利氏の関与が疑われる。ただ、丘江遺跡における中世集落の画期が、14世紀末とされており、今後時期的な整合性などを見極めていくなどが課題となろう。

比角荘袋条　現在、関町遺跡・琵琶島城遺跡・下沖北遺跡の３遺跡が調査されている。注目すべきは３遺跡を貫く側溝を備えた南北道の存在である。関町遺跡では、館の堀跡そのものは検出されていないが、琵琶島城遺跡では東側溝に沿って、また下沖北遺跡では西側溝に沿って、それぞれ側溝を改修した堀が検出されている。13世紀後半以降に都市計画的な区画整理がなされた可能性があり、道路に沿う館の存在な

ど、馬場・天神腰遺跡との共通点は注目される。袋条は、柏崎砂丘後背地となる鵜川下流右岸となるが、砂丘上に立地する柏崎町遺跡と、比角という地名を残す砂丘東部における中世集落の実態解明は、記録や文書類が少ない比角荘を知る上でも重要な課題となっている。

苅羽郷　別山川流域については７保が知られるが、綜合するに至っておらず、今後の課題が多い。

２　土器・陶磁器類と時期区分

１）土器・陶磁器類の様相

出土状況と調査区の性格　馬場・天神腰遺跡の発掘調査で出土した土器・陶磁器類について、総括的にまとめると、「中世土師器と珠洲を主体に、越前や瓷器系陶器、そして瀬戸・美濃とともに僅かながら唐津が伴い、貿易陶磁器として青磁や白磁、若干の青白磁と青花が確認できる」といった文面となる。この表現は、中世土師器と珠洲を除けば、出土量や点数が僅少であったという実態を表している。また、各器個々において、出土量が多かったとされる中世土師器や珠洲も含め、全形を窺える個体が少なく所謂完形品が極めて乏しいといった実情がある。さらに、遺構内から同種や異種の土器・陶磁器類が一括的状況とともに多数出土するといった事例もほとんど得ることができなかったことは、土器編年の試案などにおいて、画期の設定や各期の土器様相を推し量ることを困難とする。

このような出土状況とは、一般的な中世集落においてはある意味普遍的とも言える。しかし、馬場・天神腰遺跡に対する集落遺跡の評価としては、堀によって囲まれる館が東西に細長い調査区の東端と西端の２か所で検出されている。また、遺跡全体をみれば、調査区の南西側においても地表面観察による土塁と堀跡の痕跡から、新たな館の存在も想定可能であり、これら館跡が集中する状況からすれば、佐橋荘中枢域であったことは肯定されるであろう。したがって、在地領主や富裕層など、武士的な階級が複数居住していたという実態が想定可能なことからすれば、政治的にも中核的な集落を形成していたことは間違いがない。しかし、出土した土器・陶磁器類の実態とは、威信材とすべき品々も少ないなど富裕層的な状況になく、遺跡そのものの評価とは必ずしも正比例するものではなかったのである。

この事由としては、調査区として設定された区域が、遺跡全体からすれば北辺に偏り、また領主層の居館が検出されていても、堀そのものから外縁が調査対象となっており、館内において主体をなす主屋などが、調査区から外れているなどという結果が反映されていたものと推測される。つまり、館周辺の町屋などが主な調査対象であったという調査区の性格そのものが、土器・陶磁器類の様相や組成として現れたものと評価できるであろう。

土器・陶磁器類の様相　主要な土器・陶磁器類の分類あるいは集成については、第Ⅳ章の第13図～第25図にまとめ、また各種別による個別的な出土分布図については、第26図～第33図にて提示した。各種別に係る概要等については、前章にてある程度概説していることから、本項では総括的にまとめておきたい。

まず、中世土師器については、古代以来伝統的な土師器が僅かに出土していることから、平安時代において小規模であったとしても集落が営まれていたことは推測可能である。しかし、12世紀後半以降、京都系土師器の第一波に類する土器類は、鵜川下流右岸の琵琶島城遺跡で出土が確認されているにも拘らず、一切確認できていない。本遺跡においては､白磁碗Ⅳ類が多少なりとも出土していることを考慮した場合、集落形成が途絶えたとは考えにくい。寧ろ地域的な問題あるいは遺跡の性格、または発掘調査地点の属性が大きく作用した結果であったことが想定されるが、これらの課題解明は今後に残さざるを得ない。

馬場・天神腰遺跡において、中世土師器が普遍的な存在を示すのは、13世紀後半から14世紀代においてであり、刈羽三島型土師器が出土するようになってからとなる。この時期における柏崎平野一帯では、中世土師器と言えば、若干の搬入品が伴うことがあっても、大半の遺跡から出土するのは刈羽三島型にほぼ限定されており、本遺跡も例外でなかったことを意味する。しかし、その後の推移をみると、遺跡内から出土する中世土師器は、14世紀末以降がロクロ成形される関東系Ｂ類に、また15世紀後葉以降において京都系第二波となる手づくね土師器が出土することになるが、結果として量的に少なく、また出土地区・地点・遺構も限定的となっていた。これら中世土師器の出土量の多少は、集落としての盛衰とも関わるものと考えられる。また、時期によって中世土師器の製作技法などが転換している点は、背景となる歴史的事象との関連性が窺え、時期区分の視点、あるいは画期の一つになり得ると考えている。

珠洲は、破片数からみた出土量そのものは多く、調査区域全体に分布するも、その実態は大型品となる甕や壺の胴部破片が大半であり、個体数的には限定的であったと考えざるを得ない。しかし、器種によって傾向はやや異なるが、珠洲編年〔吉岡2003〕に対応させた時、Ⅱ期からⅦ期まで、おおよそ13世紀代から15世紀代までの製品が出土しており、陶製の貯蔵具である甕と壺、調理具としての片口鉢が必需品として用いられていたことが明らかである。これらの製品は、日本海を介して流通したものであり、基本的には柏崎津に陸揚げされたと推測できる。

越前については、出土点数および時期判定可能な個体が少なく、時期的な幅などについては、具体的な検証ができていない。唯一時期が特定可能な擂鉢（450）が、16世紀第4四半期と考えられることから、珠洲の生産が衰退し、流通も途絶え始めた16世紀代に搬入されるようになったものと推測される。この越前についても、珠洲と同様、海を介して流通したと考えられるが、遺跡の存続時期や盛衰との関わりもあって、量的には伸び得なかったものであろう。

瓷器系陶器とした類は、出自を特定できていないため、流通過程は不詳である。しかし、瓷器系陶器の生産地について、消去法的に想定すれば、加賀や越前系乃至常滑など東海系が搬入された可能性がある。

瀬戸・美濃については、搬入ルートが陸路にほぼ限定されることから、大型品は少なく、食膳具を主とする椀・皿、天目が主体となっている。時期的には、古瀬戸様式後期から大窯Ⅰ段階まで、14世紀後半から16世紀前葉の幅に収まるが、確認できた個体が総計21点と、発掘調査面積からしても極僅少であり、継続的に搬入されたものか、断続的一時的に持ち込まれたものかなど、時期判定に有効な資料が少なく、詳細な検討に至っていない。

貿易陶磁器は、出土全体量としては限定的であった。その中でも、青磁を主体に白磁も比較的多く出土するが、青白磁と青花は各１点と極めて少ない。白磁は、白磁碗Ⅳ類が主体となるが、白磁全体をみるとＥ地区の５点を筆頭に、Ａ・Ｂ・ＤⅠ・ＤⅡの各地区から１点ずつ出土しており、11世紀後半から主に13世紀前半代における生活痕を示していると解釈したい。青磁は、鎬連弁紋碗類が最も多いことから、13世紀代から14世紀が主体的で、戦国期にかかる個体が少なくなっているが、集落の盛衰、あるいは調査区の場としての意味合いと関連するものと推測している。青白磁の１点は梅瓶であり、小破片ではあるが、威信材として持ち込まれていたことは､本集落が意味する性格の一端を表しているものと評価したい。また、青花１点と僅少であった背景には、集落が営まれていた時期的な問題を含むものと理解している。

２）時期区分と集落の盛衰

馬場・天神腰遺跡の集落に係る変遷や盛衰について、建物跡や井戸などの重複から過程を追うことは困

難となっている。本節では、土器・陶磁器類により時期区分を試みるとともに、時期設定した各段階・各期により、集落としての変遷を概観することとしたい。

時期区分対象種別の選定　馬場・天神腰遺跡から出土した土器・陶磁器類は、中世土師器を主体に珠洲や越前及び瓷器系陶器、そして瀬戸・美濃など、また貿易陶磁器といった類が出土している。しかし、既に述べたとおり、中世土師器を除けば出土量は限定的で、また破片資料が多いなど、時期設定の主体にはなり得ず、年代観等を比定する補助的な存在に過ぎない。また、土器・陶磁器類の主体をなす中世土師器であっても、一括性が乏しい破片資料群であり、時期区分の基準として用いていくには説得力に乏しいのが実態である。

このような土器様相を呈する本遺跡の状況ではあるが、中世土師器とは時期によって製作技法などが転換するといった特性を看取することができる。また、中世土師器は、他地域において生産され搬入されたものとは異なり、在地で焼成、生産され、使用後廃棄されるものであり、地産地消として地域や遺跡・集落に密着するといった特性は、他の種別との大きな相違点である。また、その性格上長期にわたって伝世することは稀であったと考えられ、生産から使用、廃棄に至るまでの回転が速い。

古代における土師器椀や杯類は、食膳具として日常的な食事の器として使用、消費されていた。しかし、11世紀以降、土師器食膳具は小型化の一方、衰滅の一途をたどり、食膳具の主体は漆器類に移行したとする説が提示されている。つまり、土器食器類の使用形態は、大きな変革期を迎え、土器に対する観念も大きく変移していったことが､古代の土師器と中世の土師器の相違､性質の差異となったとすることができる。

馬場・天神腰遺跡から出土した中世の土師器類は、日常的なケの食膳具という用途・機能で捉えることは既にできず、非日常的、ハレといった特別な意味を持つ器へと変移していたことが窺われる。

土師器の成形技法は、京都周辺における手づくね成形と、京都以外におけるロクロ成形に大きく大別される。新潟県域と関わりがある成形等の特徴は、京都系とされる手づくね成形と、関東で主体となるロクロ成形とともに､古代以来伝統的な土師器製作技法であるロクロ成形の３パターンである。これら３者が、成形技法が交代するかのように推移するが、その発端、要因とは、ロクロ成形の圏内に京都系の手づくね成形が持ち込まれることによって生じた現象とすることができる。その背景には、政治的な意図、使用者側の配慮や忖度といった事情も見え隠れするが、その実情が越後という一国の中で生じていることは驚きを隠せない。このこと自体、越後における中世史と深く関わっていること、また古代における日常的な食膳具とは異なる中世土師器特有の観念や扱い方、使用形態があったと考える根拠ともなる。

このような観点から、本遺跡の時期区分については、中世土師器に係る製作技法等の基本的区分をもって時期設定を行い、集落の変遷や推移をみていくこととしたい。

中世土師器による時期区分と各期の設定　中世土師器の製作技法等の変移から設定した場合の時期区分とは、第３表に示した通り、大きく５期に区分することとした。

第Ⅰ期は、北陸系ロクロ土師器の時代としたが、在地において古代以来続く伝統下において製作された土師器である。法量的には小型化が進み、小椀や小皿、そして柱状高台乃至底部が厚手化する類である。出土量は、第13図に集成したとおり僅少であった。

第Ⅱ期は、京都系土師器第一波の流入期に該当するが、馬場・天神腰遺跡では土器類そのものが未確認となっている。代替とする土器類等としては白磁Ⅳ類や珠洲Ⅱ期資料ということになるが、資料数そのものはそれほど多くない。

第Ⅲ期は、刈羽三島型土師器の時代であり、中世土師器の大半を占めるとともに、珠洲もⅢ期からⅣ期

土師器による時期区分案			主な特徴	大まかな年代観	備　　考
北陸系ロクロ土師器の時代	Ⅰ	a	須恵器貯蔵具残存	～11世紀前半	春日Ⅶ期
		b	小椀・小皿・柱状高台	11世紀後半～12世紀中葉	春日Ⅷ期・白磁Ⅳ類
京都系土師器第一波の時代	Ⅱ			12世紀後葉～13世紀前半	珠洲Ⅰ期・Ⅱ期
刈羽三島型土師器の時代	Ⅲ	a	シャープ・強ナデ	13世紀中葉～後半	珠洲Ⅲ期
		b	厚手・丸み・外底面凹み	13世紀末～14世紀後葉	珠洲Ⅳ期
関東系ロクロ土師器の時代	Ⅳ			14世紀末～15世紀前半	珠洲Ⅴ期
京都系土師器第二波の時代とその後	Ⅴ	a	京都系模倣ロクロ土師器	15世紀後半～16世紀初頭	珠洲Ⅵ期・Ⅶ期・越前
		b	京都系手づくね土師器		
		c		16世紀前葉～後半・末葉	越前Ⅴ３期・唐津

第３表　馬場・天神腰遺跡の時代区分試案

の出土量が多くなっている。刈羽三島型にも、形態や調整方法等に変遷があり、口縁部のナデ調整が強く、全体的にシャープなつくりと、厚手となり横ナデが弱くなるものがあり、前者を第Ⅲａ期とし、後者を第Ⅲｂ期に細分したい。

第Ⅳ期は、関東系ロクロ土師器の時代とするが、京都系の模倣がなされるものについては、第Ⅴ期として区分、分離した。珠洲はⅤ期が伴う。新潟県域では、一括性が担保される資料が少なく、編年作業が進めず停滞しているが、中世土師器の使用形態そのものが変移している可能性が高い。

第Ⅴ期は、京都系土師器第二波とその後の時代とした。年代観としては、15世紀後半から16世紀後半・末葉までとするが、京都系土師器と関東系ロクロ土師器の京都系模倣の時期は、16世紀初頭までとなる。

なお、本遺跡では、京都系模倣のロクロ土師器と京都系土師器相互に共伴事例がなく、便宜的ながら前者をａ期、後者をｂ期に細分した。また、ｃ期とした16世紀前葉以降につては、越前や唐津などを想定しているが、並行関係にある土師器は確認できていない。当該期の土師器については、柏崎町遺跡出土例に該当する資料が存在するものと考えているが〔柏崎市教委2001ｂ〕、遺跡の性格や場の相違などが関わっている可能性がある。

土器・陶磁器類からみた集落の盛衰　馬場天神腰第Ⅰ期と第Ⅱ期については、出土資料がかなり僅少となっており、少なくとも調査区が設定された遺跡北辺での集落形成は微弱であり、ある意味閑散としていた景観が想像される。第Ⅲ期に至ると、調査区全般に刈羽三島型土師器が分布しているとおり、人々の営みが全体に及んでいたことが明確となる。このことは、馬場・天神腰における集落形成が北辺に及び、発展的に展開していたことを意味するものと言える。

ただし、土師器編年において後述するとおり、第Ⅲａ期の資料は概して少なく、後半期となる第Ⅲｂ期の資料が多いことからすれば、集落域としての全面展開は、13世紀末以降に下ることを意味するものであろう。第Ⅳ期については、関東系ロクロ土師器の分布が、Ａ地区とＢ地区に散見されるが、多くはＤⅡ地区とＥ地区に集中しており、集落域が縮小傾向にあったことが窺われる。また、瀬戸・美濃の出土分布と傾向が類似することは、関東方面との関連が強化されたことと正比例した現象とも受け取れ、両者の関連性を窺うことができる。

第Ⅴ期は、ａ期とした京都系模倣ロクロ土師器がＥ地区のＳＤ-301a堀にほぼ集中すること、またｂ期とした京都系土師器についてはＤⅡ地区に限定されることから、両者の棲み分けとともに、居住域が一画に集約されていく状況が看取できる。第Ⅴｃ期の実態については、僅かな痕跡を残すのみで、ほとんど明らかでない。

3　刈羽三島型土師器の様相と編年

1）刈羽三島型土師器の研究小史

概　要　「刈羽三島型」とした土師器は、柏崎平野の中世集落では当たり前のように出土するタイプの土器であり、極めて普遍的な存在となっている。また、刈羽三島型は、器形や調整などが独自の変遷を遂げるなどといった特性があり、当該型式の性格を語る上でも重要な特徴の一つとなっている。

しかし、このような刈羽三島型の存在とは、新潟県域全体あるいは中世越後においては特異であり、普遍的な様相とはなっていない。このような実態は、自ずと同タイプの土器を伴わない隣接他地域における土器様相等との対比を困難とし、また困惑する要因となっていた。また、刈羽三島型の出土例は、主に柏崎市域で実施されてきた発掘調査に集中し、編年的研究等は柏崎地域に限定的に進められてきていた。しかし、市内における出土例とは、良好な一括資料には恵まれない状況が続き、断片的な資料から編年等の検討を行うという経緯をたどっていたのである。

このような状況を打開する重要な契機となったのが、柏崎平野の沖積地を東西に横断する国道８号柏崎ＢＰ事業である。当該事業が着手されると、これまで市街地として調査の実施が困難であったエリアにおいて、試掘や確認調査によって数多くの中世集落が発見され、かつ大規模な発掘調査事例が増加するとともに、調査報告書も次々と刊行されていくことになる。その結果、市外の研究者が調査・研究に参画する効果が生じ、刈羽三島型の理解深化に対し大いに寄与することとなり、柏崎平野における中世土師器研究はこれまでになく進展することとなった。

さらに、東原町遺跡と下沖北遺跡などからは、刈羽三島型の良好な一括土器群が複数得られるに至り、共伴遺物による年代観のクロスチェックが可能となった。その結果、編年的検討とともに全貌の解明や内容の具体化など、大きく前進する画期となったのである。本項では、これら成果に導かれながら、馬場・天神腰遺跡から出土した当該土器群の検討を試み、当該遺跡の位置付けを吟味していくこととしたい。

研究小史の時期区分　まず、その前段作業として、これまで検討されてきた研究過程について、若干概観しておきたい。新潟県域における中世に係る遺跡の発掘調査は、昭和47（1972）年に開始された北陸自動車道の建設を機に、沖積地での発掘調査が数多く実施されたことにより、事例が増加したとされている〔坂井1988〕。柏崎市域における中世遺跡の調査は、平成２（1990）年から平成４（1992）年にかけて実施された小児石遺跡と馬場・天神腰遺跡が端緒となっている。これらは、前者が宅地造成事業に係る不時発見遺跡の調査、後者は市道の改良工事に伴うものであった。しかし、その後は、沖積地において大規模に実施されるほ場整備関連事業が大きな契機となっており、県内各地で中世遺跡の調査が急激に増加していくことになる。

ところで、刈羽三島型土師器の編年的な研究等については、後述する三島郡出雲崎町番場遺跡の調査報告書が刊行された昭和62（1987）年が端緒と考えられ、今現在も継続中と捉えている。その間における研究史的な展開を窺うと、大きく３期に区分が可能と考えている。第１期（1990年代）は、柏崎市域における小規模調査等から、在住の研究者による編年的な模索期と在地型式の認識期、第２期（2000年代）は国道８号柏崎ＢＰ事業に伴う発掘調査が開始されたことにより、一括土器群など良好な資料が出土、編年的な検討が大きく展開するとともに、上限と下限の年代観が概ね絞られた段階と表現することができよう。そして第３期（2010年代）とは、国道８号柏崎ＢＰ事業の進捗に伴う発掘調査の継続により、第２期の成果を検証しながら新たな資料を追加しつつ検討が進められ、かつ複数の共伴遺物から年代観の吟味が詳細

に検討された段階となる。この第３期に刊行された報告書では、飽和状態とも言える調査研究に市外の研究者が参画し、刈羽三島型の認定や編年的研究が飛躍的に進んだ段階とすることができる。特に、丘江遺跡の発掘調査と報告書における編年的検討等は重要な成果を打ち出している。

第１期　中世土師器の編年的な研究は、国道116号の改良事業に伴い実施された三島郡出雲崎町の番場遺跡の報告書において、中世土師質土器皿の変遷が提示されたことが端緒と言える〔坂井1987･1988〕。まず、県内の中世土師器の製作技法について、Ａ類：手づくねのタイプ、Ｂ類：ロクロ成形で底部回転糸切りのタイプ、Ｃ類：ロクロ成形で底部回転ヘラ切りのタイプ、Ｄ類：手づくねで横ナデの調整を行わないタイプの４類に分類した。Ｄ類は極少なく稀な類とされているとおり、以後において類型化対象とはならなかったが、Ｃ類は阿賀北特有との考えが示されている。

ところで、番場遺跡で出土したＡ類とは、10点ほどの小破片に過ぎず、類型にあたって基準とした土器は、関野遺跡出土の土師器５点を範型としていたと考えられる〔宇佐美・坂井1987〕。これらＡ類は、畿内と北陸に多く、Ｂ類は北陸を除く東国で主体をなすと言った大枠を示すとともに、13世紀の鎌倉では、Ａ類が意外に多いという指摘が紹介されていた。また、Ａ類の資料が珠洲Ⅱ～Ⅳ期と共伴することにより、13・14世紀にほぼ限定されること、また15世紀代にはＢ類で占められる時期が存在し、その後再びＡ類が盛行するといった変遷観が示されていた。

「刈羽三島型」に関しては、関野遺跡や番場遺跡から出土しているＡ類と、西暦1300年前後となる馬場屋敷下層遺跡のＡ類を対比し、前者は「口縁部と底部の境にヨコナデによって生じた稜が突出している」という特徴を指摘し、後者ではそれが顕著でないとの相違から時期差の可能性を想定していた。そして、番場遺跡のＡ類で指摘された特徴こそが、「刈羽三島型」設定に至る出発点であったと言えそうである。

それはさておき、柏崎市域では平成２（1990）年度において、中世墓地と近世塚群を主とする小児石遺跡が発掘調査された〔柏崎市教委1991〕。出土した中世土師器は、関野遺跡や番場遺跡から出土したＡ類土師器と同類で、平成３（1991）年度における馬場・天神腰遺跡の調査でも多く出土するなど、柏崎地域の中世集落からは普遍的な存在であることが少しずつ明らかにされていくことになる。

しかし、編年的な位置付けを見極めようにも、頚城や隣接他地域の土師器とは調整や形状が異なっており、直接対比可能な資料を見出すことができなかったことから、年代観等の比定に係る困惑が続いていた。このような事態は、地域型土師器の存在を想定させる起因ともなっていくが、刈羽三島型土師器の編年的な位置付けは、柏崎地域の中世史を見極めるためにも必要不可欠な課題となっていく。そして、地域型土師器の存在は、中世越後における地域的な属性や歴史的経緯の相違などが背景にあることを示唆するものと考えられるようになった。

平成３（1991）年発表の「越後の中世土師器」〔品田1991〕は、先行研究の成果でもあった成形技法による分類〔坂井1987・1988〕について、混乱を避ける意味から類型化にそぐわないＤ類を除外する以外は大枠を踏襲することとし、その交代・転換とも言える事象から、変遷についてある程度単純化することによって整理したものである。また、併せて「刈羽三島型」を含む地域型式の認定と設定、また地域区分に従った中世土師器編年の確立を目指すものであった。

柏崎市域ではその後、平成６（1994）年の田塚山遺跡群〔柏崎市教委1996ａ〕、平成10（1998）年の角田遺跡〔柏崎市教委1999ｂ〕が発掘調査されている。両遺跡の報告書では、それぞれにおいて編年的な検討を試みてはいる。しかし、出土した中世土師器のほとんどを刈羽三島型が占め、出土点数が比較的多いという状況下にもかかわらず、破片資料が大半で完存品が少なく、また遺構内一括資料には全く恵まれな

	発掘調査年	遺跡名	文　　献
第1期	1985年	番場遺跡	〔新潟県教委1987〕
	1990～1991年	小児石遺跡	〔柏崎市教委1991〕
	1991～1992年	馬場・天神腰遺跡	
	1994年	田塚山遺跡群	〔柏崎市教委1996〕
	1998年	角田遺跡	〔柏崎市教委1999〕
第2期	2002・2004年	下沖北遺跡	〔新潟県教委2003・2005〕
	2003～2004年	東原町遺跡	〔新潟県教委2005〕
	2005年	上澤田遺跡	〔柏崎市教委2007〕
	2005～2006年	上原遺跡	〔柏崎市教委2015〕
	2006～2007年	町口遺跡	〔柏崎市教委2010〕
第3期	2010～2011年 2014～2015年	山崎遺跡	〔新潟県教委2012・2018a〕
	2014～2018年～	丘江遺跡	〔新潟県教委2018b・c・d・2019・2020〕

第４表　刈羽三島型土師器関連の主要遺跡一覧

いまま編年的検討が模索されていた。特に、破片資料による復元実測を基とした器形分類や、乏しい共伴遺物による年代観の特定には、多くの課題を残さざるを得ないものであった。

しかし、「刈羽三島型」の出土状況等から得られた変遷観として、口縁部横ナデが強くシャープな調整から、徐々にシャープさが失われ、丸みのある厚手化へと変化することが明らかにされていくことになる。ただし、刈羽三島型の年代観については、13世紀から14世紀代との想定も漠然としており、上限時期が13世紀の前葉まで遡るのか、あるいは中葉以降とすべきかについても、また下限が14世紀代のどこまでという判断ができておらず、未だ煮詰まっていなかったのである。

第２期　平成14（2002）年と平成16（2004）年、鵜川下流右岸の下沖北遺跡〔新潟県教委2003・2005〕が、また平成15年～平成16年においては、鯖石川下流左岸の東原町遺跡〔新潟県教委2005〕が発掘調査されることになる。

両遺跡の報告では、刈羽三島型をＣ類に一括分類し、器種別では皿類をⅠ類、小皿類をⅡ類に大別、調整と器形の差異から、稜線が明瞭なａ類と不明瞭なｂ類に細分している。また、ＣⅠａ類については、器壁が厚く丸みのある①類と器壁が厚く浅い②類に、ＣⅠｂ類では外底面の凹みの有無により、有り：①類、無し：②類に細分する。

下沖北遺跡では、ＳＤ145・301、ＳＫ80、86、445、ＳＸ171の各遺構から一括出土した土器群が得られ、分類や年代観等の検討が行われた。まず、下沖北遺跡の成果としては、刈羽三島型の時期について、共伴遺物から大まかな年代観が示され〔山崎2003〕、

ＣⅠａ類：ＳＫ86＋珠洲Ⅱ期・Ⅲ期の片口鉢、ＳＸ171＋白磁碗Ⅸ類　＝　13世紀後半

ＣⅠｂ類：ＳＫ445＋青磁碗ＢⅠ´類とＤ類、珠洲Ⅳ期片口鉢　＝　14世紀前半

と、これまで漠然としていた年代観をある程度特定したことにある。

また、関東系とするロクロ成形土師器の出現について、珠洲との共伴関係から14世紀末に比定し、Ｃ類とした刈羽三島型土器の時期幅について、少なくとも14世末までは下らないとした下限の時期を提示している。なお、稜が明瞭なａ類から不明瞭なｂ類への変遷・時期差を想定するが、年代的に分離することに

やや無理があるとして、報告段階では13世紀後半～14世紀前半の時期差におさまる様相差としての理解に留めるとしていた。

そして、下沖北遺跡と相前後して調査された東原町遺跡について、土師器を多量に一括廃棄したとされるＳＫ106とＳＸ091に注目する。そして、下沖北遺跡の年代観から、前者を13世紀後半に、後者を14世紀前半に比定するといった見解が示される。また、ＣＩｂ類について、外底面の凹みの有無から、下沖北遺跡では①類が多いことに対し、東原町遺跡では②類が多いことから、時期差か地域差かは不明としつつ、柏崎平野の東西で差異が認められる点に注意したいとした。なお、土師器大量廃棄については、饗宴に伴うものと指摘している〔山崎2005〕。

何れにしても、下沖北遺跡と東原町遺跡からは、遺構内から一括的に出土した良好な資料が得られたことは間違いがなく、この成果により刈羽三島型土師器の編年が大きく前進することとなったのである。

第３期　第３期における主要遺跡とは、国道８号柏崎ＢＰ事業により発掘調査された山崎遺跡〔新潟県教委2012・2018a〕と丘江遺跡〔新潟県教委2018ｂ・ｃ・ｄ・2019・2020〕が要となる。特に、後者においては、主に溝出土例として不安要素を抱えているが、共伴遺物について多くの事例を抽出し、土師器の形態分類に合わせ、年代観の考察を行っている〔今井2018・笹澤2018〕。

刈羽三島型はＡ類に分類され、皿については器形を大きく３類に区分し、１類：口縁部と体部の境に稜がつくもの、２類：口縁部が内湾するもの、３類：箱形態となるものとした。細分については、調整手法の相違とその効果による区分とし、体部との境界が明瞭な稜となるもののうち、口縁部２段横ナデをａ類、口縁部１段横ナデをｂ類に、口縁部を広く横ナデし、稜線が底部付近に下がるか沈線状をなすものをｃ類、稜が不明瞭で底部と体部の境界がくぼむものをｄ類、そして口縁部の横ナデが粗雑化し稜線がないものをｅ類に区分している。これら分類に示された特徴は、概ね刈羽三島型を網羅するものと言える。

各類別の年代観については、東原町遺跡の一括資料等における共伴関係などと関連させつつ、刈羽三島型についてⅠ期からⅢ期までの３期に時期区分し整理を試みている。それによると、Ⅰ期：Ａ1a・b類・Ａ2b類＝13世紀後半、Ⅱ期：Ａ1c類・Ａ2c類・Ａ3a類＝14世紀前葉、Ⅲ期：Ａ1d・e類・Ａ2ｄ・e類・Ａ3ｂ類＝14世紀中葉～後半とした変遷にまとめている。また、関東系ロクロ土師器との関連では、14世紀後半～末において、刈羽三島型と共伴する概念性が高いとし、14世紀末までは下らないとした下沖北遺跡とは異なる見解が示されている。そして、土師器皿類の一括廃棄はⅢ期にみられるとし、饗宴が催されたものと推測している。

研究史上における成果と課題　以上、刈羽三島型の研究史が明らかにするところは、器形や調整等については、ほぼ見極められたと言える。また、シャープで薄手な段階から、厚手で粗雑化するといった変遷観もほぼ一致するに至っており、存続した時期についても13世紀後半から14世紀後半～末の範囲に収まるといった点では共通認識ができた。しかし、丘江遺跡の刈羽三島型は下沖北遺跡や東原町遺跡で出土した古段階の資料が少なく相対的に新しく位置付けられ、また主に溝資料によって年代比定せざるを得ないといった制約があることから、出現する上限時期と消滅乃至終焉となる下限の時期がやや漠然としている観は否めない。また、刈羽三島型の終焉と関東系となるロクロ成形の土師器出現の時期について、断絶的転換か、あるいは一時期共伴関係があるのかについても明確となっていない。

つまり、今後の課題としては、出現した上限と終焉の時期を特定することが第一に掲げられる。「刈羽三島型」は、京都系第一波がほとんど普及していなかった当該地域において、ある意味突然に出現し、柏崎平野一帯を席巻するとともに島崎川流域等の地域への広がりを見せることに対し、その他の地域では主

体とはなり得ることはなかった。この現象の背景を探ることは、「刈羽三島型」の特性や性格、あるいは政治的な動向等を見極めること、また地域史を理解していく上でも、重要な課題であろう。また、薄手でシャープな段階から厚手で粗雑化する年代の特定も重要であり、このような顕著な粗雑化は「刈羽三島型」以外ではあまり認められない。この課題も、地域を知る上で要となろう。そして、終焉の時期、下限については、中世越後全域に関わることから、京都系第二波の流入と同じように、その背景には政治的動向が存在する可能性が高く、この解明についても、中世史を考える上で重要な課題と考えている。

2）刈羽三島型土師器の編年試案

刈羽三島型中世土師器は、柏崎平野一帯の中世遺跡から普遍的に少なからず出土する。しかし、発掘調査によって一括性が高いと認定された資料は少ないというのが現状である。本項では、馬場・天神腰遺跡から出土した中世土師器の年代的位置付けを把握するため、一括性がある程度保証された資料により、編年的試案を提示し、検討することとしたい。

対象とする資料とは、溝や堀など延長が長く、開口したまま機能し、混入等の可能性が避けられない遺構出土例を避け、井戸や土坑類および一括廃棄との所見が示された土器群を対象とすることとしたい。このような条件を現状でクリアする事例は、下沖北遺跡と東原町遺跡にほぼ限定されてくる。

鯖石川左岸の東原町遺跡と鵜川右岸の下沖北遺跡は、柏崎平野中央部においておよそ６kmの距離を隔てて位置する中世集落である。当該両遺跡では、刈羽三島型とした中世土師器が遺構内からまとまって出土しており、これら一括的な資料を用い刈羽三島型中世土師器の変遷を追ってみたい。ただし、編年に用いる器種は皿とし、今回は小皿を割愛して検討を試みている。当該作業に活用する遺構一括資料と変遷、そして時期区分は第38図に示したとおりである。

皿の分類　皿の分類については、主に口縁部の形状や器面調整により区分し、便宜的にＡ～Ｇまでの７種とした。

Ａ種：体部の屈曲稜線が明瞭で、口縁部外面に２段のシャープな横ナデを施し外反するもの

Ｂ種：体部の屈曲稜線が明瞭で沈線が施されるとともに、口縁部外面を２段横ナデするとともに口唇部内面を強く横ナデすることにより、内湾状を呈するもの

Ｃ種：体部の屈曲稜線が明瞭で沈線を施し、口縁部が外傾するもの

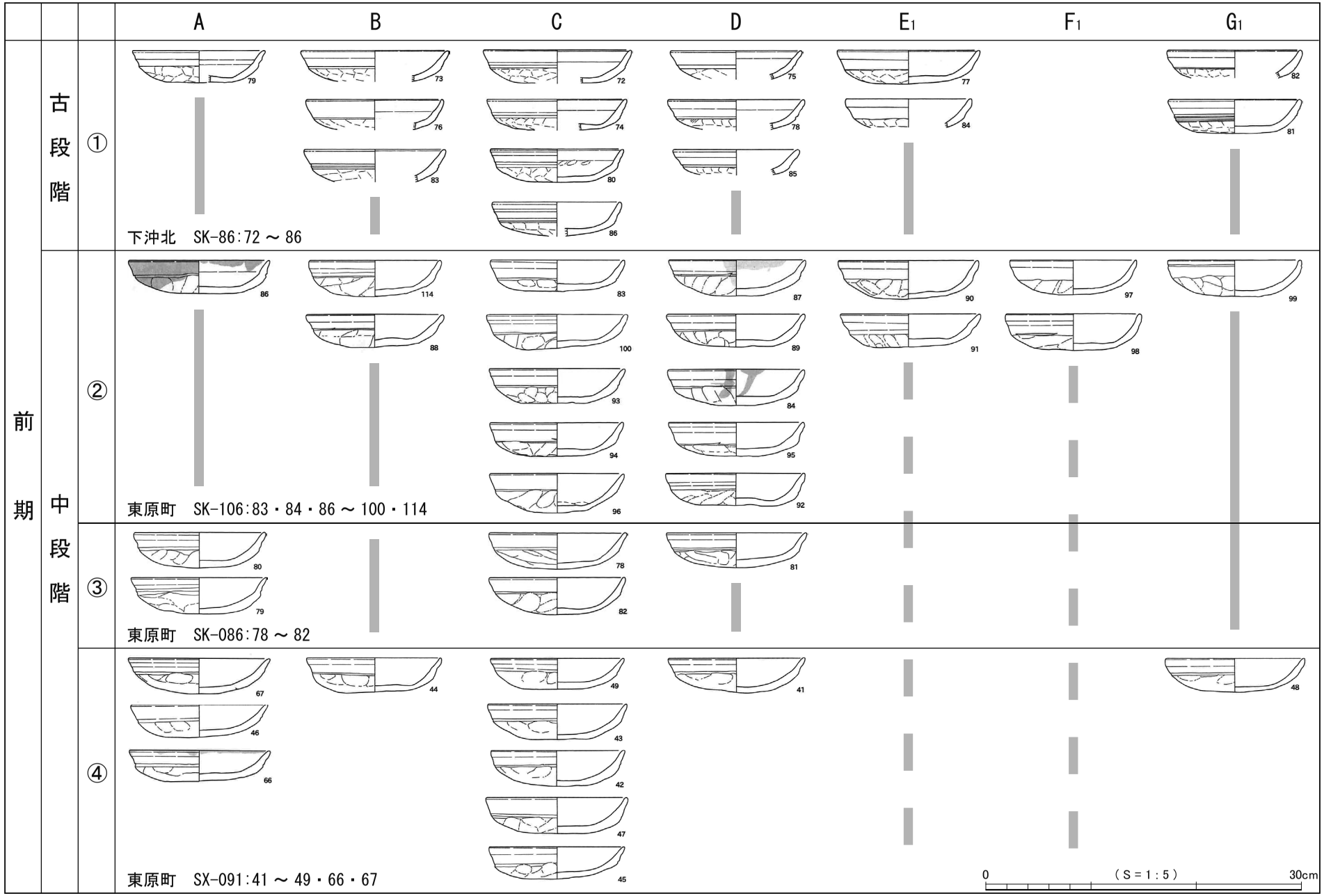
Ｄ種：体部の屈曲稜線が明瞭で沈線を施すとともに、２段横ナデの下段を強く横ナデし、屈曲効果を強調するもの

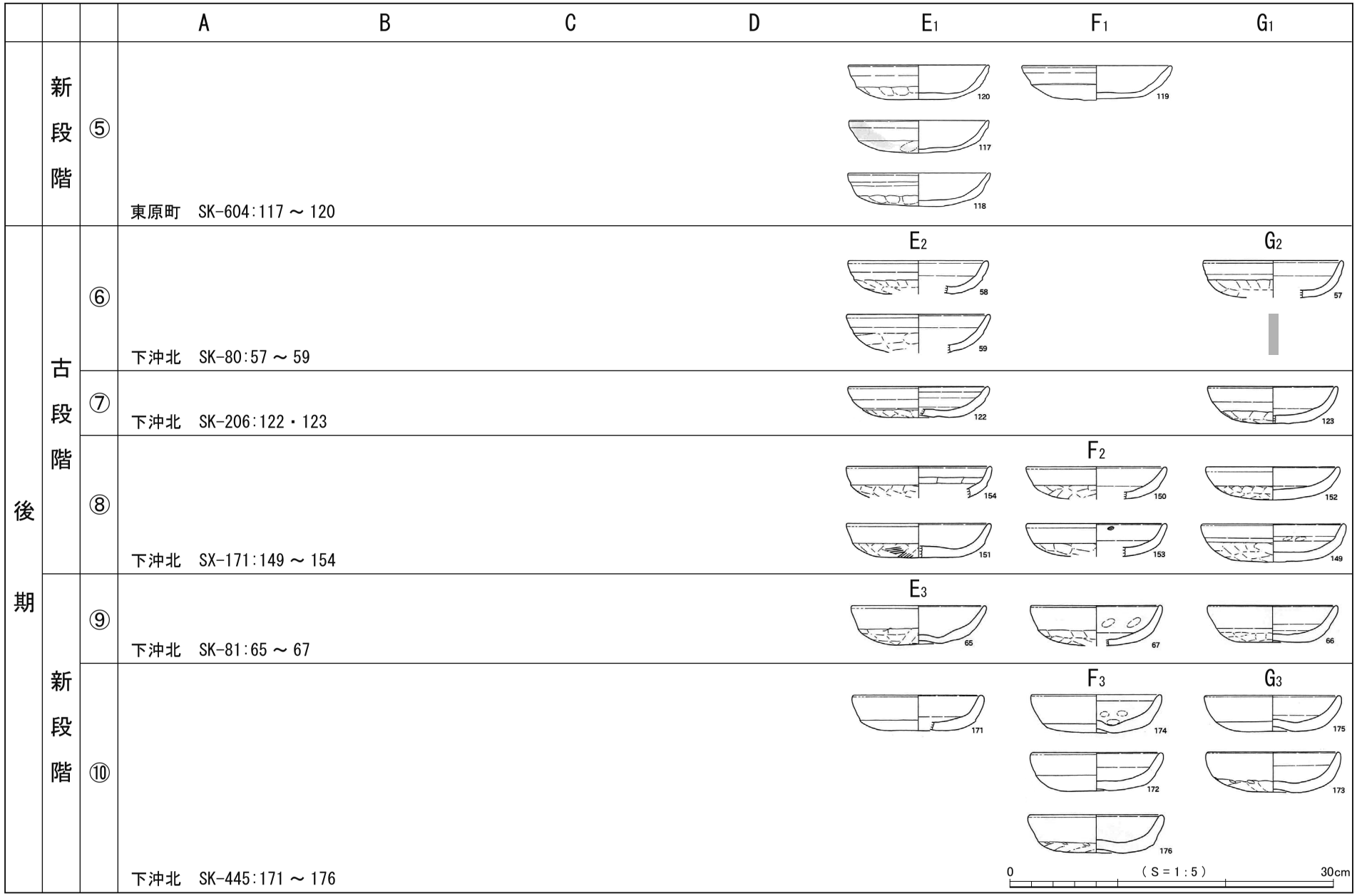
Ｅ種：体部の屈曲稜線に沈線を施さず、２段横ナデの下段を強く横ナデすることで屈曲効果を表現するもの

Ｆ種：Ｅ種と同様であるが、２段横ナデ下段の横ナデが弱くなることにより稜線が不明瞭となり、全体的にやや丸みを帯びるもの

Ｇ種：体部の屈曲がなく、全体的に丸味をもって内湾状に立ち上がるもの

編年試案（暫定）　第38図は、遺構一括資料10例を相対的な前後関係を求めつつ、７種に分類した資料を並べている。①から⑤までと、⑥から⑩までを対比した場合、前者は薄手でシャープさがあり、体部屈曲稜線も明瞭なＡ種～Ｅ種が主体となっていることに対し、後者は厚手で体部屈曲稜線が相対的に緩いＥ種から丸く内湾するＧ種が主体をなすといった相違がある。この状況から、⑤と⑥の間に一つの画期を設定し、前者を馬場・天神腰遺跡の時期区分とした第Ⅲ期を細分し、前者を第Ⅲａ期、後者を第Ⅲｂ期に大


A
B
C
D
E1
F1
G1
前期
古段階
①
下沖北　SK-86:72 ～ 86
中段階
②
東原町　SK-106:83・84・86 ～ 100・114
③
東原町　SK-086:78 ～ 82
④
東原町　SX-091:41 ～ 49・66・67
0
（S＝1：5）
30cm



第38図　東原町・下沖北遺跡の刈羽三島型土師器編年試案（暫定版）

別することとしたい。この区分の意味には、刈羽三島型土師器の大別として、第Ⅲａ期を前期に、第Ⅲｂ期を後期とした呼称も、併用していくこととしたい。

刈羽三島型前期　第Ⅲａ期とした①～⑤についてみると、下沖北遺跡の①と東原町遺跡の②～④では、前者がややシャープさを備え、体部稜線が相対的に明瞭であることから、古段階を呈する可能性がある。また、②～④については、各皿の調整等において大差がなく、ほぼ同時期として捉えられる。しかし、同一遺跡である⑤については、体部稜線に沈線を施すＡ～Ｄ種の事例が伴っていない。ただ、出土個体数が少ないこと、他に類する一括資料等の事例がないが、厚手化といった変化以前と判断されることからすれば、前期新段階となる可能性が高い。また、古段階とした①と中段階の②～④を対比した場合、やや平底傾向から丸底化への変化が僅かながら看取されることも、相違点の一つとして考慮したい。

刈羽三島型後期　第Ⅲｂ期についてみると、遺構一括と雖も個体数が少なく、ａ期と同様な対比は難しい。しかし、それが当該期の特徴の一つである可能性を有しているが、⑨と⑩の資料では、底部内面が瘤状に盛り上がるいわゆる「へそ皿」で占められている点から新旧の年代差と認定し、⑥～⑧を古段階に、⑨･⑩を新段階とした。なお、第Ⅲｂ期新段階以降の後続については、刈羽三島型の下限時期の問題が含まれ、現段階では把握しきれていないため、保留としたい。

共伴遺物と年代観　第５表は、第38図に用いた下沖北遺跡と東原町遺跡における各土器群と共伴遺物を表示したものである。共伴関係については、有効あるいは暫定的とされる事例が10例中４例に過ぎず、圧倒的に少ない状態にあり、極めて限定的でクロスチェックは叶わないが、年代観の判断基準を可能とする希少な事例として扱うこととしたい。

まず、第Ⅲａ期古段階とした下沖北ＳＫ86は、珠洲Ⅱ期の甕破片が伴っていた。15世紀前半とされる白磁皿については、出土層序が不明なため除外することとし、珠洲甕の年代観から類推して西暦1250年前後を含む13世紀第３四半期を想定したい。同じく中段階とした東原町ＳＫ086には、白磁碗Ⅸ類が伴っており、年代観としては13世紀後半で概ね第４四半期前後を想定したい。なお、新段階については、後述する第Ⅲｂ期古段階の時期から、概ね13世紀末葉に割り当てておきたい。

第Ⅲｂ期については、古段階とした下沖北ＳＫ206に珠洲Ⅳ1期の擂鉢大破片が伴うことから、13世紀末葉から14世紀初頭とし、大まかには14世紀第１四半期に宛がいたい。また、新段階とした下沖北ＳＫ445については、珠洲Ⅳ2期の擂鉢と甕の破片とともに青磁碗Ｂ－１´類が伴っており、14世紀第２四半期に定点を持つ時期としたい。

以上からすれば、刈羽三島型の前期は13世紀後半期、後期が14世紀前半期というこれまで年代観を是認することとなるが、同じ資料群からの検証であり、新たな資料によって再検証が必要であることはいうまでもない。

ところで、以上の年代観を前提とすると、前期から後期への転換時期は、概ね13世紀末葉、1300年前後となる。この年代において、どのような事象が生じ、また土師器に関する観念の変化などがあったのか、現状では特定に至らない。今後の課題とせざるを得ない。

また、後期新段階の年代観を14世紀第２四半期に定点を持つとしたが、下限の時期まで特定可能な証左は得られていない。刈羽三島型の終焉期は、関東系となるロクロ成形の土師器が流入した14世紀末には確実に廃れていたと考えられ、14世紀末までは下らないとする見解〔山崎2003〕には賛同できる。しかし、刈羽三島型と珠洲Ⅴ期との共伴例があることにより、14世紀後半～末には関東系ロクロ土師器と共伴する概念性が高いとの指摘もなされている〔笹澤2018〕。当該事例が溝資料とすれば、根拠はかなり希薄とな

	段階	遺跡名	遺構名	年代観	珠　洲	白　磁	青　磁
刈羽三島型前期	古	下沖北遺跡	SK86	**13C前半⇒1250年前後を含む 13C第3四半期**	Ⅱ期甕	皿15C前半（層序不明なため除外）	
	中	東原町遺跡	SK106	**13C後半（13C第4四半期前後）**		**碗Ⅸ類 13C中～14C初**	
		東原町遺跡	SK086	—			
		東原町遺跡	SX091	—			
	新	東原町遺跡	SK604	—			
刈羽三島型後期	古	下沖北遺跡	SK80	—			
		下沖北遺跡	SK206	**13C末葉～14C初頭 ≒14C第1四半期**	**Ⅳ1期擂鉢**		
		下沖北遺跡	SX171	—			
	新	下沖北遺跡	SK81	13C後葉		碗Ⅸ類 13C中～14C初	
		下沖北遺跡	SK445	**14C第2四半期**	**Ⅳ2期甕 Ⅳ2期擂鉢**		**青磁碗B-1´（14C中）**

第５表　刈羽三島型土師器と共伴遺物

るが、現状では払拭することが難しいと考えられる。また、刈羽三島型からロクロ土師器への転換とは、今日明日という短時間で起こり得る事態を想定することは現実的でない。しかしながら、中世土師器の使用形態が、儀式儀礼に伴う饗宴等に用いられていたとすれば、両者の転換は短期間になされたものと推測することが妥当と考える。刈羽三島型の終焉期については、14世紀第３四半期までは存続していた可能性が高く、14世紀第４四半期内にて廃れていたのではないかという見解を現段階での暫定的な判断とし、今後の課題としておきたい。

一括出土状況の変化　ところで、下沖北ＳＫ86、東原町ＳＫ106、同ＳＸ091においては、比較的多くの中世土師器がまとまって出土し、土師器以外の土器・陶磁器類はほとんど含まれていなかった。このような実態は、確定的な共伴遺物が伴わないという現状と表裏の関係にあるが、その時期とは第Ⅲａ期の古段階と中段階段階までで、同期新段階とした東原町ＳＫ604では出土点数そのものが限定的となっている。

また、第Ⅲｂ期では、土師器の出土点数は僅少となり、反対に珠洲などの共伴遺物が大破片で伴っていた。このような差異は、土師器使用に係る観念や饗応・饗宴といった儀式・儀礼に変化があったことを容易に推測させる。その画期とは現状で13世紀末頃ということになるが､その事由も不明とせざるを得ない。

３）馬場・天神腰遺跡の遺構出土土師器と編年的位置付け

遺構出土土師器の事例　馬場・天神腰遺跡から出土した土師器の遺構出土例については、ある程度のまとまりがあった事例として、14遺構について集成した（第39図）。例示資料には、刈羽三島型土師器以外に関東系Ｂ類や京都系第二波の手づくね土師器も一括的にまとめたが、これらを一瞥すると、井戸や土坑例が７例と半数を占めるも、残る７例となる半数が溝や堀跡となっている。これらの中で、刈羽三島型と関連する遺構例は12例となるが、井戸５例のほかは溝・堀跡が７例と、過半数が同時期性に疑問が残るものである。第６表は、遺構別に皿と小皿の分類を区分したものであるが、溝関連ではかなりばらつきがあり、一括資料とはなり得ないことを物語っている。

井戸出土例５例のうち、小皿のみとなるＥ：ＳＥ-313井戸を除く共伴状況をみると、Ａ：ＳＥ-146井戸

遺構名	皿類																			小皿類						小計
	Ⅰ					Ⅱ						Ⅲ						Ⅳ		Ⅰ	Ⅱ				Ⅲ	
	a1	a2	b1	b2	b3	a1	a2	b i	b ii	c i	c ii	a i	a ii	b i	b ii	c i	c ii	a	b		a	b	c	d		
A:SE−146		1																		1						2
B:SE−1314											1							2					2	1		6
E:SE−312															1		1						1		1	4
E:SE−313																						2		1		3
E:SE−314																2	3									5
E:SD−301				1				3	1	1								1				1	5		4	17
A:SD−2					1		1	1	1								1					1	1			7
B:SD−1286						1	1	1	2				1	1						1	1		1			10
B:SD−1						1			1											1				1		4
A:SD−1								2	1	2										1	1		3			10
DⅠ:SD−2401									1		1			1			1							1		5
B:SD−1218														1								1				2
小計	0	1	0	1	1	2	2	7	7	3	2	0	1	3	1	2	6	3	0	4	2	5	13	4	5	75
	3					23						13						3		4	24				5	

第６表　遺構出土刈羽三島型土師器の分類対比表

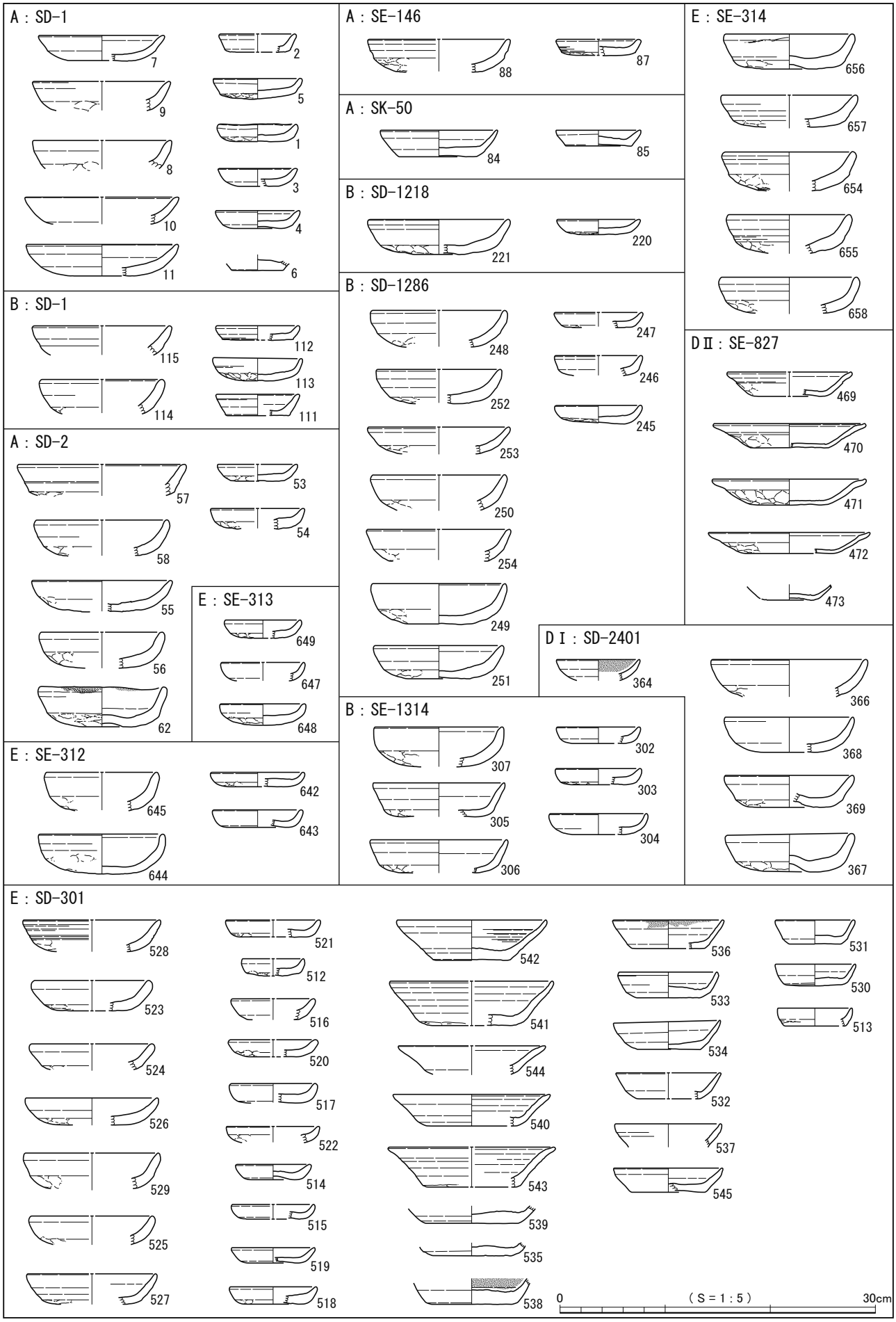
では、皿第Ⅰ群a2類と小皿第Ⅰ類の共伴例で、点数は少ないが相対的に古相を呈していることがわかる。これに対し、E:ＳＥ-314井戸では、皿第Ⅲ群ｃ類でまとまっており、一括性が高いと判断できる。また、E:ＳＥ-312井戸例は、皿第Ⅱ群ｂⅱ類と同cⅱ類に対し、小皿は第Ⅱ群c類と第Ⅲ群が共伴しており、相対的に新しくなることが予想できる。そして、B:ＳＥ-1314井戸については、皿第Ⅳ群の2点と第Ⅱ群cⅱ類とともに、小皿では第Ⅱ群c類と同d類の共伴例であり、皿・小皿共に刈羽三島型の特徴でもあった稜線が消滅乃至形骸化し、全体に丸みを持ち口縁部が内湾状を呈するものと、やや特異な第Ⅳ群が共伴する事例となっている。

なお、E:ＳＤ-301堀跡例は、刈羽三島型と京都系第二波の影響を受けた皿を含む関東系Ｂ類が出土しているとおり、土器類としては大きく２期に大別される。その中で、刈羽三島型で主体を占めているのが、皿第Ⅱ群b類であり、小皿では第Ⅱ群ｃ類と第Ⅲ類という組み合わせとなっていた。皿では第Ⅲ群が欠落し、第Ⅳ群が１点含まれているが、組み合わせとしては皿第Ⅱ群b類と小皿第Ⅱ群c類、皿第Ⅲ類には小皿第Ⅲ群が伴っていた可能性が指摘できそうである。

土師器の編年的位置付け　本遺跡の刈羽三島型土師器皿の分類は、第Ⅳ章の第14図と第15図に示した通り、第Ⅰ群から第Ⅳ群まで４群に大別した。各群の特徴等から下沖北遺跡と東原町遺跡における土師器編年に対比すると、第Ⅰ群が第Ⅲａ期中段階に、また第Ⅱ群は第Ⅲａ期新段階相当と考えている。また、第Ⅲ群については、ａ類とｂ類が第Ⅲｂ期古段階に、またｃ類が第Ⅲｂ期新段階に対比が可能となる。

馬場・天神腰遺跡における中世土師器は、第Ⅰ群が僅少で、第Ⅱ群を主体としつつ次いで第Ⅲ群が多くなっている。つまり、中世土師器からみた本遺跡の最盛期とは、13世紀後半代が希薄なことから、13世紀末から14世紀前半代において大いに展開したことになる。このような実態とは、調査区が北辺に偏っていたことと合わせ、集落が南側中央部から北辺へ時期差を経つつ発展･展開していたことを想定可能とする。したがって、調査区付近については、集落の展開からすれば新開地であり、幹線道路の敷設に伴い新たに発展していた経緯と、市が設けられるなどといった性格を示していたと考えられる。

ところで、馬場・天神腰第Ⅳ群とは、丘江遺跡において抽出された一群（Ａ３類）であり、少量ながら確認できる。丘江遺跡Ａ３類は、丘江Ⅱ期～Ⅲ期となる14世紀代に位置付けられているが、「器形の類似



第39図　遺構出土中世土師器集成図

性から、板目状圧痕を残す糸切底の皿か、阿賀北地方に特有のヘラ切底の皿に影響を受けて成立した可能性が高く、その出現がⅠ期に遡る可能性もある」〔笹澤2018〕と指摘されている。何れにしても、ロクロ成形土師器の影響としている。馬場･天神腰遺跡では、遺構内から出土した第Ⅳ群事例（305･306）は、B：ＳＥ-1314井戸から出土し、かつ越前擂鉢の破片を伴っており、関東系Ｂ類の影響があった可能性は否定できない。当類型は、変遷図に用いた下沖北遺跡と東原町遺跡で未確認となっているが、関東系Ｂ類流入にあたって、手づくね成形がロクロ成形土師器を模倣した可能性も考慮しておきたい。

４）刈羽三島型土師器の出自と終焉

「刈羽三島型」土師器の認定については、前期段階となる東原町遺跡ＳＫ106資料と、同時期とされる上越市至徳寺遺跡資料との対比から、地域型式として成立するとの賛同が得られている〔笹澤2018〕。その理由の一つとして、至徳寺遺跡の手づくね土師器は、京都系第一波として直接波及した系譜の中にあるが、同じ手づくね成形である刈羽三島型は、別系統に系譜が求められるということが決定的であったからでもある。ただ、刈羽三島型の特異性などを理解するためには、柏崎平野における中世集落を実際に発掘・調査したものでないと、中々理解できないものかもしれない。

本項では、刈羽三島型が当該地域に波及してきた理由と共に、その出自について現段階での見解を述べることとしたい。また、手づくね土師器は、ロクロ成形土師器が流入することによって終焉を迎えることとなるが、その事由についても少しく検討を試みておきたい。検討の中身としては、中世土師器の時期的変遷において、製作技法が時期によって転換するが、この背景には、越後における政治情勢や支配体制、統治者の交代といった事象と連動し、深い関わりや関連性が指摘でき、既に京都系第二波の流入過程においても指摘されていたことでもあるからである。

そして最後に、刈羽三島型の成立や存在が意味する意義などについても若干触れていくこととしたい。

出自と特異性　刈羽三島型の大きな特徴とは、口縁部を強く横ナデし、底部との境界に明瞭な稜線が巡るとともに、底部外面に手づくねであることを示すように、未調整のまま指頭痕を残す点にある。また、口縁部の横ナデも、上下２段構成が意識され、特に下段を凹線上に強く撫でることによって稜線を強調するが、古手の資料では、全体にやや薄手で、シャープさが認められる。

このような特徴は、京都系第一波が占める越後国府域では一般化しておらず、系譜を異にしていたことが明らかである。初期段階の刈羽三島型の類例を求めると、関東は相模国の鎌倉にたどり着く。

関東地方の中世土師器は、ロクロ成形で底部糸切りによるものが一般的であり、手づくね成形の土師器が普及する契機となる京都系第一波もやや遅れるとともに、地域的には鎌倉に偏在し、周辺域への波及は限定的で量的にも少ない状況が示されている〔服部1994〕。

京都系となる手づくね成形の土師器は、12世紀末頃にロクロ成形が強固で確固たる基盤なす東国にあって、特に鎌倉において集中的に出土するが、その後13世紀中葉以降衰退、13世紀第４四半期には消失することとされており、いたって短命に終焉することとされている。これら京都系の出自としては、いくつか存在する産地の中でも、「深草」に近似するとの指摘がすでになされていた。また、流入の初期段階では京都系としての特徴を有していたが、その後急速に在地化が進行し〔服部1992・1994〕、地域型式としての「鎌倉型」〔馬淵2003〕として成立していくことになる。「刈羽三島型」も、独自に変化していく過程をみると、「鎌倉型」の性格を引き継いでいる。

これら京都系土師器の鎌倉への流入にあたって、その契機とされる事象や事由は、特に示されていない。

ロクロ成形土師器一色の世界で、かつ何ら不都合もない状況下において、何故京都系となる手づくね土師器が用いられるようになったのか、中世土師器の機能や用途、観念などを見極めるためにも、そして京都系そのものを考える上でも重要な課題である。しかし、この謎解きが容易でなかったことが、これまで様々に研究されてきた経緯がある中でも、明らかにし切れていないことが示している。それは、越後における京都系第一波が波及する事由も現状では不分明となっていることと同様である。

しかし、ことは重要であり、中世社会を理解していく上では、本来的に避けて通れないはずである。このような未解明の課題に対し、根拠もなく軽々しく見解を述べ得る立場でもないが、越後に刈羽三島型が普及した経緯と合わせつつ類推を重ねていくと、一つの可能性としての意見が想定されてくる。

「刈羽三島型」と「鎌倉型」 まず、刈羽三島型土師器の系譜をたどる上で、東国にて在地化した「鎌倉型」土師器との類似性について、指摘していくこととしたい。

第40図は、京都系土師器のうち、「鎌倉型」に類する手づくね成形の土師器を集成したものである。口唇部が三角状を呈し、面取りがなされたものも目立ってはいるが、丸みを持つ事例も多くなっている。口縁部は、横ナデ、外底部に手づくねの指頭圧痕を残し、底部との境界に稜を巡らせる。底部は、概して平坦となっているが、丸底風のものも確認できる。口縁部外面の横ナデは、１段構成では幅広の凹線状に強く撫でたり、２段構成では下段を強くしたりするなど、稜線を強調する事例が多くなっている。器壁は、概して厚手でありながら、シャープさを備えたものが多い。外底部が上底風を呈し、内底面が凸面状となるものなどが散見される。

これら「鎌倉型」の時期は、概ね13世紀第1～第2四半期、つまり13世紀前半代に位置付けられるものである。13世紀後半代を主とする「刈羽三島型」前期資料との対比では、全体的に厚手であること、また底部が丸底風だけではなく、上底状を呈するものが含まれている。これらの特徴は、刈羽三島型前期資料が薄手でシャープであることとは対局的な点で相違する。しかし、底部境に稜線を強く意識すること、口縁部外周の横ナデが２段であること、また口唇部の面取りがないものが多いことなど、類似点が指摘できる。このようなタイプの手づくね土師器は、「鎌倉型」と「刈羽三島型」以外に見当たらないのである。

ところで、「鎌倉型」手づくね土師器は、前述したとおり、12世紀末から13世紀初頭に鎌倉へ波及し、その後まもなく独自に変化、在地化することによって成立したとされている。そして、13世紀後半では衰退傾向となり、13世紀第4四半期では消滅するに至る。ところが、刈羽三島型は、13世紀後半から14世紀後半～末葉という年代観が与えられており、最盛期の時期は重ならない。つまり13世紀中葉頃において、何らかの理由により越後の中でも、柏崎地域に波及したことになる。

以上の状況から類推される「刈羽三島型」の出自とは、京都産中世土師器の生産地でも、「深草」工人集団の鎌倉移住により生産・供給が開始されたのち、早々に在地化して成立した「鎌倉型」中世土師器に求める事ができるであろう。

「鎌倉型」土師器と越後への波及 「鎌倉型」手づくね土師器が、越後、特に柏崎地域に波及する契機として、どのようなことが考えられるのであろうか。本項で述べる想定は、必ずしも確固たる物証等が得られていない事柄ではあるが、「刈羽三島型」を理解する上で参考となる可能性を含むものとして、今後の課題を込め書き記すこととする。

まず、鎌倉と柏崎を結び付け両者に共通する13世紀中葉に起きた事件としては、宝治元（1246）年の宝治合戦が掲げられるであろう。この戦は、執権北条氏に対し、これと対立した有力御家人の三浦氏が鎌倉にて武力衝突したもので、詳細は割愛するが、結果として三浦一族とその与党が滅ぼされることとなった。

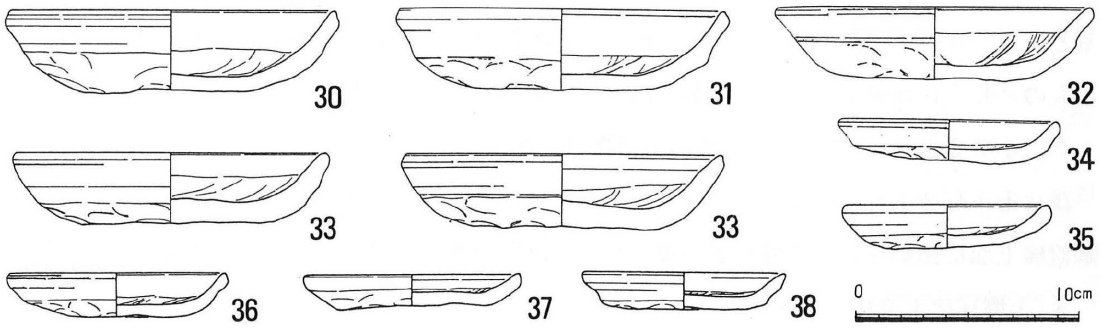
その際、三浦氏側として戦った御家人等の中に、大江広元の子で、相模国毛利荘を名字とした毛利季光がおり、毛利一族の大半が滅亡するに至っている。その中で、季光の四男とされる経光は、前将軍頼経の帰洛に随行し、そのまま越後国佐橋荘に下向、在住していたとされている。このことから謀反には加担しなかったとして処罰を免れ、名字の地とした相模国毛利荘等を没収されたが、佐橋荘と安芸国吉田荘、河内国加賀田郷を安堵され、以後佐橋荘を本拠地として在地支配を推し進めることとなった。毛利氏は、大江広元を祖とした鎌倉の有力御家人である。毛利氏と「鎌倉型」中世土師器との関係については一切不明であるが、この一件は、鎌倉と越後国佐橋荘を強く結びつけたことは間違いがない。また、おそらく毛利荘等にいた郎党や家人など関係者の生き残りは、主に佐橋荘に移住したことが予測され、柏崎一帯において「鎌倉型」土師器が導入される大きな契機となったと考えられる。そして、刈羽三島型の分布域とは、越後における毛利氏の支配領域と貴種でもある毛利氏をリスペクトする地域と重なる部分が多かったのではないかと推考するものである。

このように考えてくると、砂上に楼閣を建てるような話となるが、京都系土師器の鎌倉への導入には、京都の下級貴族であった大江広元の鎌倉への下向と、幕府中枢への参画という事実から、大江氏が関わっていた可能性を予測させることになる。ただし、この予測を裏付ける資料等も、今のところ皆無と言ってよいが、京都と鎌倉を結び付ける因縁の一つとして考慮する必要があるものと考えている。

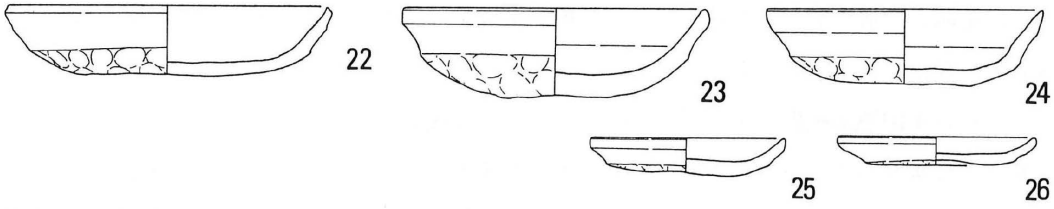
このように、京都中枢と地方が結び付きを強くするにあたって、政治的な動向や有力な権力者等との関連性を想定する必要が生じてくる。この想定には、京都系第一波の波及に至る背景とも無関係ではなかったのではないだろうか。全くの余談とはなるが、12世紀中葉における政治情勢を窺うと、平氏政権との関わり、特に仁安元（1167）年に太政大臣となる平清盛の存在も大きく、京都志向がより強かったと考えられる。奥州藤原氏の拠点となる柳之御所遺跡では、京都系第一波の土師器が大量に消費・廃棄されていた点も同様である。しかし、関東への波及が一段階遅れているという状況は、関東では平氏政権への反発があったことが、京都志向を抑制していたと言えるかもしれない。手づくね土師器の使用が一時的であり、京都系第二波の波及も局地的で一般化せず、ロクロ成形の土師器に終始したことからも、関東の独自性を強く窺うことができる。

ロクロ成形土師器の流入と刈羽三島型の終焉　刈羽三島型が終焉あるいは消滅する時期については、14世紀末に下らないとする説と、14世紀後半～末においてロクロ成形の土師器と共伴する可能性が指摘されるなど、今のところ定まってはいない。しかし、越後における中世土師器の変遷とは、器形や調整による漸移的な変化というより、根本とも言える成形技法の転換であり、支配体制等と連動していたことが指摘できる。それでは、14世紀後半において、どのような事態が生じていたのであろうか。これまで提示されてきた時代背景等について、概観してみたい〔山田1987〕。

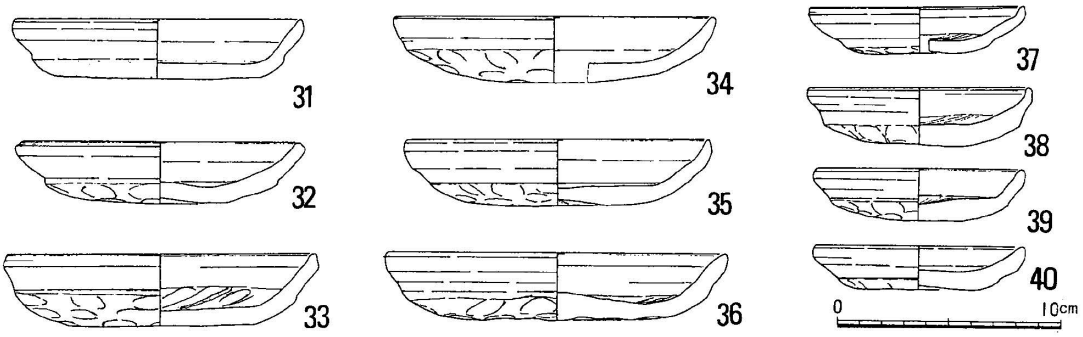
元弘３(1333)年、鎌倉幕府が滅亡すると、南北朝の動乱により越後も混沌とした状況が続く。この動乱も、足利尊氏の従兄弟で越後守護に就任していた上杉憲顕により、暦応４（1341）年に一旦終息する。その後、観応の擾乱によって再び乱れた越後国一国を平定したのも、越後上杉家初代となった憲顕であった。越後における動乱が幕を閉じた応安元（1368）年、憲顕は病没しており、越後国内はようやく安定に向かった段階に過ぎなかった。その後、越後守護は末子の憲栄が次ぐも、在京にあって守護職を務めていたとされ、関東との関連性は未だ希薄であったと考えられる。憲栄は守護就任から10年ほどで再び出家、遁世することにより、第三代として越後国守護となったのが上杉房方である。房方の越後守護就任は、永和４（1378）年から康暦２（1380）年の間とされ、房方の在任期間およそ40年余り、越後ではさしたる戦はなく、総じ



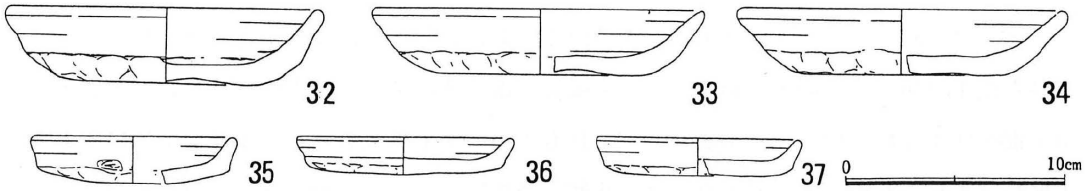
鎌倉市向荏柄遺跡(1)　第Ⅱ面



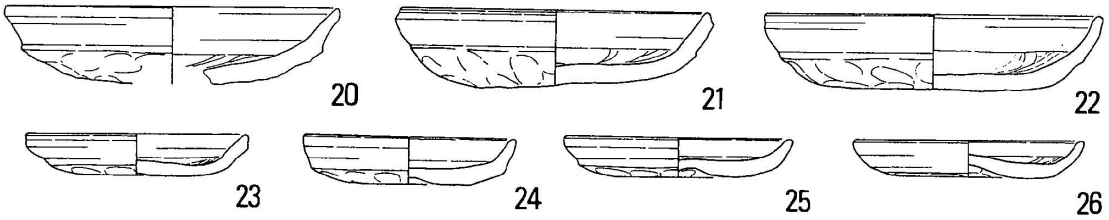
鎌倉市北条時房・顕時邸跡



鎌倉市向荏柄遺跡(2)　第Ⅱ面上下部包含層



鎌倉市今小路西遺跡（御成小学校）第６面



鎌倉市小町２丁目345番２地点遺跡

第40図　「鎌倉型」土師器集成図

※〔服部1992〕より抜粋

て平和を保っていた。守護房方の時代とは、「上杉氏による越後の地域支配の基礎が形作られた時代」〔山田1987〕と評価されており、この間に儀礼等を含む支配体制の様々な規範が整備されたと考えられる。特に房方は、国衙領の大半を継承し、かつ山内上杉家出身で国内に所領を多く持ち、また犬懸上杉家も継承するなど、関東を基盤としていたことは間違いがない。その結果、越後各地において、関東と強く深く結びつくこととなったと考えるほうが合理的であり、この状況を作出した房方時代において、関東系となるロクロ成形の土師器が越後で普遍化した可能性が高い。房方は、将軍や幕閣から信頼されることにより、応永７（1400）年に評定衆の一員に加えられたとのことであり、評価に至る様々な支配体制の確立はそれ以前、14世紀第4四半期でもその終末期頃が想定されるであろう。

以上、上杉房方が政権を安定させ、支配体制を確立した14世紀第4四半期頃、中世土師器に係る使用形態や饗応・饗宴に使用される器の型式も変更が加えられた可能性が高い。したがって、このような支配体制の安定化と確立がなされた14世紀末頃には、京都系を源流とした刈羽三島型の手づくね土師器は使用が廃止され、生産も中止され、関東で普遍的なロクロ成形の土師器への転換がなされることによって終焉を迎えたと考えられる。刈羽三島型手づくね土師器から、ロクロ成形土師器への転換は、支配体制の変化と連動することを想定した場合、長期にわたることはなく、短期間に達成されたと考えられる。その時期とは、14世紀第4四半期のどこか、おそらく末頃に生じた変革と一先ず結論付けておきたい。

刈羽三島型の意味するところ　刈羽三島型という地域型式は、阿賀北においてロクロ成形底部ヘラ切という独特な土師器「阿賀北型」〔品田1991〕と同様に地域限定的な存在であり、中世越後における支配体制や在地領主の出自、歴史的経緯や地理的属性等によって、同じ越後国内にあっても地域個々の個性があり、個々に相違していたことを改めて示している。このような地域的な個性を認めず、越後全域が一体的に全国と同じように推移するなどといったことは到底考えられないであろう。

刈羽三島型の分布圏については、現状では的確に把握されていないのが実情である。しかし、刈羽郡域を中心としていたことは間違いがなく、幾つかの調査事例をみると、三島郡出雲崎町の番場遺跡〔新潟県教委1987〕、あるいは旧西蒲原郡黒埼町（現新潟市西区）の釈迦堂遺跡〔新潟県教委1973〕でも散見される。前者は分水嶺を超えた島崎川上流域であり、刈羽郡域に隣接し古代北陸道のルート上であることなど、地域的には繋がりがある。後者については、信濃川左岸域に所在し、直線距離でも70kmの遠隔地となっている。出土した手づくね土師器は刈羽三島型前期の資料であり、当該地において独自に変移した同後期資料の存在は不明確である。特に、近在に位置する旧白根市馬場屋敷遺跡〔白根市教委1984〕から出土した1300年前後の年代観を有する手づくね土師器は、刈羽三島型後期とは型式を異にしており、刈羽郡域と同列には語れないようである。

また、刈羽三島型の越後への波及という経緯について、宝治合戦の結果を経て、毛利経光が佐橋荘に在住し、直接支配を開始した時期と重なることから、毛利氏の関与を想定した。鎌倉期の越後毛利氏については、御館の乱に際し惣領たる北条毛利氏が滅び、史料が残されていないことから、その動向はほとんど不明である。しかし、越後毛利氏と刈羽三島型土師器との関連に強い結び付きが肯定されるのであれば、刈羽三島型分布圏は少なくとも越後毛利氏の影響圏内にあったことを示すこととなる。これらの想定については、確固たる資料が不足しており、絵に描いた餅のようなものでもあるが、個性的な地域型土師器の存在とは、文献資料では描くことができない地域の様相を示す重要な存在と言えるであろう。

本項における刈羽三島型土師器に関する見解等については、証明するに至らない数々の課題を含むものであるが、まずはこのような地域型式の存在を認定することから始めていくことが肝要であろう。

4　集落と遺構群の構成

1）　空中写真と更正図からみた馬場・天神腰遺跡の再評価

全体像の把握　馬場･天神腰遺跡の範囲や地形等については、第Ⅱ章にて概要を述べたところであるが、本項では総括する意味で、昭和23（1948）年米軍が撮影した航空写真と土地更正図を基に、やや詳述してみたい。提示する航空写真は、周辺域を含む広範囲については図版扉に掲載し、遺跡範囲の拡大写真についてはやや精細にかけるが第41図（約1:5,000）に示した。また､第42図（縮尺不同）の更正図については、分筆された区画を統合・復元しつつ再トレースしたもので、水田部がほ場整備によって地割が大きく変更されているが、集落内の赤道など多くは、ほぼ江戸後期の状態を示すものとなっている。これらを一瞥すると、図版１の現況図では見えなかった情報がいくつか確認することができる。

まず、空中写真から確認できる遺跡の範囲は、既に述べたとおり西側が鯖石川の段丘崖を限りとし、北側を長鳥川の氾濫原とする。また、東側については、東へ膨らみつつ弧状に流れる追田川の河道を境界とし、南側は笠島川の旧河道で現在の南条川で括られていることを、改めて確認できる。現状では、ほ場整備や県道の新設などで、区画など形状の一部が損なわれているが、円形状を呈した独特な景観が再現されており、ある意味自然地形による防御が施されていたという見方も可能である。地形的なまとまりが確認できる円形の規模は、直径およそ500ｍ余り、面積は略測で約20haに達する。円形内は、Ｎ－12.5°－Ｅを指向する道路が条理状に配置され、それに沿うように区割りがなされていることがわかる。本遺跡は、やや小高い平坦な地形を利用して集落居住域を形成するとともに、田畠も一体的に開発されていたものと考えられる。

長鳥川に架かる橋についても、現在の三蔵橋の位置にはなく、その上流約120ｍのところに架橋されていた。この橋については、第42図の更正図でも確認できており、おそらく長鳥川の河川改修とＪＲ信越線の敷設に伴い変更されたものと考えられる。変更される以前の橋の位置とは、南条の中枢部と対岸となる北条城下が直接往来していたことがわかるが､後述する掘割との関連から重要な意図があったはずである。

また、条理状に配置した道路とは異なり、集落の北西から南東へ斜位に貫く道が存在する。北西方向の延長には長鳥川に架かる橋が存在しており､明治６年測図の地図や更正図にも赤道として描かれている〔品田2003ａ〕。この道は、集落内の区画を斜位に貫くことからしても、旧来の土地区画を踏襲せず、利便性を最優先として新設されたことが明らかである。また、南東端に至って東へ屈曲しているが、この状況も更正図にて確認できる。当該地点には、かつて正雲寺という寺院が存在しており、これを避けた故でもある。当該境内は､土塁と堀の一部が現存しており､更正図上でも痕跡が窺えることから館跡と考えられる。『白川風土記』によれば､「北條村普廣寺ノ末寺ナリ開基ハ永禄五年普廣寺ノ人安和尚開基ニテ南條駿河守ノ菩提寺ナリ」と記されている。館跡と南條駿河守との関わりについては、今のところ明らかでない。

馬場・天神腰遺跡では、馬場Ｂ地区と天神腰Ｅ地区から館の堀跡が検出されている。しかし、この２館については、空中写真と更正図ともに、残念ながら明確な痕跡としては確認できない。ただし、別件として集落北東に所在する刈羽神社境内周辺を窺うと、水田区画等から100ｍ四方ほどの堀が巡る大規模な館跡が存在しそうな区画が見える。ただし、更正図では、ほ場整備による閉鎖と変更がなされており、明確な痕跡は見えてこない。『白川風土記』「天満宮」の項でも館に関連した記載はなく、あくまでも可能性としての指摘としておきたい。

ところで、空中写真を見ると、集落の西側において、水田区画が南北にやや弧を描くよう帯状に横断し

1948.4.26　米軍撮影　　出典：国土地理院ウェブサイト地図・空中写真閲覧サービス

第41図　米軍撮影航空写真

ている箇所があり、更正図においても同一地点の区画を確認できる（濃灰色トーン）。当該地点とは、発掘調査区で言うところのＣ地区に該当する。Ｃ地区は、発掘調査に際し表土剥ぎを行うと、かなりの深度まで埋め土で覆われていた。検出された遺構をみると、井戸の底部分が多数分布するという結果が得られており、人為的な行為により掘削されたことが明らかであった。その幅はおよそ40mに及び、Ｂ地区の畑面標高を基準とした遺構検出面は、北側の深いところで深度約1.67m、一段浅い南側でも約1.2mが掘り下げられていたことになる。

今回空中写真にて改めて確認できた堀割り状の痕跡とは、どのような解釈が可能となるのであろうか。まず、堀割状痕跡の位置とは、長鳥川が大きく蛇行して沖積段丘を大きく抉っていた箇所を北端とし、南端は段丘崖に至る。つまり、集落が営まれていた沖積段丘を最短距離で掘り割った正しく堀跡であり、西

第42図　馬場・天神腰遺跡の土地更成図

からの攻撃に備えた防御に係る施設と考えるほうが妥当ではないだろうか。このような大規模な堀を構築せざるを得なかった事態とは、北条毛利氏最大の危機であり、結果滅亡に至った御館の乱が想定される。北条毛利方としては、上杉景勝軍による北条城包囲戦にあたって、馬場・天神腰遺跡となる集落も重要な防衛拠点として位置付け、防御のため大規模な空堀を築いたのではないかということである。

昭和23（1948）年の空中写真に残されていた堀状の痕跡は、埋め戻しがなされることによって、堀としての機能が失われていたことは、C地区の発掘調査結果からも判明する。それでは何時頃、埋め戻された

のであろうか。空中写真撮影から半世紀足らずとなる平成４（1992）年の調査当時、地元では埋め戻し等の事実を確認できなかった。憶測を重ねることとなるが、考えられる状況としては、御館の乱後間もなく土塁等の破却に伴い埋め戻された可能性が高いのではないだろうか。

また、航空写真に確認される堀状の痕跡は、現況でおおよそ20m幅に過ぎない。しかし、Ｃ地区で検出された、掘削幅は前述のとおり40mと倍の幅であった。幅40mの空堀を掘削した土砂は東側に盛土され、土塁を築いたものと考えられる。そして土塁破却に際しては、西接する堀内東半側に埋め戻され、西半側は埋め土が少ないことにより低いまま残され、その痕跡が昭和23年の航空写真に写り込んだものとの解釈が可能ではないだろうか。この地形的段差は、土地更正図の字境界と一致し、西側が字「馬場」、東側が字「天神腰」であり､堀割り状の痕跡が字「天神腰」となるＣⅡ地区で見受けられないことに対し､字「馬場」のＣＩ地区で看取されるという相違に現れている。本解釈については、残念ながら現段階において事実として証明できる史料も物証もないが、馬場・天神腰遺跡の重要性を推し量るポイントであることとして指摘しておきたい。

馬場・天神腰遺跡に対し、改めて総括的な評価を与えるとしたら、北辺の調査区では確認することのできない重要遺構や施設が、集落中枢部に埋もれている可能性が極めて高い。特に、複数の館跡の中には、最大規模を誇る館の存在を否定できず、政治的にも経済的に重要な拠点であったことは明らかなのではないだろうか。したがって、今回発掘調査の対象となった調査区から得られた成果から、本遺跡のすべてを正しく評価することはできないと考えられる。指摘できる点としては、集落の外れという「場」が調査されたこと、そして幹線道路の敷設とそれに沿う町屋、そして市が存在したこととなる。このような「場」が設けられたことこそ、本遺跡の重要性を示す証左とすることができよう。

集落内区画と遺構群　ところで、下南条の集落は、現況図（図版１）に示したとおり、集落道が方形状に区画され、その区画に規制されたかのように屋敷地としての区画が配置されている。これらの道路区画は、第42図の土地更正図そのものであり、調査で明らかにされた道路が指向する方位などとも一致しており、13世紀後半以降に整備された可能性を指摘したところである。その第一は、Ａ地区の東西道となる幹線道路の西半部が、農道として現代まで機能してことを根拠にした推測であった。

しかし、土地更正図で把握された道路や区画と発掘調査された溝や堀、道路が整合する事例は少なく、概ね整合しているであろう事例は、差し当たって２か所となる。第一としては、Ｅ地区とＤⅡ地区東端が該当エリアであり、Ｅ地区のＳＤ-301堀とＳＤ-303溝群が示す東西道路と、これら２条とは直交するＤⅡ地区の南北道となるＳＤ-3057溝によって十字路を構成する道路である。土地更正図に示された道路とほぼ一致しており、館の堀となるＳＤ-301堀は、道路側溝の北縁に沿って掘削されたことが明らかである。また、Ｌ字となるＥ：ＳＤ-303溝と北端で途切れるＤⅡ：ＳＤ-3057溝により、十字路の交差点を構成したことも理解できる。

二番目としては、Ｃ地区とＤＩ地区が挙げられる。Ｃ地区は、御館の乱に際し大規模な空堀が掘られ、東側に土塁が築かれたと想定しており、遺構としての残存は顕著ではない。しかし、ＣＩ地区の遺構確認面において、北側が深く、南側が一段高くなる段差部分が道路の痕跡であり、ＣⅡ地区の東西溝へとやや屈折して連続する姿が、更正図と一致する。また、その延長となるＤＩ地区のＳＤ-2401溝の存在から、調査区南辺に東西道路の存在を確認することができる。

土地更正図との整合については、以上の２地点であるが、もう一つ追加とすべきは、Ａ地区における幹線道路とした道路１であり、その解釈である。道路１は、ＳＤ-１とＳＤ-２という２条の側溝により、

５回以上の改修がなされていたことからも、重要な道路としての認識から幹線道路と認定したものであり、道路改良工事直前まで農道として機能していたことは間違いがない。しかし、発掘調査により確認された道路１のルートとは、東側のＢ地区に至って館の敷地を避けるため法線を北側へ歪め、その後本来の直線ルートへと修正して東へと延びている。ところが、幹線道路とした重要性の高い道路であったにもかかわらず、このルートは、土地区画では追うことは可能ではあるが、道路として土地更正図に示されておらず、刈羽神社境内の南縁を通るやや幅広の道路へと接続しているのである。

このような不整合については、Ａ地区とＢ地区が大規模な空堀の外側にあったことと関連し、道路１を迂回させた館の廃絶に伴い、御館の乱に際して土地区画の再編がなされた結果の可能性が高い。特に、Ｂ地区11グリッドにおいて、農地間往来確保のため未調査とした農道は、土地更正図に示された道路に該当するとともに館内を縦断してはいるが、遺構としては検出されていないことが、土地区画再編に伴い新設された事実を反映するものとの解釈を可能とする。

以上の検討結果から、土地更正図に残された道路や土地区画は、中世における土地区画整理の結果を反映しているものと結論付けたい。ただし、大規模な空堀が構築されたＣ地区以西については、土地区画再編により発掘調査された遺構と土地更正図に不整合が生じたものと理解としておくこととする。

２）地区別の遺構配置と特徴

各地区の遺構については、第Ⅲ章にて概要と各説、そして若干の検討を加え述べてきたところである。本項では、総括という観点から全体的な状況等について、まとめを行うこととする。

遺構配置の粗密と区画　まず、建物跡や柵列、井戸といった居住に係る遺構群について、地区毎に密集度が異なっている。Ａ地区については、幹線道路沿いに幅5.5mほどとなる「市」としての場が設定されていたことから、遺構密度はやや低くなっているが、柵列以北に比較的多くの柱穴、そして建物が存在していたことがわかる。幅5.5mの市空間は、Ｂ地区12グリッドまで及んでいるが、この間については、Ａ地区と同様な状況にあったことは、Ｂ地区北辺に遺構が確認できることから想定可能である。そして、Ｂ地区の13グリッド以東から17グリッド付近までは遺構密度が濃い状態が続くが、ここまでは幹線道路北側に沿った町屋が続いていたと考えられる。

ＣⅠ地区は数多くの井戸が検出されているが、その位置はＡ～Ｂ地区における幹線道路の北側に該当する。建物跡は削平されて不明であるが、井戸の多さからすれば、Ｂ地区から続く町屋の延長を想定することが妥当である。ＣⅡ地区では、調査区南側で検出されている溝跡が、道路側溝と考えられることから、幹線道路より一マス北側の区画に居住城が設定されていたことが明らかである。ただし、遺構密度は低い。

ＣⅡ地区の状況は、ＤⅠ地区の27グリッドで検出されたＳＤ-2469溝まで継続されており、幅約46mほどを一区画とする屋敷跡であった可能性が高い。そして、ＳＤ-2469溝からＤⅡ地区東端のＳＤ-3057溝まで南北に区画される幅約65mの範囲についても、29～31グリッド間の遺構密集域を主屋等とした一区画の屋敷地と考えられる。当該区画については、土地更正図でも道路により方形に区画されており、屋敷地の範囲を示すものと考えられる。

Ｅ地区については、ＳＤ-301堀の南側に沿って東西道があり、その南北に屋敷地が展開していたことが窺われ、北側の屋敷地が館へと発展したものである。

以上にみられる屋敷地の状況から、南北方向の並びについては、調査区が斜位に４マスの土地区画を横断していたことが理解される。その間隔については、Ｅ地区ＳＤ-301堀とＤⅠ地区ＤＳＤ-2401溝、およ

びＢ地区における幹線道路方向修正後の東側延長からの距離は、それぞれ40m程度となる。東西については、幹線道路１とした南側は知り得る状況になく、また北側についてもＢ地区と同様な町屋が連続する可能性は高いが、Ｃ地区やＤ地区の南側が調査区外となって一切不明であり、詳細を把握できていない。しかし、幹線道路から離れた北側の区画では、道路や溝で区画された方形区画が、一区画の屋敷地となっていた状況が看取できそうである。ただし、東西区画の間隔については、ＤⅠ地区を主とする屋敷地が47m、ＤⅡ地区の屋敷地で約63m、Ｅ地区の館では40mほどと規則性がなく、どのような基準をもって区割りがなされたのかについては、明らかにし得なかった。なお、Ａ地区幹線道路の南側沿いにおける町屋の存在等や遺構についても、調査区外のため詳細は不明とせざるを得ない。

建物と柵列の指向方位　以上、建物や柵列などは、集落内の方形区画に沿った計画性が高い配置がなされていたことを述べてきた。第43図は、地区毎における建物と柵列それぞれが指向する方位を示したものである。一瞥して、指向する方位がある程度規格性を伴っていることを窺うことができる。特に建物跡が集中するＢ地区とＤⅡ地区では、おおむね90度となる直角の角度に集中している。その角度としては、Ｂ地区がＮ－10°～22°－Ｅと、Ｎ－66°～76.5°－Ｗに、またＤⅡ地区ではＮ－14°～16.5°－Ｅに、またＮ－83°－Ｗの一例を除くその他はＮ－68.5°～79°－Ｗとおおむね10度の幅の中に納まっている。

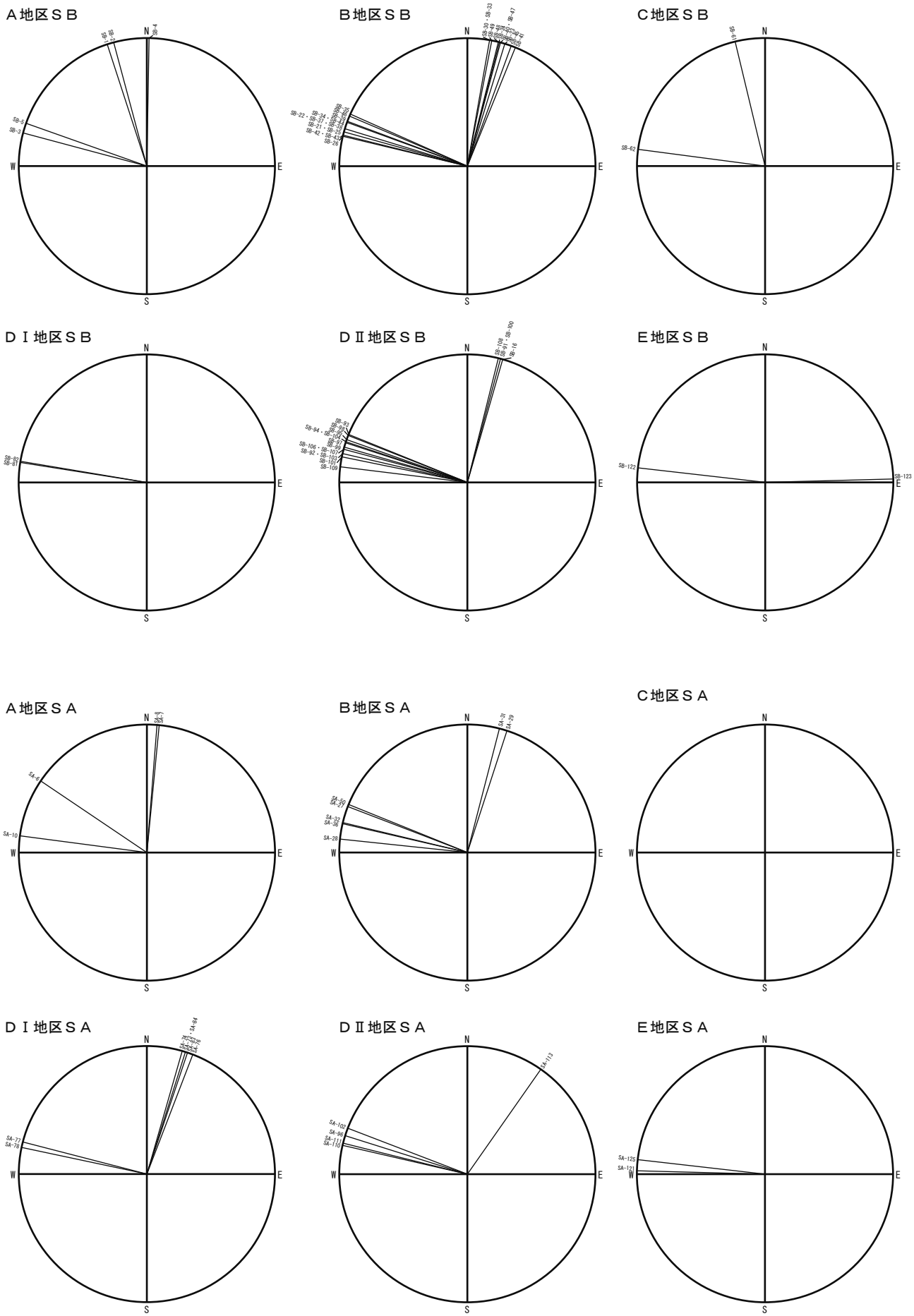
ところで、ＤⅡ地区において除外した１例について、Ｎ－82.5°～84.5°－Ｗを指向する建物については、ＣⅡ地区やＤⅠ地区、Ｅ地区でも１～２棟程度散見される。また、柵列の事例をみても、Ａ地区･Ｂ地区、Ｅ地区で確認できることから、これらについても何らかの関連性、特に時期的な同時性などが背景にある可能性は否定できない。

なお、Ａ地区ではＮ－15°～18°－ＷとＮ－１°－Ｅ、ＣⅡ地区ではＮ－13°－Ｗを指向し、方形の区割りに捕らわれない事例が合計４例確認できる。これら４棟については、土地区画整理以前の可能性もあるが、出土遺物からは明確にできていない。

集落全貌解明に係る今後の課題　馬場・天神腰遺跡の発掘調査時点、田畑への往来等を含む生活道路については、発掘対象から除外して進められた。しかし、調査結果の検討から、集落内の土地区画整理を解明するためには、道路そのものの実態把握が重要であることを知ることになる。現道下にかつての道路跡が重複するか否かは、集落全体像とともに集落形成の過程を知る上で重要であったことになる。今後、調査の機会があれば、その機を逃さないことが肝要であり、一つの反省点としたい。

もう一つ、道路関連としては、側溝を両側に備え、維持管理のため改修を幾度となく行っていた幹線道路の延長確認である。調査ではＢ地区において館となる屋敷地を迂回するまでが確認できているが、さらなる東への延長が明確となっていない。特に、土地更生図や現道と一致しておらず、ルートそのものが不明となっている現状では、そもそも幹線道路としての位置付けにも課題を残すこととなる。特に、刈羽神社境内との関連など、延長の追求は必要である。

そして、最重要課題とすべきは、刈羽神社境内周辺及び集落域中心部の調査ということになろう。今回の発掘調査区とは、集落域の北辺に該当しており、中枢部となるであろう集落中央域や刈羽神社周辺が全く未調査となっている点にある。特に、館の存在について、すでに発掘調査区からは東西両端から２か所確認されるとともに、３か所目として南條駿河守菩提所とされる旧正雲寺境内では、土塁と空堀が現存しており､館の存在はほぼ確実である。しかし､これら３館の規模は､一辺が40m以上乃至70m級程度であり、必ずしも大きくない。一辺100m級となる本体ともいうべき館の存在は否定できないと考えている。本遺跡の全体像解明には、さらなる丁寧な調査を継続的に行っていくことが、今後の課題と言える。



第43図　建物跡・柵列の方位集成図

5　馬場・天神腰遺跡と地域史

馬場・天神腰遺跡発掘調査は、現地調査を終えてすでに30年余りの年月を経ることとなった。この間、県内における中世遺跡の調査は数多く行われており、新たな知見だった調査成果も、すでに幾つかの事例によって過去のものとなってしまった感はぬぐい切れない。

本節では、馬場・天神腰遺跡の調査成果が、柏崎地域における中世の歴史、地域の歴史において、どのように評価されるべきであるのか、本遺跡の歴史的な意義を絡めつつ地域史における位置付け等について述べることとする。特に、本遺跡の重要性とは、在地におけるムラとしての集落ではなく、都市的な性格を帯びる地域的な中核的集落であった点にある。同様に評価され得る遺跡は、そもそも県内においてもそれほど多くなく、柏崎地域においても特異な存在であることは変わりがない。また、鎌倉時代に開発された土地区画整理に基づく「マチ」の姿は、その後も継承され現代に引き継がれていた点も、歴史的事実として重要であろう。

1）佐橋荘の中の馬場・天神腰遺跡

馬場･天神腰遺跡は、中世、主に鎌倉時代中期となる13世紀後半以降、南条遺跡群の中核として発展し、その後16世紀初頭頃から衰退したことが、今回の発掘調査によって明らかにされた。ただし、当該調査区とは、遺跡の北辺に偏り中心エリアの状況が不明であることから、遺跡の全体像や性格、また歴史的展開について、すべて明らかにされた訳ではなく、この点は十分注意を要することは言うまでもない。

ところで、本遺跡の存在感を見据えようとした場合、柏崎といった地域の中の遺跡というよりも、中世佐橋荘の中の遺跡として捉えていくことが肝要と考える。その上で地域の中の佐橋荘として、他荘保との関連などを絡めながら地域史の中に位置付けていくことにより、文書等の諸記録が少なく実態が不明な柏崎地域の中世史が明らかにされていくことになると言える。

佐橋荘と越後毛利氏　佐橋荘は、詳細な立荘年代を不詳としながら、白河院政期（1086 ～ 1129年）の成立が想定されている。したがって、佐橋荘としての歴史は、11世紀末乃至12世紀前葉期に始まることになる。しかし、立荘以前において、ある程度の開発が周辺域を含め進められていたことは間違いがなく、さらに遡れば、南条遺跡群における開発過程のとおり弥生時代後期に始まり、古墳時代を通じて展開していた訳である。そして、佐橋荘の前段階として、荘園の四至とほぼ整合すると予測されている古代の行政単位「高家郷」に行き着くことになろう。

ただし、馬場・天神腰遺跡の調査区内では、現状として８世紀代乃至９世紀前半に比定できる土器類等の資料は出土しておらず、高家郷中枢としての位置付けは確認できていない。しかし、周辺地域において、水田などの諸開発が進んでいたことは、９世紀初頭となる用水管理の公的施設が発見・調査された音無瀬遺跡の調査成果が示しており〔品田2012〕、同一郷内の関連遺跡として重要である。

佐橋荘は、本家・領家といった立荘以降における荘園領主の変遷、伝領関係についてはある程度知られているが〔村山1990〕、幕府により任命された地頭が配置されることにより、二元的支配がなされることとなる。前者による在地の直接的支配状況については、荘官の名なども含め史料が残されておらず詳細は不明である。また、後者についてもほぼ同様ではあるが、毛利氏が佐橋荘の地頭職を得ていたことは、在地支配の歴史的展開において大きな影響を与えることとなり、極めて重要な意味を成している。

馬場・天神腰遺跡は、佐橋荘南条の内、７ヵ条の一つ「庄屋条」内と想定される。この条名からも、南

条の中枢に位置付けられたことが推測可能であるが、鎌倉時代にあっては佐橋荘全体の中心であるが故の条名と考えられる。このような立地にあった当該地において、調査成果から窺える画期とは、幹線道路とこれに伴う土地区画整理、そして商業や流通といった経済的な活動を想起させる「市」の開設という一連の事象が、13世紀後半に整備されていたことが掲げられる。13世紀後半という年代観は、佐橋荘の地頭職を得ていた毛利氏と関連させた場合、宝治元（1247）年の宝治合戦に係る毛利氏の動向が重要となる。

毛利経光の在地支配　毛利経光は、越後国佐橋荘に下向在住し、在地の直接支配を始めた越後毛利氏の祖であり、その存在は大きくクローズアップされてくる。経光は、宝治合戦前年の寛元４年、前将軍頼経の帰洛に際し路次奉行人として従い、京都からそのまま越後に下向して佐橋荘に留まっていたことから、一族の中で唯一処罰を免れ、安堵された越後国佐橋荘を本拠地とすることになる。つまり、馬場・天神腰遺跡の再開発がなされた時期的なタイミングを見れば、佐橋荘の伝統的荘園領主の荘官が取り仕切ったとは考え難く、毛利経光による直接的在地支配によりもたらされた可能性が極めて高いことになる。

毛利氏が佐橋荘の地頭職を得たのは、承久以前となる大江広元の代とされ、かつ源頼朝から与えられていたとすれば、越後国が頼朝の知行国であった文治元（1185）年から同５（1189）年の間であった可能性が高くなる。繰り返しとなるが、毛利氏が地頭職を相承してきたことが、佐橋荘の歴史として最も重要であり、そして宝治合戦後、毛利経光による直接的在地支配は大きな画期となったのである。

そのような中で、荘園領主による支配の痕跡とは、北陸系Ｂ類土師器や玉縁の白磁碗（白磁Ⅳ類）に象徴される11世紀後半から新しくは13世紀前葉の範囲内で捉えられる遺物群と、これらを伴う遺構群の存在である。遺構等の事例は決して多くないが、天神腰Ｅ地区において、ＳＤ-301堀によって切られたＳＥ-325井戸は、荘園領主から地頭支配への経緯を物語る可能性が高い。その理由として、出土遺物の中に白磁碗類が比較的多く含まれていたこと、また漆器椀荒型38点が井戸底において大量に放棄されていた状況は、荘官と地頭との力関係から突如として立ち退きを強いられた結果を意味する可能性がある。また、馬場Ａ地区において、幹線道路中央に位置した井戸２基も、新設道路敷設に際し移転した住人がいたことを示し、Ｂ地区では屋敷地を迂回している。つまり、13世紀後半における再開発は、地頭勢力により強力に推し進められたこと、そして幹線道路敷設以前、すでに在地領主の居館が複数築かれていたことを意味している。この想定が肯定されるとすれば、佐橋荘の実権は、少なくとも南条に関しては、荘園領主ではなく地頭職を得た毛利氏に移行していたことになってくる。

もっとも12世紀後葉以降、鎌倉殿の威光は越後においても強烈に及んでおり、かつ鎌倉殿の右腕とも言える大江広元の一族が佐橋荘の地頭職を得ていたとすれば、鵜川荘や比角荘等において名立たる有力者が見出せない当該地域周辺において、武士等在地領主に対し強力なインパクトを与えていたのではないかと推測する。しかも、毛利氏の名字をなした所領は、相模国毛利荘であり、鎌倉在住であったことを考えれば、地頭代を派遣しての所領管理であったと考えられる。ところが、毛利氏本人による在地の直接支配は、それ以前とは大きく異なり、宝治元年以降は鎌倉の武家文化も直接的に在地に及ぶこととなったのではないだろうか。また、毛利経光は、越後国佐橋荘だけではなく周辺荘保においても、従五位下左近将監という高位の有位者は貴種として尊ばれる存在であったに違いないと推考する。

したがって、毛利経光の佐橋荘在住と直接支配は、周辺地域にあってもリスペクトされていた状況は十分に想定可能である。その状況を示す現象として、「刈羽三島型」中世土師器の祖型となる「鎌倉型」中世土師器の佐橋荘域への波及と周辺地域への拡散が、毛利経光の越後佐橋荘下向時期との整合性が示唆しているのである。

２）都市空間としての馬場・天神腰遺跡

町割りと幹線道路・側溝　馬場・天神腰遺跡における集落構造の大きな特徴は、幹線道路の存在と溝による町屋の区画である。一般的なムラともいえる在野の集落は、屋敷地単体もしくはその集合体であって、地形的な属性に沿って任意に形成され、特別な規制を受けて構成されることは少ない。しかし、本遺跡においては、道路による方形上の区画とそれに沿う屋敷地の固定的な配置があり、道路に面して間口を設定していた状況が、馬場Ｂ地区において確認できる。

また、一般的な集落において、屋敷地間や耕地への往来のため、当然のごとく「道」は一定のルートをもって設定されていたはずである。しかし、その「道」なる空間設定に当たって、両側に側溝を設けるという構造とは、暗黙の了解としての「道」ではなく、また観念的でも視覚だけに頼るでもなく、確固たる境界をもって屋敷地とは峻別させる装置として、重要な意味をもつ存在と解釈すべきである。その意図とは、この地が都市としての機能を有していたが故のことである。

例えば、柏崎市内における中世集落として、広大な面積が調査された山崎遺跡〔新潟県教委他2018ａ〕や丘江遺跡〔新潟県教委他2018ｄ〕の事例を見ると、屋敷地を溝により方形状に区画することはあっても、調査区内に側溝を備えた道路そのものは確認されていない。また、上越市（旧頸城郡吉川町）樋田遺跡〔吉川町教委1990〕についても、一辺が50m級乃至75m級の屋敷の区画が隣接するも、道路そのものによって、集落や屋敷地が規制されるという状況はみえてこない。事例として掲げた３遺跡については、区画内の遺構密度が相当高く、それなりの有力者が住まう屋敷であることは間違いがなく、屋敷間や周辺地域、あるいは耕地等の所有地との往来に供する「道」は存在したはずであるが、集落を規制する道は備えていないということになる。また、道路に側溝が付設された理由・事情とは、馬場・天神腰遺跡が、都市として位置付けられ、一般的で通有な集落とは大きく相違していたことを具体的に表していたことになる。したがって、側溝を有する直線道路の建設とは、13世紀中葉以前におけるムラ的集落を、13世紀後半において都市的空間へと改造していく、都市化にとって必要な措置であったと評価すべきである。このような思考の基は、毛利経光という存在と、経光が都市鎌倉を範型として「都市」に整備する意図が働いた可能性があるのではないだろうか。したがって、都市としての空間と側溝を備えた道路には、互いに密接であり有機的な相関関係にあったと理解するのが妥当であろう。

ところで、馬場・天神腰遺跡と同様に、13世紀後半において土地区画整理がなされていた遺跡として、村上市古渡路遺跡が調査されている〔新潟県教委他2011〕。本遺跡では、60m（約100尺）を基準に、その半分の30m、あるいはそのまた半分の15m、これらを足した45mを単位とした区画整理がなされていたとされる〔土橋2011〕。区画整理の単位について、馬場・天神腰遺跡での事例が、前節で述べたとおり「東西区画の間隔については、ＤⅠ地区を主とする屋敷地が47m、ＤⅡ地区の屋敷地で約63m、Ｅ地区の館では40mほど」と記載し、規則性がないとの評価を下しているが、数値的には古渡路遺跡例とある程度近似しているようにも受け取れる。そして、道路跡については、南北延長650mほどの調査区内の南側において、両側に側溝を備える東西道１条と南北道１条が、四辻状に交差するような状況で検出されている。土地区画整理がなされ、側溝を有する道路の存在から、都市的様相を呈していることは明らかであるが、道路に沿って短冊形の町割りは行われておらず、この点は馬場・天神腰遺跡の幹線道路沿いとの大きな相違点とすることができる。ただし、馬場・天神腰遺跡でも、幹線道路から一マス北側となるＤⅠ地区・ＤⅡ地区・Ｅ地区の状況との類似性は極めて高い。したがって、調査区外において、道路沿いにおける町割りなどが

〔〔吉川町教委 1990〕から転載〕

第44図　上越市樋田遺跡全体図（一部）

施行されていた可能性は否定できない。

また、当該地は小泉荘内にあるとされ、地頭職には有力御家人とされる秩父季長が、13世紀初頭にはすでに任じられたとされる。しかし、詳細の多くは不明であり、13世紀後半の動向も定かではなく、佐橋荘の越後毛利氏と同等に評価できるかも明らかでないが、今後さらに検討する余地はありそうである。

集落域周縁における「場」と「市」の想定　そしてもう一つ、都市的要素として重要な点が「市」の存在である。馬場・天神腰遺跡の調査成果の一つとして、重要な発見とすべきは幹線道路北辺に沿って幅約5.5m（≒3間）の空間が、延長約85m（≒47間）に及んで設定されていたことにある。幹線道路南側については調査区外となって、空白地の存在は確認できていない。しかも、南側側溝の形状は、北側側溝よりもやや簡易なことから、同列に扱えない可能性は残され、若干の差異は想定され得るが、平坦な畑地が続いていることからすれば、幹線道路両側に設定されていたという想定は可能である。

この遺構空白地の解釈については、遺構・遺物の存在を物証として理論を構築する考古学にとって、実証性が困難な厄介な状況にあり、確証というものが得られない。また、他の事例も管見になく、類例からの推測も不可である。したがって、何をもって「市」の存在を証明することができるのか、「市」の存在

を見極めることは極めて難しいことになる。

しかし、馬場・天神腰遺跡におけるＡ地区からＢ地区における遺構等空白地は、遺構の分布・配置状況からみても意図的としか言いようがない。つまり、13世紀後半においてムラからマチへ改変する土地区画整理の施行が、極めて計画的であったことを窺わせる。「市」を想定し得る「場」について、現段階で状況的な解釈をすれば、道に沿って人為的な空閑地が設けられていたこと、幅も約5.5m（≒３間）と企画性が窺えること、また公界としての道路に沿い、かつ集落の周縁でそして河原に近い無縁としての場であるといった条件は揃っていることになる〔網野1987〕。

道路など往来の両側に市を立てる事例としては、近世以降ではあるが、椎谷藩の馬市〔磯貝1966〕や新潟三大高市の一つ閻魔市の例を掲げるまでもなく、柏崎地域にとってハレの日のある意味日常的な風景でもある。寺社門前でもないマチの一画に「市」という場を計画的に設定していたところに、佐橋荘を直接支配し、地域の中核として発展させようという越後毛利氏の強い意志、これを実現可能とする経済的基盤という前提、そして地域権力としての存在感を表している。

３）「刈羽三島型」土師器と周辺地域への拡散

「鎌倉型」土師器の課題　「刈羽三島型」土師器は、「鎌倉型」土師器を母体に在地化した中世土師器であることは、特徴的な成形や形態、調整等の共通性などからほぼ肯定される。手づくね成形で製作される「鎌倉型」土師器は、そもそも京都系土師器を出自とし、12世紀末乃至13世紀初頭に鎌倉へ導入されるが、導入初期段階から在地化が進んだとされている〔服部1992〕。しかし、その存続は短期間で、13世紀中頃には衰滅するなど、鎌倉やその周辺域に根付くことなく終焉することになる。ところが、鎌倉での動向とは入れ違いのように、13世紀後半の柏崎地域に波及することになる。このような実態とは、鎌倉と柏崎地域の両地域において、13世紀中葉に大きな画期を想定せざるを得ないであろう。

両地域に共通する13世紀中葉の事件としては、宝治元年の宝治合戦が想起される。宝治合戦の結果は、鎌倉では北条得宗家の専制体制が確立し、越後国佐橋荘では越後毛利氏が在地を直接的に支配する発端となった。しかし、京都系土師器の鎌倉波及に、毛利経光の祖父大江広元の直接的関与も、京都出身の貴族であったこと以外、関連する証左は得られていない。また、広元の子毛利季光と「鎌倉型」土師器との関連も不明であり、かつ毛利経光が「鎌倉型」土師器の生産や従事する職人集団との関係も、史資料そのものが一切なく、また議論もされたことがないなど全く明らかでない。現状では、単なる偶然に過ぎないかのような状況にあることは認めざるを得ない。

「刈羽三島型」土師器の波及・拡散と展開　柏崎平野一帯における中世土師器は、京都系土師器第一波の波及があまり顕著でなく、現状では散発的に出土する傾向が強く、饗応等に伴って大量消費、大量廃棄といった調査事例はない。このことから、中世土師器を用いた儀礼的な作法などは、未だ一般化していなかった可能性は否定できないであろう。

しかし、13世紀中葉以降、「刈羽三島型」土師器が出現すると、柏崎平野の中世遺跡では少なからず何処彼処で出土するようになる。しかも、その分布域は佐橋荘域に限定されることなく、柏崎平野内では鵜川荘や比角荘の各荘や、国衙領であった苅羽郷域をも超えて分布する。例えば、最初に注目された三島郡出雲崎町番場遺跡〔新潟県教委1987〕のほか、長岡市（旧中之島村）杉之森遺跡〔新潟県教委1976ｂ〕、燕市長所遺跡〔新潟県教委1976ａ〕、新潟市（旧黒埼町）釈迦堂遺跡〔新潟県教委1973〕などからも散見されるように、島崎川流域を経て信濃川中流左岸域への広がりを確認できる。したがって、当該地域にお

ける中世土師器は、「刈羽三島型」土師器の波及により、その使用が普遍化したことが理解され、在地領主等にとって大きな変革を伴う一大画期であったと考えられる。

ところで、鎌倉の京都系土師器は、波及直後から在地化が顕著となり、「鎌倉型」土師器が成立する。柏崎平野等に波及した「鎌倉型」も、その直後から在地化が始まって「刈羽三島型」に変異するとおり、本来有していた柔軟な性格を保持していたことが窺われる。つまり、「鎌倉型」土師器生産集団とは、伝統的な器形や成形技法等に固執することなく、変化を容認する寛容な生産体制を維持していたことになる。また、「刈羽三島型」は、前期と後期に大別されるとおり独自の変遷をたどる。

前述した「刈羽三島型」の出土遺跡例については、そのほとんどが前期とされる古い時期のもので占められており、馬場・天神腰遺跡で主体を成す後期の土器群は明らかでない。つまり、「刈羽三島型」の広域拡散は前期の事象であり、後期においては柏崎平野に収斂した可能性を示している。このことは、「刈羽三島型」前期の土師器の供給元が柏崎平野内にあった可能性をも示すことになる。したがって、拡散した周辺地では、その後「刈羽三島型」土師器の使用が途絶えていくことに対し、柏崎平野では後期まで使用が継続されたことになる。つまり、「刈羽三島型」土師器の型式変遷がたどれるのは、柏崎地域に限定されていた可能性が高い。この現象の意味を探ると、「刈羽三島型」中世土師器の大元が柏崎平野内にあることまでは想定が可能であろう。

また、鯖石川と別山川の合流点に位置する角田遺跡〔柏崎市教委1999ｂ〕や東原町遺跡〔新潟県教委他2005〕では、「刈羽三島型」前期の土師器が主体であり、後期の資料はほとんど見受けられない。これに対し、鵜川荘北端相当に位置する下沖北遺跡〔新潟県教委他2003〕では、前期と共に後期の資料も豊富となっている。柏崎平野全体の土器様相は明らかにされていないが、現在調査された遺跡の調査成果を窺えば、佐橋荘と鵜川荘において、「刈羽三島型」土師器が前期から後期まで濃密に使用・廃棄された状況を看取することができる。以上は、現段階での見通しに過ぎない。今後さらに調査成果の事例を集積しつつ分析を行うことが肝要である。

「刈羽三島型」土師器の地域史的意義　以上、「刈羽三島型」土師器について、総括的に概要を述べてみた。その出自は、都市鎌倉における京都系土師器が在地化した「鎌倉型」に求められること、そして柏崎平野において主体的であり、かつ佐橋荘と鵜川荘において型式変換しつつ普遍的に存在することを示してきた。その発端は、未だ十分な検証を経ておらず、憶測の域を出ない状況にあるが、大江毛利氏の越後国への下向と、佐橋荘における在地支配に求められるのではないかとした。つまり、「刈羽三島型」は、一つの地域圏を象徴する地域型式としての意義が認められるということである。越後国においては、阿賀北地域にも「阿賀北型」〔品田1991〕とした底部をヘラ切りする特徴的な中世土師器が分布しており、その分布は、加地・豊田・白河の各荘域に収まるといった実態がある〔鶴巻2003〕。越後の国域は広大であり、幾つかの地域圏が形成されることは当然とも言え、越後国全体が同一土師器で覆われ一律に変遷するとみなすことは、相当な無理がある。頸城中枢部は、越後国の府中としての特徴が存在するであろうし、頸城平野東辺とは異なる事情も想定されるであろう。

中世土師器の研究とは、中世における地域圏の把握に有効であり、地域型式の認定はその足掛かりとなる。また、中世土師器の地域型式とは、特殊な存在として理解するのではなく、地域史理解の有効な視点を示すものとして分析していくことが肝要であろう。また、地域区分においても、荘園や国衙領などに区分しつつ、荘園領主や地頭などの支配関係も含めて総括していくことが、今後さらに必要となっていくことは間違いない〔笹澤2018〕。

要　　約

1　『馬場・天神腰』は、平成３（1991）年から平成４（1992）年の２か年にわたり発掘調査を実施した市道柏崎22-50号線建設に伴う馬場・天神腰遺跡の発掘調査報告書である。
発掘調査対象面積約5,000㎡に対し、実質発掘調査面積は既存道路等を除いた4,121㎡である。

2　馬場・天神腰遺跡は、柏崎市大字南条字馬場と字天神腰地内に所在する。遺跡名は、周知化当初は集落名から「下南条遺跡」とされていたが、小字名を遺跡名とする原則から「馬場・天神腰遺跡」に変更した。立地は、鯖石川右岸の沖積段丘上の平坦地であり、鯖石川の支流長鳥川との合流点の内側に営まれていた。標高はおよそ23.0m（国土地理院1：25,000）、現況は畑と水田であった。

3　馬場・天神腰遺跡の推定範囲は、現在の下南条集落全域が想定され、東西約630m×南北約550m、面積は概略でおよそ20haである。発掘調査された柏崎22-50号線は、遺跡推定範囲の北辺に該当し、遺跡本体あるいは中枢部から離れた外縁に相当することから、当該調査区の成果から遺跡の全体像全てと理解することは、注意を要する。

4　発掘調査区は、主に東西方向に展開し、幅約13m、延長380mに及ぶことから、南北に横断する市道・農道などによってＡ～Ｅの５地区に分けた。馬場地区はＡ地区～ＣⅠ地区まで、天神腰地区はＣⅡ地区～Ｅ地区までとなる。調査の結果、鎌倉時代から室町時代の集落跡が検出されたほか、平安時代や江戸時代の遺構・遺物が若干出土している。

5　発掘された遺構の種別は、道路跡、区画溝、堀跡、建物跡、柵列、井戸、土坑、竪穴状遺構のほか、建物・柵の柱穴多数、また土壙墓２基を確認した。

6　馬場・天神腰遺跡は、13世紀後半において方眼状に土地区画整理がなされていた。西端のＡ地区で検出された東西方向の幹線道路を基準にすれば、調査区はその東北東方向の斜位に設定されていたことになり、北側３マスの南辺までが調査対象となる。ＤⅠ地区・ＤⅡ地区は２マス目、Ｅ地区は２マス目から３マス目の南側に該当する。南北の区画幅は約40mとなるが、東西区画の間隔については、ＤⅠ地区を主とする屋敷地が47m、ＤⅡ地区の屋敷地で約63m、Ｅ地区の館では40mほどとなって一定しない。ただし、村上市古渡路遺跡の区画単位に近似している状況は否めない。

7　Ａ地区の遺構は、調査区南辺に幹線道路が縦走して検出され、北辺は5.5mの遺構空白帯を隔て、柵列で囲まれる屋敷跡となる。屋敷地は井戸が２基一対二組の４基、建物跡は柵列の前後に５棟配置されるが、指向する方位が一定せず、重複も多いことから時期的な変遷が想定される。また、柵列の柱穴と重複して土壙墓１基が検出され、ロクロ成形の土師器が出土している。なお、幹線道路の道路敷きと重複して２基一対の井戸が検出されており、幹線道路新設に伴い移転を余儀なくされた住人がいたことを示唆している。なお、幹線道路両側の側溝は、維持管理のため前後５回程度の改修がなされていたことから幹線道路と位置付けたものである。

8　Ｂ地区の遺構は、西側35mまでがＡ地区から続く遺構空白帯であり、総延長約85mになる。調査区北辺に遺構が散見される状況はＡ地区と同じであり、この空白帯を「市」が開催される場と想定している。幹線道路は、北側へ緩くカーブして膨らみ、14世紀末に至り南側側溝がそのまま館の堀に改修されている。このことから、道路新設段階、すでに有力者の屋敷が道路法線の延長に存在しており、道

路を迂回させていたことを明確に示している。東側は、幹線道路に直交する区画溝３条による町屋が形成されている。建物跡は確認されただけで23棟に及び、集中的に建て替えが行われていた。区画溝をまたぐ建物の存在も確認できることから、区画の変更といった変遷があった。

9　Ｃ地区は、幅約40mにわたり深く掘割された後、埋め戻されていた。特にＣＩ地区では井戸の底だけの遺構群が15基前後も検出されている。掘割や埋め戻しの時期は特定できていないが、御館の乱に際し集落防御のための大規模な空堀が構築された可能性を、航空写真や土地更生図などから推察した。また、ＣⅡ地区東側の10m区間は、溝跡や建物といった遺構の残存状況から、空堀と対を成す土塁の基底部と考えられ、ＤＩ地区との境界をなす市道は、土塁東辺に沿う道路として新設後、現在まで機能していたことが窺われる。

10　Ｄ地区は、幹線道路と町屋が形成された区画より１マス北側に該当し、Ｂ地区で区割りされた町割りは施行されず、区画の広い屋敷地となる。このような区画整理は、村上市古渡路遺跡に類似する。ＤＩ地区東側の南北志向の区画溝により屋敷地が２区画に区分される。ＤⅡ地区では、屋敷地中央部分に建物跡が極めて濃密に密集する。京都系第二波の中世土師器が出土した井戸があり、15世紀後半乃至16世紀初頭まで継続する地区としては調査区内唯一となっている。また、ＳＥ-2819井戸中層からは、石塔残欠と共に木製の塔婆が出土したことが特記される。

11　Ｅ地区は、館の堀が主体となっているが、堀の南縁に溝と柵列が並走していることから、道路敷きであったことが、遺構が希薄な理由である。道路に沿う有力者の屋敷が、堀を巡らせる方形居館へと展開したことが窺える。また、ＳＥ-325井戸出土の荒型38点は圧巻だった。

12　出土遺物としては、土器・陶磁器類、金属関連遺物、石製品類、木製品類に大別される。土器・陶磁器類の種別としては、中世土師器、珠洲、越前、瀬戸・美濃、瓷器系陶器、また貿易陶磁器としての白磁、青磁、青白磁、青花、そして唐津等の肥前系陶器や越中瀬戸などの近世陶磁器が出土している。主要な種別については、出土分布図を作成した。

13　中世土師器は、成形技法と出自により、「北陸系Ｂ類（Ｒ種）」「刈羽三島型（Ｔ種）」「関東系Ｂ類（Ｒ種）」「京都系Ａ類（Ｔ種）」に区分し、集落の時期区分は、在地生産が主体となる土師器によって、以下の通り５期に区分した。

第Ⅰ期：北陸系ロクロ土師器の時代　【11世紀～ 12世紀中葉】
第Ⅱ期：京都系土師器第一波の時代　【12世紀後半～ 13世紀前半】
第Ⅲ期：刈羽三島型土師器の時代　【13世紀後半～ 14世紀後葉】
第Ⅳ期：関東系ロクロ土師器の時代　【14世紀末～ 15世紀前半】
第Ⅴ期：京都系土師器第二波の時代　【15世紀後半～ 16世紀初頭以降】

14　馬場・天神腰遺跡北辺における集落の盛衰については、第Ⅰ期～第Ⅱ期の遺構・遺物がともに僅少なことから集落形成が乏しく、集落域の外縁から周縁といった状況にある。最盛期は、ムラから都市的性格を帯びるようになる第Ⅲ期が該当するが、その後半となる第Ⅲｂ期が主体であり、第Ⅲａ期は幹線道路の整備と土地区画整理事業が施行されていることから発展途上というニュアンスが強い。第Ⅳ期の遺物量は少ないが、有力者の屋敷地が堀を巡らせる方形居館に変貌しており、政治的な様相を強めるなど集落の性格に変化が認められる。この変化は、集落の動向としては大きな変革であり、14世紀末頃と想定される方形居館の出現と関東系ロクロ土師器への転換が連動している可能性は否定できない。第Ⅴ期については、ＤⅡ地区の一画に収斂しており、第Ⅴｃ期以降は居住域としてはかなり縮

小されていた可能性は高い。しかし、Ｃ地区における掘割が御館の乱に伴うとすれば、集落自体は重要な防衛拠点であったことを意味している。

15 「刈羽三島型」土師器の出自とは、都市鎌倉に波及した京都系土師器が、鎌倉にて在地化した「鎌倉型」土師器に求められることを示した。「鎌倉型」土師器の越後への波及は、宝治元（1247）年の宝治合戦を発端とし、地頭職を得ていた越後国佐橋荘に毛利経光が下向・在住したとの関連を指摘した。また、鎌倉への京都系土師器の波及には、京都から鎌倉へ招かれた貴族の関与、特に経光の祖父大江広元との関連を重視するが、この証左は一切確認できていない点にも触れた。なお、「刈羽三島型」土師器の分布圏については、未だ明確になっているとは言い難いが、柏崎平野以外では島崎川流域から信濃川下流左岸域への広がりが想定される。しかし、それら「刈羽三島型」は前期の資料であり、後期資料が確認できるのは柏崎平野、特に佐橋荘と鵜川荘域に収斂していた可能性も指摘した。

16 土師器出土量の大半を占める「刈羽三島型」については、下沖北遺跡と東原町遺跡から出土した一括性の高い資料を活用しつつ変遷試案を提示した。変遷観については、口縁部の横ナデがシャープで体部の有段が顕著な前期と、有段が退化し厚手となり、底部が「へそ皿状」に盛り上げる後期に大別した。前期の出土状況としては、比較的多くの個体がまとまって出土する傾向が強いが、後期ではあまり顕著でない点が指摘できる。この点は、土師器の使用形態、特に儀式儀礼に伴う饗応などに変化が生じていた可能性が高い。馬場・天神腰遺跡出土の「刈羽三島型」土師器の編年的位置付けは、前期資料が少なく、大半が後期に属する。この事実は、発掘調査区自体が、遺跡の中枢部から距離を隔てていたことを意味しても、集落の盛衰の中で、前期段階が希薄であるという実態を示すものではない。

17 土器・陶磁器類以外の遺物としては、椀形滓や羽口の存在から小鍛冶を行う職人が、またＥ地区ＳＥ-325井戸下層の椀荒型38個体や、ＤＩ地区ＳＥ-2402井戸の釿で削り出された木端の多量出土が示すように、居住乃至招聘により手工業生産に従事した職人の存在が確認できる。また、石製品としては、Ｂ地区ＳＥ-1129井戸出土の硯には、硯陰に「永徳元年十月十一日」という西暦1381年の北朝年号の刻書が特記される。

18 38個体が一括出土した荒型は、成形面観察から「①丸太材切出し⇒②木取り⇒③一次成形⇒④寝かし⇒⑤二次成形⇒⑥一部抉り」までの６段階程度の製作工程を想定可能とした。木取りについては、底面に残された樹皮面の残存等の解釈により、丸太を厚さ20cmほどに輪切りし、６個体分の分割素材を得ていたものと推測した。また、角錐状にする一次成形後、一定期間寝かしがなされ、二次成形では、「①板目平行⇒②板目直交⇒③外周削出」という順番に作業が進められたとした。なお、井戸下層から一括出土した理由は不明であるが、乾燥材を水浸しにするとは考えにくく、突発的な事態において廃棄された可能性が高い。

19 16世紀にはいると、永正の乱（永正４年～同11年：1507 ～ 1514）を発端として、越後においても下克上の様相が明確となり、戦国時代に突入したとされる。またその後にも享禄・天文の乱（享禄３年～天文４年：1530 ～ 1535）と続くことから、佐橋荘域の重要拠点は、防御性に有利な北条に移行していくこととなる。また要害の主力を北条城として城下に家臣団が集住するとともに、十日市などの市町も移転するなど、政治的経済的な拠点が北条へ集約されるに伴い、南条であった馬場・天神腰遺跡も、重要性が相対的に低下していたことは、16世紀前葉以降規模縮小傾向からも窺える。

20 なお、集落内における建物跡の変遷等については、遺構の重複関係などの把握が不十分であったことから、詳細な変遷を提示するには至らなかった。

≪　引用・参考文献　≫

相澤　央・小林昌二　2000「柏崎市箕輪遺跡出土木簡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報（平成11年度）』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

相沢　央　2004「柏崎市箕輪遺跡出土木簡の『駅家村』と交通」『前近代の潟湖河川交通と遺跡立地の地域史的研究』

網野善彦　1987『無縁・公界・楽―日本中世の自由と平和―』平凡社選書

磯貝文嶺　1966『椎谷藩史』椎谷藩史研究会

今井昭俊　2018「第Ⅶ章　まとめ」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書ＸＶ（丘江遺跡Ⅰ）』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第275集）新潟県教育委員会・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』２　貿易陶磁研究会

宇佐美篤美・山本　肇　1987「下南条遺跡」『柏崎市史資料集考古篇１考古資料(図・拓本・説明)』柏崎市史編さん委員会

小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』２　貿易陶磁研究会

柏崎市教育委員会　1985『吉井遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第４）

柏崎市教育委員会　1990『吉井遺跡群Ⅱ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13）

柏崎市教育委員会　1991『小児石』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15）

柏崎市教育委員会　1992 a「下南条（馬場・天神腰）遺跡」『柏崎市の遺跡Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第16）

柏崎市教育委員会　1992 b『行塚遺跡』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第17）

柏崎市教育委員会　1995『藤橋東遺跡群―写真でつづる発掘調査の概要―』（柏崎市埋蔵文化財調査図録第１集）

柏崎市教育委員会　1996 a『田塚山遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集）

柏崎市教育委員会　1996 b「音無瀬遺跡」『柏崎市の遺跡Ⅴ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第22集）

柏崎市教育委員会　1997『前掛り』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第26集）

柏崎市教育委員会　1999 a「馬場・天神腰遺跡」『柏崎市の遺跡Ⅷ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書31集）

柏崎市教育委員会　1999 b『角　田』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集）

柏崎市教育委員会　2000『横山東遺跡群Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34集）

柏崎市教育委員会　2001 a『宮ノ下遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集）

柏崎市教育委員会　2001 b『柏崎町』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第38集）

柏崎市教育委員会　2006 a『角田Ⅱ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第48集）

柏崎市教育委員会　2006 b「南条遺跡群（第１次）」『柏崎市の遺跡ＸＶ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第49集）

柏崎市教育委員会　2007「南条遺跡群（第２次）」『柏崎市の遺跡ＸⅥ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第51集）

柏崎市教育委員会　2008 a『江ノ下』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第52集）

柏崎市教育委員会　2008 b「南条遺跡群（第３次）・（第４次）・（第５次）」『柏崎市の遺跡ＸⅦ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第54集）

柏崎市教育委員会　2010 a『軽井川南遺跡群Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第59集）

柏崎市教育委員会　2010 b『軽井川南遺跡群Ⅱ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第60集）

柏崎市教育委員会　2010 c『軽井川南遺跡群Ⅲ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第61集）

柏崎市教育委員会　2011『南条遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第64集）

柏崎市教育委員会　2012『音無瀬Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第68集）

柏崎市教育委員会　2015 a『上　原』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第78集）

柏崎市教育委員会　2015 b『善根大坪』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第79集）

柏崎市教育委員会　2015 c「善根遺跡群（第１次～第３次）」『柏崎市の遺跡24』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第80集）

柏崎市教育委員会　2016『軽井川南遺跡群Ⅳ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第82集）
柏崎市教育委員会　2017 a 『磯辺Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第85集）
柏崎市教育委員会　2017 b 『磯辺Ⅱ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第87集）
柏崎市教育委員会　2017 c 『久保田』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第89集）
柏崎市教育委員会　2018 a 『軽井川南遺跡群Ⅴ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第92集）
柏崎市教育委員会　2018 b「北条四日町地点」『柏崎市の遺跡28』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第93集）
柏崎市教育委員会　2018 c「馬場・天神腰遺跡（第３次）」『柏崎市の遺跡28』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第93集）
柏崎市教育委員会　2019「馬場・天神腰遺跡（第４次）」『柏崎市の遺跡29』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第96集）
柏崎市教育委員会　2021『軽井川南遺跡群Ⅵ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第101集）
柏崎市史編さん委員会　1982『柏崎市史資料集　考古篇２　考古資料（写真図版）』
柏崎市史編さん委員会　1987 a 『柏崎市史資料集　古代・中世篇２　柏崎の古代中世史料』
柏崎市史編さん委員会　1987 b 『柏崎市史資料集　考古篇１　考古資料（図・拓本・説明）』
金子拓男　1990「三嶋郡の分立」『柏崎市史（上巻）』柏崎市史編さん委員会編
刈羽村教育委員会　1995『枯木Ａ遺跡』（刈羽村埋蔵文化財発掘調査報告書第２集）
刈羽村教育委員会　1999『払川遺跡』（刈羽村埋蔵文化財発掘調査報告書第４集）
小林昌二・相澤　央　2015「木簡について」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅸ（箕輪遺跡Ⅱ）』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第254集）新潟県教育委員会・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
坂井秀弥　1983「歴史的背景と栗原遺跡の性格」『栗原遺跡―第６次発掘調査概報―』新潟県教育委員会
坂井秀弥・宇佐美篤美　1987「亀ノ倉遺跡」『柏崎市史資料集　考古篇２　考古資料（図・拓本・説明）』柏崎市史編さん委員会
坂井秀弥　1988「新潟県における中世考古学の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第１号　新潟考古学談話会
笹澤正史　2018「第Ⅶ章　まとめ　１丘江遺跡における土師質土器皿類の編年試案」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書ⅩⅥ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第276集）新潟県教育委員会・(公) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
品田高志　1991「越後の中世土師器―編年的研究の現状と課題―」『新潟考古学談話会会報』第８号
品田高志　1993 a「馬場・天神腰遺跡の中世集落について」『新潟県考古学会第５回発表会発表要旨』新潟県考古学会
品田高志　1993 b「馬場・天神腰遺跡」『木簡研究』第15号　木簡学会
品田高志　1996 a「田塚山の中世仏堂と墳墓」『田塚山遺跡群』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集）柏崎市教育委員会
品田高志　1996 b「越後国佐橋荘と音無瀬遺跡」『柏崎市の遺跡Ⅴ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第22集）柏崎市教育委員会
品田高志　1997「馬場・天神腰遺跡」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史』北陸中世土器研究会
品田高志　1999 a「中世越後の民衆と他界観」『中世の越後と佐渡―遺跡と文書が語る中世的世界―』高志書院
品田高志　1999 b「角田遺跡出土中世土師器の時期と変遷」『角　田』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集）柏崎市教育委員会
品田高志　1999 c「中世土師器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編　高志書院
品田高志　1999 d「越後における中世後期の土師器皿―京都系土師器第２波の流入と展開―」『中世土器の基礎研究』ⅩⅣ　日本中世土器研究会
品田高志　2003 a「越後国佐橋荘における地域間往還路の復元―下川原遺跡の意義と課題―」『下川原』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第42集）柏崎市教育委員会
品田高志　2003 b「馬場・天神腰遺跡」『中世城館から城下町へ』（第16回北陸中世考古学研究会資料集）北陸中世考古学研究会

品田高志　2004「越後国佐橋荘の中世古道と町並み―新潟県柏崎市馬場・天神腰遺跡の中世集落」『中世のみちを探る』高志書院
品田高志　2008 a「南条遺跡群の変遷と展開」『柏崎市の遺跡ⅩⅦ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第54集）柏崎市教育委員会
品田高志　2008 b「馬場・天神腰遺跡」『北陸中世のみち』（第21回北陸中世考古学研究会資料集）北陸中世考古学研究会
品田高志　2012「音無瀬遺跡からみた地域史と課題―調査のまとめにかえて―」『音無瀬Ⅰ』（柏崎市埋蔵文化財調査報告書第68集）柏崎市教育委員会
品田高志　2019「古代三嶋郡と鉄生産―分置・独立の背景を求めて―」『柏崎市立博物館館報』第33号
品田高志　2020「古代北陸道と三嶋郡の駅家―柏崎平野の古代地域史理解に向けて―」『柏崎市立博物館館報』第34号
白根市教育委員会　1984『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』
田村　裕　1987「鎌倉殿と御家人」『新潟県史　通史編２　中世』 新潟県
鶴巻康志　1993「馬場・天神腰遺跡」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』（第6回北陸中世土器研究会資料集）北陸中世土器研究会
鶴巻康志　2003「土師器からみた中世の小地域圏―新潟県北部阿賀北地方を中心に―」『シンポジウム中世土器研究の今日的課題―土器編年と中世史研究―』第22回 日本中世土器研究会
土橋由里子　2011「第Ⅶ章まとめ　２中世　Ｂ中世集落の変遷」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅩⅩⅣ（古渡路遺跡）』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第221集）新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟県教育委員会　1973「西蒲原郡黒埼町釈迦堂遺跡調査報告」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』（埋蔵文化財調査報告書第１）
新潟県教育委員会　1976 a「燕市長所遺跡発掘調査報告」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』（埋蔵文化財調査報告書第６）
新潟県教育委員会　1976 b「南蒲原郡中之島村杉之森遺跡発掘調査報告」『北陸高速自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』（埋蔵文化財調査報告書第８）
新潟県教育委員会　1987「三島郡出雲崎町番場遺跡」『国道116号埋蔵文化財発掘調査報告書』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集）
新潟県教育委員会･(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2003「下沖北遺跡Ⅰ」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第125集）
新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2005「東原町遺跡」「下沖北遺跡Ⅱ」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集）
新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2011「古渡路遺跡」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅩⅩⅣ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第221集）
新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2012「山崎遺跡」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅵ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第241集）
新潟県教育委員会･(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2015「箕輪遺跡Ⅱ」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅸ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第254集）
新潟県教育委員会･(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2018 a「山崎遺跡Ⅱ」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書ⅩⅥ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第265集）
新潟県教育委員会･(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2018 b「丘江遺跡Ⅲ」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書ⅩⅣ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第274集）
新潟県教育委員会･(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2018 c「丘江遺跡Ⅰ」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書ⅩⅤ』

（新潟県埋蔵文化財調査報告書第275集）
新潟県教育委員会･(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2018ｄ「丘江遺跡Ⅱ」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書ＸⅥ』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第276集）
新潟県教育委員会・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2019「丘江遺跡Ⅳ　第５次調査」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書17』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第283集）
新潟県教育委員会・(公財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団　2020「丘江遺跡Ⅴ　第７次調査」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書18』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第288集）
西山町教育委員会　2001『井ノ町遺跡発掘調査報告書』（西山町文化財調査報告書第６集）
西山町教育委員会　2003『宮ノ前遺跡発掘調査報告書』（西山町文化財調査報告書第７集）
荻野正博　1983「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』第16号　新潟史学会
荻野正博　1986「荘園と国衙領」『新潟県史（通史編１　原始・古代)』 新潟県
服部実喜　1984「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」『神奈川考古』第19号　神奈川考古同人会
服部実喜　1985「中世鎌倉における陶磁器構成の時代的変遷」『貿易陶磁研究』№５　日本貿易陶磁研究会
服部実喜　1992「南武蔵・相模における中世の食器様相（１）―中世初頭の様相―」『神奈川考古』第28号　神奈川考古同人会
服部実喜　1994「南武蔵・相模における中世の食器様相（２）―中世前期の様相―」『神奈川考古』第30号　同上
服部実喜　1995「南武蔵・相模における中世の食器様相（３）―中世後期の様相Ⅰ―」『神奈川考古』第31号　同上
福井県教育庁埋蔵文化財センター　2016『越前焼総合調査事業報告』（福井県教育庁埋蔵文化財センター所報６）
藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』 高志書院
馬淵和雄　2003「中世史学としての土器研究―モノ・空間認識・文化伝搬―」『シンポジウム中世土器研究の今日的課題―土器編年と中世史研究―』日本中世土器研究会
水澤幸一　2005「越後の中世土器」『新潟考古』第16号　新潟県考古学会
村山教二　1990「中世における柏崎地域」『柏崎市史（上巻)』柏崎市史編さん委員会編　柏崎市
森田　勉　1982「14 ～ 16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』２　貿易陶磁研究会
山田邦明　1987「守護と国人」『新潟県史　通史編２　中世』新潟県
山崎忠良　2003「第Ⅶ章まとめ　２土器・陶磁器について」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ（下沖北遺跡Ⅰ)』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第125集）新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
山崎忠良　2005「第Ⅲ章　東原町遺跡　６まとめ　Ｂ遺跡の変遷」『柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ（東原町遺跡)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集）新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
山本信夫　2000『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』（太宰府市の文化財第49集）太宰府市教育委員会
山本信夫　2010「貿易陶磁の分類・編年の現状と課題」『貿易陶磁研究』30　貿易陶磁研究会
吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
吉岡康暢　2003「珠洲焼概論」『珠洲焼概論』平成15年度埋蔵文化財専門職員実務研修資料集①新潟県教育庁文化行政課
吉川町教育委員会　1990『樋田遺跡　第二次発掘調査概報』
米沢　康　1976「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』第28巻第５号　信濃史学会
米沢　康　1980「大宝2年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第32巻第６号　信濃史学会
和島村教育委員会　1994『八幡林遺跡』（和島村埋蔵文化財調査報告書第３集）
和島村教育委員会　2003『下ノ西遺跡Ⅳ』（和島村埋蔵文化財調査報告書第14集）
和島村教育委員会　2005『八幡山遺跡Ⅳ』（和島村埋蔵文化財調査報告書第16集）

附表 1　馬場・天神腰遺跡　遺構属性表

地区名	遺構番号	種別	グリッド	平面形	規模		cm	深度 m		遺物	時期	備考
					長径	短径	深度	上端	底面			
A地区	A:1	溝	—	—	—	—	47	22.47	22.00	1～52	Ⅲ・Ⅳ	
										鉄:1・5・6・7・26・27　石:1		
	A:2	溝	—	—	—	—	36	22.57	22.21	53～77	Ⅲ	
										鉄:29　石:2・3		
	3	溝	—	—	—	—	24	22.51	22.27			
	4	溝	C-4-11	—	—	—	34	22.48	22.14			
	5	土坑	C-4-17	楕円形	74	53	18	22.50	22.32			
	6	溝	C-4-18	—	154	37	24	22.45	22.21			
	7	ピット	C-4-18	円形	38	38	20	22.47	22.27			
	8	ピット	C-4-19	円形	31	26	15	22.45	22.30			8・9一体
	9	欠										8・9一体
	10	凹み	C-4-25	不定形	346	—	17	22.45	22.28			
	11	凹み	C-4-23	隅丸長方形	245	191	34	22.37	22.03			
	12	ピット	C-4-24	楕円形	32	25	25	22.45	22.20			
	13	撹乱	C-4-25	楕円形	—	20	—	22.45	—			
	14	土坑	D-4-5	円形	90	83	21	22.48	22.27			
	15	ピット	D-4-5	円形	(52)	—	14	22.47	22.33			
	16	土坑	D-4-5	楕円形	47	37	22	22.51	22.29	86	Ⅲ	テラス:22.35
	17	撹乱	C-4-20	隅丸長方形	(141)	100	18	22.37	22.19			
	18	撹乱	C-4-20	楕円形	94	(68)	17	22.37	22.20			
	19	撹乱	C-4-25	楕円形	107	54	20	22.29	22.09			
	20	欠										
	21	撹乱	C-4-20	楕円形	61	30	21	22.31	22.10			
	22	撹乱	C-4-20	不整楕円形	104	65	24	22.44	22.20			
	23	撹乱	C-5-16	楕円形	74	58	—	—	—			
	24	撹乱	C-5-16	円形	32	29	—	—	—			
	25	凹み	C-5-16	円形	30	27	—	—	—			未実測
	26	撹乱	C-5-16	楕円形	58	40	—	—	—			
	27	撹乱	C-5-21	円形	50	43	—	—	—			
	28	撹乱	C-5-21	円形	36	32	—	—	—			
	29	撹乱	C-5-21	円形	40	37	—	—	—			
	30	撹乱	D-5-1	楕円形	50	40	14	22.43	22.29			
	31	撹乱	C-4-9	不定形	—	105	29	22.43	22.14			
	32	土坑	C-4-10	楕円形	—	38	19	22.43	22.24			
	33	欠										
	34	ピット	C-4-10	円形	35	32	21	22.41	22.20			
	35	ピット	C-4-10	円形	31	25	16	22.41	22.25			
	36	ピット	C-4-10	楕円形	—	30	23	22.48	22.25			
	37	撹乱	C-5-11	不定形	—	67	—	—	—			
	38	撹乱	C-5-11	円形	(56)	(50)	—	—	—			
	39	撹乱	C-5-11	円形	(28)	(28)	—	—	—			
	40	撹乱	C-5-11	不定形	110	51	—	—	—			
	41	撹乱	C-5-11	楕円形	53	46	—	—	—			
	42	撹乱	C-5-16	楕円形	39	36	—	—	—			
	43	撹乱	C-5-16	不定形	—	—	—	—	—			
	44	欠										
	45	撹乱	D-5～6	—	—	—	—	—	—	78・79	現代	
	46	撹乱	C-5-22	隅丸方形	132	99	—	—	—			
	47	撹乱	D-5-2	楕円形	75	58	10	22.44	22.34			
	48	撹乱	C-5-23	楕円形	—	45	—	—	—			
	49	撹乱	D-5-3	円形	42	38	8	22.39	22.31			
	50	土坑墓	C-6-24	隅丸長方形	86	58	33	22.62	22.29	83～85	Ⅳ	
	51	撹乱	D-5-3	不定形	—	35	14	22.42	22.28			
	52	撹乱	D-5-3	円形	37	33	17	22.44	22.27			
	53	撹乱	D-5-3	不定形	—	35	25	22.44	22.19			
	54	撹乱	D-5-3	円形	55	53	14	22.46	22.32			
	55	撹乱	D-5-3	円形	46	44	10	22.46	22.36			
	56	撹乱	D-5-3	円形	37	33	9	22.38	22.29			
	57	撹乱	D-5-3	円形	37	37	18	22.37	22.19			
	58	撹乱	D-5-3	円形	25	23	8	22.41	22.33			
	59	撹乱	C-5-23	楕円形	37	32	—	—	—			
	60	撹乱	C-5-24	楕円形	35	27	—	—	—			
	61	欠										
	62	欠										
	63	撹乱	C-5-24	不定形	53	50	—	—	—			
	64	撹乱	C-5-24	円形	32	27	—	—	—			
	65	欠										
	66	撹乱	C-5-24	楕円形	39	32	—	—	—			
	67	撹乱	C-5-24	円形	25	22	—	—	—			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
A地区	68	撹乱	C-5-24	円形	27	25	—	—	—			
	69	撹乱	C-5-24	円形	38	35	—	—	—			
	70	撹乱	C-5-25	円形	20	20	—	—	—			
	71	撹乱	C-5-25	円形	22	15	—	—	—			
	72	撹乱	C-5-25	楕円形	48	26	—	—	—			
	73	撹乱	C-5-25	円形	38	35	—	—	—			
	74	撹乱	C-5-25	円形	24	21	—	—	—			
	75	撹乱	C-5-25	楕円形	23	16	—	—	—			
	76	撹乱	C-5-25	円形	23	21	—	—	—			
	77	撹乱	C-5-25	円形	53	49	—	—	—			
	78	ピット	C-6-21	楕円形	37	31	—	22.26	—			
	79	撹乱	C-5-15	楕円形	71	56	—	—	—			
	80	撹乱	C-5-15	楕円形	50	35	—	—	—			
	81	撹乱	C-5-15	楕円形	46	36	—	—	—			
	82	撹乱	C-5-15	楕円形	37	—	—	—	—			
	83	撹乱	C-5-15	円形	27	21	—	—	—			
	84	撹乱	C-5-20	不定形	164	104	—	—	—			
	85	撹乱	C-6-16	隅丸長方形	240	125	—	—	—			
	86	ピット	C-6-21	円形	21	20	—	22.24	—			
	87	撹乱	D-6-1	楕円形	30	25	—	—	—			
	88	撹乱	D-6-1	円形	50	50	—	—	—			
	89	撹乱	D-6-2	円形	34	32	—	—	—			
	90	凹み	D-6-2	円形	32	30	—	—	—			未実測
	91	凹み	C-6-22	円形	28	24	—	—	—			未実測
	92	凹み	D-6-3	円形	28	25	—	—	—			未実測
	93	凹み	C-6-23	円形	26	22	—	—	—			未実測
	94	撹乱	C-6-22	楕円形	—	35	—	—	—			
	95	撹乱	C-6-23	楕円形	259	32	—	—	—			
	96	撹乱	C-6-18	不定形	—	28	—	—	—			
	97	柱穴	C-6-18	円形	28	27	50	22.61	22.11			SB-5
	98	ピット	C-6-23	円形	—	55	24	22.62	22.38			
	99	柱穴	C-6-23	円形	20	19	15	22.65	22.50			SA-6
	100	ピット	C-6-18	不整円形	36	30	29	22.63	22.34			
	101	柱穴	C-6-24	円形	35	31	47	22.66	22.19			SB-5
	102	ピット	C-6-19	楕円形	22	18	11	22.65	22.54			
	103	ピット	C-6-19	円形	25	22	10	22.59	22.49			
	104	ピット	C-6-24	円形	21	21	16	22.64	22.48			
	105	ピット	C-6-24	円形	32	31	19	22.64	22.45			
	106	ピット	C-6-24	不定形	40	34	19	22.64	22.45			
	107a	ピット	C-6-24	—	—	—	—	—	—			
	107b	ピット	C-6-24	楕円形	33	26	24	22.62	22.38			
	108	ピット	C-6-24	楕円形	31	25	16	22.64	22.48			
	109	柱穴	C-6-24	楕円形	20	17	12	22.64	22.52			SA-10
	110	柱穴	C-6-24	楕円形	22	19	4	22.55	22.51			SA-6
	111	柱穴	C-6-25	楕円形	45	39	29	22.62	22.33	80	Ⅲ	SB-4
	112	ピット	C-6-25	楕円形	31	26	27	22.61	22.34			
	113	柱穴	C-6-20	楕円形	45	35	26	22.66	22.40			SB-4
	114	柱穴	C-6-25	楕円形	22	15	57	22.63	22.06			SB-5
	115	柱穴	C-6-25	楕円形	25	20	19	22.63	22.44			SA-10
	116	ピット	C-6-25	楕円形	31	23	22	22.63	22.41			
	117	井戸	C-6-25	楕円形	142	113	226	22.63	20.37	土師器	Ⅲa	
										木:1～7		
	118	ピット	C-6-25	楕円形	54	(23)	18	22.63	22.45			
	119	柱穴	C-6-20	円形	31	29	40	22.63	22.23			SB-5
	120	ピット	C-7-16	円形	38	38	32	22.63	22.31			
	121	欠										
	122	欠										
	123	井戸	D-7-1	楕円形	103	94	237	22.65	20.28	81・82	Ⅲ	
										鉄:4　木:8～13		
	124	ピット	D-6-5	円形	18	16	—	—	—			
	125	ピット	D-6-5	円形	21	21	—	—	—			
	126	ピット	D-6-5	円形	20	19	—	—	—			
	127	柱穴	D-6-5	円形	21	20	—	—	—			SA-6
	128	ピット	D-6-9	楕円形	—	44	16	22.63	22.47			
	129	柱穴	D-7-1	円形	20	20	21	22.61	22.40			SA-10
	130	柱穴	C-7-22	円形	21	19	22	22.61	22.39			SB-4
	131	欠										
	132	柱穴	C-7-21	円形	28	27	32	22.65	22.33			SB-3
	133	柱穴	C-7-22	楕円形	48	40	25	22.65	22.40			SB-4
	134	ピット	C-7-22	楕円形	(18)	30	20	22.66	22.46			
	135	ピット	C-7-22	楕円形	50	41	13	22.67	22.54			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
A地区	136	ピット	C-7-17	円形	25	24	24	22.70	22.46			
	137	ピット	C-7-17	楕円形	27	24	23	22.70	22.47			
	138	柱穴	C-7-22	円形	30	30	16	22.63	22.47			SB-3
	139	ピット	C-7-23	円形	23	23	21	22.65	22.44			
	140	柱穴	C-7-23	楕円形	33	26	33	22.65	22.32			SB-1
	141	ピット	C-7-23	円形	28	25	14	22.65	22.51			
	142	ピット	C-7-23	楕円形	25	20	11	22.65	22.54			
	143	柱穴	C-7-23	円形	28	26	27	22.67	22.40			SB-2
	144	ピット	C-7-18	円形	—	63	11	22.67	22.56			
	145	井戸	C-7-18	楕円形	114	92	273	22.71	19.98	90	Ⅲ	
	146	井戸	C-7-23	楕円形	100	88	213	22.67	20.54	87～89	Ⅲa	
										鉄:28		
	147	柱穴	C-7-23	円形	37	32	23	22.63	22.40			SB-2
	148	欠										
	149	欠										
	150	欠										
	151	欠										
	152a	柱穴	D-7-4	楕円形	43	37	48	22.64	22.16			SB-3
	152b	ピット	D-7-4	楕円形	41	32	46	22.64	22.18			
	153	土坑	C-7-24	不定形	86	76	21	22.65	22.44			
	154a	ピット	C-7-24	楕円形	29	21	35	22.64	22.29			
	154b	ピット	C-7-24	楕円形	30	14	30	22.64	22.34			
	155	欠										
	156	欠										
	157	欠										
	158	ピット	C-7-24	円形	18	18	8	22.64	22.56			
	159	柱穴	C-7-25	楕円形	39	27	31	22.67	22.36			SB-2
	160	ピット	C-7-25	楕円形	47	35	38	22.66	22.28			
	161	柱穴	C-7-25	円形	29	28	55	22.69	22.14			SA-10
	162	ピット	C-7-25	円形	24	24	20	22.69	22.49			
	163	柱穴	C-7-25	円形	30	28	32	22.70	22.38			SB-1
	164	ピット	D-6-9	楕円形	59	39	19	22.67	22.48			
	165	土坑	D-6-14	楕円形	—	61	13	22.64	22.51			
	166	柱穴	D-7-3	円形	32	28	40	22.55	22.15			SB-1
	167	ピット	D-7-8	円形	16	15	21	22.45	22.24			
	168	柱穴	D-7-8	円形	23	23	24	22.43	22.19			SA-8
	169	ピット	D-7-8	楕円形	22	19	33	22.45	22.12			
	170	ピット	D-7-8	円形	29	26	19	22.45	22.26			
	171	柱穴	D-7-4	円形	25	24	7	22.63	22.56			SA-10
	172	ピット	D-7-13	円形	21	20	18	22.56	22.38			
	173	柱穴	D-7-13	円形	21	21	22	22.55	22.33			SA-8
	174	ピット	D-7-13	円形	32	30	34	22.53	22.19			
	175	柱穴	D-7-10	楕円形	25	23	22	22.60	22.38			SA-7
	176	ピット	D-7-10	円形	19	18	19	22.60	22.41			
	177	欠										
	178	ピット	D-7-10	円形	21	19	22	22.60	22.38			
	179	ピット	D-7-10	円形	18	18	13	22.61	22.48			
	180	ピット	D-7-15	円形	24	21	22	22.60	22.38			
	181	柱穴	D-7-15	楕円形	25	20	15	22.59	22.44			SA-7
	182	ピット	D-7-15	円形	20	18	14	22.59	22.45			
	183	土坑	D-7-19	楕円形	63	43	29	22.61	22.32			
	184	撹乱	D-7-19	円形	28	—	—	—	—			
	185	撹乱	D-7-18	円形	38	34	14	22.53	22.39			
	186	撹乱	D-7-18	円形	43	40	—	—	—			
	187	撹乱	D-7-18	円形	(35)	33	—	—	—			
	188	撹乱	D-7-18	円形	48	(35)	—	—	—			
	189	ピット	D-7-13	円形	30	28	9	22.53	22.44			
	190	柱穴	D-7-18	円形	33	(18)	—	—				SA-8
	191	撹乱	D-7-18	円形	21	(17)	—	—	—			
	192	凹み	D-7-18	円形	19	18	—	—	—			未実測
	193	土坑	D-7-20	楕円形	72	42	15	22.61	22.46			
	194	撹乱	D-7-20	円形	22	21	—	—	—			
	195	欠										
	196	土坑	D-8-11	楕円形	109	67	56	22.59	22.03			
	197	土坑	D-8-11	円形	73	66	24	22.61	22.37			
	198	ピット	D-8-6	円形	37	36	18	22.62	22.44			
	199	凹み	D-8-6	円形	27	24	—	—	—			未実測
	200	溝	—	—	—	165	24	22.60	22.36	土師器	Ⅲa	
	201	凹み	D-8-6	—	30	28	—	—	—			未実測
	202	ピット	D-8-1	円形	33	27	28	22.65	22.37			
	203	ピット	D-8-1	楕円形	40	34	56	22.65	22.09			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
A地区	204	ピット	D-8-16	円形	43	43	30	22.57	22.27	土師器	—	
	205	溝	D-8-18	—	185	35	12	22.57	22.45			
	206	井戸	E-8-3	不整円形	118	111	208	22.60	20.52			
	207	凹み	E-8-4	—	—	—	—	—	—			道路面の一部
	208	撹乱	D-7-21	円形	25	—	—	—	—			
	209	撹乱	D-7-21	方形	—	27	—	—	—			
	210	凹み	D-7-21	円形	28	28	—	—	—			未実測
	211	撹乱	D-7-21	楕円形	46	26	—	—	—			
	212	撹乱	D-6-25	楕円形	37	28	—	—	—			
	213	撹乱	D-7-21	円形	32	—	—	—	—			
	214	撹乱	D-6-25	円形	34	—	—	—	—			
	215	凹み	D-6-17	円形	33	30	—	—	—			未実測
	216	土坑	D-8-11	楕円形	113	80	49	22.61	22.12			
	217	欠										
	218	欠										
	219	欠										
	220	ピット	C-4-19	楕円形	44	31	17	22.45	22.28			
	221	ピット	C-4-19	円形	25	24	14	22.45	22.31			
	222	ピット	D-4-4	円形	29	27	23	22.48	22.25			
	223	ピット	C-6-25	不定形	16	(10)	8	22.63	22.55			
	224	柱穴	C-6-25	楕円形	30	26	24	22.63	22.39			SB-4
	225	柱穴	C-6-25	楕円形	20	12	19	22.63	22.44			SA-10
	226	ピット	D-6-13	不整円形	—	51	25	22.69	22.44			
	227	ピット	C-7-23	円形	19	18	21	22.64	22.43			
	228	ピット	C-7-24	楕円形	28	22	20	22.65	22.45			
	229	ピット	C-7-24	円形	26	24	18	22.65	22.47			
	230	ピット	C-7-25	円形	28	28	11	22.69	22.58			
	231	柱穴	D-7-3	円形	22	21	—	—	—			SA-10
	232	ピット	D-7-3	円形	26	24	25	22.46	22.21			
	233	ピット	D-7-4	円形	28	26	13	22.36	22.23			
	234	柱穴	D-7-5	円形	27	27	65	22.65	22.00			SA-10
	235	柱穴	D-7-5	楕円形	34	24	40	22.66	22.26			SB-1
	236	ピット	D-7-5	円形	24	22	49	22.66	22.17			
	237	撹乱	D-7-5	円形	21	18	—	22.36	—			
	238	土坑	D-5-20	楕円形	94	64	33	22.61	22.28			
	239a	ピット	D-8-6	円形	30	23	21	22.61	22.40			
	239b	ピット	D-8-11	楕円形	—	34	24	22.61	22.37			
	240	ピット	D-8-11	円形	29	24	56	22.59	22.03			
	241	ピット	D-8-16	円形	29	24	47	22.61	22.14			
	242	ピット	D-8-7	不整円形	—	—	56	22.63	22.07			
	243	井戸	E-8-3	円形	—	75	173	22.60	20.87			テラス:21.30
	244	柱穴	C-6-24	円形	30	18	—	22.62	—			テラス:21.30 SA-10
B地区	B:1	溝	—	—	—	65	63	22.55	21.92	111～152	Ⅲ・Ⅳ	
	B:2	溝	—	—	—	97	46	22.55	22.09	153～163	Ⅲ	
										鉄:8・31 石:4		
	1100	溝	—	—	—	140	37	22.52	22.15	214・215・珠洲	Ⅲa	
										石:5・6		
	1101	井戸	D-9-4	円形	87	78	210	22.50	20.40	219・青磁	Ⅲ	テラス:21.03
										木:14～19		
	1102	土坑	D-10-22	楕円形	120	81	21	22.61	22.40	土師器・白磁	—	
	1103	溝	—	—	753	81	14	21.55	21.41			
	1104	道	—	—	—	98	—	21.55	—	164～213	Ⅲ・Ⅳ	
	1105	柱穴	D-11-8	楕円形	23	18	22	22.40	22.18			SA-50
	1106	ピット	E-12-2	円形	58	56	21	22.57	22.36			
	1107	ピット	E-12-2	楕円形	50	35	44	22.57	22.13			
	1108	ピット	E-12-3	円形	31	30	34	22.55	22.21			
	1109	欠										
	1110	欠										
	1111a	ピット	E-12-3	楕円形	—	36	16	22.54	22.38			
	1111b	ピット	E-12-3	楕円形	33	22	24	22.55	22.31			
	1112	凹み	D-12-15	円形	23	20	—	—	—			
	1113	井戸	D-12-24	円形	101	98	123	22.56	21.33	縄文土器	—	
	1114	ピット	D-12-24	円形	24	23	36	22.54	22.18			
	1115	溝	D-12-23	隅丸長方形	130	48	19	22.56	22.37			
	1116	溝	D-12-23	隅丸長方形	155	40	17	22.51	22.34			
	1117	ピット	D-12-13	円形	34	—	37	22.36	21.99			
	1118	ピット	D-12-14	円形	35	31	22	22.42	22.20			
	1119	欠										
	1120	ピット	D-12-15	円形	20	19	28	22.44	22.16			
	1121	ピット	D-12-15	円形	26	24	13	22.44	22.31			
	1122	ピット	D-12-15	円形	19	18	14	22.45	22.31			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1123	凹み	D-12-20	円形	21	19	—	—	—			未実測
	1124	ピット	D-12-20	円形	23	22	28	22.52	22.24			
	1125	凹み	D-12-20	円形	23	18	—	—	—			未実測
	1126	井戸	D-12-20	円形	120	112	225	22.50	20.25	216 木:29・30	Ⅲ	
	1127	柱穴	D-13-21	円形	44	41	11	22.50	22.39			テラス:22.30 SB-21
	1128	柱穴	E-12-5	円形	50	42	40	22.53	22.13			SB-21
	1129	井戸	E-12-5	円形	101	100	152	22.57	21.05	228～231・土師器 鉄:10 石:10	Ⅴ？	
	1130	ピット	D-13-16	円形	35	33	49	22.48	21.99			
	1131	凹み	D-13-21	円形	19	18	—	—	—			未実測
	1132	凹み	D-13-21	円形	22	20	—	—	—			未実測
	1133	井戸	D-13-21	円形	80	69	202	22.52	20.50			
	1134	井戸	D-13-21	円形	123	110	216	22.51	20.35			
	1135	ピット	D-13-21	楕円形	27	19	16	22.49	22.33			
	1136	ピット	D-13-21	円形	27	27	27	22.48	22.21			
	1137	柱穴	D-13-21	円形	33	31	16	22.45	22.29			
	1138	ピット	D-13-16	円形	33	28	33	22.48	22.15			
	1139	ピット	D-13-16	円形	26	24	27	22.48	22.21			
	1140	ピット	D-13-22	円形	29	28	15	22.48	22.33			
	1141	ピット	D-13-17	円形	37	35	23	22.46	22.23			
	1142	柱穴	D-13-17	円形	29	26	33	22.44	22.11			SB-22
	1143	柱穴	D-13-17	円形	22	21	—	—	—			未実測 SB-21
	1144	柱穴	D-13-17	楕円形	17	11	—	—	—			未実測 SB-23
	1145	ピット	D-13-11	楕円形	23	19	15	22.43	22.28			
	1146	井戸	D-13-17	円形	95	87	210	22.44	20.34	石:7 木:22～28		
	1147	ピット	D-13-12	円形	30	28	33	22.47	22.14			
	1148	ピット	D-13-13	円形	43	—	24	22.44	22.20			
	1149	柱穴	D-13-13	円形	49	44	21	22.48	22.27			SB-26
	1150	柱穴	D-13-13	円形	38	38	23	22.45	22.22			
	1151	柱穴	D-13-12	円形	41	37	48	22.45	21.97			SB-25
	1152	ピット	D-13-13	円形	46	23	17	22.45	22.28			
	1153	井戸	D-13-18	円形	78	75	152	22.43	20.91			
	1154	ピット	D-13-18	円形	40	—	14	22.43	22.29			
	1155	ピット	D-13-18	円形	37	—	45	22.43	21.98			
	1156a	柱穴	D-13-18	円形	22	18	5	22.42	22.37			
	1156b	ピット	D-13-18	円形	36	35	19	22.43	22.24			
	1157a	ピット	D-13-18	円形	23	—	16	22.43	22.27			
	1157b	ピット	D-13-18	楕円形	30	—	22	22.42	22.20			テラス:22.31
	1158a	柱穴	D-13-18	円形	29	26	26	22.43	22.17			SB-23
	1158b	柱穴	D-13-18	円形	41	—	31	22.43	22.12			SB-22
	1159	ピット	D-13-22	楕円形	27	22	22	22.45	22.23			
	1160	柱穴	D-13-22	円形	24	25	18	22.46	22.28			
	1161	井戸	D-13-22	円形	61	60	99	22.49	21.50			
	1162	ピット	D-13-23	円形	31	27	19	22.45	22.26			
	1163	柱穴	D-13-23	円形	36	36	38	22.47	22.09			SB-24
	1164	ピット	D-13-23	楕円形	38	27	30	22.46	22.16			
	1165	ピット	D-13-23	楕円形	—	52	22	22.43	22.21			テラス:22.36
	1166	柱穴	D-13-23	円形	30	28	18	22.48	22.30			SB-23
	1167	ピット	D-13-24	円形	28	24	29	22.46	22.17			
	1168	ピット	D-13-24	円形	27	27	14	22.45	22.31			
	1169	ピット	D-13-24	円形	23	21	8	22.43	22.35			
	1170	柱穴	D-13-24	円形	30	28	33	22.42	22.09			SB-23
	1171	柱穴	D-13-23	円形	40	39	26	22.42	22.16			SB-21
	1172	柱穴	D-13-18	円形	39	35	41	22.44	22.03			SB-24
	1173	ピット	D-13-19	円形	39	36	35	22.44	22.09			テラス:22.21
	1174	柱穴	D-13-14	円形	109	105	39	22.47	22.08			テラス:22.12 SB-25
	1175	柱穴	D-13-14	円形	37	34	32	22.46	22.14			
	1176	柱穴	D-13-14	円形	38	33	20	22.44	22.24			SB-26
	1177	欠										
	1178	ピット	D-13-19	円形	54	50	28	22.42	22.14			テラス:22.24
	1179	ピット	D-13-24	円形	24	21	45	22.40	21.95			
	1180	柱穴	D-13-24	円形	29	29	44	22.40	21.96			テラス:22.27 SB-24
	1181	ピット	D-13-24	円形	33	27	38	22.45	22.07			
	1182a	柱穴	D-13-24	円形	40	—	51	22.46	21.95			SB-21
	1182b	柱穴	D-13-24	円形	40	—	20	22.43	22.23			SB-22
	1182c	ピット	D-13-24	円形	29	26	19	22.41	22.22			
	1183	柱穴	D-13-25	円形	35	32	43	22.43	22.00			SB-24
	1184	柱穴	D-13-25	円形	26	25	13	22.42	22.29			SA-29
	1185	柱穴	D-13-25	円形	59	53	24	22.45	22.21			
	1186	ピット	D-13-25	円形	20	19	18	22.42	22.24			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1187	柱穴	D-13-20	円形	50	46	24	22.44	22.20			テラス:22.28 SB-25
	1188	ピット	D-13-20	円形	22	20	10	22.41	22.31			
	1189	ピット	D-13-20	円形	20	19	7	22.43	22.36			
	1190	柱穴	D-13-20	円形	53	53	24	22.46	22.22			テラス:22.27 SB-26
	1191	欠										1192と一体
	1192	柱穴	D-14-11	円形	51	49	57	22.48	21.91			1191と一体 テラス:22.03 SB-25
	1193	ピット	D-14-11	円形	57	45	33	22.44	22.11			
	1194	ピット	D-14-11	楕円形	45	28	2	22.44	22.42			
	1195	ピット	D-14-16	円形	21	18	12	22.47	22.35			テラス:22.38
	1196	ピット	D-14-12	円形	22	20	17	22.44	22.27			
	1197	ピット	D-14-12	円形	48	34	22	22.43	22.21			テラス:22.29
	1198	ピット	D-14-16	円形	39	36	11	22.44	22.33			
	1199	ピット	D-14-16	円形	37	30	23	22.46	22.23			テラス:22.28
	1200	柱穴	D-14-17	円形	25	25	28	22.43	22.15			SA-29
	1201	ピット	D-14-17	円形	—	38	17	22.43	22.26			
	1202	ピット	D-14-17	円形	29	27	14	22.44	22.30			
	1203	ピット	D-14-17	円形	31	31	12	22.45	22.33			
	1204	柱穴	D-14-17	円形	31	27	17	22.48	22.31			テラス:22.36 SA-29
	1205	ピット	D-14-17	楕円形	58	—	22	22.45	22.23			テラス:22.32
	1206	ピット	D-14-17	円形	31	30	18	22.46	22.28			テラス:22.32
	1207	ピット	D-14-21	円形	22	21	40	22.44	22.04			
	1208	ピット	D-14-21	円形	28	27	35	22.45	22.10			
	1209	ピット	D-14-21	円形	32	29	9	22.44	22.35			
	1210	ピット	D-14-21	円形	42	33	14	22.42	22.28			
	1211	ピット	D-14-21	円形	35	29	58	22.44	21.86			
	1212	ピット	D-14-21	円形	36	—	8	22.43	22.35			
	1213	ピット	D-14-21	円形	23	23	12	22.44	22.32			
	1214	柱穴	D-13-25	円形	24	23	25	22.45	22.20			SA-29
	1215	ピット	D-14-21	円形	26	24	20	22.45	22.25			
	1216	ピット	D-14-21	円形	27	26	26	22.46	22.20			
	1217	柱穴	D-14-21	円形	33	30	39	22.45	22.06			テラス:22.14 SA-29
	1218	溝	E-14-2	—	—	130	45	22.45	22.00	220～227	Ⅲ	
	1219	井戸	E-13-1	円形	86	85	221	22.54	20.33	217・土師器	Ⅲa	
	1220	柱穴	E-13-1	円形	45	42	37	22.57	22.20			SB-22
	1221	柱穴	E-13-1	円形	31	31	40	22.53	22.13			テラス:22.26 SB-23
	1222	柱穴	E-13-1	円形	28	27	26	22.54	22.28			SB-21
	1223	ピット	E-13-1	円形	24	22	23	22.54	22.31			
	1224	柱穴	E-13-1	円形	30	27	20	22.55	22.35			テラス:22.41 SB-23
	1225	ピット	E-13-1	円形	63	53	23	22.56	22.33			
	1226	ピット	E-13-2	円形	31	30	26	22.52	22.26			
	1227	ピット	E-13-1	円形	22	22	21	22.54	22.33			
	1228	柱穴	E-13-2	円形	21	21	6	22.52	22.46			
	1229	ピット	E-13-2	円形	21	21	13	22.52	22.39			
	1230	ピット	E-13-2	円形	48	43	42	22.51	22.09			
	1231	ピット	E-13-7	円形	21	20	7	22.53	22.46			
	1232	柱穴	E-13-7	円形	34	30	35	22.56	22.21			SB-22・23
	1233	ピット	E-13-7	円形	27	26	30	22.56	22.26			
	1234	ピット	E-13-12	円形	36	32	27	22.56	22.29			
	1235	ピット	E-13-12	円形	40	37	7	22.55	22.48			
	1236	柱穴	E-13-7	円形	29	24	37	22.51	22.14			SB-24
	1237	柱穴	E-13-8	円形	31	31	30	22.51	22.21			テラス:22.28 SB-23
	1238	ピット	E-13-8	円形	35	30	27	22.53	22.26			
	1239	ピット	E-13-8	円形	28	27	24	22.51	22.27			
	1240	ピット	E-13-8	円形	23	23	47	22.54	22.07			
	1241	柱穴	E-13-3	円形	28	27	17	22.52	22.35			SB-21
	1242	柱穴	E-13-3	円形	32	30	28	22.52	22.24			SB-23
	1243	ピット	E-13-3	円形	25	24	51	22.53	22.02			
	1244	柱穴	E-13-8	円形	20	20	11	22.53	22.42			
	1245	ピット	E-13-8	円形	28	27	13	22.51	22.38			
	1246	ピット	E-13-3	円形	20	19	23	22.49	22.26			テラス:22.32
	1247	柱穴	E-13-4	円形	28	27	27	22.49	22.22			SB-21
	1248	ピット	E-13-5	円形	38	35	28	22.46	22.18			
	1249	土坑	E-13-5	楕円形	68	53	20	22.48	22.28			
	1250	ピット	E-13-5	円形	25	22	17	22.47	22.30			
	1251	柱穴	E-13-4	円形	28	28	30	22.48	22.18			SB-24
	1252	ピット	E-13-5	円形	48	47	35	22.48	22.13			
	1253	ピット	E-13-5	円形	28	25	24	22.51	22.27			
	1254	柱穴	E-13-8	円形	36	33	25	22.53	22.28			SB-22
	1255	欠										
	1256	井戸	E-13-9	円形	101	84	225	22.53	20.28	232～235	Ⅲ・Ⅳ	
	1257	柱穴	E-13-14	円形	31	24	13	22.53	22.40			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1258	柱穴	E-13-9	円形	25	21	—	22.54	—			SB-21
	1259	土坑	E-13-9	楕円形	81	33	12	22.54	22.42			
	1260	ピット	E-13-4	円形	31	30	24	22.51	22.27			
	1261	土坑	E-13-9	楕円形	83	35	24	22.52	22.28			
	1262	ピット	E-13-9	円形	36	34	16	22.52	22.36			
	1263	溝	E-13-9	—	479	44	9	22.50	22.41			
	1264	土坑	E-13-14	円形	104	95	27	22.59	22.32			
	1265	土坑	E-13-10	楕円形	80	45	14	22.54	22.40			
	1266	欠										
	1267	ピット	E-13-10	円形	19	17	—	22.52	—			
	1268	ピット	E-13-9	円形	36	34	12	22.52	22.40			
	1269	ピット	E-13-15	円形	46	39	29	22.52	22.23			
	1270	ピット	E-13-15	円形	25	25	24	22.55	22.31			
	1271	柱穴	E-13-15	円形	41	39	29	22.55	22.26			SB-22
	1272	ピット	E-13-15	円形	31	29	17	22.56	22.39			
	1273	柱穴	E-13-10	円形	31	31	16	22.52	22.36			SA-29
	1274	ピット	E-13-10	円形	42	38	16	22.52	22.36			
	1275	柱穴	E-13-15	円形	39	32	33	22.59	22.26			1277と一体 SA-29
	1276	撹乱	E-13-15	円形	27	27	—	—	—			
	1277	欠										1275と一体
	1278	ピット	E-13-14	円形	42	38	36	22.58	22.22			テラス:22.32
	1279	欠										
	1280	ピット	E-13-15	楕円形	—	38	15	22.58	22.43			
	1281	ピット	E-13-20	円形	41	38	31	22.58	22.27			
	1282	ピット	E-14-6	円形	47	45	20	22.51	22.31			
	1283	柱穴	E-14-1	円形	28	27	27	22.49	22.22			テラス:22.34 SA-29
	1284a	土坑	E-14-2	楕円形	—	56	19	22.44	22.25			
	1284b	ピット	E-14-2	円形	26	22	30	22.46	22.16			
	1285	欠										
	1286	溝	—	—	—	168	—	20.98	—	245～279	Ⅲ	
										鉄:9・30・34 石:8・9		
	1287a	井戸	D-14-18	円形	107	98	190	22.41	20.51	236・237・土師器	Ⅲ	
	1287b	ピット	D-14-18	楕円形	—	43	32	22.43	22.11			
	1288	井戸	D-14-14	不整円形	105	89	181	22.29	20.48	240・241	Ⅲ	
										木:20・21		
	1289	井戸	D-14-24	円形	95	94	242	22.47	20.05			
	1290	井戸	E-14-4	円形	96	95	129	22.52	21.23			
	1291a	井戸	E-14-15	円形	96	88	209	22.60	20.51	土師器	Ⅲ？	
										石:12		
	1291b	土坑	E-14-15	楕円形	112	80	22	22.58	22.36			
	1292	井戸	E-14-20	円形	105	93	175	22.62	20.87	239	Ⅲ	
										木:38～41		
	1293	井戸	D-15-16	円形	84	75	189	22.41	20.52	木:31～34		
	1294	凹み	D-15-12	楕円形	111	68	20	22.39	22.19			テラス:22.33
	1295	凹み	D-15-17	不定形	—	100	13	22.41	22.28			
	1296	凹み	D-15-16	楕円形	95	75	16	22.42	22.26			
	1297	欠										
	1298	井戸	D-15-22	円形	114	110	224	22.47	20.23			
	1299	井戸	E-15-2	円形	121	120	198	22.53	20.55	木:42・43		
	1300	井戸	E-15-11	円形	115	101	180	22.58	20.78	242・243	Ⅲ	
	1301	井戸	E-15-12	楕円形	99	77	226	22.58	20.32	244・砥石	Ⅲ	
	1302	溝	—	—	—	114	34	22.51	22.17	280～286・土師器・珠洲	Ⅲb	
										鉄:12		
	1303	井戸	D-15-14	円形	86	80	98	22.46	21.48			
	1304a	井戸	D-15-14	楕円形	124	104	85	22.45	21.60			
	1304b	柱穴	D-15-14	円形	35	—	69	22.44	21.75			
	1305	井戸	D-15-25	円形	208	176	210	22.43	20.33	287～289	Ⅲ	
										鉄:32		
	1306a	井戸	E-15-15	円形	114	90	207	22.59	20.52	218	Ⅲb	
										木:35～37		
	1306b	土坑	E-15-15	楕円形	113	—	32	22.61	22.29			
	1307a	井戸	D-16-21	円形	87	78	107	22.46	21.39			
	1307b	柱穴	D-16-21	楕円形	—	35	67	22.43	21.76			SB-38
	1308a	井戸	D-16-22	円形	141	121	195	22.45	20.50	290～296	Ⅲb	
	1308b	柱穴	E-16-3	楕円形	—	44	60	22.44	21.84			SB-38
	1308c	柱穴	D-16-22	円形	43	—	—	22.45	—			SB-38
	1309	土坑	D-16-13	円形	—	181	84	22.45	21.61			
	1310	井戸	D-16-18	円形	83	78	77	22.45	21.68			
	1311a	井戸	D-16-19	円形	100	85	199	22.44	20.45			
	1311b	ピット	D-16-20	円形	—	32	29	22.42	22.13			
	1312	井戸	E-16-5	円形	123	111	123	22.48	21.25	302	Ⅲa	

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1313	井戸	E-16-9	円形	83	81	73	22.50	21.77			
	1314a	井戸	E-16-15	円形	127	117	193	22.52	20.59	303～315・土師器・珠洲	Ⅲ	
	1314b	ピット	E-16-15	円形	40	—	56	22.51	21.95			
	1315a	土坑	E-17-1	楕円形	189	136	45	22.52	22.07	316	近世	テラス:22.26
	1315b	柱穴	E-17-1	円形	66	50	45	22.52	22.07			SB-47
	1316	溝	—	—	—	70	17	22.50	22.33	石:11		
	1317	凹み	E-17-4	隅丸長方形	202	106	12	22.52	22.40	321	Ⅲb	撹乱ヵ
	1318	土坑	E-17-9	楕円形	96	77	30	22.53	22.23			
	1319a	井戸	E-17-3	円形	96	96	122	22.54	21.32	322・土師器	Ⅲb	
	1319b	柱穴	E-17-13	円形	39	—	39	22.52	22.13			SB-47
	1319c	ピット	E-17-3	楕円形	21	16	22	22.53	22.31			
	1320a	土坑墓	E-17-13	円形	92	90	21	22.50	22.29	鉄:2・33		
	1320b	ピット	E-17-8	円形	28	28	23	22.50	22.27			
	1321	井戸	D-16-15	円形	80	76	89	22.49	21.60			
	1322	柱穴	E-17-10	円形	68	61	33	22.48	22.15			テラス:22.26 SB-49
	1323	柱穴	D-17-25	円形	44	44	42	22.46	22.04			SB-48
	1324	欠								297	Ⅲ	
	1325a	土坑	E-17-2	円形	89	83	44	22.51	22.07			
	1325b	ピット	E-17-2	楕円形	27	21	20	22.51	22.31			
	1326	柱穴	E-15-10	円形	40	35	40	22.55	22.15	238	Ⅲ	テラス:22.24 SB-37
	1327	ピット	E-15-5	円形	23	22	60	22.48	21.88	縄文土器	—	テラス:22.31
	1328	ピット	E-15-8	円形	58	50	58	22.51	21.93	染付	—	
	1329	ピット	E-15-10	円形	24	21	39	22.50	22.11			
	1330	ピット	D-17-15	円形	41	37	47	22.44	21.97	323	Ⅲb	
	1331	柱穴	D-17-19	円形	38	32	32	22.48	22.16	324	Ⅲb	SB-44
	1332	溝	—	—	—	63	31	22.47	22.16	317・土師器	Ⅲa	
	1333	溝	—	—	—	57	18	22.51	22.33	土師器・青磁・瀬戸美濃	—	
	1334	ピット	E-16-8	楕円形	32	26	34	22.50	22.16	325	Ⅲ	
	1335	凹み	E-16-19	楕円形	137	—	38	22.50	22.12	298・土師器	Ⅲ	
	1336	ピット	E-17-8	円形	41	40	28	22.54	22.26	土師器	Ⅲb	
	1337	ピット	E-16-8	円形	41	—	28	22.48	22.20	327	Ⅰb	
	1338a	ピット	D-14-24	円形	31	25	23	22.41	22.18	土師器(ロクロ)	Ⅳ	
	1338b	ピット	D-17-15	円形	40	40	21	22.47	22.26	301	Ⅲ	
	1339a	ピット	D-17-20	円形	—	59	9	22.48	22.39			
	1339b	柱穴	D-17-20	円形	35	27	60	22.48	21.88	土師器	Ⅲb	テラス:22.16 SB-45
	1339c	ピット	D-17-20	円形	46	—	10	22.42	22.32			
	1340	柱穴	D-17-20	円形	65	58	50	22.42	21.92	土師器	Ⅲb	SB-49
	1341a	柱穴	D-17-25	楕円形	41	31	51	22.44	21.93	土師器	Ⅲ	テラス:22.17 SB-49
	1341b	柱穴	D-17-25	楕円形	—	32	22	22.42	22.20			
	1342a	柱穴	D-17-25	円形	44	35	31	22.42	22.11			
	1342b	柱穴	D-17-25	円形	39	31	23	22.42	22.19	土師器	Ⅲ?	SB-46
	1342c	柱穴	D-18-21	円形	39	—	66	22.43	21.77			テラス:22.29 SB-48
	1343	柱穴	E-17-4	円形	46	41	47	22.48	22.01	土師器	Ⅲb	テラス:22.10
	1344a	柱穴	E-17-4	円形	41	—	47	22.52	22.05			テラス:22.16
	1344b	柱穴	E-17-4	円形	41	40	33	22.50	22.17	土師器	Ⅲb	
	1345a	土坑	E-17-4	円形	84	78	62	22.51	21.89	318	Ⅲ	テラス:22.22
	1345b	ピット	E-17-4	楕円形	35	26	27	22.50	22.23			
	1346a	ピット	E-17-15	円形	39	35	34	22.44	22.10			テラス:22.16
	1346b	ピット	E-17-15	円形	48	42	21	22.44	22.23			
	1347	柱穴	E-16-19	円形	40	37	28	22.51	22.23	土師器	Ⅲb	
	1348	柱穴	E-16-13	楕円形	41	32	40	22.48	22.08	青磁	Ⅲ	SB-41
	1349a	ピット	E-16-13	円形	—	53	32	22.49	22.17	320	Ⅲ	
	1349b	ピット	E-16-13	楕円形	44	27	38	22.50	22.12			テラス:22.26
	1350	柱穴	E-16-18	円形	42	37	23	22.51	22.28	土師器	Ⅲb	テラス:22.38 SB-40
	1351	柱穴	E-16-20	楕円形	40	32	30	22.50	22.20	土師器	Ⅲb	
	1352	柱穴	E-16-19	円形	33	30	47	22.52	22.05	陶器	—	テラス:22.31 SB-41
	1353a	柱穴	E-16-2	円形	39	—	36	22.45	22.09			テラス:22.30 SB-39
	1353b	ピット	D-16-22	楕円形	31	25	27	22.46	22.19	青磁	Ⅲ	
	1353c	ピット	D-16-22	円形	31	30	13	22.47	22.34			
	1354	柱穴	E-16-2	楕円形	43	33	44	22.49	22.05			SB-40
	1355	柱穴	E-16-1	円形	41	38	64	22.51	21.87	縄文土器	?	テラス:22.16 SB-38
	1356	柱穴	D-17-19	円形	44	38	41	22.47	22.06	鉄:11		SB-43
	1357a	ピット	D-17-15	楕円形	75	—	36	22.46	22.10			テラス:22.27
	1357b	柱穴	D-17-15	楕円形	—	23	66	22.46	21.80	土師器	Ⅲb	SB-43
	1358	柱穴	E-16-20	不定形	100	—	18	22.50	22.32	土師器	Ⅲ?	テラス:22.37
	1359a	溝	—	—	402	39	19	22.62	22.43	319	Ⅲ	
	1359b	溝	—	—	—	51	18	22.57	22.39			
	1360	柱穴	E-14-9	円形	29	21	31	22.55	22.24			
	1361	柱穴	E-14-19	円形	51	49	40	22.61	22.21			テラス:22.51
	1362	柱穴	D-14-23	円形	31	28	27	22.43	22.16	326	Ⅲa	
	1363	柱穴	D-16-19	円形	46	41	16	22.45	22.29	珠洲	Ⅲ	

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1364	欠								青白磁	—	
	1365	ピット	D-15-21	不整円形	41	41	69	22.47	21.78			テラス:22.00
	1366	柱穴	E-14-18	円形	25	24	31	22.63	22.32	白磁	—	
	1367a	土坑	D-16-20	楕円形	82	67	43	22.46	22.03			
	1367b	ピット	D-16-20	円形	40	—	36	22.45	22.09			
	1367c	ピット	D-16-19	円形	33	—	30	22.45	22.15			
	1368	井戸	E-16-16	円形	88	74	86	22.60	21.74			
	1369	土坑	E-16-11	楕円形	—	152	28	22.57	22.29			
	1370	土坑	E-14-17	楕円形	317	—	18	22.62	22.44			
	1371	ピット	E-16-15	楕円形	41	35	70	22.60	21.90	土師器	Ⅲ	テラス:22.10
	1372	ピット	D-10-11	円形	36	—	17	22.47	22.30			
	1373	土坑	D-10-11	楕円形	114	43	53	22.51	21.98			
	1374	土坑	D-10-16	不定形	97	76	57	22.59	22.02			
	1375	ピット	E-10-7	円形	37	37	10	22.66	22.56			
	1376	土坑	E-10-14	楕円形	—	53	13	22.60	22.47			
	1377	柱穴	D-11-13	円形	28	25	20	22.40	22.20			SA-50
	1378	柱穴	D-11-14	円形	29	29	21	22.44	22.23			SA-50
	1379	ピット	E-12-1	円形	45	41	13	22.47	22.34			
	1380	ピット	E-12-2	楕円形	60	43	28	22.56	22.28			
	1381	ピット	E-12-9	円形	17	16	16	22.52	22.36			
	1382	柱穴	E-12-9	円形	23	22	18	22.51	22.33			SA-27
	1383	柱穴	E-12-10	楕円形	40	32	34	22.57	22.23			SA-27
	1384	柱穴	D-13-18	円形	51	48	34	22.43	22.09			SB-25
	1385	柱穴	E-13-3	円形	22	22	25	22.49	22.24			SB-21
	1386	ピット	E-13-4	円形	23	23	23	22.49	22.26			
	1387	ピット	E-13-4	円形	20	20	47	22.50	22.03			
	1388	ピット	E-13-4	円形	21	21	12	22.46	22.34			
	1389	柱穴	E-13-10	円形	25	25	19	22.51	22.32			SB-22
	1390a	ピット	E-13-4	楕円形	33	27	43	22.47	22.04			
	1390b	ピット	E-13-5	円形	32	—	22	22.47	22.25			
	1391	ピット	E-13-11	楕円形	27	27	34	22.56	22.22			
	1392a	ピット	E-13-11	楕円形	29	22	44	22.56	22.12			
	1392b	ピット	E-13-11	円形	37	—	32	22.56	22.24			
	1393a	柱穴	E-13-11	円形	33	30	28	22.56	22.28			SA-27
	1393b	ピット	E-13-11	円形	30	—	18	22.56	22.38			
	1394	柱穴	E-13-12	円形	38	37	26	22.56	22.30			SA-27
	1395	柱穴	E-13-12	円形	22	21	20	22.55	22.35			SB-24
	1396	柱穴	E-13-13	円形	25	24	42	22.55	22.13			SB-24
	1397	柱穴	E-13-18	円形	28	23	30	22.58	22.28			SA-28
	1398	柱穴	E-13-19	円形	30	24	28	22.58	22.30			SA-28
	1399	柱穴	E-13-19	円形	37	34	24	22.56	22.32			
	1400	ピット	E-13-15	円形	30	27	13	22.59	22.46			
	1401	柱穴	E-13-15	円形	39	38	41	22.58	22.17			SA-29
	1402	ピット	E-13-15	楕円形	26	20	19	22.58	22.39			
	1403a	ピット	E-13-15	楕円形	30	—	28	22.56	22.28			
	1403b	ピット	E-13-15	楕円形	32	27	42	22.57	22.15			テラス:22.21
	1404	柱穴	D-13-16	円形	21	20	—	22.42	—			SB-21
	1405	柱穴	D-13-25	円形	23	20	—	22.44	—			SB-22
	1406	柱穴	D-14-14	円形	24	22	23	22.32	22.09			SA-32
	1407	ピット	D-14-15	円形	36	33	21	22.34	22.13			
	1408	ピット	D-14-15	円形	22	21	10	22.34	22.24			
	1409	ピット	D-14-15	円形	23	23	25	22.34	22.09			
	1410	ピット	D-14-15	円形	20	20	10	22.33	22.23			
	1411	柱穴	D-14-15	円形	25	24	27	22.37	22.10			SA-32
	1412	柱穴	D-14-20	円形	25	23	8	22.38	22.30			SB-34
	1413a	ピット	D-14-20	円形	21	21	20	22.37	22.17			
	1413b	ピット	D-14-20	円形	24	24	38	22.35	21.97			
	1414	ピット	D-14-23	楕円形	37	24	30	22.40	22.10			
	1415	柱穴	D-14-23	円形	36	35	10	22.44	22.34			SB-30
	1416	ピット	D-14-23	円形	25	24	21	22.46	22.25			
	1417	ピット	D-14-19	円形	36	36	70	22.48	21.78			
	1418	ピット	D-14-24	円形	19	19	8	22.43	22.35			
	1419	ピット	D-14-24	円形	40	—	21	22.42	22.21			
	1420	ピット	D-14-24	円形	20	19	16	22.44	22.28			
	1421	ピット	D-14-24	円形	21	19	18	22.44	22.26			
	1422	ピット	D-14-24	円形	28	23	13	22.41	22.28			
	1423	ピット	D-14-24	円形	21	20	21	22.44	22.23			
	1424	柱穴	D-14-25	円形	42	41	24	22.46	22.22			SB-34
	1425	ピット	D-14-25	円形	34	34	36	22.42	22.06			
	1426	ピット	D-14-25	円形	40	37	31	22.45	22.14			
	1427	ピット	D-14-25	円形	23	20	8	22.47	22.39			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1428	ピット	E-14-5	円形	39	31	23	22.49	22.26			
	1429	ピット	D-15-21	円形	39	35	25	22.44	22.19			
	1430	ピット	E-14-5	楕円形	34	26	37	22.45	22.08			
	1431	柱穴	E-14-5	円形	48	40	47	22.48	22.01			SB-34
	1432	ピット	E-14-5	円形	31	30	22	22.47	22.25			
	1433	ピット	E-14-5	円形	32	30	27	22.48	22.21			テラス:22.28
	1434	柱穴	E-14-5	円形	35	31	30	22.49	22.19			テラス:22.35 SB-35
	1435a	ピット	E-14-5	円形	55	51	25	22.52	22.27			
	1435b	ピット	E-14-5	円形	35	30	36	22.49	22.13			
	1436	ピット	E-14-5	円形	26	26	23	22.52	22.29			
	1437	柱穴	E-14-5	円形	51	46	38	22.54	22.16			SB-30
	1438	柱穴	E-14-4	円形	30	29	30	22.54	22.24			SA-31
	1439	柱穴	E-14-4	円形	45	44	8	22.50	22.42			SB-30
	1440	柱穴	E-14-3	円形	33	30	17	22.50	22.33			SA-31
	1441	ピット	E-14-3	円形	32	32	14	22.50	22.36			
	1442	ピット	E-14-2	円形	27	26	42	22.46	22.04			
	1443	柱穴	E-14-2	円形	44	41	16	22.50	22.34			SB-30
	1444	凹み	D-13-25	円形	19	19	—	22.44	—			
	1445	ピット	E-14-1	円形	24	23	22	22.46	22.24			
	1446	凹み	E-14-1	円形	20	20	—	22.45	—			
	1447	土坑	E-14-1	不整円形	63	—	36	22.47	22.11			
	1448	ピット	E-14-6	円形	28	26	24	22.51	22.27			
	1449	ピット	E-14-11	円形	37	35	15	22.56	22.41			
	1450	ピット	E-14-12	円形	31	31	42	22.57	22.15			
	1451	ピット	E-14-7	円形	32	28	35	22.56	22.21			
	1452	柱穴	E-14-7	円形	35	33	22	22.56	22.34			SB-30
	1453	柱穴	E-14-8	円形	43	40	32	22.56	22.24			テラス:22.34 SA-31
	1454	柱穴	E-14-8	円形	42	40	16	22.53	22.37			テラス:22.43 SA-31
	1455	柱穴	E-14-13	円形	49	37	20	22.59	22.39			SB-30
	1456a	ピット	E-14-9	円形	32	—	33	22.51	22.18			1456bとの新旧不明
	1456b	ピット	E-14-9	円形	38	38	37	22.53	22.16			1456aとの新旧不明
	1457	ピット	E-14-9	円形	25	25	18	22.56	22.38			
	1458	ピット	E-14-9	円形	23	19	15	22.59	22.44			
	1459	ピット	E-14-9	円形	10	10	13	22.59	22.46			
	1460	土坑	E-14-10	円形	88	—	7	22.57	22.50			
	1461	柱穴	E-14-10	円形	51	50	26	22.57	22.31			SB-35
	1462	ピット	E-14-9	楕円形	36	24	28	22.55	22.27			
	1463	柱穴	E-14-9	楕円形	37	30	31	22.55	22.24			SB-30
	1464	ピット	E-14-10	円形	31	30	30	22.56	22.26			
	1465	ピット	E-14-14	円形	28	27	15	22.61	22.46			
	1466	柱穴	E-14-14	円形	31	25	29	22.61	22.32			SB-30
	1467	土坑	E-14-14	円形	66	61	15	22.60	22.45			
	1468	ピット	E-14-14	円形	19	17	22	22.60	22.38			
	1469	ピット	E-14-20	円形	42	—	24	22.61	22.37			
	1470	ピット	E-14-13	楕円形	35	23	30	22.60	22.30			
	1471	ピット	E-14-13	円形	26	25	9	22.61	22.52			
	1472	ピット	E-14-18	円形	27	26	27	22.61	22.34			
	1473	ピット	E-14-19	円形	23	—	13	22.60	22.47			
	1474	土坑	E-14-18	円形	—	—	5	22.61	22.56			
	1475	ピット	E-14-18	楕円形	—	33	33	22.60	22.27			
	1476	ピット	E-14-18	楕円形	—	42	15	22.62	22.47			
	1477	ピット	E-14-18	円形	16	14	37	22.60	22.23			
	1478	ピット	E-14-18	円形	20	18	24	22.60	22.36			
	1479	ピット	E-14-17	円形	19	19	25	22.60	22.35			
	1480	柱穴	E-14-17	円形	31	26	23	22.61	22.38			SA-31
	1481	ピット	E-14-17	円形	32	29	18	22.62	22.44			
	1482	柱穴	E-14-12	円形	28	28	42	22.61	22.19			SA-31
	1483	柱穴	E-14-12	円形	40	37	24	22.58	22.34			テラス:22.43 SA-31
	1484	ピット	E-14-12	円形	31	29	23	22.60	22.37			
	1485a	ピット	E-14-12	不整円形	36	32	26	22.59	22.33			
	1485b	ピット	E-14-17	円形	39	—	10	22.59	22.49			
	1486	ピット	E-14-17	円形	35	34	26	22.61	22.35			テラス:22.42
	1487	土坑	E-14-16	円形	57	55	32	22.61	22.29			テラス:22.44
	1488	ピット	E-14-17	円形	—	—	12	22.61	22.49			
	1489	ピット	E-14-16	楕円形	40	26	28	22.61	22.33			
	1490	ピット	E-14-16	楕円形	—	36	23	22.61	22.38			
	1491	土坑	E-14-16	楕円形	—	—	16	22.61	22.45			
	1492	ピット	E-14-16	円形	62	—	52	22.59	22.07			
	1493	ピット	E-14-16	円形	34	—	16	22.59	22.43			
	1494	ピット	E-14-16	円形	37	—	17	22.59	22.42			
	1495	溝	—	—	—	—	29	22.59	22.30			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1496	ピット	E-14-16	円形	23	23	30	22.60	22.30			
	1497	ピット	E-14-11	円形	23	22	39	22.60	22.21			
	1498	ピット	D-14-11	円形	21	18	12	22.50	22.38			
	1499	ピット	D-14-25	円形	18	18	40	22.42	22.02			
	1500	ピット	D-15-12	円形	42	40	15	22.40	22.25			
	1501	ピット	D-15-12	円形	41	36	27	22.39	22.12			
	1502	ピット	D-15-12	円形	41	35	58	22.41	21.83			
	1503	ピット	D-15-13	円形	49	—	38	22.43	22.05			
	1504	ピット	D-15-13	楕円形	48	—	74	22.43	21.69			
	1505	ピット	D-15-13	円形	55	—	—	22.42	—			
	1506	ピット	D-15-13	円形	33	32	52	22.45	21.93			
	1507	ピット	D-15-13	円形	29	29	60	22.46	21.86			
	1508	ピット	D-15-14	円形	14	14	16	22.43	22.27			テラス:22.30
	1509	ピット	D-15-14	円形	17	16	32	22.46	22.14			
	1510	ピット	D-15-14	円形	17	14	22	22.45	22.23			
	1511	ピット	D-15-20	楕円形	43	38	26	22.40	22.14			
	1512	ピット	D-15-20	円形	28	26	38	22.40	22.02			
	1513	ピット	D-15-19	円形	28	26	17	22.44	22.27			テラス:22.33
	1514	ピット	D-15-19	円形	39	35	84	22.48	21.64			
	1515	ピット	D-15-18	円形	31	29	59	22.47	21.88			
	1516	ピット	D-15-18	円形	32	29	75	22.46	21.71			
	1517	ピット	D-15-18	円形	32	30	15	22.45	22.30			
	1518	ピット	D-15-23	円形	30	27	29	22.45	22.16			
	1519	ピット	D-15-23	円形	35	33	42	22.46	22.04			
	1520	柱穴	D-15-24	円形	26	21	36	22.47	22.11			SA-32
	1521	ピット	D-15-24	円形	32	28	42	22.47	22.05			
	1522	ピット	D-15-24	円形	25	20	28	22.45	22.17			
	1523	柱穴	D-15-18	円形	37	31	51	22.44	21.93			SA-32
	1524	ピット	D-15-18	円形	42	34	55	22.45	21.90			
	1525	柱穴	D-15-18	円形	42	38	49	22.45	21.96			テラス:22.11 SB-33
	1526	ピット	D-15-18	円形	32	29	29	22.44	22.15			テラス:22.22
	1527	ピット	D-15-18	円形	30	26	25	22.43	22.18			
	1528	柱穴	D-15-17	円形	34	27	43	22.42	21.99			SA-32
	1529	ピット	D-15-17	円形	23	18	13	22.42	22.29			
	1530	ピット	D-15-18	円形	26	22	15	22.42	22.27			
	1531	ピット	D-15-18	円形	30	27	12	22.44	22.32			
	1532	ピット	D-15-17	円形	20	20	15	22.43	22.28			
	1533	ピット	D-15-17	円形	28	24	29	22.41	22.12			
	1534	柱穴	D-15-17	円形	34	28	27	22.41	22.14			SA-32
	1535	ピット	D-15-17	円形	30	27	34	22.40	22.06			
	1536	柱穴	D-15-17	円形	32	26	34	22.40	22.06			SB-33
	1537	ピット	D-15-16	円形	27	20	41	22.39	21.98			テラス:22.24
	1538	ピット	D-15-16	円形	28	24	35	22.39	22.04			
	1539	柱穴	D-15-16	円形	30	26	27	22.38	22.11			SA-32
	1540	ピット	D-15-16	円形	21	21	20	22.38	22.18			
	1541	ピット	D-15-16	円形	26	26	20	22.40	22.20			
	1542	柱穴	D-15-16	円形	34	31	35	22.39	22.04			SB-34
	1543	柱穴	D-15-21	不整円形	50	50	69	22.47	21.78			テラス:22.00 SB-35
	1544	柱穴	D-15-21	円形	37	32	24	22.40	22.16			SB-33
	1545	ピット	D-15-22	円形	17	15	46	22.42	21.96			
	1546	ピット	D-15-22	円形	23	22	31	22.43	22.12			
	1547	柱穴	D-15-22	円形	41	37	53	22.43	21.90			SB-34
	1548	柱穴	D-15-23	円形	31	26	30	22.43	22.13			SB-33
	1549	柱穴	D-15-23	円形	40	37	34	22.45	22.11			テラス:22.35 SB-33
	1550	ピット	E-15-3	円形	31	31	40	22.46	22.06			
	1551	ピット	D-15-23	楕円形	27	21	30	22.46	22.16			
	1552	ピット	D-15-24	円形	23	22	19	22.44	22.25			
	1553	ピット	D-15-24	円形	23	19	17	22.44	22.27			
	1554	ピット	D-15-25	楕円形	41	—	43	22.41	21.98			
	1555	ピット	D-16-21	楕円形	47	—	34	22.41	22.07			
	1556	ピット	E-15-5	円形	48	43	25	22.50	22.25			
	1557	ピット	E-15-5	円形	28	23	26	22.47	22.21			
	1558	ピット	E-15-5	円形	31	31	22	22.46	22.24			
	1559	ピット	E-15-4	楕円形	26	18	44	22.48	22.04			
	1560	ピット	E-15-4	楕円形	28	18	—	22.46	—			テラス:22.11
	1561	ピット	E-15-3	円形	25	23	12	22.47	22.35			
	1562	ピット	E-15-3	円形	25	22	26	22.49	22.23			
	1563	ピット	E-15-2	楕円形	25	16	20	22.46	22.26			
	1564	ピット	E-15-3	円形	31	25	29	22.48	22.19			
	1565	ピット	E-15-2	円形	26	21	34	22.47	22.13			
	1566	柱穴	E-15-2	円形	36	—	28	22.50	22.22			SB-35

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1567	ピット	E-15-2	楕円形	25	17	27	22.47	22.20			
	1568	ピット	E-15-2	楕円形	25	19	32	22.45	22.13			
	1569	柱穴	E-15-1	円形	62	52	36	22.48	22.12			テラス:22.21 SB-35
	1570	ピット	E-15-1	円形	29	28	30	22.47	22.17			テラス:22.22
	1571	柱穴	E-15-1	円形	30	25	37	22.49	22.12			テラス:22.22 SB-34
	1572	ピット	E-15-1	円形	31	29	14	22.49	22.35			
	1573	ピット	E-15-1	円形	24	20	15	22.54	22.39			テラス:22.42
	1574	ピット	D-14-5	円形	40	38	31	22.51	22.20			テラス:22.32
	1575	ピット	E-15-1	楕円形	54	29	35	22.55	22.20			テラス:22.33
	1576	ピット	E-15-6	円形	19	18	19	22.53	22.34			
	1577	ピット	E-15-6	楕円形	25	20	16	22.54	22.38			
	1578	柱穴	E-14-10	円形	29	26	37	22.57	22.20			SA-36
	1579	ピット	E-14-10	円形	21	19	22	22.56	22.34			
	1580	ピット	E-14-10	円形	24	21	25	22.56	22.31			
	1581	ピット	E-14-10	円形	32	28	24	22.58	22.34			テラス:22.38
	1582	柱穴	E-14-10	円形	25	22	9	22.58	22.49			SB-35
	1583	ピット	E-14-10	円形	31	28	19	22.58	22.39			
	1584	柱穴	E-14-10	円形	29	27	18	22.55	22.37			SA-36
	1585	ピット	E-15-6	円形	31	28	31	22.54	22.23			
	1586	柱穴	E-15-6	円形	32	28	21	22.55	22.34			SB-36
	1587a	ピット	E-15-7	円形	22	21	25	22.52	22.27			
	1587b	ピット	E-15-7	円形	25	—	11	22.53	22.42			
	1588	柱穴	E-15-7	円形	35	35	48	22.56	22.08			テラス:22.21 SB-35
	1589	ピット	E-15-7	円形	26	23	18	22.54	22.36			
	1590	ピット	E-15-7	楕円形	30	23	18	22.54	22.36			
	1591	ピット	E-15-8	円形	35	34	48	22.55	22.07			
	1592	ピット	E-15-8	楕円形	46	23	14	22.50	22.36			
	1593	ピット	E-15-9	楕円形	26	18	33	22.50	22.17			
	1594	ピット	E-15-9	円形	31	29	28	22.52	22.24			
	1595a	柱穴	E-15-9	楕円形	40	—	29	22.53	22.24			SB-37
	1595b	ピット	E-15-9	楕円形	35	—	25	22.52	22.27			
	1596a	ピット	E-15-9	円形	18	17	15	22.54	22.39			
	1596b	ピット	E-15-9	円形	16	14	17	22.54	22.37			
	1597a	ピット	E-15-10	円形	33	31	31	22.50	22.19			
	1597b	ピット	E-15-5	円形	20	—	15	22.49	22.34			
	1598	ピット	E-15-10	円形	22	19	25	22.51	22.26			
	1599	ピット	E-15-10	円形	22	20	29	22.53	22.24			
	1600	ピット	E-15-10	円形	24	20	28	22.53	22.25			
	1601	ピット	E-15-10	円形	16	14	18	22.53	22.35			
	1602	ピット	E-15-10	円形	31	29	38	22.53	22.15			
	1603	ピット	E-15-10	円形	45	40	27	22.56	22.29			テラス:22.40
	1604	ピット	E-15-15	円形	25	23	13	22.56	22.43			
	1605	ピット	E-15-15	円形	27	24	16	22.56	22.40			テラス:22.44
	1606	柱穴	E-15-15	円形	37	29	15	22.57	22.42			SB-37
	1607a	ピット	E-15-15	楕円形	48	—	42	22.58	22.16			テラス:22.32
	1607b	ピット	E-15-15	楕円形	39	24	33	22.56	22.23			
	1608	ピット	E-15-15	円形	36	30	28	22.57	22.29			
	1609a	ピット	E-15-14	楕円形	40	31	27	22.59	22.32			
	1609b	ピット	E-15-14	楕円形	41	30	33	22.58	22.25			
	1610	ピット	E-15-14	円形	28	26	38	22.57	22.19			
	1611	ピット	E-15-14	楕円形	47	—	24	22.57	22.33			
	1612	ピット	E-15-14	楕円形	25	18	24	22.57	22.33			
	1613	ピット	E-15-14	円形	—	29	9	22.55	22.46			
	1614	ピット	E-15-14	円形	19	—	10	22.55	22.45			
	1615	柱穴	E-15-14	不整円形	41	37	34	22.55	22.21			テラス:22.34 SB-37
	1616	柱穴	E-15-14	円形	31	30	39	22.58	22.19			SB-37
	1617	ピット	E-15-13	円形	20	18	47	22.55	22.08			
	1618	柱穴	E-15-13	円形	34	30	27	22.54	22.27			SA-36
	1619	溝	—	—	—	51	13	22.57	22.44			
	1620	溝	—	—	—	22	16	22.60	22.44			
	1621	柱穴	E-15-11	不整円形	53	45	40	22.56	22.16			SB-35
	1622	ピット	E-14-15	円形	34	33	45	22.60	22.15			
	1623	ピット	E-14-20	楕円形	39	—	16	22.59	22.43			
	1624	ピット	E-14-20	円形	26	25	19	22.59	22.40			
	1625	ピット	E-15-17	円形	36	33	62	22.56	21.94			テラス:22.14
	1626	ピット	E-15-18	円形	29	26	38	22.59	22.21			テラス:22.32
	1627	ピット	E-15-18	円形	25	21	41	22.57	22.16			テラス:22.29
	1628	ピット	E-15-18	円形	36	34	27	22.60	22.33			
	1629	ピット	E-15-19	楕円形	31	21	17	22.59	22.42			
	1630	ピット	E-15-19	円形	32	31	42	22.61	22.19			
	1631	ピット	E-15-19	円形	36	29	27	22.59	22.32			テラス:22.39

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1632	柱穴	E-15-19	円形	35	27	31	22.60	22.29			SB-37
	1633	ピット	E-15-20	円形	22	21	20	22.61	22.41			
	1634	ピット	E-15-20	円形	20	18	25	22.59	22.34			
	1635a	柱穴	E-15-20	円形	31	30	27	22.60	22.33			テラス:22.17 SB-37
	1635b	ピット	E-15-20	円形	42	37	47	22.59	22.12			
	1636	ピット	D-15-15	円形	25	22	14	22.40	22.26			
	1637	ピット	D-15-15	円形	37	35	23	22.40	22.17			
	1638	ピット	D-16-12	円形	28	—	14	22.41	22.27			
	1639	ピット	D-16-12	円形	21	20	28	22.43	22.15			テラス:22.20
	1640	ピット	D-16-12	円形	26	23	26	22.43	22.17			
	1641	柱穴	D-16-12	円形	37	34	61	22.45	21.84			テラス:21.90 SB-42
	1642	ピット	D-16-12	円形	24	21	8	22.44	22.36			
	1643	ピット	D-16-13	円形	16	16	20	22.43	22.23			
	1644	柱穴	D-16-14	円形	26	25	—	22.46	—			SB-42
	1645	ピット	D-16-14	円形	33	31	21	22.46	22.25			
	1646	ピット	D-16-14	円形	28	27	24	22.48	22.24			
	1647	ピット	D-17-11	楕円形	—	27	10	22.49	22.39			
	1648	ピット	D-17-11	円形	35	30	15	22.45	22.30			
	1649	ピット	D-16-20	円形	36	33	19	22.53	22.34			
	1650	柱穴	D-16-20	円形	37	33	18	22.51	22.33			SB-43
	1651	欠										重複の為
	1652a	柱穴	D-16-18	円形	48	46	50	22.43	21.93			SB-42
	1652b	ピット	D-16-18	円形	39	—	18	22.43	22.25			
	1653	柱穴	D-16-18	円形	29	27	17	22.43	22.26			SB-42
	1654	ピット	D-16-17	円形	25	22	6	22.46	22.40			
	1655a	ピット	D-16-16	楕円形	—	39	27	22.45	22.18			
	1655b	ピット	D-16-16	楕円形	37	25	21	22.45	22.24			
	1656	土坑	D-15-20	円形	84	66	26	22.42	22.16			テラス:22.25
	1657	ピット	D-15-20	円形	21	18	16	22.40	22.24			
	1658	ピット	D-16-16	円形	39	35	20	22.41	22.21			
	1659	ピット	D-16-16	円形	49	44	22	22.44	22.22			
	1660a	ピット	D-16-16	円形	24	22	31	22.45	22.14			
	1660b	ピット	D-16-16	円形	28	25	17	22.44	22.27			
	1661a	ピット	D-16-21	円形	31	31	17	22.46	22.29			
	1661b	ピット	E-16-1	楕円形	—	27	14	22.46	22.32			
	1662	柱穴	E-16-1	楕円形	39	30	25	22.46	22.21			SB-38
	1663	ピット	D-16-22	楕円形	30	22	7	22.42	22.35			
	1664	ピット	D-16-22	円形	25	21	9	22.42	22.33			
	1665	柱穴	D-16-22	円形	40	40	22	22.37	22.15			SB-39
	1666	ピット	D-16-22	円形	28	23	17	22.43	22.26			
	1667	ピット	D-16-22	円形	41	35	29	22.44	22.15			
	1668	ピット	D-16-22	円形	44	41	15	22.42	22.27			
	1669a	ピット	D-16-23	不整円形	35	32	23	22.44	22.21			テラス:22.27
	1669b	ピット	D-16-23	円形	37	—	20	22.45	22.25			
	1670	ピット	D-16-24	円形	41	40	33	22.44	22.11			テラス:22.24
	1671	ピット	D-16-24	円形	42	39	38	22.46	22.08			
	1672	ピット	E-16-5	円形	34	31	31	22.46	22.15			テラス:22.30
	1673a	柱穴	E-16-3	円形	47	47	47	22.44	21.97			テラス:22.08 SB-39
	1673b	ピット	E-16-3	不整円形	28	24	38	22.45	22.07			
	1674	ピット	E-16-3	円形	33	30	28	22.48	22.20			
	1675	柱穴	E-16-3	円形	35	30	24	22.48	22.24			SB-38
	1676	柱穴	E-16-2	楕円形	39	31	30	22.48	22.18			SB-40
	1677	ピット	E-16-2	楕円形	36	17	19	22.45	22.26			
	1678	ピット	E-16-2	円形	24	21	11	22.45	22.34			
	1679	ピット	E-16-2	円形	27	24	7	22.45	22.38			
	1680	ピット	E-16-2	円形	29	23	8	22.44	22.36			
	1681a	ピット	E-16-2	楕円形	—	46	17	22.48	22.31			
	1681b	ピット	E-16-2	楕円形	51	40	22	22.48	22.26			
	1682	ピット	E-16-2	円形	26	23	16	22.48	22.32			
	1683	柱穴	E-16-1	円形	42	36	23	22.50	22.27			SB-39
	1684a	ピット	E-16-6	円形	33	28	44	22.53	22.09			
	1684b	ピット	E-16-6	円形	—	38	17	22.52	22.35			
	1685	ピット	E-16-6	円形	38	35	42	22.53	22.11			テラス:22.22
	1686a	ピット	E-16-6	円形	46	39	22	22.53	22.31			テラス:22.36
	1686b	柱穴	E-16-6	楕円形	22	15	25	22.53	22.28			SB-39
	1687	ピット	E-16-6	円形	28	24	23	22.54	22.31			
	1688a	ピット	E-16-6	円形	29	26	37	22.52	22.15			
	1688b	柱穴	E-16-6	円形	44	39	48	22.52	22.04			テラス:22.18 SB-38
	1689	柱穴	E-16-7	円形	42	41	44	22.52	22.08			SB-40
	1690a	ピット	E-16-6	円形	31	—	47	22.51	22.04			
	1690b	ピット	E-16-6	円形	45	42	30	22.53	22.23			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1691	ピット	E-16-7	円形	23	21	26	22.51	22.25			
	1692	柱穴	E-16-7	楕円形	47	38	58	22.51	21.93			SB-38
	1693	ピット	E-16-8	不整円形	50	41	28	22.48	22.20			テラス:22.26
	1694	土坑	E-16-7	不整円形	78	66	46	22.49	22.03			
	1695	ピット	E-16-8	楕円形	34	24	—	22.51	—			
	1696	土坑	E-16-7	楕円形	—	70	39	22.48	22.09			
	1697	柱穴	E-16-12	円形	41	37	37	22.51	22.14			SB-39
	1698	ピット	E-16-9	円形	34	31	19	22.50	22.31			テラス:22.36
	1699	ピット	E-16-9	円形	40	37	28	22.51	22.23			
	1700	ピット	E-16-9	円形	38	35	34	22.49	22.15			
	1701～1743までC地区											
	1744	ピット	E-16-10	楕円形	20	15	50	22.50	22.00			
	1745	凹み	E-16-10	円形	23	19	—	—	—			
	1746	凹み	E-16-10	円形	25	—	—	—	—			
	1747	ピット	E-16-14	円形	31	30	24	22.53	22.29			
	1748	ピット	E-16-14	円形	33	28	29	22.54	22.25			
	1749	ピット	E-16-14	円形	35	29	37	22.52	22.15			
	1750	柱穴	E-16-14	円形	39	32	46	22.52	22.06			SB-39
	1751	ピット	E-16-14	円形	23	22	53	22.52	21.99			
	1752	ピット	E-16-14	円形	30	30	48	22.52	22.04			テラス:22.16
	1753	柱穴	E-16-14	円形	34	32	49	22.52	22.03			SB-40
	1754	ピット	E-16-13	楕円形	50	36	47	22.49	22.02			
	1755	柱穴	E-16-14	円形	44	40	54	22.51	21.97			SB-39
	1756	凹み	E-16-13	円形	34	31	—	—	—			
	1757a	ピット	E-16-12	円形	43	41	26	22.52	22.26			
	1757b	ピット	E-16-12	円形	33	—	12	22.52	22.40			
	1758a	ピット	E-16-11	円形	—	31	11	22.50	22.39			
	1758b	ピット	E-16-11	円形	37	33	35	22.55	22.20			
	1759	柱穴	E-16-11	円形	46	41	28	22.56	22.28			テラス:22.32 SB-37
	1760a	ピット	E-16-11	円形	37	36	16	22.57	22.41			
	1760b	ピット	E-16-11	円形	24	20	32	22.59	22.27			
	1761	柱穴	E-16-16	円形	41	34	47	22.54	22.07			SB-40
	1762	土坑	E-16-12	円形	68	68	24	22.51	22.27			
	1763	ピット	E-16-17	円形	36	35	39	22.54	22.15			
	1764a	ピット	E-16-17	楕円形	—	35	15	22.53	22.38			
	1764b	ピット	E-16-17	不整円形	29	22	28	22.54	22.26			
	1765a	土坑	E-16-17	円形	95	—	18	22.54	22.36			
	1765b	ピット	E-16-17	円形	32	32	39	22.49	22.10			
	1765c	ピット	E-16-17	円形	14	14	21	22.54	22.33			
	1765d	ピット	E-16-17	円形	9	9	20	22.54	22.34			
	1766	柱穴	E-16-17	円形	—	46	41	22.52	22.11			テラス:22.39 SB-41
	1767	柱穴	E-16-18	円形	41	37	51	22.49	21.98			SB-41
	1768	ピット	E-16-19	円形	58	56	18	22.50	22.32			
	1769	ピット	E-16-19	楕円形	64	40	36	22.52	22.16			テラス:22.33
	1770	ピット	E-16-20	楕円形	32	24	29	22.49	22.20			
	1771	ピット	E-16-20	円形	33	32	17	22.50	22.33			
	1772	ピット	E-16-20	円形	26	24	18	22.49	22.31			
	1773	ピット	E-16-20	円形	22	21	50	22.50	22.00			
	1774	ピット	E-16-20	円形	29	28	52	22.50	21.98			
	1775	溝	—	—	—	71	18	22.49	22.31			
	1776	柱穴	E-16-3	円形	34	30	47	22.47	22.00			SB-40
	1777	ピット	E-16-3	円形	31	25	45	22.49	22.04			
	1778	柱穴	E-16-8	円形	29	24	19	22.48	22.29			SB-41
	1779	欠										重複の為
	1780	ピット	D-17-11	円形	26	25	10	22.50	22.40			
	1781	ピット	D-17-12	円形	30	26	14	22.49	22.35			
	1782a	土坑	D-17-12	楕円形	75	—	14	22.44	22.30			
	1782b	柱穴	D-17-12	円形	39	—	24	22.44	22.20			SB-44
	1782c	ピット	D-17-12	円形	20	—	21	22.44	22.23			
	1783	ピット	D-17-12	円形	36	34	15	22.44	22.29			
	1784	ピット	D-17-12	不整円形	24	—	9	22.44	22.35			
	1785	ピット	D-17-12	円形	68	62	24	22.44	22.20			
	1786a	ピット	D-17-12	楕円形	59	32	22	22.47	22.25			
	1786b	柱穴	D-17-12	円形	26	24	43	22.47	22.04			SB-47
	1786c	ピット	D-17-12	円形	35	30	37	22.47	22.10			
	1787	ピット	D-17-13	円形	35	31	22	22.47	22.25			
	1788	ピット	D-17-14	円形	37	35	24	22.46	22.22			
	1789a	ピット	D-17-14	円形	30	30	19	22.46	22.27			
	1789b	ピット	D-17-14	円形	42	40	35	22.47	22.12			
	1790	ピット	D-17-15	円形	34	31	21	22.45	22.24			
	1791	柱穴	D-17-20	円形	43	36	36	22.42	22.06			SB-48

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1792	ピット	D-17-20	円形	25	24	20	22.44	22.24			
	1793	ピット	D-17-20	円形	26	25	26	22.44	22.18			
	1794	ピット	D-17-20	円形	37	34	59	22.44	21.85			
	1795a	柱穴	D-17-20	円形	—	52	38	22.41	22.03			SB-44
	1795b	ピット	D-17-20	不整円形	50	—	69	22.41	21.72			
	1796	柱穴	D-17-20	円形	54	46	41	22.44	22.03			テラス:22.08 SB-45
	1797	柱穴	D-17-19	円形	35	31	41	22.46	22.05			SB-46
	1798	ピット	D-17-19	円形	26	23	21	22.45	22.24			
	1799a	ピット	D-17-19	円形	49	44	24	22.47	22.23			テラス:22.34
	1799b	柱穴	D-17-19	円形	40	37	24	22.48	22.24			SB-47
	1800	ピット	D-17-19	円形	24	22	18	22.48	22.30			
	1801	柱穴	D-17-18	円形	41	39	20	22.51	22.31			SB-46
	1802	柱穴	D-17-18	円形	38	37	42	22.49	22.07			テラス:22.13 SB-44
	1803	柱穴	D-17-18	円形	39	39	30	22.49	22.19			SB-47
	1804a	ピット	D-17-18	円形	31	31	39	22.50	22.11			
	1804b	ピット	D-17-18	楕円形	—	35	12	22.48	22.36			
	1805	柱穴	D-17-18	円形	40	40	39	22.52	22.13			テラス:22.33 SB-47
	1806	ピット	D-17-17	円形	31	28	21	22.51	22.30			
	1807	柱穴	D-17-17	円形	32	29	50	22.51	22.01			SB-43
	1808	柱穴	D-17-17	楕円形	56	43	43	22.52	22.09			テラス:22.26 SB-47
	1809	ピット	D-17-17	楕円形	60	45	35	22.50	22.15			
	1810	ピット	D-17-17	円形	34	33	44	22.50	22.06			
	1811	ピット	D-17-17	円形	46	43	41	22.49	22.08			
	1812a	ピット	D-17-16	円形	30	29	24	22.50	22.26			
	1812b	ピット	D-17-16	円形	30	29	18	22.52	22.34			
	1813	柱穴	D-17-16	円形	42	40	28	22.49	22.21			SB-43
	1814a	柱穴	D-17-21	楕円形	—	46	19	22.36	22.17			テラス:22.22 SB-44
	1814b	ピット	D-17-21	円形	36	35	14	22.38	22.24			
	1815	ピット	D-17-21	円形	37	32	12	22.38	22.26			
	1816	ピット	D-17-21	円形	36	30	24	22.41	22.17			
	1817	柱穴	D-17-22	円形	29	27	30	22.43	22.13			SB-47
	1818	ピット	D-17-22	円形	31	31	12	22.52	22.40			
	1819	ピット	D-17-22	円形	31	30	38	22.51	22.13			テラス:22.36
	1820	柱穴	D-17-22	円形	44	44	28	22.52	22.24			テラス:22.36 SB-44
	1821a	ピット	D-17-22	円形	27	24	10	22.51	22.41			
	1821b	ピット	D-17-22	円形	18	18	7	22.52	22.45			
	1822	ピット	D-17-22	円形	25	23	15	22.51	22.36			
	1823	ピット	D-17-22	円形	23	22	11	22.52	22.41			
	1824	ピット	D-17-23	円形	32	32	7	22.52	22.45			
	1825	ピット	D-17-23	円形	39	37	28	22.50	22.22			テラス:22.27
	1826a	ピット	D-17-23	円形	42	41	44	22.52	22.08			
	1826b	ピット	D-17-23	楕円形	26	20	21	22.51	22.30			
	1827	柱穴	D-17-23	円形	46	41	25	22.52	22.27			SB-43
	1828a	ピット	D-17-23	円形	—	43	20	22.51	22.31			
	1828b	ピット	D-17-23	不整円形	—	58	19	22.51	22.32			
	1828c	ピット	D-17-23	楕円形	37	31	50	22.51	22.01			テラス:22.09
	1829a	ピット	D-17-23	円形	58	54	25	22.51	22.26			
	1829b	ピット	E-17-3	円形	36	36	6	22.51	22.45			
	1830	柱穴	D-17-19	円形	19	19	24	22.52	22.28			SB-47
	1831	ピット	D-17-24	円形	44	37	47	22.51	22.04			テラス:22.30
	1832	ピット	D-17-24	円形	32	31	52	22.51	21.99			
	1833	ピット	D-17-24	楕円形	—	30	42	22.51	22.09			
	1834	柱穴	D-17-24	楕円形	45	36	42	22.51	22.09			テラス:22.29 SB-47
	1835	ピット	D-17-23	円形	22	22	12	22.51	22.39			
	1836	ピット	D-17-23	円形	30	28	11	22.51	22.40			
	1837	ピット	D-17-23	不整円形	55	50	17	22.52	22.35			
	1838	ピット	D-17-23	不定形	72	64	11	22.52	22.41			
	1839	柱穴	D-17-23	楕円形	56	40	34	22.52	22.18			テラス:22.32 SB-44
	1840	柱穴	D-17-24	円形	35	32	22	22.49	22.27			SB-43
	1841	ピット	D-17-24	円形	29	26	13	22.48	22.35			
	1842a	ピット	D-17-24	円形	30	29	36	22.46	22.10			
	1842b	ピット	D-17-24	不整円形	23	—	21	22.46	22.25			
	1843	ピット	D-17-25	円形	35	28	16	22.45	22.29			
	1844	ピット	D-17-25	円形	31	28	—	—	—			
	1845a	柱穴	D-17-24	円形	41	35	24	22.48	22.24			SB-45
	1845b	ピット	D-17-25	楕円形	26	—	28	22.45	22.17			
	1846	ピット	D-17-25	円形	27	24	35	22.46	22.11			
	1847	ピット	D-17-25	円形	28	26	24	22.43	22.19			
	1848	ピット	D-17-25	円形	36	30	22	22.42	22.20			
	1849	柱穴	E-17-5	楕円形	28	21	36	22.44	22.08			SB-45
	1850	土坑	E-18-1	円形	69	61	60	22.56	21.96			テラス:22.21

地区名	遺構番号	種別	グリッド	平面形	規模		cm	深度 m		遺物	時期	備考
					長径	短径	深度	上端	底面			
B地区	1851	土坑	E-17-5	楕円形	74	60	32	22.44	22.12			テラス:22.25
	1852	ピット	E-17-5	円形	43	40	45	22.49	22.04			
	1853	ピット	E-17-5	円形	34	33	29	22.48	22.19			
	1854a	柱穴	E-17-5	楕円形	51	40	65	22.47	21.82			SB-49
	1854b	ピット	E-17-5	楕円形	—	47	30	22.47	22.17			
	1855	ピット	D-17-25	不整円形	59	51	34	22.44	22.10			テラス:22.20
	1856a	ピット	D-17-25	円形	—	60	29	22.46	22.17			
	1856b	ピット	D-17-25	円形	42	—	44	22.46	22.02			
	1856c	ピット	D-17-25	円形	26	25	47	22.46	21.99			
	1857	ピット	E-17-5	楕円形	—	56	61	22.49	21.88			テラス:22.06
	1858	ピット	E-17-5	円形	50	46	29	22.49	22.20			
	1859	ピット	E-17-5	円形	51	45	31	22.49	22.18			
	1860	ピット	E-17-4	円形	33	29	33	22.50	22.17			
	1861a	ピット	E-17-4	楕円形	49	37	48	22.50	22.02			
	1861b	柱穴	E-17-4	円形	—	54	27	22.51	22.24			テラス:22.30 SB-44
	1862	ピット	E-17-9	円形	49	46	30	22.50	22.20			
	1863a	柱穴	E-17-3	円形	29	25	26	22.46	22.20			SB-47
	1863b	ピット	E-17-3	円形	31	30	32	22.44	22.12			
	1864	ピット	E-17-3	円形	27	26	17	22.54	22.37			
	1865	ピット	E-17-3	円形	49	40	68	22.52	21.84			
	1866	ピット	E-17-2	円形	41	38	24	22.51	22.27			
	1867	ピット	E-17-2	円形	43	32	17	22.53	22.36			
	1868	柱穴	E-17-1	円形	43	41	42	22.48	22.06			SB-47
	1869	ピット	E-16-10	円形	26	26	43	22.53	22.10			
	1870	ピット	E-16-10	円形	24	21	24	22.52	22.28			
	1871	柱穴	E-17-6	円形	25	24	44	22.53	22.09			SB-47
	1872	ピット	E-17-6	円形	29	25	68	22.53	21.85			
	1873	ピット	E-17-6	楕円形	21	15	45	22.53	22.08			
	1874	ピット	E-17-6	円形	16	14	36	22.53	22.17			
	1875	ピット	E-17-6	円形	36	34	57	22.55	21.98			
	1876	ピット	E-17-6	円形	—	43	22	22.53	22.31			
	1877	ピット	E-17-6	楕円形	—	42	22	22.53	22.31			
	1878	柱穴	E-17-7	円形	41	39	32	22.53	22.21			SB-47
	1879	ピット	E-17-7	円形	30	27	35	22.52	22.17			
	1880	ピット	E-17-8	円形	34	31	38	22.51	22.13			
	1881	柱穴	E-17-8	円形	46	45	41	22.53	22.12			テラス:22.25 SB-47
	1882	柱穴	E-17-8	円形	43	42	22	22.52	22.30			SB-47
	1883	ピット	E-17-15	円形	35	35	35	22.49	22.14			
	1884	ピット	E-17-15	楕円形	32	25	12	22.46	22.34			
	1885	ピット	E-17-11	円形	45	43	24	22.52	22.28			
	1886	ピット	E-16-15	円形	40	32	35	22.52	22.17			
	1887	ピット	E-17-11	円形	49	45	38	22.54	22.16			
	1888	ピット	E-17-11	円形	47	40	25	22.54	22.29			
	1889	ピット	E-17-16	円形	33	32	68	22.55	21.87			
	1890	ピット	D-17-23	円形	42	38	16	22.52	22.36			
CⅠ地区	1701	井戸	D-18-9	円形	97	83	120	21.38	20.18	342・343・土師器	Ⅲa	
										木:47～49		
	1702	井戸	D-18-20	円形	89	77	48	21.05	20.57	344	Ⅲ	テラス:20.69
	1703	井戸	D-18-20	円形	98	87	111	21.05	19.94	341・土師器	Ⅲb	
										木:50～57		
	1704	ピット	D-18-20	円形	—	29	—	—	—	木:62		データなし
	1705	井戸	D-18-25	円形	61	54	44	21.01	20.57			
	1706	井戸	E-19-1	円形	100	83	77	21.08	20.31	349・350	Ⅳ	
										鉄:13・14		
	1707	欠										
	1708	井戸	E-19-6	円形	83	81	82	20.97	20.15			
	1709	井戸	D-19-16	円形	71	70	56	21.03	20.47			
	1710	ピット	D-19-16	円形	—	35	9	20.95	20.86			
	1711	井戸	D-19-13	円形	84	83	85	21.06	20.21	焼土(炉壁)　木:58～61	—	
	1712	井戸	D-19-17	円形	55	51	25	21.03	20.78	鉄:16		
	1713	井戸	D-19-22	円形	78	76	54	21.02	20.48			
	1714	井戸	D-19-14	円形	63	61	29	21.10	20.81			
	1715	井戸	E-19-4	楕円形	73	54	17	20.96	20.79			
	1716	井戸	E-20-1	円形	61	57	33	21.01	20.68			テラス:20.76
	1717	土坑	E-18-9	円形	61	57	16	21.71	21.55			
	1718	ピット	E-18-15	円形	37	33	17	21.67	21.50			テラス:21.55
	1719	ピット	E-19-11	円形	21	21	25	21.54	21.29			
	1720	井戸	D-18-20	隅丸方形	70	66	38	21.00	20.62	346～348・珠洲	Ⅲ～Ⅳ	
										石:13　木:45・46		
CⅡ地区	1721	井戸	E-21-7	円形	86	86	61	21.13	20.52			
	1722	土坑	E-21-12	円形	59	53	19	21.73	21.54			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
CⅡ地区	1723	ピット	E-21-12	円形	25	24	9	21.73	21.64			
	1724	欠										
	1725	土坑	E-22-13	円形	81	—	26	21.96	21.70	陶器・ガラス製品	現代	
	1726	溝	—	—	—	113	5	21.70	21.65	345	Ⅲa	
										木:44		
	1727	溝	—	—	—	34	6	21.87	21.81			
	1728	溝	—	—	—	84	12	21.99	21.87			
	1729	ピット	D-23-16	円形	25	24	14	21.98	21.84			
	1730	溝	—	—	—	49	25	22.05	21.80			
	1731	ピット	D-22-15	円形	39	34	33	22.10	21.77			テラス:21.94
	1732	柱穴	D-23-11	円形	30	27	29	22.06	21.77			SB-61
	1733	井戸	D-23-12	円形	126	110	160	22.14	20.54	瓦	現代？	
	1734	柱穴	D-23-6	楕円形	30	23	38	22.26	21.88			SB-61
	1735	柱穴	D-23-12	円形	28	27	29	22.16	21.87			SB-62
	1736	ピット	D-23-12	楕円形	—	32	27	22.18	21.91			
	1737	柱穴	D-23-12	円形	24	21	31	22.14	21.83			SB-62
	1738	ピット	D-23-12	円形	24	21	32	22.15	21.83			
	1739	ピット	D-23-13	円形	24	20	15	22.14	21.99			
	1740	柱穴	D-23-13	円形	30	29	19	22.13	21.94			SB-61
	1741	ピット	D-23-13	円形	33	30	28	22.10	21.82			
	1742	柱穴	D-23-13	円形	29	25	14	22.11	21.97			SB-62
	1743	ピット	D-23-13	円形	42	29	25	22.14	21.89			
DⅠ地区	2401	溝	—	—	—	257	54	22.19	21.65	364～384・土師器	Ⅰ～Ⅳ	
										鉄:20・35～37		
	2402	井戸	D-24-12	円形	90	75	217	22.15	19.98	木:75～131		
	2403	柱穴	D-24-16	円形	49	42	6	22.20	22.14			SA-74
	2404	ピット	D-24-17	円形	25	25	8	22.18	22.10			
	2405	柱穴	D-24-17	円形	43	39	11	22.19	22.08			SA-74
	2406	欠										
	2407	井戸	D-24-17	円形	115	111	153	22.19	20.66	鉄:38		
	2408	ピット	D-24-18	円形	24	21	9	22.18	22.09			
	2409	欠										
	2410	柱穴	D-24-13	円形	26	26	10	22.11	22.01			SA-74
	2411	柱穴	D-24-22	円形	43	41	28	22.18	21.90			SA-73
	2412	井戸	E-24-2	円形	84	78	136	22.19	20.83			
	2413	柱穴	D-24-18	円形	31	28	50	22.17	21.67			テラス:21.72 SA-74
	2414	柱穴	D-24-23	円形	39	35	20	22.20	22.00			SA-73
	2415	柱穴	D-24-18	円形	30	30	58	22.14	21.56			SA-73
	2416	柱穴	D-24-18	円形	28	25	21	22.13	21.92			SA-73
	2417	柱穴	D-24-13	円形	32	30	27	22.11	21.84			SA-73
	2418	柱穴	D-24-14	円形	39	39	48	22.10	21.62			SA-73
	2419	柱穴	D-24-14	円形	29	23	68	22.09	21.41			SA-73
	2420	柱穴	D-24-14	円形	35	33	37	22.10	21.73			テラス:21.80 SA-73
	2421	欠										
	2422	井戸	D-24-20	円形	99	97	184	21.94	20.10	土師器	Ⅲb	
										木:67～74		
	2423	土坑	D-24-20	円形	71	63	16	21.95	21.79			
	2424	井戸	D-24-20	円形	130	—	141	21.94	20.53	351	Ⅲb	テラス:20.67
										木:158～161・198		
	2425	柱穴	D-24-20	円形	31	29	43	21.95	21.52			SA-76
	2426	井戸	E-25-1	楕円形	120	94	152	22.08	20.56	352～355・瀬戸美濃	Ⅳ	
										木:168～171		
	2427	柱穴	D-25-21	円形	24	23	8	22.11	22.03			SB-82
	2428	井戸	D-25-21	円形	97	85	107	22.09	21.02			
	2429	ピット	D-25-16	円形	32	30	25	22.04	21.79			
	2430	柱穴	D-25-16	円形	33	31	25	22.04	21.79			SB-82
	2431	ピット	D-25-17	円形	21	20	8	22.06	21.98			
	2432	井戸	D-25-17	円形	144	133	198	22.08	20.10	356～358・土師器・珠洲	Ⅲ～Ⅳ	テラス:20.53
										木:132・133		
	2433a	井戸	D-25-17	楕円形	—	105	132	22.07	20.75	359・360・白磁	Ⅳ	テラス:21.02・20.82
	2433b	柱穴	D-25-17	円形	30	—	102	22.04	21.02			SA-78
	2434	欠										
	2435	井戸	D-25-13	円形	82	74	141	22.05	20.64	土師器	Ⅲ	
										木:144		
	2436	柱穴	D-25-13	円形	26	25	14	22.05	21.91			SA-77
	2437	柱穴	D-25-18	円形	26	20	15	22.02	21.87			SA-78
	2438	ピット	D-25-19	円形	30	29	7	22.04	21.97			
	2439	ピット	D-25-19	円形	31	29	15	22.04	21.89			
	2440	柱穴	D-25-19	円形	35	33	18	22.03	21.85			SA-77
	2441	柱穴	D-25-19	円形	33	32	25	22.05	21.80			SA-77
	2442	土坑	D-25-19	円形	107	95	28	22.07	21.79			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
ＤⅠ地区	2443	柱穴	D-25-18	円形	32	31	30	22.07	21.77			SB-81・82
	2444	柱穴	D-25-23	円形	39	34	24	22.01	21.77			SB-81・82
	2445	柱穴	D-25-24	円形	37	31	20	22.08	21.88			SB-81・82
	2446	柱穴	E-25-4	円形	39	38	17	22.06	21.89			SB-82
	2447	柱穴	E-25-4	円形	37	35	51	22.04	21.53			SB-81
	2448	柱穴	E-25-3	円形	34	34	28	22.04	21.76			SB-81
	2449	柱穴	E-25-2	円形	40	38	34	22.07	21.73			SB-81
	2450	欠										
	2451	柱穴	E-25-3	円形	43	37	12	22.07	21.95			SB-82
	2452	ピット	D-25-23	円形	35	25	14	22.08	21.94			
	2453	欠										
	2454	ピット	D-25-25	円形	36	32	23	22.09	21.86			
	2455	ピット	D-25-25	円形	28	25	15	22.08	21.93			
	2456	柱穴	D-25-25	円形	33	32	18	22.06	21.88			SA-84
	2457	柱穴	D-25-25	円形	36	28	20	22.04	21.84			SA-84
	2458	柱穴	E-25-5	円形	30	28	9	22.06	21.97			SA-84
	2459	柱穴	E-25-9	円形	30	25	13	22.03	21.90			SA-84
	2460	柱穴	D-26-17	円形	34	33	15	21.94	21.79			SA-83
	2461	井戸	D-26-14	円形	102	93	147	22.10	20.63			
	2462	井戸	D-26-19	円形	130	126	162	22.09	20.47	木:145～155		
	2463	土坑	D-26-24	楕円形	77	64	54	22.07	21.53			
	2464	井戸	E-26-15	円形	107	90	155	21.87	20.32	395	Ⅲb	
										木:136～143		
	2465	ピット	D-27-24	円形	20	19	110	22.22	21.12			
	2466	ピット	D-27-24	円形	24	22	34	22.29	21.95			
	2467	ピット	D-27-20	円形	33	28	35	22.28	21.93			
	2468	ピット	E-28-1	円形	34	32	20	22.26	22.06			
	2469	溝	—	—	—	300	52	22.18	21.66	385～394・土師器・珠洲	Ⅳ	
	2470	井戸	E-24-15	楕円形	114	82	179	22.05	20.26	396	Ⅲ	
										木:134・135		
	2471	欠										
	2472	井戸	D-24-15	円形	—	—	—	22.03	—			
	2473	柱穴	D-25-12	円形	30	27	11	22.05	21.94			SA-77
	2474	柱穴	D-24-13	円形	30	28	19	22.10	21.91			SA-74
	2475	柱穴	D-24-15	円形	36	31	35	21.98	21.63			テラス:21.82 SA-76
	2476	ピット	E-24-7	円形	30	27	49	22.21	21.72			
	2477	ピット	E-24-2	円形	—	60	13	22.14	22.01			
	2478	ピット	E-24-15	円形	44	44	52	22.05	21.53			
	2479	ピット	D-25-14	円形	26	25	9	22.00	21.91			
	2480	柱穴	D-25-18	円形	25	23	32	22.07	21.75			SA-78
	2481	ピット	D-25-18	円形	28	25	14	22.04	21.90			
	2482	ピット	D-25-22	円形	27	27	13	22.08	21.95			
	2483	ピット	E-25-11	円形	30	24	26	22.06	21.80			
	2484	土坑	E-25-13	楕円形	95	58	46	22.06	21.60			
	2485	柱穴	E-26-6	円形	24	22	15	22.06	21.91			SA-83
	2486	ピット	E-27-19	円形	36	34	20	21.96	21.76			
ＤⅡ地区	2501	井戸	E-28-6	円形	106	105	149	22.10	20.61	木:63・64		
	2502	井戸	E-28-7	円形	103	97	76	22.12	21.36	400・土師器(ロクロ)	Ⅲ～Ⅳ	テラス:21.52
	2503	柱穴	E-28-12	円形	33	29	77	22.03	21.26			SB-92
	2504	欠										
	2505	柱穴	E-28-13	円形	29	28	14	22.02	21.88			SB-92
	2506	ピット	E-28-2	円形	34	29	11	22.14	22.03			
	2507	柱穴	D-28-22	円形	53	45	33	22.17	21.84			テラス:21.92 SB-91
	2508a	柱穴	D-28-17	円形	50	42	45	22.18	21.73			テラス:21.80 SB-91
	2508b	ピット	D-28-17	円形	31	21	32	22.12	21.80			
	2509	井戸	D-28-13	円形	81	79	83	22.18	21.35			
	2510	ピット	D-28-13	円形	34	32	15	22.15	22.00			
	2511	柱穴	D-28-24	円形	55	51	63	22.15	21.52			SB-91
	2512	ピット	D-28-19	円形	37	33	13	22.15	22.02			
	2513	柱穴	D-28-19	円形	47	42	56	22.15	21.59			SB-91
	2514	ピット	D-29-17	円形	58	—	12	22.18	22.06			
	2515	井戸	D-29-16	円形	115	108	113	22.18	21.05	401・402・土師器(ロクロ・京都系)	Ⅳ～Ⅴb	
										木:163		
	2516	ピット	D-29-16	円形	24	23	5	22.01	21.96			
	2517	柱穴	D-29-21	円形	36	32	22	22.21	21.99			SB-93
	2518	柱穴	D-29-22	円形	35	32	17	22.16	21.99			SB-94
	2519	欠										
	2520	柱穴	D-29-22	円形	—	43	57	22.28	21.71			SB-94
	2521	欠										2522と一体
	2522	井戸	D-29-22	楕円形	157	127	208	22.25	20.17			2521と一体 テラス:20.99
	2523	ピット	D-29-23	円形	34	32	43	22.27	21.84			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	2524a	ピット	D-29-23	円形	35	33	43	22.26	21.83			
	2524b	ピット	D-29-23	円形	31	30	14	22.19	22.05			
	2525	ピット	D-29-18	円形	—	30	21	22.26	22.05			
	2526	柱穴	D-29-18	円形	44	40	36	22.26	21.90			SB-94
	2527a	井戸	D-29-18	円形	219	205	173	22.26	20.53	403～406・土師器・珠洲 石:16・17	Vc	
	2527b	ピット	D-29-13	円形	—	107	16	22.22	22.06			
	2528	ピット	D-29-14	円形	40	31	40	22.20	21.80			
	2529	欠										
	2530a	柱穴	D-29-19	円形	51	46	21	22.22	22.01			SB-95
	2530b	ピット	D-29-19	円形	—	23	17	22.27	22.10			
	2531	柱穴	D-29-18	楕円形	51	39	35	22.24	21.89			SB-93
	2532	ピット	D-29-23	楕円形	54	41	29	22.23	21.94			
	2533	柱穴	D-29-24	円形	37	35	26	22.25	21.99			テラス:22.04 SB-97
	2534a	土坑	D-29-24	円形	185	181	80	22.25	21.45	土師器	—	
	2534b	柱穴	D-29-24	円形	50	50	62	22.25	21.63			SB-93
	2534c	柱穴	D-29-24	円形	50	—	14	22.25	22.11			SB-97
	2535a	井戸	D-29-25	円形	92	90	143	22.21	20.78	407	Ⅳ～Ⅴ	
	2535b	柱穴	D-29-25	円形	45	35	52	22.29	21.77			SB-94
	2535c	ピット	D-29-24	楕円形	42	25	37	22.29	21.92			
	2535d	ピット	D-29-24	円形	35	30	39	22.25	21.86			
	2536	欠										
	2537	井戸	D-29-24	円形	99	89	128	22.29	21.01	木:162		
	2538	欠										
	2539	ピット	E-29-4	円形	46	—	15	22.29	22.14			
	2540	ピット	D-29-25	楕円形	—	36	45	22.21	21.76			
	2541	ピット	D-29-25	円形	35	35	29	22.25	21.96			
	2542a	井戸	D-29-20	円形	98	85	116	22.25	21.09			
	2542b	ピット	D-29-20	円形	—	44	38	22.23	21.85			
	2543	柱穴	D-29-20	円形	46	41	34	22.22	21.88			SB-95
	2544	ピット	D-29-20	円形	—	37	12	22.22	22.10			
	2545	ピット	D-29-19	楕円形	28	21	28	22.24	21.96			
	2546	ピット	D-29-15	円形	40	35	—	—	—			
	2547	ピット	D-29-14	円形	32	—	—	—	—			
	2548	柱穴	D-29-20	円形	30	30	36	22.28	21.92			SB-97
	2549	ピット	D-29-15	円形	35	31	21	22.28	22.07			
	2550	ピット	D-29-20	円形	25	25	34	22.23	21.89			
	2551	ピット	D-29-15	円形	45	41	57	22.29	21.72	土師器	—	
	2552	ピット	D-29-15	円形	34	29	29	22.23	21.94			
	2553	ピット	D-29-15	円形	44	43	53	22.23	21.70			
	2554	ピット	D-29-15	楕円形	39	28	27	22.26	21.99			
	2555	ピット	D-29-20	円形	43	40	71	22.30	21.59	瀬戸美濃	Ⅳ	
	2556	ピット	D-29-20	円形	35	35	19	22.29	22.10			
	2557	ピット	D-30-16	円形	34	32	18	22.30	22.12			
	2558	ピット	D-29-20	円形	30	28	19	22.29	22.10			
	2559	ピット	D-29-20	円形	23	23	21	22.23	22.02			
	2560	柱穴	D-30-16	円形	27	27	19	22.28	22.09			SB-97
	2561	ピット	D-30-16	円形	—	—	—	22.27	—			
	2562a	井戸	D-30-16	楕円形	138	114	123	22.27	21.04	408～412・土師器 石:26	Ⅳ?	
	2562b	ピット	D-30-16	楕円形	—	56	59	22.28	21.69			
	2563	欠										
	2564	ピット	D-30-21	楕円形	—	33	26	22.24	21.98			
	2565	ピット	D-29-25	楕円形	26	19	35	22.24	21.89			
	2566	ピット	D-29-25	円形	28	27	8	22.20	22.12			
	2567	ピット	D-30-21	円形	34	32	23	22.28	22.05			
	2568a	ピット	D-29-25	不整円形	48	48	81	22.29	21.48			テラス:21.87
	2568b	ピット	D-29-25	楕円形	—	32	33	22.18	21.85			
	2568c	柱穴	D-29-25	円形	—	40	45	22.18	21.73			テラス:22.01 SB-97
	2569a	ピット	D-29-25	円形	46	—	19	22.34	22.15			
	2569b	ピット	D-29-25	楕円形	42	28	57	22.34	21.77			
	2570	ピット	D-30-16	円形	27	—	18	22.29	22.11			
	2571	ピット	D-30-16	楕円形	67	53	60	22.31	21.71	413	Vb	
	2572	ピット	D-30-16	円形	32	29	38	22.27	21.89			
	2573	ピット	D-30-12	円形	44	43	22	22.26	22.04	陶器	—	
	2574a	ピット	D-30-12	楕円形	51	33	20	22.24	22.04			
	2574b	ピット	D-30-12	円形	19	19	30	22.24	21.94			
	2575	欠										
	2576a	ピット	D-30-18	円形	44	43	43	22.13	21.70			
	2576b	ピット	D-30-18	円形	22	21	25	22.13	21.88			
	2577	柱穴	D-30-18	円形	42	35	33	22.24	21.91			テラス:22.03 SB-98

地区名	遺構番号	種別	グリッド	平面形	規模		cm	深度 m		遺物	時期	備考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	2578	ピット	D-30-17	円形	36	34	53	22.21	21.68			テラス:21.81
	2579	ピット	D-30-17	円形	26	23	15	22.21	22.06			
	2580	ピット	D-30-16	円形	37	—	38	22.31	21.93			
	2581a	柱穴	D-30-16	円形	50	—	117	22.31	21.14			SB-99
	2581b	柱穴	D-30-16	楕円形	—	47	84	22.31	21.47			SB-97
	2582	ピット	D-30-17	円形	30	29	38	22.32	21.94			
	2583	ピット	D-30-22	円形	42	37	22	22.30	22.08			テラス:22.11
	2584	ピット	D-30-21	楕円形	36	31	29	22.24	21.95			
	2585	井戸	D-30-21	楕円形	82	68	153	22.24	20.71	414	Ⅴb	
										鉄:18　木:164		
	2586a	土坑	D-30-21	楕円形	156	76	23	22.27	22.04	415	Ⅳ	
	2586b	土坑	E-30-1	不整円形	100	66	42	22.35	21.93			
	2586c	ピット	E-30-1	円形	24	24	32	22.44	22.12			
	2587	柱穴	D-30-17	円形	61	60	68	22.23	21.55	土師器	Ⅲ	テラス:21.62　SB-100
	2588	ピット	D-30-17	円形	41	—	—	—	—	鉄:17		
	2589	井戸	D-30-22	円形	97	97	86	22.30	21.44	416・417・青磁	Ⅳ	
	2590	欠										
	2591	井戸	D-30-22	円形	108	92	149	22.32	20.83	418・419・土師器	Ⅳ	
										石:29		
	2592	ピット	D-30-22	楕円形	—	31	16	22.38	22.22			
	2593	ピット	D-30-22	円形	37	32	19	22.27	22.08			
	2594	柱穴	D-30-22	円形	37	36	22	22.31	22.09			SB-95
	2595	柱穴	D-30-22	円形	36	36	45	22.40	21.95			テラス:21.97　SB-100
	2596	井戸	D-30-23	円形	88	87	139	22.41	21.02	420～422・土師器	Ⅲ	
	2597	ピット	D-30-23	円形	25	23	18	22.38	22.20			
	2598	欠										2600と一体
	2599	井戸	D-30-23	円形	153	129	153	22.35	20.82	423・土師器・珠洲	Ⅳ	テラス:21.40
										木:183～186		
	2600	ピット	D-30-23	円形	61	61	45	22.35	21.90			2598と一体
	2601	ピット	D-30-23	楕円形	—	44	24	22.39	22.15			
	2602	ピット	D-30-23	円形	33	—	22	22.41	22.19			
	2603	ピット	D-30-23	円形	36	34	88	22.41	21.53			
	2604	ピット	D-30-23	円形	40	37	35	22.41	22.06			
	2605	柱穴	D-30-24	円形	63	53	—	—	—			SB-99
	2606	ピット	D-30-23	楕円形	46	36	55	22.39	21.84			テラス:21.89
	2607	柱穴	D-30-23	円形	60	55	52	22.40	21.88			テラス:22.02　SB-98
	2608	ピット	E-30-3	円形	30	26	26	22.40	22.14			
	2609	ピット	E-30-4	円形	66	55	112	22.79	21.67			
	2610	土坑	E-30-3	楕円形	—	64	14	22.41	22.27			
	2611	ピット	D-29-23	円形	39	37	18	22.27	22.09			
	2612	柱穴	E-29-2	円形	48	42	35	22.27	21.92			SB-94
	2613	柱穴	E-29-7	円形	36	31	38	22.06	21.68			SA-96
	2614	柱穴	E-29-7	円形	53	48	19	22.29	22.10			テラス:22.19　SB-93
	2615	柱穴	E-29-8	楕円形	60	35	41	22.28	21.87			テラス:21.97　SA-96
	2616	ピット	E-29-8	楕円形	44	31	27	22.30	22.03	土師器	—	
	2617	柱穴	E-29-8	円形	45	41	24	22.34	22.10			SA-96
	2618	柱穴	E-29-2	円形	53	49	34	22.29	21.95	土師器	Ⅲb	テラス:22.04　SB-93
	2619	柱穴	E-29-8	楕円形	64	48	23	22.30	22.07			テラス:22.15　SB-94
	2620	ピット	E-29-8	円形	45	40	37	22.31	21.94			
	2621	柱穴	E-29-9	円形	53	46	13	22.38	22.25			SB-94
	2622a	柱穴	E-29-8	円形	54	49	40	22.33	21.93			テラス:21.99　SB-93
	2622b	ピット	E-29-8	円形	36	—	32	22.33	22.01			
	2623	柱穴	E-29-3	円形	49	48	71	22.30	21.59	424	Ⅳ	SB-95
	2624	ピット	E-29-3	円形	34	31	39	22.29	21.90			
	2625	ピット	E-29-3	円形	37	35	36	22.30	21.94			
	2626	柱穴	E-29-3	円形	42	41	41	22.27	21.86			SB-94
	2627	欠										
	2628	欠										
	2629	欠										
	2630	欠										
	2631	井戸	E-29-4	円形	115	98	93	22.29	21.36	土師器	Ⅲ	
	2632	柱穴	E-29-4	円形	56	—	37	22.33	21.96			SB-95
	2633	柱穴	E-29-4	円形	49	—	68	22.32	21.64	土師器	—	テラス:22.00　SB-94
	2634	欠										
	2635	ピット	E-29-9	円形	43	40	24	22.36	22.12			
	2636a	ピット	E-29-9	円形	53	53	18	22.35	22.17			
	2636b	ピット	E-29-9	楕円形	30	20	27	22.33	22.06			
	2637	ピット	E-29-9	円形	42	36	30	22.39	22.09			
	2638	ピット	E-29-5	円形	23	—	31	22.37	22.06			
	2639	ピット	E-29-5	不整円形	40	36	50	22.35	21.85			テラス:22.04
	2640	ピット	E-29-5	楕円形	—	31	29	22.39	22.10			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	2641	ピット	E-29-5	円形	34	32	41	22.39	21.98			
	2642	ピット	E-29-5	楕円形	33	26	29	22.37	22.08			
	2643a	ピット	E-29-10	円形	—	50	43	22.37	21.94			テラス:22.09
	2643b	ピット	E-29-10	円形	38	34	38	22.37	21.99			
	2644	柱穴	E-29-10	円形	46	39	47	22.40	21.93			テラス:22.06 SB-95
	2645	ピット	E-29-10	円形	47	—	30	22.40	22.10	425	Ⅴb	
	2646	欠										
	2647	ピット	E-29-10	円形	21	20	21	22.42	22.21			
	2648	柱穴	E-29-10	円形	33	32	22	22.42	22.20			SB-93
	2649	井戸	E-29-20	円形	103	94	143	22.41	20.98			
	2650	ピット	E-29-5	円形	43	37	41	22.32	21.91			
	2651	柱穴	E-29-5	円形	54	51	24	22.35	22.11			SB-95
	2652	ピット	E-29-5	円形	39	37	29	22.34	22.05			
	2653	ピット	E-29-5	円形	34	34	31	22.35	22.04			
	2654	柱穴	E-30-1	円形	30	27	47	22.34	21.87			SB-93
	2655	柱穴	E-30-1	円形	40	38	60	22.44	21.84			SB-99
	2656	ピット	E-30-1	楕円形	29	17	55	22.40	21.85			
	2657	欠										
	2658	欠										
	2659	ピット	E-30-1	円形	37	33	28	22.40	22.12			
	2660	ピット	E-30-1	円形	40	31	36	22.44	22.08			
	2661	ピット	E-29-5	円形	25	22	23	22.40	22.17			
	2662	ピット	E-29-5	円形	22	20	23	22.40	22.17			
	2663a	ピット	E-29-5	円形	47	—	30	22.39	22.09			テラス:22.17
	2663b	ピット	E-29-5	円形	55	53	50	22.39	21.89			テラス:22.17
	2664	ピット	E-29-5	円形	22	21	24	22.39	22.15			
	2665	ピット	E-29-5	円形	27	24	22	22.39	22.17			
	2666	柱穴	E-29-10	円形	35	30	45	22.38	21.93			テラス:22.20 SB-93
	2667	ピット	E-29-10	円形	37	34	22	22.38	22.16			
	2668a	ピット	E-30-6	楕円形	33	23	28	22.43	22.15			
	2668b	ピット	E-30-6	円形	—	28	25	22.43	22.18			テラス:22.21
	2669	ピット	E-30-6	円形	43	39	30	22.39	22.09			
	2670	柱穴	E-30-1	円形	37	32	33	22.45	22.12	426	Ⅳ	SB-95
	2671	ピット	E-30-1	楕円形	—	35	12	22.45	22.33			
	2672	ピット	E-30-1	円形	40	39	19	22.44	22.25			
	2673	ピット	E-30-6	円形	44	41	30	22.42	22.12	427・土師器	Ⅲb	
	2674	ピット	E-30-6	円形	30	26	28	22.42	22.14			
	2675	柱穴	E-30-6	円形	33	28	14	22.42	22.28			SB-93
	2676	ピット	E-30-6	円形	32	30	35	22.41	22.06			
	2677	ピット	E-30-7	円形	37	36	15	22.42	22.27			
	2678	ピット	E-30-7	円形	45	44	27	22.41	22.14			テラス:22.31
	2679	ピット	E-30-7	円形	35	35	20	22.42	22.22			
	2680	ピット	E-30-7	楕円形	45	33	33	22.45	22.12			
	2681	ピット	E-30-7	円形	33	32	12	22.42	22.30			
	2682	ピット	E-30-7	楕円形	40	36	17	22.43	22.26			
	2683	ピット	E-30-7	円形	23	20	8	22.44	22.36			
	2684	ピット	E-30-12	円形	41	40	20	22.44	22.24	土師器	Ⅲ	
	2685a	井戸	E-30-6	円形	105	103	136	22.39	21.03	428・土師器	Ⅳ	
	2685b	ピット	E-30-6	楕円形	—	22	53	22.42	21.89			
	2685c	柱穴	E-30-6	楕円形	—	24	64	22.42	21.78			SB-95
	2686	欠										
	2687	欠										
	2688	土坑	E-30-6	円形	72	63	16	22.42	22.26			
	2689	ピット	E-30-11	円形	39	—	15	22.44	22.29			
	2690a	ピット	E-30-6	円形	44	41	67	22.43	21.76	土師器	—	
	2690b	ピット	E-30-11	円形	—	46	36	22.44	22.08			
	2691	柱穴	E-30-11	円形	29	21	27	22.44	22.17			SA-102
	2692	柱穴	E-30-11	円形	33	30	53	22.43	21.90			SB-93
	2693a	ピット	E-30-11	円形	26	20	67	22.43	21.76			
	2693b	ピット	E-30-11	円形	—	32	36	22.44	22.08			
	2694a	ピット	E-30-11	円形	37	32	20	22.44	22.24			
	2694b	ピット	E-30-11	円形	25	23	24	22.43	22.19			
	2695	ピット	E-30-12	円形	25	23	33	22.45	22.12			
	2696	ピット	E-30-11	円形	43	40	47	22.45	21.98			テラス:22.26
	2697	ピット	E-30-12	円形	28	26	20	22.45	22.25			
	2698	ピット	E-30-12	円形	34	30	20	22.43	22.23			
	2699	ピット	E-30-12	円形	38	38	23	22.45	22.22			
	2700	ピット	E-30-12	円形	36	35	33	22.44	22.11			テラス:22.33
	2701a	ピット	E-30-12	楕円形	41	25	34	22.45	22.11			
	2701b	ピット	E-30-12	円形	36	32	45	22.43	21.98			テラス:22.12
	2702	ピット	E-30-13	円形	28	24	35	22.43	22.08			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	2703	ピット	E-30-13	円形	31	25	22	22.44	22.22			
	2704	ピット	E-30-13	円形	35	33	70	22.42	21.72			
	2705	ピット	E-30-13	円形	37	36	24	22.42	22.18			
	2706	柱穴	E-30-13	円形	35	35	24	22.42	22.18			SA-102
	2707	柱穴	E-30-2	円形	51	48	28	22.46	22.18			SB-93
	2708	柱穴	E-30-2	円形	38	38	35	22.40	22.05			テラス:22.19 2710と一体 SB-101
	2709	ピット	E-30-2	円形	61	48	39	22.42	22.03			テラス:22.26
	2710	欠										2708と一体
	2711	ピット	E-30-2	円形	40	40	25	22.44	22.19			
	2712a	柱穴	E-30-2	円形	—	50	47	22.44	21.97			テラス:22.01 SB-99
	2712b	ピット	E-30-2	円形	60	57	65	22.45	21.80			テラス:22.00
	2713	ピット	E-30-2	円形	55	45	49	22.41	21.92	430	Ⅰa	テラス:22.00
	2714a	ピット	E-30-2	楕円形	45	27	64	22.43	21.79			
	2714b	ピット	E-30-2	不定形	—	—	40	22.42	22.02			
	2714c	ピット	E-30-2	円形	46	—	35	22.44	22.09			
	2715	欠										
	2716	ピット	E-30-2	円形	37	28	44	22.43	21.99			
	2717	ピット	E-30-3	円形	36	32	42	22.42	22.00			
	2718	ピット	E-30-3	円形	32	27	21	22.43	22.22			
	2719	柱穴	E-30-3	円形	54	—	80	22.43	21.63			SB-101
	2720	ピット	E-30-3	円形	44	—	34	22.45	22.11			
	2721	ピット	E-30-2	円形	36	34	22	22.42	22.20			
	2722	ピット	E-30-3	円形	45	36	49	22.43	21.94	432	Ⅲb	
	2723	ピット	E-30-3	楕円形	58	43	34	22.43	22.09			
	2724	ピット	E-30-2	円形	22	22	19	22.42	22.23			
	2725a	ピット	E-30-7	円形	33	—	26	22.42	22.16			
	2725b	ピット	E-30-7	円形	42	37	40	22.42	22.02			
	2726a	柱穴	E-30-8	円形	58	40	68	22.44	21.76			SB-99
	2726b	ピット	E-30-8	円形	56	—	13	22.44	22.31			
	2727	ピット	E-30-8	円形	40	36	43	22.44	22.01			
	2728	ピット	E-30-8	円形	24	23	38	22.44	22.06			
	2729	ピット	E-30-8	円形	25	23	17	22.45	22.28			
	2730	ピット	E-30-8	円形	40	38	25	22.45	22.20			
	2731	ピット	E-30-3	楕円形	30	22	44	22.43	21.99			
	2732	柱穴	E-30-3	楕円形	68	51	41	22.44	22.03	429・土師器	Ⅳ	2733と一体 SB-101
	2733	欠								431	Ⅴb	2732と一体
	2734	ピット	E-30-3	不整楕円形	49	38	54	22.45	21.91	土師器	Ⅲb	
	2735	ピット	E-30-9	円形	18	17	34	22.45	22.11	土師器	Ⅲ	
	2736	ピット	E-30-9	楕円形	38	29	79	22.41	21.62			
	2737a	柱穴	E-30-9	円形	40	33	69	22.39	21.70			SB-105
	2737b	ピット	E-30-9	円形	50	—	35	22.08	22.43			
	2738	ピット	E-30-9	円形	43	35	29	22.45	22.16			
	2739	ピット	E-30-9	楕円形	39	27	38	22.45	22.07			
	2740	柱穴	E-30-4	円形	41	34	68	22.45	21.77			SB-100
	2741	ピット	E-30-4	円形	—	23	16	22.44	22.28			
	2742	柱穴	E-30-4	円形	46	39	59	22.42	21.83			SB-105
	2743a	柱穴	E-30-4	不整円形	—	51	17	22.41	22.24	土師器	Ⅲa	SB-98
	2743b	ピット	E-30-4	円形	31	27	46	22.42	21.96			
	2743c	ピット	E-30-4	円形	23	19	27	22.44	22.17			
	2744	欠										
	2745	溝	E-30-4	—	—	95	30	22.45	22.15	鉄:19		
	2746	柱穴	D-30-24	不整円形	80	63	—	22.42	—			SB-101
	2747	ピット	D-30-18	不整円形	40	33	11	22.18	22.07			
	2748	ピット	D-30-18	楕円形	22	15	10	22.23	22.13			
	2749	ピット	D-30-18	円形	46	44	26	22.21	21.95			テラス:22.10
	2750	ピット	D-30-18	円形	39	—	20	22.23	22.03			
	2751	ピット	D-30-18	楕円形	61	35	20	22.23	22.03			
	2752a	土坑	D-30-19	不定形	153	—	—	—	—			
	2752b	柱穴	D-30-19	円形	54	49	—	—	—	土師器	Ⅲa	SB-98
	2752c	ピット	D-30-19	円形	32	30	—	—	—			
	2753	柱穴	D-30-19	円形	44	36	41	22.11	21.70			SB-103
	2754	土坑	D-30-19	不整円形	—	—	15	22.11	21.96	土師器	Ⅲ	
	2755a	土坑	D-30-19	不整円形	129	110	19	22.04	21.85			
	2755b	ピット	D-30-14	楕円形	51	34	9	22.04	21.95			テラス:21.97
	2756	ピット	D-30-14	円形	52	50	15	22.00	21.85			2758と一体？
	2757	ピット	D-30-14	円形	—	24	35	22.00	21.65			
	2758	欠										2756と一体？
	2759	ピット	D-30-14	円形	56	55	16	22.01	21.85			テラス:21.89
	2760	ピット	D-30-14	円形	41	40	6	22.00	21.94			
	2761	ピット	D-30-14	円形	—	50	(9)	22.00	22.09			測量数値ミス
	2762	ピット	D-30-15	円形	29	25	19	22.08	21.89			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	2763	柱穴	D-30-14	円形	25	22	8	22.11	22.03			SB-103
	2764	ピット	D-30-19	円形	50	45	28	22.10	21.82			
	2765	ピット	D-30-15	円形	—	59	34	22.08	21.74			テラス:21.82
	2766	ピット	D-30-20	円形	69	68	48	22.11	21.63			
	2767	ピット	D-30-20	円形	36	35	58	22.11	21.53			
	2768	ピット	D-30-20	円形	25	25	—	—	—			
	2769	ピット	D-30-20	円形	37	34	—	—	—			
	2770～2779	欠										
	2780	柱穴	D-30-19	円形	55	54	—	—	—	土師器(京都系)	Ⅴb	SB-103
	2781	ピット	D-30-19	円形	50	45	—	—	—			
	2782	ピット	D-30-24	円形	43	35	—	—	—			
	2783	ピット	D-30-24	円形	30	25	—	—	—			
	2784	柱穴	D-30-25	円形	40	35	—	—	—			SB-98
	2785	柱穴	D-30-24	円形	66	57	—	22.34	—			2786と一体 SB-100
	2786	欠										2785と一体
	2787	欠										
	2788	柱穴	D-30-25	円形	39	36	—	—	—			SB-101
	2789	ピット	D-30-25	円形	65	54	—	—	—			
	2790a	柱穴	D-30-25	楕円形	45	30	—	—	—	土師器	Ⅲb	SB-104
	2790b	ピット	D-30-25	不整円形	65	40	—	—	—			
	2791	ピット	D-30-25	円形	—	50	—	—	—			
	2792a	井戸	D-30-25	円形	103	101	—	—	—	433	Ⅴa	
	2792b	ピット	D-30-25	楕円形	—	55	—	—	—	焼土		
	2793a	柱穴	D-30-25	不整円形	56	42	43	22.37	21.94			SB-103
	2793b	ピット	D-30-25	円形	65	—	14	22.21	22.07			
	2794	ピット	D-30-24	楕円形	77	57	88	22.44	21.56	土師器	—	テラス:21.77
	2795	欠										2796と一体
	2796	ピット	E-30-5	楕円形	61	47	—	—	—			2795と一体
	2797	ピット	E-30-5	楕円形	—	34	—	—	—			
	2798	欠										2799と一体
	2799	ピット	E-30-5	円形	26	25	—	—	—			2798と一体
	2800	ピット	E-30-5	円形	45	36	—	—	—			
	2801	欠										
	2802	ピット	E-30-5	円形	41	36	—	—	—	焼土	—	
	2803a	ピット	E-30-5	円形	29	28	41	22.39	21.98			
	2803b	ピット	E-30-5	円形	—	29	18	22.40	22.22			
	2804	柱穴	E-30-5	円形	39	34	38	22.39	22.01	土師器	—	SB-106
	2805a	ピット	E-30-5	楕円形	56	36	70	22.37	21.67			
	2805b	ピット	E-30-5	楕円形	63	—	51	22.39	21.88			
	2806	ピット	E-30-5	円形	26	26	25	22.40	22.15			
	2807	ピット	E-30-5	円形	46	36	79	22.39	21.60			テラス:21.84
	2808a	ピット	E-30-4	円形	75	—	37	22.43	22.06	土師器	—	テラス:22.19
	2808b	ピット	E-30-5	楕円形	—	37	74	22.43	21.69			
	2808c	ピット	E-30-5	楕円形	60	45	54	22.40	21.86			
	2809	柱穴	E-30-4	楕円形	53	41	46	22.44	21.98			SB-101
	2810	ピット	E-30-10	円形	41	41	39	22.36	21.97			
	2811a	井戸	E-30-10	円形	111	100	180	22.40	20.60	463	Ⅲb	
										木:65・66		
	2811b	ピット	E-30-9	円形	36	30	33	22.42	22.09			
	2811c	ピット	E-30-9	楕円形	45	29	37	22.40	22.03			テラス:22.07
	2811d	ピット	E-30-9	円形	—	44	33	22.36	22.03			テラス:22.09
	2812	欠										
	2813	ピット	E-30-9	円形	—	50	16	22.40	22.24			
	2814	柱穴	E-30-14	円形	39	35	56	22.31	21.75			SB-106
	2815	欠										
	2816	柱穴	E-30-15	円形	36	33	46	22.31	21.85			SB-106
	2817a	土坑	E-31-11	不定形	185	95	25	22.30	22.05	464	Ⅴb	
	2817b	ピット	E-30-10	楕円形	48	35	60	22.29	21.69			
	2817c	柱穴	E-30-15	円形	47	40	114	22.26	21.12			SB-105
	2817d	ピット	E-31-11	円形	20	18	51	22.30	21.79			
	2817e	ピット	E-31-11	円形	29	23	45	22.30	21.85			
	2818	欠								465～468・瀬戸美濃	Ⅴc	2819と一体
										石:15		
	2819	井戸	E-31-11	不定形	455	316	213	22.32	20.19	434～462	Ⅴc	2818と一体 テラス:20.29・21.22・22.05
										鉄:3 石:18～25 木:172～181		
	2820	ピット	E-30-10	円形	38	34	32	22.33	22.01			
	2821a	ピット	E-30-10	円形	40	30	48	22.34	21.86			
	2821b	ピット	E-30-10	楕円形	—	40	26	22.33	22.07			
	2821c	ピット	E-30-10	円形	27	27	35	22.33	21.98			
	2821d	ピット	E-31-6	円形	33	29	45	22.34	21.89			テラス:22.08
	2822a	ピット	E-30-5	円形	45	31	39	22.37	21.98	土師器	—	

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	2822b	ピット	E-31-1	不整円形	35	—	34	22.37	22.03			
	2822c	ピット	E-31-1	不整円形	25	13	36	22.36	22.00	土師器	—	
	2822d	ピット	E-31-1	不整円形	—	28	28	22.34	22.06	土師器	—	
	2822e	柱穴	E-30-5	円形	38	24	—	22.37	—			SB-106
	2823	ピット	E-31-1	不整円形	41	33	42	22.37	21.95			
	2824	柱穴	D-31-11	円形	44	39	53	22.10	21.57			SB-103
	2825	柱穴	D-31-16	円形	38	37	62	22.22	21.60			テラス:21.77 SB-103
	2826	柱穴	D-31-12	楕円形	44	30	39	22.24	21.85			テラス:21.95 SB-107
	2827	井戸	D-31-13	円形	112	109	228	22.05	19.77	469～476・珠洲	Ⅴb	
										石:27 木:165～167		
	2828	欠										
	2829a	ピット	D-31-12	不整円形	39	25	31	22.24	21.93			
	2829b	ピット	D-31-12	円形	40	—	42	22.24	21.82			
	2830a	ピット	D-31-17	楕円形	35	22	28	22.27	21.99			
	2830b	ピット	D-31-12	円形	44	35	23	22.27	22.04			
	2831	ピット	D-31-12	不整円形	29	15	62	22.24	21.62			
	2832	ピット	D-31-17	円形	36	30	43	22.26	21.83			
	2833	ピット	D-31-18	円形	31	31	43	22.27	21.84			テラス:21.86
	2834	ピット	D-31-18	円形	40	40	32	22.24	21.92			
	2835	ピット	D-31-18	円形	47	44	43	22.26	21.83			
	2836	柱穴	D-31-18	円形	29	27	31	22.27	21.96	土師器	Ⅲa	SB-109
	2837	ピット	D-31-13	円形	32	30	30	22.24	21.94			
	2838	ピット	D-31-18	円形	19	19	13	22.25	22.12			
	2839	柱穴	D-31-13	円形	34	32	30	22.18	21.88	土師器	—	SA-110
	2840	柱穴	D-31-18	円形	38	34	64	22.24	21.60	477	Ⅲa	SB-107
	2841	柱穴	D-31-18	円形	35	—	23	22.21	21.98			SB-108
	2842	欠										
	2843	柱穴	D-31-16	楕円形	56	43	37	22.11	21.74			テラス:22.01 SB-104
	2844	ピット	D-31-16	楕円形	36	26	44	22.28	21.84			
	2845	ピット	D-31-17	円形	46	42	16	22.29	22.13			
	2846	柱穴	D-31-17	円形	31	30	31	22.33	22.02			SB-107
	2847	ピット	D-31-21	楕円形	30	22	18	22.20	22.02			
	2848	柱穴	D-31-16	円形	45	43	50	22.36	21.86			SB-103
	2849	ピット	D-31-17	円形	33	31	20	22.34	22.14			
	2850a	ピット	D-31-22	不整円形	65	56	104	22.36	21.32			
	2850b	ピット	D-31-17	円形	55	—	41	22.34	21.93			
	2850c	柱穴	D-31-17	不整円形	66	—	55	22.33	21.78			SB-107
	2851	欠								土師器	Ⅲ	
	2852	ピット	D-31-17	円形	25	25	28	22.33	22.05			
	2853a	ピット	D-31-22	楕円形	—	81	33	22.32	21.99			
	2853b	ピット	D-31-23	不整円形	44	43	51	22.32	21.81			
	2853c	ピット	D-31-23	不整楕円形	32	22	50	22.32	21.82			
	2853d	柱穴	D-31-23	不整円形	40	37	51	22.33	21.82			SB-104
	2853e	ピット	D-31-23	楕円形	—	39	12	22.32	22.20			
	2853f	柱穴	D-31-23	円形	36	35	18	22.32	22.14			SB-109
	2854a	ピット	D-31-22	楕円形	—	34	59	22.36	21.77	土師器	—	
	2854b	ピット	D-31-22	不整円形	38	—	49	22.36	21.87			
	2855	欠								479	Ⅲb	
	2856	柱穴	D-31-22	不整楕円形	60	48	69	22.34	21.65			テラス:21.91 SB-104
	2857	ピット	D-31-17	円形	—	33	36	22.34	21.98			
	2858	ピット	D-31-22	不整楕円形	41	25	34	22.36	22.02			
	2859	柱穴	D-31-22	円形	43	38	47	22.36	21.89			テラス:22.00 SB-107
	2860	欠										
	2861	ピット	D-31-21	円形	43	42	47	22.35	21.88			テラス:22.07
	2862	ピット	D-31-21	楕円形	—	50	18	22.36	22.18	478	Ⅳ	
	2863	欠										
	2864	柱穴	D-31-21	円形	56	50	58	22.35	21.77			テラス:22.08 SB-103
	2865	ピット	D-31-21	円形	48	45	36	22.36	22.00			テラス:22.05
	2866a	柱穴	D-31-22	円形	63	62	45	22.35	21.90	土師器	Ⅲb	SB-107
	2866b	ピット	D-31-22	不整円形	38	37	20	22.33	22.13			
	2866c	ピット	D-31-22	楕円形	—	45	14	22.33	22.19			
	2867	ピット	D-31-23	円形	45	—	22	22.39	22.17			
	2868	ピット	D-31-23	楕円形	48	45	43	22.32	21.89			
	2869	ピット	D-31-22	楕円形	36	25	13	22.30	22.17			
	2870	ピット	D-31-22	楕円形	—	35	10	22.31	22.21			
	2871	ピット	D-31-21	円形	44	40	23	22.36	22.13			
	2872	ピット	D-31-21	円形	—	51	21	22.35	22.14			
	2873	ピット	D-31-21	不整円形	68	51	25	22.35	22.10			
	2874	柱穴	D-31-21	円形	34	32	30	22.36	22.06			SB-105
	2875	ピット	E-31-1	円形	37	31	—	—	—			
	2876	ピット	E-31-1	円形	44	41	—	—	—			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	2877	ピット	E-31-1	円形	33	31	—	—	—			
	2878	ピット	E-31-1	楕円形	33	28	51	22.35	21.84			
	2879	欠										
	2880	ピット	E-31-1	楕円形	53	41	—	—	—			2881と一体
	2881	欠										2880と一体
	2882a	ピット	E-31-1	楕円形	42	25	—	—	—			
	2882b	ピット	E-31-1	円形	21	—	—	—	—			
	2882c	ピット	E-31-1	楕円形	—	24	—	—	—			
	2883a	ピット	E-31-1	不定形	55	52	—	—	—			
	2883b	ピット	D-31-21	円形	28	26	—	—	—			
	2884	柱穴	E-31-1	円形	40	37	38	22.35	21.97			テラス:22.08 SB-104
	2885	欠										
	2886	ピット	E-31-1	楕円形	36	28	18	22.35	22.17			
	2887	ピット	E-31-1	円形	46	45	38	22.36	21.98			テラス:22.15
	2888	欠										
	2889	ピット	E-31-1	円形	28	28	10	22.35	22.25			
	2890	ピット	E-31-2	円形	38	37	53	22.34	21.81			
	2891	ピット	E-31-1	楕円形	49	28	49	22.34	21.85			
	2892	ピット	D-31-22	円形	—	24	16	22.35	22.19			
	2893	ピット	D-31-22	円形	61	55	59	22.34	21.75			テラス:21.97
	2894	ピット	E-31-2	円形	33	33	25	22.34	22.09			
	2895	柱穴	E-31-2	円形	47	40	30	22.30	22.00			SB-104
	2896	柱穴	E-31-3	円形	39	36	51	22.26	21.75			テラス:21.85 SB-108
	2897	ピット	E-31-7	円形	41	35	10	22.31	22.21			
	2898	ピット	E-31-2	円形	24	21	12	22.33	22.21			
	2899	ピット	E-31-7	円形	32	30	15	22.34	22.19			
	2900	ピット	E-31-1	楕円形	30	24	46	22.34	21.88			
	2901	柱穴	E-31-1	楕円形	49	38	56	22.33	21.77			テラス:21.66 SB-105
	2902	柱穴	E-31-1	円形	24	22	12	22.34	22.22			SB-106
	2903	欠										
	2904	ピット	E-31-6	円形	26	22	18	22.33	22.15			
	2905	ピット	E-31-6	楕円形	43	30	19	22.33	22.14			テラス:21.81
	2906	ピット	E-31-6	円形	34	32	25	22.35	22.10			
	2907	柱穴	E-31-7	円形	41	33	45	22.33	21.88			
	2908a	土坑	E-31-8	隅丸方形	96	93	20	22.31	22.11			
	2908b	ピット	E-31-8	不整円形	52	48	54	22.31	21.77			テラス:22.08
	2909	欠										
	2910	柱穴	E-31-8	円形	29	28	28	22.29	22.01			テラス:22.04 SB-106
	2911	柱穴	E-31-17	楕円形	32	24	17	22.26	22.09			SB-106
	2912a	ピット	E-31-12	楕円形	—	31	26	22.28	22.02			
	2912b	ピット	E-31-12	円形	—	42	35	22.28	21.93			
	2913	ピット	E-31-12	円形	37	34	12	22.34	22.22			
	2914	ピット	E-31-13	円形	23	23	26	22.28	22.02			
	2915	井戸	E-31-14	円形	88	83	201	22.15	20.14	480	Ⅲb	
	2916	土坑	E-31-8	円形	95	90	14	22.26	22.12	土師器	Ⅲb	
	2917	柱穴	E-31-3	円形	54	47	42	22.22	21.80	土師器	—	テラス:21.88 SB-108
	2918	井戸状遺構	E-31-4	円形	61	57	55	22.19	21.64			テラス:21.94
	2919	柱穴	E-31-9	楕円形	36	29	40	22.12	21.72			SB-108
	2920	欠										
	2921	柱穴	E-31-3	円形	50	45	—	—	—	495	Ⅴc	SB-108
	2922	欠										撹乱ヵ
	2923	欠										撹乱ヵ
	2924	ピット	E-31-4	円形	30	25	36	22.14	21.78			
	2925	柱穴	E-31-4	楕円形	53	38	22	22.18	21.96	土師器・珠洲	Ⅲb	テラス:22.08 SB-107
	2926	欠										
	2927	欠										
	2928a	井戸	D-31-23	円形	170	138	255	22.26	19.71	481	Ⅲb	テラス:21.00
	2928b	柱穴	D-31-23	円形	35	—	42	22.26	21.84			SB-107
	2928c	ピット	D-31-23	円形	47	—	101	22.23	21.22			
	2928d	ピット	E-31-3	円形	28	—	16	22.23	22.07			
	2929	柱穴	D-31-23	円形	33	28	19	22.25	22.06			SB-107
	2930	ピット	D-31-23	円形	—	37	53	22.18	21.65			
	2931	柱穴	D-31-24	円形	41	32	6	22.16	22.10			SB-109
	2932	柱穴	D-31-24	円形	35	35	21	22.17	21.96			SB-107
	2933	ピット	D-31-24	円形	37	31	11	22.16	22.05			
	2934	ピット	E-31-5	円形	29	27	18	22.13	21.95			
	2935	ピット	E-31-5	円形	27	26	11	22.13	22.02			
	2936	柱穴	D-31-24	円形	26	25	15	22.14	21.99			SB-109
	2937	ピット	D-31-24	円形	34	30	27	22.14	21.87			
	2938	ピット	D-31-24	円形	34	32	11	22.16	22.05			
	2939	ピット	D-31-24	円形	37	32	17	22.16	21.99			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	2940	ピット	D-31-25	円形	37	32	16	22.15	21.99			
	2941	ピット	D-31-25	円形	32	29	15	22.13	21.98			
	2942	ピット	D-31-25	円形	30	26	9	22.13	22.04			
	2943	柱穴	D-31-20	楕円形	58	50	52	22.10	21.58	土師器	—	テラス:21.93 SB-108
	2944	柱穴	D-31-20	円形	24	22	36	22.09	21.73			SB-108
	2945	ピット	D-31-19	円形	31	26	35	22.16	21.81			テラス:21.96
	2946	ピット	D-31-20	円形	21	20	30	22.10	21.80			
	2947	柱穴	D-31-20	円形	25	22	23	22.11	21.88			SB-109
	2948	ピット	D-31-20	円形	23	22	45	22.09	21.64			
	2949	ピット	D-31-19	円形	—	28	14	22.14	22.00			
	2950	柱穴	D-31-19	円形	54	50	75	22.17	21.42			SB-108
	2951	ピット	D-31-19	円形	20	18	26	22.21	21.95			
	2952	柱穴	D-31-19	円形	27	26	55	22.19	21.64			SB-109
	2953	柱穴	D-31-19	楕円形	26	21	14	22.17	22.03			SB-107
	2954	柱穴	D-31-19	円形	26	21	29	22.13	21.84			SB-108
	2955	ピット	D-31-20	円形	—	32	54	22.11	21.57	土師器	Ⅲ	SA-111
	2956	柱穴	D-31-19	円形	26	23	31	22.13	21.82			SA-110
	2957	ピット	D-31-14	円形	37	31	26	22.12	21.86			
	2958	井戸	D-31-15	円形	184	178	178	22.12	20.34			
	2959	柱穴	D-31-18	円形	40	40	37	22.24	21.87			SB-108
	2960	柱穴	D-31-13	円形	46	42	36	22.24	21.88			テラス:22.01 SB-107
	2961	ピット	D-31-24	円形	32	28	8	22.15	22.07			
	2962	井戸	E-30-20	円形	257	218	214	22.30	20.16	482・土師器	Ⅲ～Ⅳ	テラス:21.42・20.87
										鉄:39 木:156・157		
	2963～2999	欠										
	3000	欠										3001と一体
	3001	凹み	E-31-20	不定形	474	—	36	22.17	21.81	483～488	Ⅴ	3000と一体 テラス:21.89
	3002	ピット	E-31-18	円形	23	22	11	22.13	22.02			
	3003	欠										
	3004	ピット	E-31-10	円形	28	24	46	22.11	21.65			テラス:21.80
	3005	ピット	E-31-10	円形	26	22	8	22.12	22.04			
	3006	柱穴	E-31-5	円形	42	35	25	22.15	21.90			テラス:21.98 SB-108
	3007	ピット	E-31-5	楕円形	38	26	11	22.12	22.01			
	3008	ピット	E-32-1	円形	22	19	14	22.03	21.89			
	3009	ピット	D-32-21	円形	16	15	20	22.05	21.85			
	3010	ピット	D-32-21	円形	25	24	14	22.04	21.90			
	3011	柱穴	D-32-16	円形	23	22	24	21.99	21.75	土師器	Ⅲ	SA-111
	3012	ピット	D-32-16	円形	27	25	15	21.98	21.83			
	3013	井戸	D-32-11	円形	107	—	119	22.03	20.84	489・490・土師器	Ⅳ	
										木:182		
	3014	ピット	D-32-11	円形	26	23	17	21.97	21.80			
	3015	ピット	D-32-12	円形	43	35	20	21.96	21.76			
	3016	ピット	D-32-11	円形	31	—	18	21.96	21.78			
	3017	ピット	D-32-12	円形	28	28	29	21.97	21.68	土師器	—	テラス:21.77
	3018	ピット	D-32-12	円形	26	26	30	21.98	21.68			
	3019	ピット	D-32-13	円形	50	—	40	22.01	21.61			テラス:21.84
	3020	ピット	D-32-13	円形	30	26	25	21.95	21.70			
	3021	ピット	D-32-13	円形	25	21	6	21.95	21.89			
	3022	ピット	D-32-13	円形	30	25	53	21.99	21.46			
	3023	ピット	D-32-14	円形	38	35	53	22.01	21.48			
	3024	ピット	D-32-14	円形	34	30	16	21.99	21.83			
	3025	ピット	D-32-19	円形	34	26	28	22.00	21.72			
	3026	ピット	D-32-17	円形	23	19	31	21.93	21.62			
	3027	ピット	D-32-17	円形	50	46	57	21.98	21.41	491	Ⅳ～Ⅴ	
	3028	ピット	D-32-17	円形	15	15	11	21.96	21.85			
	3029	ピット	D-32-18	円形	22	20	29	21.97	21.68			
	3030	ピット	D-32-18	円形	26	24	39	21.97	21.58			
	3031	ピット	D-32-18	円形	30	26	40	22.00	21.60			
	3032	ピット	D-32-18	円形	24	22	10	22.00	21.90			
	3033	ピット	D-32-24	円形	33	33	12	21.99	21.87			
	3034	ピット	D-32-24	円形	18	18	14	22.01	21.87			
	3035	ピット	D-32-24	円形	20	19	9	21.99	21.90			
	3036	ピット	D-32-25	円形	15	13	52	21.98	21.46			
	3037	ピット	D-32-25	円形	23	23	13	21.95	21.82			
	3038a	井戸	E-32-7	円形	103	98	103	22.04	21.01	492・493	Ⅳ～Ⅴ	
										石:28		
	3038b	ピット	E-32-7	円形	28	—	107	22.08	21.01			
	3039	ピット	E-32-12	円形	10	9	19	22.12	21.93			
	3040	ピット	E-32-13	円形	10	10	6	22.09	22.03			
	3041	ピット	E-32-15	円形	28	27	15	22.04	21.89			
	3042	ピット	D-33-16	円形	22	21	15	21.97	21.82			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	3043	柱穴	D-33-16	円形	35	31	15	21.99	21.84			SA-113
	3044	ピット	D-33-16	円形	21	18	13	21.99	21.86			
	3045	ピット	D-33-16	円形	32	28	27	22.02	21.75			
	3046	柱穴	D-33-11	円形	28	25	26	22.00	21.74			SA-113
	3047	柱穴	D-33-12	円形	24	23	16	22.00	21.84			SA-113
	3048	ピット	D-33-17	円形	71	63	19	22.02	21.83	土師器	—	
	3049	ピット	D-33-17	円形	66	58	100	22.00	21.00	494	Ⅲ～Ⅳ	
										石:14		
	3050	ピット	D-33-22	円形	31	28	18	21.97	21.79	土師器	Ⅲb	
	3051	ピット	D-33-22	円形	27	26	33	21.96	21.63			
	3052	ピット	E-33-2	楕円形	42	25	15	21.95	21.80			
	3053	ピット	E-33-16	円形	23	22	14	22.06	21.92			
	3054	ピット	E-33-16	円形	29	29	25	22.07	21.82			
	3055	ピット	E-33-12	円形	22	21	9	22.07	21.98			テラス:22.00
	3056	ピット	E-33-17	円形	20	18	23	22.06	21.83			
	3057	溝	—	—	—	131	16	22.01	21.85	土師器・越前	Ⅴ	
	3058	柱穴	D-28-13	円形	42	38	35	22.13	21.78			SB-91
	3059	柱穴	D-28-24	円形	22	19	22	22.11	21.89			SB-91
	3060	ピット	E-28-2	円形	23	23	3	22.14	22.11			
	3061	柱穴	E-28-14	楕円形	22	18	3	21.99	21.96			SB-92
	3062	柱穴	E-28-19	円形	32	23	11	21.99	21.88			SB-92
	3063	ピット	D-29-14	円形	35	31	35	21.98	21.63			
	3064	ピット	D-29-14	円形	31	27	13	21.95	21.82			
	3065	ピット	D-29-14	円形	28	26	34	22.23	21.89			テラス:21.95
	3066	ピット	D-29-14	円形	17	14	7	22.24	22.17			
	3067	柱穴	D-29-14	円形	29	23	11	22.24	22.13			SB-97
	3068	柱穴	D-29-17	円形	47	43	50	22.26	21.76			テラス:21.84 SB-93
	3069	ピット	D-29-17	円形	28	28	26	22.27	22.01			
	3070	柱穴	D-29-17	円形	33	32	17	22.22	22.05			SB-94
	3071	ピット	D-29-19	円形	31	27	22	22.27	22.05			
	3072	柱穴	D-29-22	円形	36	33	21	22.26	22.05			SB-93
	3073	柱穴	D-29-23	円形	34	30	18	22.25	22.07			SB-93
	3074	ピット	D-29-24	円形	21	19	19	22.25	22.06			
	3075	ピット	D-29-25	円形	71	68	16	22.22	22.06			テラス:22.15
	3076	柱穴	E-29-1	円形	38	32	30	21.97	21.67			SB-93
	3077	ピット	E-29-3	円形	34	32	16	22.27	22.11			
	3078	柱穴	E-30-1	円形	42	38	41	22.34	21.93			SB-97
	3079	ピット	D-30-6	円形	33	32	23	22.09	21.86			
	3080	ピット	D-30-6	円形	22	21	32	22.07	21.75			
	3081	欠										
	3082	ピット	D-31-11	円形	14	13	11	22.46	22.35			
	3083	ピット	D-30-11	円形	32	29	30	22.04	21.74			
	3084	ピット	D-30-7	円形	29	23	7	22.01	21.94			
	3085	ピット	D-30-12	楕円形	50	40	36	22.00	21.64			
	3086	ピット	D-30-13	楕円形	51	34	25	22.22	21.97			テラス:22.08
	3087	ピット	D-30-9	不整円形	32	—	23	21.97	21.74			
	3088	ピット	D-30-9	円形	54	37	25	21.96	21.71			
	3089	ピット	D-30-9	円形	64	61	48	22.00	21.52			テラス:21.69
	3090	ピット	D-30-13	楕円形	—	30	14	22.09	21.95			
	3091	ピット	D-30-14	円形	44	41	18	22.05	21.87			テラス:21.98
	3092	ピット	D-30-14	楕円形	60	47	12	22.05	21.93			テラス:22.01
	3093	ピット	D-30-14	円形	33	25	11	22.08	21.97			
	3094	ピット	D-30-15	不整円形	44	38	35	22.04	21.69			
	3095	柱穴	D-30-23	楕円形	69	58	20	22.33	22.13			テラス:22.21 SB-99
	3096	ピット	D-30-22	円形	20	19	20	22.39	22.19			
	3097	柱穴	E-30-6	楕円形	54	44	35	22.49	22.14			SB-100
	3098	ピット	E-30-6	円形	33	30	24	22.41	22.17			
	3099	ピット	E-30-7	円形	33	27	13	22.42	22.29			
	3100	ピット	E-30-7	円形	27	—	18	22.43	22.25			
	3101	ピット	E-30-7	円形	25	25	9	22.44	22.35			
	3102	ピット	E-30-12	楕円形	40	31	37	22.45	22.08			
	3103	ピット	E-30-6	円形	26	21	—	22.42	—			
	3104	ピット	E-30-6	円形	27	21	11	22.42	22.31			
	3105a	ピット	E-30-3	不整楕円形	68	51	26	22.46	22.20			
	3105b	ピット	E-30-3	円形	36	31	37	22.43	22.06			
	3106	ピット	E-30-12	円形	38	36	19	22.46	22.27			テラス:22.32
	3107	ピット	E-30-12	円形	25	25	12	22.45	22.33			
	3108	柱穴	E-30-12	円形	35	32	21	22.46	22.25			SA-102
	3109a	柱穴	E-30-9	円形	37	30	71	22.35	21.64			SB-100
	3109b	ピット	E-30-9	楕円形	—	26	29	22.35	22.06			
	3110	柱穴	E-30-18	円形	30	28	14	22.24	22.10			SA-102

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
DⅡ地区	3111	ピット	E-30-19	円形	29	26	22	22.22	22.00			
	3112	ピット	D-31-21	円形	28	24	—	—	—			
	3113	ピット	D-31-12	円形	30	28	36	22.24	21.88			
	3114	ピット	D-31-18	円形	19	17	18	22.28	22.10			
	3115	柱穴	D-31-13	円形	22	20	41	22.16	21.75			SA-111
	3116	ピット	D-31-19	円形	17	17	9	22.21	22.12			
	3117	柱穴	D-31-20	円形	21	20	15	22.01	21.86			SA-110
	3118	ピット	D-31-24	円形	24	23	26	22.19	21.93			
	3119	ピット	E-31-6	楕円形	32	26	36	22.33	21.97			
	3120	ピット	E-30-10	円形	33	32	20	22.34	22.14			
	3121	ピット	E-31-9	楕円形	26	17	—	22.21	—			未掘
	3122	ピット	E-31-5	円形	22	19	15	22.09	21.94			
	3123	凹み	E-31-13	円形	17	16	—	22.31	—			
	3124	ピット	E-32-2	円形	20	18	6	21.99	21.93			
E地区	301a	溝	—	—	—	110	14	21.79	21.65	512～632 鉄:24・25・40～43　石:31～36 木:187・188	Ⅱ～Ⅴ	
	301b	溝	—	—	—	212	62	21.82	21.20			
	302	溝	—	—	—	100	28	22.06	21.78	633・土師器・珠洲	Ⅳ	
	303a	溝	—	—	—	121	52	22.11	21.59	634・土師器	Ⅳ	
	303b	溝	—	—	—	62	13	22.01	21.88			
	304a	溝	E-35-12	—	510	117	9	22.04	21.95	635 木:190～193	Ⅴ	
	304b	井戸状遺構	E-35-12	円形	58	51	106	22.09	21.03			
	305	井戸	E-35-7	円形	105	96	127	22.05	20.78	636～638・土師器	Ⅴ	
	306	凹み	E-34-5	円形	98	94	—	—	—			未実測
	307	欠										
	308	土坑	E-36-17	円形	224	—	32	22.04	21.72	土師器	—	
	309	井戸	E-36-20	円形	108	98	133	21.91	20.58	木:189・199～201		
	310a	井戸	E-37-24	円形	113	110	169	22.03	20.34	639・640 木:194～197	Ⅱ	
	310b	井戸状遺構	E-37-24	円形	67	—	118	22.01	20.83			
	310c	井戸状遺構	E-37-24	円形	84	—	99	22.02	21.03			
	311	井戸	E-37-25	円形	142	122	195	22.04	20.09	641 木:211	Ⅲ	
	312	井戸	E-38-17	円形	114	104	143	22.18	20.75	642～646・土師器 木:202・203	Ⅲb	
	313	井戸	E-38-24	円形	103	101	172	22.24	20.52	647～653・土師器 鉄:22・23　石:30　木:204～207	Ⅲb	
	314	井戸	F-39-1	円形	122	100	195	22.03	20.08	654～658・土師器 木:208・209	Ⅲb	
	315	柱穴	E-38-22	円形	32	29	36	22.11	21.75			SA-125
	316	柱穴	E-38-23	円形	47	40	21	22.14	21.93			SA-125
	317	ピット	F-38-3	円形	23	21	14	22.21	22.07			
	318	柱穴	F-38-3	円形	23	22	20	22.20	22.00			SA-125
	319	ピット	F-38-4	円形	26	24	22	22.16	21.94			
	320	柱穴	F-38-4	円形	36	29	28	22.14	21.86			SA-125
	321	柱穴	F-38-5	円形	27	27	—	22.14	—			SA-125
	322	ピット	E-39-21	円形	36	36	—	—	22.12	679	Ⅲa	
	323	ピット	E-38-25	円形	34	28	10	22.30	22.20			
	324	ピット	E-38-24	円形	46	46	15	22.29	22.14			
	325	井戸	E-38-15	円形	254	220	265	22.31	19.66	661～667 鉄:44　木:212～263	Ⅰb	
	326	ピット	E-38-20	円形	41	35	48	22.32	21.84			
	327	ピット	E-38-15	円形	31	28	47	22.31	21.84			
	328	土坑	E-39-11	楕円形	98	59	28	22.31	22.03	土師器	—	
	329	欠										
	330	欠										
	331	井戸	E-39-12	円形	106	100	177	22.30	20.53	668～672・青磁 木:270～272	Ⅲb	
	332	欠										
	333	欠										
	334	欠										
	335	井戸	E-39-11	楕円形	102	78	205	22.24	20.19	木:264～266		
	336	欠										
	337	欠										
	338	ピット	E-38-15	楕円形	26	21	22	22.11	21.89			
	339a	井戸	E-38-10	円形	111	97	198	22.13	20.15	659・660・珠洲	Ⅲa	
	339b	土坑	E-38-10	円形	—	60	11	22.27	22.16			
	339c	ピット	E-38-10	円形	22	—	8	22.11	22.03			
	340	ピット	E-38-10	円形	30	25	29	22.13	21.84			

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
E地区	341	ピット	E-39-6	円形	43	37	14	22.29	22.15			
	342a	ピット	E-39-6	円形	29	28	20	22.27	22.07			
	342b	ピット	E-39-6	円形	29	—	11	22.27	22.16			
	343	ピット	E-39-1	円形	27	26	17	22.21	22.04			
	344	ピット	E-39-1	円形	25	24	31	22.23	21.92			
	345	欠										
	346	ピット	E-39-1	円形	38	37	29	22.25	21.96			
	347	ピット	E-39-1	円形	35	32	36	22.25	21.89			
	348	ピット	E-39-1	円形	30	30	31	22.25	21.94			
	349	土坑	D-39-21	不定形	—	—	24	22.29	22.05			
	350	欠										
	351	欠										
	352	ピット	E-39-1	円形	40	40	18	22.28	22.10			
	353	ピット	E-38-13	楕円形	60	41	43	22.29	21.86			
	354	ピット	E-38-13	円形	40	33	19	22.31	22.12			
	355	ピット	E-38-13	円形	17	16	33	22.30	21.97			
	356	ピット	E-38-12	円形	41	38	23	22.30	22.07			
	357	土坑	E-38-12	楕円形	95	67	26	22.29	22.03			
	358	ピット	E-38-13	円形	44	42	35	22.31	21.96			
	359a	土坑	E-38-12	不定形	63	—	25	22.28	22.03			
	359b	ピット	E-38-12	円形	35	31	47	22.28	21.81			
	359c	ピット	E-38-12	楕円形	33	23	70	22.28	21.58			
	360a	ピット	E-38-12	楕円形	54	38	19	22.30	22.11			
	360b	ピット	E-38-12	円形	17	15	31	22.30	21.99			
	361	欠										
	362	柱穴	E-38-8	楕円形	36	26	52	22.30	21.78			SB-122
	363	ピット	E-38-8	楕円形	—	24	16	22.31	22.15			
	364	ピット	E-38-8	円形	34	33	47	22.35	21.88			
	365a	ピット	E-38-3	楕円形	68	50	21	22.39	22.18			
	365b	柱穴	E-38-3	楕円形	39	30	29	22.39	22.10			SB-122
	366	溝	—	—	—	83	6	22.39	22.33	678	Ⅰa	
	367	風倒木痕	D-38-23	不整楕円形	284	173	—	—	—			
	368a	土坑	D-38-22	楕円形	71	48	11	22.34	22.23			
	368b	ピット	D-38-22	円形	23	18	8	22.33	22.25			
	369	ピット	D-38-22	円形	29	24	32	22.28	21.96			
	370	土坑	D-38-22	不定形	77	55	16	22.28	22.12	土師器	—	
	371	ピット	D-38-22	円形	24	21	31	22.28	21.97			
	372	ピット	D-38-22	円形	25	25	24	22.28	22.04			
	373	ピット	D-38-22	円形	26	26	37	22.32	21.95			
	374	ピット	E-38-2	円形	29	28	18	22.34	22.16			
	375	土坑	E-38-2	楕円形	87	67	19	22.36	22.17			
	376	柱穴	E-38-2	円形	25	22	10	22.35	22.25			SB-122
	377	ピット	E-38-2	円形	35	33	38	22.33	21.95			
	378a	ピット	E-38-2	円形	35	—	20	22.33	22.13			
	378b	柱穴	E-38-2	円形	29	27	32	22.33	22.01			SB-123
	379a	ピット	E-38-1	円形	60	—	19	22.32	22.13			
	379b	ピット	E-38-1	円形	40	38	42	22.32	21.90	土師器	—	
	380a	柱穴	E-38-6	円形	27	26	24	22.28	22.04			SB-122
	380b	柱穴	E-38-6	楕円形	33	25	23	22.27	22.04			SA-121
	381a	ピット	E-38-6	円形	33	31	8	22.30	22.22			
	381b	ピット	E-38-6	円形	19	18	22	22.28	22.06			
	382	ピット	E-38-6	円形	32	29	11	22.31	22.20			
	383	柱穴	E-38-6	円形	42	42	24	22.26	22.02			SA-121
	384	柱穴	E-38-6	円形	24	24	22	22.28	22.06			SB-122
	385	凹み	E-38-1	円形	36	30	—	—	—			未実測
	386	土坑	E-38-1	円形	121	117	38	22.30	21.92	673・674・土師器	Ⅲ	
	387	ピット	D-38-21	円形	20	20	46	22.31	21.85			
	388	ピット	D-38-21	円形	26	25	13	22.25	22.12			
	389	凹み	D-38-22	円形	33	31	—	—	—			未実測
	390	柱穴	D-38-22	円形	26	26	35	22.28	21.93			SB-123
	391	ピット	D-38-21	楕円形	32	23	9	22.25	22.16			
	392	土坑	D-38-21	不定形	—	—	—	—	—	675・676・土師器・珠洲 鉄:45　木:210	Ⅲb～Ⅳ	
	393～398	欠										
	394	欠										
	395	欠										
	396	欠										
	397	欠										
	398	欠										
	399	柱穴	E-37-5	楕円形	33	26	36	22.25	21.89			SB-123
	400	柱穴	E-38-1	楕円形	40	31	18	22.31	22.13			SB-123

地区名	遺構番号	種 別	グリッド	平面形	規 模		cm	深 度 m		遺 物	時 期	備 考
					長径	短径	深度	上端	底面			
E地区	401	欠										
	402	欠										
	403	ピット	E-37-4	円形	21	19	7	22.21	22.14			
	404	ピット	E-37-5	円形	27	24	9	22.27	22.18			
	405	柱穴	E-37-5	楕円形	24	18	13	22.23	22.10			SB-122
	406	ピット	E-37-10	円形	24	21	13	22.21	22.08			
	407	ピット	E-37-10	円形	42	39	27	22.20	21.93			
	408	欠										
	409	柱穴	E-37-9	円形	30	28	42	22.17	21.75			SA-121
	410	欠										
	411	ピット	E-37-4	円形	27	26	29	22.20	21.91			
	412	ピット	E-37-4	楕円形	35	29	15	22.22	22.07			
	413	井戸	D-37-24	円形	109	106	160	22.17	20.57	677	Ⅱ	
	414	欠										
	415a	撹乱	E-38-7	隅丸長方形	187	62	—	—	—	土師器	Ⅲb	
	415b	柱穴	E-38-7	円形	33	—	13	22.31	22.18			SB-122
	415c	ピット	E-38-7	円形	20	—	3	22.32	22.29			
	416	井戸	E-38-18	円形	163	150	144	22.21	20.77	木:267～269		
	417	井戸	E-38-23	楕円形	134	114	101	22.21	21.20			
	418	欠										
	419	ピット	D-37-25	楕円形	30	25	16	22.19	22.03			
	420	ピット	D-37-24	円形	31	30	16	22.19	22.03			
	421	欠										
	422	ピット	D-37-24	円形	29	29	12	22.19	22.07			
	423	ピット	D-37-25	円形	20	18	4	22.18	22.14			
	424	ピット	D-37-25	円形	27	26	17	22.25	22.08			
	425	ピット	E-37-5	円形	31	30	19	22.25	22.06			
	426	柱穴	D-37-25	円形	26	24	17	22.25	22.08			SB-122
	427	ピット	E-37-4	円形	18	17	17	22.20	22.03			
	428	ピット	D-35-16	楕円形	75	58	85	21.92	21.07			
	429	ピット	D-35-16	楕円形	—	58	54	21.92	21.38			
	430	ピット	D-35-16	円形	58	53	73	21.94	21.21			
	431	ピット	D-35-17	円形	58	52	88	21.91	21.03			
	432	ピット	D-35-22	楕円形	92	66	60	21.95	21.35			
	433	ピット	D-35-23	円形	81	74	43	22.00	21.57			
	434	ピット	E-36-3	楕円形	62	46	48	22.02	21.54			
	435	ピット	E-36-3	円形	50	46	94	22.02	21.08			
	436	ピット	E-36-3	円形	49	46	—	21.97	—			
	437	ピット	E-36-3	円形	58	—	51	21.97	21.46			
	438	ピット	D-37-25	円形	21	21	9	22.19	22.10			
	439	ピット	D-37-25	円形	22	20	10	22.23	22.13			
	440	ピット	D-37-5	円形	28	28	7	22.27	22.20			
	441	ピット	E-37-4	円形	17	15	15	22.22	22.07			
	442	ピット	D-37-5	円形	21	19	18	22.25	22.07			
	443	ピット	E-37-4	円形	24	20	7	22.19	22.12			
	444	柱穴	E-37-10	円形	34	32	23	22.20	21.97			SA-121
	445	ピット	E-37-10	楕円形	24	18	10	22.24	22.14			
	446	柱穴	E-38-1	円形	38	—	28	22.39	22.11			SB-123
	447	土坑	E-37-17	隅丸長方形	109	79	27	21.94	21.67			
	448	ピット	E-37-7	円形	92	—	56	22.00	21.44			
	449	ピット	D-38-22	円形	23	19	52	22.27	21.75			
	450	柱穴	D-38-22	円形	31	26	35	22.28	21.93			SB-122
	451	ピット	E-38-2	円形	36	36	30	22.38	22.08			
	452	ピット	D-39-21	円形	29	—	13	22.20	22.07			
	453	ピット	E-39-2	円形	21	—	21	22.21	22.00			
	454	ピット	E-39-2	円形	26	26	7	22.17	22.10			
	455	ピット	E-39-2	円形	40	38	30	22.19	21.89			
	456	ピット	E-38-6	円形	32	32	21	22.29	22.08			
	457	ピット	E-38-11	円形	29	26	30	22.30	22.00			
	458	ピット	E-38-7	楕円形	43	32	22	22.30	22.08			
	459	ピット	E-38-7	円形	31	25	20	22.29	22.09			
	460	井戸状遺構	E-38-18	円形	62	—	112	22.18	21.06			

附表 2　馬場・天神腰遺跡　建物跡（SB）・柵列（SA）一覧表

No.	建物名	地区名	規模	面積（㎡）	方位	遺構番号	グリッド	平面形	規模（cm） 長径	短径	深度	深度（m） 上端	底面	遺物	時期	備考
1	SB-1	A地区	2×1 (4.2)×3.7	15.54	N-18°-W	140	C-7-23	楕円形	33	26	33	22.65	22.32			
						163	C-7-25	円形	30	28	32	22.70	22.38			
						166	D-7-3	円形	32	28	40	22.55	22.15			
						235	D-7-5	楕円形	34	24	40	22.66	22.26			
2	SB-2	A地区	(1～)×1 —×3.1		N-15°-W	143	C-7-23	円形	28	26	27	22.67	22.40			
						147	C-7-23	円形	37	32	23	22.63	22.40			
						159	C-7-25	楕円形	39	27	31	22.67	22.36			
3	SB-3	A地区	(1～)×2 —×4.6		N-75°-W	132	C-7-21	円形	28	27	32	22.65	22.33			
						138	C-7-22	円形	30	30	16	22.63	22.47			
						152a	D-7-4	楕円形	43	37	48	22.64	22.16			
4	SB-4	A地区	(1～)×2 —×4.0		N-1°-E	111	C-6-25	楕円形	45	39	29	22.62	22.33	80	Ⅲ	
						113	C-6-20	楕円形	45	35	26	22.66	22.40			
						130	C-7-22	円形	21	19	22	22.61	22.39			
						133	C-7-22	楕円形	48	40	25	22.65	22.40			
						224	C-6-25	楕円形	30	26	24	22.63	22.39			
5	SB-5	A地区	(1～)×2 —×4.6		N-70.5°-W	97	C-6-18	円形	28	27	50	22.61	22.11			
						101	C-6-24	円形	35	31	47	22.66	22.19			
						114	C-6-25	楕円形	22	15	57	22.63	22.06			
						119	C-6-20	円形	31	29	40	22.63	22.23			
6	SA-6	A地区	2 4.1		N-56°-W	99	C-6-23	円形	20	19	15	22.65	22.50			
						110	C-6-24	楕円形	22	19	4	22.55	22.51			
						127	D-6-5	円形	21	20	—	—	—			
7	SA-7	A地区	1 1.4		N-5.5°-E	175	D-7-10	楕円形	25	23	22	22.60	22.38			
						181	D-7-15	楕円形	25	20	15	22.59	22.44			
8	SA-8	A地区	2 3.8		N-4.5°-E	168	D-7-8	円形	23	23	24	22.43	22.19			
						173	D-7-13	円形	21	21	22	22.55	22.33			
						190	D-7-18	円形	33	(18)	—	—				
9	SA-10	A地区	8×2 12.1×2.6		N-82.5°-W	109	C-6-24	楕円形	20	17	12	22.64	22.52			
						115	C-6-25	楕円形	25	20	19	22.63	22.44			
						129	D-7-1	円形	20	20	21	22.61	22.40			
						161	C-7-25	円形	29	28	55	22.69	22.14			
						171	D-7-4	円形	25	24	7	22.63	22.56			
						225	C-6-25	楕円形	20	12	19	22.63	22.44			
						231	D-7-3	円形	22	21	—	—	—			
						234	D-7-5	円形	27	27	65	22.65	22.00			
						244	C-6-24	円形	30	18	—	22.62	—			テラス：21.30
10	SB-21	B地区	4×2 （間仕切） 7.4×4.1	30.34	N-74.5°-W	1127	D-13-21	円形	44	41	11	22.50	22.39			テラス：22.30
						1128	E-12-5	円形	50	42	40	22.53	22.13			
						1143	D-13-17	円形	22	21	—	—	—			未実測
						1171	D-13-23	円形	40	39	26	22.42	22.16			
						1182a	D-13-24	円形	40	—	51	22.46	21.95			
						1222	E-13-1	円形	28	27	26	22.54	22.28			
						1241	E-13-3	円形	28	27	17	22.52	22.35			
						1247	E-13-4	円形	28	27	27	22.49	22.22			
						1258	E-13-9	円形	25	21	—	22.54	—			
						1385	E-13-3	円形	22	22	25	22.49	22.24			
						1404	D-13-16	円形	21	20	—	22.42	—			
11	SB-22	B地区	3×2 8.2×5.1	41.82	N-73°-W	1142	D-13-17	円形	29	26	33	22.44	22.11			
						1158b	D-13-18	円形	41	—	31	22.43	22.12			
						1182b	D-13-24	円形	40	—	20	22.43	22.23			
						1220	E-13-1	円形	45	42	37	22.57	22.20			
						1232	E-13-7	円形	34	30	35	22.56	22.21			
						1254	E-13-8	円形	36	33	25	22.53	22.28			
						1271	E-13-15	円形	41	39	29	22.55	22.26			
						1389	E-13-10	円形	25	25	19	22.51	22.32			
						1405	D-13-25	円形	23	20	—	22.44	—			
12	SB-23	B地区	3×2 5.2×3.3	17.16	N-17°-E	1144	D-13-17	楕円形	17	11	—	—	—			未実測
						1158a	D-13-18	円形	29	26	26	22.43	22.17			
						1166	D-13-23	円形	30	28	18	22.48	22.30			
						1170	D-13-24	円形	30	28	33	22.42	22.09			
						1221	E-13-1	円形	31	31	40	22.53	22.13			テラス：22.26
						1224	E-13-1	円形	30	27	20	22.55	22.35			テラス：22.41
						1232	E-13-7	円形	34	30	35	22.56	22.21			
						1237	E-13-8	円形	31	31	30	22.51	22.21			テラス：22.28
						1242	E-13-3	円形	32	30	28	22.52	22.24			

No.	建物名	地区名	規 模	面積 (㎡)	方 位	遺構番号	グリッド	平面形	規 模 (cm)			深 度 (m)		遺 物	時期	備 考
									長径	短径	深度	上端	底面			
13	SB-24	B地区	3×2 7.3×3.0	21.90	N-14.5° -E	1163	D-13-23	円形	36	36	38	22.47	22.09			
						1172	D-13-18	円形	39	35	41	22.44	22.03			
						1180	D-13-24	円形	29	29	44	22.40	21.96			テラス:22.27
						1183	D-13-25	円形	35	32	43	22.43	22.00			
						1236	E-13-7	円形	29	24	37	22.51	22.14			
						1251	E-13-4	円形	28	28	30	22.48	22.18			
						1395	E-13-12	円形	22	21	20	22.55	22.35			
						1396	E-13-13	円形	25	24	42	22.55	22.13			
14	SB-25	B地区	3×(1～) 5.6× —		N-74.5° -W	1151	D-13-12	円形	41	37	48	22.45	21.97			
						1174	D-13-14	円形	109	105	39	22.47	22.08			テラス:22.12
						1187	D-13-20	円形	50	46	24	22.44	22.20			テラス:22.28
						1192	D-14-11	円形	51	49	57	22.48	21.91			1191と一体 テラス:22.03
						1384	D-13-18	円形	51	48	34	22.43	22.09			
15	SB-26	B地区	(1～)×2 — ×4.2		N-76.5° -W	1149	D-13-13	円形	49	44	21	22.48	22.27			
						1176	D-13-14	円形	38	33	20	22.44	22.24			
						1190	D-13-20	円形	53	53	24	22.46	22.22			テラス:22.27
16	SA-27	B地区	3 5.7		N-69° -W	1382	E-12-9	円形	23	22	18	22.51	22.33			
						1383	E-12-10	楕円形	40	32	34	22.57	22.23			
						1393a	E-13-11	円形	33	30	28	22.56	22.28			
						1394	E-13-12	円形	38	37	26	22.56	22.30			
17	SA-28	B地区	1 1.9		N-84° -W	1397	E-13-18	円形	28	23	30	22.58	22.28			
						1398	E-13-19	円形	30	24	28	22.58	22.30			
18	SA-29	B地区	6×2 10.3×2.5		N-18° -E	1184	D-13-25	円形	26	25	13	22.42	22.29			
						1200	D-14-17	円形	25	25	28	22.43	22.15			
						1204	D-14-17	円形	31	27	17	22.48	22.31			テラス:22.36
						1214	D-13-25	円形	24	23	25	22.45	22.20			
						1217	D-14-21	円形	33	30	39	22.45	22.06			テラス:22.14
						1273	E-13-10	円形	31	31	16	22.52	22.36			
						1275	E-13-15	円形	39	32	33	22.59	22.26			1277と一体
						1283	E-14-1	円形	28	27	27	22.49	22.22			テラス:22.34
						1401	E-13-15	円形	39	38	41	22.58	22.17			
19	SB-30	B地区	2×2 4.0×4.0	16.00	N-10° -E	1415	D-14-23	円形	36	35	10	22.44	22.34			
						1437	E-14-5	円形	51	46	38	22.54	22.16			
						1439	E-14-4	円形	45	44	8	22.50	22.42			
						1443	E-14-2	円形	44	41	16	22.50	22.34			
						1452	E-14-7	円形	35	33	22	22.56	22.34			
						1455	E-14-13	円形	49	37	20	22.59	22.39			
						1463	E-14-9	楕円形	37	30	31	22.55	22.24			
						1466	E-14-14	円形	31	25	29	22.61	22.32			
20	SA-31	B地区	5×1 6.3×2.4		N-14.5° -E	1438	E-14-4	円形	30	29	30	22.54	22.24			
						1440	E-14-3	円形	33	30	17	22.50	22.33			
						1453	E-14-8	円形	43	40	32	22.56	22.24			テラス:22.34
						1454	E-14-8	円形	42	40	16	22.53	22.37			テラス:22.43
						1480	E-14-17	円形	31	26	23	22.61	22.38			
						1482	E-14-12	円形	28	28	42	22.61	22.19			
						1483	E-14-12	円形	40	37	24	22.58	22.34			テラス:22.43
21	SA-32	B地区	6 8.8		N-76.5° -W	1406	D-14-14	円形	24	22	23	22.32	22.09			
						1411	D-14-15	円形	25	24	27	22.37	22.10			
						1520	D-15-24	円形	26	21	36	22.47	22.11			
						1523	D-15-18	円形	37	31	51	22.44	21.93			
						1528	D-15-17	円形	34	27	43	22.42	21.99			
						1534	D-15-17	円形	34	28	27	22.41	22.14			
						1539	D-15-16	円形	30	26	27	22.38	22.11			
22	SB-33	B地区	1×1 2.7×2.4	6.48	N-10° -E	1525	D-15-18	円形	42	38	49	22.45	21.96			テラス:22.11
						1536	D-15-17	円形	32	26	34	22.40	22.06			
						1544	D-15-21	円形	37	32	24	22.40	22.16			
						1548	D-15-23	円形	31	26	30	22.43	22.13			
						1549	D-15-23	円形	40	37	34	22.45	22.11			テラス:22.35
23	SB-34	B地区	2×1 3.6×3.1	11.16	N-70° -W	1412	D-14-20	円形	25	23	8	22.38	22.30			
						1424	D-14-25	円形	42	41	24	22.46	22.22			
						1431	E-14-5	円形	48	40	47	22.48	22.01			
						1542	D-15-16	円形	34	31	35	22.39	22.04			
						1547	D-15-22	円形	41	37	53	22.43	21.90			
						1571	E-15-1	円形	30	25	37	22.49	22.12			テラス:22.22

No.	建物名	地区名	規模	面積(㎡)	方位	遺構番号	グリッド	平面形	規模(cm) 長径	短径	深度	深度(m) 上端	底面	遺物	時期	備考
24	SB-35	B地区	2×2 3.5×3.5	12.25	N-66°-W	1434	E-14-5	円形	35	31	30	22.49	22.19			テラス:22.35
						1461	E-14-10	円形	51	50	26	22.57	22.31			
						1543	D-15-21	不整円形	50	50	69	22.47	21.78			テラス:22.00
						1566	E-15-2	円形	36	—	28	22.50	22.22			
						1569	E-15-1	円形	62	52	36	22.48	22.12			テラス:22.21
						1582	E-14-10	円形	25	22	9	22.58	22.49			
						1588	E-15-7	円形	35	35	48	22.56	22.08			テラス:22.21
						1621	E-15-11	不整円形	53	45	40	22.56	22.16			
25	SA-36	B地区	4 6.3		N-77°-W	1578	E-14-10	円形	29	26	37	22.57	22.20			
						1584	E-14-10	円形	29	27	18	22.55	22.37			
						1586	E-15-6	円形	32	28	21	22.55	22.34			
						1618	E-15-13	円形	34	30	27	22.54	22.27			
26	SB-37	B地区	2×2 3.1×3.1	9.61	N-73°-W	1326	E-15-10	円形	40	35	40	22.55	22.15	238	Ⅲ	テラス:22.24
						1595a	E-15-9	楕円形	40	—	29	22.53	22.24			
						1606	E-15-15	円形	37	29	15	22.57	22.42			
						1615	E-15-14	不整円形	41	37	34	22.55	22.21			テラス:22.34
						1616	E-15-14	円形	31	30	39	22.58	22.19			
						1632	E-15-19	円形	35	27	31	22.60	22.29			
						1635a	E-15-20	円形	31	30	27	22.60	22.33			テラス:22.17
						1759	E-16-11	円形	46	41	28	22.56	22.28			テラス:22.32
27	SB-38	B地区	2×2 3.2×3.1	9.92	N-73°-W	1307b	D-16-21	楕円形	—	35	67	22.43	21.76			
						1308b	E-16-3	楕円形	—	44	60	22.44	21.84			
						1308c	D-16-22	円形	43	—	—	22.45	—			
						1355	E-16-1	円形	41	38	64	22.51	21.87	縄文土器	?	テラス:22.16
						1662	E-16-1	楕円形	39	30	25	22.46	22.21			
						1675	E-16-3	円形	35	30	24	22.48	22.24			
						1688b	E-16-6	円形	44	39	48	22.52	22.04			テラス:22.18
						1692	E-16-7	楕円形	47	38	58	22.51	21.93			
28	SB-39	B地区	3×2 4.6×5.6	25.76	N-69.5°-W	1353a	E-16-2	円形	39	—	36	22.45	22.09	青磁	Ⅲ	テラス:22.30
						1665	D-16-22	円形	40	40	22	22.37	22.15			
						1673a	E-16-3	円形	47	47	47	22.44	21.97			テラス:22.08
						1683	E-16-1	円形	42	36	23	22.50	22.27			
						1686b	E-16-6	楕円形	22	15	25	22.53	22.28			
						1697	E-16-12	円形	41	37	37	22.51	22.14			
						1750	E-16-14	円形	39	32	46	22.52	22.06			
						1755	E-16-14	円形	44	40	54	22.51	21.97			
29	SB-40	B地区	4×2 6.7×4.1	27.47	N-15°-E	1350	E-16-18	円形	42	37	23	22.51	22.28	土師器	Ⅲb	テラス:22.38
						1354	E-16-2	楕円形	43	33	44	22.49	22.05			
						1676	E-16-2	楕円形	39	31	30	22.48	22.18			
						1689	E-16-7	円形	42	41	44	22.52	22.08			
						1753	E-16-14	円形	34	32	49	22.52	22.03			
						1761	E-16-16	円形	41	34	47	22.54	22.07			
						1776	E-16-3	円形	34	30	47	22.47	22.00			
30	SB-41	B地区	2×1 3.2×3.1	9.92	N-22°-E	1348	E-16-13	楕円形	41	32	40	22.48	22.08	青磁	Ⅲ	
						1352	E-16-19	円形	33	30	47	22.52	22.05	陶器	—	テラス:22.31
						1766	E-16-17	円形	—	46	41	22.52	22.11			テラス:22.39
						1767	E-16-18	円形	41	37	51	22.49	21.98			
						1778	E-16-8	円形	29	24	19	22.48	22.29			
31	SB-42	B地区	2×(2) 2.8×(3.0)	(8.40)	N-76°-W	1641	D-16-12	円形	37	34	61	22.45	21.84			テラス:21.90
						1644	D-16-14	円形	26	25	—	22.46	—			
						1652a	D-16-18	円形	48	46	50	22.43	21.93			
						1653	D-16-18	円形	29	27	17	22.43	22.26			
32	SB-43	B地区	4×(2) 8.7×(4.5)	(39.15)	N-76°-W	1356	D-17-19	円形	44	38	41	22.47	22.06	鉄:11		
						1357b	D-17-15	楕円形	—	23	66	22.46	21.80	土師器	Ⅲb	
						1650	D-16-20	円形	37	33	18	22.51	22.33			
						1807	D-17-17	円形	32	29	50	22.51	22.01			
						1813	D-17-16	円形	42	40	28	22.49	22.21			
						1827	D-17-23	円形	46	41	25	22.52	22.27			
						1840	D-17-24	円形	35	32	22	22.49	22.27			
33	SB-44	B地区	3×1 6.5×3.6	23.40	N-70°-W	1331	D-17-19	円形	38	32	32	22.48	22.16	324	Ⅲb	
						1782b	D-17-12	円形	39	—	24	22.44	22.20			
						1795a	D-17-20	円形	—	52	38	22.41	22.03			
						1802	D-17-18	円形	38	37	42	22.49	22.07			テラス:22.13
						1814a	D-17-21	楕円形	—	46	19	22.36	22.17			テラス:22.22
						1820	D-17-22	円形	44	44	28	22.52	22.24			テラス:22.36
						1839	D-17-23	楕円形	56	40	34	22.52	22.18			テラス:22.32
						1861b	E-17-4	円形	—	54	27	22.51	22.24			テラス:22.30
34	SB-45	B地区	2×(1～) 3.4×—		N-20°-E	1339b	D-17-20	円形	35	27	60	22.48	21.88	土師器	Ⅲb	テラス:22.16
						1796	D-17-20	円形	54	46	41	22.44	22.03			テラス:22.08
						1845a	D-17-24	円形	41	35	24	22.48	22.24			
						1849	E-17-5	楕円形	28	21	36	22.44	22.08			

No.	建物名	地区名	規 模	面積 (㎡)	方 位	遺構番号	グリッド	平面形	規 模 (cm) 長径	短径	深度	深 度 (m) 上端	底面	遺 物	時期	備 考
35	SB-46	B地区	(1～)×2 — ×4.9		N-67° -W	1342b	D-17-25	円形	39	31	23	22.42	22.19	土師器	Ⅲ?	
						1797	D-17-19	円形	35	31	41	22.46	22.05			
						1801	D-17-18	円形	41	39	20	22.51	22.31			
36	SB-47	B地区	5×2(+1) 庇付 5.8×3.8 1.2×3.6	26.36	N-15° -E	1315b	E-17-1	円形	66	50	45	22.52	22.07			
						1319b	E-17-13	円形	39	—	39	22.52	22.13			
						1786b	D-17-12	円形	26	24	43	22.47	22.04			
						1799b	D-17-19	円形	40	37	24	22.48	22.24			
						1803	D-17-18	円形	39	39	30	22.49	22.19			
						1805	D-17-18	円形	40	40	39	22.52	22.13			テラス:22.33
						1808	D-17-17	楕円形	56	43	43	22.52	22.09			テラス:22.26
						1817	D-17-22	円形	29	27	30	22.43	22.13			
						1830	D-17-19	円形	19	19	24	22.52	22.28			
						1834	D-17-24	楕円形	45	36	42	22.51	22.09			テラス:22.29
						1863a	E-17-3	円形	29	25	26	22.46	22.20			
						1868	E-17-1	円形	43	41	42	22.48	22.06			
						1871	E-17-6	円形	25	24	44	22.53	22.09			
						1878	E-17-7	円形	41	39	32	22.53	22.21			
						1881	E-17-8	円形	46	45	41	22.53	22.12			テラス:22.25
						1882	E-17-8	円形	43	42	22	22.52	22.30			
37	SB-48	B地区	(1～)×(1～) —		N-14° -E	1323	D-17-25	円形	44	44	42	22.46	22.04			
						1342c	D-18-21	円形	39	—	66	22.43	21.77	土師器	Ⅲ？	テラス:22.29
						1791	D-17-20	円形	43	36	36	22.42	22.06			
38	SB-49	B地区	3×(1～) 6.0× —		N-11° -E	1322	E-17-10	円形	68	61	33	22.48	22.15			テラス:22.26
						1340	D-17-20	円形	65	58	50	22.42	21.92	土師器	Ⅲb	
						1341a	D-17-25	楕円形	41	31	51	22.44	21.93	土師器	Ⅲ	テラス:22.17
						1854a	E-17-5	楕円形	51	40	65	22.47	21.82			
39	SA-50	B地区	2 2.8		N-68° -W	1105	D-11-8	楕円形	23	18	22	22.40	22.18			
						1377	D-11-13	円形	28	25	20	22.40	22.20			
						1378	D-11-14	円形	29	29	21	22.44	22.23			
40	SB-61	CⅡ地区	(1～)×1 — ×2.4		N-13.5° -W	1732	D-23-11	円形	30	27	29	22.06	21.77			
						1734	D-23-6	楕円形	30	23	38	22.26	21.88			
						1740	D-23-13	円形	30	29	19	22.13	21.94			
41	SB-62	CⅡ地区	(1～)×2 — ×3.3		N-82.5° -W	1735	D-23-12	円形	28	27	29	22.16	21.87			
						1737	D-23-12	円形	24	21	31	22.14	21.83			
						1742	D-23-13	円形	29	25	14	22.11	21.97			
42	SA-73	DⅠ地区	3×1 5.4×2.5		N-17.5° -E	2411	D-24-22	円形	43	41	28	22.18	21.90			
						2414	D-24-23	円形	39	35	20	22.20	22.00			
						2415	D-24-18	円形	30	30	58	22.14	21.56			
						2416	D-24-18	円形	28	25	21	22.13	21.92			
						2417	D-24-13	円形	32	30	27	22.11	21.84			
						2418	D-24-14	円形	39	39	48	22.10	21.62			
						2419	D-24-14	円形	29	23	68	22.09	21.41			
						2420	D-24-14	円形	35	33	37	22.10	21.73			テラス:21.80
43	SA-74	DⅠ地区	(1～)×(1～) —		N-16° -E	2403	D-24-16	円形	49	42	6	22.20	22.14			
						2405	D-24-17	円形	43	39	11	22.19	22.08			
						2410	D-24-13	円形	26	26	10	22.11	22.01			
						2413	D-24-18	円形	31	28	50	22.17	21.67			テラス:21.72
						2474	D-24-13	円形	30	28	19	22.10	21.91			
44	SA-76	DⅠ地区	1 1.5		N-21° -E	2425	D-24-20	円形	31	29	43	21.95	21.52			
						2475	D-24-15	円形	36	31	35	21.98	21.63			テラス:21.82
45	SA-77	DⅠ地区	3 4.1		N-75.5° -W	2436	D-25-13	円形	26	25	14	22.05	21.91			
						2440	D-25-19	円形	35	33	18	22.03	21.85			
						2441	D-25-19	円形	33	32	25	22.05	21.80			
						2473	D-25-12	円形	30	27	11	22.05	21.94			
46	SA-78	DⅠ地区	2 2.8		N-78° -W	2433b	D-25-17	円形	30	—	102	22.04	21.02			
						2437	D-25-18	円形	26	20	15	22.02	21.87			
						2480	D-25-18	円形	25	23	32	22.07	21.75			
47	SB-81	DⅠ地区	2×1 3.9×3.5	13.65	N-81° -W	2443	D-25-18	円形	32	31	30	22.07	21.77			
						2444	D-25-23	円形	39	34	24	22.01	21.77			
						2445	D-25-24	円形	37	31	20	22.08	21.88			
						2447	E-25-4	円形	37	35	51	22.04	21.53			
						2448	E-25-3	円形	34	34	28	22.04	21.76			
						2449	E-25-2	円形	40	38	34	22.07	21.73			
48	SB-82	DⅠ地区	3×1 6.0×3.0	18.00	N-80.5° -W	2427	D-25-21	円形	24	23	8	22.11	22.03			
						2430	D-25-16	円形	33	31	25	22.04	21.79			
						2443	D-25-18	円形	32	31	30	22.07	21.77			
						2444	D-25-23	円形	39	34	24	22.01	21.77			
						2445	D-25-24	円形	37	31	20	22.08	21.88			
						2446	E-25-4	円形	39	38	17	22.06	21.89			
						2451	E-25-3	円形	43	37	12	22.07	21.95			
49	SA-83	DⅠ地区	1 6.0		N-18.5° -E	2460	D-26-17	円形	34	33	15	21.94	21.79			
						2485	E-26-6	円形	24	22	15	22.06	21.91			

No.	建物名	地区名	規模	面積(㎡)	方位	遺構番号	グリッド	平面形	規模(cm) 長径	短径	深度	深度(m) 上端	底面	遺物	時期	備考
50	SA-84	DⅠ地区	3 5.2		N-17.5°-E	2456	D-25-25	円形	33	32	18	22.06	21.88			
						2457	D-25-25	円形	36	28	20	22.04	21.84			
						2458	E-25-5	円形	30	28	9	22.06	21.97			
						2459	E-25-9	円形	30	25	13	22.03	21.90			
51	SB-91	DⅡ地区	2×1 3.9×3.7	14.43	N-15°-E	2507	D-28-22	円形	53	45	33	22.17	21.84			テラス:21.92
						2508a	D-28-17	円形	50	42	45	22.18	21.73			テラス:21.80
						2511	D-28-24	円形	55	51	63	22.15	21.52			
						2513	D-28-19	円形	47	42	56	22.15	21.59			
						3058	D-28-13	円形	42	38	35	22.13	21.78			
						3059	D-28-24	円形	22	19	22	22.11	21.89			
52	SB-92	DⅡ地区	1×1 2.3×3.2	7.36	N-77°-W	2503	E-28-12	円形	33	29	77	22.03	21.26			
						2505	E-28-13	円形	29	28	14	22.02	21.88			
						3061	E-28-14	楕円形	22	18	3	21.99	21.96			
						3062	E-28-19	円形	32	23	11	21.99	21.88			
53	SB-93	DⅡ地区	3×2+3×1 張出付 7.4×4.2 +2.8×5.0	45.08	N-68°-W	2517	D-29-21	円形	36	32	22	22.21	21.99			
						2531	D-29-18	楕円形	51	39	35	22.24	21.89			
						2534b	D-29-24	円形	50	50	62	22.25	21.63			
						2614	E-29-7	円形	53	48	19	22.29	22.10			テラス:22.19
						2618	E-29-2	円形	53	49	34	22.29	21.95	土師器	Ⅲb	テラス:22.04
						2622a	E-29-8	円形	54	49	40	22.33	21.93			テラス:21.99
						2648	E-29-10	円形	33	32	22	22.42	22.20			
						2654	E-30-1	円形	30	27	47	22.34	21.87			
						2666	E-29-10	円形	35	30	45	22.38	21.93			テラス:22.20
						2675	E-30-6	円形	33	28	14	22.42	22.28			
						2692	E-30-11	円形	33	30	53	22.43	21.90			
						2707	E-30-2	円形	51	48	28	22.46	22.18			
						3068	D-29-17	円形	47	43	50	22.26	21.76			テラス:21.84
						3072	D-29-22	円形	36	33	21	22.26	22.05			
						3073	D-29-23	円形	34	30	18	22.25	22.07			
						3076	E-29-1	円形	38	32	30	21.97	21.67			
54	SB-94	DⅡ地区	2×2+1×1 張出付 総柱型 3.9×4.2 +1.5×1.8	19.08	N-71.5°-W	2518	D-29-22	円形	35	32	17	22.16	21.99			
						2520	D-29-22	円形	—	43	57	22.28	21.71			
						2526	D-29-18	円形	44	40	36	22.26	21.90			
						2535b	D-29-25	円形	45	35	52	22.29	21.77			
						2612	E-29-2	円形	48	42	35	22.27	21.92			
						2619	E-29-8	楕円形	64	48	23	22.30	22.07			テラス:22.15
						2621	E-29-9	円形	53	46	13	22.38	22.25			
						2626	E-29-3	円形	42	41	41	22.27	21.86			
						2633	E-29-4	円形	49	—	68	22.32	21.64	土師器	—	テラス:22.00
						3070	D-29-17	円形	33	32	17	22.22	22.05			
55	SB-95	DⅡ地区	3×2 間仕切 6.0×4.5	27.00	N-70.5°-W	2530a	D-29-19	円形	51	46	21	22.22	22.01			
						2543	D-29-20	円形	46	41	34	22.22	21.88			
						2594	D-30-22	円形	37	36	22	22.31	22.09			
						2623	E-29-3	円形	49	48	71	22.30	21.59	424	Ⅳ	
						2632	E-29-4	円形	56	—	37	22.33	21.96			
						2644	E-29-10	円形	46	39	47	22.40	21.93			テラス:22.06
						2651	E-29-5	円形	54	51	24	22.35	22.11			
						2670	E-30-1	円形	37	32	33	22.45	22.12	426	Ⅳ	
						2685c	E-30-6	楕円形	—	24	64	22.42	21.78			
56	SA-96	DⅡ地区	2 3.3		N-72.5°-W	2613	E-29-7	円形	36	31	38	22.06	21.68			
						2615	E-29-8	楕円形	60	35	41	22.28	21.87			テラス:21.97
						2617	E-29-8	円形	45	41	24	22.34	22.10			
57	SB-97	DⅡ地区	3×1 4.9×2.7	13.23	N-72°-W	2533	D-29-24	円形	37	35	26	22.25	21.99			テラス:22.04
						2534c	D-29-24	円形	50	—	14	22.25	22.11			
						2548	D-29-20	円形	30	30	36	22.28	21.92			
						2560	D-30-16	円形	27	27	19	22.28	22.09			
						2568c	D-29-25	円形	—	40	45	22.18	21.73			テラス:22.01
						2581b	D-30-16	楕円形	—	47	84	22.31	21.47			
						3067	D-29-14	円形	29	23	11	22.24	22.13			
						3078	E-30-1	円形	42	38	41	22.34	21.93			
58	SB-98	DⅡ地区	2×1 3.9×2.7	10.53	N-68.5°-W	2577	D-30-18	円形	42	35	33	22.24	21.91			テラス:22.03
						2607	D-30-23	円形	60	55	52	22.40	21.88			テラス:22.02
						2743a	E-30-4	不整円形	—	51	17	22.41	22.24	土師器	Ⅲa	
						2752b	D-30-19	円形	54	49	—	—	—	土師器	Ⅲa	
						2784	D-30-25	円形	40	35	—	—	—			
59	SB-99	DⅡ地区	2×1 4.5×3.3	14.85	N-74°-W	2581a	D-30-16	円形	50	—	117	22.31	21.14			
						2605	D-30-24	円形	63	53	—	—	—			
						2655	E-30-1	円形	40	38	60	22.44	21.84			
						2712a	E-30-2	円形	—	50	47	22.44	21.97			テラス:22.01
						2726a	E-30-8	円形	58	40	68	22.44	21.76			
						3095	D-30-23	楕円形	69	58	20	22.33	22.13			テラス:22.21

No.	建物名	地区名	規 模	面積 (㎡)	方 位	遺構番号	グリッド	平面形	規 模 (cm) 長径	短径	深度	深 度 (m) 上端	底面	遺 物	時期	備 考
60	SB-100	DⅡ地区	2×1 5.0×4.7	23.50	N-15° -E	2587	D-30-17	円形	61	60	68	22.23	21.55	土師器	Ⅲ	テラス:21.62
						2595	D-30-22	円形	36	36	45	22.40	21.95			テラス:21.97
						2740	E-30-4	円形	41	34	68	22.45	21.77			
						2785	D-30-24	円形	66	57	—	22.34	—			2786と一体
						3097	E-30-6	楕円形	54	44	35	22.49	22.14			
						3109a	E-30-9	円形	37	30	71	22.35	21.64			
61	SB-101	DⅡ地区	3×1 5.0×2.8	14.00	N-78.5° -W	2708	E-30-2	円形	38	38	35	22.40	22.05			テラス:22.19 2710と一体
						2719	E-30-3	円形	54	—	80	22.43	21.63			
						2732	E-30-3	楕円形	68	51	41	22.44	22.03	429・土師器	Ⅳ	2733と一体
						2746	D-30-24	不整円形	80	63	—	22.42	—			
						2788	D-30-25	円形	39	36	—	—	—			
						2809	E-30-4	楕円形	53	41	46	22.44	21.98			
62	SA-102	DⅡ地区	3 4.9		N-69° -W	2691	E-30-11	円形	29	21	27	22.44	22.17			
						2706	E-30-13	円形	35	35	24	22.42	22.18			
						3108	E-30-12	円形	35	32	21	22.46	22.25			
						3110	E-30-18	円形	30	28	14	22.24	22.10			
63	SB-103	DⅡ地区	2×2 3.3×2.7	8.91	N-77° -W	2753	D-30-19	円形	44	36	41	22.11	21.70			
						2763	D-30-14	円形	25	22	8	22.11	22.03			
						2780	D-30-19	円形	55	54	—	—	—	土師器 (京都系)	Ⅴb	
						2793a	D-30-25	不整円形	56	42	43	22.37	21.94			
						2824	D-31-11	円形	44	39	53	22.10	21.57			
						2825	D-31-16	円形	38	37	62	22.22	21.60			テラス:21.77
						2848	D-31-16	円形	45	43	50	22.36	21.86			
						2864	D-31-21	円形	56	50	58	22.35	21.77			テラス:22.08
64	SB-104	DⅡ地区	2×1 3.9×2.6	10.14	N-71.5° -W	2790a	D-30-25	楕円形	45	30	—	—	—	土師器	Ⅲb	
						2843	D-31-16	楕円形	56	43	37	22.11	21.74			テラス:22.01
						2853d	D-31-23	不整円形	40	37	51	22.33	21.82			
						2856	D-31-22	不整楕円形	60	48	69	22.34	21.65			テラス:21.91
						2884	E-31-1	円形	40	37	38	22.35	21.97			テラス:22.08
						2895	E-31-2	円形	47	40	30	22.30	22.00			
65	SB-105	DⅡ地区	2×1 4.5×3.2	14.40	N-16° -E	2737a	E-30-9	円形	40	33	69	22.39	21.70			
						2742	E-30-4	円形	46	39	59	22.42	21.83			
						2817c	E-30-15	円形	47	40	114	22.26	21.12			
						2874	D-31-21	円形	34	32	30	22.36	22.06			
						2901	E-31-1	楕円形	49	38	56	22.33	21.77			テラス:21.66
66	SB-106	DⅡ地区	3×2 庇付 4.5×3.2 1.4×3.2	18.88	N-75° -W	2804	E-30-5	円形	39	34	38	22.39	22.01	土師器	—	
						2814	E-30-14	円形	39	35	56	22.31	21.75			
						2816	E-30-15	円形	36	33	46	22.31	21.85			
						2822e	E-30-5	円形	38	24	—	22.37	—			
						2902	E-31-1	円形	24	22	12	22.34	22.22			
						2910	E-31-8	円形	29	28	28	22.29	22.01			テラス:22.04
						2911	E-31-17	楕円形	32	24	17	22.26	22.09			
67	SB-107	DⅡ地区	3×1 庇付 4.7×3.3 1.1×4.7	20.68	N-75° -W	2826	D-31-12	楕円形	44	30	39	22.24	21.85			テラス:21.95
						2840	D-31-18	円形	38	34	64	22.24	21.60	477	Ⅲa	
						2846	D-31-17	円形	31	30	31	22.33	22.02			
						2850c	D-31-17	不整円形	66	—	55	22.33	21.78			
						2859	D-31-22	円形	43	38	47	22.36	21.89			テラス:22.00
						2866a	D-31-22	円形	63	62	45	22.35	21.90	土師器	Ⅲb	
						2925	E-31-4	楕円形	53	38	22	22.18	21.96	土師器 珠洲	Ⅲb	テラス:22.08
						2928b	D-31-23	円形	35	—	42	22.26	21.84			
						2929	D-31-23	円形	33	28	19	22.25	22.06			
						2932	D-31-24	円形	35	35	21	22.17	21.96			
						2953	D-31-19	楕円形	26	21	14	22.17	22.03			
						2960	D-31-13	円形	46	42	36	22.24	21.88			テラス:22.01
68	SB-108	DⅡ地区	2×1 両庇 4.0×3.5 0.6×4.0 1.1×4.0	20.80	N-14° -E	2841	D-31-18	円形	35	—	23	22.21	21.98			
						2896	E-31-3	円形	39	36	51	22.26	21.75			テラス:21.85
						2917	E-31-3	円形	54	47	42	22.22	21.80	土師器	—	テラス:21.88
						2919	E-31-9	楕円形	36	29	40	22.12	21.72			
						2921	E-31-3	円形	50	45	—	—	—	495	Ⅴc	
						2943	D-31-20	楕円形	58	50	52	22.10	21.58	土師器	—	テラス:21.93
						2944	D-31-20	円形	24	22	36	22.09	21.73			
						2950	D-31-19	円形	54	50	75	22.17	21.42			
						2954	D-31-19	円形	26	21	29	22.13	21.84			
						2959	D-31-18	円形	40	40	37	22.24	21.87			
						3006	E-31-5	円形	42	35	25	22.15	21.90			テラス:21.98

No.	建物名	地区名	規 模	面積 (㎡)	方 位	遺構番号	グリッド	平面形	規 模 (cm) 長径	短径	深度	深 度 (m) 上端	底面	遺 物	時期	備 考
69	SB-109	DⅡ地区	2×1 3.6×2.2	7.92	N-83° -W	2836	D-31-18	円形	29	27	31	22.27	21.96	土師器	Ⅲa	
						2853f	D-31-23	円形	36	35	18	22.32	22.14			
						2931	D-31-24	円形	41	32	6	22.16	22.10			
						2936	D-31-24	円形	26	25	15	22.14	21.99			
						2947	D-31-20	円形	25	22	23	22.11	21.88			
						2952	D-31-19	円形	27	26	55	22.19	21.64			
70	SA-110	DⅡ地区	2 4.5		N-77° -W	2839	D-31-13	円形	34	32	30	22.18	21.88	土師器	—	
						2956	D-31-19	円形	26	23	31	22.13	21.82			
						3117	D-31-20	円形	21	20	15	22.01	21.86			
71	SA-111	DⅡ地区	2 4.9		N-76° -W	2955	D-31-20	円形	—	32	54	22.11	21.57	土師器	Ⅲ	
						3011	D-32-16	円形	23	22	24	21.99	21.75	土師器	Ⅲ	
						3115	D-31-13	円形	22	20	41	22.16	21.75			
72	SA-113	DⅡ地区	2 3.1		N-35° -E	3043	D-33-16	円形	35	31	15	21.99	21.84			
						3046	D-33-11	円形	28	25	26	22.00	21.74			
						3047	D-33-12	円形	24	23	16	22.00	21.84			
73	SA-121	E地区	3 4.2		N-88.5° -W	380b	E-38-6	楕円形	33	25	23	22.27	22.04			
						383	E-38-6	円形	42	42	24	22.26	22.02			
						409	E-37-9	円形	30	28	42	22.17	21.75			
						444	E-37-10	円形	34	32	23	22.20	21.97			
74	SB-122	E地区	4×2 間仕切 5.6×4.2	23.52	N-83.5° -W	362	E-38-8	楕円形	36	26	52	22.30	21.78			
						365b	E-38-3	楕円形	39	30	29	22.39	22.10			
						376	E-38-2	円形	25	22	10	22.35	22.25			
						380a	E-38-6	円形	27	26	24	22.28	22.04			
						384	E-38-6	円形	24	24	22	22.28	22.06			
						405	E-37-5	楕円形	24	18	13	22.23	22.10			
						415b	E-38-7	円形	33	—	13	22.31	22.18			
						426	D-37-25	円形	26	24	17	22.25	22.08			
						450	D-38-22	円形	31	26	35	22.28	21.93			
75	SB-123	E地区	3×(1～) 3.8× —		N-88.5° -E	378b	E-38-2	円形	29	27	32	22.33	22.01			
						390	D-38-22	円形	26	26	35	22.28	21.93			
						399	E-37-5	楕円形	33	26	36	22.25	21.89			
						400	E-38-1	楕円形	40	31	18	22.31	22.13			
						446	E-38-1	円形	38	—	28	22.39	22.11			
76	SA-125	E地区	4 5.2		N-83.5° -W	315	E-38-22	円形	32	29	36	22.11	21.75			
						316	E-38-23	円形	47	40	21	22.14	21.93			
						318	F-38-3	円形	23	22	20	22.20	22.00			
						320	F-38-4	円形	36	29	28	22.14	21.86			
						321	F-38-5	円形	27	27	—	22.14	—			

附表 3　馬場・天神腰遺跡　井戸(SE)一覧表

No.	地区名	遺構番号	グリッド	平面形	規 模 cm 長径	短径	深度	深 度 m 上端	底面	遺 物	時 期	備 考
1	A地区	117	C-6-25	楕円形	142	113	226	22.63	20.37	土師器 木:1～7	Ⅲa	
2		123	D-7-1	楕円形	103	94	237	22.65	20.28	81・82 鉄:4　木:8～13	Ⅲ	
3		145	C-7-18	楕円形	114	92	273	22.71	19.98	90	Ⅲ	
4		146	C-7-23	楕円形	100	88	213	22.67	20.54	87～89 鉄:28	Ⅲa	
5		206	E-8-3	不整円形	118	111	208	22.60	20.52			
6		243	E-8-3	円形	—	75	173	22.60	20.87			テラス:21.30
7	B地区	1101	D-9-4	円形	87	78	210	22.50	20.40	219・青磁 木:14～19	Ⅲ	テラス:21.03
8		1113	D-12-24	円形	101	98	123	22.56	21.33	縄文土器	—	
9		1126	D-12-20	円形	120	112	225	22.50	20.25	216 木:29・30	Ⅲ	
10		1129	E-12-5	円形	101	100	152	22.57	21.05	228～231・土師器 鉄:10　石:10	Ⅴ？	
11		1133	D-13-21	円形	80	69	202	22.52	20.50			
12		1134	D-13-21	円形	123	110	216	22.51	20.35			
13		1146	D-13-17	円形	95	87	210	22.44	20.34	石:7　木:22～28		
14		1153	D-13-18	円形	78	75	152	22.43	20.91			
15		1161	D-13-22	円形	61	60	99	22.49	21.50			

No.	地区名	遺構番号	グリッド	平面形	規模 cm			深度 m		遺物	時期	備考
					長径	短径	深度	上端	底面			
16		1219	E-13-1	円形	86	85	221	22.54	20.33	217・土師器	Ⅲa	
17		1256	E-13-9	円形	101	84	225	22.53	20.28	232～235	Ⅲ・Ⅳ	
18		1287a	D-14-18	円形	107	98	190	22.41	20.51	236・237・土師器	Ⅲ	
19		1288	D-14-14	不整円形	105	89	181	22.29	20.48	240・241	Ⅲ	
										木:20・21		
20		1289	D-14-24	円形	95	94	242	22.47	20.05			
21		1290	E-14-4	円形	96	95	129	22.52	21.23			
22		1291a	E-14-15	円形	96	88	209	22.60	20.51	土師器	Ⅲ？	
										石:12		
23		1292	E-14-20	円形	105	93	175	22.62	20.87	239	Ⅲ	
										木:38～41		
24		1293	D-15-16	円形	84	75	189	22.41	20.52	木:31～34		
25		1298	D-15-22	円形	114	110	224	22.47	20.23			
26		1299	E-15-2	円形	121	120	198	22.53	20.55	木:42・43		
27		1300	E-15-11	円形	115	101	180	22.58	20.78	242・243	Ⅲ	
28		1301	E-15-12	楕円形	99	77	226	22.58	20.32	244・砥石	Ⅲ	
29		1303	D-15-14	円形	86	80	98	22.46	21.48			
30	B地区	1304a	D-15-14	楕円形	124	104	85	22.45	21.60			
31		1305	D-15-25	円形	208	176	210	22.43	20.33	287～289	Ⅲ	
										鉄:32		
32		1306a	E-15-15	円形	114	90	207	22.59	20.52	218	Ⅲb	
										木:35～37		
33		1307a	D-16-21	円形	87	78	107	22.46	21.39			
34		1308a	D-16-22	円形	141	121	195	22.45	20.50	290～296	Ⅲb	
35		1310	D-16-18	円形	83	78	77	22.45	21.68			
36		1311a	D-16-19	円形	100	85	199	22.44	20.45			
37		1312	E-16-5	円形	123	111	123	22.48	21.25	302	Ⅲa	
38		1313	E-16-9	円形	83	81	73	22.50	21.77			
39		1314a	E-16-15	円形	127	117	193	22.52	20.59	303～315・土師器・珠洲	Ⅲ	
40		1319a	E-17-3	円形	96	96	122	22.54	21.32	322・土師器	Ⅲb	
41		1321	D-16-15	円形	80	76	89	22.49	21.60			
42		1368	E-16-16	円形	88	74	86	22.60	21.74			
43		1701	D-18-9	円形	97	83	120	21.38	20.18	342・343・土師器	Ⅲa	
										木:47～49		
44		1702	D-18-20	円形	89	77	48	21.05	20.57	344	Ⅲ	テラス:20.69
45		1703	D-18-20	円形	98	87	111	21.05	19.94	341・土師器	Ⅲb	
										木:50～57		
46		1705	D-18-25	円形	61	54	44	21.01	20.57			
47		1706	E-19-1	円形	100	83	77	21.08	20.31	349・350	Ⅳ	
										鉄:13・14		
48	ＣⅠ地区	1708	E-19-6	円形	83	81	82	20.97	20.15			
49		1709	D-19-16	円形	71	70	56	21.03	20.47			
50		1711	D-19-13	円形	84	83	85	21.06	20.21	焼土(炉壁)　木:58～61	—	
51		1712	D-19-17	円形	55	51	25	21.03	20.78	鉄:16		
52		1713	D-19-22	円形	78	76	54	21.02	20.48			
53		1714	D-19-14	円形	63	61	29	21.10	20.81			
54		1715	E-19-4	楕円形	73	54	17	20.96	20.79			
55		1716	E-20-1	円形	61	57	33	21.01	20.68			テラス:20.76
56		1720	D-18-20	隅丸方形	70	66	38	21.00	20.62	346～348・珠洲	Ⅲ～Ⅳ	
										石:13　木:45・46		
57	ＣⅡ地区	1721	E-21-7	円形	86	86	61	21.13	20.52			
58		1733	D-23-12	円形	126	110	160	22.14	20.54	瓦	現代？	
59		2402	D-24-12	円形	90	75	217	22.15	19.98	木:75～131		
60		2407	D-24-17	円形	115	111	153	22.19	20.66	鉄:38		
61		2412	E-24-2	円形	84	78	136	22.19	20.83			
62		2422	D-24-20	円形	99	97	184	21.94	20.10	土師器	Ⅲb	
										木:67～74		
63		2424	D-24-20	円形	130	—	141	21.94	20.53	351	Ⅲb	テラス:20.67
										木:158～161・198		
64		2426	E-25-1	楕円形	120	94	152	22.08	20.56	352～355・瀬戸美濃	Ⅳ	
										木:168～171		
65	ＤⅠ地区	2428	D-25-21	円形	97	85	107	22.09	21.02			
66		2432	D-25-17	円形	144	133	198	22.08	20.10	356～358・土師器・珠洲	Ⅲ～Ⅳ	テラス:20.53
										木:132・133		
67		2433a	D-25-17	楕円形	—	105	132	22.07	20.75	359・360・白磁	Ⅳ	テラス:21.02・20.82
68		2435	D-25-13	円形	82	74	141	22.05	20.64	土師器	Ⅲ	
										木:144		
69		2461	D-26-14	円形	102	93	147	22.10	20.63			
70		2462	D-26-19	円形	130	126	162	22.09	20.47	木:145～155		
71		2464	E-26-15	円形	107	90	155	21.87	20.32	395	Ⅲb	
										木:136～143		

No.	地区名	遺構番号	グリッド	平面形	規模 cm			深度 m		遺物	時期	備考
					長径	短径	深度	上端	底面			
72		2470	E-24-15	楕円形	114	82	179	22.05	20.26	396 木:134・135	Ⅲ	
73		2472	D-24-15	円形	—	—	—	22.03	—			
74		2501	E-28-6	円形	106	105	149	22.10	20.61	木:63・64		
75		2502	E-28-7	円形	103	97	76	22.12	21.36	400・土師器(ロクロ)	Ⅲ～Ⅳ	テラス:21.52
76		2509	D-28-13	円形	81	79	83	22.18	21.35			
77		2515	D-29-16	円形	115	108	113	22.18	21.05	401・402・土師器(ロクロ・京都系) 木:163	Ⅳ～Ⅴb	
78		2522	D-29-22	楕円形	157	127	208	22.25	20.17			2521と一体 テラス:20.99
79		2527a	D-29-18	円形	219	205	173	22.26	20.53	403～406・土師器・珠洲 石:16・17	Ⅴc	
80		2535a	D-29-25	円形	92	90	143	22.21	20.78	407	Ⅳ～Ⅴ	
81		2537	D-29-24	円形	99	89	128	22.29	21.01	木:162		
82		2542a	D-29-20	円形	98	85	116	22.25	21.09			
83		2562a	D-30-16	楕円形	138	114	123	22.27	21.04	408～412・土師器 石:26	Ⅳ？	
84		2585	D-30-21	楕円形	82	68	153	22.24	20.71	414 鉄:18　木:164	Ⅴb	
85		2589	D-30-22	円形	97	97	86	22.30	21.44	416・417・青磁	Ⅳ	
86		2591	D-30-22	円形	108	92	149	22.32	20.83	418・419・土師器 石:29	Ⅳ	
87	ＤⅠ地区	2596	D-30-23	円形	88	87	139	22.41	21.02	420～422・土師器	Ⅲ	
88		2599	D-30-23	円形	153	129	153	22.35	20.82	423・土師器・珠洲 木:183～186	Ⅳ	テラス:21.40
89		2631	E-29-4	円形	115	98	93	22.29	21.36	土師器	Ⅲ	
90		2649	E-29-20	円形	103	94	143	22.41	20.98			
91		2685a	E-30-6	円形	105	103	136	22.39	21.03	428・土師器	Ⅳ	
92		2792a	D-30-25	円形	103	101	—	—	—	433	Ⅴa	
93		2811a	E-30-10	円形	111	100	180	22.40	20.60	463 木:65・66	Ⅲb	
94		2819	E-31-11	不定形	455	316	213	22.32	20.19	434～462　鉄:3 石:18～25　木:172～181	Ⅴc	2818と一体 テラス:20.29・21.22・22.05
95		2827	D-31-13	円形	112	109	228	22.05	19.77	469～476・珠洲 石:27　木:165～167	Ⅴb	
96		2915	E-31-14	円形	88	83	201	22.15	20.14	480	Ⅲb	
97		2918	E-31-4	円形	61	57	55	22.19	21.64			テラス:21.94 井戸状遺構
98		2928a	D-31-23	円形	170	138	255	22.26	19.71	481	Ⅲb	テラス:21.00
99		2958	D-31-15	円形	184	178	178	22.12	20.34			
100		2962	E-30-20	円形	257	218	214	22.30	20.16	482・土師器 鉄:39　木:156・157	Ⅲ～Ⅳ	テラス:21.42・20.87
101		3013	D-32-11	円形	107	—	119	22.03	20.84	489・490・土師器 木:182	Ⅳ	
102		3038a	E-32-7	円形	103	98	103	22.04	21.01	492・493 石:28	Ⅳ～Ⅴ	
103		304b	E-35-12	円形	58	51	106	22.09	21.03			井戸状遺構
104		305	E-35-7	円形	105	96	127	22.05	20.78	636～638・土師器	Ⅴ	
105		309	E-36-20	円形	108	98	133	21.91	20.58	木:189・199～201		
106		310a	E-37-24	円形	113	110	169	22.03	20.34	639・640 木:194～197	Ⅱ	
107		310b	E-37-24	円形	67	—	118	22.01	20.83			井戸状遺構
108		310c	E-37-24	円形	84	—	99	22.02	21.03			井戸状遺構
109		311	E-37-25	円形	142	122	195	22.04	20.09	641 木:211	Ⅲ	
110		312	E-38-17	円形	114	104	143	22.18	20.75	642～646・土師器 木:202・203	Ⅲb	
111	E地区	313	E-38-24	円形	103	101	172	22.24	20.52	647～653・土師器 鉄:22・23　石:30 木:204～207	Ⅲb	
112		314	F-39-1	円形	122	100	195	22.03	20.08	654～658・土師器 木:208・209	Ⅲb	
113		325	E-38-15	円形	254	220	265	22.31	19.66	661～667 鉄:44　木:212～263	Ⅰb	
114		331	E-39-12	円形	106	100	177	22.30	20.53	668～672・青磁 木:270～272	Ⅲb	
115		335	E-39-11	楕円形	102	78	205	22.24	20.19	木:264～266		
116		339a	E-38-10	円形	111	97	198	22.13	20.15	659・660・珠洲	Ⅲa	
117		413	D-37-24	円形	109	106	160	22.17	20.57	677	Ⅱ	
118		416	E-38-18	円形	163	150	144	22.21	20.77	木:267～269		
119		417	E-38-23	楕円形	134	114	101	22.21	21.20			
120		460	E-38-18	円形	62	—	112	22.18	21.06			井戸状遺構

附表４　馬場・天神腰遺跡　土坑(SK)一覧表

No.	地区名	遺構番号	グリッド	平面形	規模 cm			深度 m		遺物	時期	備考
					長径	短径	深度	上端	底面			
1	A地区	5	C-4-17	楕円形	74	53	18	22.50	22.32			
2		14	D-4-5	円形	90	83	21	22.48	22.27			
3		16	D-4-5	楕円形	47	37	22	22.51	22.29	86	Ⅲ	テラス:22.35
4		32	C-4-10	楕円形	—	38	19	22.43	22.24			
5		50	C-6-24	隅丸長方形	86	58	33	22.62	22.29	83～85	Ⅳ	土坑墓
6		153	C-7-24	不定形	86	76	21	22.65	22.44			
7		165	D-6-14	楕円形	—	61	13	22.64	22.51			
8		183	D-7-19	楕円形	63	43	29	22.61	22.32			
9		193	D-7-20	楕円形	72	42	15	22.61	22.46			
10		196	D-8-11	楕円形	109	67	56	22.59	22.03			
11		197	D-8-11	円形	73	66	24	22.61	22.37			
12		216	D-8-11	楕円形	113	80	49	22.61	22.12			
13		238	D-5-20	楕円形	94	64	33	22.61	22.28			
14	B地区	1102	D-10-22	楕円形	120	81	21	22.61	22.40	土師器・白磁	—	
15		1249	E-13-5	楕円形	68	53	20	22.48	22.28			
16		1259	E-13-9	楕円形	81	33	12	22.54	22.42			
17		1261	E-13-9	楕円形	83	35	24	22.52	22.28			
18		1264	E-13-14	円形	104	95	27	22.59	22.32			
19		1265	E-13-10	楕円形	80	45	14	22.54	22.40			
20		1284a	E-14-2	楕円形	—	56	19	22.44	22.25			
21		1291b	E-14-15	楕円形	112	80	22	22.58	22.36			
22		1306b	E-15-15	楕円形	113	—	32	22.61	22.29			
23		1309	D-16-13	円形	—	181	84	22.45	21.61			
24		1315a	E-17-1	楕円形	189	136	45	22.52	22.07	316	近世	テラス:22.26
25		1318	E-17-9	楕円形	96	77	30	22.53	22.23			
26		1320a	E-17-13	円形	92	90	21	22.50	22.29	鉄:2・33		土坑墓
27		1325a	E-17-2	円形	89	83	44	22.51	22.07			
28		1345a	E-17-4	円形	84	78	62	22.51	21.89	318	Ⅲ	テラス:22.22
29		1367a	D-16-20	楕円形	82	67	43	22.46	22.03			
30		1369	E-16-11	楕円形	—	152	28	22.57	22.29			
31		1370	E-14-17	長方形	317	—	18	22.62	22.44			
32		1373	D-10-11	楕円形	114	43	53	22.51	21.98			
33		1374	D-10-16	不定形	97	76	57	22.59	22.02			
34		1376	E-10-14	楕円形	—	53	13	22.60	22.47			
35		1447	E-14-1	不整円形	63	—	36	22.47	22.11			
36		1460	E-14-10	円形	88	—	7	22.57	22.50			
37		1467	E-14-14	円形	66	61	15	22.60	22.45			
38		1474	E-14-18	円形	—	—	5	22.61	22.56			
39		1487	E-14-16	円形	57	55	32	22.61	22.29			テラス:22.44
40		1491	E-14-16	楕円形	—	—	16	22.61	22.45			
41		1656	D-15-20	円形	84	66	26	22.42	22.16			テラス:22.25
42		1694	E-16-7	不整円形	78	66	46	22.49	22.03			
43		1696	E-16-7	楕円形	—	70	39	22.48	22.09			
44		1762	E-16-12	円形	68	68	24	22.51	22.27			
45		1765a	E-16-17	円形	95	—	18	22.54	22.36			
46		1782a	D-17-12	楕円形	75	—	14	22.44	22.30			
47		1850	E-18-1	円形	69	61	60	22.56	21.96			テラス:22.21
48		1851	E-17-5	楕円形	74	60	32	22.44	22.12			テラス:22.25
49	CⅠ地区	1717	E-18-9	円形	61	57	16	21.71	21.55			
50	CⅡ地区	1722	E-21-12	円形	59	53	19	21.73	21.54			
51		1725	E-22-13	円形	81	—	26	21.96	21.70	陶器・ガラス製品	現代	
52	DⅠ地区	2423	D-24-20	円形	71	63	16	21.95	21.79			
53		2442	D-25-19	円形	107	95	28	22.07	21.79			
54		2463	D-26-24	楕円形	77	64	54	22.07	21.53			
55		2484	E-25-13	楕円形	95	58	46	22.06	21.60			
56	DⅡ地区	2534a	D-29-24	円形	185	181	80	22.25	21.45	土師器	—	
57		2586a	D-30-21	楕円形	156	76	23	22.27	22.04	415	Ⅳ	
58		2586b	E-30-1	不整円形	100	66	42	22.35	21.93			
59		2610	E-30-3	楕円形	—	64	14	22.41	22.27			
60		2688	E-30-6	円形	72	63	16	22.42	22.26			
61		2752a	D-30-19	不定形	153	—	—	—	—			
62		2754	D-30-19	不整円形	—	—	15	22.11	21.96	土師器	Ⅲ	
63		2755a	D-30-19	不整円形	129	110	19	22.04	21.85			
64		2817a	E-31-11	不定形	185	95	25	22.30	22.05	464	Ⅴb	
65		2908a	E-31-8	隅丸方形	96	93	20	22.31	22.11			
66		2916	E-31-8	円形	95	90	14	22.26	22.12	土師器	Ⅲb	
67	E地区	308	E-36-17	円形	224	—	32	22.04	21.72	土師器	—	
68		328	E-39-11	楕円形	98	59	28	22.31	22.03	土師器	—	
69		339b	E-38-10	円形	—	60	11	22.27	22.16			
70		349	D-39-21	不定形	—	—	24	22.29	22.05			
71		357	E-38-12	楕円形	95	67	26	22.29	22.03			
72		359a	E-38-12	不定形	63	—	25	22.28	22.03			
73		368a	D-38-22	楕円形	71	48	11	22.34	22.23			
74		370	D-38-22	不定形	77	55	16	22.28	22.12	土師器	—	
75		375	E-38-2	楕円形	87	67	19	22.36	22.17			
76		386	E-38-1	円形	121	117	38	22.30	21.92	673・674・土師器	Ⅲ	
77		392	D-38-21	不定形	—	—	—	—	—	675・676・土師器・珠洲 鉄:45　木:210	Ⅲb～Ⅳ	
78		447	E-37-17	隅丸長方形	109	79	27	21.94	21.67			

附表５　馬場・天神腰遺跡　土器・陶磁器類観察表

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
1	A	SD-1	№165 D-8-24	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	7.7		1.7		ナデ	手づくね	にぶい黄橙 内面底:橙	10YR7/3 2.5YR7/6	△	△	◎					2次焼成?
2	A	SD-1	Fベルト D-7-25	中世土師器(白)	小皿	刈小皿-Ⅰ	(7.2)	(5.4)	1.8	全体1/10	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	○					
3	A	SD-1	№166 D-8-24	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅲ	7.6	4.0	1.7	口縁1/2	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/4	▼	△	△					
4	A	SD-1	№13 D-5-8	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅲ	8.0		1.7		ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	△	△		◎				
5	A	SD-1	上層 D-8-1	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱa	8.4	7.2	2.0	完形		手づくね	浅黄橙	7.5YR8/4	△	△	○				褐色粒△	
6	A	SD-1	№87 D-6-14	中世土師器(赤)	小皿	関B-Ⅲc底部ⅲ		5.0	1.0	底部1/2	ロクロナデ	ロクロ	橙	7.5YR7/6	△	△	△				褐色粒△	
7	A	SD-1	№111 D-7-18	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅰ	12.0		2.4	全体1/3	不明	手づくね	橙	5YR6/6	△	△	○					11と同時期のセット関係ヵ
8	A	SD-1	D-5-7 上層	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	(13.1)		2.7	口縁1/12	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	○	△	○				黒雲母△	
9	A	SD-1	D-5-7 上層	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅰ	(13.0)		2.7	口縁1/12	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	△	△	○				黒雲母△　褐色土細粒△	
10	A	SD-1	№156 D-8-23	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱcⅰ	(14.6)		2.6	口縁1/8	不明	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/3	△	△		○		▼	褐色粒○	
11	A	SD-1	№54 D-6-12	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱcⅰ	14.4		3.0		ナデ	手づくね	橙	5YR6/6	△	△	○				微砂:石英○	全体に磨滅。胎土:橙色と白色粘土でこねられ、互層をなして縞模様が見られる。 7と同時期のセット関係ヵ
12	A	SD-1	№102 D-7-17	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅳヵ				底部2/3	回転ナデ	手づくね	灰白	2.5Y8/2	◎	○	○			○		
13	A	SD-1	№41 D-6-11	珠洲	片口鉢	Ⅳ3期						ロクロ	灰	7.5Y7/1	○	○	○				やや粗雑	
14	A	SD-1		珠洲	片口鉢	Ⅳ3期						ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	○	◎		○		粗雑　小礫(φ2～5)△	
15	A	SD-1	№98 D-6-16	珠洲	片口鉢	Ⅲ期						ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	◎				やや緻密　白岩粒(φ1～3)○　海綿骨針○	
16	A	SD-1	№10 D-5-8	珠洲	片口鉢	Ⅳ1期	28.5		7.3	口縁1/6		ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	◎				粗雑　白岩粒(φ1～3)○　微砂:白色粒◎・黒色粒○・石英○ 海綿骨針△	
17	A	SD-1	№168 D-8-19	珠洲	片口鉢							ロクロ	外:灰白 内:灰白	7.5Y7/1 7.5Y8/2	△	△	○				やや緻密	生焼
18	A	SD-1	№173 E-8-4	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	10Y7/1	○	○	○				やや粗雑　微砂:白色粒△・黒色粒○	すり鉢?
19	A	SD-1	D-7	珠洲	片口鉢							ロクロ	暗灰	N3/1	○	△		◎			粗雑　細砂:白色粒○・黒色粒○	内外面:自然釉　黒光沢
20	A	SD-1	D-7-25 上・中層	珠洲	壺T	Ⅳ1期	23.0		4.5	口縁1/4		タタキ	灰	7.5Y5/1	○	○	◎				やや緻密　微砂:白色粒△・黒色粒◎	
21	A	SD-1	D-8	珠洲	壺T							タタキ	灰白	10Y7/1	○	○	◎				やや緻密　微砂:白色粒○・黒色粒◎	
22	A	SD-1	№89 D-6-14	珠洲	壺?			16.0	6.2	底部1/8		ロクロ	灰白	10Y8/1	○	○	○				やや緻密　微砂:黒色粒○　白岩粒(φ1～2)△	
23	A	SD-1	№167 D-8-19	珠洲	壺R	Ⅲ期ヵ						ロクロ	外:灰 内:明紫灰	N6/ 5P7/1	○	○	◎			○	粗雑微砂:白色粒△・黒色粒◎・石英○	
24	A	SD-1	№121 D-7-20	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	△	○				やや緻密	36・42と同一個体ヵ
25	A	SD-1	№37 D-6-11	珠洲	片口鉢							ロクロ	暗灰黄	2.5Y5/2	○	△	◎		○		粗雑　海綿骨針△	
26	A	SD-1	№155 D-8-18	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○				○	緻密　白岩粒(φ2～4)△	
27	A	SD-1	№113 D-6-18	珠洲	甕	Ⅱ期	34.2		4.8	口縁1/16	ナデ (一部にヘラ?)	ロクロ	灰	10Y5/1	○	△	○				やや粗雑	
28	A	SD-1	№91 D-6-14	須恵器	甕		32.0		2.8	口縁1/18			灰	7.5Y5/1	○	○		○			やや緻密　細砂:白色粒○・黒色粒△	内面・口唇部:自然釉(均一できれい)　全体に丁寧な作り
29	A	SD-1	6区 E-8・9 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎				やや粗雑　小礫(φ2～4)△	
30	A	SD-1	№5 D-5-6	珠洲	甕							タタキ	灰	N7/	○	○	◎	○			やや緻密	
31	A	SD-1	№149 D-8-22	珠洲	甕							タタキ	外:灰白 内:にぶい黄橙	7.5Y8/2 10YR7/4	○	△	○				粗雑　微砂:白色粒○・黒色粒△　白岩粒(φ1～3)△	生焼　漆継痕
32	A	SD-1	№147 D-8-22	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	○				やや緻密　白岩粒(φ1～3)◎	40と同一個体
33	A	SD-1	№112 D-6-18	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				やや緻密　白岩粒(φ1～3)○	
34	A	SD-1	№73 D-6-13	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				粗雑　小礫(φ1～10)○	
35	A	SD-1	№115 D-6-19	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	△	◎		◎		粗雑	
36	A	SD-1	№114 D-6-18	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y7/1	○	△	○				やや緻密　白岩粒(φ2)△	24・42と同一個体ヵ
37	A	SD-1	№95 D-6-15	珠洲	甕							タタキ	外:灰白 内:浅黄橙	5Y8/2 10YR8/3	△	△		○			やや粗雑　細砂:白色粒○　白岩粒(φ1～3)△	生焼
38	A	SD-1	№132 D-8-21	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				やや粗雑	壺?
39	A	SD-1	№42 D-6-11	珠洲	甕							タタキ	外:灰 内:灰白	N6/ N7/	○	○	◎	○			粗雑　白岩粒(φ1～3)○	
40	A	SD-1	№136 D-6-16	珠洲	甕		16.4		3.3	底部1/8		ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	△	○				やや緻密　白岩粒(φ1～3)◎	32と同一個体 底部:離れ砂
41	A	SD-1	№175 D-8-23	珠洲	片口鉢			13.5	6.2	底部1/6		ロクロ	灰白	5Y8/2	△	△	○				やや緻密	生焼
42	A	SD-1	№146 D-8-22	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	○				やや緻密　白岩粒(φ1～3)○	24・36と同一個体ヵ
43	A	SD-1	№1 D-4-3	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	△	◎				やや粗雑　白岩粒(φ1～2)△　微砂:白色粒○・黒色粒◎・石英○	
44	A	SD-1	D-7-25 上・中層	瀬戸・美濃	卸皿								灰白	5Y8/1	○	○					緻密	45と同一個体ヵ
45	A	SD-1	№122 D-7-25	瀬戸・美濃	卸皿								灰白	5Y8/1	○	○					緻密	44と同一個体ヵ
46	A	SD-1	№105 D-7-17	土師器	有台椀	北B-底部a		8.3	2.3	底部1/2		ロクロ	浅黄橙	10YR8/3	△	△	△					

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
47	A	SD-1	D-7-19・24 上層	瀬戸・美濃	大皿			14.0	2.7	底部1/12			外:灰白 内:灰白	5Y8/2 10Y8/2	○	△					やや粗雑	内面:灰釉 110と同一個体
48	A	SD-1	D-6-12・13 下層	白磁	碗ｶ		14.0		2.0	口縁1/16			灰白	7.57/2	○	○					緻密	
49	A	SD-1	7区	青磁	連弁文碗	上田B－Ⅱ	15.2		4.4	口縁1/12			オリーブ灰	10Y6/2	○	○					緻密	器肉:白灰色で緻密な須恵質
50	A	SD-1	№119 D-7-19	青磁	碗	上田B－Ⅱ		5.2	3.1	底部1/3			明オリーブ灰	10Y6/2	○	○						
51	A	SD-1	№38 D-6-11	須恵器	甕								灰	5Y6/1	○	○	○				緻密	
52	A	SD-1	上中層 D-5-10・15 D-6-6・1	須恵器	甕								灰白	5Y7/1	○	△		○		△	やや粗雑	
53	A	SD-2	№82 E-7-5	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿－Ⅱb	(7.6)	(5.0)	1.6	全体1/2	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	○	○		○			褐色土細粒△ 海綿骨針▼ 石英○	
54	A	SD-2	E-8-1 上・中層	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿－Ⅱc	(9.0)	(6.0)	2.0	全体1/10	ナデ	手づくね	にぶい橙	5YR7/4	○	△	○	○				
55	A	SD-2	№32 D-6-24	中世土師器(白)	皿	刈皿－Ⅱbⅰ	13.4	(8.0)	3.0	全体1/3	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	○	○				内外面:淡黄色の化粧土
56	A	SD-2	№73 E-7-4	中世土師器(赤)	皿	刈皿－Ⅱbⅱ	(12.0)	(7.4)	3.4	全体1/6	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	△		○			褐色土中粒○ 白色細粒△	
57	A	SD-2	D-7-23 中層	中世土師器(赤)	皿	刈皿－Ⅰb3	16.0		3.0	口縁1/10	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	△	△		◎			金雲母▼	内面:磨滅
58	A	SD-2	№19 D-6-22	中世土師器(赤)	皿	刈皿－Ⅱa2	(13.0)	(9.0)	3.4	口縁1/8	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	△	×	△				褐色土細粒△	
59	A	SD-2	№70 E-7-3	珠洲	片口鉢			12.0	3.4	底部1/6		ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○	○				粗雑 海綿骨針○ 微砂:白色粒○・黒色粒○・石英△	
60	A	SD-2	№63 E-7-2	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	5Y6/1	○	○		◎			粗雑 小礫(φ4)▼ 海綿骨針○ 細砂:白色粒○・黒色粒○ 石英○	
61	A	SD-2	№89 E-8-1	珠洲	甕							タタキ	外:灰 内:灰	10Y4/1 10Y6/1	○	○	△				緻密 微砂:白色粒▼・黒色粒△	外面:自然釉
62	A	SD-2	D-5-12 中・下層	中世土師器(赤)	皿	刈皿－Ⅲcⅱ	12.3	10.6	3.8	底部完形	ナデ	手づくね	黒褐色	10YR3/2	○	○	◎				微砂:石英◎	灯明皿ｶ 油スス付着
63	A	SD-2	D-5-19 中層	珠洲	片口鉢			11.5	4.2	底部1/5		ロクロ	灰白	7.5YR8/2	△	△	◎				粗雑 礫(φ1～7)○ 微砂:白色粒◎・黒色粒△	
64	A	SD-2	№39 D-6-24	珠洲	壺R							ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	◎		○		粗雑 微砂:白色粒◎・黒色粒○・石英△	
65	A	SD-2	D-14-14 覆土	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				粗雑 微砂:白色粒◎・黒色粒△・石英◎	壷?
66	A	SD-2	7区	珠洲	甕							タタキ	灰白	10Y7/1	○	○	◎				やや緻密	
67	A	SD-2	7区	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△	○				やや緻密 岩粒(φ1～2)◎ 微砂:白色粒○・黒色粒○	
68	A	SD-2	D-4-4・5 中層	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	○				やや粗雑 白岩粒(φ1)◎ 微砂:黒色粒○	
69	A	SD-2	№122 E-9-6	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○		◎			粗雑 小礫(φ2～3)△ 細砂:白色粒○ 黒色粒◎ 石英○	
70	A	SD-2	№96 E-8-2	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒◎・石英◎	
71	A	SD-2	№110 E-8-8	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				やや緻密 海綿骨針○ 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英◎	壷T?
72	A	SD-2	№80 E-7-4	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				微砂:白色粒○・黒色粒◎・石英◎ 白色礫(φ1～4)△ 海綿骨針△	
73	A	SD-1orSD-2	D-6	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				やや粗雑	
74	A	SD-1 SD-2	№106 D-7-17 №77 E-7-4	珠洲	甕							タタキ	灰白	5Y7/1	○	○			○		やや緻密 中砂:白色粒○・黒色粒△	
75	A	SD-2	№59 E-7-2	青磁	碗	上田D－Ⅰ	(11.2)		2.5	口縁1/8			灰オリーブ	7.5Y6/2	○	○					緻密	
76	A	SD-2	№94 E-8-1	瓷器系	甕								灰白	10Y7/1	○	○		△			緻密	底面:細砂多量に付着
77	A	SD-2	№67 E-7-3	瓦器	不明								外:灰白 内:灰	5Y8/2 10Y5/1	△	△	△				緻密 白色岩粒(φ1～2)○	内底面:炭素吸着
78	A	SX-45	D-5～6	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒○	
79	A	SX-45	D-5～6	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	△	◎				やや粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒◎	
80	A	SK-111	C-6-25	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○		○			やや粗雑 白岩粒(φ1～4)◎ 細砂:白色粒○・黒色粒○ 海綿骨針○	
81	A	SE-123	D-7-1 下層	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y4/1	○	○		◎		○	やや緻密 海綿骨針△ 細砂:白色粒◎・黒色粒◎ 粗砂:白色粒(φ1～4)○	
82	A	SE-123	D-7-1 下層	珠洲	壺R			9.2	4.2	底部1/4		ロクロ	黄灰	2.5Y5/1	○	○		◎	○		やや粗雑 中砂:白色粒△ 細砂:白色粒◎・黒色粒○・石英△	
83	A	SK-50	C-6-24 下層	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	7.5YR6/1	○	△		◎		◎	粗雑 細砂:白色粒○・黒色粒◎・石英○	
84	A	SK-50	C-6-24 中層	中世土師器(赤)	皿	関B－Ⅱcⅱ	11.2	7.2	2.5	完形	ナデ	ロクロ	浅黄橙	10YR8/4	○	△	△				石英○	
85	A	SK-50	C-6-24 上層	中世土師器(赤)	小皿	関B－Ⅲcⅱ	8.1	6.3	2.0	完形	ナデ	ロクロ	橙	5YR7/6	○	△		◎			石英○ 黒雲母△	
86	A	SD-1b	D-7-19	瓷器系	甕								灰	N5/	○	○	◎			○	やや緻密 微砂:白色粒○・黒色粒○・石英△	内外面:黒光沢あり
87	A	SE-146	C-7-23	中世土師器(白)	小皿	刈小皿－Ⅰ	(8.1)	(7.0)	1.6	全体1/4	ナデ・ハケ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	○	○		△	△		租礫(φ5ミリ)▼	
88	A	SE-146	C-7-23	中世土師器(白)	皿	刈皿－Ⅰa2	(13.5)	(8.1)	3.1	口縁1/6	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	○				灰色土中粒○	
89	A	SE-146	C-7-23 上層	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○		◎		▼	やや緻密 海綿骨針△ 細砂:白色粒○・黒色粒◎	
90	A	SK-145	C-7-18	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	△	○				やや粗雑 白岩粒(φ1～2)○	
91	A		C-4グリッド 表土	中世土師器(赤)	皿	関B－Ⅰ		7.0	1.3	底部完形	ナデ	ロクロ	橙	5YR7/6	○	○	○				石英△ 褐色土細粒△	
92	A		E-8・9 表土	中世土師器(赤)	皿	刈皿－Ⅱbⅰ	(13.0)	(8.0)	2.6	全体1/6	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	×		○	▼		石英△ 褐色土細粒△	
93	A		E-8・9 表土	中世土師器(赤)	皿	北B-椀a	(14.9)		2.8	口縁1/8	ナデ	ロクロ	橙	7.5YR7/6	△	△		◎			黒母雲△ 褐色土細粒○	
94	A		C-3 表土	珠洲	片口鉢	Ⅴ期						ロクロ	灰	10Y6/1	○	△	○				やや粗雑 小礫(φ1～4)△	
95	A		7・8 表土	珠洲	片口鉢			12.0	6.2	底部1/8		ロクロ	灰白	10Y7/1	○	△	◎				粗雑 白色小礫(φ2～4)○	
96	A		表採	珠洲	片口鉢			12.8	6.0	底部1/4		ロクロ	灰	5Y6/1	○	△	◎	○			やや粗雑 海綿骨針△	

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
97	A		7・8 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y5/1	○	○	◎				粗雑	
98	A		7・8 表土	珠洲	甕							—	灰	7.5Y5/1	○	△	△				やや緻密	
99	A		7・8 表土	珠洲	片口鉢	Ⅵ期						ロクロ	灰白	10Y7/1	○	○	○				やや粗雑 小礫(φ2～3)△	
100	A		7・8 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎				粗雑	壷T?
101	A		7・8 表土	珠洲	壷T							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				やや緻密 微砂:黒色粒◎	
102	A		E-8・9 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△	○				やや粗雑 白色粒(φ1～3)◎ 海綿骨針○	
103	A		E-8・9 表土	珠洲	甕							タタキ	灰白	N7/	○	○	○				やや緻密	内面:自然釉
104	A		7・8 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	△	△	△				緻密	
105	A		E-8・9 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	△	◎				やや粗雑 白色粒(φ1～2)○	
106	A		7・8 表土 8・9 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	△	◎				粗雑 微砂:白色粒◎・黒色粒◎・石英○	
107	A		7・8 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△	◎				粗雑 小礫(φ8)▼	
108	A		7・8 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△	△				やや粗雑 白色粒(φ1～4)○	
109	A		E-8・9 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△	◎				粗雑 微砂:白色粒◎・黒色粒△・石英△	
110	A		7・8 表土	瀬戸・美濃	大皿								灰白	10Y8/2	○	△	▼				やや粗雑	内外面:灰釉 47と同一個体
111	B	SD-1	№59 D-10-25	中世土師器(白)	小皿	関B-Ⅲbⅱ	8.0	6.0	2.0	全体1/3	ナデ	ロクロ	淡黄	2.5Y8/3	△	△		△			白色細粒○	
112	B	SD-1	№170 E-12-8	中世土師器(白)	小皿	刈小皿-Ⅰ	(8.0)	(6.8)	1.4	全体1/4	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	△			▼	褐色土中粒▼	
113	B	SD-1	№197 E-13-18	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱd	8.3	7.5	2.2	完形	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	○	○		○			褐色粒▼ 石英○	
114	B	SD-1	№81 D-10-24	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	(12.0)		3.2	口縁1/6	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5YR6/4	△	△	○					
115	B	SD-1	№198 E-13-18	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅱa1	(13.3)		2.8	口縁1/8	ナデ	手づくね	外:灰黄褐 内:にぶい黄橙	10YR6/2 10YR7/3	△	×					白色細粒○ 褐色土中粒△	全体的に磨滅
116	B	SD-1	№3 E-11-3	珠洲	小鉢			(6.0)	3.9		ナデ ヘラナデ	ロクロ 静止糸切り	外:灰 内:浅黄	5Y5/1 5Y7/3	○	○	◎	○			白色岩粒○	内面:自然釉
117	B	SD-1	№119 E-10-3	珠洲	小鉢	Ⅳ1期						ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	◎				白色岩粒△	
118	B	SD-1	№138 D-10-21	珠洲	片口鉢	Ⅳ2期						ロクロ	灰	10Y5/1	○	○		◎			白色粒△(長石○)	片口部分
119	B	SD-1	№159 E-12-7	珠洲	片口鉢	Ⅳ3期						ロクロ	灰	10Y5/1	○	○		◎			礫△	
120	B	SD-1	№126 D-10-22	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	5Y6/1	○	△		○			礫(φ5)○ 白色岩粒△	内面:礫のズレ痕
121	B	SD-1	№79 D-10-24	珠洲	壷T							タタキ	灰	10Y5/1	○	○	○				黒色粒○	
122	B	SD-1	№139 E-11-4	珠洲	壷T							タタキ	灰	N6/	○	○		○		△	海綿骨針○	
123	B	SD-1	№174 E-11-8	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎					131と同一個体
124	B	SD-1	№90 D-10-24	珠洲	小壷R			5.4	4.4	底部1/2		ロクロ 静止糸切り	黄灰	2.5Y5/1	○	○	○		△			
125	B	SD-1	№76 D-10-25	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	○		○		△		
126	B	SD-1	№209	珠洲	壷T							タタキ	外:灰 内:灰	7.5Y6/1 5Y5/1	○	△		○			白色岩粒○	
127	B	SD-1	№187 E-11-15	珠洲	壷R							タタキ	外:灰 内:灰	10Y4/1 5Y5/1	○	○		◎			白色岩粒▼ 細粒:黒色粒○	
128	B	SD-1	№173 E-11-9	珠洲	壷T							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	○	△				
129	B	SD-1	№124 D-10-22	珠洲	壷T							タタキ	外:灰白 内:灰	5Y7/1 5Y6/1	○	△		◎			黒色粒○	
130	B	SD-1	№163 E-12-2	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎					
131	B	SD-1	№199 E-13-18	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	◎					123と同一個体
132	B	SD-1	№123 D-10-22	珠洲	甕							タタキ	黄灰	2.5Y6/1	○	○	◎				黒色粒◎	
133	B	SD-1	№7 D-11-4	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○		○			小礫○	
134	B	SD-1	№195 E-13-17	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	◎				微砂:黒色光沢・長石粒○	
135	B	SD-1	№203 E-13-19	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎					
136	B	SD-1	№125 E-10-2	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○		◎				
137	B	SD-1	№200 E-13-18	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	○	◎				礫○	
138	B	SD-1	№167 E-12-8	珠洲	甕							タタキ	外:灰 内:灰白	5Y6/1 5Y8/1	○	△	◎				黒色微粒○	内面:被熱剥離
139	B	SD-1	№184 E-12-14	珠洲	甕							タタキ	外:灰白 内:にぶい黄橙	5Y8/2 10YR7/3	○	○		◎			海綿骨針△ 細砂:白色粒○・赤色粒○	酸化炎焼成
140	B	SD-1	№53 E-11-1	珠洲	甕							タタキ	外:灰 内:灰	N5/ 10Y6/	○	○		○		△	海綿骨針△	
141	B	SD-1	E-12	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	○				海綿骨針△ 微砂:長石○	
142	B	SD-1	№87 E-10-4	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	△				緻密 白色岩粒○	
143	B	SD-1	№4 D-11-23	瓷器系	甕							タタキ	灰白	5Y7/1	○	○	△				白灰色粘土塊(φ3～5)◎ 白色岩粒△	
144	B	SD-1	№1 D-11-23	瓷器系	甕							タタキ	外:灰白 内:灰	5Y7/1 7.5Y6/1	○	○					緻密	
145	B	SD-1	№57 D-10-25	珠洲	甕	Ⅱ期	(30.0)		4.3	口縁1/12		ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	○			△		
146	B	SD-1	№186 E-12-15	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	○				白色岩粒△ 海綿骨針▼	
147	B	SD-1	№34 D-11-21	青磁	碗	上田B－Ⅱ	(14.0)		2.7	口縁1/10			明オリーブ灰	5GY7/1	○	△					緻密	

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
148	B	SD-1	№157 E-12-6	須恵器?	甕						タタキ		外:灰白 内:灰白	10Y7/1 5Y8/1	○	○	○				黒色粒○	内面:剥離 比熱
149	B	SD-1	E-12	須恵器	甕								外:灰黄 内:灰	2.5Y6/2 5Y6/2	○	○		◎			細砂:白色粒○	外面:自然釉により光沢あり 器肉内:チョコ色
150	B	SD-1	№91 D-10-24	須恵器	甕								灰	5Y6/1	○	○		△			緻密	
151	B	SD-1	№160 E-12-2	須恵器	甕								灰白	5Y7/1	○	△	△				白色粒△	
152	B	SD-1	№104 D-10-23	瓷器系	甕						ナデ		灰	N6/	○	△	△				白灰色粘土(φ1～2)○	
153	B	SD-2	E-12	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅱa1	(10.0)		(3.0)	全体1/5	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/4	○	△	△				金雲母(φ0.2)△	
154	B	SD-2	E-12	珠洲	片口鉢		11.0		4.5	底部1/5	ナデ ヘラナデ	ロクロ	灰白	5Y7/2	○	○		○			細砂:白色粒△・長石△ 海綿骨針△	やや生焼け (還元しきれていない)
155	B	SD-2	№27 E-11-10	珠洲	壺							—	灰	5Y6/1	○	○	△					
156	B	SD-2	№23 E-10-10	珠洲	小鉢							ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	○	◎				長石○	
157	B	SD-2	№7 E-11-7	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	○	◎				長石○ 白色角礫(φ1～2)△	
158	B	SD-2	№12 E-11-7	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	○				長石○	
159	B	SD-2	E-12	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○	◎				長石○	
160	B	SD-2	№24 E-11-6	珠洲	甕							タタキ	黄灰	2.5Y6/1	○	○		◎			白色角礫(φ1～3)○	全体にスカスカ
161	B	SD-2	№31 E-12-6	珠洲	甕							タタキ	黄灰	2.5Y6/1	○	○	○				白色粒△ 海綿骨針▼	
162	B	SD-2	№13 E-11-7	須恵器	甕						ナデ		灰	5Y4/1	○	○	○				微砂:白色粒△・長石粒△	
163	B	SD-2	№25 E-10-9	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				長石○	
164	B	SR-1104	№19 E-12-12	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅰb1	(12.0)		2.9	口縁1/10	ナデ	手づくね	淡黄	2.5Y8/3	△	△	△				橙色粒(φ0.5)△	
165	B	SR-1104	E-10	珠洲	片口鉢	Ⅱ期						ロクロ	灰白	5Y7/1	○	△	◎				微砂:黒色粒△・長石△・白色粒△ 角砂(φ1～4)△	
166	B	SR-1104	E-12	珠洲	片口鉢	Ⅱ期						ロクロ	灰	N6/	△	△	◎	△	△		白色粒○ 小礫△	
167	B	SR-1104	E-12	珠洲	小鉢							ロクロ	灰	5Y6/1	○	○		◎			細砂:長石○	
168	B	SR-1104	E-12	珠洲	片口鉢	Ⅲ期						ロクロ	灰	10Y6/1	○	△	◎				白色粒△ 海綿骨針△	
169	B	SR-1104	№9 E-11-10	珠洲	片口鉢	Ⅳ1期						ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	◎				微砂:黒色粒○	片口部
170	B	SR-1104	E-12	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	5Y8/1	△	△	◎				白色粒○	
171	B	SR-1104	E-12	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	○	◎				微砂:白色粒△・黒色粒△・長石△ 海綿骨針△	
172	B	SR-1104	E-12	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	5Y7/1	△	△	◎					
173	B	SR-1104	E-10	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	○		◎	○		細砂:長石△・白色粒○	
174	B	SR-1104	E-12	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y6/1	○	○		◎			細砂:長石◎	
175	B	SR-1104	№37 E-13-16	珠洲	片口鉢			12.0	3.4	底部1/6		ロクロ	灰	10Y5/1	○	○		◎			細砂:長石○ 淡灰色粒(φ2)○	
176	B	SR-1104	E-10	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	5Y7/1	○	△	◎				微砂:白色粒△・黒色粒△ 海綿骨針△	
177	B	SR-1104	E-11	珠洲	片口鉢							ロクロ	外:灰白 内:黄灰	5Y7/1 2.5Y5/1	○	○	◎				微砂:黒色粒○・長石○・白色粒△	
178	B	SR-1104	E-12	珠洲	壺T			(12.0)	5.6	底部1/4	ナデ タタキ	タタキ ヘラ切り?	灰白	7.5Y7/1	○	○	○				石英△	
179	B	SR-1104	E-12	珠洲	壺	Ⅳ2期ヵ						—	灰	10Y5/1	○	△	○					
180	B	SR-1104	E-11	珠洲	壺T							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	○				微砂:黒色粒△	
181	B	SR-1104	E-11	珠洲	壺T							タタキ	褐灰	10YR6/1	○	○	△				礫(φ1～2)△ 海綿骨針▼	
182	B	SR-1104		珠洲	壺T							タタキ	灰白	5Y7/1	○	○	○				微砂:黒色粒○	
183	B	SR-1104	E-13	珠洲	甕	Ⅳ1期						—	黄灰	2.5Y5/1	○	○		◎			細砂:長石○	
184	B	SR-1104	№36 E-13-16	珠洲	甕	Ⅲ期						タタキ	灰	N5/	○	○		◎			細砂:白色粒△・黒色粒△・長石△ 角礫(φ5)▼	
185	B	SR-1104	E-13	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y5/1	○	○		◎			細砂:黒色粒○ 白色岩粒(φ1～2)▼	
186	B	SR-1104	E-12	珠洲	甕							タタキ	灰白	7.5Y7/1	○	○	○				海綿骨針△	
187	B	SR-1104	№21 E-12-18	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○		○			細砂:黒色粒△・長石○ 中礫△	
188	B	SR-1104	№6 E-11-10	珠洲	甕						タタキ→ナデ	タタキ	灰	10Y6/1	○	△	○				微砂:黒色粒○・白色粒▼ 海綿骨針▼	
189	B	SR-1104	№35 E-12-15	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	◎				微砂:黒色粒○・長石○	
190	B	SR-1104	№7 E-11-10	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y5/1	○	△	○				微砂:黒色粒△・長石△	
191	B	SR-1104	№33 E-12-8	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	◎				微砂:黒色粒◎ 長石○	
192	B	SR-1104	E-12	珠洲	甕						内:タタキ→ヨコナデ	タタキ	灰	10Y5/1	○	○		○			細砂:黒色粒△長石△	
193	B	SR-1104	E-12	珠洲	壺							タタキ	灰白	5Y7/1	△	△	○					
194	B	SR-1104	E-11	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	○		△		微砂:黒色粒○	
195	B	SR-1104	E-10	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○		○			礫(φ2～3)○ 海綿骨針△	
196	B	SR-1104	№34 E-12-15	珠洲	甕							タタキ	外:灰 内:灰	10Y5/1 7.5Y6/1	○	○		◎			細砂:黒色粒○・長石○ 礫(φ1～3)○	
197	B	SR-1104	E-12	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△	△				石英△ 白色岩▼	
198	B	SR-1104	E-10	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				微砂:黒色粒○・長石○	
199	B	SR-1104	E-12	珠洲	甕							タタキ	灰白	5Y7/1	△	△	△				白色岩△ 海綿骨針△	
200	B	SR-1104	E-11	珠洲	甕							タタキ	灰白	10YR7/1	○	○		◎			細砂:黒色粒◎	
201	B	SR-1104	№2 E-11-10	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○		◎			細砂:黒色粒◎・長石○	

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
202	B	SR-1104	№15 E-12-12	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△	○				微砂:黒色粒△ 海綿骨針▼	
203	B	SR-1104	№11 E-12-11	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	○				微砂:黒色粒△・長石△	
204	B	SR-1104	№19 E-12-12	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○		◎			細砂:白色粒○・長石△ 中礫△	
205	B	SR-1104	№13 E-12-11	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○		◎			細砂:黒色粒◎	
206	B	SR-1104	E-12	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○					緻密 石英▼	格子目状タタキ痕
207	B	SR-1104	E-10	珠洲	甕						ナデ タタキ	タタキ	外:灰 内:灰白	5Y5/1 5Y7/1	○	○		○			細砂:長石○ 白礫(φ1～3)△	
208	B	SR-1104	E-12	珠洲	甕							タタキ	灰白	5Y7/1	○	○	○			△		
209	B	SR-1104	E-12	越前	甕								灰黄褐	10YR4/2	○	△		◎	◎		小礫(φ3～5)◎	
210	B	SR-1104	E-10	青磁	碗	上田B－Ⅱ	(15.0)		2.7	口縁1/16			オリーブ灰	5GY6/1	○	○					緻密	
211	B	SR-1104	E-12	瓷器系	甕								黄灰	2.5Y6/1	○	○		○			石英△	
212	B	SR-1104	E-11	瓷器系	甕								黄灰	2.5Y6/1	○	○		○			白色・明黄色礫(φ2～5)○ 長石△	
213	B	SR-1104	E-11	須恵器	甕								灰	7.5Y6/1	○	△		◎			細砂:白色粒◎・長石○	
214	B	SD-1100	№6 D-9-20	珠洲	片口鉢	Ⅲ期						ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○	○				白色粒△ 黒色粒△ 海綿骨針△	
215	B	SD-1100	№8 D-9-25	珠洲	甕							タタキ	外:灰 内:灰	5Y4/1 5Y5/1	○	○	○					
216	B	SE-1126	D-12-20	珠洲	片口鉢			12.0	5.2	底部1/6		ロクロ	灰	10Y5/1	○	○	◎	◎	◎		小礫○ 石英△	内外面・破口:スス付着 内面:使用により平滑 底面:磨耗
217	B	SE-1219	E-13-1 上層	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅰb1	12.6		2.8	口縁1/5	ナデ	手づくね	灰白	2.5Y8/2	△	○		△				
218	B	SE-1306	E-15-15	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅰb2	12.6		2.4	口縁1/10	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	△				褐色粒▼	
219	B	SE-1101	D-9-4	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y5/1	○	○	○				石英△ 黒色粒△ 白色粒△ 海綿骨針▼	
220	B	SD-1218	3区 E-13-20	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱb	8.0	6.0	1.5	全体1/2		手づくね	浅黄橙	7.5YR8/4	△	△		◎			褐色粒○ 褐色礫(φ4)▼	二次焼成を受けている
221	B	SD-1218	3区 E-13-20	中世土師器(褐)	皿	刈皿-Ⅲbⅰ	13.6		3.4	全体1/2	ナデ	手づくね	灰黄褐	10YR5/2	△	△	○				石英△	
222	B	SD-1218	1区・2区の間	珠洲	片口鉢	Ⅳ3期						ロクロ	灰	10Y6/1	○	○		◎		○	粗雑 礫(φ1～3)○	
223	B	SD-1218	2区	珠洲	片口鉢	Ⅳ3期						ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○	○				微砂:長石△・白色粒△ 海綿骨針▼	
224	B	SD-1218	2区	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y6/1	○	○		○	△		海綿骨針▼ 白色粒○	
225	B	SD-1218	1区	珠洲	壷							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎					
226	B	SD-1218	3区	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	○	○			長石○・白色粒○・黒色粒○ 海綿骨針△ 礫(φ1～3)△	
227	B	SD-1218		青磁	碗	上田B－Ⅰ	(15.0)		2.6	口縁1/16			灰オリーブ	5Y5/3	○	○					緻密	
228	B	SE-1129	E-12-5	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	5Y6/1	○	○	◎					
229	B	SE-1129	E-12-5	珠洲	壷T							タタキ	灰	N4/	○	△	○					気泡痕でふくらむ
230	B	SE-1129	E-12-5	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	○		△			
231	B	SE-1129	E-12-5	瓷器系	甕								灰	5Y5/1	○	○	△				小礫(φ3)○	
232	B	SE-1256	E-13-9	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅰa2	(14.0)		2.5	口縁1/8	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/4	△	△	○				褐色粒△	
233	B	SE-1256	E-13-9	珠洲	甕	Ⅱ期	(50.0)		17.0	口縁2/5		タタキ	外:灰 内:灰	10Y5/1 N6/	○	○	○				石英○ 黒色粒△ 白濁粒(φ1～2)△	同一個体の破片他に3点あり 一点にスス付着
234	B	SE-1256	E-13-9	青磁	碗	上田B－Ⅱ$_{ｈ}$		5.4	2.2	底部1/4			灰白	10Y7/2	○	○						
235	B	SE-1256	E-13-9	瓷器系	甕						ナデ		黄灰	2.5Y6/1	○	○					白色細粒:○ 小礫△	
236	B	SE-1287	D-14-18	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱb	8.4		1.8	全体1/3		手づくね	橙	7.5YR7/6	△	×	○		▼			器面全面荒れ
237	B	SE-1287	D-14-18	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○	○				礫△	破口にスス付着
238	B	SKp-1326	E-15-10	珠洲	壷T							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	◎				黒色粒○	全体にガサつく
239	B	SE-1292	E-14-20 上層	珠洲	片口鉢	Ⅱ～Ⅲ		12.0	2.9	底部2/5		ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	◎				黒色粒△ 石英△	底面・内面:使用により滑らか
240	B	SE-1288	D-14-14	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱa2	10.8		2.9	全体1/6	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	△	△					
241	B	SE-1288	D-14-14	珠洲	壷R							タタキ	外:灰 内:灰白	10Y6/1 7.5Y7/1	○	○	○				白色中粒△	
242	B	SE-1300	E-15-11	珠洲	甕							ロクロ	外:灰 内:灰	10Y4/1 10Y6/1	○	○	△				石英▼	
243	B	SE-1300	E-15-11	珠洲	甕							ロクロ	灰白	7.5Y8/1	×	×	○				小岩礫○ スサ▼	
244	B	SE-1301	E-15-12	珠洲	片口鉢	Ⅲ期						ロクロ	灰白	5Y7/1	△	△	○				白色粒△ 大粒白色岩粒△	
245	B	SD-1286	№104 E-10-8	中世土師器(白)	小皿	刈小皿-Ⅱc	8.3	6.0	1.8	全体3/4	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△		△			褐色粒△	
246	B	SD-1286	№96 E-10-14	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱa	(8.4)		1.9	口縁1/6	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	△	△	◎				褐色粒△	
247	B	SD-1286	№134 E-11-11	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅰ	(8.5)		1.4	全体1/6	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	○				微砂:褐色粒○	
248	B	SD-1286	№59 E-10-9	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱa1	13.0		4.0	口縁1/16	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	◎				褐色粒△	
249	B	SD-1286	№112 E-11-15	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲaⅱ	13.0	10.0	3.9	全体1/8	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	△		○			細砂:褐色粒△	磨滅著しい
250	B	SD-1286	№67 E-10-14	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅰ	(13.0)		3.4	口縁1/14	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	△	△	△					
251	B	SD-1286	№60 E-10-9	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲbⅰ	12.4		3.1	全体1/3	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	○	○				海綿骨針▼	
252	B	SD-1286	№86・88 E-10-8	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱa2	(12.0)		3.1	全体1/6	ナデ	手づくね	橙	5YR6/6	△	△	○				褐色礫(φ4)△	
253	B	SD-1286	№51 E-10-10	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅰ	(13.6)		2.5	口縁1/8	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/3	△	△	△				黒褐色粒○ 礫(φ6)▼	

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
254	B	SD-1286	№89 E-10-7	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	(13.8)		3.0	口縁1/8	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR6/4	△	×			◎		礫(φ1～3)○(φ6)▼	内外面:荒れ著しい 内面～口唇部磨滅
255	B	SD-1286	№130 E-12-11	珠洲	片口鉢			(9.0)	5.4	底部1/3		ロクロ	灰	10Y6/1	○	△	◎				微砂:長石○・黒色粒○・白色粒△	底部破面に漆継ぎの痕あり 内面:使用による磨滅◎ ハジケ痕多し
256	B	SD-1286	№29 E-11-6	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	5Y7/2	△	△	◎				礫(φ1～5)△	
257	B	SD-1286	№75 E-10-8	珠洲	片口鉢	Ⅳ1期						ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				白色礫(φ1～2)△	全体的にガサつく
258	B	SD-1286	№30 E-11-6	珠洲	片口鉢	Ⅳ2期						ロクロ	灰	10Y6/1	○	△	◎					全体的にガサつく
259	B	SD-1286	№81 E-10-13	珠洲	片口鉢			(13.6)	3.8	底部1/6		ロクロ	灰	10Y6/1	○	○		◎			雑多	
260	B	SD-1286	№107 E-10-7	珠洲	片口鉢			10.4	2.8	底部1/4	ヘラケズリ	ロクロ	灰白	5Y7/1	○	△	○				微砂:白色粒△　黒色粒○　礫(φ1～6)○　海綿骨針△	内面:使用による磨滅◎ スス?付着
261	B	SD-1286	№149 E-12-18	珠洲	片口鉢			12.0	4.3	底部1/4		ロクロ	灰白	7.5Y8/1	×	△	○				白色粒(φ1～3)△	
262	B	SD-1286	№52 E-10-9	珠洲	壷R			(9.0)	7.6	底部1/4		ロクロ	外:灰白 内:黄灰	2.5Y7/1 2.5Y6/1	○	○	○				微砂:白色粒○・黒色粒△・褐色粒△　海綿骨針○	
263	B	SD-1286	№32 E-11-6	珠洲	壷T							タタキ	灰	5Y5/1	○	○		○			細砂:白色粒○	
264	B	SD-1286	№92 E-11-7	珠洲	壷T							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	○			△	海綿骨針▼	内面:オロシ目あり?
265	B	SD-1286	№91 E-10-7	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	△				白色粒(φ3)△	
266	B	SD-1286	№3 E-11-8	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	○				微砂:黒色粒○　礫(φ1～7)△	
267	B	SD-1286	№132 E-12-11	珠洲	甕	Ⅳ2期						タタキ	灰	7.5Y1/6	○	○	◎				微砂:長石△・黒色粒○	
268	B	SD-1286	№116 E-12-11	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y5/1	○	△	○				白色粒△　石英△	
269	B	SD-1286	№147 E-12-18	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○		◎		△	粗雑　礫(φ3～10)△　細砂:黒色粒○・白色粒△・石英△	
270	B	SD-1286	№97 E-10-9	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	△	○	△			黒色粒○　白色粒○	外面:磨滅
271	B	SD-1286	E-12-19 床	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○	○	○			微・細砂:長石○・黒色粒○・白色粒△　海綿骨針△	
272	B	SD-1286	№64 E-10-9	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y7/1	○	○	◎				黒色粒◎	壷ヵ
273	B	SD-1286	E-12	青磁	碗	上田B－Ⅱカ		5.4	1.8	底部1/2			オリーブ灰	5GY6/1	○	△					緻密	脚底:磨滅著しく滑らか
274	B	SD-1286	№24 E-11-11	珠洲	甕							タタキ	灰白	5Y7/1	△	△	○				微砂:長石△・白色粒△・黒色粒△・褐色▼	
275	B	SD-1286	№45 E-10-10	珠洲	甕							タタキ	黄灰	2.5Y6/1	○	○	◎				黒色粒◎◎	
276	B	SD-1286	№140 E-12-17	越前	甕								灰褐	5YR5/2	○	○		◎	◎		小礫○	
277	B	SD-1286	№44 E-10-15	越前	甕								外:にぶい赤褐 内:灰褐	5YR5/4 7.5YR5/2	○	○		◎		○	礫(φ5)○　白色系の礫・砂粒○	越前?
278	B	SD-1286	№76 E-10-8	瓷器系	甕						ナデ		灰白	2.5Y7/1	○	○		○			細砂:長石△　礫(φ1～3)△	
279	B	SD-1286	№20 E-11-11	須恵器	甕								灰	5Y6/1	○	○		○			細砂:白色粒△	
280	B	SD-1302a	1区	珠洲	片口鉢							ロクロ	黄灰	2.5Y6/1	○	○		◎	◎		石英○　海綿骨針▼	全体的にガサつく
281	B	SD-1302a		珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	○				石英○	内面:アテ痕(水曳?)ナデ痕
282	B	SD-1302a		珠洲	壷T							タタキ	灰白	2.5Y7/1	○	○		◎			細砂:石英?◎	
283	B	SD-1302a	3区	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	◎				礫(φ1～4)△	
284	B	SD-1302a	1区	珠洲	甕							タタキ	黄灰	2.5Y5/1	○	○	◎					
285	B	SD-1302a		珠洲	甕						内面:ヘラ?ナデ	タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				微砂:長石◎	重い　内面に指紋あり
286	B	SD-1302a	3区	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○		◎			細砂:黒色粒○・白色粒○	
287	B	SE-1305	D-15-25	珠洲	片口鉢							ロクロ	黄灰	2.5Y6/1	○	△	◎		○	○	小礫△	内面:使用による磨耗顕著
288	B	SE-1305	D-15-25	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎	◎			白色中粒△　海綿骨針○	
289	B	SE-1305	D-15-25	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	○				石英○　海綿骨針▼	
290	B	SE-1308	D-16-22	珠洲	片口鉢	Ⅳ3期						ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	◎					ガサガサ　334甕と同じ胎土
291	B	SE-1308	D-16-22	珠洲	甕							タタキ	外:灰 内:灰白	10Y5/1 7.5Y7/1	○	○	◎				黒色粒○	
292	B	SE-1308	D-16-22	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	△	◎					
293	B	SE-1308	D-16-22	珠洲	甕	Ⅳ2期					タタキ	タタキ	灰	7.5Y5/1	○	○	◎					口唇部:自然釉　重い
294	B	SE-1308	D-16-22	珠洲	壷T			12.0	6.7	底部1/3	ナデ　アテ タタキ	タタキ 静止糸切り	灰	10Y5/1	◎	○	○				白色粒▼　黒色粒△	
295	B	SE-1308	D-16-22	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	○	○			石英△　白色粒△	
296	B	SE-1308	D-16-22	珠洲	壷T						ナデ　タタキ	タタキ	灰	7.5Y5/1	○	○	◎				黒色粒○　白色粒△	
297	B	SK-1324	欠番	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y5/1	○	○	◎				黒色粒○	欠番
298	B	SX-1335	E-16-19	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	△	○		◎		○		内面:一部に縦位の軽いケズリ調整
299	B	SKp-1347	E-16-19	珠洲	小鉢	Ⅲ期						ロクロ	灰	7.5Y5/1	○	○		○				内外面:薄い自然釉で光沢あり
300	B	SKp-1347	E-16-19	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰オリーブ	5Y6/2	○	○	◎				海綿骨針○	
301	B	SKp-1338	D-14-24	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	○	○	○		海綿骨針○	
302	B	SE-1312	E-16-5	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	8.0		1.6	全体1/8		手づくね	橙	5YR7/6	△	△	○					全体的に磨滅
303	B	SE-1314	E-16-15	中世土師器(黒)	小皿	刈小皿-Ⅱc	8.2		1.6	全体1/2	ナデ	手づくね	灰褐	7.5YR4/2	△	△	△				石英△　海綿骨針▼	
304	B	SE-1314	E-16-15	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱd	9.4		2.0	全体1/6		手づくね	橙	5YR6/6	△	△	○				石英△	全体的に磨滅

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
305	B	SE-1314	E-16-15	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅳa	12.6		3.2	全体1/6	ナデ	手づくね	橙	2.5YR6/6	△	△	△				石英△	306と同タイプ 2段ナデ
306	B	SE-1314	E-16-15	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅳa	13.2		3.2	口縁1/8	ナデ	手づくね	橙	7.5YR6/6	△	△	△				石英△ 海綿骨針▼	305と同タイプ 2段ナデ
307	B	SE-1314	E-16-15	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱcⅱ	12.4		3.9	全体1/4	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5Y7/4	○	△	○	○				厚手 口唇部:丸みを帯びくぼまない
308	B	SE-1314	E-16-15	珠洲	壺T							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎			△	海綿骨針△	
309	B	SE-1314	E-16-15	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	◎	◎	◎		海綿骨針○	
310	B	SE-1314	E-16-15	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				小礫△ 石英△	
311	B	SE-1314	E-16-15	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				海綿骨針△	
312	B	SE-1314	E-16-15	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y5/1	○	○	◎				石英○	
313	B	SE-1314	E-16-15	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				石英○ 海綿骨針○	
314	B	SE-1314	E-16-15	珠洲	甕							タタキ	外:灰 内:灰白	7.5Y6/1 5Y7/1	○	△	○					内外面・破面の一部:スス付着 割れた後に被熱
315	B	SE-1314	E-16-15	越前	片口鉢								明褐灰	5YR7/2	○	○		○	○		白色粒○	
316	B	SK-1315	E-17-1	近世陶器?	甕?			13.0	7.5	底部1/6	ナデ		外:オリーブ褐 内:にぶい赤褐	2.5Y4/4 5YR5/3	○	○	○					内面:薄い鉄釉
317	B	SD-1332		珠洲	甕	Ⅴ期					ナデ アテ タタキ	タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				石英○	
318	B	SK-1345	E-17-4	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	○					
319	B	SD-1359		珠洲	壺							タタキ	灰	N6/	○	○	○					
320	B	SKp-1349	E-16-13	珠洲	壺?							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎					
321	B	SK-1317	E-17-4	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	(10.4)		3.8	口縁1/6	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	×	○					全体に厚手
322	B	SE-1319	E-17-3	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱcⅰ	(13.0)		2.9	口縁1/12		手づくね	橙	5YR6/6	△	×	△					内外面:磨滅
323	B	SKp-1330	D-17-15	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅲaⅰ	13.4		3.4	全体1/2	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	×	○					全体に磨滅 器面荒れている
324	B	SKp-1331	D-17-19	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲcⅱ	12.6		3.8	全体1/4		手づくね	にぶい橙	5YR7/4	△	△	○					
325	B	SKp-1334	E-16-8	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅳb	11.9		3.1	ほぼ完形	ナデ	手づくね	明赤褐	5Y5/8	△	△	○					内面:一部にスス付着
326	B	SKp-1362	D-14-23	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅰa1	(13.1)		2.9	全体1/5	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	×	○					
327	B	SKp-1337	E-16-8	白磁	碗	Ⅳ-1a	(15.0)		3.7	口縁1/16			灰白	2.5GY8/1	○	○					緻密	
328	B		表土剥ぎ	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	(14.0)		4.0	口縁1/8	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5YR7/4	○	○	○				石英○	
329	B		表土剥ぎ	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	5Y7/1	○	△	◎			△		内面:使用による磨滅
330	B		馬場B	珠洲	壺?							タタキ	黄灰	2.5Y6/1	○	○	○				白色粒△ 黒色粒△ 石英△	
331	B		馬場B	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎					
332	B		表土剥ぎ	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	○				海綿骨針△	
333	B		表土剥ぎ	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	○				海綿骨針△	
334	B		表土剥ぎ	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y5/1	○	○	◎				石英◎ 小礫△	全体にスカスカ 軽い
335	B		廃土	珠洲	甕							タタキ	黄灰	2.5Y6/1	○	○	◎				黒色粒◎	
336	B		表土剥ぎ	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	△	△				白色粒(φ1～2)○	
337	B		E-12	珠洲	甕							タタキ	灰白	5Y7/1	○	△	○					一部に鉄サビ・小砂利付着
338	B		廃土	青磁	碗	—		9.0	2.3	底部1/16			内:明緑灰 外:明オリーブ灰	7.5GY7/1 5GY7/1	○	○					緻密	被熱白濁全面に貫入あり
339	B		E-11	青磁	碗	龍泉窯Ⅰ-4a	17.0		4.4	口縁1/10			灰オリーブ	7.5Y6/2	○	○					緻密	
340	B		1区 廃土	須恵器	甕								灰	10Y6/1	○	○		○				
341	CⅠ	SE-1703	D-18-20	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y5/1	○	○	○				小礫(φ5)△	
342	CⅠ	SE-1701	D-18-9	珠洲	甕							タタキ	黄灰	2.5Y5/1	○	○	◎			▼	内外面:一部にスス付着	
343	CⅠ	SE-1701	D-18-9	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱb	10.0		1.8	口縁1/4	ナデ	手づくね	橙	5YR6/6	△	△		○			石英△	
344	CⅠ	SE-1702	D-18-20	珠洲	片口鉢			15.0	5.1	底部1/6	ナデ	ロクロ 静止糸切り	外:赤灰 内:灰	2.5YR6/1 10Y6/1	○	○		◎	△		石英○ 小礫(φ5)△ 海綿骨針○	
345	CⅡ	SD-1726	2区 E-22-3	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅰ	8.2	7.1	1.6	全体1/4	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/3	△	△	○		△		褐色粒△ 白色粒△	
346	CⅠ	SE-1720	D-18-20	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱcⅰ	11.0		2.2	口縁1/12	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5YR7/4	△	△		○				
347	CⅠ	SE-1720	D-18-20	珠洲	壺?							タタキ	灰白	10Y4/1	○	○	◎				黒粒子◎	ガサつく
348	CⅠ	SE-1720	D-18-20	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲ		8.6	1.5	底部1/2	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5YR7/3	○	△	○				石英○ 褐色粒△	
349	CⅠ	SE-1706	E-19-1	珠洲	片口鉢	Ⅴ期	36.0		11.6	口縁1/10		ロクロ	灰白	10Y7/1	○	○		○	○			350と同一個体 全体的にガサついている
350	CⅠ	SE-1706	E-19-1	珠洲	片口鉢	Ⅴ期						ロクロ	灰白	10Y7/1	○	○		○	○			349と同一個体 片口部
351	DⅠ	SE-2424	D-24-20	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	13.0		3.7	全体1/4	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5YR7/4	△	△	○				微砂:褐色粒△ 白色粒△	
352	DⅠ	SE-2426	E-25-1	珠洲	壺			12.2	3.8	底部1/4	ナデ	ロクロ 静止糸切り	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				緻密 微砂:石英○・黒色粒◎	底部:離れ砂少量付着
353	DⅠ	SE-2426	E-25-1 上層 D-27	珠洲	片口鉢	Ⅴ期						ロクロ	灰白	10Y7/1	○	△	◎			○	粗雑 海綿骨針△	
354	DⅠ	SE-2426	E-25-1 上層	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	○		△		やや緻密 微砂:石英○	
355	DⅠ	SE-2426	E-25-1 上層	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y6/1	△	×	◎		○	○	粗雑 スサ? 微砂:白色粒○ 海綿骨針○	器面荒れ
356	DⅠ	SE-2432	D-25-17	珠洲	片口鉢			13.6	5.6	底部1/4		ロクロ 静止糸切り	灰黄	2.5Y6/2	△	○	○		○	○	やや粗雑 海綿骨針○	

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
357	DⅠ	SE-2432	D-25-17	珠洲	片口鉢			15.0	4.6	底部1/4		ロクロ	灰	7.5Y6/1	△	△	◎	◎			粗雑 微～細砂:石英△ 海綿骨針△	内面:スス付着
358	DⅠ	SE-2432	D-25-17	珠洲	片口鉢			16.2	4.4	底部1/8		ロクロ	灰	7.5Y6/1	△	○	◎		○	○	粗雑	破口に漆つぎあり
359	DⅠ	SE-2432・2433	D-25-17	珠洲	甕	Ⅳ1期						タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○		△			白色岩粒(φ0.5未満)△ 海綿骨針○	
360	DⅠ	SE-2433	D-25-17	珠洲	片口鉢			12.0	5.0	底部1/8		ロクロ	灰	10Y5/1	△	○		△			白色岩粒○ 海綿骨針○	
361	DⅠ		D-27	珠洲	壷T?							タタキ	灰白	7.5Y7/1	○	△		△			細砂:黒色粒・白色粒 大粒礫(φ5)▼	全体にガサつく
362	DⅠ		廃土	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○		◎			細砂:白色粒○・ガラス○ 海綿骨針▼	タタキ痕の幅が4mmと広い
363	DⅠ		D-27	須恵器	甕							タタキ	灰白	5Y7/1	○	△		◎	◎		やや緻密 細～中砂:白色粒○	
364	DⅠ	SD-2401	№53 E-24-6	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱd	7.8		2.0	口縁1/8		手づくね	にぶい褐	7.5YR6/3	△	△		△			ガラス質微砂△	内面:スス 器肉内にも浸透
365	DⅠ	SD-2401a	№8 E-24-12	中世土師器(赤)	高台皿	北B-底部b		4.0	2.4	底部完形		ロクロ	橙	5YR6/6	△	△		◎			細砂:ガラス・雲母・白色粒 褐色粒(φ3前後)△ 海綿骨針▼	
366	DⅠ	SD-2401	№39 E-24-7	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	15.0		3.6	口縁1/10	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5YR7/4	○	○	○				微砂:石英○	
367	DⅠ	SD-2401	№27 E-24-8	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅲcⅱ	12.3	8.2	3.2	完形	ナデ	手づくね	淡黄	2.5Y8/3	△	△	○				微砂:石英○	内面:部分的に指頭によるへこみあり
368	DⅠ	SD-2401b		中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱcⅱ	12.4	8.0	3.4	全体1/6	ナデ	手づくね	淡橙	5YR8/4	△	△	○				褐色粒○	器内:マーブル状に赤白の縞 全体的に磨滅
369	DⅠ	SD-2401	№57 E-24-1	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲbⅰ	12.4	8.0	3.1	全体1/6	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/3	△	△	○				褐色粒○	
370	DⅠ	SD-2401	№45 E-24-6	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○	○				緻密 微砂:石英△ 白色粒(φ0.1～3)○	内面:使用による磨耗
371	DⅠ	SD-2401	№37 E-24-13	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	7.5Y7/1	△	○	◎	◎	◎		やや粗雑 微～中砂:白色粒○ 海綿骨針○	
372	DⅠ	SD-2401a	№11 E-25-11	珠洲	壷R							ロクロ	灰	N5/	○	○	△				緻密 白色粒(φ0.5～4)○	
373	DⅠ	SD-2401	№38 E-24-7	珠洲	壷T							タタキ	灰	N6/	○	○	◎				粗雑 小礫△	
374	DⅠ	SD-2401	№21 E-24-8	珠洲	甕			15.8	2.7	底部1/5		—	灰	10Y6/1	○	○		◎			やや粗雑細砂:石英○ 海綿骨針▼	底面:離れ砂
375	DⅠ	SD-2401	№30 E-24-8	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y7/1	○	○	○				やや緻密	
376	DⅠ	SD-2401	№29 E-24-8	珠洲	甕	Ⅱ期	32.4		5.5	口縁1/24		タタキ	灰	10Y5/1	○	○	◎		△		微砂:黒色粒◎・白色粒○・石英○ 中砂:φ1～2 礫(φ5)▼	
377	DⅠ	SD-2401	E-25-14 上層	珠洲	甕							タタキ	灰白	5Y8/2	△	△		○			白色軟質岩粒(φ1～2)○ 海綿骨針○	色調は黄灰色を呈し、やや酸化する
378	DⅠ	SD-2401a	E-24 上層	越前	壷							タタキ	赤褐	10R5/3	○	○		◎	◎		粗雑 長石○	
379	DⅠ	SD-2401	№40 E-24-7	越前	甕							タタキ	にぶい橙	2.5YR6/4	○	△		◎	◎		粗雑 細～中砂:長石○ スサ○	
380	DⅠ	SD-2401	№47 E-24-7	白磁	碗	Ⅳ－1a	16.6		3.5	口縁1/10			灰白	7.5Y8/2	○	○					緻密 黒～褐色微粒○	
381	DⅠ	SD-2401	№19 E-25-20	陶器	小皿		9.6		2.4	全体1/4			灰白	2.5GY8/1	○	△					緻密 白灰色微細粒△	内外面:灰釉 (細かな貫入多い)
382	DⅠ	SD-2401	№58 E-24-11	青磁	碗	—		4.0	2.2	底部1/4			明緑灰	10GY8/1	○	○					緻密 黒色微細粒▼	
383	DⅠ	SD-2401	№54 E-24-6	青磁	碗	上田B－Ⅳ		6.0	4.8	底部1/4			灰白	10Y7/2	○	○					緻密 部分的に顆粒状のもの見える	内外面:釉(貫入あり)
384	DⅠ	SD-2401	E-24	瀬戸・美濃	天目茶碗		11.7		3.5	口縁1/8			にぶい赤褐	5YR4/3	○	○					緻密だが全体にガサつく	古瀬戸後期Ⅳ期古ｶ
385	DⅠ	SD-2469	D-27	中世土師器(赤)	小皿	関B-Ⅲc底部iii		5.2	0.7	底部1/2	ナデ	ロクロ	橙	7.5YR7/6	△	△	△				褐色粒△	
386	DⅠ	SD-2469	№46 D-27-18	珠洲	壷T							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎		○			
387	DⅠ	SD-2469	№3 E-27-7	珠洲	壷R							ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	◎				やや粗雑 微砂:白色粒△ 海綿骨針△	
388	DⅠ	SD-2469	№18 D-27-22	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y6/1	○	△	○		◎	◎	粗雑 微砂:石英○	
389	DⅠ	SD-2469	№44 D-27-18	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	5Y8/1	△	△		△			白色粒(φ0.5未満)△	やや生焼け 若干酸化 やや軟質
390	DⅠ	SD-2469	№68 D-27-13	珠洲	片口鉢							ロクロ 静止糸切り	灰	10Y6/1	○	○	○	○			粗雑 細砂:白色粒○ 海綿骨針○	
391	DⅠ	SD-2469	№1 E-27-12	珠洲	甕			14.0	4.3	底部1/4		タタキ	灰	10Y5/1	○	○	◎				微砂:石英○ 白色粒△ 海綿骨針○	
392	DⅠ	SD-2469	№50 D-27-18	珠洲	甕			13.2	4.8	底部1/4		ロクロ	灰白	N7/	○	○	◎				粗雑 微砂:石英○ 白色粒(φ2)▼	内面:スス付着
393	DⅠ	SD-2469	№19 D-27-22	珠洲	甕							ロクロ	灰白	5Y8/1	△	△		△			ガラス質△ 白色岩粒(φ1未満)△ 海綿骨針○	
394	DⅠ	SD-2469	№40 D-27-23	青磁	碗	龍泉窯Ⅰ－2aｶ		6.0	3.1	底部1/5			明オリーブ灰	5GY7/1	○	○					緻密	内外面:釉
395	DⅠ	SE-2464	E-26-15	珠洲	片口鉢	Ⅳ3期	36.1		7.7	口縁1/10		ロクロ	灰	10Y5/1	○	○	◎				微砂:白色粒○・黒色粒△・石英○ 海綿骨針○	
396	DⅠ	SE-2470	E-24-15 下層	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y4/1	○	○	◎	◎		○	やや粗雑 微～細砂:白色粒◎・石英◎	
397	DⅠ		E-24-4	珠洲	片口鉢			11.2	4.6	底部1/5		ロクロ	灰	7.5Y6/1	△	△		○			白灰色岩粒(φ3未満)○ 海綿骨針○	
398	DⅠ		D-27	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	△		◎	◎	◎	細～租砂:石英○ 小礫△	
399	DⅠ		D-27	珠洲	片口鉢			12.4	5.3	底部1/4		ロクロ 静止糸切り	灰	10Y6/1	○	△	◎	○			粗雑 小礫△ 海綿骨針△	
400	DⅡ	SE-2502	E-28-7	珠洲	甕							—	灰	10Y4/1	○	○	◎	○			海綿骨針▼	
401	DⅡ	SE-2515	D-29-16	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	(8.0)		1.6	口縁1/12	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	△		○			褐色粒(φ0.3)△	
402	DⅡ	SE-2515	D-29-16	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y6/1	○	○		◎			細砂:ガラス○・黒色微粒○ 白色岩粒△ 海綿骨針▼	
403	DⅡ	SE-2527	D-29-18	珠洲	甕			9.2	2.1	底部1/4		ロクロ	にぶい橙	7.5YR7/3	○	△		◎			細砂:白色微粒主体・ガラス△ 海綿骨針○ やや粗雑	酸化した珠洲
404	DⅡ	SE-2527	D-29-18	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○		○			細砂:白色粒・ガラス 海綿骨針△	内面:ハジケ状剥離著しい
405	DⅡ	SE-2527	D-29-18	越前	壷			18.5	5.3	底部1/8	ヘラケズリ→ナデ		にぶい赤褐	2.5YR5/4	○	△		◎			長石○	内外面:鉄釉
406	DⅡ	SE-2527	D-29-18	唐津	皿			4.2	2.2	底部1/3			明褐灰 釉:灰オリーブ	7.5YR7/1 7.5Y5/3	○	○	△				やや緻密	17c前葉 内外面:灰釉(漬けがけ)
407	DⅡ	SE-2535	D-29-25	珠洲	片口鉢							ロクロ	外:灰 内:灰	N5/ N6/	○	△		◎			白色岩粒(φ1～3)○ 海綿骨針△	
408	DⅡ	SE-2562	D-30-16	越前	甕							ロクロ	褐灰	10YR5/1	○	○		◎			礫(φ2～3)△	外面:鉄釉

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
409	DⅡ	SE-2562	D-30-16	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎			○	微砂:石英◎・白色粒○ 粗砂:φ2	
410	DⅡ	SE-2562	D-30-16	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				微砂:石英○・白色粒△・黒色粒△ やや緻密	珠洲だが内面にアテ具痕あり
411	DⅡ	SE-2562	D-30-16	珠洲	片口鉢			(12.0)	1.1	底部1/6		ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	△	◎				微砂:白色粒◎ 白色岩粒(φ2)△	内外面:平滑 転用
412	DⅡ	SE-2562	D-30-16	青磁	碗	上田D－Ⅱ	14.0		3.1	口縁1/11			灰白	10Y7/2	○	○	○				やや粗雑 微砂:(φ0.2～0.5)白色粒△・黒色粒▼	
413	DⅡ	SKp-2571	D-30-16	中世土師器(赤)	皿	京A2-Ⅲa	(13.0)		1.8	口縁1/20	ナデ	手づくね	淡橙	5YR8/4	△	△	△				褐色粒△ 金雲母▼	494と類似
414	DⅡ	SE-2585	D-30-21	中世土師器(赤)	皿	京A2-Ⅱa	14.0	7.4	2.1	全体2/3	ナデ	手づくね (指紋あり)	浅黄橙	5YR7/6	○	○				○	粗砂:φ1～2 金雲母(φ0.3)○	内面:大半に暗褐色の付着物あり。(元々全面か)内底面を中心に付着物のある範囲は平滑に磨滅。 使用痕明瞭。搬入品?
415	DⅡ	SK-2586a	D-30-21	中世土師器(赤)	小皿	関B-Ⅱbⅲ	9.7		3.3	口縁1/12	ナデ	ロクロ	浅黄橙	10YR8/4	△	△	△				微細金雲母(φ0.1～0.3)△	内外面:一部にタール付着
416	DⅡ	SE-2589	D-30-22	中世土師器(黒)	小皿	関B-Ⅲ底部ⅱ		6.0	0.8	底部1/4		ロクロ	黒褐	2.5Y3/1	△	△	○				微砂:石英○	413と類似
417	DⅡ	SE-2589	D-30-22	中世土師器(白)	小皿	関B-Ⅲ底部ⅱ		5.2	1.1	底部完形		ロクロ	外:灰白 内:灰	7.5Y8/1 10Y4/1	△	△	○			▼	微砂:石英○	412と類似
418	DⅡ	SE-2591	D-30-22	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y5/1	○	△	◎				粗雑 海綿骨針△	
419	DⅡ	SE-2591	D-30-22	珠洲	甕								灰白	5Y7/1	○	△	◎				微砂:黒色粒○・白色粒△・石英△	外面:灰釉
420	DⅡ	SE-2596	D-30-23	中世土師器(白)	小皿	刈小皿－Ⅰ	(8.8)	7.0	1.4	全体1/12	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	▼				褐色粒▼	
421	DⅡ	SE-2596	D-30-23	珠洲	壷T							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				粗雑 礫(φ1～2)○ 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
422	DⅡ	SE-2596	D-30-23	珠洲	片口鉢							タタキ	灰	5Y4/1	○	○	◎	○			微砂:石英○ 細砂:白色粒○	
423	DⅡ	SK-2599	D-30-23	中世土師器(白)	小皿	関B-Ⅱ口縁部		10.5	2.4	口縁1/12	ナデ	ロクロ	にぶい黄橙	10YR7/3	○	○	△				やや粗雑 金雲母(φ0.1)△	口唇部:タール付着
424	DⅡ	SKp-2623	E-29-3	中世土師器(赤)	小皿	関B-Ⅱaⅲ	10.0	6.1	2.6	全体1/5	ナデ	ロクロ	にぶい黄橙	10YR7/3	△	△	○				緻密 金雲母(φ0.1)△	
425	DⅡ	SKp-2645	E-29-10	中世土師器(赤)	皿	京A2-Ⅱc	11.4		2.3	口縁1/8	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/6	△	△	△				金雲母△	全体に磨滅著しい
426	DⅡ	SKp-2670	E-30-1	中世土師器(赤)	皿	関B-Ⅲ底部ⅱ		7.6	1.2	底部1/4	ナデ	ロクロ	橙	7.5YR7/6	△	△	○				海綿骨針▼	
427	DⅡ	SKp-2673	E-30-6	青磁	碗		11.0		2.4	口縁1/12			緑灰	7.5GY6/1	○	○					緻密	
428	DⅡ	SE-2685	E-30-6	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				微砂:石英◎・白色粒○・黒色粒△ 礫(φ3～5)○ 海綿骨針△	破口:漆継ぎ痕
429	DⅡ	SKp-2732	E-30-3	瀬戸・美濃	小皿			7.0	1.7	底部1/8			浅黄	7.5Y7/3	○	○	△				微砂:黒色粒▼	内外面:灰釉 大窯
430	DⅡ	SKp-2713	E-30-2	須恵器	有台椀	小泊系		6.4	1.8	底部1/8	ナデ		灰白	7.5Y7/1	○	○	○				微砂:白色粒○・石英△	
431	DⅡ	SKp-2733	欠番(2732と一体 E-30-3)	中世土師器(白)	小皿	京A2-Ⅳa	(8.6)		1.3	口縁1/8	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	△				金雲母▼	
432	DⅡ	SKp-2722	E-30-3	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	(13.0)		2.7	口縁1/16	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	△		◎			金雲母▼ 石英△ 褐色粒△	
433	DⅡ	SE-2792a	E-30-25	珠洲	片口鉢			14.0	4.5	底部1/6		ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	○	◎				微砂:ガラス質○・白色粒△	内面:使用により磨滅
434	DⅡ	SE-2819	E-31-11 4～7層	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y6/1	○	△	◎	◎	◎		粗雑 海綿骨針△	
435	DⅡ	SE-2819	E-31-11 №10	珠洲	片口鉢			(11.0)	3.4	底部1/4		ロクロ	灰	10Y6/1	○	△	○			△	やや粗雑	
436	DⅡ	SE-2819	E-31-11	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎	△			海綿骨針○	
437	DⅡ	SE-2819	E-31-11	珠洲	壷R	K種ヵ						ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	○			○			
438	DⅡ	SE-2819	E-31-11	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○	◎		○	○	微砂:石英○ 海綿骨針△	
439	DⅡ	SE-2819	E-31-11 1～7層	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	○			▼	やや緻密 黒色粒○	
440	DⅡ	SE-2819	E-31-11	珠洲	甕	Ⅵ期						タタキ	灰	7.5Y5/1	○	△	◎				微砂:白色粒○・黒色粒○・石英○ 礫(φ2～3)△	内面:タール?付着 漆継痕あり 444と同一個体
441	DⅡ	SE-2819	E-31-11 1～7層	珠洲	甕	Ⅳ3期						タタキ	灰	10Y5/1	○	○		△			緻密 小礫△	
442	DⅡ	SE-2819	E-31-11	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	○	◎	○			やや緻密 微砂:石英○ 海綿骨針○	
443	DⅡ	SE-2819	E-31-11	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				石英○ 白色粒○	
444	DⅡ	SE-2819	E-31-11	珠洲	甕	Ⅵ期						タタキ	灰	10Y5/1	○	△	◎				微砂:白色粒○・黒色粒○・石英○ 礫(φ2～3)△	内面:タール?付着 漆継痕あり 440と同一個体
445	DⅡ	SE-2819	E-31-11 №11	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y5/1	○	○	◎				やや粗雑 微砂:石英△	
446	DⅡ	SE-2819	E-31-11	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎	△			微砂:白色○ 海綿骨針○	
447	DⅡ	SE-2819	E-31-11	珠洲	甕						ナデ	タタキ	灰	10Y5/1	○	○	○			△	やや緻密	壷? 器内:紫色系
448	DⅡ	SE-2819	E-31-11	瓷器系	甕		52.4		7.6	口縁1/20		ロクロ	灰	10Y5/1	○	○	△			△	緻密 海綿骨針○ 微砂:石英△ 粗砂:白色粒○	常滑6a型式並行ヵ 加賀?
449	DⅡ	SE-2819	E-31-11	越前	甕								外:赤褐 内:明褐灰	10R5/3 7.5YR7/2	○	△		◎			やや粗雑 長石○	
450	DⅡ	SE-2819	E-31-11	越前	片口鉢		34.2	16.1	11.6	全体1/8			にぶい橙	5YR6/4	○	○				◎◎	粗砂:φ1～2	漆つぎ痕あり 越前Ⅴ3期古
451	DⅡ	SE-2819	E-31-11	越前	甕								にぶい橙	7.5YR6/4	○	○			◎		粗雑 小礫△	外面:鉄釉
452	DⅡ	SE-2819	E-31-11	越前	片口鉢								灰赤	10R5/2	○	○		◎	○		長石(φ1～4)◎	内外面:鉄釉
453	DⅡ	SE-2819	E-31-11	瓷器系	甕								灰白	10Y8/1	○	○		◎			細砂:白色粒○・石英○・黒色粒△ 礫(φ2～3)△	
454	DⅡ	SE-2819	E-31-11 1～7層	青花	皿			6.8	0.8	底部1/4			灰白	7.5Y8/1	○	△					緻密	
455	DⅡ	SE-2819	E-31-11 1～7層	青磁	碗	龍泉窯杯Ⅲ－3b		3.7	1.9	底部1/6			緑灰	5G6/1	○	△					緻密	
456	DⅡ	SE-2819	E-31-11	瀬戸・美濃	大皿類			16.0	1.6	底部1/8			外:灰白 内:灰白	5Y7/1 7.5Y7/2	○	△			○		やや緻密 中砂:長石△	内面:灰釉ハケ塗り
457	DⅡ	SE-2819	E-31-11 1～7層	瀬戸・美濃	小皿		11.0		1.7	口縁1/16			浅黄	5Y8/3	○	○					粗雑 白色粒△	内外面:黄釉

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
458	DⅡ	SE-2819	E-31-11 1～7層	唐津	鉢								外:灰赤 内:灰オリーブ	2.5YR6/2 5Y6/2	○	○	○				粗雑	外面:鉄釉 内面:灰釉
459	DⅡ	SE-2819	E-31-11	唐津	皿								外面:2色 灰白・にぶい橙	10Y8/2 2.5YR6/3	○	○	◎		△		やや緻密	外面の一部・内面:灰釉
460	DⅡ	SE-2819	E-31-11 4～7層	須恵器	甕								灰	7.5Y6/1	○	△	◎				微砂:石英○	
461	DⅡ	SE-2819	E-31-11	須恵器	甕								灰	7.5Y6/1	○	△		◎			細砂:白色粒○・黒色粒○ 礫(φ2～5)△	断面全面研面 砥石転用
462	DⅡ	SE-2819	E-31-11	須恵器	甕								灰白	7.5Y7/1	○	○			◎	○	粗雑 白色粒○	
463	DⅡ	SE-2811	E-30-10	青磁	碗	上田B－Ⅰ	12.0		2.7	口縁1/12			灰オリーブ	7.5Y5/3	○	○					緻密	
464	DⅡ	SK-2817	E-31-11	中世土師器(白)	皿	京A2-Ⅱb	(13.0)		1.6	口縁1/12	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△	△					
465	DⅡ	SE-2818	欠番(2819と一体 E-31-11)	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	△	△		◎			細砂:ガラス○・黒色粒○・白色粒△ ガサついている。	欠番
466	DⅡ	SE-2818	欠番(2819と一体 E-31-11)	青磁	碗	—		6.3	2.1	底部1/2			オリーブ黄	7.5Y6/3	○	○					緻密(砂粒等無し)	内外面:釉 欠番
467	DⅡ	SE-2818	欠番(2819と一体 E-31-11)	珠洲	壷						ナデ	ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎		◎		中砂:白色粒○ 海綿骨針△ 微砂:白色粒○・黒色粒○	欠番
468	DⅡ	SE-2818	欠番(2819と一体 E-31-11)	唐津	皿		13.0		1.6	口縁1/16			灰白	5Y8/2	○	○					やや緻密	内外面:灰釉 欠番
469	DⅡ	SE-2827	D-31-13	中世土師器(白)	皿	京A2-a	12.0	7.0	2.4	全体1/16	ナデ	手づくね	灰白	2.5Y8/2	○	○	▼				緻密	471と類似
470	DⅡ	SE-2827	D-31-13	中世土師器(白)	皿	京A2-Ⅱa	14.6	7.6	2.3	全体1/5	ナデ	手づくね	灰黄褐	10YR6/2	○	○	▼				緻密	
471	DⅡ	SE-2827	D-31-13	中世土師器(褐)	皿	京A2-Ⅱa	14.6	7.6	2.6	全体1/2	ナデ	手づくね	暗灰黄	2.5Y5/2	○	○	▼				緻密	内面:油スス多量 かき集めたような擦痕あり
472	DⅡ	SE-2827	D-31-13	中世土師器(白)	皿	京A2-Ⅱa	15.4	9.0	2.0	全体1/5	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	○	○	▼				緻密	水曳きヵ 器面滑らか 468と類似
473	DⅡ	SE-2827	D-31-13	中世土師器(白)	小皿	京A2-Ⅲ底部		4.8	1.5	底部4/5		手づくね	淡黄	2.5Y8/3	△	△	△					内面:剥離著しく調整痕とどめていない
474	DⅡ	SE-2827	D-31-13	瀬戸・美濃	皿			7.0	1.2	全体1/7		糸切り	灰白	2.5Y8/1	○	○	△				微砂:黒色粒△	
475	DⅡ	SE-2827	D-31-13	青磁	碗	上田D－Ⅱ	18.0		2.8	口縁1/16			灰白	7.5Y7/2	○	○					緻密	
476	DⅡ	SE-2827	D-31-13	須恵器	甕	小泊系							灰白	7.5Y7/1	○	△	◎				緻密 微砂:黒色粒○・白色粒△・石英△	全体に磨滅
477	DⅡ	SKp-2840	D-31-18	中世土師器(白)	小皿	刈小皿－Ⅰ	8.1		1.5	全体1/5	ナデ	手づくね	灰黄褐	10YR6/2	△	△	△				微砂:雲母○	
478	DⅡ	SKp-2862	D-31-21	中世土師器(赤)	小皿	関B-Ⅲa i	7.7	5.8	1.7	ほぼ完形	ナデ	ロクロ	浅黄橙	7.5YR8/4	△	△		◎		○	細砂:白色粒○・石英△	
479	DⅡ	SKp-2855	欠番	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱ底部		7.0	2.8	底部1/5	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/2	△	△	○				微砂:石英○	全体に磨滅 欠番
480	DⅡ	SE-2915	E-31-14	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱb3	(13.0)		2.5	口縁1/12	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	○	○	◎					
481	DⅡ	SE-2928a	E-31-23	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲ	13.8		3.1	口縁1/10	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/3	△	△	○				褐色粒(φ0.5)△	器形的に特殊ヵ
482	DⅡ	SE-2962	E-30-20	珠洲	片口鉢			10.6	5.1	底部1/4		ロクロ 糸切り	黄灰	2.5Y5/1	○	○	◎				微砂:ガラス○・白色粒○・黒色粒△ 海綿骨針△	底部:付着物あり 糸切り粗雑 内外面:鉄釉?
483	DⅡ	SX-3001	E-31-20 上層	中世土師器(白)	小皿	関B-Ⅲa底部 i		5.0	1.1	底部完形	ナデ	ロクロ	にぶい黄橙	10YR7/2	○	△	○				微砂:白色粒○	内外面・底面:タール付着 灯明皿
484	DⅡ	SX-3001	E-31-20	中世土師器(赤)	小皿	関B-Ⅲ底部 ii		5.0	1.4	底部1/2	ナデ	ロクロ	橙	7.5YR7/6	△	△	○				微砂:白色粒△・黒色粒▼	焼成前穿孔→酒杯?
485	DⅡ	SX-3001	E-31-20 下層	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅰa2					ナデ	手ずくね	灰黄褐	10YR6/2	△	△	◎				やや緻密	
486	DⅡ	SX-3001	E-31-20 下層	珠洲	小鉢							ロクロ	灰	10Y5/1	○	○	◎				やや緻密 白灰色粒(φ1)△ 微砂:黒色粒◎・白色粒△・石英△	
487	DⅡ	SX-3001	E-31-20	瀬戸・美濃	筒形容器			(12.1)	2.4	底部1/16			外:にぶい褐 内:淡黄	7.5YR6/3 5Y8/3	○	○					ガサつくが緻密	内外面:灰釉 淺黄(5Y7/4) 外面一部:鉄釉
488	DⅡ	SX-3001	E-31-20 上層・表土	瓦器	鉢?		18.0		5.4	口縁1/6	ナデ ミガキ		浅黄橙	7.5YR8/4	○	○		◎			粗雑 小礫△	
489	DⅡ	SE-3013	D-32-11	白磁	口禿碗	Ⅸ	15.0		3.5	口縁1/24			灰白	10Y8/2	○	○					やや緻密	口唇部:釉無し
490	DⅡ	SE-3013	D-32-11	珠洲	甕							タタキ	外:灰 内:灰白	7.5YR6/1 7.5YR7/1	○	△	○				微砂:白色粒○・黒色粒○ 礫(φ3～4)▼ 海綿骨針○	
491	DⅡ	SKp-3027	D-32-17	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	5Y7/1	○	△			◎		中砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
492	DⅡ	SE-3038	E-32-7	珠洲	片口鉢			13.4	5.7	底部1/2		ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	△				◎	粗雑感あり 粗砂φ1～3・5	内底面:使用による磨滅著しい
493	DⅡ	SE-3038	E-32-7	珠洲	片口鉢			12.0	5.1	底部1/4		ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	△			◎		粗雑感あり 海綿骨針○ 中砂:φ1～2(ガラス△)	底部から胴部への立ち上がりに丸みを持つ
494	DⅡ	SKp-3049	D-33-17	珠洲	甕							タタキ	黄灰	2.5Y5/1	○	○	◎				微砂:石英◎・白色粒○ 海綿骨針○	
495	DⅡ	SKp-2921	E-31-3	越中瀬戸	小皿		(10.0)		2.3	口縁1/12	ナデ	糸切り	にぶい黄橙	10YR7/3	○	△		○			粗雑 細砂:白色粒△	
496	D		表採	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△	◎				粗雑 微砂:黒色粒○・白色粒△	
497	D			珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	○				微砂:黒色粒○・石英△・白色粒△	壷?
498	D		表採	珠洲	片口鉢							タタキ	灰白	10Y7/1	○	○	◎			▼	粗雑 微砂:黒色粒○・白色粒△	
499	D			珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○		◎		○	細砂:白色粒○・石英○ 粗砂:φ1～3	
500	DⅡ		E-34-17	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	○	◎				やや緻密 微砂:黒色粒◎・白色粒○・石英△	
501	D		表採	須恵器	甕								灰	7.5Y5/1	○	△	○				やや緻密 微砂:白色粒△	内外面:黒色
502	D		表採	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	◎				粗雑 微砂:黒色粒◎	
503	DⅡ		E-32-1 表土	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△	○				緻密 海綿骨針○ 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
504	D			珠洲	壷R							ロクロ	灰	10Y6/1	○	△	◎				粗雑 微砂:白色粒○・石英△ 海綿骨針△(細かい)	
505	D			珠洲	片口鉢			12.0	3.3	底部1/6		ロクロ	灰	5Y6/1	○	△	◎				粗雑 微砂:白色粒◎・黒色粒○・石英△	
506	D		表採	瓷器系	甕								黄灰	2.5Y6/1	○	△	○				粗雑 微砂:白色粒△	外面:鉄釉? 越前ヵ

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
507	D		E-31	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△		◎			細砂:黒色微砂◎・ガラス△	
508	D		D-29-17	瀬戸・美濃	天目茶碗			4.6	1.1	底部1/3			灰褐	7.5YR4/2	○	△					粗雑	内外面:鉄釉
509	D		D	中世土師器(赤)	皿	京A2-Ⅲb	(13.0)		2.0	口縁1/10	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/4	△	△	▼				金雲母▼	365と類似
510	D		D	瀬戸・美濃	折縁皿		10.0		1.9	口縁1/20			浅黄	5Y7/3	○	△					粗雑 白色粒:(φ0.1)△	内外面:釉
511	D		D	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅲ	7.6	5.4	1.5	全体1/2	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/4	△	△		○			褐色粒○	
512	E	SD-301	№210 E-38-5	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	(6.0)		1.7	全体1/4	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	×	△					
513	E	SD-301	№334 E-38-19	中世土師器(赤)	小皿	関B-Ⅲciii	7.2	6.0	1.7	口縁1/3	ナデ	ロクロ	浅黄橙	7.5YR8/3	△	△	△				褐色粒△	
514	E	SD-301	№206 E-38-13	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅲ	7.2	5.0	1.5	全体1/3	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	△	△	○				微砂:褐色粒△	全体に磨滅
515	E	SD-301	№318 E-38-12	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅲ	(8.0)		1.5	全体1/6	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	△		◎				
516	E	SD-301	—	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	(8.0)		2.0	口縁1/4	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	○	△	○					
517	E	SD-301	№398 E-38-14	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	8.4		1.9	全体1/3	ナデ	手づくね	浅黄橙	10YR8/3	△	△		◎			細砂:褐色粒△・石英△・雲母?△	一部に油スス付着
518	E	SD-301	№430 E-38-11	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅲ	8.4		1.7	全体1/4	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/4	△	△	○					全体に磨滅
519	E	SD-301	D-35-12 最下層	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅲ	8.0	5.4	1.5	全体1/4	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	△	◎					
520	E	SD-301	№201 E-38-13	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	(8.6)	(4.7)	1.6	全体1/16	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/3	△	△	◎					内面・口唇部:磨滅
521	E	SD-301	№67 E-36-3	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱb	(9.0)	(7.0)	1.7	全体1/8	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/4	△	△	△		▼			内面・口唇部:磨滅
522	E	SD-301	№330 E-38-11	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	(9.0)		1.5	口縁1/10	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/4	○	△	◎					
523	E	SD-301	№483 E-37-10	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅰ	(11.5)		2.9	全体1/4	ナデ	手づくね	にぶい橙	5YR7/4	△	△	○					
524	E	SD-301	№155 E-36-5	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅱbⅰ	(12.0)		2.4	口縁1/8	ナデ	手づくね	浅黄	2.5Y8/3	○	○	○					
525	E	SD-301	№302 E-38-17	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱcⅰ	(12.0)		2.7	口縁1/8	ナデ	手づくね	橙	5YR6/6	○	△		◎			細砂:石英○	
526	E	SD-301	№72 D-36-24	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅰ	12.8		2.6	全体1/5	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/3	△	△	○					
527	E	SD-301	№138 D-36-22	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅳa	12.4		2.9	口縁1/8	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5YR7/3	○	○	◎					
528	E	SD-301	№239 E-38-14	中世土師器(白)	皿	刈皿-Ⅰb2	(13.1)		3.0	口縁1/10	ナデ	手づくね	灰白	2.5Y8/2	△	△	○					
529	E	SD-301	№418 E-37-9	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	(13.0)		3.4	口縁1/8	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	△	△	○					
530	E	SD-301	№211 E-38-19	中世土師器(黒)	小皿	関B-Ⅲbⅲ	7.7	5.6	2.1	全体4/5	ナデ	ロクロ	灰褐	5YR5/2	○	△	▼					内外面:油スス付着 (特に外底面)
531	E	SD-301	№224 E-36-5	中世土師器(赤)	小皿	関B-Ⅲbⅲ	7.6	5.0	2.3	全体2/3	ナデ	ロクロ	浅黄橙	7.5YR8/3	△	△	○				褐色粒△	
532	E	SD-301	E-38	中世土師器(赤)	皿	関B-Ⅱbⅲ	10.0	6.2	2.5	全体1/16	ナデ	ロクロ	浅黄橙	10YR8/3	△	△	△				緻密 金雲母(φ0.2)△	
533	E	SD-301	№327 E-38-19	中世土師器(黒)	皿	関B-Ⅱbⅲ	9.6	6.0	2.4	全体2/3	ナデ	ロクロ	灰白	7.5Y8/2	○	△	△				緻密	燈明皿 内面:油スス付着
534	E	SD-301	№311・244 E-38-4・14	中世土師器(白)	皿	関B-Ⅱbⅲ	10.2	6.0	2.8	全体2/3	ナデ	ロクロ	灰白	10YR8/2	△	△	▼					
535	E	SD-301	№276・283 E-38-19	中世土師器(白)	皿	関B-Ⅰ底部ⅲ		7.6	1.3	底部4/5	ナデ	ロクロ	浅黄橙	10YR8/3	△	△	▼				緻密 微砂:褐色粒△	
536	E	SD-301	№370 E-38-18	中世土師器(赤)	皿	関B-Ⅱbⅱ	10.6	7.0	2.7	全体1/8	ナデ	ロクロ	浅黄橙	7.5YR8/3	○	○	△				金雲母(φ0.1)○	口唇部:スス・タール付着
537	E	SD-301	E-37	中世土師器(白)	皿	関B-Ⅱ口縁部	10.3		2.2	口縁1/4	ナデ	ロクロ	灰白	10YR8/2	△	△	▼				褐色粒○	
538	E	SD-301	№279 E-38-14	中世土師器(赤)	皿	関B-Ⅰ底部ⅲ		8.4	2.5	底部1/2	ナデ	ロクロ	浅黄橙	10YR8/3	△	△	▼				緻密	内面・底面:油スス付着
539	E	SD-301	№323 E-38-19	中世土師器(赤)	皿	関B-Ⅰ底部ⅲ		9.0	1.8	底部1/2	ナデ	ロクロ	浅黄橙	7.5YR8/3	△	△	▼				微砂:褐色粒△	
540	E	SD-301	№?	中世土師器(白)	皿	関B-Ⅰbⅲ	15.0		3.0	口縁1/10	ナデ	ロクロ	浅黄橙	10YR8/3	○	△	▼				緻密	
541	E	SD-301	№295 E-38-14 E-38	中世土師器(赤)	皿	関B-Ⅰaⅲ	(15.6)	(8.4)	4.2	全体1/16	ロクロナデ	ロクロ ヘラケズリ	浅黄橙	10YR8/3	△	△	△				褐色粒(φ1～3)△	京都系模倣ロクロ土師器
542	E	SD-301	№234 E-38-14	中世土師器(赤)	皿	関B-Ⅰaⅲ	14.4	7.4	3.9	全体1/3	ナデ	ロクロ	浅黄橙	7.5YR8/3	△	△	▼				緻密 微砂:褐色粒△	外面・口縁:スス付着
543	E	SD-301	№198・205 E-38-14・19	中世土師器(白)	皿	関B-Ⅰbⅲ	(15.9)		3.8	口縁1/6	ナデ	ロクロ ヘラケズリ	浅黄	2.5Y8/3	△	△	○					京都系模倣
544	E	SD-301	№262 E-38-19	中世土師器(赤)	皿	関B-Ⅰbⅲ	14.0		2.7	口縁1/12	ロクロナデ	ロクロ	浅黄橙	7.5YR8/4	△	△	△				金雲母(φ0.1)△	ロクロ土師器 京都系の模倣の可能性あり 磨耗も著しいが、全体的にルーズ感あり
545	E	SD-301	E-37-9・14 中層	中世土師器(黒)	皿	関B-Ⅱcⅰ	10.4	7.0	2.3	全体1/4	ナデ	ロクロ	黒褐	10YR3/1	○	○	◎				微砂:石英○	内外面:タール付着
546	E	SD-301	E-37	珠洲	片口鉢	Ⅴ期						ロクロ	灰	5Y6/1	○	△	◎			○	やや粗雑 粗砂:φ2 微砂:白色粒△・黒色粒△・石英△	
547	E	SD-301	№352 E-38-14	珠洲	片口鉢	Ⅳ2期						ロクロ	灰黄	2.5Y7/2	○	○	○				やや緻密	
548	E	SD-301	№429 E-38-11	珠洲	片口鉢	Ⅴ期						ロクロ	外:灰 内:灰褐	10Y5/1 7.5YR5/2	○	△		◎			細砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
549	E	SD-301	№414 E-37-6	珠洲	片口鉢	Ⅴ期						ロクロ	灰	10Y5/1	○	△	○				やや粗雑 海綿骨針△ 微砂:白色粒△・黒色粒▼・石英△	
550	E	SD-301	№462 E-37-15	珠洲	片口鉢	Ⅶ期						ロクロ	灰	10Y4/1	○	○	◎				微砂:白色粒△・黒色粒◎・石英△ 礫(φ2～4)○ 海綿骨針○ 木炭片	
551	E	SD-301	№58 E-36-3	珠洲	片口鉢	Ⅴ期						ロクロ	灰	10Y4/1	○	△	◎			○	粗雑 粗砂:φ2 微砂:白色粒△・黒色粒△・石英△	
552	E	SD-301	№321 E-36-5	珠洲	片口鉢	Ⅳ2期						ロクロ	灰白	5Y7/2	○	○	○				粗雑 小礫▼ 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	569と同一個体ヵ
553	E	SD-301	№6 D-35-12	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○		◎		○	粗雑 粗砂:φ2 細砂:白色粒○・黒色粒○・石英△	
554	E	SD-301	№466 E-37-10	珠洲	片口鉢	Ⅲ期ヵ						ロクロ	灰白	N7/	○	○	○		△		やや緻密 中砂:白色粒○・黒色粒△・石英○	
555	E	SD-301	№85 D-35-25	珠洲	片口鉢	Ⅲ期ヵ						ロクロ	灰白	5Y8/1	△	△	○			△	やや粗雑 粗砂:φ1～5 微砂:白色粒△・黒色粒△	生焼け
556	E	SD-301	№178 E-38-14	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○	○			△	やや緻密 粗砂:φ2未満 微砂:白色粒△・黒色粒△・石英△	
557	E	SD-301	№69 E-36-4	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎		○		粗雑	
558	E	SD-301	№227 E-36-5	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y5/1	○	○	◎◎				粗雑 微砂:白色粒△・黒色粒◎・石英○	
559	E	SD-301	E-38	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y6/1	○	△	◎			○	微砂・粗砂:(φ1～3)白色粒◎・黒色粒△・石英△ 粗雑	

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
560	E	SD-301	№444 E-37-14	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	N7/	○	○	◎				やや粗雑 微砂:白色粒△・黒色粒◎・石英△	
561	E	SD-301	№22 D-35-19	珠洲	片口鉢			13.0	3.4	底部1/6		ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎				かなり粗雑 礫(φ2～4)◎ 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	内面:剥離
562	E	SD-301	№306 E-37-7	珠洲	甕							ロクロ	灰	5Y5/1	○	△		◎			やや粗雑 白色岩粒(φ2)△ 細砂:白色粒○・黒色粒◎・石英△	
563	E	SD-301	№403 E-37-7	珠洲	甕			13.0	5.9	底部1/6		ロクロ	赤灰	2.5YR5/1	○	○	◎		△		やや粗雑 礫(φ2～4)△ 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	
564	E	SD-301	№345 E-38-18	珠洲	片口鉢			14.0	5.7	底部1/5		ロクロ	灰白	5Y8/2	○	○	○				やや緻密 白小礫△ 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	557と同一個体ヵ 焼成:半酸化炎
565	E	SD-301	№221 E-36-5	珠洲	壺R							ロクロ	灰	5Y6/1	○	△		◎		○	細砂:白色粒○・黒色粒○・石英○ 小礫△ 粗砂:φ1～3	
566	E	SD-301	№184 E-38-19	珠洲	壺T	Ⅲ期	26.0		8.8	口縁1/5		タタキ	灰	7.5Y5/1	○	△	◎				微砂:白色粒○・黒色粒△・石英○ 小礫(φ1～3)○ 海綿骨針○	
567	E	SD-301	№160 E-38-4	珠洲	甕	Ⅱ期	38.2		5.8	口縁1/12	タタキ	タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎				微砂:白色粒△・黒色粒◎・石英▼	内外面:自然釉
568	E	SD-301	№24 D-35-19	珠洲	甕	Ⅴ期						タタキ	灰	N6/	○	○		◎		◎	粗雑 細砂・粗砂:白色粒◎・黒色粒○・石英△ 小礫△	
569	E	SD-301	№15 D-35-18	珠洲	甕	Ⅳ2期						タタキ	灰	10Y5/1	○	○		◎		◎	粗雑 細砂・粗砂:白色粒◎・黒色粒○・石英△ 小礫△	
570	E	SD-301	№70 E-36-4	珠洲	壺R							ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	○	◎				やや粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒○・石英○	
571	E	SD-301	—	珠洲	壺?							タタキ	灰白	10Y6/1	○	△	◎					
572	E	SD-301	№30 D-35-18	珠洲	壺R							ロクロ	灰	10Y6/1	○	○	◎				やや緻密 礫(φ2～4)△ 微砂:白色粒◎・黒色粒○・石英○ 海綿骨針△	
573	E	SD-301	№157 E-36-5	珠洲	壺R							ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎				粗雑 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	
574	E	SD-301	№417 E-37-9	珠洲	壺T						ナデ・アテ	タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△	○		△		やや緻密 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英▼	
575	E	SD-301	№175 E-38-19	珠洲	壺R			8.0	7.6	底部2/3		ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				粗雑 礫(φ2～6)△ 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
576	E	SD-301	№374・408 D-38-25・E-38-4	珠洲	壺R			8.4	9.6	底部1/4		ロクロ 静止糸切り	灰	10Y5/1	○	○	◎				粗雑 礫(φ3～5)○ 海綿骨針○ 微砂:白色粒○・黒色粒◎ 石英○	
577	E	SD-301	№236 E-38-15	珠洲	甕							タタキ	灰	10YR6/1	○	△	◎			○	緻密 粗砂:φ2～3 海綿骨針△ 微砂:白色粒△・黒色粒△ 石英△	
578	E	SD-301	№373 E-38-9	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	○			△	やや緻密 粗砂:φ2 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	
579	E	SD-301	№288 E-38-11	珠洲	壺T							タタキ	灰	N6/	○	○	◎				粗雑 海綿骨針○ 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英○	
580	E	SD-301	№427 E-37-14	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△	◎				やや緻密 海綿骨針△ 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
581	E	SD-301	№346 E-38-5	珠洲	壺?							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	○				緻密 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	
582	E	SD-301	№297 E-38-12	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○	◎				やや粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒○・石英△	
583	E	SD-301	№324 E-38-13	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	△	◎			△	やや粗雑 粗砂:φ1～4 微砂:白色粒○・黒色粒○・石英△	
584	E	SD-301	№258 E-37-1	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
585	E	SD-301	№452 E-38-11	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎			△	微砂:白色粒○・黒色粒○・石英△	
586	E	SD-301	№17 E-35-18	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○		◎		◎	粗雑 細砂:粗砂:白色粒◎・黒色粒○・石英△ 小礫△	
587	E	SD-301	№459 E-38-11	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	○		◎			細砂:白色粒○・黒色粒○・石英◎	器肉:紫色系
588	E	SD-301	№412 E-37-8	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○	◎			△	微砂:白色粒△・黒色粒△・石英○ 海綿骨針○	
589	E	SD-301	№469 E-37-10	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	○	◎	○			粗雑 礫△ 細砂:白色粒◎・黒色粒○・石英△	
590	E	SD-301	№35 D-35-25	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	△	◎			△	やや粗雑 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	
591	E	SD-301	№56 E-36-2	珠洲	甕							タタキ	灰	N6/	○	○		◎			やや粗雑 小礫(φ2～4)○ 細砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
592	E	SD-301	№98 D-36-23	珠洲	甕						ナデ	タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎			△	やや粗雑 海綿骨針▼ 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	
593	E	SD-301	№235 E-38-14	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎		△		微砂:白色粒○・黒色粒○・石英○ 海綿骨針△	
594	E	SD-301	№331 E-38-19	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○	◎			△	微砂:白色粒○・黒色粒○・石英△ 粗砂:φ2～3 海綿骨針△	壺?
595	E	SD-301	№356 E-37-7	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎		○		やや粗雑 微砂・中砂:白色粒○・黒色粒◎・石英○	
596	E	SD-301	№360 E-38-18	珠洲	甕							タタキ	灰白	N7/	○	○	◎				微砂:白色粒○・黒色粒○・石英○	
597	E	SD-301	№477 E-37-15	珠洲	甕							タタキ	灰白	N7/	○	○		◎	○		粗雑 小礫:(φ4)○	
598	E	SD-301	№387 E-37-8	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	○	◎				やや粗雑 礫(φ2～6)△ 微砂:白色粒◎・黒色粒○・石英○ 海綿骨針○	
599	E	SD-301	№104 E-36-4	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎	○			微砂・細砂:白色粒○・黒色粒△・石英△ 小礫△	
600	E	SD-301	№141 E-36-3	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎	○			粗雑 微砂・細砂:白色粒○・黒色粒△・石英▼ 海綿骨針△	
601	E	SD-301	№270 E-37-1	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎				やや粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒◎	
602	E	SD-301	E-38	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○		◎			やや粗雑 小礫△ 細砂:白色粒◎・黒色粒△・石英△	
603	E	SD-301	№109 D-36-21	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y5/1	△	△	○				緻密	焼成:半酸化炎
604	E	SD-301	№364 E-38-18	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○	◎				やや緻密 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	
605	E	SD-301	№259 E-38-13	珠洲	甕							タタキ	灰	N4/	○	○	◎				やや粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英○	
606	E	SD-301	№167 E-38-5	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎				粗雑 微砂:白色粒△・黒色粒△・石英△	壺?
607	E	SD-301	№19 D-35-18	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△	◎	○			やや緻密 微砂・細砂:白色粒○・黒色粒○・石英○ 小礫(φ2～4)○	
608	E	SD-301	№420 E-37-9	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○		○			細砂:白色粒○・黒色粒△・石英○	破面:漆継痕
609	E	SD-301	№29 D-35-19	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	△	◎			○	粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒◎・石英△	
610	E	SD-301	№156 E-36-5	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○		◎	○		やや緻密 中砂:白色粒○ 細砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
611	E	SD-301	№428 E-38-11	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△	○		△		緻密 中砂:φ1 微砂:白色粒△・黒色粒▼・石英▼	壺?
612	E	SD-301	№124 D-36-21	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y5/1	○	○	◎	○			やや緻密 微砂:白色粒△・黒色粒◎・石英△	

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
613	E	SD-301	№161 E-38-4	珠洲	甕							タタキ	灰白	7.5Y7/1	○	△	◎				やや粗雑 微砂:白色粒△・黒色粒○	内外面:平滑 底面:微砂付着
614	E	SD-301	№243 E-38-12	珠洲	甕?							ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	○	○				微砂:白色粒▼・黒色粒○・石英△	
615	E	SD-301	№405 E-38-18	瓷器系	甕								灰	10Y6/1	○	○	○				やや緻密 白小礫△ 微砂:白色粒△・黒色粒△・石英△	
616	E	SD-301	№481 E-38-11	越前	大甕								灰黄	2.5Y6/2	○	△			◎		粗雑 中砂:白色粒△	
617	E	SD-301	E-37	瀬戸・美濃	尊式花瓶								灰白 釉:淺黄	5Y8/2 7.5Y7/3	○	○	○				やや緻密	外面:灰釉
618	E	SD-301	№445 E-37-15	瀬戸・美濃	天目茶碗			4.5	2.9	底部完形			灰白 釉:灰褐	2.5Y8/2 7.5YR4/2	○	○	▼					内外面:鉄釉 625と胎土近似
619	E	SD-301	№176 E-38-14	瀬戸・美濃	卸目付大皿			15.0	7.2	底部1/3	ヘラ削り	ヘラ削り	淺黄 釉:淺黄	2.5Y8/3 2.5Y7/4	○	○	○				緻密	内外面:一部灰釉 古瀬戸後期Ⅱ～Ⅳ期古
620	E	SD-301	№174 E-38-4	瀬戸・美濃	天目茶碗		11.2		4.2	口縁1/5			灰白 釉:黒	10YR7/1 10YR2/1	○	△	▼				緻密	内外面:鉄釉 623と胎土近似 古瀬戸後期Ⅳ期新
621	E	SD-301	№151 D-36-24	瀬戸・美濃	尊式花瓶		11.0		6.5	口縁1/8			灰白 釉:淺黄	5Y8/2 7.5Y7/3	○	○	△				緻密	内面の一部・外面:灰釉 古瀬戸後期Ⅳ期新
622	E	SD-301	№303 E-38-14	瀬戸・美濃	鉢?			8.4	1.8	底部1/2		削り	灰白 釉:淺黄	7.5Y8/1 7.5Y7/3	○	○			△		緻密	内外面:灰釉
623	E	SD-301	№133 D-36-16	瀬戸・美濃	小鉢			4.7	2.1	底部完形		糸切り 削り	淡黄 釉:淡黄	2.5Y8/3 5Y8/3	○	○	△				緻密	内面:灰釉 古瀬戸後期Ⅱ～Ⅳ期古
624	E	SD-301	№413 E-37-8	青磁	碗	—	(14.4)		3.7	口縁1/8			釉:オリーブ灰	10Y6/2	○	○					やや緻密 白色粒(φ0.2)○ 黒色粒(φ0.2)△	630と同一個体 内外面:釉
625	E	SD-301	№463 E-37-15	青磁	碗	—							釉:オリーブ灰	10Y6/2	○	○					やや緻密 白色粒(φ0.2)○ 黒色粒(φ0.2)△	629と同一個体 内外面:釉
626	E	SD-301	№54 D-36-21	白磁	碗	Ⅳ-1a	(16.0)		2.4	口縁1/18			釉:灰白	10Y8/2	○	○					緻密 白色粒▼ 黒色粒▼	内外面:釉
627	E	SD-301	E-37	白磁	口禿碗	Ⅸ	(13.0)		1.6	口縁1/16			灰白 釉:灰白	7.5Y7/1 2.5GY8/1	○	○					緻密 白色粒(φ0.1)○	内外面:釉(口唇部除く) ロハゲ碗
628	E	SD-301	№371 E-37-7	青白磁	梅瓶	—							明緑灰	10GY8/1	○	○					緻密 黒色粒(φ0.2)△	外面:釉
629	E	SD-301	E-37	青磁	碗	上田B－Ⅱカ							釉:明緑灰	7.5GY8/1	○	○					緻密(気泡若干あり)	内外面:釉 蓮弁
630	E	SD-301	№388 E-37-8	磁器	碗	—							釉:灰白	5Y8/2	○	○					緻密	
631	E	SD-301	№386 E-37-7	瓦器	?								灰白	7.5Y8/1	△	△		○			緻密 細砂:石英○	内面・口唇部:炭素吸着 平板なことから方形の器である可能性あり
632	E	SD-301	E-37	須恵器	甕	小泊系							灰白	10Y8/1	○	△	○				緻密 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	外面:自然釉
633	E	SD-302	№7 D-35-22	珠洲	片口鉢			10.0	3.8	底部1/4		ロクロ	灰白	10Y7/1	○	△			◎		粗雑 白岩粒(φ1～3)◎ 中砂:白色粒◎・黒色粒△・石英△	
634	E	SD-303	№1 E-36-6	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	10Y6/1	○	○		◎			粗雑 海綿骨針△ 細砂:白色粒◎・黒色粒○・石英△	
635	E	SD-304	№4 E-35-12	瓦器	鉢			14.0	1.7	底部1/4	ロクロ		灰白	10YR8/2	△	△	○					
636	E	SE-305	№3 E-35-7	中世土師器(赤)	皿	関B-Ⅲ底部ⅱ		6.9	1.5	底部完形	ナデ	ロクロ	橙	5YR7/6	○	○		◎				
637	E	SE-305	E-35-7	珠洲	片口鉢	Ⅳ3期						ロクロ	灰白	10Y7/1	○	△	○		△		微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△ 海綿骨針○	
638	E	SE-305	№1 E-35-7	瀬戸・美濃	甕								灰白	2.5Y8/1	○	○			◎		緻密 長石(φ1～4)◎	外面:鉄釉
639	E	SE-310	E-37-24	珠洲	片口鉢	Ⅱ期						ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	△		◎			粗雑 小礫(φ3～4)△ 細砂:白色粒△・黒色粒○・石英▼	
640	E	SE-310	E-37-24	須恵器	甕	小泊系							外:灰オリーブ 内:黄灰	5Y5/2 2.5Y6/1	○	○					緻密	外面:自然釉 破面・内面:スス付着
641	E	SE-311	E-37-25	珠洲	片口鉢	Ⅳ期						ロクロ	灰白	7.5Y7/1	○	△		◎		○	やや粗雑 粗砂:φ1～3 細砂:白色粒◎・黒色粒△・石英○	
642	E	SE-312	E-38-17	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	9.0	6.0	1.4	全体1/4	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	○	△	○					
643	E	SE-312	E-38-17	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅲ	8.6	6.6	1.7	全体1/4	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	○	○		◎				
644	E	SE-312	E-38-17	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱcⅱ	12.1		3.9	完形	ナデ	手づくね→ナデ	にぶい黄橙	10YR7/2	△	○		◎			細砂:石英○・黒雲母○	内面:タール・スス付着 粘土板のつなぎの痕跡を内外面にとどめる
645	E	SE-312	E-38-17	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱbⅱ	(11.0)		3.7	口縁1/6	ナデ	手づくね	淺黄橙	7.5YR8/6	△	△	◎		△		小礫(φ3)▼	
646	E	SE-312	E-38-17	青磁	碗	上田B－Ⅱカ		5.6	2.3	底部完形			灰オリーブ 釉:灰白	5Y6/2 10Y7/2	○	○					緻密	内外面:釉
647	E	SE-313	E-38-24	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱb	8.0		1.8	口縁1/12			にぶい橙	7.5YR7/4	△	△	△					全体に磨滅 調整痕なし
648	E	SE-313	E-38-24	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱd	8.2		2.1	全体1/4	ナデ	手づくね	淺黄橙	7.5YR8/3	○	○	○				褐色粒△	
649	E	SE-313	E-38-24	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱb	7.4		1.7	全体1/4	ナデ	手づくね	橙	5YR7/6	△	△	◎					
650	E	SE-313	E-38-24	珠洲	片口鉢							ロクロ	黄灰	2.5Y6/1	○	○	◎			△	粗雑 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英○	
651	E	SE-313	E-38-24	珠洲	片口鉢	Ⅳ2期	30.4		9.5	口縁1/8		ロクロ	灰	5Y5/1	○	○	◎◎				粗雑 海綿骨針△ 細砂:白色粒○・黒色粒△・石英○	
652	E	SE-313	E-38-24	越前	甕								灰	10Y5/1	○	○		◎		○	やや緻密 粗砂:φ1～2 細砂:白色粒○・黒色粒△・石英▼	
653	E	SE-313	E-38-24	瀬戸・美濃	天目茶碗			4.1	1.4	底部完形			灰白 釉:黒	10Y8/1 5Y2/1	○	○		○			やや緻密	内面:鉄釉
654	E	SE-314	E-39-1	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲcⅱ	12.8		3.7	全体1/5	ナデ	手づくね	淺黄橙	7.5YR8/3	○	○	◎	○				
655	E	SE-314	E-39-1	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲcⅱ	12.0		3.7	全体1/4	ナデ	手づくね	にぶい橙	5YR7/3	○	○	◎					
656	E	SE-314	E-39-1	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲcⅰ	12.5		3.3	全体1/4	ナデ	手づくね→擦痕	にぶい黄橙	10YR7/3	△	○		◎			細砂:石英◎	粘土板合わせ目あり

遺物番号	地区	遺構名	出土位置 層位	種別	器種	分類	法量(cm) 口径	底径	器高	残存度	調整・成形 調整	成形	色調 土色	表記	焼成	遺存	胎土 微砂	細砂	中砂	粗砂	その他	備考
657	E	SE-314	E-39-1	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲc ⅰ	(13.1)		3.1	全体1/16	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5YR7/4	○	○	○					
658	E	SE-314	E-39-1	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲc ⅱ	13.4		3.4	全体1/5	ナデ	手づくね	淡橙	5YR8/3	○	○	◎					内面・口唇部:水曳痕が顕著
659	E	SE-339	E-38-10 下層	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅲ	7.4		1.6	全体1/4	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/6	△	△	○					
660	E	SE-339	E-38-10 下層	須恵器	甕	小泊系							灰白	5Y7/1	○	○	○				緻密	外面:自然釉
661	E	SE-325	E-38-15 下層	白磁	碗	Ⅳ－1a	17.0		5.3	口縁1/28			灰黄 釉:灰白	2.5Y7/2 5Y8/1	○	○					緻密 黒色粒(φ0.1～0.2)△	内外面:釉
662	E	SE-325	E-38-15 下層	白磁	碗	Ⅳ－1aカ		7.2	3.4	底部1/5			灰黄 釉:灰白	2.5Y7/2 10Y8/1	○	○					緻密 白色粒(φ0.5)△ 黒色粒(φ0.2)△	内面:釉
663	E	SE-325	E-38-15 下層	白磁	碗	Ⅴ－4c	(14.6)		5.0	口縁1/16			釉:灰白	7.5Y7/2	○	○					緻密 白色粒(φ0.2～0.3)○ 黒色粒(φ0.3)△	内外面:釉
664	E	SE-325	E-38-15 下層	須恵器	甕								灰	7.5Y6/1	○	○	◎				やや緻密 微砂:白色粒○・黒色粒○・石英△	671と同一個体
665	E	SE-325	E-38-15 下層	須恵器	甕								灰	5Y6/1	○	○	○				緻密 微砂:白色粒△・黒色粒▼・石英▼	
666	E	SE-325	E-38-15 下層	須恵器	甕	小泊系							灰	7.5Y6/1	○	○	◎				やや緻密 微砂:白色粒○・黒色粒○・石英△	669と同一個体
667	E	SE-325	E-38-15 中層	珠洲	甕							タタキ	灰	N5/	○	○	◎				緻密 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英○	
668	E	SE-331	E-39-12	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱa	8.1	6.0	1.7	ほぼ完形	ナデ	手づくね	浅黄橙	7.5YR8/4	△	△	◎					内面:荒れ著しく調整痕不明
669	E	SE-331	E-39-12	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱb ⅰ	11.6		2.4	口縁1/6	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/4	△	×	◎					
670	E	SE-331	E-39-12	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱa1	10.6	6.0	3.1	全体1/8	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5Y7/4	△	△	○				微砂:石英△	
671	E	SE-331	E-39-12	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅲb ⅱ	13.0		3.7	全体1/2	ナデ	手づくね	にぶい黄橙	10YR7/3	△	△	◎	△			微砂:褐色粒△	
672	E	SE-331	E-39-12	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	△	○				やや緻密 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△	
673	E	SK-386	E-38-1 上層	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	○	◎		△		やや粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
674	E	SK-386	E-38-1 上層	珠洲	甕							タタキ	灰	5Y6/1	○	○	◎				緻密 微砂:白色粒▼・黒色粒◎・石英▼	
675	E	SK-392	E-38-21	中世土師器(赤)	皿	刈皿-Ⅱc ⅱ	(11.7)		3.1	口縁1/8	ナデ	手づくね	にぶい橙	7.5YR7/3	○	△		◎				
676	E	SX-392	E-38-21	珠洲	甕							タタキ	灰	7.5Y5/1	○	○	◎				やや粗雑 微砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	
677	E	SE-413	D-37-24	青磁	皿	龍泉窯皿Ⅰ－2c		4.6	1.4	底部1/3		ナデ	灰 釉:灰白	7.5Y4/1 10Y7/2	○	○					緻密	内外面:釉
678	E	SD-366	—	須恵器	甕	小泊系	27.0		4.5	口縁1/16			外:灰オリーブ 内:灰白	7.5Y5/2 5Y7/1	○	○	○				緻密	
679	E	SKp-322	E-39-21	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱa	(7.4)		1.7	全体1/2	ナデ	手づくね	橙	5YR7/8	△	△	△					全体に磨滅
680	E		F-38	中世土師器(赤)	小皿	刈小皿-Ⅱc	(8.0)		1.5	口縁1/12	ナデ	手づくね	橙	7.5YR7/6	○	△	○					
681	E		E	中世土師器(白)	皿	京A2-Ⅱb	(18.0)		1.7	口縁1/12		手づくね	灰白	10YR8/2	△	△		△			緻密	
682	E		E 東部	珠洲	甕							タタキ	灰	10Y6/1	○	△		◎	○		細砂:白色粒◎・黒色粒▼・石英△ 中砂:φ1	
683	E		E	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	△		○		△	粗雑 やや軽い 細砂:白色粒▼・黒色粒△・石英▼	
684	E		D-35	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰白	10Y7/1	○	△		◎		○	やや粗雑 粗砂:φ1～3 やや軽い 細砂:白色粒○・黒色粒△・石英△	破面:漆継痕
685	E		E-38	珠洲	片口鉢	Ⅳ2期						ロクロ	灰	5Y6/1	○	△	◎			△	微砂:白色粒△・黒色粒○・石英△ 海綿骨針△	
686	E		E	珠洲	片口鉢							ロクロ	灰	7.5Y6/1	○	△	◎			○	微砂:白色粒○・黒色粒△・石英▼ 粗砂:φ1～2	
687	E		D-36	須恵器	甕								灰	7.5Y6/1	○	△	○				緻密 微砂:白色粒△・黒色粒○・石英▼	全体的に磨滅

附表６　馬場・天神腰遺跡　金属製品・鉄生産関連遺物観察表

No.	地区名	遺構名・層位	種別	法量（cm）			重量(g)	メタルチェッカー反応	磁着	備考
				縦	横	厚み				
1	A	SD-1 No.135	羽口							
2	B	SK-1320a	銭貨:熙寧元寶							初鋳:北宋1068
			永楽通寶							初鋳:明　1408
3	DⅡ	SX-2819 ベルト西側	銭貨:至和元寶							初鋳:北宋1054
4	A	D-7① SE-123	棒状鉄製品	14.3	2.0	1.8	136	×	○	
5	A	SD-1 No.6	不明鉄製品	7.5	1.2	1.0	19	×	○	
6	A	SD-1 No.14	鉄釘？	3.7	1.0	0.8	6	×	○	
7	A	SD-1	鉄釘？	6.2	0.8	0.8	10	×	○	
8	B	SD-2	鉄釘	2.9	0.6	0.5	5	○	◎	
9	B	SD-1286	鉄釘？	4.2	0.6	0.6	2	×	○	
10	B	SE-1129	鉄釘？	4.9	0.8	0.7	5	×	◎	
11	B	SKp-1356	鉄釘？	5.0	0.7	0.6	7	×	○	SB-43
12	B	SD-1302b 3区	鉄釘？	8.0	0.8	0.9	12	×	◎	
13	CⅠ	SE-1706	刀子	11.4	1.7	0.6	29	○	◎	
14	CⅠ	SE-1706	木製柄							No.13の柄
15	—		刀子・柄合成図							No.13・14の合成
16	CⅠ	SE-1712	不明鉄製品	6.9	1.4	0.5	10	○	×	銅
17	DⅡ	SKp-2588	不明鉄製品	3.2	1.1	0.3	4	×	◎	
18	DⅡ	SE-2585	鉄釘	6.8	0.8	0.7	10	○	◎	
19	DⅡ	SD-2745	不明鉄製品	5.6	2.2	0.4	15	×	×	
20	DⅠ	SD-2401 No.55	鎌？	13.1	3.5	0.5	38	×	×	
21	E	D-36	不明鉄製品	11.4	1.9	0.4	49	×	○	上下対称形部材ヵ
22	E	SE-313	鉄釘	8.6	0.6	0.7	8	×	◎	
23	E	SE-313	鉄釘	2.9	0.6	0.6	2	×	◎	
24	E	SD-301 No.181	不明鉄製品	5.0	1.7	0.3	3	○	○	
25	E	SD-301 No.286	鉄釘？	5.2	0.7	0.4	6	×	◎	断面長方形
26	A	SD-1 No.130	椀形滓	11.4	10.3	3.8	443	×	△	
27	A	SD-1 No.14	椀形滓	9.0	8.9	2.3	232	×	△	
28	A	C-7 SE-146 中層	椀形滓	10.5	6.3	4.2	229	×	△	
29	A	SD-2 No.108	椀形滓	10.1	8.3	3.1	352	×	△	
30	B	SD-1286 No.125	椀形滓	7.3	5.5	2.8	116	×	△	
31	B	SD-2 No.15	炉内滓ヵ	15.0	17.5	10.9	3200	×	×	
32	B	SE-1305	椀形滓	13.3	11.1	4.2	600	×	△	
33	B	SK-1320a	椀形滓ヵ	4.6	5.7	2.5	60	×	×	
34	B	SD-1286 No.121	椀形滓	9.6	9.1	4.0	424	×	△	
35	DⅠ	SD-2401	炉壁？	9.1	8.0	6.5	423	×	×	
36	DⅠ	SD-2401a No.10	炉内滓？	6.5	6.1	5.4	305	×	△	砂鉄非溶解　固結塊
37	DⅠ	SD-2401a No.7	椀形滓	7.6	5.1	2.8	100	×	△	
38	DⅠ	D-24 SE-2407 上層(第1層)	椀形滓	7.7	5.5	3.1	180	×	△	
39	DⅡ	SE-2962	椀形滓	7.2	5.4	2.7	127	×	△	
40	E	SD-301 No.36	椀形滓	6.8	5.7	3.7	116	×	△	
41	E	SD-301 No.62	炉壁	7.3	8.7	3.0	78	×	×	
42	E	SD-301 No.319	椀形滓	8.3	5.6	2.8	86	×	△	
43	E	SD-301 No.49	炉壁	9.6	8.1	3.2	100	×	×	
44	E	SE-325 下層	砂鉄非溶解　固結塊	4.6	3.4	3.1	70	×	△	
45	E	SK-392 上層	炉内滓or椀形滓	8.4	6.5	3.3	106	×	×	

附表 7　馬場・天神腰遺跡　石製品類観察表

No.	器種・種別	遺　構		出土位置	色　調	縦 cm	幅 cm	厚み cm	重量 g	石質・石材	備　　考
1	砥石	A	SD-1	東端	灰	5.3	5.1	0.8	30	黒色粘板岩	
2	砥石	A	SD-2	№13	灰白	5.7	3.5	2.1	61	凝灰岩	
3	圭化木	A	SD-2	№24	灰白	7.4	3.1	2.4	41	圭化木	
4	磨製石斧	B	SD-2	№29・30	褐灰	9.5	5.5	3.3	259	閃緑岩	
5	圭化木	B	SD-1100	№1	灰白	9.1	8.4	5.4	316	圭化木	
6	圭化木	B	SD-1100	№4	灰白	13.3	5.7	3.1	120	圭化木	川原石（円礫）
7	置き砥石？	B	SE-1146		灰白	13.1	12.2	12.3	2200	安山岩	
8	石剝容器？	B	SD-1286	№49	灰黄褐	12.2	16.9	9.1	1800	安山岩	
9	圭化木	B	SD-1286	№144	灰白	9.6	7.0	3.1	193	圭化木	
10	硯	B	SE-1129		黒	8.5	8.6	1.6	203	頁岩	刻書「永徳元年十月十一日」
11	硯	B	SD-1316		黒	7.3	3.0	1.0	33	頁岩	
12	圭化木	B	SE-1291		灰白	10.8	4.4	3.1	77	圭化木	
13	石鉢	C	SE-1720		灰白	高さ 9.5	口縁 23.0	—	600	輝石安山岩	残存　口縁～胴部1/4
14	砥石	DⅡ	SE-3049		淡黄	17.9	6.0	4.2	551	凝灰岩	
15	圭化木	DⅡ	SE-2819		にぶい褐	8.4	2.1	1.4	29	圭化木	欠番
16	砥石	DⅡ	SE-2527a		灰白	7.2	4.0	2.1	133	凝灰岩	
17	圭化木	DⅡ	SE-2527a		灰白	7.7	2.8	1.6	20	圭化木	
18	茶臼下臼	DⅡ	SE-2819		灰白	20.0	21.9	10.5	3600	流紋岩質凝灰岩	
19	下臼？	DⅡ	SE-2819	1～7層	灰白	7.1	11.1	7.1	701	花崗岩	№22の下臼ヵ
20	上臼	DⅡ	SE-2819		灰白	直径 30	—	8.9	2200	花崗岩	（№22と同一個体ヵ）
21	下臼	DⅡ	SE-2819	1～7層	黄灰	8.2	11.6	6.9	688	安山岩	
22	上臼	DⅡ	SE-2819		灰白	直径 30	—	7.5	1600	花崗岩	№20と同一個体ヵ
23	砥石	DⅡ	SE-2819		灰	8.5	11.5	1.9	179	—	須恵器甕破片　転用砥石 （図版60・図版156-461）
24	上臼	DⅡ	SE-2819		明褐灰	16.1	10.8	7.0	1000	安山岩	
25	下臼	DⅡ	SE-2819		灰黄	直径 28	—	8.3	1600	輝石安山岩	
26	五輪塔（地輪）	DⅡ	SE-2562a		灰白	15.0	17.0	10.4	2400	凝灰岩	
27	上臼	DⅡ	SE-2827		褐灰	直径 32	—	5.8	1200	安山岩	
28	五輪塔（地輪）	DⅡ	SE-3038		灰白	16.5	22.8	7.6	2200	安山岩	
29	砥石	DⅡ	SE-2591		灰白	9.0	3.8	2.5	104	凝灰岩	
30	砥石	E	SE-313		灰白	10.0	2.9	2.7	85	凝灰岩	四面砥ぎ面
31	砥石	E	SD-301	№186	灰白（＋にぶい橙）	4.2	3.2	0.5	8	頁岩	
32	五輪塔（地輪）	E	SD-301	№440・447	淡黄	18.0	18.2	10.8	5400	凝灰岩	カーン（不動明王）ヵ
33	硯	E	SD-301	№192	褐灰	6.3	5.0	2.5	75	黒色粘板岩	
34	砥石	E	SD-301	№173	灰白	4.2	3.2	0.9	19	頁岩	
35	圭化木	E	SD-301	D-35　№2	灰白	9.6	6.9	3.2	142	圭化木	
36	砥石	E	SD-301	№407	褐灰	5.6	6.4	1.7	99	—	珠洲破片転用砥石

附表８　馬場・天神腰遺跡　木製品類観察表

No.	地区	遺構名　層序	種　別	法量(cm) 全長	幅	厚み	木取り	遺存状況	備　考　(cm)
1	A	SE-117 下層　C-6-25	曲げ物　まわしの側板	56.4	2.7	0.3	柾目		
2	A	SE-117 下層　C-6-25	曲げ物底板残欠？	9.3	4.9	1.4	板目	△	一部丸みがあり、曲物底板の可能性もあるが腐食が著しく不明
3	A	SE-117 下層　C-6-25	樹枝残欠	9.5	2.3		丸木取り		一部炭化
4	A	SE-117 下層　C-6-25	串	8.1	1.3	0.7	柾目		小角柱状　一部炭化　火付用具？　鋸カット
5	A	SE-117 下層　C-6-25	串	13.8	0.7	1.0	板目		小角柱状　一部炭化　火付用具？　鋸カット
6	A	SE-117 下層　C-6-25	樹枝残欠	15.2	1.1		丸木取り		一部炭化
7	A	SE-117 下層　C-6-25	板材	31.1	12.6	3.4	柾目	△	軟弱でソフト
8	A	SE-123 下層	曲げ物側板	28.4	5.2	0.4	柾目		
9	A	SE-123 下層	曲げ物側板	27.7	6.5	0.4	柾目		
10	A	SE-123 下層	曲げ物側板	19.6	4.7	0.4	柾目		
11	A	SE-123 下層	曲げ物側板	9.8	3.9	0.4	柾目		
12	A	SE-123 下層	棒状部材	5.8	1.7	1.7	柾目		炭化木片　枝？状の木片の一部が炭化　性格不詳
13	A	SE-123 下層	曲げ物側板	10.8	4.0	0.3	柾目		
14	B	SE-1101	枡側板？	11.0	14.0	1.4	追い柾目	△	
15	B	SE-1101	板材残欠	10.4	9.6	0.8	柾目	△	
16	B	SE-1101	枡側板？	15.1	13.1	1.3	追い柾目	△	
17	B	SE-1101	挽物鉢				横木取り		一部炭化？　底径？　残存高:4.5
18	B	SE-1101	枡側板？	14.8	12.3	1.3	追い柾目	△	
19	B	SE-1101	柱状部材	34.3	6.0		丸木取り		外面全面炭化
20	B	SE-1288	折敷底板	28.9	7.5	1.0	柾目		側板を結束した孔一対
21	B	SE-1288	曲げ物底板残欠	27.5	8.0	1.6	柾目		直径:約34.2
22	B	SE-1146	漆器　小皿				—		内外面黒色漆　口径:9.2　器台径:7.0　器高:1.4
23	B	SE-1146	加工材	19.9	7.8	0.6	柾目		板状部材残欠　一部、意図的に切り付け折られたか
24	B	SE-1146	加工材	30.5	4.0	0.9	板目		板状部材残欠　一部炭化　端部弧状を描く
25	B	SE-1146	短冊状板材	29.2	2.1	0.6	柾目		先端が幅広　両側で狭くなる
26	B	SE-1146	短冊状板材	25.4	1.5	1.0	柾目		三角棒状に尖る
27	B	SE-1146	短冊状板材	31.0	2.2	0.3	柾目		板状部材残欠
28	B	SE-1146	板材	34.2	9.3	2.1	板目		黒色付着物(漆？)　不明木製品の未製品ヵ　乾燥の為かゆがみ変形の可能性あり
29	B	SE-1126	加工材	23.4	5.5	4.0	分割		角柱状部材
30	B	SE-1126	串	13.8	0.7	0.4	追い柾目		下端が細く尖る　末端欠損
31	B	SE-1293	曲げ物底板	16.2～16.5		1.4	柾目		32～34と同一個体
32	B	SE-1293	曲げ物側板	15.5	4.1	0.4	柾目		
33	B	SE-1293	曲げ物側板	19.3	2.5	1.0	柾目		
34	B	SE-1293	曲げ物側板	23.5	9.9	1.1	柾目		
35	B	SE-1306a	不明木材残欠	20.1	6.9	3.1	偏半割		乾燥の為変形　全面に整形痕　全体に黒色・炭化？　未製品？
36	B	SE-1306a	木端	17.5	6.5	1.6	板目		全体に炭化して黒色を呈する　釿痕多数
37	B	SE-1306a	漆器　椀底部				板目		全面黒色漆　菊花紋は赤色漆　底径:8.0　残存高:2.1
38-a	B	SE-1292　下層	枡　側板	17.5	13.6	1.4	柾目		5枚一組完形品
38-b	B	SE-1292　下層	枡　側板	17.0	14.0	1.3	柾目		
38-c	B	SE-1292　下層	枡　側板	17.3	13.8	1.4	柾目		
38-d	B	SE-1292　下層	枡　側板	18.0	14.0	1.4	柾目		
38-e	B	SE-1292　下層	枡　底板	18.0	17.5	1.3	柾目		
39	B	SE-1292　下層	用途不明丸太材	42.2	17.8	5.1	丸木取り？		柱材残欠　一部炭化
40	B	SE-1292　下層	用途不明丸太木製品	18.6	7.2		分割　芯去		上下両端部整形　側面面取状整形痕　炭化により固く安定
41	B	SE-1292　下層	板状残欠	12.8	5.0	0.6	柾目	△	
42	B	SE-1299	短冊状板材	4.9	2.5	0.4	柾目		上下面とも整形されている
43	B	SE-1299	短冊状板材	10.6	3.6	0.7	柾目		表面残存部:黒褐色　漆？　上下端欠損　左右は原形の可能性あり
44	CⅡ	SD-1726	板材	13.4	5.3	2.0	柾目		一部黒色　表面残存部ヵ　短冊状ではあるが厚みが厚い
45	CⅠ	SE-1720	板材	12.0	4.0	0.3	柾目	△	
46	CⅠ	SE-1720	短冊状板材	16.5	0.9	0.7	柾目		左右側欠損
47	CⅠ	SE-1701	短冊状板材	3.2	3.2	1.8	板目		平面形としてはおおむね完形　コマ状板材
48	CⅠ	SE-1701	箸	11.5	0.6	0.4	柾目		上端部欠失
49	CⅠ	SE-1701	板材	47.3	7.4	2.0	柾目		板材残欠　乾燥によりゆがみ変形あり
50	CⅠ	SE-1703	曲げ物(柄杓)	15.0			—		高さ:10.7　完形　側板の上部に柄差込孔(1.8×1.6)
51	CⅠ	SE-1703	加工材	7.6	2.1	0.3	柾目		短冊状板部材　穿孔1か所
52	CⅠ	SE-1703	短冊状板材	4.1	2.6	1.0	柾目		コマ状板片
53	CⅠ	SE-1703	曲げ物底板	22.6～23.0		1.3	柾目		上面整形痕をわずかに留める　側板留釘孔12か所
54	CⅠ	SE-1703	串	26.0	1.1	0.5	板目		串状木製品　祭祀用具か　下端尖り気味　先端部欠損
55	CⅠ	SE-1703	加工材	33.5	28.0	3.6	追柾目		板材　上下両端調整痕あり　まな板状
56	CⅠ	SE-1703	加工材	32.6	11.4	3.2	追柾目		板材　56と57は同一個体ヵ　上面と上下両端、左右には釿調整痕明瞭　背(下)面は割板状で未調整　未製品ヵ
57	CⅠ	SE-1703	加工材	33.0	5.5	1.9	追柾目		
58	CⅠ	SE-1711	曲げ物底板	18.6		0.9	柾目	△	全体に摩滅し破断面が丸くなる
59	CⅠ	SE-1711	曲げ物底板残欠	24.6	8.5	0.9	柾目		全周破断面:本来の形状不明　乾燥によりゆがみ、変形あり　直径約24.2
60	CⅠ	SE-1711	曲げ物底板残欠	33.0		1.5	板目		上面著しく炭化　直径約33.0
61	CⅠ	SE-1711	曲げ物側板	14.5	6.5	0.2	柾目		外面黒色　黒漆ヵ　内面腐食顕著
62	CⅠ	SKp-1704	曲げ物底板	21.3	22.7	1.1	柾目		乾燥につきゆがみ、変形あり
63	DⅡ	SE-2501	曲げ物底板	10.6～10.7		0.5	柾目		一部墨の痕跡　その場所のみ器面の残存が良好　柄杓などの小物
64	DⅡ	SE-2501	曲げ物底板残欠	35.1	8.7	1.8	追柾目		表裏面に刃傷あり　転用の可能性大　特に縁辺の摩滅著しい　おひつ？　直径約44.3
65	DⅡ	SE-2811a	板材	16.0	8.7	0.7	追柾目		板状部材　上面スス？
66	DⅡ	SE-2811a	板材	23.2	8.1	5.3	追柾目		乾燥により整形痕不明　コゲ痕？

No.	地区	遺構名 層序	種　別	法量(cm)			木取り	遺存状況	備　　考 (cm)
				全長	幅	厚み			
67	ＤⅠ	SE-2422	板材	19.4	11.3	2.4	柾目		
68	ＤⅠ	SE-2422	板材	16.7	9.1	2.7	偏半割		円形の痕跡、柱の圧痕？
69	ＤⅠ	SE-2422	差歯下駄	8.9	9.4	1.9	柾目		
70	ＤⅠ	SE-2422	加工材	22.3	2.7	0.5	柾目		短冊状板部材　両側面取　　上端穿孔　下端欠損
71	ＤⅠ	SE-2422	加工材	21.8	0.7	0.2	柾目		部材　両端欠損　穿孔あり　　71～73:同一部材か
72	ＤⅠ	SE-2422	加工材	26.3	0.8	0.4	柾目		細短冊状板部材　両端欠損　2か所穿孔
73	ＤⅠ	SE-2422	加工材	10.9	0.8	0.4	柾目		細短冊状板部材　両端欠損　中央穿孔
74	ＤⅠ	SE-2422	木針	14.0	1.7	0.6	板目		上面は整形され丸みをもつ　下面は剥離、整形痕なし
75	ＤⅠ	SE-2402	木端	4.4	2.0	0.4	板目		釿痕
76	ＤⅠ	SE-2402	木端	5.8	1.9	0.4	柾目		釿痕
77	ＤⅠ	SE-2402	木端	7.1	1.1	0.2	柾目		鋸カット
78	ＤⅠ	SE-2402	木端	7.2	1.8	0.3	柾目		釿痕　鋸カット
79	ＤⅠ	SE-2402	木端	7.2	2.4	0.7	追柾目		鋸カット
80	ＤⅠ	SE-2402	木端	7.9	3.1	0.7	追柾目		釿痕　鋸カット
81	ＤⅠ	SE-2402	木端	8.5	3.4	0.3	追柾目		釿痕
82	ＤⅠ	SE-2402	木端	8.9	1.9	0.9	追柾目		釿痕
83	ＤⅠ	SE-2402	木端	8.8	3.0	0.6	板目		釿痕
84	ＤⅠ	SE-2402	木端	8.9	2.9	0.4	柾目		釿痕
85	ＤⅠ	SE-2402	木端	8.8	3.4	0.3	柾目		槍鉋痕
86	ＤⅠ	SE-2402	木端	8.8	4.8	0.8	追柾目		釿痕　鋸カット
87	ＤⅠ	SE-2402	木端	9.1	4.1	0.7	板目		釿痕
88	ＤⅠ	SE-2402	木端	9.6	3.4	0.4	柾目		釿痕
89	ＤⅠ	SE-2402	木端	9.9	3.2	1.3	追柾目		釿痕
90	ＤⅠ	SE-2402	木端	10.1	3.2	0.8	追柾目		
91	ＤⅠ	SE-2402	木端	9.9	3.4	0.4	板目		釿痕
92	ＤⅠ	SE-2402	木端	10.1	4.0	0.5	追柾目		釿痕
93	ＤⅠ	SE-2402	木端	11.0	2.8	1.0	追柾目		
94	ＤⅠ	SE-2402	木端	11.6	2.1	0.5	柾目		釿痕
95	ＤⅠ	SE-2402	木端	12.3	2.1	1.0	追柾目		釿痕
96	ＤⅠ	SE-2402	木端	12.3	2.7	0.4	追柾目		
97	ＤⅠ	SE-2402	木端	11.9	3.0	0.6	柾目		釿痕
98	ＤⅠ	SE-2402	木端	12.1	3.2	0.5	柾目		釿痕
99	ＤⅠ	SE-2402	木端	12.3	3.2	1.2	追柾目		
100	ＤⅠ	SE-2402	木端	11.8	4.1	0.4	板目		釿痕
101	ＤⅠ	SE-2402	木端	12.8	2.6	1.4	追柾目		釿痕　鋸カット
102	ＤⅠ	SE-2402	木端	12.6	3.6	0.4	板目		釿痕
103	ＤⅠ	SE-2402	木端	12.5	3.9	1.8	板目		荒削り　丸太材整形木端
104	ＤⅠ	SE-2402	木端	13.3	1.4	0.7	追柾目		
105	ＤⅠ	SE-2402	木端	13.7	3.2	0.9	板目		下面に釿痕なし　上部欠損ないし上端部ひっかけか　丸太材整形木端
106	ＤⅠ	SE-2402	木端	13.8	5.8	1.2	板目		釿痕　丸太材整形木端
107	ＤⅠ	SE-2402	木端	14.6	2.9	1.5	板目		釿痕　鋸カット
108	ＤⅠ	SE-2402	木端	14.0	4.0	0.7	板目		釿痕
109	ＤⅠ	SE-2402	木端	14.1	4.0	1.2	板目		釿痕　鋸カット
110	ＤⅠ	SE-2402	木端	15.4	2.9	0.5	板目		釿痕
111	ＤⅠ	SE-2402	木端	16.1	3.6	1.2	板目		釿痕
112	ＤⅠ	SE-2402	木端	15.7	4.0	1.1	板目		釿痕
113	ＤⅠ	SE-2402	木端	15.0	4.6	1.4	板目		釿痕　鋸カット
114	ＤⅠ	SE-2402	木端	16.4	5.5	0.6	柾目		木端　(但し、薄板材未製品ヵ)槍鉋痕ヵ　鋸カット
115	ＤⅠ	SE-2402	木端	17.0	6.2	1.7	追柾目		釿痕
116	ＤⅠ	SE-2402	木端	17.0	6.3	1.2	板目		釿痕なし
117	ＤⅠ	SE-2402	木端	17.6	5.2	0.6	追柾目		調整痕概して平坦　槍鉋？　鋸カット
118	ＤⅠ	SE-2402	木端	17.4	4.4	1.3	板目		釿痕
119	ＤⅠ	SE-2402	木端	19.4	2.9	1.3	追柾目		釿痕
120	ＤⅠ	SE-2402	木端	17.1	1.9	0.2	柾目		槍鉋　くず
121	ＤⅠ	SE-2402	串？	14.3	0.7	0.6	板目		串状木製品残欠
122	ＤⅠ	SE-2402	串？	11.8	1.4	0.6	板目		上面は整形痕をとどめるが、下面は外皮側の面を残す　未製品ヵ　鋸カット
123	ＤⅠ	SE-2402	桶側板	36.2	5.0	1.8	追柾目		桶などの側板未製品ヵ　釿による荒整形or裁断　その他の上下両側面は割板未調整 鋸カット
124	ＤⅠ	SE-2402	加工材	46.5	9.5	2.6	板目		板材未製品　割板の上下両端を釿で断ち切り、上面を一部整形
125	ＤⅠ	SE-2402	箸	19.5	0.8	0.6	柾目		
126	ＤⅠ	SE-2402	箸	16.4	0.9	0.6	板目	○	完存
127	ＤⅠ	SE-2402	箸	19.1	0.7	0.5	板目	○	完存
128	ＤⅠ	SE-2402	箸	23.8	0.8	0.5	柾目	○	完存
129	ＤⅠ	SE-2402	箸	23.7	0.7	0.7	柾目	○	完存
130	ＤⅠ	SE-2402	木端	30.8	6.3	1.4	柾目		槍鉋痕あり
131	ＤⅠ	SE-2402	木端	23.2	5.2	0.9	柾目		槍鉋痕あり
132	ＤⅠ	SE-2402	板材残欠	21.3	2.6	0.6	柾目		133と類似、接合？
133	ＤⅠ	SE-2432	板材残欠	24.3	4.0	0.5	柾目		132と類似、接合？　乾燥の為木目が浮き出ている
134	ＤⅠ	SE-2470　下層	加工材	27.3	2.6	0.6	柾目		板状部材　一部黒漆？　左右両側は調整・整形不明瞭
135	ＤⅠ	SE-2470　下層	短冊状板材	28.8	1.0	0.8	柾目		両端炭化　火つけ棒？

No.	地区	遺構名　層序	種　別	法量(cm)			木取り	遺存状況	備　　考　(cm)
				全長	幅	厚み			
136	DⅠ	SE-2464	用途不明木製品	42.0	5.0	2.2	偏半割		天秤棒ヵ　ただし、長さが短い。へこみの部分に明瞭な消耗痕は見受けられない
137	DⅠ	SE-2464	用途不明木製品	13.9	4.8	3.0	柾目		部品？　完形品　人為的な切込み(えぐり)あり
138	DⅠ	SE-2464	鍋蓋	22.5	20.5	1.2	板目		用途不明木製品　左右両側は円弧が緩やか　平面形としては完形品　中央穿孔は大きく中心ずれる　両側に釘穴ヵ　円周端部は丸みを帯びる(曲物底板のように台形ではない)
139	DⅠ	SE-2464	曲物底板	22.5～20.8		0.7	柾目		
140	DⅠ	SE-2464	曲物　帯	62.5	2.4	0.2	柾目		完形品　直径:約18.0
141	DⅠ	SE-2464	板材	34.0	6.6	2.5	偏半割		緩やかに弧を描く　桶側板の未製品ヵ　下端部は鋸カット
142	DⅠ	SE-2464	用途不明木製品	25.3	7.3～9.3		丸木取り		丸太材の両端を粗く切断し、完成品としたもの　枕？
143	DⅠ	SE-2464	加工材	36.0	3.9	2.8	柾目		角材状木製品(用途など不明)
144	DⅠ	SE-2435	板材	39.3	6.3	1.0	板目		
145	DⅠ	SE-2462	丸太杭	35.2	6.0		丸木取り		先端側残欠　一部炭化
146	DⅠ	SE-2462	杭	8.8	3.5	3.1	丸木取り		杭の先端(？)残欠
147	DⅠ	SE-2462	加工材	14.9	1.9	0.6	板目		部材残欠→両端炭化　竹？　挟みこまれた痕あり
148	DⅠ	SE-2462	桶側板	16.2	5.0	0.7	偏半割		上部欠損　鋸カット
149	DⅠ	SE-2462	曲物底板	8.5～8.8		0.6	柾目		柄杓用カ
150	DⅠ	SE-2462	曲物側板　帯	30.1	2.8	0.3	柾目		150・151・153・154は同一個体もしくは上下2段の「廻しの側板」
151	DⅠ	SE-2462	曲物側板　帯	10.7	3.3	0.2	柾目		
152	DⅠ	SE-2462	曲物底板	16.1～16.8		1.2	板目		円周側縁に釘穴なし　切断箇所に補修孔2個一対と釘孔2孔
153	DⅠ	SE-2462	曲物側板　帯	21.1	3.0	0.5	柾目		
154	DⅠ	SE-2462	曲物側板　帯	14.3	2.9	0.5	柾目		
155	DⅠ	SE-2462	曲物底板	21.5～21.7		0.6	柾目		
156	DⅡ	SE-2962	加工材	21.8	3.9	0.8	柾目		板状部材　乾燥の為整形痕不明瞭　但し、加工された可能性高い
157	DⅡ	SE-2962	串ヵ	11.7	0.6	0.4	板目		棒状木製品(箸ではない)
158	DⅠ	SE-2424	串ヵ	17.1	1.5	0.4	柾目		短冊状
159	DⅠ	SE-2424	樹枝残欠	6.2	2.6	1.6	丸木取り		一部炭化の樹枝(燃えカスヵ)
160	DⅠ	SE-2424	箸	20.6	0.7	0.4	柾目		完存品
161	DⅠ	SE-2424	下駄	20.1	8.7	3.0	柾目		差歯下駄の歯面に小砂利付着　差歯の摩滅顕著
162	DⅡ	SE-2537	漆器椀				横木取り		口径:13.9　底径:6.6　器高:5.1　漆器椀　黒漆　内外面、内底面にロクロ痕を明瞭に残す　195と類似
163	DⅡ	SE-2515	曲物側板	9.4	11.0	0.2	柾目		表裏に傷や切込みなし
164	DⅡ	SE-2585	板材	16.3	5.9	1.0	板目		板(部分)　全周欠損破断面
165	DⅡ	SE-2827	曲物底板	26.0		1.3	柾目		桶or曲物の底板
166	DⅡ	SE-2827	桶側板残欠	12.3	3.4	1.5	柾目		
167	DⅡ	SE-2827	漆器皿				横木取り		高台径:5.8　残存高:1.8　底部外面も含め内外面全面黒漆　全体的に薄手 上級品ヵ　なお、ゆがみは乾燥の為ヵ
168	DⅠ	SE-2426　下層	曲物底板	8.6～8.8		0.7	柾目		腐食の為木目浮き出る　おおむね平滑
169	DⅠ	SE-2426　下層	曲物底板	24.3～24.9		1.1	柾目		上面よりも下面のほうがやや残り良　171が側板
170	DⅠ	SE-2426　下層	曲物底板	23.6～24.3		1.0	柾目		縁辺が面取りされる　曲物底板の転用も考慮されるが別物か　腐食の為木目が浮き出る
171	DⅠ	SE-2426　下層	曲物側板				柾目		直径:26.0　高さ:9.5　厚み:0.3　169が底板
172	DⅡ	SX-2819	塔婆　1号	136.3			半割		直径:3.2～4.7　第1号　墨書文字解読不能
173	DⅡ	SX-2819	塔婆　2号	157.2			丸木取り		直径:5.0～5.5　第2号　墨書文字解読不能
174	DⅡ	SX-2819	塔婆　3号	110.4			丸木取り		直径:4.5～6.2　第3号　文字面あり　但し見えない
175	DⅡ	SX-2819	塔婆　5号	129.2			丸木取り		長さ:119.0　直径:5.7～6.6　第5号　文字面なし　一部風化著しく、しばらくの間空気中に飛び出していた可能性あり　先端部杭状に整形
176	DⅡ	SX-2819	塔婆　6号	127.5			丸木取り		直径:7.4～9.0　第6号　墨書文字解読不能
177	DⅡ	SX-2819	塔婆　8号	144.7			偏半割		直径:6.0～6.9　第8号　カット平坦面に肉視による文字は見えない
178	DⅡ	SX-2819	塔婆　7号	44.9			丸木取り		直径:5.0～5.2　第7号
179	DⅡ	SX-2819	塔婆　4号	108.3			丸木取り		直径:6.1～6.8　第4号　175と同じく一部風化
180	DⅡ	SE-2819　ベルト東側	下駄(連歯)	12.6	7.7	4.7	柾目		
181	DⅡ	SE-2819　№9	曲物底板	12.6		0.4	柾目		柄杓用カ
182	DⅡ	SE-3013	加工材	11.7	6.9	0.9	板目		用途不明部材　横位の切込み多数　用途不明木製品(部材？)
183	DⅡ	SE-2599	箸	10.5	0.5	0.5	柾目		
184	DⅡ	SE-2599	箸	7.6	0.7	0.4	柾目		
185	DⅡ	SE-2599	箸	8.9	0.5	0.5	柾目		
186	DⅡ	SE-2599	箸	20.0	0.6	0.4	柾目		
187	E	SD-301　№8	加工材	11.4	15.3	1.1	板目		用途不明部品(材)　全面腐食が著しい　下駄の歯にしては薄い
188	E	SD-301　№377	曲物側板	38.9	14.8	0.2	柾目		一部に何かが巻き付けられたような痕跡あり
189	E	SE-309	箸	20.5	0.6	0.2	柾目		
190	E	SD-304	曲物側板	15.4	4.1	0.2	柾目		廻しの側板
191	E	SD-304	曲物底板	16.2～16.5		1.1	板目		曲物底板　円形板　平面形の円としてはゆがみあり　刀傷あり→転用された
192	E	SD-304	曲物側板	19.4	3.8	0.3	柾目		廻しの側板
193	E	SD-304	曲物側板	2.9	4.6	0.1	柾目	△	曲物側板
194	E	SE-310a	調度品の部材(品)？	13.7	7.8	1.5	板目		部品としては完形　鋸カット
195	E	SE-310a	漆器椀	15.3	8.3	6.1	横木取り		黒漆　内外面にロクロ痕明瞭に残る　全体的に粗雑　雑器の類か　底部下面は漆なし
196	E	SE-310a	板材残欠	17.5	5.0	0.5	柾目		刀傷あり
197	E	SE-310a	箸	22.4	0.7	0.6	柾目		完形
198	DⅠ	SE-2424	板材残欠	29.7	4.9	1.5	柾目		
199	E	SE-309	円盤状木製品	38.9～43.1		1.7	柾目		桶底板ヵ　未製品ヵ　大型品　やや楕円形
200	E	SE-309	曲物底板	28.2	11.9	0.8	板目		直径:26.2×28.2　一部腐食著しい
201	E	SE-309	桶側板	28.9	11.8	1.9	板目		板材残欠(何かの部材or桶側板？)　刀傷多数
202	E	SE-312	加工材	17.8	3.0	0.7	板目		板状部材(部品)　両側欠損
203	E	SE-312	箸	12.2	0.5	0.6	柾目		両端欠損

No.	地区	遺構名 層序	種　別	法量(cm)			木取り	遺存状況	備　　考 (cm)
				全長	幅	厚み			
204	E	SE-313	曲物底板	9.5	8.8	1.0	柾目		直径:8.8～9.5 柄杓用カ
205	E	SE-313	曲物側板残欠	15.8	4.0	0.3	柾目		
206	E	SE-313	曲物側板残欠	8.5	2.2	0.3	柾目		
207	E	SE-313	曲物帯(廻しの側板)	—	2.4	0.4	柾目		両端欠損
208	E	SE-314	板材(小)	4.4	3.6	0.6	柾目		コマ風部品材
209	E	SE-314	加工材	7.0	1.3	0.6	柾目		板状部材 曲物側板？但し、厚みがある
210	E	SK-392	桶側板？	17.4	6.4	0.5	追柾目		表面(断面除く)全面炭化
211	E	SE-311	用途不明木製品	44.2	2.4	2.6	柾目		上下端シンメトリーの可能性があるが、下端には穿孔あり
212	E	SE-325	荒型			7.6	横木取り		直径:18.5～18.8 №1
213	E	SE-325	荒型			7.6	横木取り		直径:17.0～17.7 №4
214	E	SE-325	荒型			8.1	横木取り		直径:16.1～18.3 №5
215	E	SE-325	荒型			6.6	横木取り		直径:17.5～17.7 №3
216	E	SE-325	荒型			7.8	横木取り		直径:18.3～19.1 №2
217	E	SE-325	荒型			6.7	横木取り		直径:17.2～17.6 №6
218	E	SE-325	荒型			6.3	横木取り		直径:17.6～17.9 №7
219	E	SE-325	荒型			7.4	横木取り		直径:18.5～18.7 №8
220	E	SE-325	荒型			5.6	横木取り		直径:17.2～17.5 №9
221	E	SE-325	荒型			6.7	横木取り		直径:17.6～18.4 №10
222	E	SE-325	荒型			7.5	横木取り		直径:18.0 №12
223	E	SE-325	荒型			7.9	横木取り		直径:18.0～18.8 №11
224	E	SE-325	荒型			7.2	横木取り		直径:17.8～18.3 №14
225	E	SE-325	荒型			6.3	横木取り		直径:17.7～18.5 №13
226	E	SE-325	荒型			7.4	横木取り		直径:18.1～18.6 №16
227	E	SE-325	荒型			6.2	横木取り		直径:17.2～18.0 №15
228	E	SE-325	荒型			6.1	横木取り		直径:17.4～17.9 №17
229	E	SE-325	荒型			6.3	横木取り		直径:17.1～17.5 №18
230	E	SE-325	荒型			7.0	横木取り		直径:16.6～17.9 №19
231	E	SE-325	荒型			7.4	横木取り		直径:17.8～18.1 №21
232	E	SE-325	荒型			6.3	横木取り		直径:16.6～17.0 №22
233	E	SE-325	荒型			6.1	横木取り		直径:17.4～18.3 №20
234	E	SE-325	荒型			6.9	横木取り		直径:17.8～18.8 №23
235	E	SE-325	荒型			7.3	横木取り		直径:18.6 №24
236	E	SE-325	荒型			6.5	横木取り		直径:16.8～17.9 №25
237	E	SE-325	荒型			7.0	横木取り		直径:16.6～18.7 №26
238	E	SE-325	荒型			6.5	横木取り		直径:17.4～17.9 №27
239	E	SE-325	荒型			7.6	横木取り		直径:17.4～18.0 №28
240	E	SE-325	荒型			7.1	横木取り		直径:17.5～18.1 №29
241	E	SE-325	荒型			7.4	横木取り		直径:17.8～18.4 №31
242	E	SE-325	荒型			7.8	横木取り		直径:17.6～18.6 №32
243	E	SE-325	荒型			6.9	横木取り		直径:17.3～18.5 №35
244	E	SE-325	荒型			7.1	横木取り		直径:17.0～18.1 №37 やや風化
245	E	SE-325	荒型			7.0	横木取り		直径:17.3～18.2 №33
246	E	SE-325	荒型			7.1	横木取り		直径:17.1～17.3 №36 エグリあり 側縁の調整が細かくなる工程を示す
247	E	SE-325	荒型			7.2	横木取り		直径:17.8～18.0 №34
248	E	SE-325	荒型			6.5	横木取り		直径:17.3～17.7 №38
249	E	SE-325	荒型			4.9	横木取り		直径:13.3～13.7 №30
250	E	SE-325	漆器小椀	9.1	6.4	2.7	横木取り		漆なし 白木づくり
251	E	SE-325	下駄未製品？	28.8	18.0		半割		高さ:10.3
252	E	SE-325	曲物底板残欠	27.9	2.7	0.7	柾目		直径:28.2
253	E	SE-325	曲物底板残欠	22.3	3.3	0.6	柾目		直径:27.0
254	E	SE-325	曲物底板残欠	15.4	1.1	0.4	柾目		
255	E	SE-325	曲物底板残欠	42.9	13.9	1.2	板目		直径:43.2～45.0
256	E	SE-325	角材残欠	9.4	3.8	2.2	板目		鋸カット
257	E	SE-325	短冊状木製品ヵ	9.3	1.4	0.3	柾目		外周すべて欠損破断面
258	E	SE-325	杭(先端部ヵ)	6.4	2.5	1.3	丸木取り		
259	E	SE-325	加工材	16.9	1.9	0.4	板目		短冊状木製品 未製品の可能性あり 削調整痕あり
260	E	SE-325	縄	63.4	1.6		—		素材は薄く細長い板材 木の削ったものを束ねて撚っている
261	E	SE-325	円盤状木製品	41.8～42.5		4.0	—		円形版未製品 木目観察不能 表面刀傷 下面平坦・上面凸面
262	E	SE-325	板状未製品	25.4	17.0	3.0	追柾目		鍬未製品ヵ
263	E	SE-325	加工材	33.2	3.7	0.7	追柾目		用途不明部材残欠 鋸カット
264	E	SE-335	加工材	29.0	3.5	0.7	柾目		用途不明木製品残欠 旧吉井小裏・上越今池に出土例あり
265	E	SE-335	加工材	25.6	1.2	1.1	柾目		板材残欠
266	E	SE-335	曲物側板	10.9	1.9	0.3	柾目		もしくは廻しの側板
267	E	SE-416	用途不明部材	25.3	5.8	1.0	追柾目		鋸カット
268	E	SE-416	板材残欠	16.5	3.6	0.4	板目		未製品ヵ
269	E	SE-416	漆器皿ヵ				横木取り		高台径:7.8 現存高:1.3 内外面にロクロ痕残る 黒漆
270	E	SE-331	曲物側板	10.8	1.7	0.3	柾目		
271	E	SE-331	曲物側板	12.0	1.0	0.2	柾目		廻しの側板残欠ヵ
272	E	SE-331	用途不明木製品	33.9	4.3	2.9	柾目		自在カギ？ 鋸カット